

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第137集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

神保下條遺跡

鎗川流域における埴輪出土古墳の調査

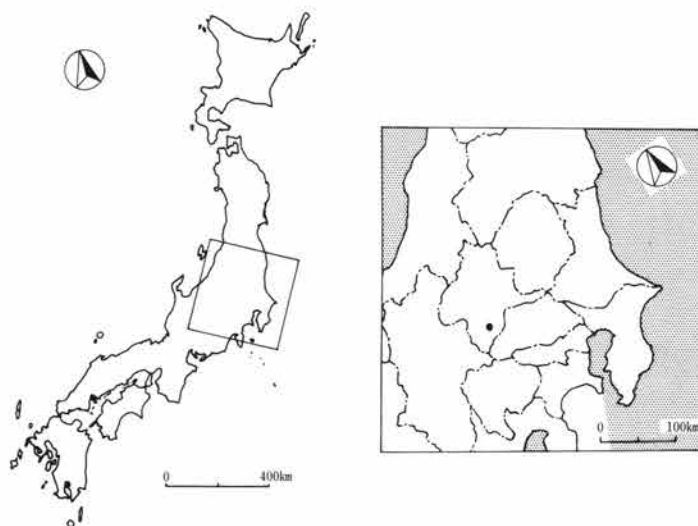
1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第137集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

神保下條遺跡

鏑川流域における埴輪出土古墳の調査



1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



下條2号古墳出土人物・馬形埴輪



下條2号古墳出土家・器財形埴輪



下條2号古墳人物1



同左 人物3



同上 馬1



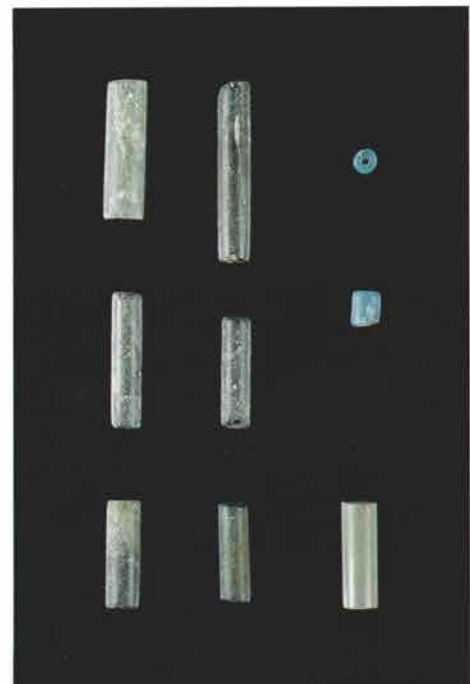
下條 1号古墳家形埴輪



下條 2号古墳家形埴輪



神保下條遺跡 1号住居出土鏡



同左 玉類

序

昭和61年度から開始された上信越自動車道関連の埋蔵文化財発掘調査は平成2年度でほぼ終了し、3年度より整理事業が本格化してまいりました。一方、発掘調査と平行して実施されていきました建設工事も平成4年度中の供用開始をめざして、いっそうの進捗がはかられております。ここ吉井町・甘楽町地区も県道や谷をまたぐ橋梁等が完成し周辺の景観も大きく変貌してまいりました。

当遺跡は主に群集墳中の古墳であります。当初、この古墳は耕作等による破壊が著しく資料的な期待はうすかったのでありますが、綿密なる調査・整理により望外な資料を得ることができました。特に埴輪の器種・配列には目を見張るものがあります。

ご存じのとおり、群馬県は全国でも有数の古墳保有県であります。しかしながら、資料化された報告は未だ十分とはいえません。そういう状況の中で刊行される本報告書は群集墳中の古墳のひとつの典型例として意義深いものがあると思います。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、この地域の歴史の解明、ひいては古墳文化の解明の一助となることができれば幸いに存じます。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・地元教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導・御鞭撻に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成4年3月27日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「^{じんぼしもじょう}神保下條遺跡」（調査時の事業名称「下條遺跡」）の発掘調査報告書である。なお、「^{あまびきくちあけづか}天引口明塚遺跡」（調査時の事業名称「倉内遺跡」）の調査報告も併載した。
2. 神保下條遺跡は、群馬県多野郡吉井町神保1014番、他に所在し、天引口明塚遺跡は、群馬県甘楽郡甘楽町天引字口明塚に所在する。
3. 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
4. 実際の発掘調査にあたっては、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台所在）が担当した。
5. 調査期間及び担当者

(1) 発掘調査	神保下條遺跡	調査期間	平成元年5月19日～同年6月1日（1次） 平成2年6月1日～同年9月20日（2・3次）
		調査担当者	右島和夫、小林裕二、関口博幸、飯塚初子（現群馬県教育委員会学校保健課）、中沢悟、富田一仁
	天引口明塚遺跡	調査期間	平成2年7月1日～同年8月20日
		調査担当者	右島和夫、小林裕二、飯塚初子

(2) 整理	整理期間	平成3年4月1日～平成4年3月31日
	整理担当者	右島和夫

(3) 事務	常務理事	邊見長雄
	事務局長	松本浩一
	管理部長	田口紀雄（平成元年度）、佐藤 勉
	調査研究部長	神保侑史
	関越道上越線調査事務所長	高橋一夫（平成元、2年度）、阿部千明（平成3年4月～11月）、松本浩一（兼務）
	総括次長	片桐光一（平成元年度）、大澤友治
	次 長	徳江 紀（平成元、2年度）
	課 長	鬼形芳夫（平成元、2年度）、依田治雄
	庶務課 係長代理	宮川初太郎（平成元、2年度）
	主 任	国定 均（平成元年度）、笠原秀樹
	臨時職員	山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、田中智恵美、高田千恵

6. 報告書作成関係者

編 集	右島和夫
本文執筆	依田治雄（I-1）、富田一仁（II-6の遺構部分）、右島和夫（前記以外）、なお付載の「群馬県埴輪出土古墳地名表」は、右島が南雲芳昭と共同で作成した。
遺構写真	右島和夫、中沢 悟、富田一仁、関口博幸

遺物写真	右島和夫（大半の委託分を除く）
遺物観察	右島和夫、木村 取（縄文土器）
整理補助	柿田順子、藤野ヒロ子、石井 緑、岩佐崑美枝、見野恵美子、田嶋紀代子
委託関係	神保下條遺跡の出土人骨については、県立大間々高校教諭 宮崎重雄氏に、同遺跡出土埴輪の胎土については、群馬大学教育学部助教授 吉川和男氏に分析依頼をした。 遺構測量は(株)測研に、航空写真は(株)青高館に、遺物写真はたつみ写真スタジオに、 神保下條遺跡の馬、家、太刀形埴輪の実測図作成は(株)シン航空に依頼した。

7. 天引口明塚遺跡の調査に対しては、専修大学文学部助教授 土生田純之氏、出土遺物の整理に際しては尾島小学校教頭 柿沼恵介氏、群馬町教育委員会 若狭 徹氏の御教示を得た。
8. 出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管してある。
9. 報告書作成にあたり、既述の方々に加えて下記の諸機関、諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、50音順）

吉井町教育委員会、甘楽町教育委員会、吉井町下條地区の地権者

五十嵐 信、石部正志、市橋一郎、岩崎卓也、遠藤和夫、大沢伸啓、大塚初重、置田雅昭、折原洋一、加部二生、神戸聖吾、黒澤重樹、篠原幹夫、白石太一郎、田村 孝、外山和夫、西田健彦、前原 豊、宮田 毅、茂木由行

10. 発掘調査従事者

岸今朝義、寺尾久吉、福田一男、折茂七郎、神保利政、仲沢一郎、三木伴次郎、吉田一二三、神保光明、塚越 進、黒沢章一郎、古館 明、田中和満、木村利雄、古館繁男、堀越件吾、山崎 明、古口三郎、山崎常夫、浦辺保司、神保君江、千代延八重子、黒沢千代子、春山米子、加部まき江、真加部鈴枝、酒井とし子、福田とみ、黒沢フジミ、堀越美恵子、神保和子、峰岸百合子、関口いちゑ、加藤秀子、箭原慶子、白井さ津き、加部恵美子、堀越智子、田中みつ江、須田シゲ子、滝上光代、春山ふさ江、安藤きく、小林美枝子、小林きん、斉藤淑江、浦辺ふさの、神保京子、堀越よし、金田あい子、新井すみ子、清水直美、林 かつ、柿田久枝、折茂すい、関口伸江、寺尾フジ江、田村ハツ子、芝塚なみ、西みよ子、高橋時枝、富田房三郎（以上、白倉下原遺跡班）



青木いせ、天田文子、新井幸子、新井まつ子、新井 緑、新井富貴子、飯塚初代、飯塚 房、今井 好、浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、落合君子、鬼形田鶴子、金井はる、金井友次、神戸ハツ江、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、栗原 清、黒沢京子、小林愛子、小林きよ子、斎藤英子、志賀シゲ子、島田八千代、神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、高田 嵩、高田三枝子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、田中みき江、佃 満、寺尾克代、中村いち、櫛島静子、野口節朗、野口照子、長谷川高子、藤本ひろ子、松本タツノ、三ヶ島富二郎、三木時一、森 基司、山崎孝子、湯浅安代、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子（以上、多胡蛇黒遺跡班）

天引口明塚遺跡の調査には主として、下記の専修大学考古学同好会の諸君の参加があり、調査を円滑に進めることができた。上記の発掘従事者とともに記して謝意を申し上げる次第である。

鈴木知生、嶺 恵津子、星野保則、恒吉洋志、歌川 明、百瀬貴文、馬場 武、大木美代、洲崎由紀子、内野秀紀、川上竜二、関根のり子、静 恵未、山崎奈津江

凡 例

1. 本報告書中に掲載した地図は、国土地理院 1：200000地勢図、1：25000地形図、吉井町・甘楽町都市計画図を縮小して使用した。
2. 本書中の方位記号の方向は、座標北（G.N.）を指す（国家座標IV系）。
3. 遺構図の縮尺は以下を標準として作成した。
1：30 カマド、炉、貯蔵穴 1：40 石室、土壇 1：60 住居跡
4. 遺物実測図の縮尺は以下を標準として作成した。
1：1 玉類、鏡、古銭 1：2 鉄製品（直刀除く） 1：3 土器類、石器 1：4 埴輪
破片、須恵器破片、石器 1：5 円筒・器財（盾・鞆・鞆）の完形 1：8 馬・家・太刀の完形品
5. 遺物実測図のうち、形象埴輪の断面のスクリーン表示は下記のことを示す。その他の場合はその都度示すこととする。

	実在する部分
	推定復元部分
6. 出土遺物実測については、一部を除いて遺物観察表を作成した。なお、遺物番号は、遺構ごとの種別通番とし、実測図・観察表・写真図版ともに共通している。
7. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1988年版を使用した。

目 次

I. 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の方法と経過	2
(1) 神保下條遺跡	(2) 天引口明塚遺跡
(3) 整理の経過	

II. 神保下條遺跡の調査

1. 遺跡の立地と環境	7
(1) 地理的環境	(2) 歴史的環境
(3) 神保下條遺跡の概要	
2. 1号古墳の調査	21
(1) 墳丘及び外部施設	(2) 埴輪列
(3) 主体部	(4) 古墳構築過程解明のための調査
(5) 石室壁体中からの人骨の出土	(6) 出土遺物
(7) 埴輪	
3. 2号古墳の調査	68
(1) 墳丘及び外部施設	(2) 主体部
(3) 埴輪列	(4) 土器
(5) 埴輪	
4. 3号古墳の調査	143
(1) 墳丘及び外部施設	(2) 主体部
(3) 遺物の出土状態	(4) 出土遺物
5. 4・5号古墳の調査	151
(1) 4号古墳	(2) 5号古墳
6. 竪穴住居跡の調査	153
(1) 1号住居跡	(2) 2号住居跡
(3) 3号住居跡	(4) 4号住居跡
(5) 5号住居跡	(6) 6号住居跡
7. 弥生土壌の調査	169
(1) 分布	(2) 形態的特徴
(3) 遺物の出土状態と特徴	
8. 中近世遺構の調査	177
(1) 館跡	(2) 溝
(3) 土壇	(4) 墓

9. A 軽石層下の田畠跡の調査	182
(1) 水田跡	
(2) 畠跡	
III. 天引口明塚遺跡の調査	
1. 遺跡の立地と環境	193
(1) 遺跡の概要	
(2) 地理的環境	
(3) 歴史的環境	
2. 1号古墳の調査	198
(1) 墳丘及び外部施設	
(2) 主体部	
(3) 埴輪列	
(4) 埴輪	
3. 2号古墳の調査	200
4. 中近世竪穴状遺構	223
IV 考 察	
1. 出土埴輪の特徴とその意義	227
2. 上野地域における埴輪樹立とその特徴	237
付編 群馬県埴輪出土古墳地名表	246
付載 科学分析	
1. 多胡古墳群出土の人歯について	宮崎重雄……289
2. 埴輪の鉞物学的研究	吉川和男……293
3. 分析結果について	……301
ま と め	……302

表 目 次

第1表	整理工程表	4
第2表	周辺遺跡一覧表	13
第3表	1号古墳石室規模一覧表	31
第4表	1号古墳石室石材一覧表	36
第5表	弥生・中近世土壌一覧表	170
第6表	神保下條遺跡一覧表	182

挿 図 目 次

第1図 神保下條遺跡位置図	5	第34図 1号古墳馬(85)(1)	61
第2図 神保下條遺跡とその周辺	8	第35図 1号古墳馬(85)(2)	62
第3図 籾川流域の地質図	9	第36図 1号古墳出土馬形埴輪片	62
第4図 神保下條遺跡と周辺の古墳群	11・12	第37図 1号古墳馬(85)(3)	63
第5図 神保下條遺跡全体図	19	第38図 1号古墳家(89)(1)	64
第6図 1号・2号古墳全体図	21	第39図 1号古墳家(89)(2)	65
第7図 1号古墳墳丘断面図	22	第40図 1号古墳家(89)(3)	66
第8図 1号古墳全体図	24	第41図 1号古墳出土家・器財形埴輪片	67
第9図 1号古墳葺石面展開図及び断面図	25	第42図 2号古墳全体図及び墳丘断面図	69
第10図 1号古墳埴輪出土状態及び接合関係	27	第43図 2号古墳埴輪出土状態	70
第11図 1号古墳石室閉塞状態	28	第44図 2号古墳円筒埴輪出土位置及び接合関係	71
第12図 1号古墳石室及び遺物出土状態	30・31	第45図 2号古墳人物埴輪出土位置及び接合関係	72
第13図 1号古墳石室裏込除去後の状態	32・33	第46図 2号古墳馬形埴輪出土位置及び接合関係	73
第14図 1号古墳基底部平面及び断面図	34	第47図 2号古墳家・器財形埴輪出土位置及び接合関係	74
第15図 1号古墳石室掘り方	35	第48図 下條1号・2号古墳出土土器	77
第16図 1号古墳石室壁石番号	36	第49図 2号古墳円筒埴輪(1)	78
第17図 1号古墳石室使用石材の種類	38	第50図 2号古墳円筒埴輪(2)	79
第18図 1号古墳右側壁中からの遺物出土状態	40	第51図 2号古墳円筒埴輪(3)	80
第19図 1号古墳石室内出土遺物	41	第52図 2号古墳円筒埴輪(4)	81
第20図 1号古墳石室壁体中出土遺物	42	第53図 2号古墳円筒埴輪及びヘラ描き(5)	82
第21図 1号古墳石室前出土土器	42	第54図 2号古墳人物1(58)(1)	88
第22図 円筒埴輪各部の名称	43	第55図 2号古墳人物1(58)(2)	89
第23図 1号古墳出土円筒埴輪(1)	44	第56図 2号古墳人物1(58)(3)	90
第24図 1号古墳出土円筒埴輪(2)	45	第57図 2号古墳人物4(59)	91
第25図 1号古墳出土円筒埴輪(3)	46	第58図 2号古墳人物2(60)(1)	92
第26図 1号古墳出土円筒埴輪(4)	47	第59図 2号古墳人物2(60)(2)	93
第27図 1号古墳出土円筒埴輪(5)	53	第60図 2号古墳人物2(60)(3)	94
第28図 1号古墳出土円筒埴輪(6)	54	第61図 2号古墳人物3(61)(1)	96
第29図 1号古墳出土円筒埴輪(7)	55	第62図 2号古墳人物3(61)(2)	97
第30図 1号古墳人物1(75)(1)	56	第63図 2号古墳人物5(62)(1)	98
第31図 1号古墳人物1(75)(2)	57	第64図 2号古墳人物5(62)(2)	99
第32図 1号古墳人物2(76)	58	第65図 2号古墳人物6(63)(1)	100
第33図 1号古墳出土人物埴輪片	59	第66図 2号古墳人物6(63)(2)	101

第 67 図	2号古墳人物埴輪片(1)	102	第110図	3号住居跡出土遺物	163
第 68 図	2号古墳人物埴輪片(2)	103	第111図	4・5・6号住居跡位置図	164
第 69 図	2号古墳人物埴輪片(3)	104	第112図	4号住居跡	165
第 70 図	2号古墳馬1(121)(1)	112	第113図	4号住居跡出土土器	165
第 71 図	2号古墳馬1(121)(2)	113	第114図	5号住居跡	166
第 72 図	2号古墳馬1(121)(3)	114	第115図	6号住居跡	167
第 73 図	2号古墳馬2(122)(1)	116	第116図	6号住居跡出土土器	167
第 74 図	2号古墳馬2(122)(2)	117	第117図	弥生・中近世土壌分布図	169
第 75 図	2号古墳馬2(122)(3)	118	第118図	弥生土壌実測図(1)	171
第 76 図	2号古墳馬形埴輪片	120	第119図	弥生土壌実測図(2)	172
第 77 図	2号古墳家(130)(1)	122	第120図	中近世土壌実測図(3)	173
第 78 図	2号古墳家(130)(2)	123	第121図	弥生土壌等出土遺物	174
第 79 図	2号古墳家(130)(3)	124	第122図	中近世館跡	178
第 80 図	2号古墳家形埴輪片	125	第123図	中近世遺構出土遺物	179
第 81 図	2号古墳太刀1(139)	126	第124図	神保下條遺跡出土古銭	181
第 82 図	2号古墳太刀2(140)	127	第125図	A軽石下水田畠跡全体図及び断面図	183・184
第 83 図	2号古墳太刀形埴輪片	128	第126図	遺構外出土土器・紡錘車	185
第 84 図	2号古墳盾(151)(1)	130	第127図	遺構外出土縄文石器	186
第 85 図	2号古墳盾(151)(2)	131	第128図	天引口明塚遺跡位置図	191
第 86 図	2号古墳盾(151)(3)及び盾形埴輪片	132	第129図	天引口明塚遺跡とその周辺(1)	194
第 87 図	2号古墳靱1(162)(1)	134	第130図	天引口明塚遺跡とその周辺(2)	196
第 88 図	2号古墳靱2(163)(2)	136	第131図	天引口明塚遺跡全体図	197
第 89 図	2号古墳靱2(163)(3)及び靱下半部(164)	137	第132図	1号古墳全体図	198・199
第 90 図	2号古墳靱形埴輪片	138	第133図	2号古墳全体図	201
第 91 図	2号古墳靱1(168)・靱2(169)	139	第134図	2号古墳埴輪出土位置図(1)	202
第 92 図	2号古墳靱形埴輪片	140	第135図	2号古墳埴輪出土位置図(2)	203
第 93 図	2号古墳器財形埴輪片	142	第136図	2号古墳円筒埴輪(1)	205
第 94 図	3号古墳位置図	143	第137図	2号古墳円筒埴輪(2)	206
第 95 図	3号古墳全体図及び周堀断面図	144	第138図	2号古墳円筒埴輪(3)	207
第 96 図	3号古墳石室(1)	146	第139図	2号古墳人物埴輪片(1)	213
第 97 図	3号古墳石室(2)及び遺物出土状態	147	第140図	2号古墳人物埴輪片(2)	214
第 98 図	3号古墳出土遺物(1)	148	第141図	2号古墳馬(85)	216
第 99 図	3号古墳出土遺物(2)	149	第142図	2号古墳馬形埴輪片(1)	217
第100図	4号古墳全体図及び周堀断面図	151	第143図	2号古墳馬形埴輪片(2)	218
第101図	5号古墳全体図及び周堀断面図	152	第144図	2号古墳器財形埴輪片	220
第102図	集落・中近世遺構全体図	153	第145図	中近世竪穴状遺構	223
第103図	1号住居跡(1)	154	第146図	2号古墳周堀出土中近世遺物	223
第104図	1号住居跡(2)	155	第147図	古墳時代後期における埴輪配置	231
第105図	1号住居跡(掘り方)(3)	156・157	第148図	下條2号古墳周埴輪配置復元図	232
第106図	1号住居跡出土遺物(1)	158	第149図	下條2号古墳人物埴輪の製作手法からの分類	236
第107図	1号住居跡出土遺物(2)	160	第150図	白藤古墳群(上段)・下淵名古墳群(下段)	
第108図	2号住居跡	161		出土の埴輪	241
第109図	3号住居跡	162	第151図	古墳時代後期の器財形埴輪	245

写真図版編目次

神保下條遺跡

- P L 1 航空写真
- P L 2 遺跡遠景
- 1 遺跡遠景（西から）
- 2 遺跡遠景（北から）
- P L 3 1号・2号古墳
- 1 1号・2号古墳（調査前、南西から）
- 2 1号古墳（調査前、南西から）
- 3 1号・2号古墳（南西から）
- P L 4 1号古墳
- 1 墳丘全景（南から）
- 2 同上（西から）
- P L 5 1号墳
- 1 墳丘西側埋没状態及び葺石（北から）
- 2 墳丘北側葺石（北から）
- 3 墳丘南西側造り出し部（南西から）
- 4 埴輪列検出作業
- 5 埴輪列出土状態（北から）
- P L 6 1号古墳
- 1 墳丘北側埴輪列（北から）
- 2 列石の外側に立てられた円筒埴輪
- 3 円筒埴輪出土状態（安定のため礫をいれる）
- 4 同上
- 5 人物埴輪（75）出土状態
- 6 馬形埴輪脚（85）出土状態
- P L 7 1号古墳
- 1 石室全景及び閉塞状態（南から）
- 2 閉塞除去後の石室（南から）
- P L 8 1号古墳
- 1 羨道から玄室を望む（南から）
- 2 玄室床面（北から）
- 3 羨道左壁（東から）
- 4 玄室左（東から）
- P L 9 1号古墳
- 1 葺石断ち割り状態（墳丘北西側、西から）
- 2 同上（墳丘西側、北西から）
- 3 同上（墳丘北西側、北西から）
- 4 断ち割りをさらに進めた状態（封土全体が礫である事がわかる）
- 5 壁石材の背後まで墳丘を除去した断面状態（南から）
- 6 同上（奥壁寄り、北から）
- 7 石室の裏込めは頭大の礫と砂礫による
- 8 同上（砂礫の状態）
- P L 10 1号古墳
- 1 封土・裏込め除去後（南から）
- 2 同上（西から）
- 3 同上（北から）
- 4 右壁と掘り方（南から）
- 5 奥壁と掘り方（西から）
- 6 壁石の解体調査
- 7 礫地形及び壁基底石（南から）
- 8 同上（北から）
- P L 11 1号石室
- 1 地形の礫と石室床石除去後（南から）
- 2 壁基底石の設置状況（北東から）
- 3 棚石の設置状況（西から）
- 4 壁石除去後（南から）
- 5 使用石材全容（手前が裏込め・地形礫・奥が壁石）
- P L 12 1号古墳
- 1 壁体中からの遺物確認状況（北東から）
- 2 同上（北から）
- 3 同上近影（鉄鏝が見える）
- 4 同上人骨出土状態
- 5 鉄製耳環出土状態
- 6 右側壁石背後からの鉄鏝の出土
- P L 13 1号古墳出土遺物
- 1 1号古墳石室内出土鉄製品
- 2 1号古墳石室壁体中出土鉄鏝
- 3 同上耳環
- 4 石室内出土ガラス小玉
- P L 14 1号古墳円筒埴輪
- P L 15 1号古墳円筒埴輪
- P L 16 1号古墳円筒埴輪
- P L 17 1号古墳円筒埴輪
- P L 18 1号古墳円筒埴輪
- P L 19 1号古墳円筒埴輪
- P L 20 1号古墳人物埴輪
- P L 21 1号古墳馬形埴輪
- P L 22 1号古墳形象埴輪
- 1 人物・器財
- 2 馬
- P L 23 1号古墳家形埴輪
- P L 24 1号古墳人物埴輪
- 1 人物1腕装着状態
- 2 同上左腕
- 3 同上

- 4 同上右腕
5 同上内面
6 人物2内面
P L 25 1号古墳家形埴輪
1 屋根頂部内面
2 上屋根流れ部内面
3 上屋根と下屋根の接合部(下から)
4 上屋根内面
5 軒から下屋根の復元
6 上屋根の接合作業
7 復元作業終了
P L 26 2号古墳
1 全景及び埴輪出土状態(南西から)
2 同上(南東から)
P L 27 2号古墳
1 調査開始直後(南西から)
2 埴輪崩落状態検出作業(南から)
3 埴輪列と葺石(東から)
P L 28 2号古墳
1 人物埴輪(58)出土状態
2 人物埴輪(58)設置状態
3 馬形埴輪(121)出土状態
4 同上
5 靱形埴輪(163)出土状態
6 家(130)及び盾形埴輪(151)出土状態
P L 29 2号古墳
1 掘り上がり全景(南西から)
2 葺石及びテラス面(南東から)
3 墳丘南側周堀状部分(西から)
4 墳丘が礫のみからなる状態(南西から)
5 墳丘南側葺石及びテラス面断ち割り状態(西から)
P L 30 2号古墳円筒埴輪
P L 31 2号古墳円筒埴輪
P L 32 2号古墳円筒埴輪
P L 33 2号古墳円筒埴輪
P L 34 2号古墳円筒埴輪
P L 35 2号古墳人物埴輪
P L 36 2号古墳人物埴輪
P L 37 2号古墳人物埴輪
P L 38 2号古墳人物埴輪
P L 39 2号古墳人物埴輪
P L 40 2号古墳人物埴輪
P L 41 2号古墳人物埴輪
1 髪毛
2 顔・帯・刀・その他
P L 42 2号古墳人物埴輪
1 腕
2 胸・上着裾・基部
P L 43 2号古墳馬形埴輪
P L 44 2号古墳馬形埴輪
P L 45 2号古墳馬形埴輪
P L 46 2号古墳馬形埴輪
P L 47 2号古墳家形埴輪
P L 48 2号古墳家形埴輪
P L 49 2号古墳馬・家形埴輪
1 馬形埴輪
2 家・及び人物埴輪
P L 50 2号古墳太刀形埴輪
P L 51 2号古墳太刀形埴輪
P L 52 2号古墳盾形埴輪
P L 53 2号古墳盾・靱形埴輪
1 盾形埴輪
2 靱1
P L 54 2号古墳靱形埴輪
P L 55 2号古墳靱・靱形埴輪
P L 56 2号古墳太刀・器財・その他
P L 57 2号古墳人物埴輪
1 人物1髪内面
2 同上顔内面
3 人物2頭部内面
4 同上左手内面
5 同上右手内面
6 同上胸の下に当てる手とその剥落痕
7 同上胸部内面
8 同上裾部内面
P L 58 2号古墳人物・馬形埴輪
1 人物3美豆良剥落痕
2 同上接続状態
3 同上胸部内面
4 馬2雲珠剥落痕
5 同上腰から尻部内面
6 同上腹部内面
7 同上障泥接続状態
P L 59 2号古墳馬形埴輪
1 石膏による足の製作
2 後足の接合
3 4本足を接合し基礎を作る
4 鞍橋の接続痕
5 たて髪・鞍橋の剥落痕
6 背から腰部内面
7 背から腰を上へのせる
8 頭部の復元作業
P L 60 2号古墳家・器財埴輪
1 家上屋根内面
2 同上上屋根の接合
3 太刀把頭
4 太刀鞘部内面
5 盾上半部内面
6 盾側部との接合
7 靱上部断面

- 8 鞆内面
- P L 61 1号・2号古墳出土土器
1 2号古墳出土須恵器提瓶
2 1号・2号古墳出土土器
- P L 62 空中写真
1 遺跡地遠景(西から)(集落跡の調査)
2 第3次調査全景(遺跡地近景)
- P L 63 4号・5号古墳
1 遠景(左が4号、右が5号、南から)
2 4号古墳全景(左側は館跡、南から)
- P L 64 4号・5号古墳
1 4号古墳全景
2 同上周堀土層断面
3 5号古墳東寄り周堀(南から)
4 同上周堀土層断面(南から)
5 同上全景(南から)
- P L 65 3号古墳
1 全景(南から)
2 調査前遠景(東から)
3 全景(西から)
4 墳丘北側の周堀内への礫埋没状態(東から)
5 同上平安期土器出土状態
- P L 66 3号古墳
1 鉄刀出土状態
2 人骨及び歯の出土状態
3 石室全景(南から)
4 石室掘り方全景(東から)
5 石室全景(東から)
- P L 67 竪穴住居跡
1 1号～3号住居跡空中写真
2 1号～3号住居跡全景(手前が1号住居跡、東から)
- P L 68 竪穴住居跡
1 1号住居跡全景(南から)
2 同上甕出土状態
3 同上貯蔵穴内土器
4 同上鏡出土状態
5 同上鉄斧・鎌出土状態
- P L 69 竪穴住居跡
1 1号住居跡管玉出土状態
2 同上棒状礫出土状態
3 同上貯蔵穴
4 同上掘り方全景(南から)
5 2号住居跡全景(南から)
- P L 70 竪穴住居跡
1 2号住居跡全景(北から)
2 同上貯蔵穴(西から)
3 3号住居跡全景(南から)
4 同上掘り方土層断面(東から)
5 同上掘り方全景(南から)
- P L 71 竪穴住居跡
1 4号住居跡全景(南から)
2 同上カマド状遺構(南から)
3 同上遺物出土状態
4 同上掘り方(西から)
5 5号住居跡全景(南から)
6 6号住居跡カマド(東から)
- P L 72 弥生土壌
1 1号土壌(西から)
2 3号土壌土層断面(南から)
3 6号土壌(北から)
4 8号土壌土層断面(南から)
5 7号土壌土層断面(南から)
6 同上左遺物出土状態
7 同上(南から)
8 9号土壌(西から)
- P L 73 弥生土壌
1 10号土壌(南から)
2 11号土壌(南から)
3 12号土壌土層断面(南から)
4 同上(南から)
5 13号土壌(南から)
6 14号土壌土層断面(南から)
- P L 74 土壌・溝
1 2号土壌(西から)
2 4号土壌(西から)
3 5号土壌(南から)
4 15号土壌(南から)
5 16号土壌(南から)
6 2号(左)・3号溝全景(南から)
7 2号溝土層断面(南から)
8 同上溝内の礫敷状況
- P L 75 中近世館跡
1 遠景(右側は4号古墳、南から)
2 全景(西から)
- P L 76 中近世館跡
1 全景(西から)
2 同上(東から)
3 堀土層断面
4 堀からの礫出土状態
5 堀からの土師質小皿出土状態
- P L 77 近世水田・畠跡
1 調査地遠景(西から)
2 空中写真
- P L 78 近世水田・畠跡
1 調査地全景(北から)
2 バルーン使用による空中撮影
3 浅間山軽石層の除去作業
4 浅間山軽石層堆積状態
5 水田跡調査風景

- | | | | | |
|-----|---------------------|-----|--------------|--------------------|
| 6 | 水田跡調査風景 | P L | 82 | 1号住居跡出土遺物 |
| 7 | 同上 | P L | 83 | 1号住居跡出土遺物 |
| P L | 79 近世水田・畠跡 | P L | 84 | 3号・6号住居跡、中近世墓等出土遺物 |
| 1 | 水田跡全景（北から） | P L | 85 | 弥生土壌・遺構外出土遺物 |
| 2 | 同上（南から） | 1 | 弥生土壌出土遺物 | |
| 3 | 水路跡（南から） | 2 | 遺構外縄文土器・石器 | |
| P L | 80 近世水田・畠跡 | P L | 86 | 周辺集落遺跡 |
| 1 | 畠跡（南から） | 1 | 矢田遺跡集落調査風景 | |
| 2 | 同上（右側は水路及び水田跡、北から） | 2 | 多胡蛇黒遺跡集落調査風景 | |
| P L | 81 3号古墳1号・3号住居跡出土遺物 | | | |

天引口明塚遺跡

- | | | | |
|-----|-----------------|-----|----------------|
| P L | 87 航空写真 | 6 | 中近世竪穴状遺構 |
| P L | 88 空中写真 | P L | 92 2号古墳円筒埴輪 |
| 1 | 調査地遠景（東から） | P L | 93 2号古墳円筒・人物埴輪 |
| 2 | 同上（西から） | P L | 94 2号古墳人物埴輪 |
| P L | 89 1号古墳 | 1 | 人物埴輪 |
| 1 | 全景（上から） | 2 | 人物埴輪 |
| 2 | 同上（東から） | P L | 95 2号古墳馬形埴輪 |
| P L | 90 2号古墳 | 1 | 鞍 |
| 1 | 全景（南から） | 2 | 馬形埴輪 |
| 2 | 調査風景 | P L | 96 2号古墳形象埴輪 |
| P L | 91 2号古墳 | 1 | 馬形埴輪 |
| 1 | 墳丘東側周堀（南から） | 2 | 太刀形埴輪 |
| 2 | 墳丘南西側周堀（南東から） | 3 | 器財形埴輪 |
| 3 | 埴輪出土状態（墳丘東側、周堀） | P L | 97 埴輪胎土分析 |
| 4 | 同上人物腕（77） | P L | 98 埴輪胎土分析 |
| 5 | 同上人物（71） | P L | 99 埴輪胎土分析 |

抄 録

神保下條遺跡

1. 遺跡の概要

神保下條遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保字下條、他に所在している。本遺跡の調査期間は、平成元年5月19日から同年6月1日までと、平成2年6月1日から同年9月20日までである。遺跡地は吉井町の南方で、南から北へと流れる大沢川の右岸に位置している。調査前から小型古墳1基の存在がわかっていたが、調査の結果、予想を大きく上回る各時期の遺構が発見された。遺構の時期は、弥生時代から近世にまで及んでいる。

2. 遺構数量

種 別	時 期 別 数 量	備 考
古 墳	古墳5	横穴式古墳3、竪穴式(?)古墳2
住 居 跡	古墳前期3、奈良3	
土 壙	弥生 中近世	
館 跡	中世末1	館の堀跡
溝	中世末2	館に伴う道路状遺構か
水 田 跡	江戸	天明3年の軽石に直接埋没
畠 跡	江戸	天明3年の軽石に直接埋没

3. まとめ

今回調査された古墳は、大沢川右岸に形成された総数約90基からなる多胡古墳群の最南端に位置するものである。このうち特に注目されたのは、6世紀中葉から後半にかけて築造された1・2号古墳である。横穴式石室を主体部とする小型円墳で大量の形象埴輪を伴うものであった。これらの古墳の下から発見された古墳時代前期の集落跡も興味深いものであった。このうち1号住居跡からは、小型仿製鏡とともに鉄斧、鎌、管玉、ガラス小玉が出土しており、その性格が問題となった。

天引口明塚遺跡

1. 遺跡の概要及び遺構の数量

天引口明塚遺跡は、群馬県甘楽郡甘楽町大字天引字口明塚に所在している。本遺跡の調査期間は、平成2年7月1日から同年8月20日までである。遺跡は、甘楽町と吉井町の境を南から北に流れる天引川の左岸に位置している。調査の結果、古墳時代後期に属する小型円墳2基と、中近世の竪穴状遺構1基が確認された。

2. まとめ

本遺跡の調査の主要部分を占めるのは、2基の古墳(1・2号古墳)の調査であった。調査前の破壊が著しかったため、墳丘もろとも主体部は完全に消失してしまっていた。2基のうち、2号古墳からは、周堀内より、大量の埴輪片が出土した。その出土状態から、横穴式石室を主体部とする6世紀後半を中心とした時期のものであることが推定された。

I 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経緯

関越自動車道上越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km(内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用)である。今回建設される藤岡インター～佐久インター間は約67kmで群馬県藤岡市、吉井町、甘楽町、富岡市、妙義町、松井田町、下仁田町、長野県佐久市の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施工命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町(東部)・松井田町(東部)、同57年松井田町(西部)・下仁田町(西部)・長野県佐久市までの路線が発表された。

関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

〈昭和49年度〉藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけること、文化財に関係する事項は文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

〈昭和55年度〉文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県(企画部交通対策課)より報告された。

〈昭和59年度〉建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

〈昭和60年度〉県教育委員会は、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡

を認定した。(後の試掘により52遺跡に変更)

そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。①発掘調査終了年度を昭和66年度末(平成2年度末)とする。②群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。③事業団の出張所(上越線調査事務所)を開設し、整理作業も併せ行う。④機関別対応面積は次のとおりとする。埋文事業団は富岡市以東の約76万㎡を受け持つ。調査会は妙義町・下仁田町・松井田町の約22万㎡を受け持つ。

なお、調査実施方法は次のとおりである。日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

〈昭和61年度〉4月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人で発足。以後、6班22人体制(昭62)、9班36人体制(昭63)、12班45人体制(平元)、12班45人体制(平2)。平成2年度までに一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より平行して実施していたが、平成3年度からはほとんど整理作業のみとなり、平成8年度終了予定である。

神保下條遺跡は工事の進捗状況から第1次調査と第2・3次調査に分けて実施した。第1次調査は平成元年5月19日から6月1日の約2週間にわたり、900㎡が調査された。検出された遺構は江戸時代後期の水田跡、畑跡で、調査は原西II班が担当した。

第2・3次調査は平成2年6月1日から9月20日の約4ヶ月にわたり、2000㎡が調査された。調査した主な遺構は古墳と古墳時代前期の住居跡である。調査の進捗上から古墳は原西II班が平行して担当し、住居跡は中山班が担当した。

天引口明塚遺跡は下條遺跡と同様、原西II班の調査と平行して実施されている。時期は平成2年7月1日から8月20日までの約2ヶ月で、調査面積は

I 発掘調査の経過

1250㎡である。調査対象は平夷された古墳2基である。

2. 発掘調査の方法と経過

(1) 神保下條遺跡

調査の方法 調査対象地は、吉井インターチェンジの西方の本線部分であり、北流する大沢川の東岸に位置している。調査地は、東西長約270mであるが、全面に及ぶものではなく、その東端と西端の2地点、都合2900㎡を対象とするものであった。この範囲内について、調査区北東端の国家座標 X=26900、Y=-76000を原点として、5m四方のグリッドを設定した。グリッドは北東コーナーの杭をもって呼称した。南方向へは5mごとに1.2.3.・・・と算用数字で呼称し、西方向へは100mごとにA.B.Cというように大区画をおこない、その中を5mごとにa.b.c・・・と呼称した。なお、グリッドの設定、水準点の移動は(株)測研に委託した。

発掘調査の経過 本遺跡の調査は大きく3次に分けられる。

〈第一次調査〉 調査地の最西端で実施したもので、平成元年の5月19日から6月1日にかけてであった。この調査は、この時期に甘楽町白倉下原遺跡で行われていた調査班のうちの一部の作業員をさいて、平行して実施したものである。そのため、現地での調査には、主として右島があたり、甘楽町の調査を関口、飯塚があたった。

調査はまず対象地の表土除去をバックホーを使用して行ったところ、ほぼ一面に天明3年噴火の浅間山A軽石が認められた。この軽石層の厚さは1m以上に達するものであり、その場に立つと砂場にいるかのような感であった。

この地点は、東側の谷筋から押し寄せる自然水が低地へ

と流れ出す集結点近くにあたっていたため、5月後半という季節がらともあわせて調査地内に押し寄せる大量の水に苦慮した。

遺構面を直接覆っている軽石を丹念に除去することが即、他の遺跡の場合の遺構面の検出作業につながることから、作業自体は順調に進んだ。

調査開始から10日ほどで水田・畠跡とも完全に姿を表したので、バルーンを使用した空中写真の撮影を実施した。遺物は全く出土しなかったため、細部の写真撮影後、すぐに遺構平面測量を実施した。

遺構面の断ち割り調査を済ませて、全調査が終了したのは6月1日であった。

〈第二次調査〉 1・2号古墳の調査であり、平成2年6月1日から7月上旬にかけて実施した。この調査の場合も白倉下原遺跡の調査班の作業員の一部をさいて行き、主として右島が担当した。

調査前の段階には、両丘がつながってしまっており、南北方向にやや長い一つの古墳のように見えた。実際、『上毛古墳総覧』では2つをあわせて「多胡村10号古墳」として掲載されていた。

調査は、墳丘全体を厚く覆っている竹林の伐採から開始した。最も手こずらせたのは全面にはびこっている竹の根である。当初は遺構を痛めないようにとの配慮から手作業により除去しようとしたのであるが、このままでは、これだけで何ヶ月も費やして



神保下條遺跡現地説明会（平成2年6月）

2. 発掘調査の方法と経過

しまう危惧を抱いた。そこで、やむをえずバックホーにより注意をしながら除去していくことにした。その結果、この古墳が東西に隣合う二つの円墳であることが明らかになってきた。南側を「下條1号古墳」、北側を「下條2号古墳」とした。

調査は、遺存状況が良い1号古墳から始めた。その調査工程は次のように計画した。①墳丘(葺石面)の検出と埴輪列の探索。②石室の調査。③写真撮影及び遺構図の作成。④墳丘・石室の解体調査。

②の調査が終了した時点で2号古墳の調査を同じ工程に従って開始した。この古墳の場合、1号古墳に較べて墳丘・石室の遺存状態が悪かったため、そこにはあまり時間がかからなかった。ただし、おびただしい量の埴輪が周囲から出土したため、その調査に多くの時間がさかれた。

1号古墳で③の調査までが終了し、2号古墳で埴輪をほぼ出しきった時点を見はからって、6月30日の土曜日に遺跡説明会を実施した。埴輪の遺存状態が良好であったこともあって930名以上の見学者があり、盛況であった。

この後1号古墳は埴輪の取り上げを行い、あわせて墳丘・石室の解体調査を進めた。

一方、2号古墳は埴輪の出土状態図を作成し、終了後その取り上げを行った。本墳の場合、墳丘・石室の遺存状態は良くなかったため、遺構自体の調査にはあまり時間を要しなかった。

7月10日には古墳についてのすべての調査が終了した。ところで、古墳の基礎構造の調査を進めていたところ、その下に竪穴住居跡と推定される遺構の広がり確認され、古墳以外の遺構の存在が明らかになり、調査を継続する必要性が出てきた。古墳の調査にあっていた白倉下原遺跡の調査班は、この後の調査日程が決まっていたので、対応は困難であった。そこで、今後の調査は、近接する多胡蛇黒遺跡の調査班があたることになった。この調査が第三次の調査である。

〈第三次調査〉 7月中に細々と調査の諸準備を進めながら、本格的には8月に入ってから実施した。

まず、古墳の周辺についても調査区を拡張して、遺構の確認作業を行った。その結果、予測を大きく上回る各時期の遺構の存在が明らかになってきた。その主なものは、弥生中期の土壌群、古墳時代前期の住居跡、中近世の諸遺構である。

まず、竪穴住居の調査から始めた。そこで思わぬ大発見に遭遇した。1号住居跡から、鏡、鉄斧、鎌、玉類等、当地域では有力な前期古墳の主体部から出てきてもおかしくない遺物群が出土した。住居跡の遺存状況が良くなかった(壁高が10cmにも満たない)ことを考えると幸運であった。

竪穴住居の調査終了後、弥生土壌、中近世の館跡等の調査を8月いっぱいかけて実施した。

これとは別に、東側の台地の頂上部においても、新たに横穴式の小型円墳が調査地内で発見された。この古墳(3号)の調査も多胡蛇黒班で対応した。墳丘・石室の遺存状況は良くなかったためその検出作業は短時間で済ませることができた。ところが、玄室の床面は思いのほか良く残っており、多量の人骨(歯)が出土し、この調査に手間取った。これを最後に、本遺跡の調査は、9月20日にすべて終了することができた。

(2) 天引口明塚遺跡

調査の方法 調査対象地は、吉井町と甘楽町を境する天引川の西岸の道路本線部分予定地である。調査前に実施した試掘調査の結果、1基の古墳が確認されたのでこの部分のみの約60㎡についての小範囲の調査であった。

対象地外の北東側に位置する国家座標 $X=26900$ 、 $Y=-78700$ を原点として、5m四方のグリッドを設定した。グリッドの呼称法は神保下條遺跡の場合と同一である。なお、グリッドの設定、水準点の移動は(株)測研に委託した。

発掘調査の経過 本格的な調査に入るための諸作業は平成2年の7月1日から開始したが、実際に発掘に取り掛かったのは7月20日からである。試掘調査の段階では1基の小型円墳(2号古墳)の存在が確認されていたが、周囲の表土を除去したところ、も

I 発掘調査の経過

う1基の小型円墳(1号古墳)が確認された。墳丘・主体部等は後世の削平により完全に消滅してしまっていたため、調査は比較的短期間で終了すると思われた。

7月25日から2週間の予定で専修大学考古学同好会の学生15名が調査に参加した。この夏は例年になく暑さであったが、若いエネルギーで良く頑張ってくれた。そのため、学生の参加している期間中に遺構面をほぼ掘り上げることができた。残りの期間でバルーン使用による空中写真撮影と遺構測量を実施し、8月20日には全ての調査を完全に終了した。

なお、今回の調査は、短期間であったため、特別に調査事務所を設けず、西側の隣接地で調査を進めていた天引狐崎遺跡の調査班の全面的な援助を受けて進めることができた。

(3) 整理の経過

神保下條遺跡の整理は、平成3年4月1日から平成4年3月31日の1ケ年をかけて実施した。なお、天引口明塚遺跡の内容が資料的に検討課題の共通する部分が多いことと、量的にそれほど多くないことから、神保下條遺跡に併せて一冊の報告書として刊

行することとした。

神保下條遺跡の調査資料の主体をなすのは、1号、2号古墳から出土した大量の埴輪である。1年という短い期間で納得のいく整理をするために、以下のようないくつかの方針を決めた。製作技術的な視点からデータを取るため、復元途中での内面実測・写真撮影を行う。埴輪組成をでき得る限り復元するため、接合資料の探索を限界ギリギリまで続ける。今後の資料活用を念頭において、復元作業に力を入れる、等が主な点である。そのため、埴輪資料に伴う諸作業が最も時間を要した。ある程度納得のいくデータ化が可能になったのは、整理班の6名の補助員が、最後まであきらめないうで、1年間フルに活躍してくれたたまものである。

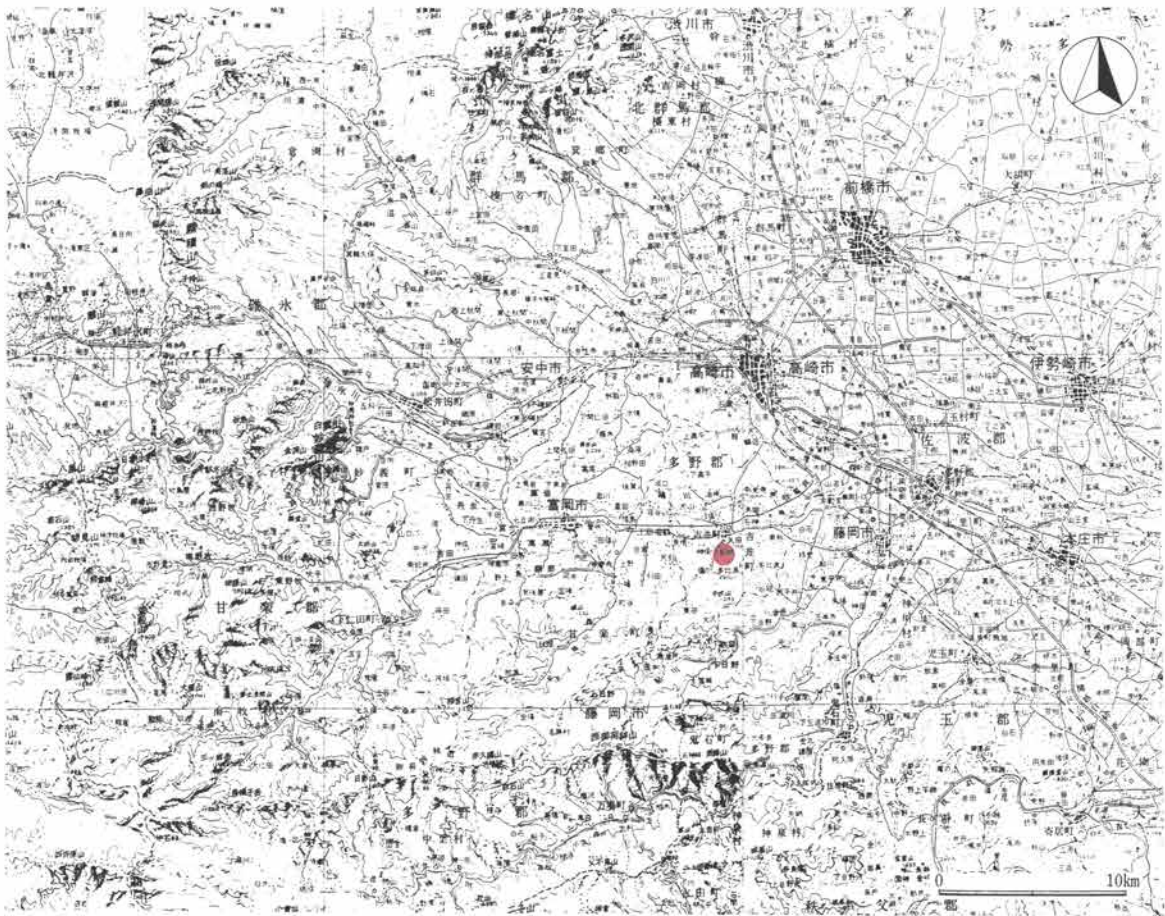
遺物の実測の大半と挿図のトレースの全ては補助員の手によった。また、家・馬・太刀の大型品の実測は、(株)シン航空のステレオ写真実測によった。

報告書刊行のメドがついた平成4年3月7日(土)には、上越線調査事務所での整理作業の見学もあわせて、埴輪展示会を実施したところ、304名の見学者が訪れ、熱心に見学した。

第1表 整理工程表

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考	
遺物整理	分類・復元	■													
	実測		■												
	拓本			■											
	トレース					■									
	版下作成							■							
	写真撮影							■							
	写真版下作成							■							
遺構整理	図面作成	■													
	トレース			■											
原稿	土器観察表						■								
	本文							■							
その他											入札	★	■	校正・収蔵	

神保下條遺跡



第1図 神保下條遺跡位置図

II 神保下條遺跡の調査

1. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

群馬県は関東地方の北西の内陸部に位置しており、周囲を栃木、埼玉、福島、新潟、長野県と接している。福島、新潟と接する県北部及び長野と接する県西部は主に山地部分であり、県中央部から栃木、埼玉と接する県東部にかけてが平野部であり、関東平野の北西部を占めている。

これら山地部分には深く、険しい山々が幾重にも連なっており、利根川とその支流の中小河川を通じて豊富な水を平野部へ供給している。このことはまた、山地から平野部に出る地域に、肥沃で豊かな沖積地を形成することになり、弥生時代以降、広大な農耕適地をもたらしたのであった。

神保下條遺跡は、群馬県の南西部、多野郡吉井町に所在している。この付近は、^{かぶら} 鑄川の右岸（南岸）の段丘上である。鑄川は長野県境の荒船山付近に源を発し、西から東へと流れ、高崎市の南部で利根川の一支流である烏川に合流している。この付近の地形をさらに詳しく見ると、南側に関東山地をひかえ、この地から北側にかけては山地に連なる丘陵性の地形を呈している。この丘陵性の地形を鑄川が東西に開析し、いわゆる「甘楽の谷」といわれる流域地帯を形成しているわけである。鑄川によって形成された段丘面は、上下の2段をなしており、富岡市東部から甘楽町を経て、吉井町から藤岡市西部にかけての右岸に発達している。

ところで、この右岸（南岸）の流域一帯にはまた、南側の山地部分に源を発し、北流して鑄川へと注ぎ込む中小の河川が東西に平行して幾筋も認められる。この河川が段丘を南北に横断するため、右岸に沿って南北方向の谷が平行して幾つも形成されることになる。

神保下條遺跡は、このような河川の一つである大沢川によって形成された南北の谷に面する右岸（東

岸）の段丘上に位置しているわけである。下條1・2号古墳は段丘の下段の奥まった部分に位置しており、3号古墳は上段の縁辺部に位置していることになる。付近の標高は、145m前後である。

(2) 歴史的環境

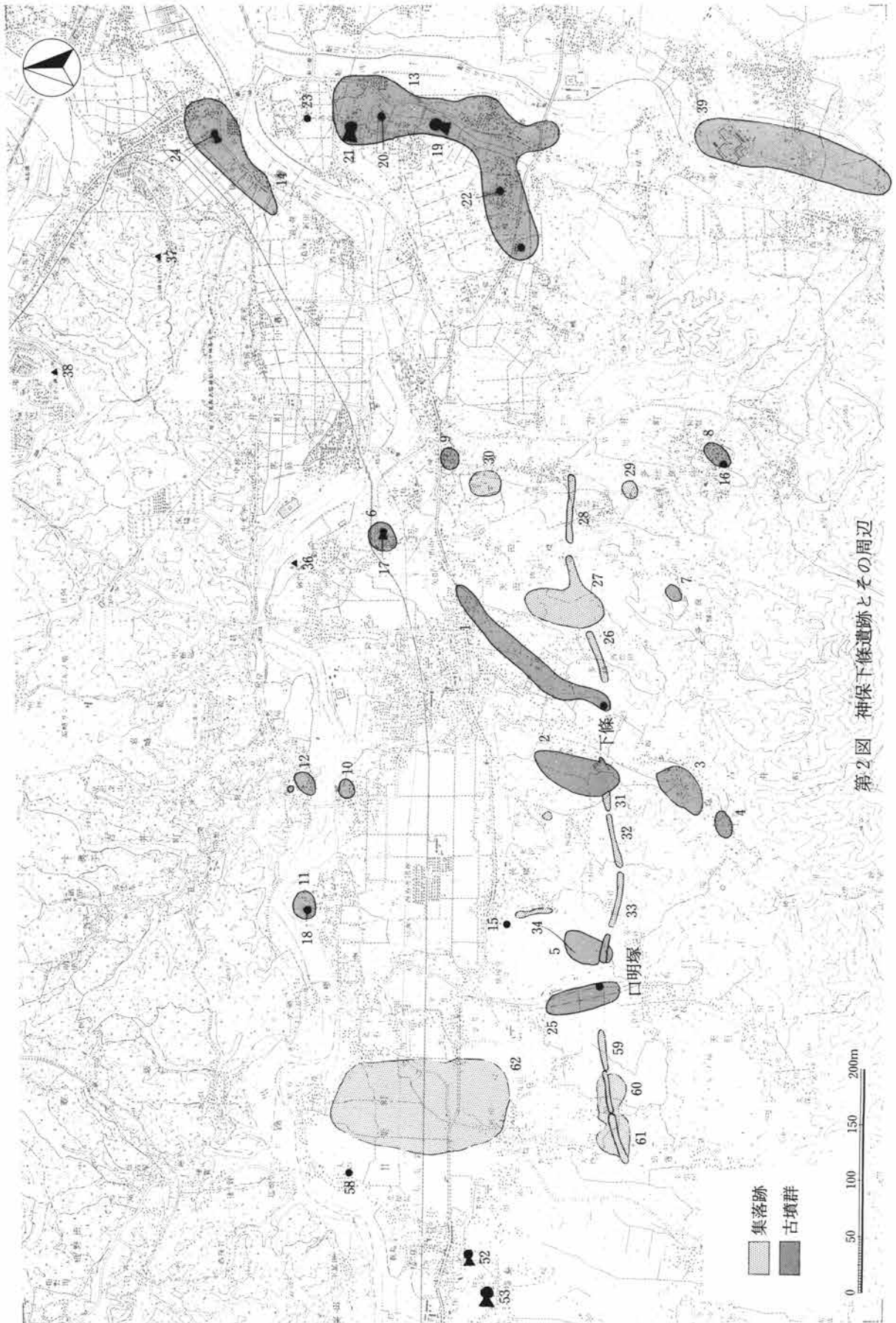
ここでは、神保下條遺跡で発見された遺構の主要部分をなす古墳時代を中心に見て行くことにしたい。

鑄川流域は、その右岸に形成された段丘面を基盤にして地域展開がなされており、南側はすぐに関東山地の山なみとなってしまうため、きわめて狭隘な地域空間であるのが特徴である。遺跡の分布域も鑄川の右岸に沿って帯状に連なるものであり、古墳や古墳時代の集落跡の分布は上位段丘に特に密度が濃い。関越自動車道は主としてこの上位段丘面を東西に横断する形となったため、この地域では最も遺跡の密度の濃い地帯を通過しているわけである。

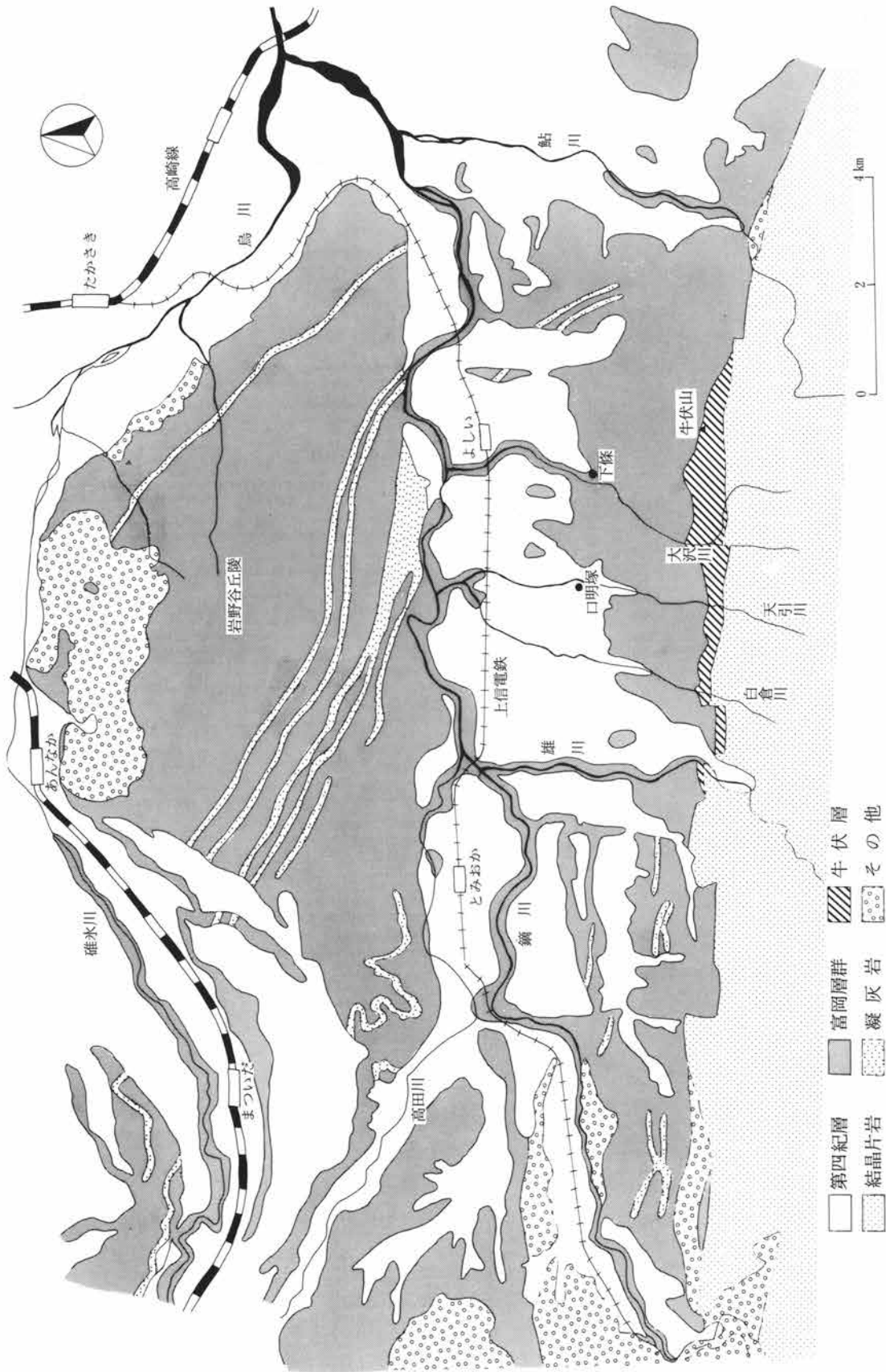
鑄川流域で最も古くさかのぼる古墳は、富岡市後箇の丘陵の鑄川寄りの縁辺部に築造された北山茶臼山古墳である。この古墳時代前期の中規模円墳は明治年間に偶然に主体部内から副葬品が発見されたことにより知られるようになったものである。現存するものとしては、舶載の三角縁神人竜虎画像鏡があり、またこの古墳のものとして推定される碧玉製石釧がある。昭和35年に作成された墳丘測量図によると、円丘部分から北側へのびる張り出し部分が認められており、小型前方後円墳とも解し得る。

茶臼山古墳の西側に隣接する地点にある北山茶臼山西古墳は、今回の一連の高速道に関わる調査の中で対象地内となったため調査が実施された。詳しくは、上越線報告書第1集に寄りたい。調査の結果全長28.0mの自然地形を利用した前方後方墳であることが明らかになった。主体部である木棺直葬の土壙からは、仿製の方格規矩鏡1、鉄矛1、鉄斧1、刀子1、鉈1、ガラス小玉2、等が出土し、それ以前に仿製獣形鏡が採集されている。北山茶臼山古墳

II 神保下條遺跡の調査



第2図 神保下條遺跡とその周辺



(文献「牛伏砂岩使用古墳の研究(2)」
『研究紀要8』1991より)

第3図 錦川流域の地質図

II 神保下條遺跡の調査

に相前後する時期の築造と考えられる。

これらより下流の吉井町長根の恩行寺裏山古墳は上位段丘の縁辺部に位置する中規模円墳であるが、さきの2古墳と同様に墳丘上から古式土師器片が採集されることから、ほぼ同時期の所産と考えられている。

これまで知られている鎭川流域の前期古墳は、いずれも比較的小規模なものであることが特徴である。今後、新たに追加されるものがあるとしても、これらの規模を大きく出るのはないと推測される。また、追加される場合、吉井町から藤岡市西部にかけての地域での発見が有力である。これらの諸特徴は鎭川流域の次のような地域的特性を物語っているものと思われる。小型古墳が適当な間隔をおいて流域一帯に認められることは、この地域が全体に弥生中期以降、安定的に展開してきた伝統的地域であったためと思われる。また、いずれの古墳も小規模である点は、狭隘な地域であるため、強大な勢力を創出する基盤に欠けていたことを物語っていると言えよう。一方、小規模古墳であるにもかかわらず充実した副葬品を有していることは、信濃、美濃地域をへて畿内への交通上の要衝を占めていたことも関係していると推定されよう。

次に中期段階の主なものについて見てみると、甘楽町福島周辺と藤岡市白石古墳群に顕著な分布が認められる。

前者は中期初頭と推定されている全長80mの天王塚古墳がまず挙げられる。前方部に比して後円部の発達したもので具体的な内容は明らかでないが、鎭川流域における定型化された前方後円墳としては最も早い段階に位置付け得ることだけは明らかである。前述した前期の諸古墳から一歩進んだ地域的統合を果たしたものと思われるが、周辺地域では、6世紀後半の大型前方後円墳である笹森稲荷古墳まで再び前方後円墳の空白期間が訪れる。

ところでこの福島の周辺には、5世紀後半を中心に特徴的な比較的大型の円墳（帆立貝式の可能性もある）の分布が認められる。天王塚古墳の西方に近

接して位置する猪塚古墳、島田氏宅所在石棺古墳と同じくその北方約1.5kmに位置する大山鬼塚古墳である。これら3基は、共通して凝灰岩製の舟形石棺を埋葬施設としている。この種の舟形石棺は、5世紀後半を中心に群馬県の西部に広く採用された特徴的なものであり、各小地域間を広域に政治的に結び付ける地域構造の成立を裏付けるものとして理解できる。

最近、鎭川に直接のぞむ右岸の吉井町片山で中期初頭に位置付けられる片山1号古墳が調査されて話題を呼んだ。墳形は不明な点もあるが、調査担当者は前方後円墳としている。円墳の可能性も残しているが、いずれにしても規模的には中規模以下の部類に属する。墳頂部に構築された長大な粘土槨からは比較的豊富な副葬品が出土した。吉井町周辺ではこれ以外に顕著な中期のものは認められていない。

藤岡市西部の白石古墳群は、鎭川と鮎川の合流点の南西側に位置する大型古墳と後期の大規模群集墳から構成される県内屈指の古墳群である。その形成の端緒を開いたのは、5世紀中葉を前後した時期に築造された白石稲荷山古墳である。南北にのびる丘陵地形をうまく利用した全長145m以上の大型前方後円墳であり、墳頂部からは多量の副葬品を伴う2基の礫槨が発見されている。この段階の県西部では最大規模の前方後円墳である。鎭川流域の最東端に位置するものであるが、当然流域の全体にも影響力を及ぼしていたことが推測される。

この古墳の北方750mにある中規模前方後円墳である宗永寺裏東古墳は凝灰岩製の舟形石棺を埋葬施設とするもので5世紀末葉を中心とした時期に位置付けられる。この地域が5世紀後半以降、舟形石棺の分布圏に入っていたことを示している。ところで、この古墳の西側に隣接する全長145mの大型前方後円墳である七興山古墳は、従来6世紀後半の築造で、横穴式石室を主体部と考えられてきた。しかし、墳丘が3段築成で、葺石を丹念に施した中堤上に形象埴輪が樹立されていたことは、その築造時期がそこまでは下らない可能性を強く残している。む



安坪古墳群

神保古墳群

多胡古墳群

多胡薬師塚

下條2号墳

下條1号墳

塩古墳群

塩古墳群

第4図 神保下條遺跡と周辺の古墳群

0 500m

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	多胡古墳群	多野郡吉井町多胡神保	古墳後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では91基をあげているが、数はさらにふえるであろう。横穴式古墳である。	下條1～3号古墳
2	神保古墳群	多野郡吉井町神保	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では63基をあげている。周辺では大規模な古墳群の一つである。横穴式古墳である。	
3	塩Ⅰ古墳群	多野郡吉井町塩	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
4	塩Ⅱ古墳群	多野郡吉井町塩	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	
5	安坪古墳群	多野郡吉井町長根	古墳時代後期の群集墳。古墳総覧では44基をあげているが、長根安坪遺跡で13基の削平された古墳を確認しており、数はさらに多かったと考えられる。全て横穴式古墳と思われる。	平成元年、南寄りの一部を発掘調査。関越道地内遺跡
6	塚原古墳群	多野郡吉井町池	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。	平成元年、蛇塚を調査
7	山ノ神古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
8	中ノ原古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
9	祝神古墳群	多野郡吉井町多比良	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では11基をあげている。	
10	本郷古墳群	多野郡吉井町本郷	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	
11	片山古墳群	多野郡吉井町片山	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
12	岩崎古墳群	多野郡吉井町岩崎	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では6基をあげている。	
13	白石古墳群	藤岡市白石	中期から後期にかけての大型前方後円墳と後期の大型群集墳からなり、終末期古墳も含む。	戦前から現在まで多くの発掘調査が実施されている。
14	山名古墳群	高崎市山名町	後期の前方後円墳と群集墳から構成されている。結晶片岩を使用した横穴式石室が構築されている。	平成元年、円墳1基を調査し、歯のある人物埴輪出土。
15	恩行寺古墳	多野郡吉井町長根	径40mの大型円墳。墳丘より古式土師器が採集される。	
16	多比良古墳	多野郡吉井町多比良	牛伏砂岩の大石を使用した截石切組横穴式石室の円墳で、墳丘を全て失っている。多胡薬師塚古墳の石室との構造的近縁性が顕著である。	
17	吉井町152号古墳 (二子塚)	多野郡吉井町池	吉井町では数少ない前方後円墳のうちの一つで、塚原古墳群に所属している。横穴式石室を内部主体とするものと思われるが、昭和48年に平夷されてしまった。全長35m。	消滅
18	片山1号古墳	多野郡吉井町片山	中期初頭の小型前方後円墳、粘土槨から豊富な副葬品が出土。	平成3年調査
19	白石稻荷山古墳	藤岡市白石	中期の大型前方後円墳で全長140m以上である。後円部墳頂の礫槨から石製模造品をはじめとする多量の副葬品が出土。墳頂部には家・短甲形埴輪が樹立されていた。	昭和8年に主体部が調査され、近年整備のための範囲確認調査が実施された。
20	皇子塚古墳	藤岡市三ツ木	後期の径30mの大型円墳。凝灰岩の切組横穴式石室で、副室構造である。調査により環頭大刀、多量の埴輪が出土した。北側に隣接して同規模の平井1号古墳がある。	昭和63年に整備のための調査が実施された。

II 神保下條遺跡の調査

番号	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要	備 考
21	七興山古墳	藤岡市上落合	後期初頭の大型前方後円墳で全長145m。三重の周濠をめぐらすとされている。中堤上に形象を含む埴輪列が確認された。主体部は竪穴系の施設が推定されるが、不明である。	平成元年から史跡整備のための範囲確認調査が実施されている。
22	喜蔵塚古墳	藤岡市白石	壁石に凝灰岩、天井石に凝灰岩と牛伏砂岩を使用した截石切組積石室を有する終末期の円墳。白石古墳群の最終段階に位置する主要古墳である。	
23	伊勢塚古墳	藤岡市上落合	壁石に結晶片岩を、奥壁と天井石に牛伏砂岩を使用した横穴式石室で、胴張りと壁面の持ち送りが特徴的である。径30mの大型円墳で、埴輪が出土している。6世紀末を中心とする。	昭和63年、整備のための範囲確認調査が実施された。
24	伊勢塚古墳	高崎市山名町	山名古墳群の中核をなす中型前方後円墳。主軸を東西とし、後円部を東側にしている。横穴式石室を内部主体とする6世紀後半のものと推定される。	
25	口明塚1・2号古墳	甘楽郡甘楽町天引	今回の調査古墳。天引川左岸に沿っては、この他に3基の古墳の存在が伝えられているが、現在は削平され、畑地化している。	
26	多胡蛇黒遺跡	多野郡吉井町多胡	先土器の尖頭器、古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡。関越道地内遺跡	平成元年から調査
27	矢田遺跡	多野郡吉井町矢田	縄文の住居跡・埋設土器、古墳前期の住居跡、古墳後期～奈良・平安時代の住居跡、中世の居館跡など。平安時代の住居跡より「八田郷」なる線刻文字のある紡錘車出土。古代矢田郷か？関越道地内遺跡	昭和61年から調査
28	多比良 ^{コッペ} 追部野遺跡	多野郡吉井町多比良	古墳時代中期・後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡。AT層下の旧石器ユニット。関越道地内遺跡	平成元年から調査
29	東沢遺跡	多野郡吉井町多比良	古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡	
30	入野遺跡	多野郡吉井町多比良	縄文前期の住居跡、古墳前期・後期の住居跡、中世の墓壇など。群馬県の土師器編年の学史的遺跡	
31	神保植松遺跡	多野郡吉井町神保	縄文の住居跡・土壇・埋設土器、弥生の住居跡・土壇、古墳の住居跡・土壇・方形周溝墓・古墳、奈良・平安時代の住居跡、中世城郭（植松城）の主郭、16世紀の竪穴状遺構など。	昭和63年から調査。関越道地内遺跡
32	神保富士塚遺跡	多野郡吉井町神保	先土器の石器・剥片・小礫、縄文の住居跡・土壇、弥生の土壇。古墳前期・後期の住居跡、奈良・平安の住居跡、江戸の小竪穴遺構。関越道地内遺跡	昭和62年から調査
33	長根羽田倉遺跡	多野郡吉井町長根	縄文落とし穴、弥生土壇、古墳前期～平安時代までの住居跡、古墳後期の祭祀遺構、平安の水田跡、道路状遺構、江戸天明3年以前の畑跡等。関越道地内遺跡	昭和61年調査
34	西場脇・長根宿遺跡	多野郡吉井町長根	古墳時代前期の住居跡、奈良時代の遺物集中地、平安時代の住居跡。	
35	折茂東遺跡	多野郡吉井町長根	弥生後期の住居跡・方形周溝墓、古墳前・中・後期と平安の住居跡。	
36	多胡碑	多野郡吉井町池	和銅4年（711）の多胡郡設置の記念碑。日本三碑の1つ。	
37	山ノ上碑及び古墳	高崎市山名町	天武9年（681）長利僧によって母のために建立された墓誌。	

1. 遺跡の立地と環境

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
38	金井沢碑	高崎市根小屋町	神亀3年(726)佐野三家一族で祖先・父母の菩提のために信仰を表明した石碑。	
39	東平井古墳群	藤岡市東平井	鮎川の右岸に位置する後期大型群集墳。横穴式石室を主体部とし、大半が壁石に結晶片岩を、天井石に牛伏砂岩を使用し、胴張りを有している。	
40	塚原古墳群	富岡市田篠	鑄川の下位段丘に位置する。20基程の円墳から成る。7世紀代の築造が考えられる。	昭和44・51・59年に一部調査
41	二日市古墳群	甘楽郡甘楽町福島	鑄川の下位段丘面上の縁辺部に位置しており、現在、20基程の円墳が残る。5世紀後半頃からの築造が考えられる。	
42	田篠古墳群	富岡市田篠	古墳後期の群集墳。現在30数基存在している。富岡市教委が5基調査し、関越道地内で3基調査した。	昭和57・61年調査
43	善慶寺古墳群	甘楽郡甘楽町善慶寺	古墳後期の群集墳。かつては50基以上が存在していたが、構造改善事業により破壊。現在は約20基残っている。	横穴式石室の開口しているものが多い。
44	布和田古墳群	富岡市田篠	原田篠古墳群と隣接しているが、約5mの段丘崖で画された一段下位の段丘上にあり、10基程の存在が認められるが、石寄場で、古墳といえないものもある。	
45	原田篠古墳群	富岡市田篠	原田篠遺跡の西に隣接しており、7基確認できる。6世紀代からの築造。	
46	芝宮古墳群	富岡市富岡	鑄川流域中最大の古墳群、100基以上の円墳から成る。すべて横穴式石室をもつ。6世紀～7世紀代の築造と考えられる。	平成2年調査
47	桐淵古墳群	富岡市高瀬	鑄川右岸に位置し、横穴式石室を主体部とする6世紀から7世紀にかけての中規模群集墳。石室の使用石材は鑄川の河床の凝灰質砂岩である。『古墳総覧』には21基が挙がる。	昭和45・46年調査
48	七日市古墳群	富岡市七日市	富岡段丘面上で、鑄川の縁辺部に位置している。26基が確認されている。御三社古墳のみ前方後円墳で他は円墳である。いずれも横穴式石室をもつ。6世紀から7世紀にかけての築造が考えられる。	
49	小塚遺跡	富岡市黒川	縄文…前期諸磯式～中期初頭五領ヶ台式の遺構。弥生…中期後半の遺構。古墳…集落跡。平安…末期の集落。中世…掘立柱建物跡等。	
50	横瀬古墳群	富岡市横瀬	鑄川北岸の高瀬段丘面の北西部に占地。27基が分布している。横穴式石室をもつ。7世紀代の築造が考えられる。	
51	下高瀬上之原遺跡	富岡市下高瀬	縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡。本報告との関係で注目されるのは、5世紀後半の小規模群集墳と6世紀の2基の埴輪窯跡の存在である。関越道地内遺跡	平成元年から調査
52	天王塚古墳	甘楽郡甘楽町福島	笹森稻荷古墳の北東400mに位置している。後円部が大きく、前方部が未発達な古い形で、竪穴系の主体部と思われる。前期末ないし中期初頭に位置づけられる。	
53	笹森稻荷古墳	甘楽郡甘楽町福島	鑄川の南のゆるい段丘上にある。甘楽地方最大の前方後円墳で全長100m、周濠をもつ。石室は両袖型横穴式石室をもつ。6世紀後半の築造。(稻荷神社が墳丘上に祀られている。)	

II 神保下條遺跡の調査

番号	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要	備 考
54	北山茶臼山古墳	富岡市南後箇	簗川の上位段丘の高さ約70mの丘陵が東西に連っている。この丘陵の最高所の頂上に位置している。径40mの円墳と推定される。調査報告の記述から粘土槨が推定される。神人竜虎画像鏡（宮内庁所蔵）が出土。4世紀後半の築造と考えられる。	明治27年、主体部から遺物が偶然に掘り出される。
55	茶臼山西古墳	富岡市南後箇	茶臼山古墳と同じ丘陵上の西約500mの山頂上に位置する。墳丘20mの小形円墳とされていたが、昭和61年の調査で前方後方墳と確認された。仿製獣形鏡が発見されていたが、今回の調査でさらに仿製の方格規矩鏡が出土した。4世紀末頃の築造と思われる。関越道地内遺跡	昭和61年調査。消滅
56	富岡5号古墳	富岡市七日市	七日市古墳群に属する。径30mの2段築成の円墳で、両袖型石室を主体部とする。埴輪列が確認されたが、基壇上を石室右側に人物埴輪が列をなしていた。6世紀後半と推定される。	昭和43年調査。消滅
57	御三社古墳	富岡市七日市	七日市古墳群唯一の前方後円墳。凝灰質砂岩を使用した両袖型石室を主体部とする。組合式石棺が玄室内にあった。金銅製三輪玉が出土している。6世紀中頃と推定される。	昭和29年調査。消滅
58	大山鬼塚古墳	甘楽郡甘楽町天引	簗川の右岸に位置する円墳で、凝灰岩製の舟形石棺を伴なうものであった。戦前に掘り出され、石製模造品、馬具を伴なうものであった。5世紀後半と推定される。	現在は石棺のみが個人宅庭にのこり、遺物は東博蔵。
59	天引狐崎遺跡	甘楽郡甘楽町天引	マウンドなしの古墳・弥生住居跡等。関越道地内遺跡	平成2年調査
60	天引向原遺跡	甘楽郡甘楽町天引	旧石器～平安の複合集落跡。関越道地内遺跡	平成2・3年調査
61	白倉下原遺跡	甘楽郡甘楽町白倉	縄文後期の柄鏡形住居・敷石住居跡・土壇、弥生の住居跡（磨製石鎌の工房跡）、古墳初頭方形周溝墓、古墳時代後期住居跡～平安時代の住居跡など。関越道地内遺跡	平成元・2年調査
62	甘楽条理遺跡	甘楽郡甘楽町新屋	古墳前期・平安（B軽石直下）・江戸（A軽石直下）の水田跡。古墳後期の滑石製模造品工房跡。	

1. 遺跡の立地と環境

しろ、中堤の構造と埴輪の樹立形態は、保渡田八幡塚古墳との時期的接近を窺わせるものである。この古墳群が舟形石棺の分布域に含まれていることから考えると、七興山古墳の主体部もそれである可能性がある。

鎭川流域における5世紀中葉から後半にかけての前方後円墳の分布は、下流域にあたる白石古墳群に稲荷山、七興山古墳の2古墳がある以外は、中上流域も含めて全く認められていない。恐らく、白石古墳群の勢力の主導の下に展開をしていった同一の政治的地域圏に属していたことが理解できよう。

一方、5世紀後半を中心とした時期、小規模古墳のあり方にも顕著な変化が現れた。関越道に関連して行われた富岡市の下高瀬上之原遺跡では、尾根上に5世紀後半から末葉にかけての円墳7基が群在して確認された。神保下條遺跡の4・5号古墳も規模、形状から同種のもので推定される。これらはいずれも、竪穴系の埋葬施設を主体部とする小型円墳であり、当地における初期群集墳として理解できるものである。この種の群集墳は、これまでに、榛名山麓や赤城山麓を中心に最近の調査で新たに多数発見されている。鎭川流域もこの動きの中にあつたことがわかるのであり、今後同様のものが流域一帯で追加されていく可能性が高い。しかし、群集墳の数、規模等は、県中央部に比べると大きく下回るものであつたと思われる。

鎭川流域で群集墳の形成が一段と活発になるのは6世紀に入って横穴式石室を採用するようになってからである。富岡市桐淵古墳群で6世紀前半にまで溯るものが確認されているが、多くは6世紀中葉以降に属するものである。これらは、鎭川流域に沿って、適当な間隔をおいて、富岡市南蛇井から藤岡市白石・上落合までの間に分布している。それらの中には富岡市芝宮古墳群、吉井町の神保古墳群、多胡古墳群、藤岡市の白石古墳群等のように100基前後あるいはそれ以上の古墳を有するものも認められる。また、富岡市の南蛇井古墳群、七日市古墳群、桐淵古墳群、田篠古墳群、塚原古墳群、甘楽町の善慶寺古

墳群、吉井町の安坪古墳群、塚原古墳群等は前述のものにつぐ大規模な群集墳であり、さらに、これらより小規模な古墳群まで含めると、流域一帯を埋めつくすように形成されていったことがわかる。

これらのうち、鎭川の河岸に沿って位置する古墳群（南蛇井、七日市、桐淵、芝宮、富岡塚原、吉井塚原古墳群等）は、鎭川の河床を構成している凝灰質砂岩層から石室用材を確保しているのに対し、鎭川に南の山地から流れ込む雄川、天引川、大沢川、鮎川の河岸に形成された古墳群（善慶寺、田篠、安坪、神保、多胡、白石古墳群等）は、それぞれの河川の河川礫である三波川結晶片岩を壁石材に、牛伏砂岩を天井石材に使用する特徴を有している。

これらの古墳群については、発掘調査が一部に及んでいるものについて見る限り、いずれも横穴式石室を主体部としており、6世紀から7世紀に及んでいるものが大半である。そのうち、6世紀に築造されたものの多くは埴輪を伴っている。

次に、この6世紀段階の前方後円墳のあり方を見とみることにしよう。この時期の特徴としては、これまで前方後円墳の認められなかった地域に広く築造されるようになる点である。

富岡市周辺では、鎭川の左岸に沿って堂山稲荷(全長50m)、太子堂塚(全長60m)、双子塚(全長50m)、行人塚古墳等がある。これらの前方後円墳の周辺には必ず大型円墳を伴う群集墳が位置しており、その対応関係がよくわかる。前方後円墳の規模は、全長50m前後であり、これを大きく出るのは認められない。

ところが、甘楽町福島にある笹森稲荷古墳は、全長約100mの規模で大型の二重周堀を伴うものと推測される。主体部は巨石使用の大型横穴式石室であり、6世紀後半の築造が推定される。この時期の鎭川流域では最大規模を誇るものであり、流域全体に影響力を及ぼしていたことは明らかである。

『上毛古墳総覧』では、神保古墳群、多胡古墳群の群中に小規模前方後円墳1基の存在がそれぞれ伝えられている。詳細は明らかでないが、それぞれ

II 神保下條遺跡の調査

の古墳群を形成した集団の小首長層の位置を占めていたものであろう。吉井町池の塚原古墳群中にある二子塚古墳（吉井町152号、全長36m）も同様の位置を占めるもので横穴式石室を主体部とする6世紀後半の築造が推定されている。

5世紀代の上野では屈指の大型前方後円墳を実現した白石古墳群を見てみると、その権力基盤を6世紀に入ってスムーズに継承したとは到底考えられない前方後円墳の様相を示している。古墳群の中で最大規模は二子山古墳（全長66m）である。6世紀後半から末葉にかけての築造が推定され、豊富な副葬品が知られている。これに加えて、横穴式石室を内部主体とする同時期のものとして堀越塚（全長30m）、萩原塚（全長42m）、江原塚（径20m）古墳等が知られている。また、これらとは別に皇子塚（径30m）、平井地区1号古墳（径30m）、伊勢塚（径30m）古墳のように、比較的大型の円墳で、石室構造や副葬品の組成から、前期の小型前方後円墳に次ぐ地位を占めていた中間的な支配者層の存在を明確に読み取ることができる。

数量的に見て、白石古墳群の主体をなすのは、直径10m前後で、横穴式石室を主体部とする150基以上に及ぶ小型円墳である。また、この鮎川流域に沿っては、近接して東平井古墳群、西平井古墳群も形成されており、これを合わせると600基以上の小型横穴式円墳が認められる。このことは、5世紀から6世紀への前方後円墳の変化が、決して地域基盤の弱体化を意味しているのではないことは明らかであろう。

鮎川流域における6世紀代のこれまでにない前方後円墳の輩出は、各小地域の経済的基盤の強化による中小首長層の成長を裏付けるものであろう。また、それぞれの小地域圏内には、複数の小規模前方後円墳（全長30～40m）や大型円墳が必ず存在している。このことは、階層秩序の整備が一段と進んでいったことを物語るものと言えよう。

群馬県の地域では、6世紀末ないし7世紀初頭の前方後円墳を最後にして、その後には一切認められなくなる。このことは、大和政権による中央集権体

制を目指した動きとして捉えられるのであり、地方に支配構造の再編制が及んだことを示していると理解されている。前方後円墳の消滅は、これに関わる首長層の領域支配そのものを否定する動きとして捉えられるところである。

6世紀代の鮎川流域には、これまで見てきたように、適当な小地域ごとに前方後円墳が認められ、流域一帯の支配構造の一端を具体的に知ることができた。前方後円墳の消滅が、6世紀から7世紀にかけての歴史動向を如実に反映したものであることは、7世紀の古墳のあり方を見るとよく理解できる。

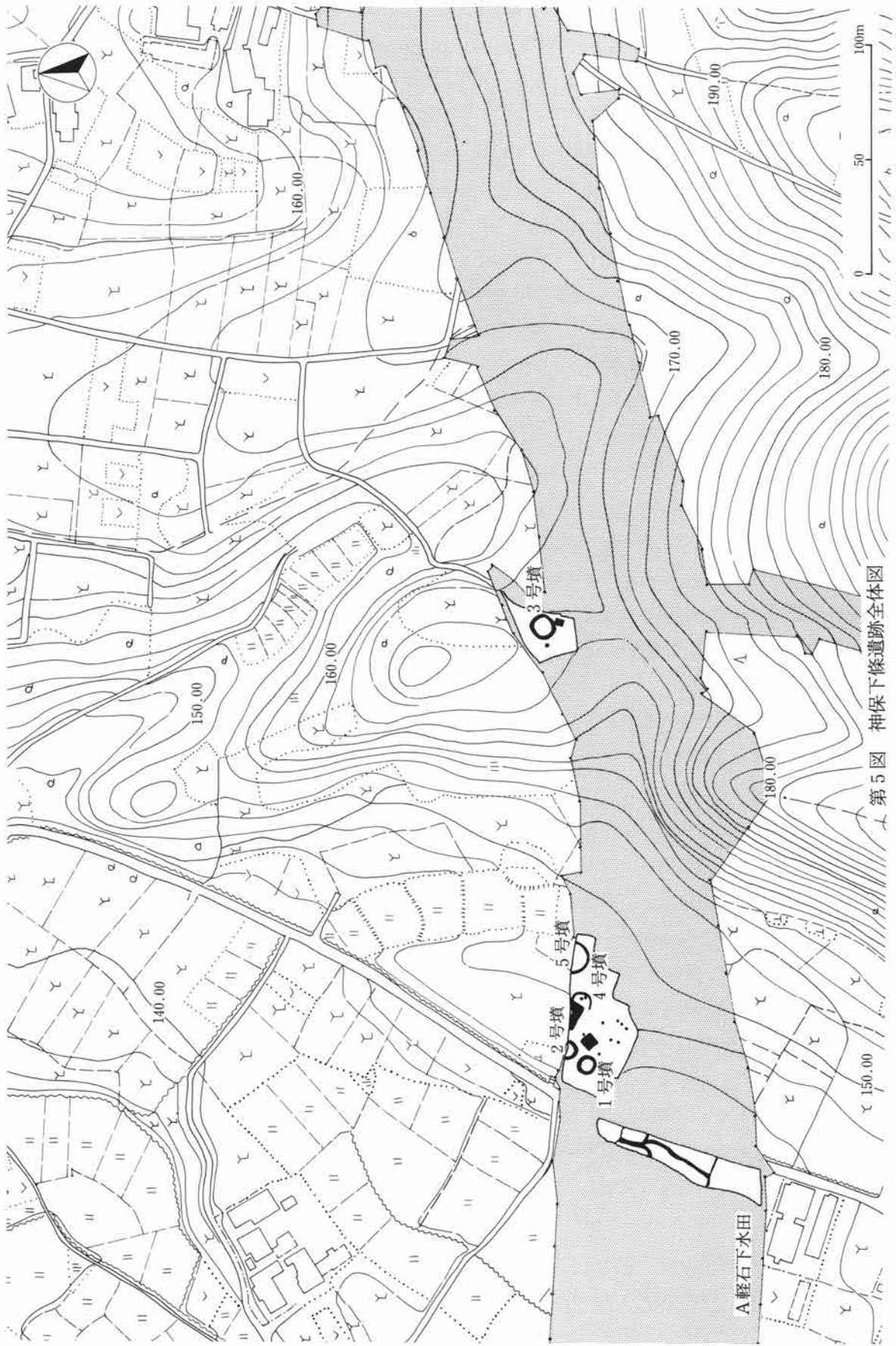
群馬県の地域で、いわゆる終末期の有力古墳として位置づけられるものは、「截石切組積石室」と呼称されている特徴的な一群の石室である。石室に使用される石材を丹念に面加工し、切組積の手法を駆使して積み上げたもので、県内で現在までのところ28基が知られている。その分布を見ると、平野部を中心に、適当な間隔をおいて点々と認められるのが注意される。地域の律令的な再編成の中で、郡司階層の地位を占めた人々の墳墓であったと推定される。

鮎川流域では、現在までのところ4基の截石切組積石室が確認されている。吉井町の多比良古墳、多胡葉師塚古墳、藤岡市の喜蔵塚古墳、境塚古墳である。多比良古墳は、吉井町多比良のやや奥まった地に独立して所在しており、多胡葉師塚古墳は、多胡古墳群の北東端にやはり、独立して認められる。

藤岡市の2基は、白石古墳群に属するものとしての位置づけもできるが、むしろ、従来の古墳の密集地帯から西へ距離をおいていることを重視すべきであろう。

7世紀に入ってから、各々の群集墳はさかんに小型古墳の築造を続けている。ただし、群の全体構造を具体的に把握できるものが少ないので、構成上の特徴を見いだすことは困難である。有力古墳のあり方に大きな変化が存在したわけであるから、当然群集墳にもその波が押し寄せてきたことは推測されよう。この点は、今後の検討課題の一つとなろう。

1. 遺跡の立地と環境



第5図 神保下條遺跡全体図

II 神保下條遺跡の調査

以上、鑄川流域の古墳時代の展開を概観してきたわけであるが、今回報告するような調査資料が集積されていく中で、より具体的な展開過程の復元と地域性の把握が可能になるものと考えられる。

なお、紙幅の都合で、個々の古墳資料を例示できなかったが、巻末の参考文献を参照いただきたい。

(3) 神保下條遺跡の概要

調査地は大きく3地点に分けられる。

調査地点の中では最も西寄りの、大沢川右岸の沖積地からは、浅間山噴出のA軽石に直接埋まった江戸後半期の水田・畠跡が確認されている。当時は、この沖積地一帯に水田が営まれていたのと推測される。台地面に接するこの根元部分がわずかに残されて、他の部分は水田の復旧がはかられたものと考えられる。

この沖積地に接する東側は2m前後の段をなしており、ローム台地となっている。この部分は東へ向けて緩やかなのぼり傾斜の面が100mあまり続き、そこから急激な斜面をなしてもう一段上の台地面となっている。

下側の段上が第2の調査地点である。西側の沖積地寄りに1・2号古墳が位置している。両墳とも横穴式石室を内部主体とし、充実した内容の埴輪を樹立する小型円墳である。古墳の特徴から、6世紀中葉から後半にかけて1号古墳から2号古墳へと順次築造されたものと推定された。この地より北から北東にかけて90基以上の小型円墳から構成される多胡古墳群が位置している。当古墳群に属する諸古墳は、いずれも横穴式石室を内部主体とするもので、埴輪を伴うものも多い。これらが6世紀から7世紀にかけて形成されたものであることを物語っている。下條1・2号古墳は、その形成過程の中では、比較的早い段階に築造されたものであることがわかる。

古墳群が形成される以前のこの地は、適当な空白期間を置きながら、いくつかの異なる利用形態を示すものであった。

5世紀後半には、初現期の群集墳の墓域の一角を占めるものであり、4・5号古墳の竪穴系の埋葬施

設が推定される小型円墳がつくられた。

また、古墳時代の前期後半にあたる4世紀後半には、集落域として利用され、1～3号住居跡が営まれた。このうち1号住居跡から出土した小型仿製鏡をはじめとする、鉄製品・玉類は有力古墳の副葬品に匹敵するものであり、周辺一帯の同時期の集団のなかでも優勢な地位を占めるものであったことが推測される。平安期以前の中で明らかに集落域として機能したのはこの時期のみであった。

これ以前には長い空白期間において、弥生中期中半段階の土壌群が認められる。形態的特徴等から貯蔵穴群と推定されるので、近くにこの時期の集落域が存在しているものと推定される。

その他、中近世の諸遺構が散在するが、積極的な土地利用がはかられた地とは言い難い状況である。

上記の諸遺構が発見された地点の東側の一段上がったところに、わずかな遺構が確認された第3の調査地点がある。ここで発見された遺構の主なものとしては、3号古墳がある。横穴式石室を内部主体とする7世紀後半が推定される小型円墳である。これもまた、多胡古墳群の南端を占めるものであり、古墳群形成の最終段階に築造されたものである。

古墳に近接して3軒の竪穴住居跡と推定されるもの(4～6号住居跡)が確認された。それらのうち6号は明瞭なカマドを伴うものであり、出土土器から8世紀後半の築造が推定された。この地が集団の墓域であったという意識が薄れ、集落域の一部に取り込まれていったことがわかる。

この地点の東約400mの付近を中心に広がりを持つ多胡蛇黒遺跡は、本調査と併行して調査が進められた遺跡であり、古墳時代後期から平安期にかけての中規模集落跡である。この集落跡の広がり西端を占めるものとして6号住居跡を理解することも可能である。

これら3つの調査地点からは、量的にはわずかであるが、縄文前期(黒浜式期)から後期にかけての土器片が採集されている。具体的な遺構を伴うものではないが、付近に当該期の遺構が存在する可能性

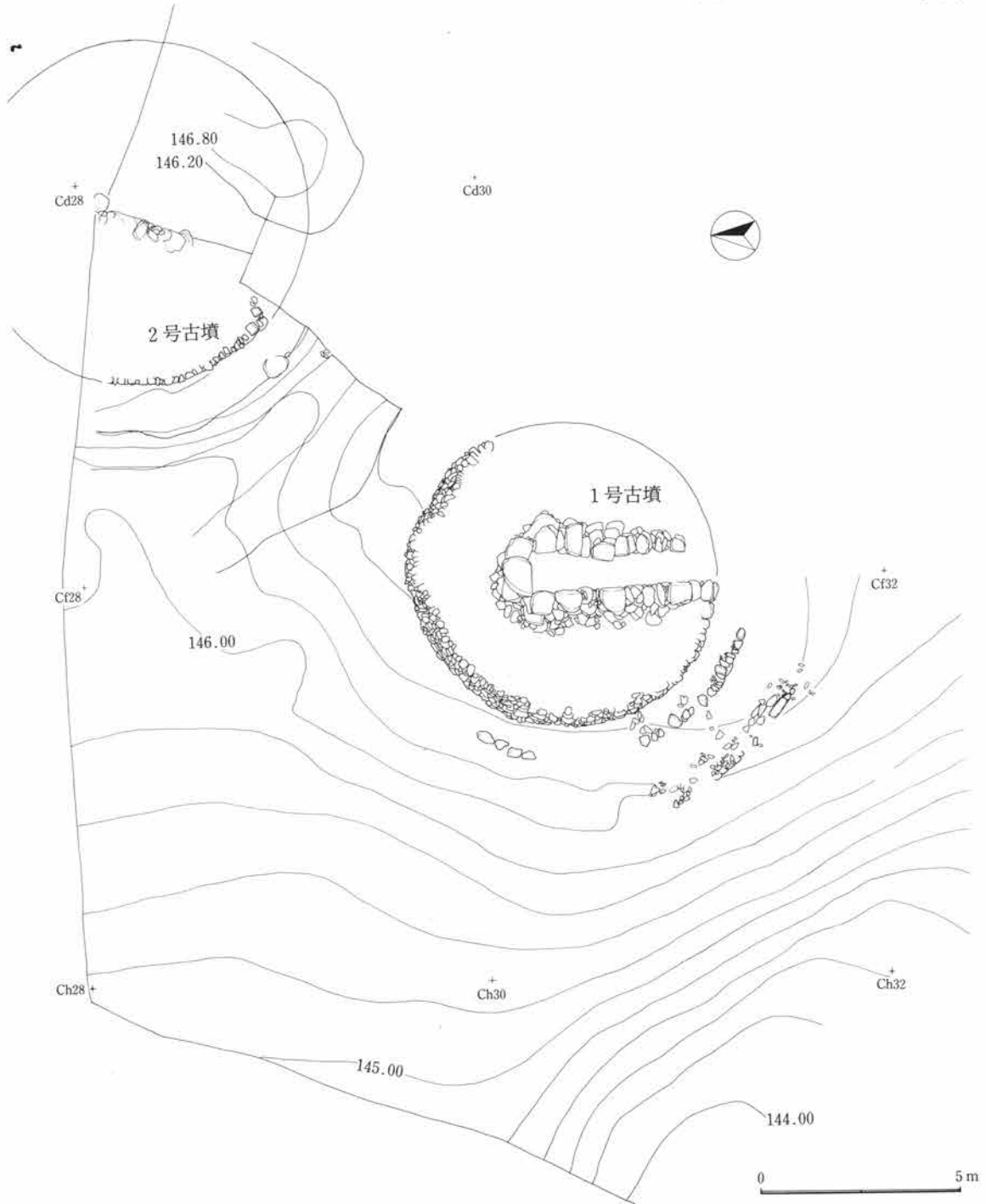
2. 1号古墳の調査

がある。その場合、遺物の量から考えて、遺構の密度はあまり濃くないことは明らかである。

2. 1号古墳の調査

多胡古墳群中の最南西端に位置している。北側には、重なりあうかのような至近距離に2号古墳が隣接している。

古墳の位置する地は、2号古墳も含めて、調査直前まで、地元の2軒の家の墓地として使用されていた。その使用状態は、古墳の墳丘の高まりをそのまま墓の背景とし、その西側一帯を墓所にしていた。墳丘は全体が竹林になっており、しかも、それが長年月にわたっていたため、その根が厚く、固くおおっていた。このことは、調査をしていく上では、我々



第6図 1号・2号古墳全体図

II 神保下條遺跡の調査

を非常に手こずらせたが、一方では、この竹の根が、遺構・遺物を良好に保存させる役割も果たしたようである。

古墳の東側は、畑地として利用されていたため、墳丘の裾部を中心に削平されていた。

墳丘本体の上半分も削平されており、これに伴い石室の天井石はすべて消失していた。

(1) 墳丘および外部施設

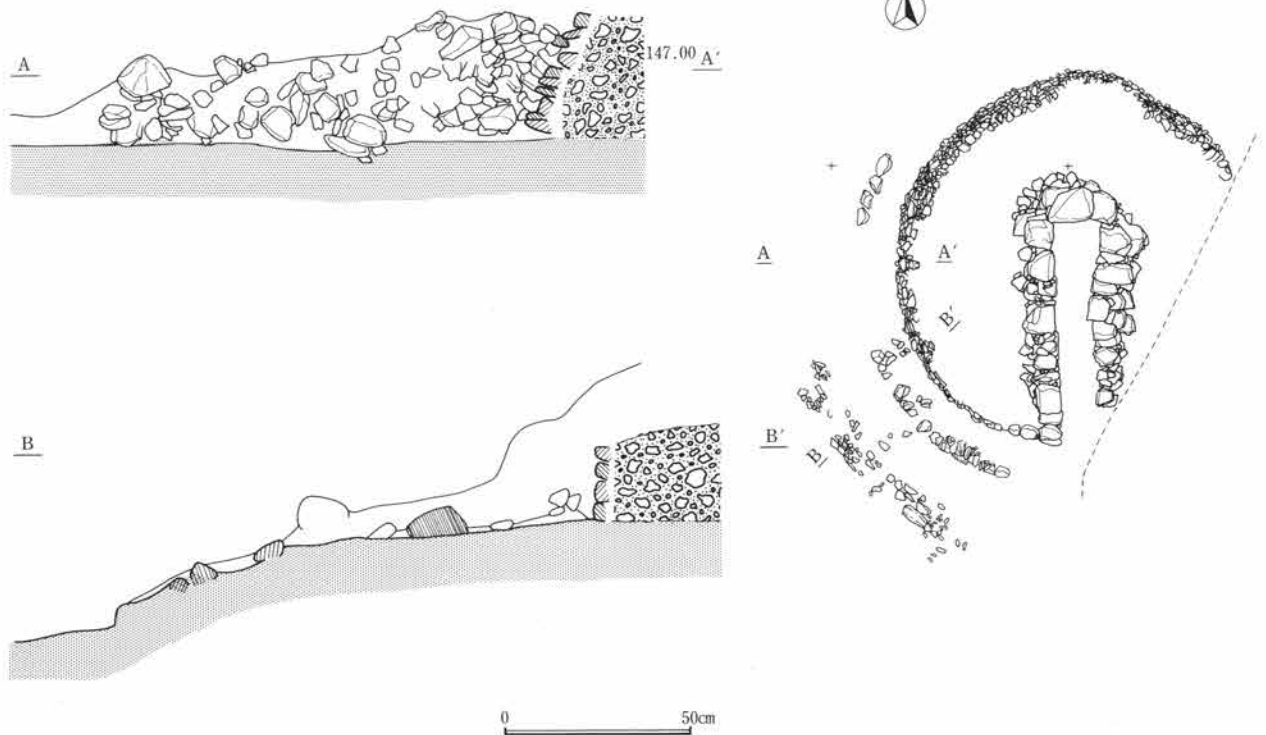
古墳が位置する地の微地形を見ると、東から西へとゆるやかに傾斜する斜面となっている。墳丘基盤は、当時の地表面である黒色土をそのまま利用し、西側を削り出して整形しているものと推定された。ただし、この西側部分は、前述したように後世の墓地と重複していることから、その際の整形の可能性も考えなければならない。

墳丘 本墳の墳丘の構造上の最大の特徴は、盛土に当たる土がまったく認められず、全て石によるものであったことである。それゆえ、墳丘裾部を埋めていた覆土（墳丘の崩落したものを主としている）は、第8図からもわかるように、土よりもむしろ多量の石を主体とするものであった。古墳築造時の周

辺の地表は、ローム層上の黒色土であり、盛土の材料に欠けるというわけではない。使用されている石は、すべて川原石であり、人頭大ほどのものを中心とし、それより大なるもの、小なるものも含んでいる。これらの石の採取できる場所を求めるとすれば、古墳の東約350mの大沢川を除いては考えられない。

古墳の周囲に豊富に土があるのに、わざわざ離れたところから石を運んできて墳丘を築造していることになる。このことをもってすぐに本墳を「積石塚」と理解することは早計であろう。このことについては、後述するが、石室の構築法と密接に結びついた構造と考えられるのであり、長野県等で認められる、いわゆる積石塚墳と称されるものの構造（石を雑然と積み上げて墳丘を築成する）とは、大きく異なるものである。

墳丘の築成法は、石室の裏込めを施し、その背後に順次石を寄せかけて同心円状に規模を拡大していくものである。無造作に石を寄せかけていったのでは、すぐに崩落を招いてしまうことから、これを避ける注意が積み方に払われていることがわかる。適当に石を寄せかけるとその上にこれらを押えるため



第7図 1号古墳墳丘断面図

にひとかかえもあるような大ぶりの石を寄せてしっ
かりさせている。これを何度も繰り返して、墳丘の
裾までいたっているわけである。

葺石 墳丘の表面には、全面にわたって葺石が施
されていた。葺石の遺存状態を見ると、もっともよ
い部分で1m前後の高さまでである。その面は遺存
する部分についてみる限り、若干内傾するものの、
最も傾きのある部分で30度であり、全体に急角度で
ある。使用される石材は、すべて川原石であり、そ
の大きさは、小兒頭大を中心として、大小区々であ
る。

石の積み方は、目地の通りをあまり意識しない雑
然としたものであるが、石室入口から左側に2m前
後の間隔をおいて縦に目地が通っている部分が認め
られる。恐らくこれが、積み上げる際の単位になっ
ているものと推測される。

根石に使用されているものは、比較的大ぶりのも
のであったが、特に選ばれた統一的なものというわ
けではない。

根石部分での墳丘規模は、直径7.40mで、高さは1.
65mまで遺存していた。削平された分を勘案すると、
高さ2.5m前後であったと推測される。

列石およびテラス面 葺石の根石から約0.8mを
あけた外側に、これと平行して列石が据えられてい
た。確認されたのは、南西側で約4m、西側で約1.6
mの長さにわたってであり、それ以外の部分では認め
られなかった。この空白部分には、もともと列石
が設置されていなかった可能性が強い。後述するよ
うに、円筒列が裾部から約1.1m外側の位置を全周し
ており、列石との位置関係は、列石の外側に接する
ように円筒埴輪が設置されていた。もし、列石の空
白部分が、後世の流失によるものとするならば、そ
れとともに円筒埴輪も流失してもよさそうである。
しかし、実際は、列石の空白部分に対応する位置で
も、円筒列はすべて遺存していた。

葺石根石から列石・円筒埴輪の位置までの約0.7m
は、平坦面であり、墳丘周囲のテラス面をなしてい
たものと推測される。

造り出し状施設 墳丘の南西側に川原石により区
画された造り出し状の施設があり、注目された。奥
行1.9m、左右の幅5.5mの台形に近い区画であり、そ
の前端は、川原石をゆるやかな角度の葺石状に配し
ていた。この前端のラインは、ほぼ直線をなしてい
る。

この前端の区画に対応して、墳丘側には前述の列
石がある。両者の位置的關係は、完全に対応するも
のであることから、列石の配置意図が、この造り出
し状施設を区画する点にあったことがわかる。とす
れば、列石の空白部分がもともとの状態であった推
測も十分に説明がつくことになる。ただし、西側に
ポツンと認められた4石からなる列石の積極的な意
義については、これでも依然として未解決のまま
である。

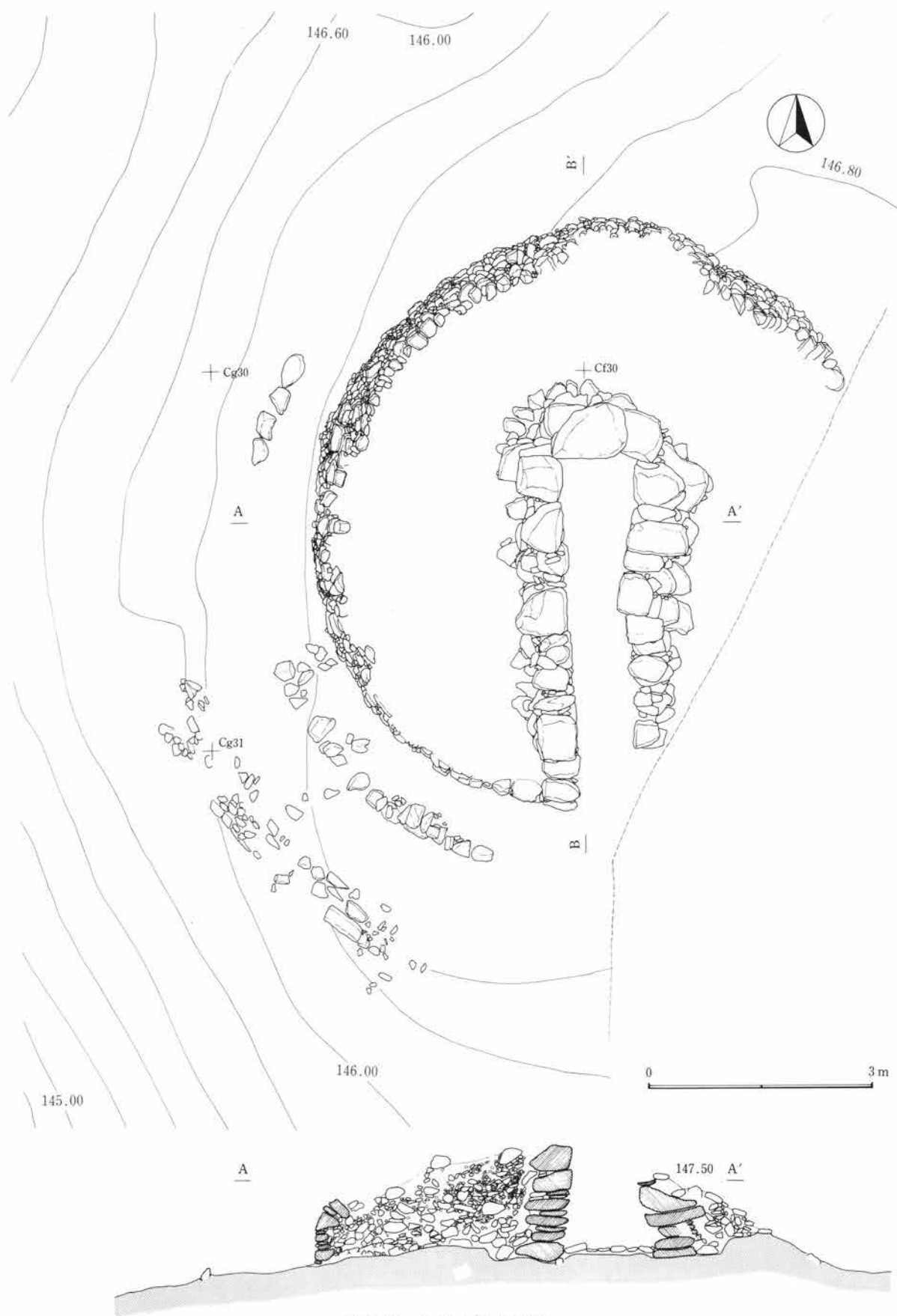
埴輪列との関係で、具体的に後に触れることとす
るが、この造り出し状の区画が、人物・馬形埴輪を
設置するための特別の空間としてつくられたもので
あることが、埴輪の位置的關係から推測される。

周堀 2号古墳と境する北側を除くと、後世の削
平が及んでいる可能性も考えなければならないが、
明瞭な周堀、あるいはその痕跡は全く認められな
かった。埴輪列及び造り出し状施設の外側を若干削
り出すことによって外界との区画をするのみで、周
堀は掘削しなかったものと考えられる。

明瞭な周堀を施設しなかった可能性を示唆する点
がもう一つある。それは、本墳の場合、墳丘の大半
が石で構成されていたことである。一般的に、周堀
の掘削による土は、墳丘の盛土として供される。む
しろ、盛土の用材を得るために周堀を掘削している
とも言える。とすれば、本墳のように、土をほとん
ど使用していない場合には、当然周堀を穿つ必然性
もなくなってくることになる。墳丘を区画するた
めに若干周囲を削り出しただけで事足りたのであ
ろう。

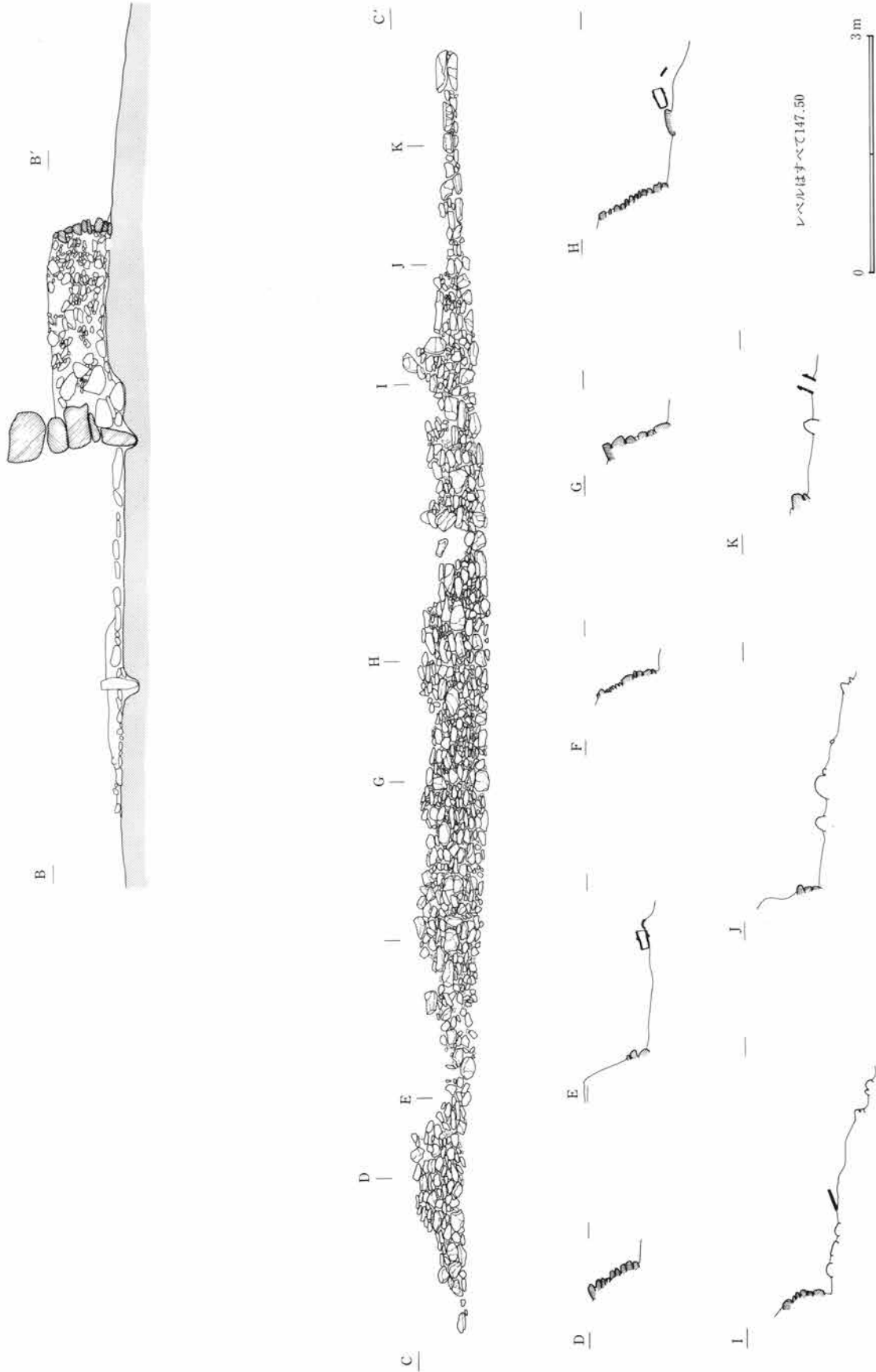
円筒列の位置を基準にすると、本墳の直径は、約
9.6mであり、造り出し状施設を加えると、全長約
10.2mの規模となる。

II 神保下條遺跡の調査



第8図 1号古墳全体図

2. 1号古墳の調査



第9図 1号古墳葺石面展開図及び断面図

II 神保下條遺跡の調査

(2) 埴輪列

本墳からは比較的多くの埴輪が出土した。埴輪の種類としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪、人物埴輪、馬形埴輪、家形埴輪があり、靱形埴輪の可能性の強いものも認められる。

ほぼ原位置で確認されたのは、円筒埴輪と人物、馬形埴輪である。

円筒埴輪は墳丘のテラス面の縁辺部に沿って列状に確認された。葦石根石ラインから外側へ約1.1mの位置である。確認されたのは墳丘の西側を中心に全体の5分の3ほどであり、墳丘の削平範囲に対応していることから、当初は全周していたことが明らかである。確認された部分について見ると、造り出し状施設の部分は、人物、馬のみで、円筒は認められない。この部分には本来的に円筒が設置されなかったものと考えられる。

列の位置は、葦石根石から0.8m前後外側であり、テラス面の縁辺部を画している。原位置で確認されたものは、21個体であり、埴輪相互の間隔は65cm前後である。このことから、墳丘周囲には、40個体前後の円筒が設置されていたことになる。これら21個体のうち、2個体を除くと全て外側に向けて、その場で倒れた状態で出土した。埴輪の設置に際して、顕著な掘り方を設けなかったためと思われる。このことと関係して大半の埴輪の中に、拳大前後の円礫を3ないし5個充填して、設置時の安定をはかっている。円筒埴輪は全て3段構成で、その中段に1対の透孔がある。樹立時の透孔の位置を調べたところ、いずれの場合も、墳丘外側から見て両側に透孔がくするように設置されていたことがわかった。

墳丘の周囲に樹立されているもの以外に、墳頂部にも円筒埴輪が樹立されていたことが推測される。墳丘周囲の埴輪列と葦石との間から多量の埴輪片が出土することや、確認された個体数を大きく上回る個体数が存在しているからである。

次に造り出し状施設における出土状態をみることにする。前述したように、この施設を挟むように墳丘周囲で確認された円筒列は、この部分には連なら

ない。そのかわり、この列の線上で、人物埴輪と馬形埴輪各1個体が、やはり、墳丘外側に倒れた状態で出土した。

人物1は、女性上半身像で、施設のほぼ中央で確認された。その出土状態から、当初は正面を墳丘外側に向けるものであったことがわかる。

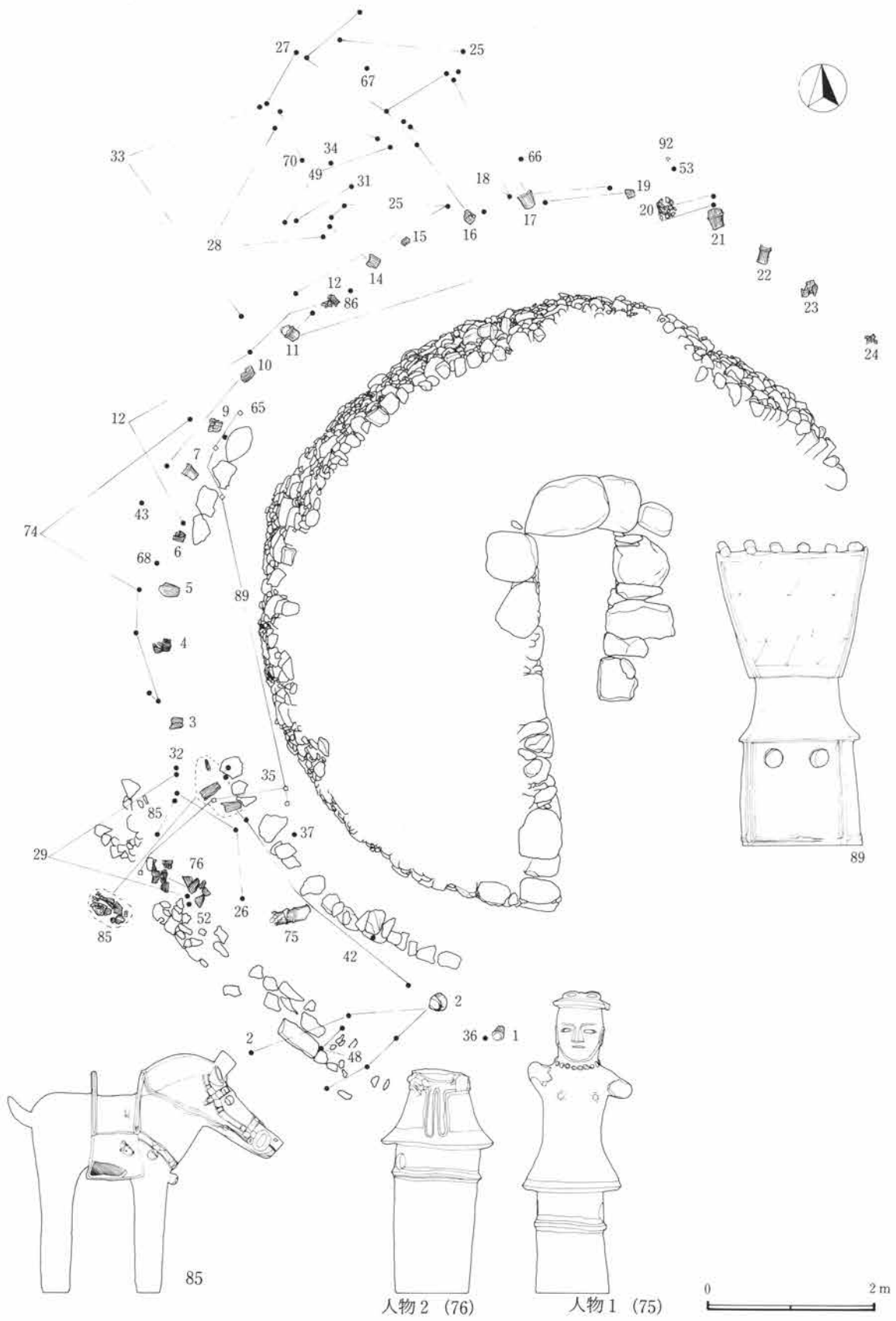
馬形埴輪は、2本の足と尻尾が原位置で出土した。出土状態から、その側面を墳丘外側に向け、頭を東南(石室入り口側)に、尻を北西に向けるものであったことがわかる。これに接合する頭部から胴体にかけては、下方に転落した状態で出土した。

一方、人物1と馬の間で、やや下方に転落した状態でもう1個体の人物埴輪(人物2)が出土した。これは、腰から下のみであるが、まとまりがあることから、当初の位置もこれに近いことが推測される。馬の東側に隣接するものであった可能性が強い。腰に鎌と推定されるものを差していることから男性の農夫的なものが推定され、位置関係から馬子が推定される。

これら3個体以外に、造り出し状施設の周辺から人物、馬の破片が出土している。人物の顎から口にかけての破片から、別に最低2個体が存在したことがわかる。また、馬の口の部分の破片から、もう1個体分があったことがわかる。

人物、馬形埴輪の出土位置が、造り出し状施設とそのごく周辺に限られ、それ以外の部分からは出土していないことから、この施設が人物、馬形埴輪を設置するための特別の区画であった可能性がきわめて強い。

家形埴輪は、調査後の接合作業により1個体分になることが明らかになったものである。その破片の出土位置を見ると、人物・馬形埴輪のように、1ヶ所にまとまっているものでなく、墳丘周囲全体に散乱した状態であった。その中で特に注意されるのは、墳丘周囲の円筒列と葦石との間を埋める覆土中から出土したものが比較的多いことである。これらのことは、家形埴輪が、当初、墳頂部に設置されており、墳丘の上半部の崩壊とともに、周囲に四散したこと



第10図 1号古墳埴輪出土状態及び接合関係

II 神保下條遺跡の調査

を示している。

この他に、靱、盾、家等が推定される破片が認められるが、やはり、造り出し状施設の部分からの出土ではないので、墳頂部に置かれていたものであることが推定される。

2号古墳にくらべて、形象埴輪の遺存状態が悪いのは、造り出し状施設を中心とする縁辺部に置かれていたことが、大きく影響しているものと思われる。

(3) 主体部

本墳の主体部は、ほぼ南に開口する小型の横穴式袖無型石室である。調査前に既に盗掘を受けていたことが推定され、天井石は全て失われていた。壁体は奥壁から左壁にかけては、推定される天井面に近い高さまで残っていたが、右壁は、入口から見て手前寄り3分の1は大半を失い、奥寄り天井面寄り5分の1を失っていた。

このような状況から、副葬品等の出土はほとんど期待できなかった。主体部の調査では、石室の構造的特徴、具体的な構築過程の復元に特に注意を払って進めた。

閉塞施設 石室入口から、奥行1.8mの範囲に、小ぶりの礫を厚く充填している部分が認められた。これより奥寄りの玄室部からも礫が確認されたが、こちらは、土と入り混じっており、石の中には大ぶりのものもあることから、後世の崩落として区別できる。

最終埋葬時の閉塞施設がほぼ遺存していたと考えられる。現状では、前後の方向で断面山形をなしている。一石ずつを丁寧に積み上げたものではなく、適当

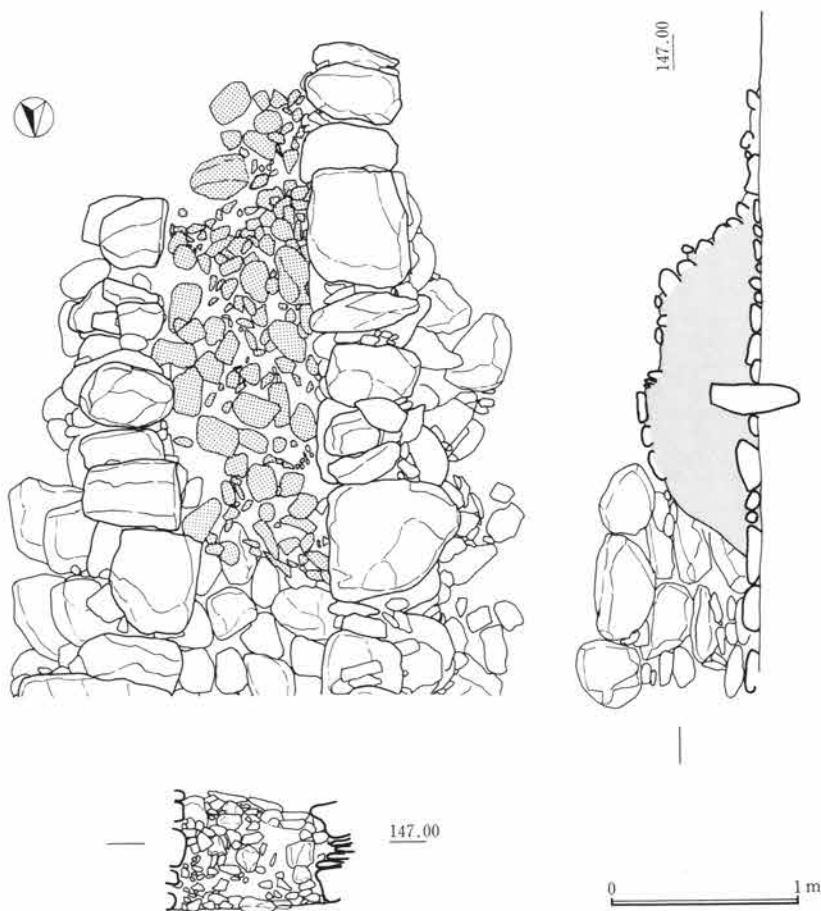
なまとまりごとに雑然と放り込んだような状態である。

一般的な例からするならば、閉塞の範囲は、羨道中途に敷設される柵石まで、柵石がない場合でも、これに近い位置までであるが、本墳では、柵石を越えて、より玄室に近い位置まで及んでいた。

石室 全長4.73m、入口幅0.65m、奥幅1.25mの規模である。天井石を全て失っているが、壁体部分は、ほぼ当初に近い高さまで残存していた。

使用されている石材は、大沢川から採取されたものと推定される結晶片岩と牛伏砂岩の転石であり、中、小ぶりのものを主体としている。

石室入口から奥へ1.76mの位置に柵石が埋設されている。石室の幅は、入口から柵石までは同じであり、柵石から奥壁までは漸次広がっている。その場合、左右均等に開いており、石室全体の平面形状は、柵石のところでくびれる羽子板形を呈している。た



第11図 1号古墳石室閉塞状態

だし、両袖型石室のように明瞭な屈曲部を有するものではない。このことから栴石の位置が、石室空間を大きく二つに区分する境界点の役割を果たしていることがわかる。その区分は、羨道と玄室を分けるものであったと考えられよう。

奥壁から左壁にかけての上端部は、直線をなしており、また、その背後の部分に天井石を置いて外側から密閉する際に使用したと思われる白色粘土が認められることから、現状の上端部に近い位置で天井石を受けていたものと思われる。その高さは、入口寄りで120cm、奥壁寄りで140cmを測る。天井面が奥へ向かうにつれて漸次高くなっていたことが推定される。その場合、特定の部分で明確な段をなすものでなかったことは、十分に想像できる。

石室入口部は、左側のみ残っていた。壁石の最先端のラインは、奥寄りに約50度の傾きをもつ。これは、天井石の最先端の位置が、基底部のそれより内側にくることに対応させたためであり、同時に墳丘葺石の傾きにもほぼ合致してくると推定される。

石室の幅は、奥壁寄りでは、基底部と天井部で約45cmの差があり、10度前後内傾している。

次に壁面の構成を見てみると、全体的には比較的小ぶりの石を幾段にも積み上げているのが特徴的である。その中でも、羨道よりも玄室側壁の方が大ぶりの石を使用しており、さらに奥壁でより大きい石を使用している。上下の方向では、石の大きさに明確な規則性は認められない。強いていうならば、石室入口から玄室中途にかけては基底部寄りに小ぶりのものを配し、これより上寄りにより大ぶりの石をのせている。下部の石に、壁体を安定して支持するための「ぐり石」的な役割を意図したものと考えられる。一方、玄室奥寄りから奥壁にかけては、上下でほぼ同程度の大きさの大ぶりの石を積み上げている。両側壁をくらべて見ると、この傾向はほぼ同一であり、壁面構成を左右対称にする意図があったことを読み取ることができる。

石の目地は、縦・横にはほぼ通る通目積の傾向である。特に横の目地は羨道から玄室にかけてよく通っ

ている。このことは、石室構築過程と密接に関係するものと思われるが、石室の解体調査の結果と合わせて後に詳述することにした。

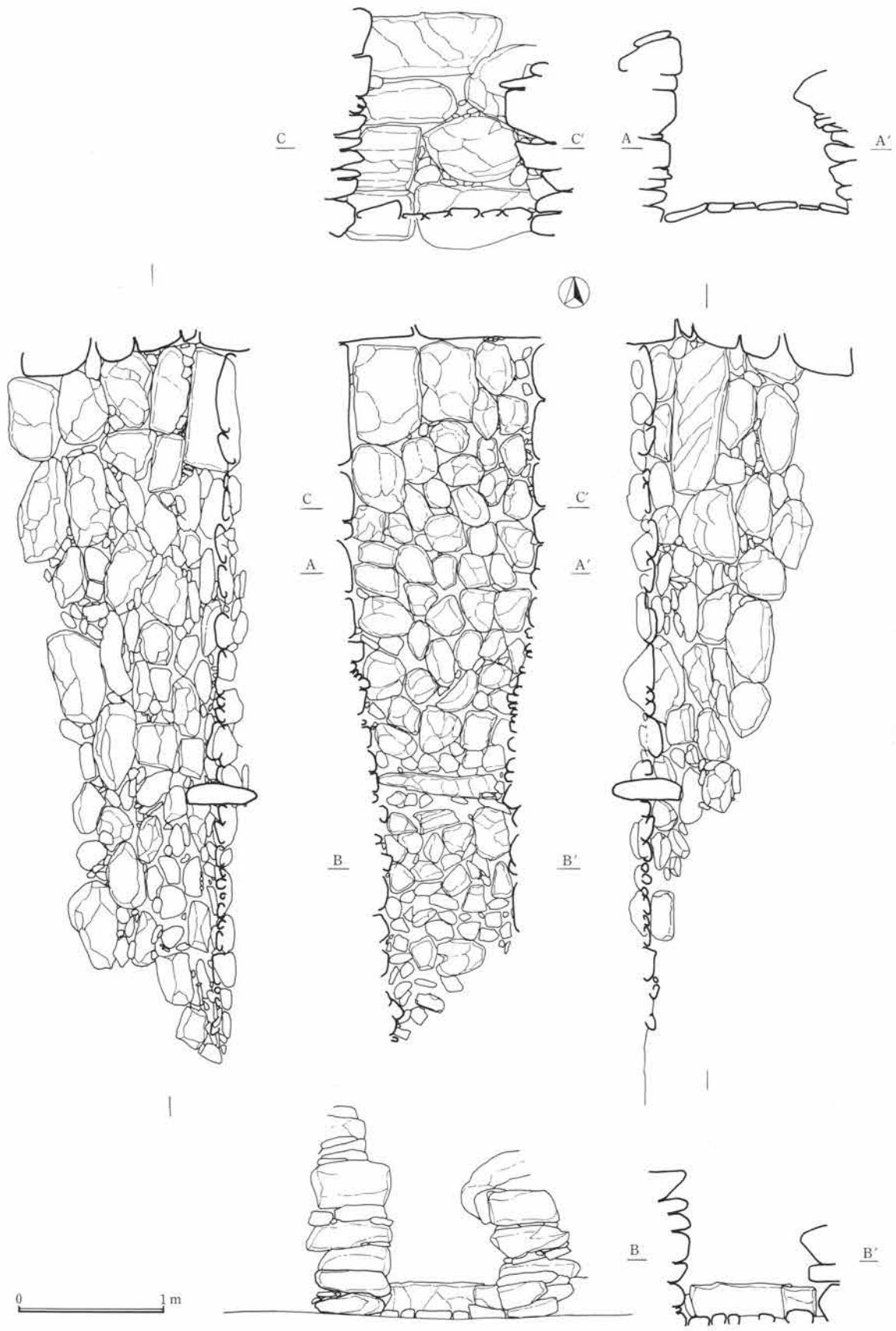
石の積み方は、石室内に小口あるいは横の面がくる平積みであり、石材の最大面は、必ず上下にきている。縦に目地が通っていることから、重箱積とも言える。そのため、上下の方向の力に対しては強いが、背後からの力にはもろい。壁面の一部に極端な内傾が認められる。それは、天井石除去後の迫り出しの結果と思われる。

石室床面は、石室掘り方面から20cmの高さに位置している。その構造は、掘り方の底面上に結晶片岩と牛伏砂岩の板状の転石を敷き、さらにその上に砂礫を敷いたものである。調査上の指示の不徹底から、この砂礫面の具体的データを取らずに敷石面の上まで除去してしまったため、詳細は不明である。栴石の周辺で確認できたところでは、砂礫の厚さは5cm以下であった。第12図の石室実測図に図示したものは砂礫面を完全に除去してしまった状態であり、石室使用最終時には、これより若干高かったものと思われる。

敷石面は、当地域で「哺石」と呼称されてきているもので、石室内の床面下の基礎構造として、偏平な小ぶりの石を敷きつめるのが、一般的に認められる。本石室では、敷きつめられる石は、壁石使用石材の場合に呼応するように、入口寄りから徐々に大きくなり、奥壁寄りに最大のもが使用されている。この敷石を設置するのは、壁体構築後であり、壁石の基底部に挟み込まれるように置かれており、壁石の下には及んでいかない。

羨道と玄室の境界点に設置されたものと推定される栴石は、板状の牛伏砂岩2石から構成されている。石は石室の幅いっぱいになり、大半をカバーしている1石と右端に生じた隙間に補充している1石であり、いずれも、掘り方底面に溝状にさらに一段掘り下げ、立て掛けるように埋め込んで設置している。石室使用時には、床面から上に20cm前後突出していたものと推定される。

II 神保下條遺跡の調査



石室入口前より

第12図 1号古墳石室及び遺物出土状態

2. 1号古墳の調査

石室各部の計測値を示せば、第3表の通りである。

遺物の出土状態 調査前に既に天井石を消失し、石室内も攪乱を受けていた。副葬品も大半は持ち去られたものと思われ、鉄鏃をはじめとする鉄製品がわずかに出土したのみである。

出土位置を確認できたものは、玄室奥部の両側壁寄りからの出土である。壁際の一部を除いて後世の攪乱が床面にまで及んでいたことがわかる。出土した遺物も散乱状態であり、原位置をとどめていない可能性がある。出土した遺物は、鉄鏃・直刀・刀子

であり、いずれも破片である。

石室を埋めていた覆土のうち、床面近くのをふるいにかけてところ、少量の鉄鏃片・刀子片・弓飾具・ビーズ玉が得られた。

得られた資料から、当初の副葬品について多くを語ることはできないが、その内容はもともと充実したものでなかった可能性が強い。

(4) 古墳構築過程解明のための調査

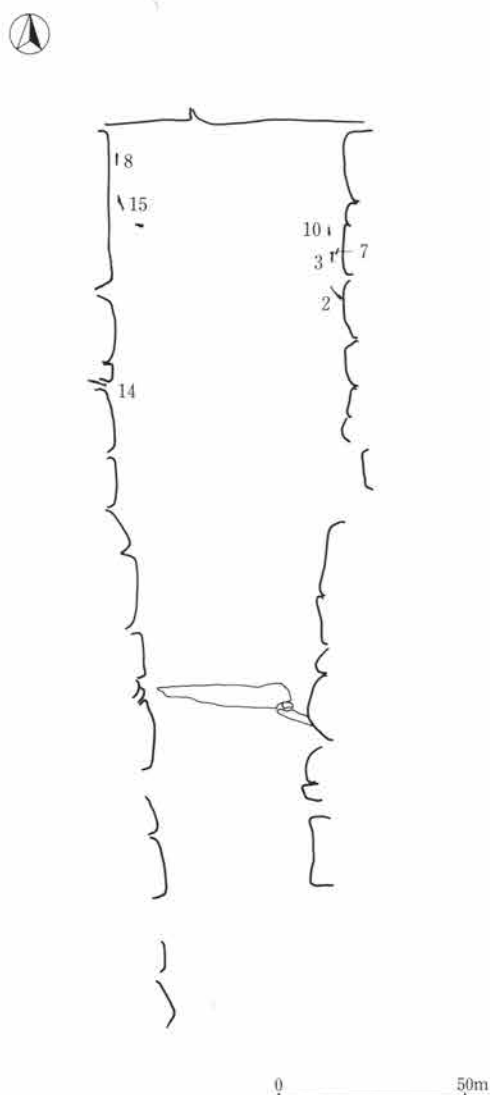
調査の方法と概要

1985年に行った富岡市田篠古墳群の2基の横穴式石室を主体部とする小円墳の調査に対して、一般的な横穴式古墳の調査項目に加えて、次のような調査を行った。

すなわち、通常の調査終了後、遺存していた墳丘・石室を古墳の完成時の姿と仮定し、バウムクーヘンを1枚ずつはがすように、構築過程を可逆的にたどる解体調査を進めていった。その結果、横穴式古墳の構築では、石室と墳丘の築成が相互に補完的な関係をもって平行して進められていることを明確に理解することができた。また、分割された各工程において、さまざまな特徴的な手法・構造を確認することができた。古墳が土木的あるいは建築的構造物の一種として扱われる以上、個々の古墳の構造的特徴を抽出するためには、従来の完成時の墳丘・石室について、外側から視覚に触れる要素のデータのみを対象にして議論を進めてきた方法が不十分であったことは明らかであろう。古墳の構造論が具体的な構築過程の復元に立脚して展開されない限りは、机上の空論のそりしはまぬがれない。石室を構成する各要素の構造上の特徴も、構築過程との相関におい

第3表 1号古墳石室規模一覧表

墳丘(m)	径	7.75
	高さ	(1.38)
石室(m)	全長	左右 473 (410)
	玄室長	左右 297 300
	玄室幅	前中奥 87 121 125
	玄室高	奥 (140)
	羨道長	左右 176 110
	羨道幅	前奥 65 87
	羨道高	前 (120)
	開口方向	S-1.5°-E



II 神保下條遺跡の調査

て検討される必要がある。

このようにして個々の古墳から採取されたデータをもとにして、各地域の横穴式石室の変遷過程を再構成していく必要があるものと思われる。

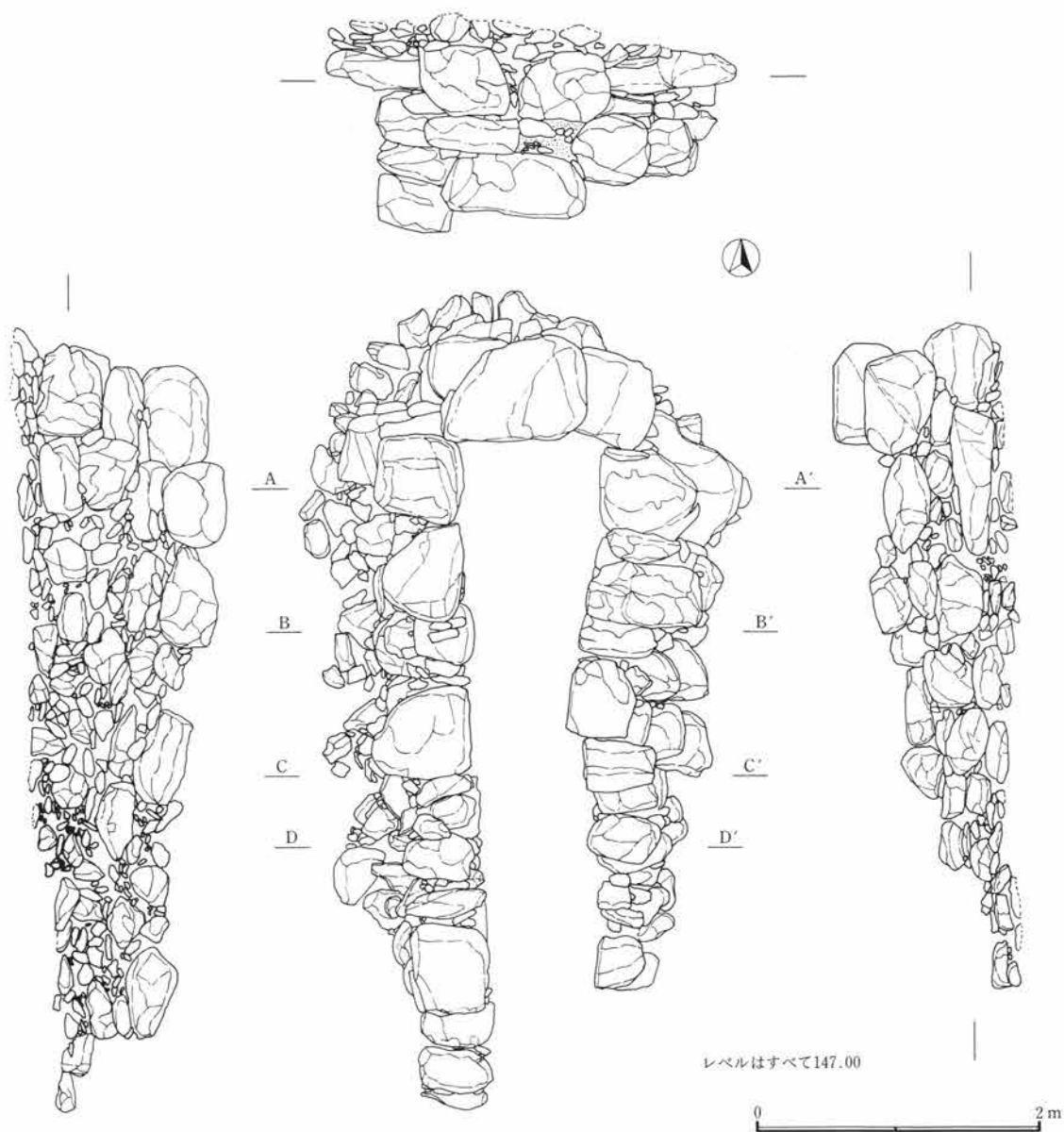
このような分析作業を経た上で、他地域との比較検討、すなわち系統論に、具体性をもって入っていくことが可能になるものと言えよう。

以上のような視点から、比較的墳丘・石室の遺存状態がよかった1号古墳について、構築過程解明のための解体調査を試みた。

ところで、このような調査法がとれるのは、古墳

が調査終了後に完全に消滅してしまうという記録保存を前提にした行政的発掘調査であるという背景がある。古墳が数量的に見てきわめて有限な考古資料であることは明らかである。それでもなお、調査終了後に消滅していく古墳の数は相当数にのぼっている。このような調査法が、横穴式古墳の調査項目として、必然の位置を占めるようにならなければならないと考えるものである。

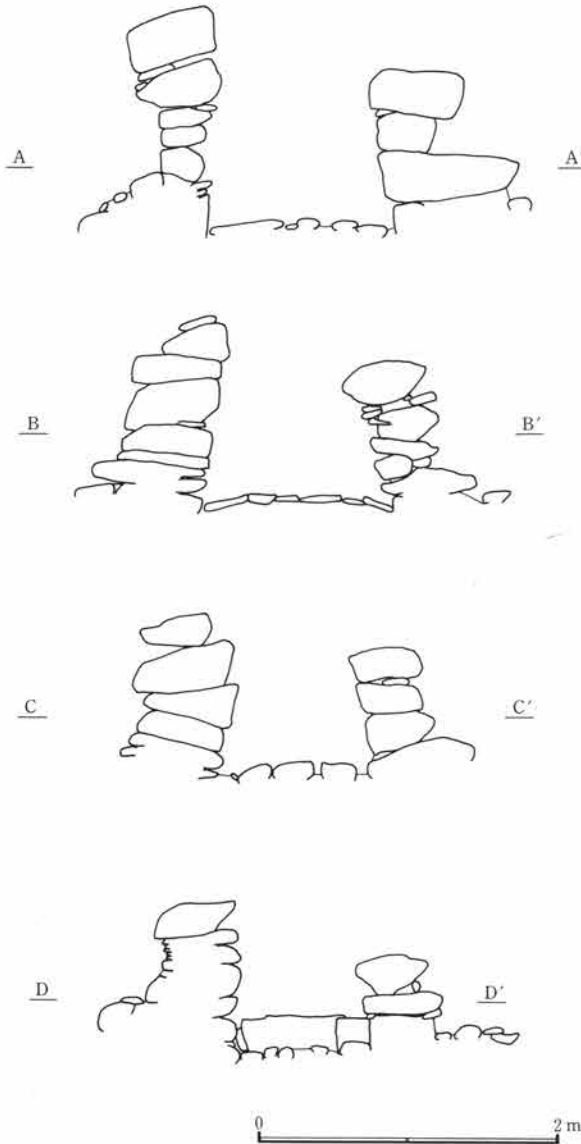
今回の調査では、時間的な制約から、使用石材の法量測定のうち、重量計測を実施することができなかった点に反省点を残す結果となった。



第13図 1号古墳石室裏込除去後の状態

今回の調査に際しても、発掘作業員の方々の中に長年、牛伏砂岩の切り出しや石材業に従事していた仲沢一郎氏や神保光明氏がいたことが、作業を安全にかつ円滑に進めるために幸いした。また、石室の細部の構造上の特徴を理解していくうえでも、御二人の経験が大きな助けとなった。

裏込めと墳丘 本墳の位置する鎭川流域に所在する横穴式古墳では、石室の背後に小円礫を寄せかけた「裏込め」を施し、さらにその外側を全体に円礫による葺石状の「裏込め被覆」で補強し、その外側からこれを押えるように盛土で固く包み込み、一番外側に墳丘葺石を施すのが一般的である。



この解体調査の手はじめとして、まず墳丘の葺石をはずす作業から開始した。葺石の内側からは当然盛土が顔を出してくるものと予測していたが、これに反して、いずれの部分でも、葺石と同程度あるいは、やや大ぶりの礫であった。これらは、葺石ほどに石の面をそろえて積み上げるといった意図は読みとれないが、単にバラスを撒くように雑然と寄せ付けただけではなく、丹念に押え込むように寄せかけているのが観察された。その場合、積み上げる中に、適当な間隔でひとかかえもあるような大ぶりの石を混ぜており、強固に押え込むための工夫であったことが推測された。これらが相当にしっかりしたものであることは、葺石をはずした後も、墳丘がくずれずにあったことからよくわかる。墳丘内部がまったく石のみであったかという点、そうではなく、石と石の間には土が介在していた。これについては、当初、石のみで構成されていたが、長い間の水の浸透に伴って土がつまっていったとも考えられるし、はじめから、石の寄せかけをスムーズにするために土を混ぜたとも考えられる。いずれにしても、墳丘を構成する素材が、圧倒的に石を主体にしていたことには変わりはない。

墳丘の中心寄りから、このように石を寄せつける作業が何度か繰り返され、同心円状に広がっていく形で、葺石の内側まで達したと思われる。

墳丘の基底面は、当時の地表面である黒色土面をそのまま利用している。この黒色土上には、墳丘築成に先立って、一面に礫が敷きつめられたようではないが、上のもよりは、石の大きさが均一で、面的にも平坦に近い状態を示していることによる。

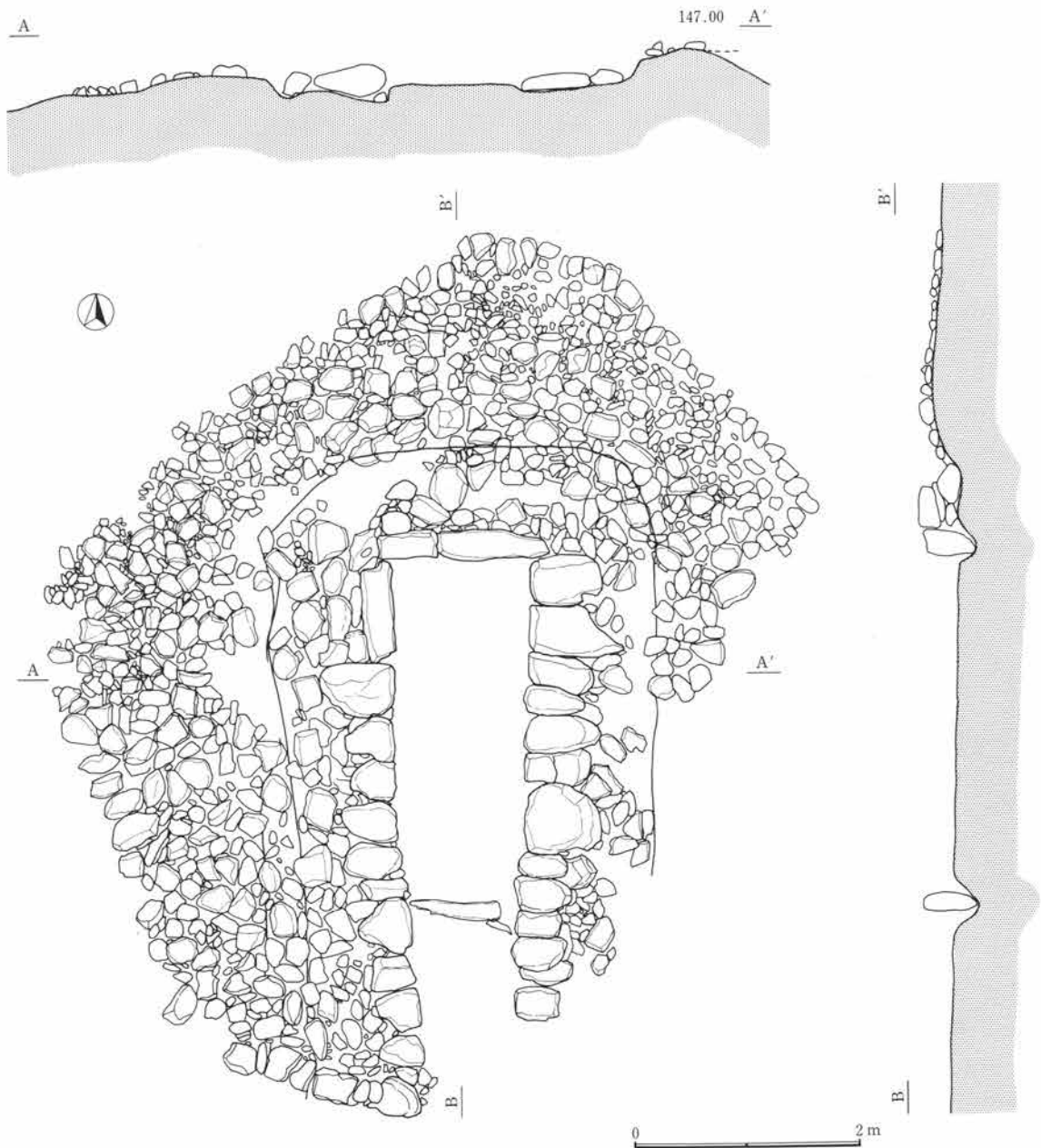
石室の壁体の背後に直接に接する部分では、それまでの部分とは異なる状況であった。最も特徴的な点としては、石が小ぶりになることと、砂礫が多量に使用されていることである。この部分が本来的な裏込めにあたるものと思われる。砂礫が特に使用されるのは、壁石を積み上げていく際に、上下で石の大きさが異なる場合に、この砂礫を充填して石の接

II 神保下條遺跡の調査

地面を大きくし、石をなじませる配慮であったと思われる。また、壁石を背後から押える場合にも、礫のみよりは、砂礫を入れた方が、より強固な背後の補強となることは十分に予測されることである。このような砂礫の用い方を「かけ詰め」といって、今日でも一般に行われている裏込めの手法であるという。

石室の壁体と下部構造 石室の基底部分は、墳丘の基底面である当時の地表面をさらに一段掘り下げ

てつくっている。この掘り方の形状は、壁石の設置される部分と背後の裏込め部分のみを溝状に掘り下げた、平面U字状に近いものである。奥寄りで幅1.1m、深さ25cm、入口寄りで幅1m、深さ20cmを測り、当地の赤城山南麓等で見られる山寄せ型古墳の掘り方にくらべると際立って浅い点に注意される。両者の掘り方が、石室の構造上に果している役割が自ずから異なることを物語っている。本石室のような浅い掘り方の場合、壁体の基底部分を安定的に据え付け

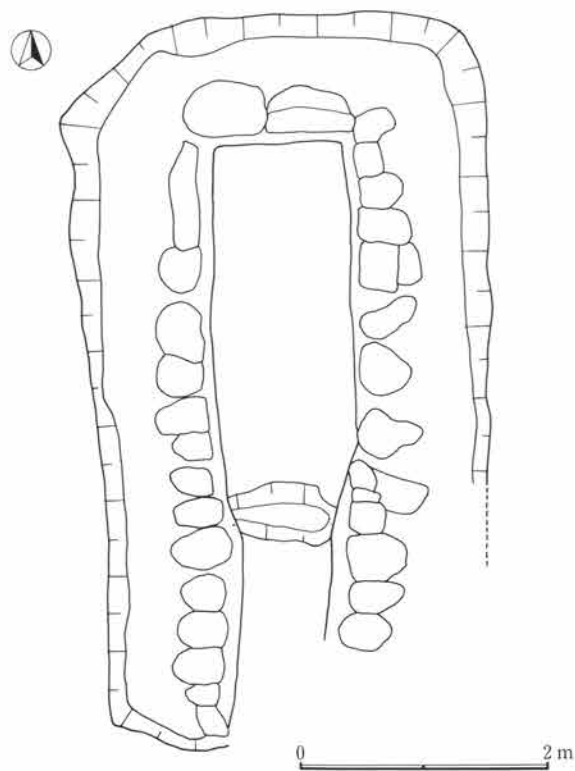


第14図 1号古墳基底部分平面及び断面図

ることと、あらかじめ決定されていた石室の平面企画を現地に写し取る縄張りの役割を果たすことが主目的で、裏込めを背後から補強するほどではない。本石室の場合、この裏込めを背後から補強する役割を担っているのが、周囲に寄せつけられた礫であろう。

壁石の基底石は、掘り方底面に直接設置されていた。その設置面の痕跡を示したのが、第15図の掘り方内に連なる輪郭である。使用される石材はいずれも川原石であるから、石の面全体がピッタリとすえられるというわけにはいかない。そこで、足りない部分に小礫を支う手法を駆使して、安定した設置をはかっていた。壁体を使用される石材が大きく、石室の幅・高さが大きい奥寄りの方が、下部への重量負荷が大きいことは明らかである。そのため、奥寄りの壁石の下部構造の方が、入念に強固な補強をしていた。

次に壁体の構造について見てみる。壁面の隙間に目を凝らして観察すると、壁体を構成する個々の石材が、どのような使われ方をしているかが、おおよそわかる場合もある。しかし、これはまれなこと、



第15図 1号古墳石室掘り方

石室内部から目にすることができる石のたて・よこの法量は確実に把握できても、奥行きについては正確なデータはほとんど得がたい。今回のように、石室を解体しながら、計測することによって、はじめてこのことが可能になるわけである。

本石室の壁石として使用された石材のうち、第17図に黒ぬりで示した石材（石と石の隙間を埋めている小礫）を除くと、全部で146石から構成されていた。石の積み方は、石材の最大面が上下にくる平積みであり、最大面を石室に面する側におく横積みのものは1点も認められなかった。これらは、さらに3つに細分される。石室内に面するたて・よこよりも奥行きの方が長いもの（小口積）とよこと奥行きが伯仲するもの、よこの方が奥行きよりも長いもののである。これらのうち、数量的には小口積のものが圧倒的に多く、また、比較的小ぶりの石材がこの積み方である。一方奥壁や奥壁寄りの両側壁に配されている比較的大ぶりの石材は後二者の積み方が多い。これらの使い分けは、個々の石材が背後にどの程度のひき（奥行）を有しているのかと関係しているものと思われる。それゆえ、3つの積み方のいずれの石材でも、奥行きの実長は40～60cmに集中していて、さほど大きな差はなく、これから極端に出るものの数は少ない。

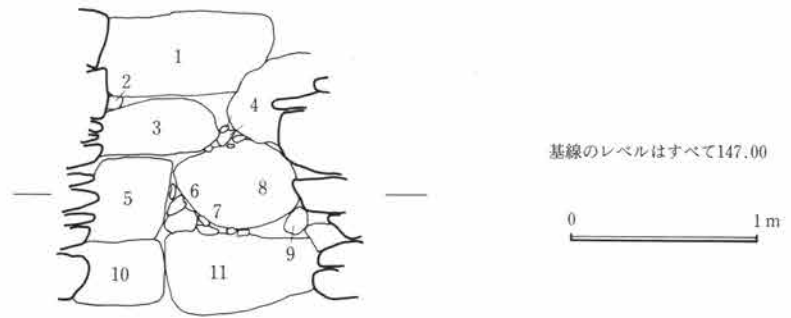
本石室の壁体構造の特徴は、中・小ぶりの石材を多量に使用して構成していることであった。天井石を全て失っていた調査時の状態でも、壁体が天井石に近い高さまで残っていたのは、小口積を基調とした平積みであったためであろう。

使用石材について 本墳に使用されている石材は一部を除いて大半が川原石をそのまま利用した自然石である。石材の種類としては、牛伏砂岩と結晶片岩がある。これらは両者とも、古墳の西方約350mを南から北へと流れる大沢川に豊富に存在しているものである。材質的には、結晶片岩は硬質で重さも非常にあるのに対し、牛伏砂岩は、多孔質で比較的に軽く、軽いという対照的な特徴を有している。

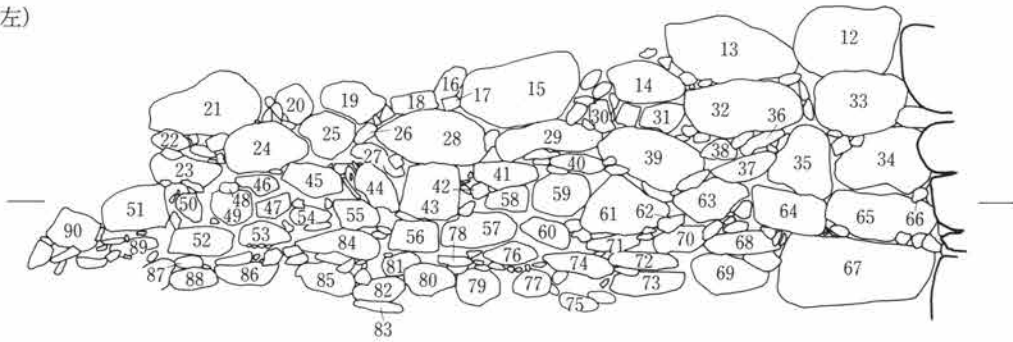
石材の使用される部位ごとに利用形態の特徴を見

II 神保下條遺跡の調査

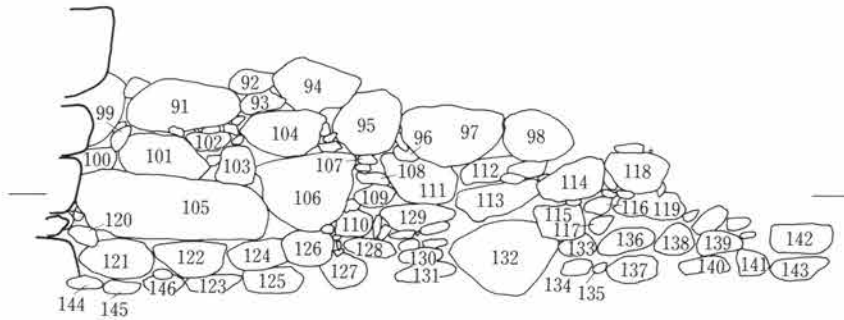
奥壁



西壁 (左)



東壁 (右)



第16図 1号古墳石室壁石番号

第4表 1号古墳使用石材一覧表

奥壁									
No.	たて	よこ	奥行	種類	No.	たて	よこ	奥行	種類
1	39	106	70	牛伏砂岩	17	6.5	11	30	結晶片岩
2	9	24	34	結晶片岩	18	12	22	38	結晶片岩
3	27	71	53	結晶片岩	19	16.5	33	53	結晶片岩
4	48	64	61	結晶片岩	20	20	15	57	結晶片岩
5	45	59	60	結晶片岩	21	31	53	56	結晶片岩
6	6	14	23	結晶片岩	22	8	16	31	結晶片岩
7	13	20	26.5	結晶片岩	23	17	34	61	牛伏砂岩
8	46	71	61	結晶片岩	24	26	44	43	結晶片岩
9	10	18	41	結晶片岩	25	18	30	62	結晶片岩
10	36	66	43	牛伏砂岩	26	8	15	30	結晶片岩
11	25	79	44	牛伏砂岩	27	9.5	21	44	結晶片岩
					28	27	55	75	牛伏砂岩
					29	16	48	61	牛伏砂岩
左壁					30	20	15	41	結晶片岩
No.	たて	よこ	奥行	種類	31	12	19	38	牛伏砂岩
12	28	54	59	牛伏砂岩	32	28	63	48	牛伏砂岩
13	35	66	54	結晶片岩	33	35	46	56	牛伏砂岩
14	23	41	42	牛伏砂岩	34	35	53	50	結晶片岩
15	31	65	62	結晶片岩	35	36	28	43	結晶片岩
16	18	13	40	結晶片岩	36	5.5	27.5	8	牛伏砂岩

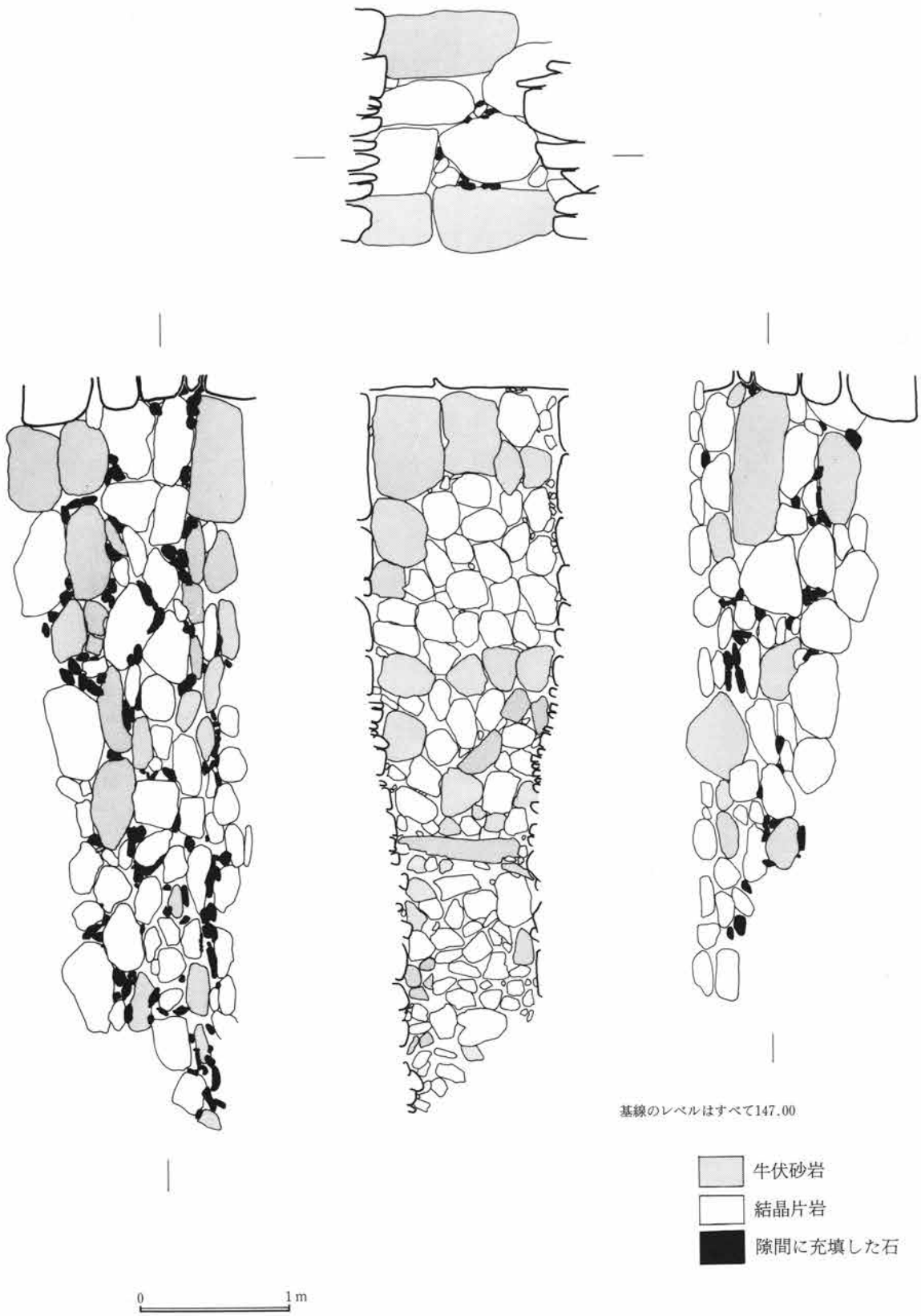
2. 1号古墳の調査

右 壁

No	た て	よ こ	奥 行	種 類
37	14	34	—	結晶片岩
38	9	17.5	46	結晶片岩
39	23	60	64	結晶片岩
40	9.5	30.5	60	結晶片岩
41	12	21	29	牛伏砂岩
42	9	10	33	結晶片岩
43	28	29	42	結晶片岩
44	15	27	60	結晶片岩
45	21	29	78	結晶片岩
46	16.5	27	46.5	結晶片岩
47	8	20	29	結晶片岩
48	6	8.5	26.5	結晶片岩
49	13	22	48	結晶片岩
50	12	16	40	結晶片岩
51	17	35	49	結晶片岩
52	17	32	38	牛伏砂岩
53	16	27	40	結晶片岩
54	17	48	32	牛伏砂岩
55	12	32	39	結晶片岩
56	15	23	32.5	結晶片岩
57	18	34	48	結晶片岩
58	40	10	75	結晶片岩
59	24	28	49	結晶片岩
60	18	34	29	牛伏砂岩
61	33	38	61	結晶片岩
62	7	14	29	結晶片岩
63	19	38	62	結晶片岩
64	22	39	74	結晶片岩
65	23	59	81	結晶片岩
66	7	17	31	結晶片岩
67	40	78	26	牛伏砂岩
68	9	39	50	牛伏砂岩
69	23	36	63	牛伏砂岩
70	10	28	85	牛伏砂岩
71	6.5	29	28	牛伏砂岩
72	6	34	42	結晶片岩
73	14	35	40	牛伏砂岩
74	10	36	40	牛伏砂岩
75	12	20	43	結晶片岩
76	11	27	49	牛伏砂岩
77	14	20	—	結晶片岩
78	6	16	52	結晶片岩
79	20	23	38	結晶片岩
80	13	22	45	結晶片岩
81	10	19	42	結晶片岩
82	6	12	50	結晶片岩
83	5	22	—	結晶片岩
84	12	46	51	結晶片岩
85	13	34	51.5	結晶片岩
86	16	31	43	結晶片岩
87	5	16	19	結晶片岩
88	12	24	41	結晶片岩
89	7	16	38	牛伏砂岩
90	15.5	27	51	結晶片岩

No	た て	よ こ	奥 行	種 類
91	28	59	65	牛伏砂岩
92	9	17	54	結晶片岩
93	8	25	32.5	結晶片岩
94	12	38	83	結晶片岩
95	24	34	55	結晶片岩
96	6	15	29	結晶片岩
97	27	53	46.5	結晶片岩
98	28	37	47	結晶片岩
99	11	33	35	結晶片岩
100	8	14	32	結晶片岩
101	23	47	33	結晶片岩
102	8	26	51	結晶片岩
103	21	21	65	牛伏砂岩
104	25	34	42	結晶片岩
105	32	106	95	牛伏砂岩
106	36	53	78	結晶片岩
107	5	9	24.5	結晶片岩
108	7	15	32	結晶片岩
109	11	22	43	結晶片岩
110	8	20	23.5	結晶片岩
111	27	44	58	牛伏砂岩
112	11	12	39	結晶片岩
113	17	37	61	結晶片岩
114	21	32	42	結晶片岩
115	27	25	46.5	結晶片岩
116	7	20	39	結晶片岩
117	12.5	21	36	結晶片岩
118	23	27	47	牛伏砂岩
119	13	34	52	結晶片岩
120	12	21	42	牛伏砂岩
121	24	40	59	結晶片岩
122	20	39	83	結晶片岩
123	9	32	34	結晶片岩
124	12	32	59	牛伏砂岩
125	11	33	31	結晶片岩
126	17	23	50	結晶片岩
127	20	25	61	結晶片岩
128	9	29	62	結晶片岩
129	17	35	61	結晶片岩
130	6	20	27	結晶片岩
131	13	34	49	結晶片岩
132	40	58	59	牛伏砂岩
133	6	17	45	牛伏砂岩
134	13	26	62	結晶片岩
135	5	11	22	結晶片岩
136	15	24	47	牛伏砂岩
137	12	24	38	結晶片岩
138	16	21	39	結晶片岩
139	9	25	45	結晶片岩
140	8	31	46	結晶片岩
141	9	18	47	結晶片岩
142	15	33	32.5	結晶片岩
143	14	23	36	結晶片岩
144	13	24	27	結晶片岩
145	11	28	22	結晶片岩
146	20	27	34	結晶片岩

II 神保下條遺跡の調査



第17図 1号古墳石室使用石材の種類

てみることにする。

葺石、裏込め、墳丘・石室の基礎地形じぎょうに使用されている石材は、小児頭大ほどの礫を中心としている。その形状は統一的なものではないが、極端に細長いもの、板状のものはあまり認められず、強いていえば、円礫が大半である。これらは、近くの大沢川の河川礫として最も一般的に認められるものであり、大ぶりの石だけは避けて無作為に採取してきたものと思われる。石材の種類は、結晶片岩が圧倒的であり、牛伏砂岩はごくわずかである。このことは、本墳に近い大沢川の河川礫における結晶片岩と牛伏砂岩の占める割合を反映しているものと考えられる。

次に石室の壁体について見てみる。これを構成する個々の石材について、石室内からみてのたて・よこ・奥行の計測値と種類を整理したのが第4表である。全部で146石である。そのうち牛伏砂岩は35石であり、葺石・裏込め等の場合より、占める比率が高くなっていることがわかる。また、壁石のうちでは比較的大ぶりの石材に牛伏砂岩が多い点に注意される。このことは、壁石の選定に際して、大きい石の場合意図的に牛伏砂岩が選ばれていることを示していると考えられる。同程度の大きさの両石では、牛伏砂岩の方が断然軽いことにその理由が求められよう。石材の法量で注意される点としては、前述の壁石の積み上げ方とも関係してくるが、中～小ぶりの石材は、大部分が棒状に近い横長のものである点である。大沢川の河川敷に行くとうわかるのであるが、そこにある石は、必ずしもこのような横長の石ばかりではない。石材の採取に際して、このような横長の形状の石を特に選んでいることがわかる。これを小口積に積み上げていけば、安定した壁体ができるからであろう。

天井石に使用されたことが推定される牛伏砂岩が古墳の傍らに放置されていた。この付近一帯に分布する横穴式石室で天井石の遺存しているものについて見る限り、全てが、牛伏砂岩を使用している。大沢川には、天井石とし得る程度の結晶片岩も容易に見つけることができるが、これと同じ大ききで軽量

の牛伏砂岩があるのにあえて結晶片岩を使用することは、当然しなかったであろう。

本墳に使用された石材のうちで最大のものは1・105で、よこの長さが100cmをわずかに上回る程度である。この石がやや突出しているのを除けば、あとは、70cmどまりであり、大半は40～60cmに集中している。天井石を除く石材の多くが手でかかえられる程度のものであったことがわかる。

(5) 石室壁体中からの人骨の出土

古墳の解体調査も最終段階に近づき、壁石を一石ずつ法量を測定し、積み方を観察しながらはずしていったところ、意外な事実遭遇した。壁石と壁石の間から鉄製品とともに骨片が出土したのである。

出土した場所は、右側壁の最も奥寄りである。第16図の石の番号でいうと121・122・124の3石の上側であり、105の大ぶりの牛伏砂岩をはずしたところ顔をあらわした。ちょうど、遺物をこの大石でおさえていたような状態である。この3石と105との間には、ほとんど隙間はなく、後世になんらかの作用で石室内にあった遺物が石の間に入り込んだとは到底考えられず、壁体を積み上げる工程の途中で置いたことは明らかである。

出土した遺物は、骨片2点と鉄製品（鉄鏃、鉄製耳輪）15点である。

それらの出土した位置を見ると、明らかにこれらを置くための特別な面をつくっていたことがわかる。その面の範囲は、幅（東西）約50cm、長さ（南北）約90cmの長方形に近く、一面に砂礫が敷かれていた。壁石の上端面にこのように砂礫が敷かれている部分は、この3石の上端面を除くと他に認められないことから、壁石を積み上げるための手法でないことがわかる。この砂礫面の直上から骨片、鉄製品が出土したわけである。その出土状態を見ると、散在的なものであり、規則性や配置意図を認めることはできなかった。

骨片は宮崎重雄氏の鑑定の結果人骨であることが明らかになった。この遺物が出土した面について仔細に探索したが、骨片はこの2点以外には全く見つ

II 神保下條遺跡の調査

からなかった。この部分の調査終了後、砂礫をふるいにかけたが、やはり骨片の確認はできなかった。この場におかれた人骨が、当初は一体分が置かれ、腐朽、風化の結果、最終的に骨片2点になったとは考えにくい。人骨の中で最も固い部類に属する歯冠が一点も出土していないことも理由の一つに上げられよう。

このことと関連して、ここにおかれたのが、死後それほど時を経ていない遺骸であった可能性はほとんどないといってもよいであろう。

これらの遺物が置かれたのは、石室の構築途中であった。その位置は、石室の構築を進めていく過程で、工程上もなら大きな分岐点をなすものではないと思われる。石を連続的に積み上げていく中途段階にすぎないと言えよう。

壁体中からの骨片等の発見は、当初まったく予測もしていなかったことであった。今回のように、壁体を一石ずつはずしていった調査のまさに副産物であった。他地域での古墳調査に際して、このような

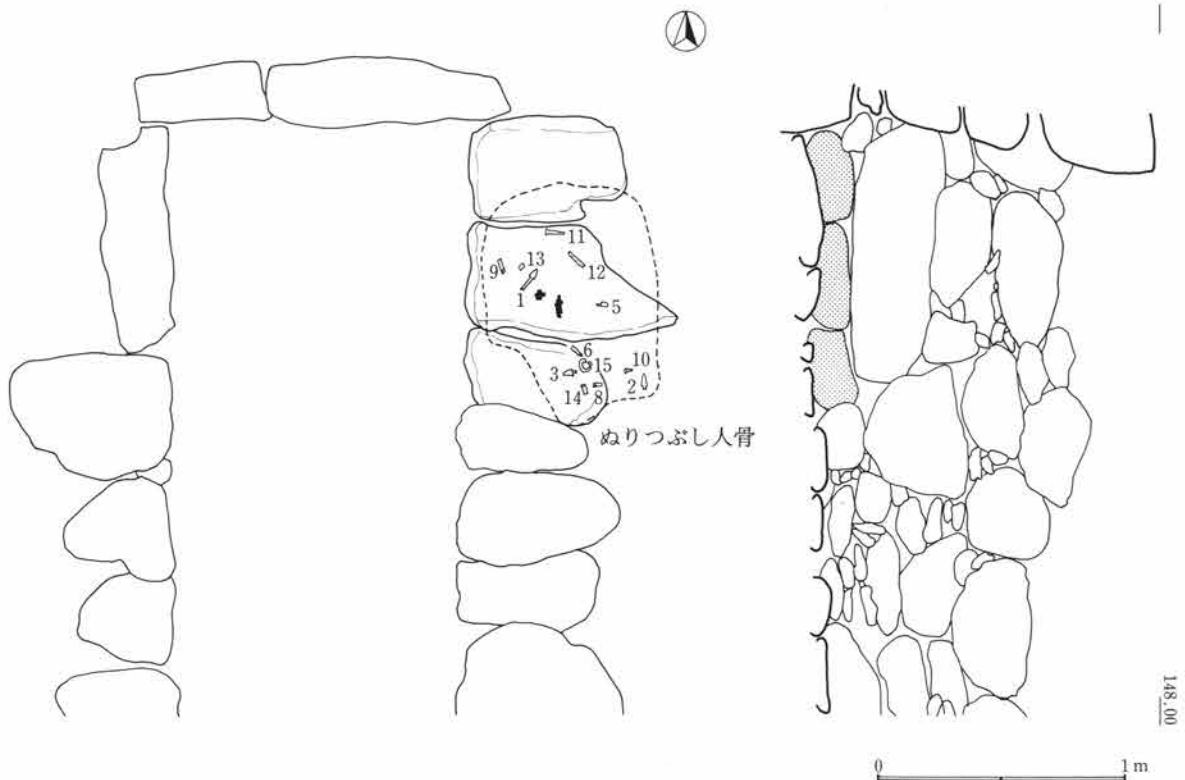
調査法が行なわれていない現段階では、本墳の事例が特殊例なのか、一般的なものであるのかを知ることにはできない。少なくとも、今後、石室調査上で留意しなければならない一項目とすべきであろう。

また、このようなあり方が、何を意味しているのかも今後の課題である。その場合、骨片とともに副葬品とも言えるような遺物を伴っていた点も考慮する必要がある。事例の増加をまつとともに、民俗学的あるいは人類学的な側面からのアプローチも必要があると思われる。

(6) 出土遺物

石室内からの出土遺物 鉄鏃片13片(1~13)、刀1点(14)、刀子片3点(15・16)、弓飾具1点(17)、ガラス小玉2点(18・19)である。

鉄鏃は、鏃刃部が6点あることから、これ以上の数量があったことは明らかである。鏃身部の残るものについてみると、いずれも細根の両刃式である。関の形状は、直角に近いもの(2・3)、やや鈍角をなすもの(4・6)、鋭角ぎみのもの(1)に分けら



第18図 1号古墳右側壁中からの遺物出土状態

れる。頸部の長さは、1・4が4cm前後とやや短めであるのに対し、3・12は7cm以上を有していることがわかり、2もこれらに近いことが推測される。頸部の幅、厚さから、2・3の茎は9・10に近いものであったことがわかる。

14は刃部幅2.0cmで、10.5cmの長さを残している。棟の厚さは4mmを測る。小刀の破損したものと思われる。

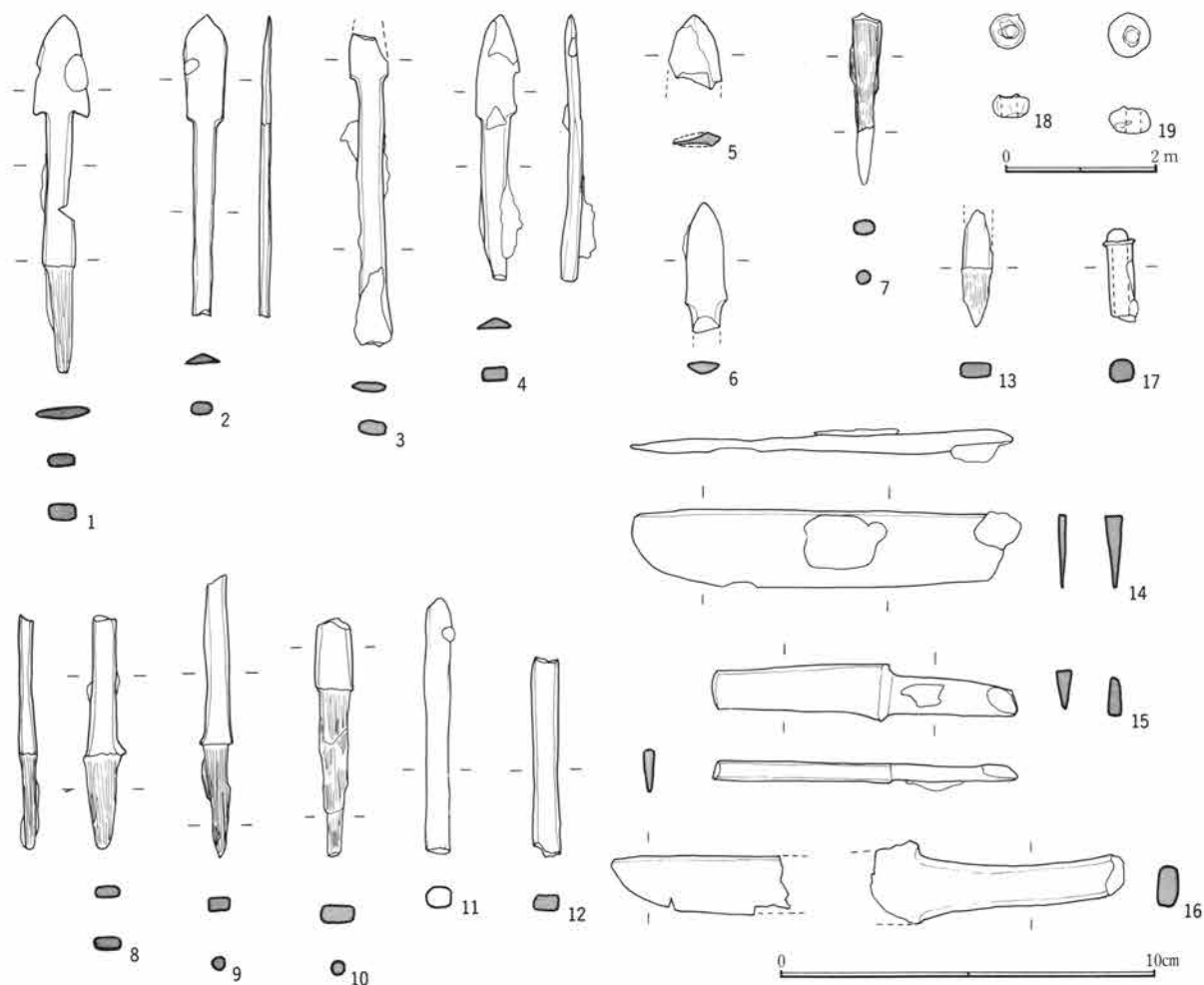
15・16とも直角に近い両関を有する刀子である。15は刃部の現存長5.5cm、幅1cmで、長さ3.5cmの茎がつく。刃部は内側にえぐれており、よく使いこまれたものであることがわかる。16は刃部の切先寄りと関から茎にかけての別の2点であるが、大きさ、形状から同一個体と判断した。刃部幅1.6cmで茎部長5.5cmを測り、15より一回り大きいものであることが

わかる。

17は鉄製で、長さ2.5cm、幅6mmの円柱状を呈する。筒形を呈する管状の外側部分に棒状を呈する鉄芯がはいっている。その先端は丸く、管から3mm出ている。管の外側は木質の付着した痕跡を残しており、木目は、長軸と直交している。弓金具とされているものに該当するものと思われる。

ガラス小玉は、径4.5mm、厚さ2.2mmで、ほぼ同形同大で、孔径は約1.3mmを測る。色調は、淡い紺色を呈している。

壁体中からの出土遺物 鉄鏃片16点(1~14、残りの2点は極小破片のため図示していない)、鉄製耳環1点である。これらは、前述したように、壁石と壁石の間に密閉された状態であったわけであるから当初よりの数量を示しているとしてまちがいない。



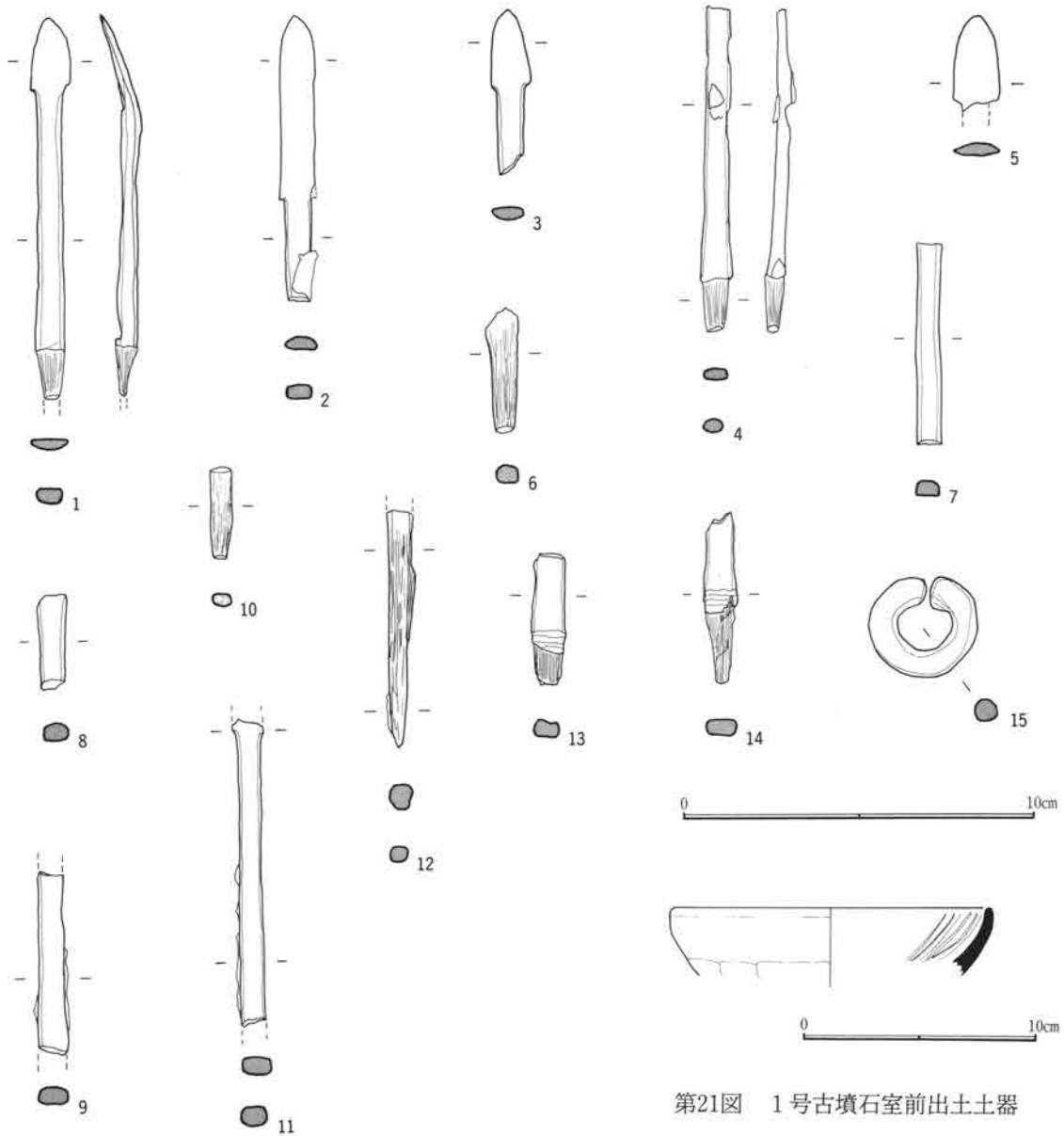
第19図 1号古墳石室内出土遺物

II 神保下條遺跡の調査

鉄鏃は、鏃身部の数量からは5点、茎部からは6点が数えられるので、当初は6点であったと考えられる。1・3・5は、細根両刃式で、直角に近い両関を有し、鏃身長2.1cm、幅1.1cmである。1は篋被の長さは7.7cmを測り、4・11が1に近いものであったことがわかる。これに対して2は、鏃身長5.1cm、幅9mmと、異常に長い点が目立つ。両刃式で、突出する部分の短い腸快を有する。やはり長頸鏃であつ

たものと思われる。

鉄製耳環は、たて2.8cm、よこ3.1cmで、中実の鉄棒を折り曲げてつくったものと思われる。鉄棒は断面円形をなし、径約8mmを測る。両先端の合わさる部分には、2mmの隙間がある。大きさ・形状は、本墳と相前後する時期の横穴式石室から頻繁に出土する金銅製の耳環とまったく同一である。



第20図 1号古墳石室壁体中出土遺物

第21図 1号古墳石室前出土土器

(7) 埴輪

円筒埴輪（含む朝顔形） 1号古墳の普通円筒埴輪（以下、「円筒埴輪」と呼称）は、すべて3段構成であり、第2段に1対の円形透孔が穿たれている。

完形あるいはそれに近いものについて見てみると、器高34ないし36cmで、口径は21cm前後と一様である。また、各段の高さを比較してみると、第1段が16ないし17cmであるのに対して、第2段は10cm前後であり、第3段は第2段よりやや短い9cm前後である。いずれも、ほぼこの比率を踏襲している点が認められる。主体をなす円筒埴輪については、細部の違いはあるにしても、法量に一定の規格に近いものが存在していることを窺わせる。これに対して、底径は、製作時のひずみのためか、11cmから15cmほどの間でバラツキが大きい。このこととあわせて、底部付近を中心に、器形のゆがみが大変目につく。製作時間をできるだけ短縮しようとしたための代償であったと言えよう。

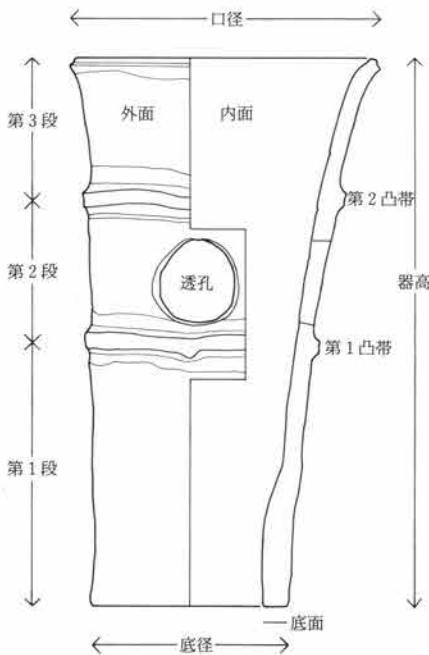
凸帯は、基本的には幅狭で、発達度の弱いM字形に近いものであるが、詳細に観察すると、次の9種類にわけることができる。断面M字形のものは、幅1.5cmで、下側の稜が上側より低いもの(M₁)、幅1.

8cmで、上下の稜が同じ高さのもの(M₂)、幅1.5cmで上側の稜が下側より低いもの(M₃)、幅狭で、高さが著しく低いもの(M₄)の4種類である。断面台形のもの、幅1.8cmで上下の稜の高さがほぼ同じもの(台₁)、下側の稜が上側より低いもの(台₂)、上側の稜が下側より低いもの(台₃)、凸帯貼付後に上から強い横ナデを施しているもの(台₄)の4種類である。これらに断面が三角形(三)のものが加わる。

次に胎土を見てみると、完形あるいはそれに近いものでは、大半のものに結晶片岩粒が認められる。そのあり方が均一でなく、また粒径も大きいものでは1cm近いものから、数mm程度のものでさまざまである。人為的な混入ではなく、原土にもともと入っていたものと推測している。これとは別に、人為的に混ぜ物として混入したと思われる砂粒がある。その混入される量の度合から、ほとんど含まない(A)、少量含む(B)、やや多く含む(C)、多量に含む(D)の4種類に区分される。これらの胎土を使用したものは、器面の色調は、橙色ないし赤褐色を呈している。1号古墳の埴輪の大半のものは、この4種類のいずれかに属している。この4種類とは異なる胎土のものが、該当する数量は少ないが、1種類認められる。色調が淡赤褐色ないし灰橙色を呈し、緻密な胎土に微砂粒を混入しているもの(E)で、視覚的に前記の4種類とは容易に見分けられる。

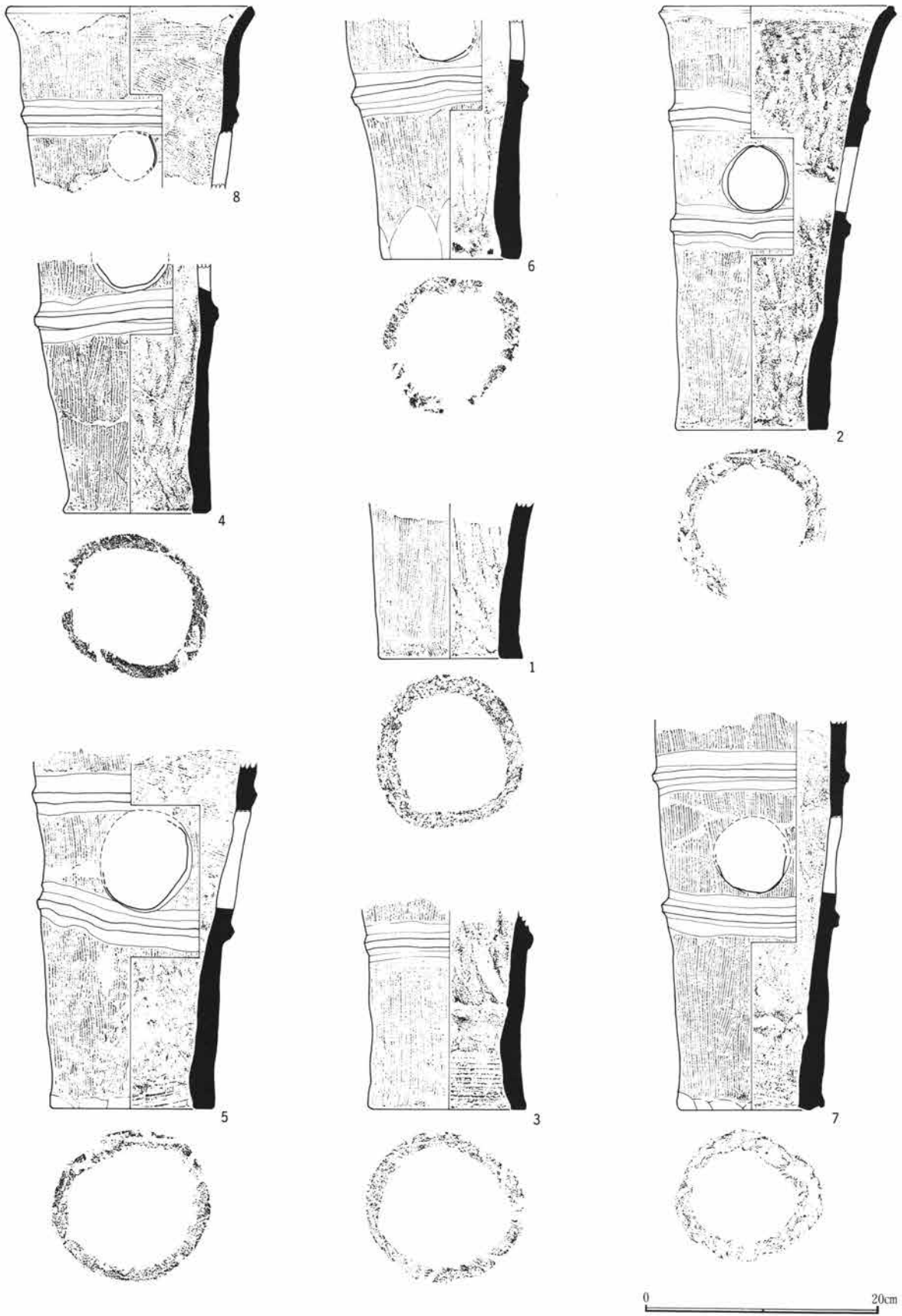
成・整形の特徴としては、外面は全て縦ハケで、内面は、口縁部寄りに横ハケを施し、それより下を縦指ナデとするものとナデが口縁端まで及ぶものがあり、数量は少ないが、体部にも部分的に縦ハケを施すものが認められる。また、底部内面に、外面のハケ原体より目の粗い横ハケを残すものがあり、基部成形の痕跡であることがわかる。この基部成形が、幅6~7cmの粘土板を筒状につくるものであることが、内面の横ハケに加えて、底面に残る粘土板の重ね合わせの痕跡からもわかる。

一方、成形時の重量負荷による底部のひずみを外面から板状のものをあてて再調整しているものが認められ、特徴的な手法として注意する必要がある。



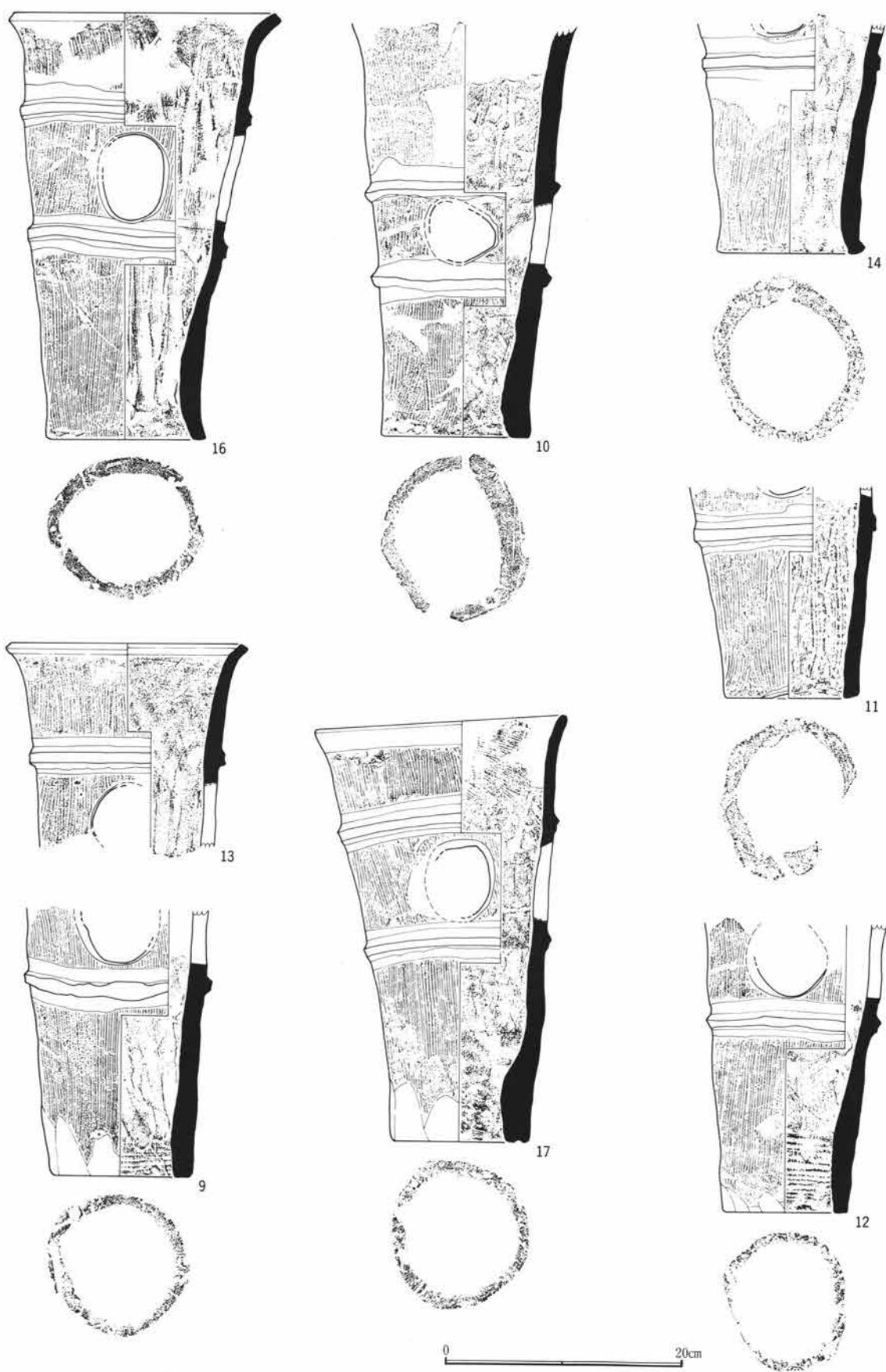
第22図 円筒埴輪各部の名称

II 神保下條遺跡の調査



第23図 1号古墳出土土円筒埴輪(1)

2. 1号古墳の調査



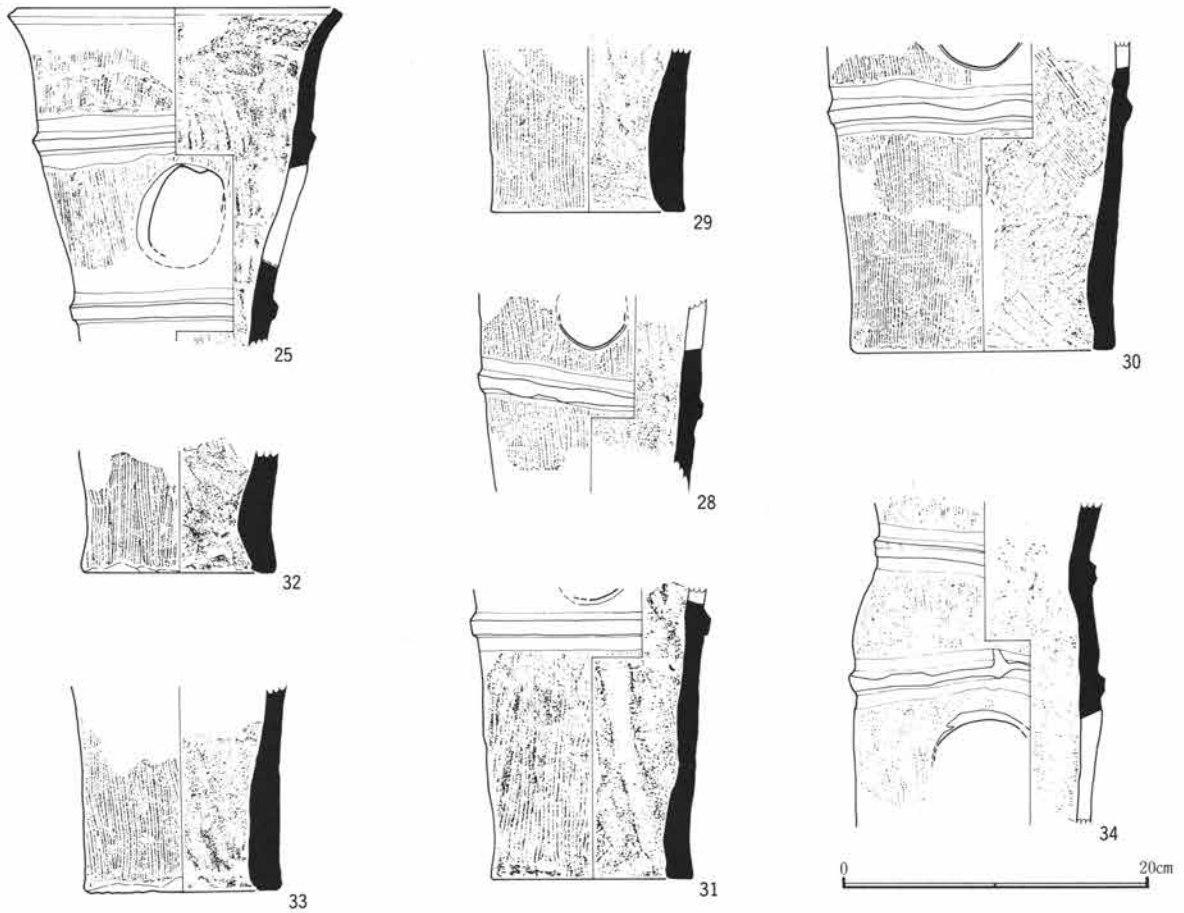
第24図 1号古墳出土円筒埴輪(2)

II 神保下條遺跡の調査



第25図 1号古墳出土土円筒埴輪(3)

2. 1号古墳の調査



第26図 1号古墳出土円筒埴輪(4)

1号古墳出土円筒埴輪観察表

法量・透孔の数値のカッコは復元値、以下同じ

No	法量 (cm)	凸 帯		透 孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備 考	
		形状	1	2	形状					タテ×ヨコ
1	高 12.6 口 — 底 12.4	—				胎 C 焼 良好 色 明褐色	11	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、部分的にその上から縦ハケ		
2	高 36.3 口 20.1 底 15.0	M ₂	17.5	9.3	円形	5.8×5.7 6.8×(6.3)	胎 C 焼 不良 色 灰褐色 ~明褐色	10 11	外 縦ハケ 内 口縁横ハケ それ以外は縦指ナデ 底面に粘土板に接合痕を僅かに残す	透孔は樹立時に両側にくる瓦質おびる
3	高 17.7 口 — 底 13.7	M ₁ ┌ 台 ₁	14.0				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 11	外 縦ハケ 内 底面から5cmの高さ横ハケ、その後それより上を縦指ナデ、底面に棒状の圧痕	透孔は樹立時に両側にくる
4	高 18.5 口 — 底 12.3	M ₂ ┌ 台 ₁	16.4				胎 C 焼 良好 色 赤褐色 ~明赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、凸帯部分指押え 底 調整	透孔は樹立時に両側にくる
5	高 29.8 口 — 底 14.2	M ₁	17.5	9.3	円形	(9.0)×(8.0)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色 ~明赤褐色	10 11	外 縦ハケ、底部下端板押え調整。内 口縁~第2段中途横~斜め横ハケ、それより下は縦指ナデ、透孔は大きめ、器厚のやや厚いことが目立つ、やや粗雑な作り	透孔は樹立面に両側にくる

凸帯の項の「1」、「2」は、底部から第1凸帯、第2凸帯までの高さ、以下すべて同じ。

II 神保下條遺跡の調査

No.	法量 (cm)	凸 帯		透 孔		胎土・焼成 色調	刷 毛 目	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
		形状	1	2	形状					タテ×ヨコ
6	高 20.3 口 — 底 11.8	M ₁	13.4			胎 C 焼 ふう 色 橙色	11	外 縦ハケ 外面 2 段透孔右側にヘラ描き 内 縦指ナデ、外面下端の歪みを板押え調整、やや粗雑な作り、底部内面いびつ目立つ	透孔は樹立時に 両側にくる	
7	高 33.4 口 — 底 11.0	M ₂	17.3	11.2	円形	(6.3)×(6.8)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 11	外 縦ハケ、底部下端を板押えにより再調整。内 縦指ナデ	透孔は樹立時に 両側にくる
8	高 15.4 口 — 底 —	M ₁					胎 C 焼 ふう 色 橙色	11	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、第 3 段横 ～斜め横ハケ、2 段斜めハケ後縦指ナデ	
9	高 22.4 口 — 底 11.4	M ₁	16.5				胎 C 焼 ふう 色 橙色	11	外 縦ハケ、底部歪みを調整する板押え調整。内 縦指ナデ、底部下端横ハケを残す	底面棒状圧痕、 透孔は樹立時に 両側にくる
10	高 34.4 口 — 底 12.5	三	13.0	7.0		(5.5)×(6.2)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	9	粗雑な作り、歪みが目立つ、粘土紐痕が残る。外 縦ハケ 内 第 1～2 段縦指ナデ、 第 3 段不定方向ハケ 底面ヘラ調整	透孔は樹立時に 両側にくる
11	高 17.8 口 — 底 11.4	台 ₁	13.7				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ部分的にその上 から強い縦ハケにより整形	底面棒状圧痕、 透孔は樹立時に 正面を向く
12	高 24.2 口 — 底 10.5	M ₁	15.9				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 11	外 縦ハケ、下端部は板押えによる歪み調整。内 縦指ナデ、底部横ハケ後斜め縦指 ナデ、部分的に横ハケ残る	凸帯の位置指押 え、透孔は樹立 時に両側にくる
13	高 17.3 口 20.6 底 —	M ₃					胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	9 10	外 縦ハケ 内 口縁上半横ナデ、口縁下 半～2 段縦指ナデ、端部の仕上げシャープ	
14	高 19.1 口 — 底 12.5	台 ₁	15.8				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、凸帯位置指押 え	透孔は樹立時に 両側にくる
15	高 19.2 口 — 底 13.2	M ₁	15.5				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	12	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、凸帯部分指押 え横指ナデ	透孔は樹立時に 正面を向く
16	高 35.6 口(23.1) 底 13.6	M ₂	17.2	10.1	円形	(7.5)×6.1 (6.3)×(5.0)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11	外 縦ハケ 内 口縁横ハケ～不定方向ハ ケ、第 1～2 段縦指ナデ後部分的に縦ハケ	透孔は樹立時に 正面を向く
17	高 34.3 口(21.3) 底 11.6	M ₁	15.7	9.6	半円	(7.0)×(5.9) 7.0×(6.7)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11 12	外 縦ハケ、底面下端歪みを調整する板押 え 内 口縁横～斜め横ハケ、第 1～2 段 縦指ナデ	比較的丁寧な作 り
18	高 34.2 口 20.2 底(11.5)	M ₃	14.4	11.0	半円 に近い円	6.4×5.4 (5.7)×5.1	胎 C 焼 ふう 色 明赤褐色	10 12	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
19	高 21.6 口 — 底 11.1	M ₁	15.4				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11 12	外 縦ハケ、底部下端板押え 外面透孔右 隣にヘラ描き 内 縦指ナデ、第 2 段中途 以上斜め横ハケ、やや粗雑な作り	透孔は樹立時に 両側にくる

2. 1号古墳の調査

No	法量 (cm)	凸帯			透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状	タテ×ヨコ				
20	高 15.9 口 — 底 11.3		15.5				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 外 縦ハケ、底部下端の歪みを板押し調整 12 内 縦指ナデ、底部下端横ハケを残す 底面棒状圧痕		
21	高 34.4 口 — 底 12.4	三	13.5	12.5	円形	6.3×5.5 6.5×5.8	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	9 外 縦ハケ 内 口縁横～斜め横ハケ、第 10 1～2段縦指ナデ、形の歪み、作りの粗雑 さが目立つ、粘土紐痕が部分的に残る	透孔は樹立時に 両側にくる	
22	高 20.5 口 — 底 11.7	M ₁	15.6				胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10 外 縦ハケ、底面ナデ調整、底部下端を板 12 押し調整 内 縦指ナデ、底部下端横ハケ 後横ナデ	透孔は樹立時に 両側にくる	
23	高 26.0 口 — 底 12.9	台 ₁ └ M ₂	14.1	10.6		(5.7)×(4.2)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 外 縦ハケ、底部の基部は横ハケの上に縦 ハケが施されている	透孔は樹立時に 両側にくる	
24	高 8.7 口 — 底 (11.3)						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 外 縦ハケ 内 底部下半横ナデ、上半縦 指ナデ		
25	高 21.7 口 (22.3) 底 —	M ₁		10.9		(6.8)×(5.8)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め 12 横ハケ、第1～2段縦指ナデ部分的に縦ハ ケ		
26	高 12.1 口 21.5 底 —	M ₂					胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	10 形の歪みがやや目立つ、作り若干粗雑 12		
27	高 11.8 口 18.7 底 —	台 ₁ └ M ₂					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 口縁強い斜め縦ハケ、凸 11 帯強い指押し、第2段以下指ナデ 内面粗 雑な仕上げ		
28	高 12.8 口 — 底 —	台 ₂				(4.9)×(4.7)	胎 D 焼 ふつう 色 明赤褐色	10 外 縦ハケ 内 縦指ナデ、一部斜め縦ハ ケ残す		
29	高 10.7 口 — 底 12.9						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	9 外 縦ハケ 内 縦指ナデ 10		
30	高 20.0 口 — 底 (17.5)	台 ₂	15.4				胎 C 焼 良好 色 橙色	11 外 縦ハケ、凸帯横ハケ 内 第1段下半 斜め指ナデ、第1段上半～2段指ナデ後部 分的に斜め縦ハケ	他と大きく異なる ものである	
31	高 13.5 口 — 底 13.1						胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	11 外 縦ハケ 内 縦指ナデ		
32	高 7.9 口 — 底 12.9						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11 外 縦ハケ 内 縦指ナデ、底部横ナデ後 縦指ナデ		
33	高 19.0 口 — 底 13.4	M ₂					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 縦指ナデ 底面ナデ調整		

II 神保下條遺跡の調査

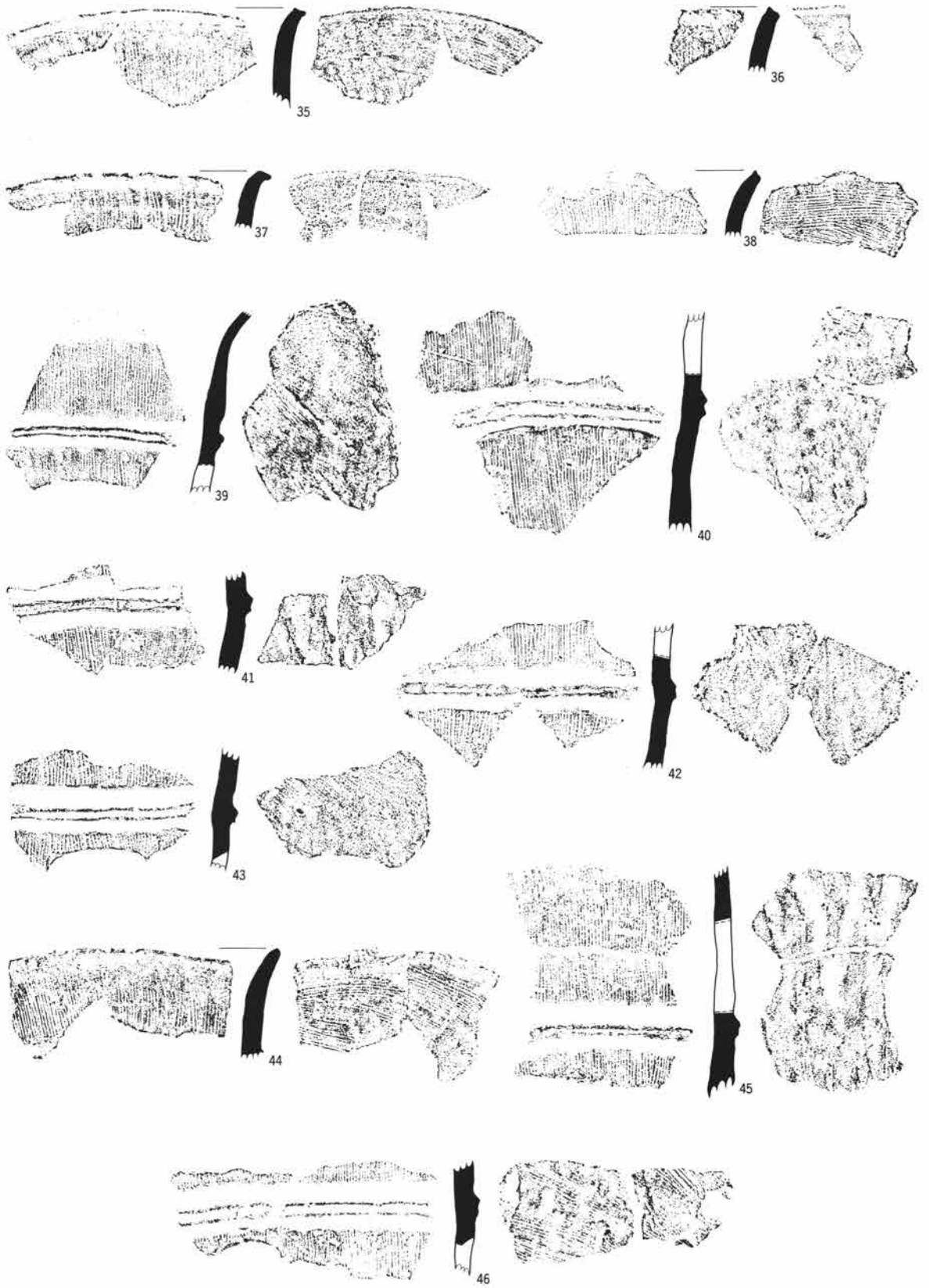
No.	法量 (cm)	凸 帯		透 孔		胎土・焼成 色調	刷 毛 目	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
		形状	1	2	形状				
34	高 21.3 口 — 底 —					胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	朝顔形
35	高 6.8 口 — 底 —					胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁上半 横ハケ、口縁下半縦指ナデ	
36	高 4.4 口 — 底 —					胎 C 焼 不良 色 橙色	9	外 横ナデ、口縁下半縦ハケ 内 横ナデ	
37	高 3.7 口 — 底 —					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	8	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁～縦 指ナデ、口縁端の仕上げシャープ	
38	高 4.5 口 — 底 —					胎 B 焼 良好 色 赤褐色	11 12	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁横ハ ケ～斜め横ハケ、口縁端の仕上げシャープ	
39	高 12.4 口 — 底 —	M ₁				胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10 11	外 縦ハケ 内 口縁斜め縦ハケ後縦指ナ デ	外面第3段ヘラ 描き
40	高 14.9 口 — 底 —	M ₂				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11 12	外 縦ハケ 内 第2段上半斜め横ハケ後 縦指ナデハケ目を一部残す、第2段下半 ～第1段縦指ナデ	外面第2段透孔 横にヘラ描き
41	高 6.9 口 — 底 —	M ₁				胎 B 焼 良好 色 明赤褐色	10 11	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	径が小さいこと から、朝顔の可 能性あり
42	高 9.9 口 — 底 —	M ₂				胎 D 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
43	高 8.4 口 — 底 —	M ₁				胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 第3段斜め横ハケ、第2 段縦指ナデ	
44	高 7.5 口 — 底 —					胎 B 焼 ふつう 色 橙色	11	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁横 ～斜め横ハケ	
45	高 14.9 口 — 底 —	M ₁				胎 B 焼 やや不良 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
46	高 7.8 口 — 底 —	M ₁				胎 B 焼 ふつう 色 橙色	10 11	外 縦ハケ 内 斜め横ハケ後一部縦指ナ デ	
47	高 9.4 口 — 底 —	台 ₁				胎 B 焼 良好 色 赤褐色	7	外 縦ハケ後横ナデ、ハケ目微かに残る 内 口縁端横ナデ、口縁上半ハケ後ナデ、口 縁下半縦指ナデ、口縁端の仕上げシャープ	

2. 1号古墳の調査

No	法量 (cm)	凸 帯			透 孔		胎土・焼成 色調	刷 毛 目	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
		形状	1	2	形状	タテ×ヨコ				
48	高 7.0 口 — 底 —	台 ₂					胎 B 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	凸帯の形状は三 角形に近い
49	高 13.1 口 — 底 —	M ₂					胎 D 焼 不良 色 鈍い橙色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
50	高 7.8 口 — 底 —	台 ₂					胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
51	高 10.5 口 — 底 —	M ₂					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	外面透孔脇にへ ラ描き
52	高 7.4 口 — 底 —	台 ₃					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
53	高 10.1 口 — 底 —	M ₂					胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め 縦ハケ 第2段縦指ナデ	
54	高 9.5 口 — 底 —	台 ₃					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	8 9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、部分的にその 上から縦ハケ	
55	高 4.5 口 — 底 —	M ₄					胎 C 焼 ふつう 色 暗赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
56	高 5.8 口 — 底 —	M ₄					胎 C 焼 ふつう 色 暗赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
57	高 9.0 口 — 底 —	台 ₄					胎 B 焼 良好 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ	
58	高 5.2 口 — 底 —	三					胎 E 焼 ふつう 色 鈍い橙色	11	外 縦ハケ 内 縦ハケ後部分的に縦指ナ デ	凸帯部分のみ赤 色顔料塗彩 器肉は黒色
59	高 3.5 口 — 底 —						胎 A 焼 ふつう 色 鈍い橙色	10	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁上半 斜め横ハケ後横ナデ	
60	高 8.9 口 — 底 —	台 ₄					胎 E 焼 ふつう 色 鈍い橙色	10 11	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ後部分的に縦 指ナデ	凸帯部分のみ赤 色顔料塗彩 器肉は黒色
61	高 8.0 口 — 底 —	三					胎 E 焼 ふつう 色 鈍い橙色	10	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ後部分的に縦 指ナデ	凸帯部分のみ赤 色顔料塗彩 器肉は黒色

II 神保下條遺跡の調査

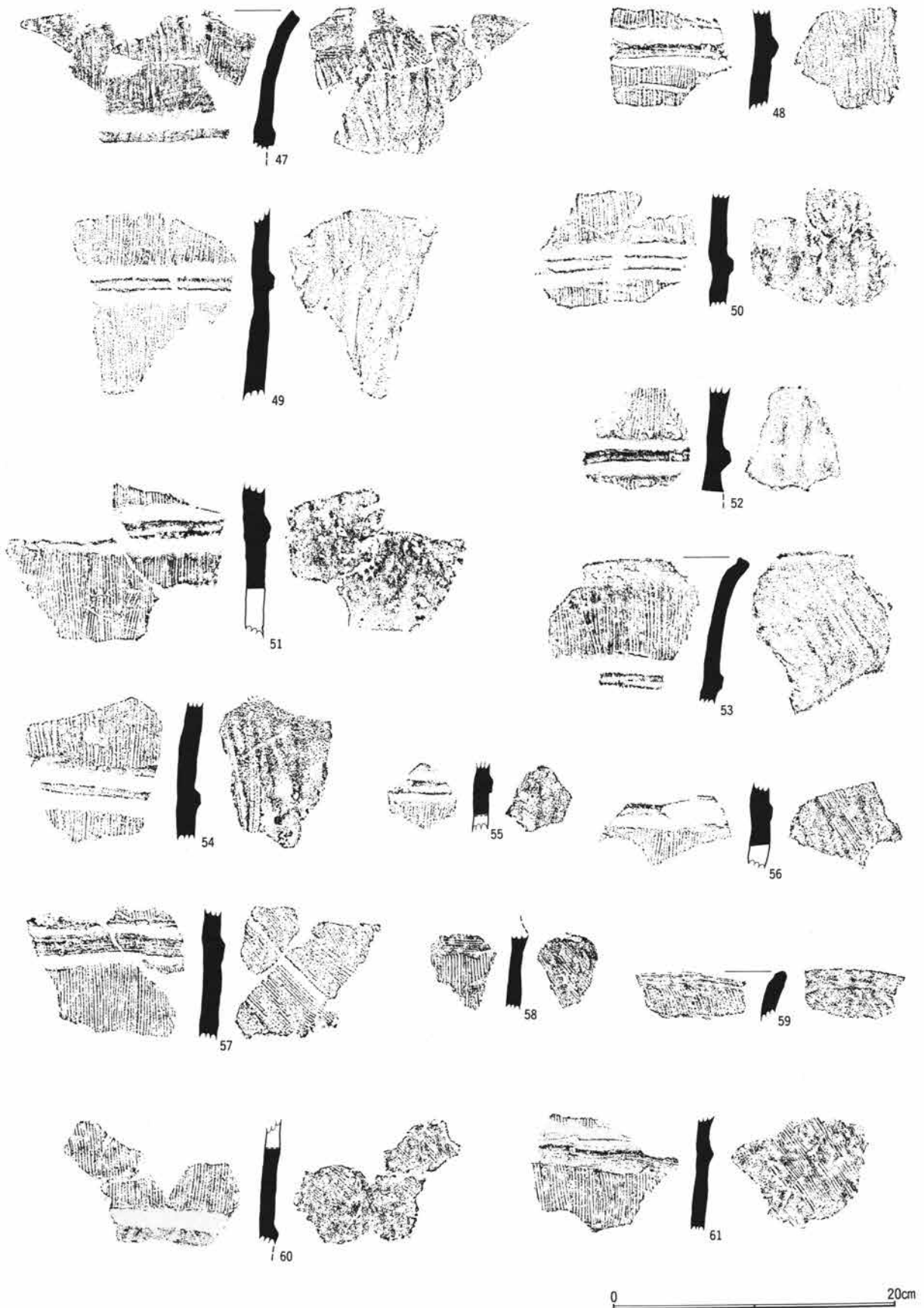
No	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状				
62	高 4.9 口 — 底 —					胎 B 焼 不良 色 暗赤褐色	12	外 縦ハケ 内 縦ハケ	外面第3段ヘラ 描きあり
63	高 6.6 口 — 底 —	M ₁				胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色	11	外 縦ハケ 内 3段目斜め縦ハケ、第2 段縦指ナデ	外面第3段ヘラ 描きあり
64	高 5.2 口 — 底 —					胎 E 焼 ふつう 色 橙色	12	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ	内面ヘラ描き 器肉は黒色
65	高 4.5 口 — 底 —					胎 E 焼 ふつう 色 赤褐色	9 \ 10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	外面透孔脇ヘラ 描き
66	高 2.9 口 — 底 —					胎 E 焼 ふつう 色 赤褐色	10 \ 11	外 縦ハケ 内 斜め横ハケ	外面透孔脇ヘラ 描き
67	高 3.6 口 — 底 —					胎 E 焼 ふつう 色 赤褐色	8	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	外面透孔脇ヘラ 描き
68	高 7.8 口 — 底 —					胎 C 焼 良好 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁上半 斜め横ヘラナデ	朝顔形
69	高 7.3 口 — 底 —	M ₂				胎 D 焼 良好 色 赤褐色	9 \ 10	外 縦ハケ 内 横ハケ後縦指ナデ	朝顔形
70	高 12.9 口 — 底 —	M ₂				胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 不明瞭	朝顔形
71	高 11.4 口 — 底 —					胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	14 \ 15	外 縦ハケ 内 斜め縦指ナデ	朝顔形
72	高 8.3 口 — 底 —	M ₂				胎 D 焼 ふつう 色 橙色	11	外 縦ハケ 内 口縁斜め横ハケ、下段は 斜め縦ハケ	朝顔形
73	高 7.2 口 — 底 —	三				胎 C 焼 ふつう 色 橙色	9 \ 10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	朝顔形
74	高 10.2 口 — 底 —	M ₁				胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 口縁縦ハケ、下段は縦指 ナデ	朝顔形



第27図 1号古墳出土円筒埴輪(5)

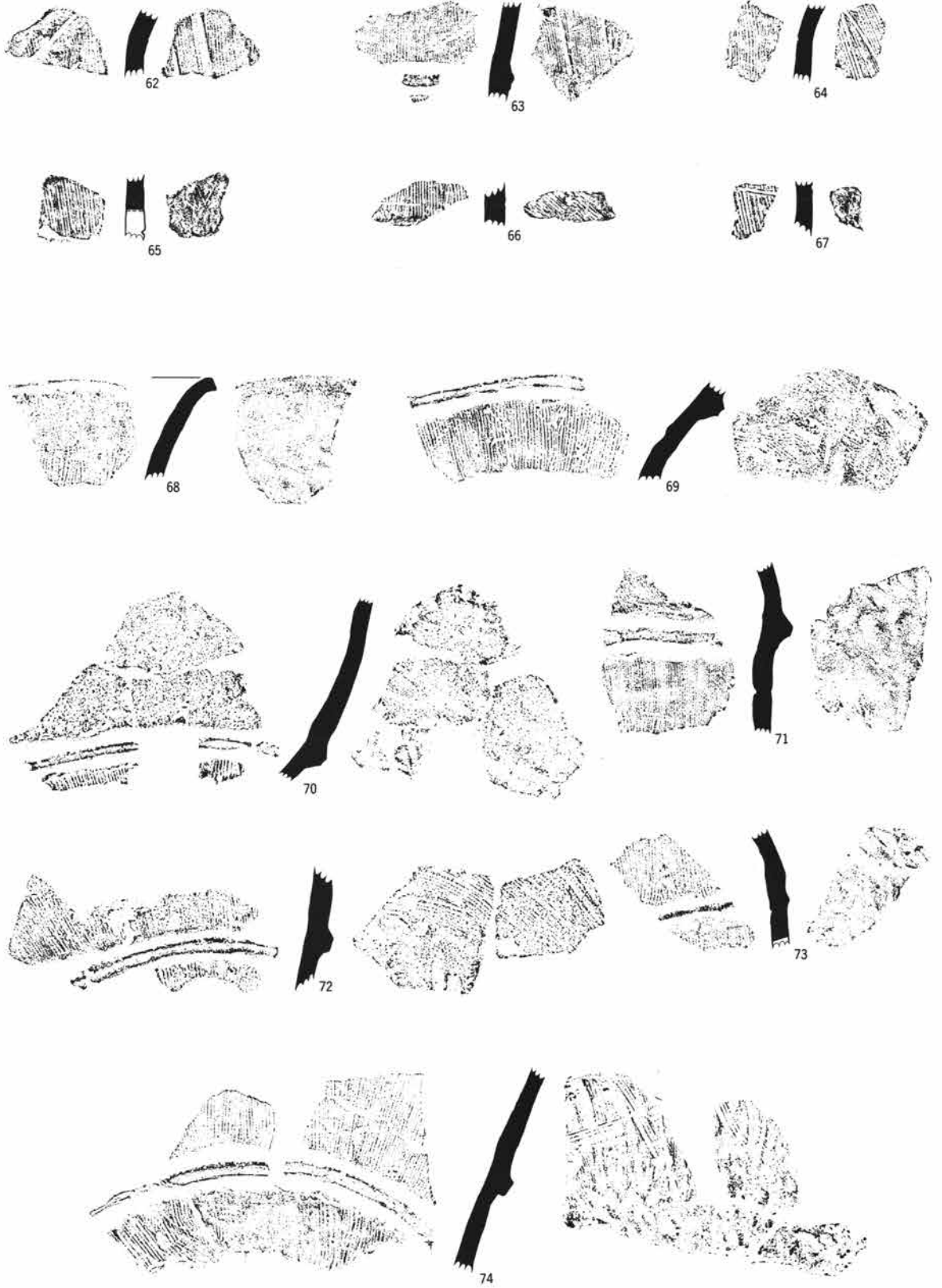
0 20cm

II 神保下條遺跡の調査



第28図 1号古墳出土円筒埴輪(6)

2. 1号古墳の調査



第29図 1号古墳出土円筒埴輪(7)

II 神保下條遺跡の調査

形象埴輪 本墳から出土した形象埴輪には、人物埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、器財形埴輪がある。埴輪に付した番号は、古墳ごとに円筒埴輪からの通し番号であるが、完形に近く復せたものについては、記述の便宜上、種類ごとの番号(例えば、「人物1」、「人物2」…のように)を付しておいた。

人物1 (75) 高さ推定65cmの女性上半身像である。顔の口の部分から頭にかけてを欠いている。一見して、小ぶりなつくりである点が目につく。

底径16cm、高さ22cmの、上にいくにつれてわずかにすぼまる円筒を基部とし、その上に上半身像をつくりつけたものである。底面から14cmの高さに断面M字形の凸帯がめぐらされており、これに接する上側には一対の偏平な円形透孔が穿たれている。その

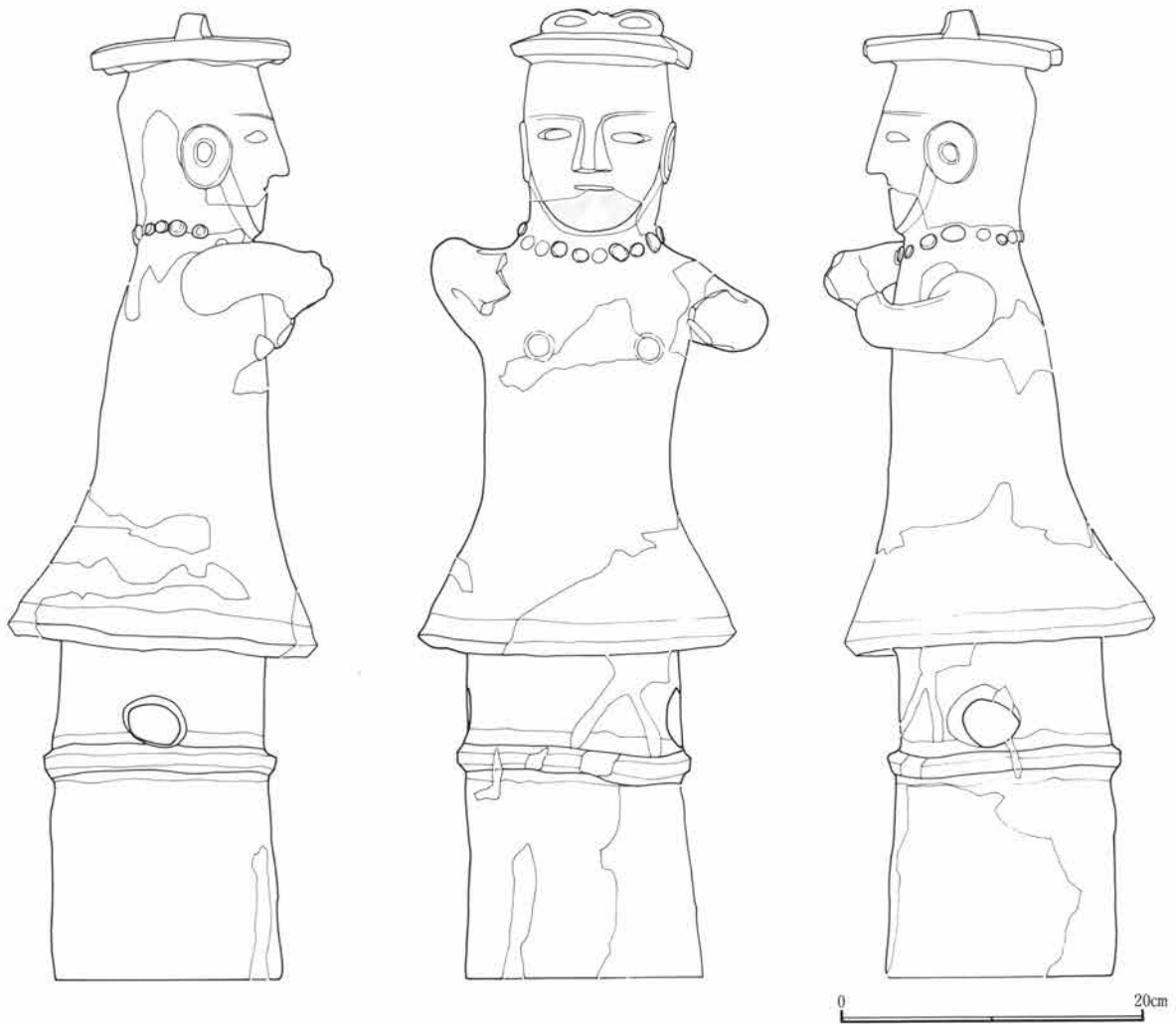
位置は、正面から見て両側にあたる。

像容は、両腕を斜め前方に水平に挙げ、肘から手にかけてを中心寄りに囲い込むように曲げている。踊るような仕草に見えなくもない。

衣服の表現は、腰の部分に裾広がりにつけられた上着のみであり、具体的な表現を一切行っていない。上半身は全体に、面調整のための縦ハケをそのまま残している。胸にあたる部分に一对のボタン状の乳房を貼付していた剥落痕があり、これを手掛かりにして女性像であることがわかった。

首の部分には、径1cm前後のボタン状の貼付を密に連ね、首飾りを表している。貼付の仕方は、団子状につくった小さな粒を押しあてたものである。

手の部分は、稚拙ではあるが1本1本の指を表現



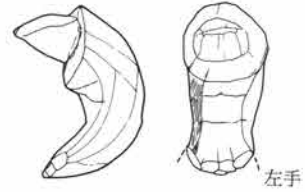
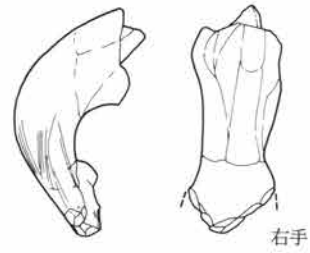
第30図 1号古墳人物1 (75) (1)

2. 1号古墳の調査

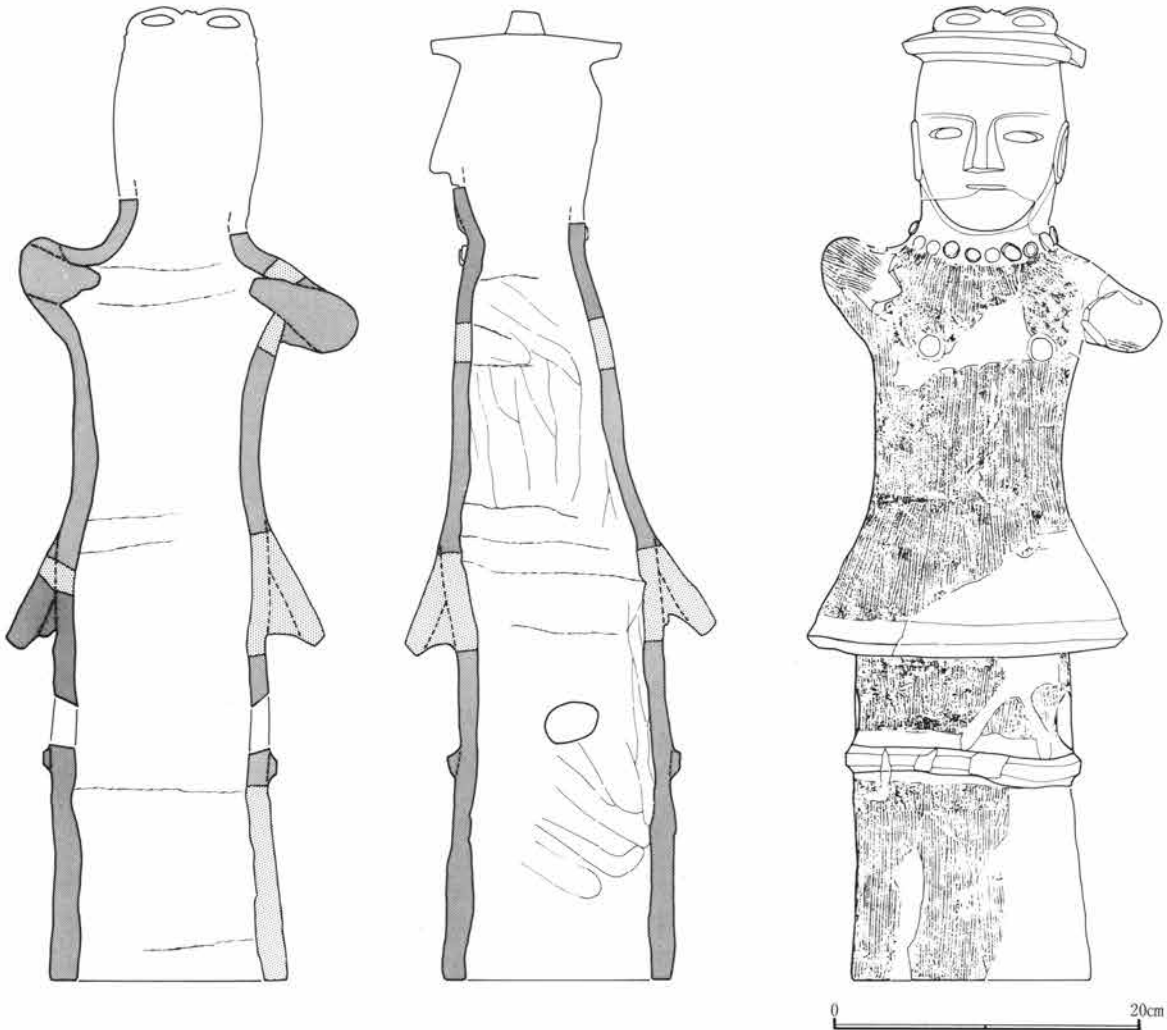
している。このうち、右手はものをつかんでいるようにも見えるが、指の先寄りを欠いているので断定はできない。腕は中実であり、肩の部分にあけられた穴に差し込むことにより接合している。

顎の部分には、口のところから頬にかけて斜めに赤色顔料が塗彩されている。現在確認できるのは、左頬のみであるが、当初は両側とも塗られていたものと推定される。

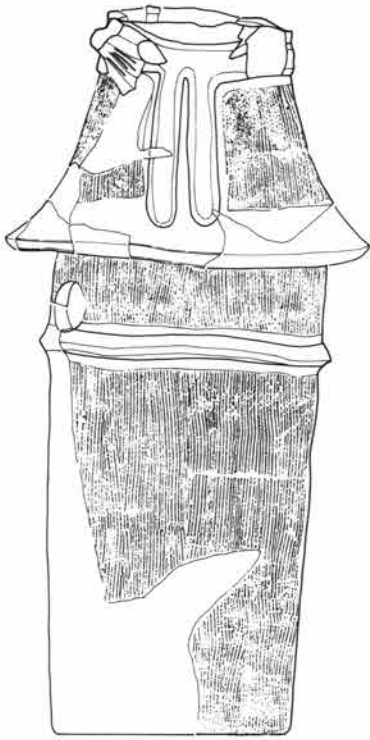
顔部は、円筒形につくられた本体に、肉づけをして顎から頬を表現している。口は、小さく、横一文字にヘラを差し込んでおり、内側に突き抜けていない点特徴的である。頭頂部を欠いているが、いわゆるつぶし島田髷であったと推測される。



0 10cm



第31図 1号古墳人物1 (75) (2)



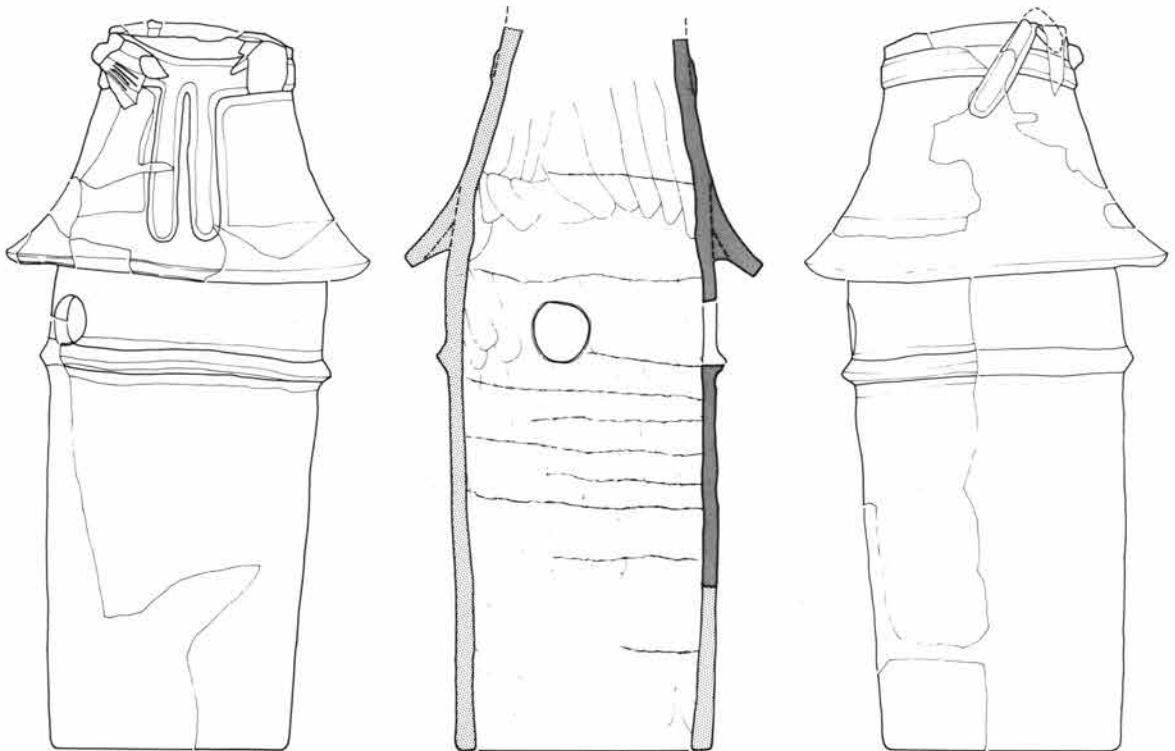
人物2 (76) 男性上半身像で腰から上の部分を欠いている。腰までの高さが47.5cmであることから、頭まであれば90cm以上の高さであったと思われる。人物1のつくりの粗雑さにくらべ、全体に丹念で手慣れたつくりである点が目立つ。

底径16.5cm、高さ32cmの円筒形の基部の上に上半身をつくり付けている。底面から25cmの高さに凸帯がめぐり、その上側に接して1対の偏平な円形透孔が穿たれている。

両手は腹部の中心からやや外側に離れた位置に押し当てており、手の指を1本1本表している点は人物1と同じである。

衣服の表現は、ラップ状に開く上着の裾部に加えて、隆起した腰帯がめぐり、正面中央に結び目から垂下された2本の帯先が造り付けられている。

背面にまわると、腰帯に鎌を模したと思われる貼付が認められる。柄を帯に対して斜めに差し込み、その上端に刃の部分が位置している。これを手掛かりとして男性像と判断した。



0 20cm

第32図 1号古墳人物2 (76)

その他の人物埴輪片 (77~84) 77・78の人物像の顔の顎から口にかけての破片から、少なくとも前述のものに加えて3個体分があったことは明らかである。いずれも人物1と類似したつくりであり、特に横一文字の切り込みによる小さな口の表現の共通性が注意される。このうち77は、胎土・焼成・色調等、人物1に共通するものであるのに対し、78は人物2にほぼ共通するものである。78と人物2は同一個体の可能性もあるが、77と人物1は別個体であるので、3個体以上の存在を知ることができるわけである。

79は人物の上着の裾部分の破片である。胎土・色調は、明らかに人物1とは異なり、人物2に近いものである。ただし、人物2のそれが外反しているのに対し、これはやや内湾しながら開いていることから別個体であることは明らかである。この像もまた上半身像であったとして間違いなからう。

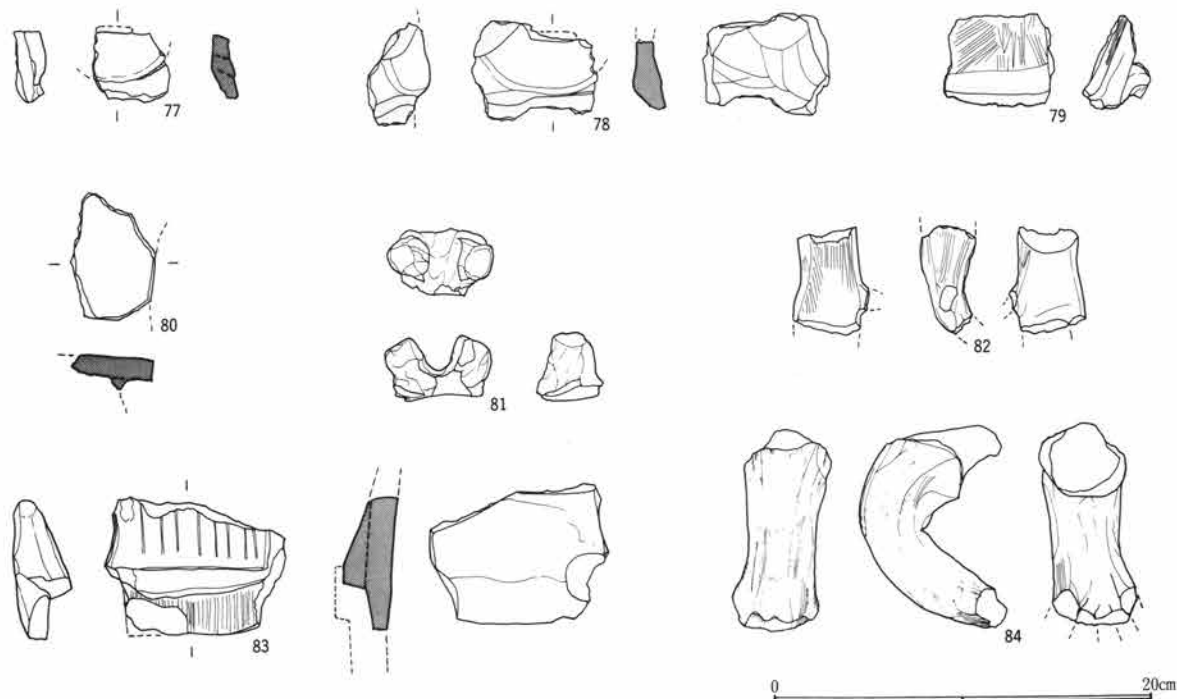
82・84は腕の破片である。このうち84は、胎土・色調・大きさが人物1と極似するものである。左腕であり、やはり水平に肩の高さまで挙げ、前方に折

り曲げている。また、腕全体にハケ整形をそのまま残している点も同様である。腕の長さが人物本体に比べて短すぎて、バランスの悪い人物1と同様のものであったことを推測させる。

82の胎土・色調は79と極似しており、同一個体の可能性がある。ハケ整形をそのまま残し、指を1本1本表現し、小づくりである点は、人物1の腕に共通するつくりである。

胎土・色調からするならば、83の破片は、上記の82・79に近い。この破片は、大きさ・形態的特徴から、男性人物像の背中に負わされていた鞆であったとして間違いない。像の背中に貼付されていたものであるため、平板なつくりになっており、矢筒と矢の部分が別づくりになっていたことがわかる。

以上から、本墳の人物像は、人物1の女性上半身像とほぼ同じ像容であった77・84を部分とするもう一体の女性像があり、人物2の腰に鎌を差した男性像に加えて、79・82・83を部分とする、背中に鞆を負った男性武人像の最低4個体があったことが推定されよう。



第33図 1号古墳出土人物埴輪片

II 神保下條遺跡の調査

1号古墳出土人物埴輪観察表

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
人物1 75	女性像	縦 65.0 横 22.5 奥行21.0	胎 D 焼 良好 色 赤褐色	12	本文参照	
76	人物 男性像 下半部	縦 47.5 横 24.5	胎 E 焼 良好 色 明赤褐色	11	本文参照	上半身を欠く
77	人物 顔下半部	縦 3.7 横 4.1 器厚 1.4	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		巻き上げ成形後、肉づけにより顎を表現。外面丹念なナデ、内面指ナデ。	
78	人物 顔	縦 5.2 横 6.6 器厚1.5	胎 B 焼 ふつう 色 淡赤橙色		巻き上げ成形後、顎部分を肉づけして表現。外面丹念なナデ整形後、内面指ナデ。顔面に赤色顔料塗彩。	
79	人物 衣服裾	縦 5.0 横 5.6 器厚 1.8~2.0	胎 B 焼 良好 色 橙色	12	体部に斜めに接続し、隙間に粘土を充填してナデつけている。外面縦ハケ、端部横ナデ。	
80	人物女性像 髪	縦 6.7 横 4.5 器厚 1.6	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		女性像の頭頂部の髪の部分。板状に成形し、球形に作られた頭部にのせ、接合部に粘土を擦り付けている。外面ハケ整形後ナデ整形。	
81	不明	縦 3.5 横 5.6 器厚 1.1	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		2つの円柱の突起を粘土で継ぐ。球形の本体から剥離した痕跡あり。突起の成形が粗雑である。手捏成形。	人物の髪にしては作りが粗雑
82	人物 右手	縦 5.7 横 3.8 器厚 2.6	胎 B 焼 ふつう 色 明赤褐色		指を1本ずつ表現する。外側はハケ整形、内側はナデ整形。	
83	人物 背中に付く 鞆	縦 7.2 横 9.5 器厚 2.7	胎 D 焼 良好 色 橙色		上半部と下半部が別作りで、前者を後者に差し込んでいる。内面に本体からの剥落痕あり。上端寄りには背中和離れていた事がわかる。弓矢を線刻で表現している。	
84	人物 右腕	縦 10.6 横 4.6 器厚 4.3	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		肘の所で直角に曲がる。指を一本ずつ表現している。外側は縦ハケ後荒いナデ整形、内側は丹念なナデ整形。	

馬形埴輪 (85~88) 馬形埴輪は少なくとも2個体あったことがわかる。そのうち85は比較的破片が多く、その全容をおおよそ知ることができる。しかし、完形に復元するには、破片がかなり足りないため、部分ごとの復元にとどめた。その上で、全体のバランスを考慮し、2号古墳の馬形埴輪を参考にして図上復元を試みたのが第37図である。これに近いものであったとしてよいであろう。86は口の部分の破片であるが、85にも同一箇所が存在していることから少なくとも2個体の馬があったことを知ることができる。ここでは、85の馬についてさらに具体的

に見ていくことにする。

残存していたのは、顔から胸、前輪にかけてと、障泥の一部、尻尾、さらに前足、後足各1本である。図上復元によれば、最大高84cmで、口先から尻尾の端までの長さ94cmであった。

頭部は、粘土紐により円筒形につくられた本体の両側部の下側に顎を表現した板状の付け足しを行って基礎部分をつくる。これに、眼および鼻孔を穿孔している。顎の下面には、前寄りに円形の、後寄りに長円形の小孔が穿たれているが、馬の形態的な表現ではなく、製作上の機能からくるものと考えられ

る。また、口の先端寄りの両側には、鏡板の位置まで及ぶ切り込みが入れられており、口の表現であることがわかる。

耳は頭部を円形にくり抜いて、筒状のものを取り付けている。

たて髪は、ゆるやかな弧を描く板状のもので、縁部にそってナデ整形がなされているのみである。その前端の結び飾りにあたる部分は、板状の部分に連続して単にL字状に突出するだけの簡略なものである。

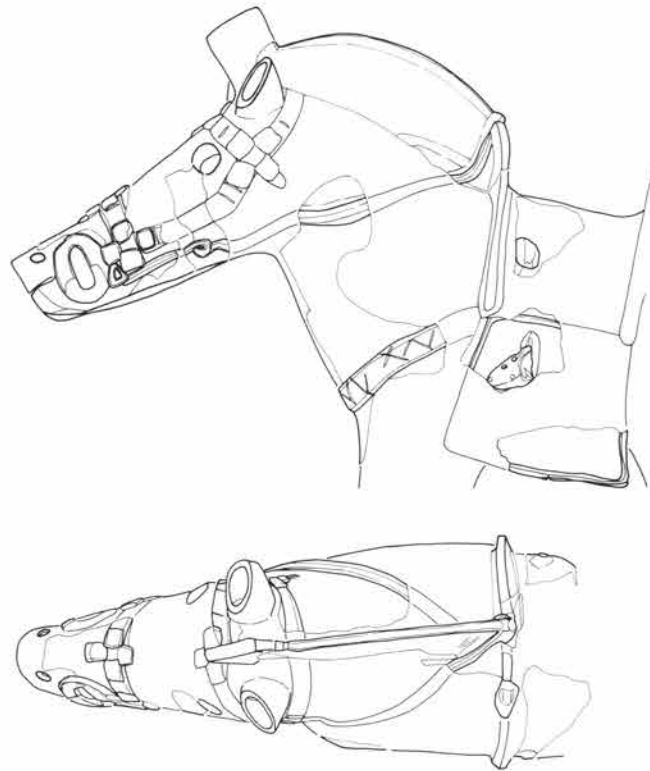
次に轡部分のつくりを見てみると、鏡板は、素環形式のものを粘土帯の貼付で表し、これに接続して引手を表す粘土紐の貼付がある。鏡板との接続部及び手綱との接続部は円環状に丸めて形状を忠実に表している。引手壺に接続する手綱は、断面台形の凸帯状をなし、両側からたて髪と前輪の接続部にいたり、前輪の上端の中心で合流して終わっている。

面繫は幅約2cmの粘土帯の貼付により表されている。その構造は、鏡板から出て、両側部を耳の下まで達し、後頭部からたて髪にいたるものに対し、鼻と眼の間、眼と耳の間で横巻きされている。その結節点にくる辻金具は、帯の交差部分に接する4ヶ所に方形の粘土板を重ね合わせて、十字形に形どっている。辻金具は都合6ヶ所に配されている。

胸繫は、幅2.5cmの粘土帯の貼付によるもので、ヘラにより鋸歯状に線刻して装飾としている。前面の中央と両側の前寄りの帯の下側に接して円形の剝落痕があり、85と同種の鈴が取り付けられていたことがわかる。

次に鞍は、前輪のみ残存している。両角は丸く仕上げられているが、側部は垂直に近く垂下している。縁部を横ナデ整形している以外は、ハケ整形をそのまま残しており、特別な表現は認められない。

前輪の下端部に接する居木側の側部に鏡を垂下させるための鞍への取り付け部分の金具とこれに接続する兵庫鎖の上端部の表現が貼付されている。



第34図 1号古墳馬(85)(1)

障泥は腹部下端寄りに取り付けられた台形の板状のもので縁部に沿って凸帯をめぐるす以外は、細かい表現は見られない。

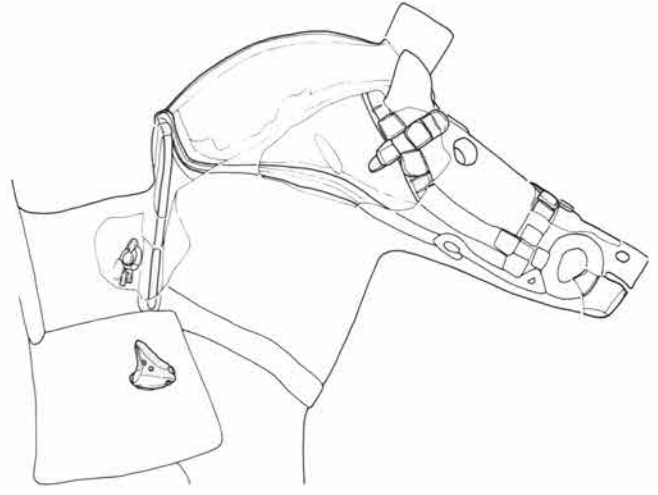
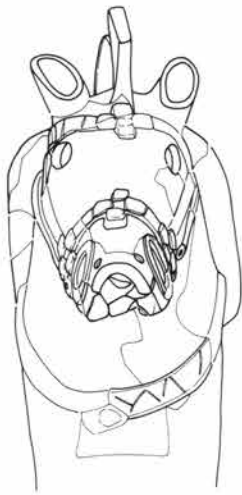
鏡は、障泥の前上端寄りに貼付されており、壺鏡の形式を表している。横長の三角形をなし、壺部分をリアルにつくっている。表面には、笠鉾を表したと思われる粘土粒が貼付されている。

尻尾は中実であり、尻部に根元を差し込んで装着している。表面は、ハケ整形をそのまま残している。

足は、長さからすると、膝から下寄りを残すものである。稲村繁の指摘する粘土紐を継ぎ合わせて粘土板をつくり、これを円筒状に合わせてつくったとする手法(『MUSEAM』425号)の可能性が強いが、断定はむずかしい。踵の部分は、下側からU字形にくりぬいて蹄の表現をしている。

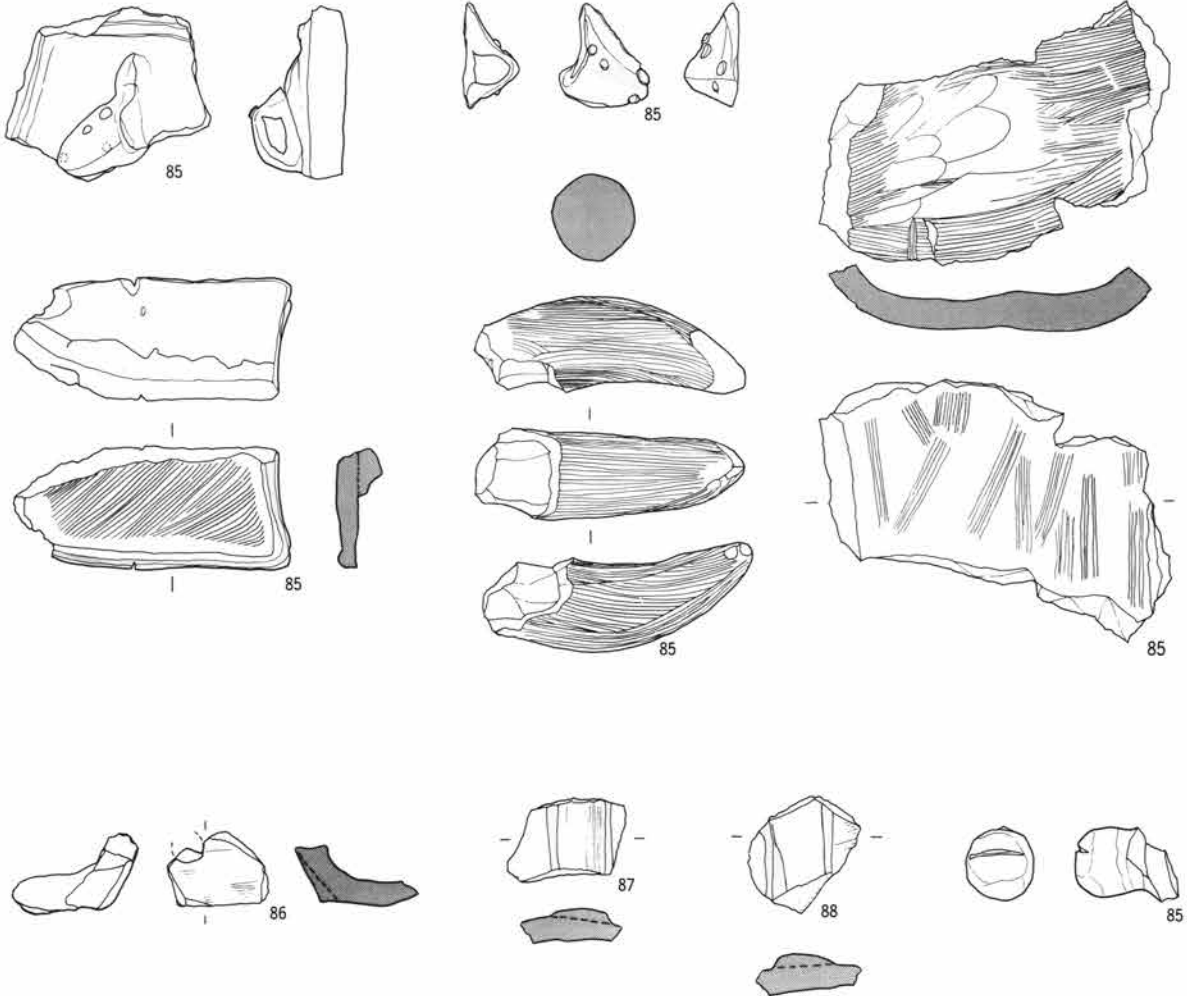
辻金具と革帯の接続部、尻繫と思われる87・88の両側部、壺鏡の表面等に、赤色顔料の塗彩が認められるが、実際には、これを大きく上まわる各処に塗彩が行われていたものと推測される。

II 神保下條遺跡の調査



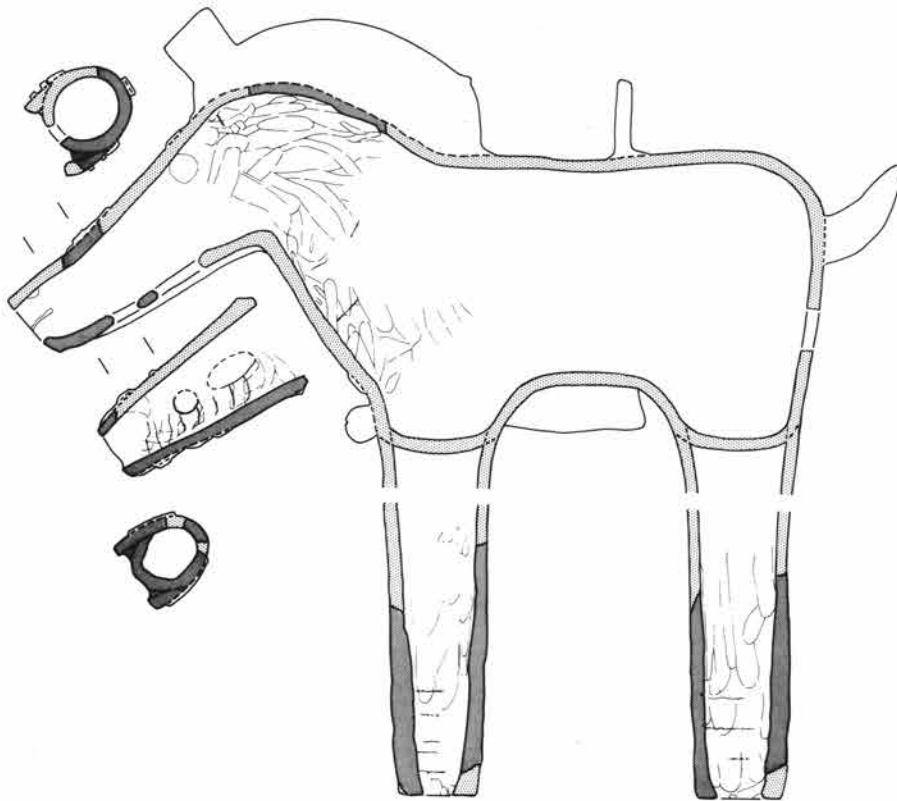
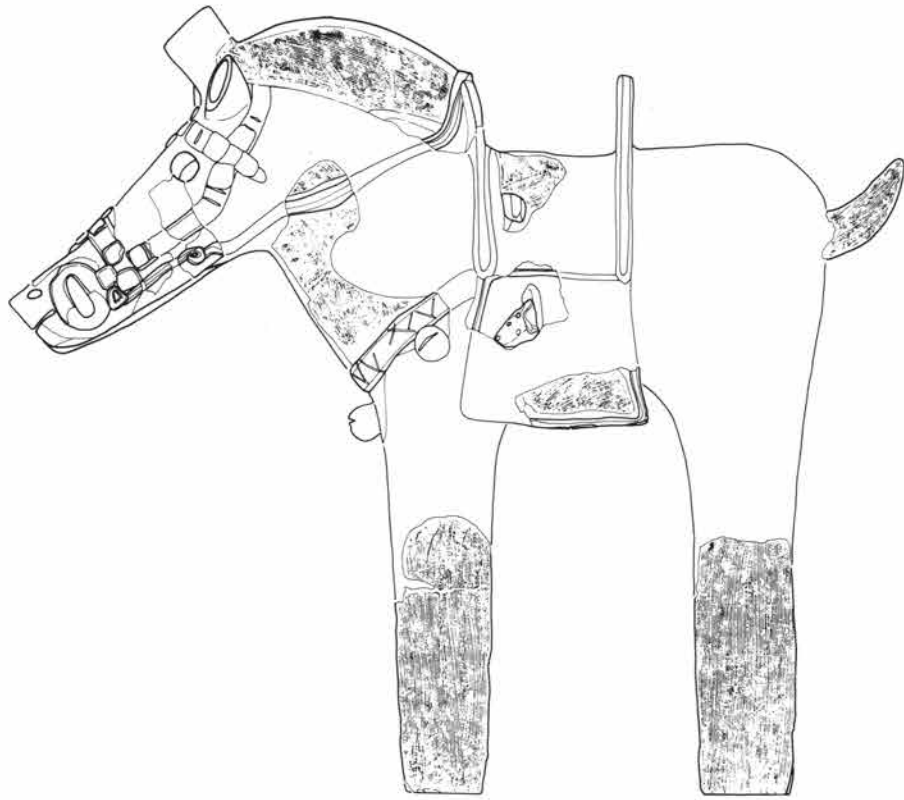
0 30cm

第35図 1号古墳馬(85) (2)



0 20cm

第36図 1号古墳出土馬形埴輪片



第37図 1号古墳馬(85) (3)

II 神保下條遺跡の調査

家形埴輪 (89) 高さ103cm、最大幅52cm、奥行き32cmに復元された入母屋造り式のものである。

上屋根、四柱部を中心に、ポイントになる部分が残っていたので、遺存率は低い石膏を補充しての復元に大略成功することができた。

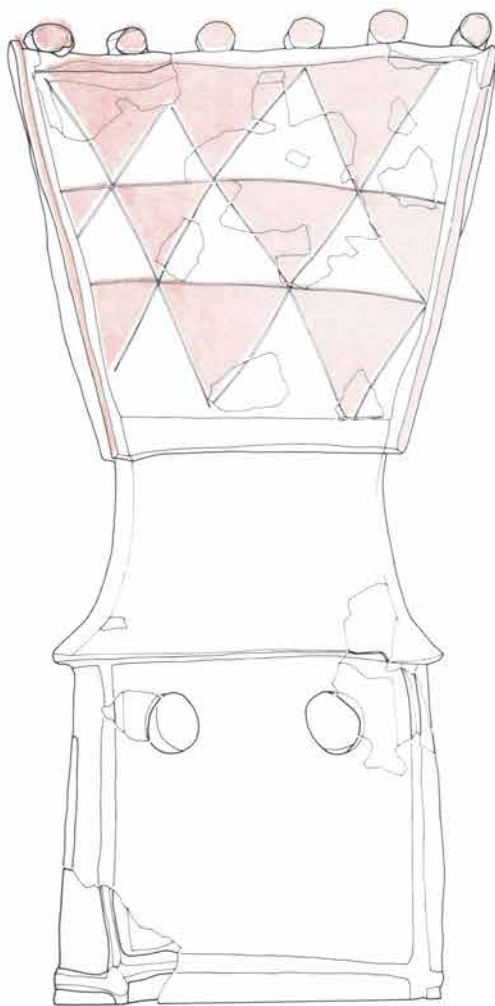
構造上の最大の特徴は、上屋根（切妻部）を異常に大きく誇張したプロポーションにある。この特徴は、関東地方を中心として出土する6世紀の入母屋造り式のものには、その程度の差こそあれ、共通して認められる点である。

四柱部は、基底で桁方向41cm、梁方向32cm、高さは34cmで、上に行くにつれて壁面はややすぼまり気味である。平面形は、長円形に近い隅丸長円形であり、壁面は各辺とも中心寄りでも最も外側へ膨らむ弧

状を描いており、四柱をあらわす四隅の縦位の凸帯の貼付により視覚的には長方形に見える。この長方形の形状は、製作上から生じたものと思われる。また、下端から1.5cmの高さには横方向に凸帯が一回りしている。

壁面上寄りには窓が開けられているが、桁側は柱寄りに円形のものが一對4個、梁側は中心に縦方向の長方形のものが各一個である。

下屋根（入母屋部分）は、軒が約2.5cm出ており、5cmほど内側までは約45度の角度をなし、そこから上端までは、垂直に近いほど急激に立ち上がっている。この部分の破片はわずかにすぎないが、構造的に、下屋根から、上屋根（切妻部）まで一体として製作していることから、上述の屋根の傾斜の推定は

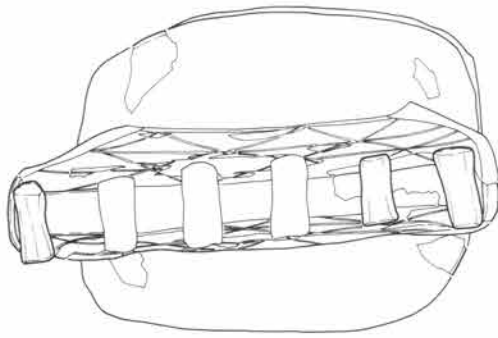


0 30cm

第38図 1号古墳家(89) (1)

間違いないものと思われる。

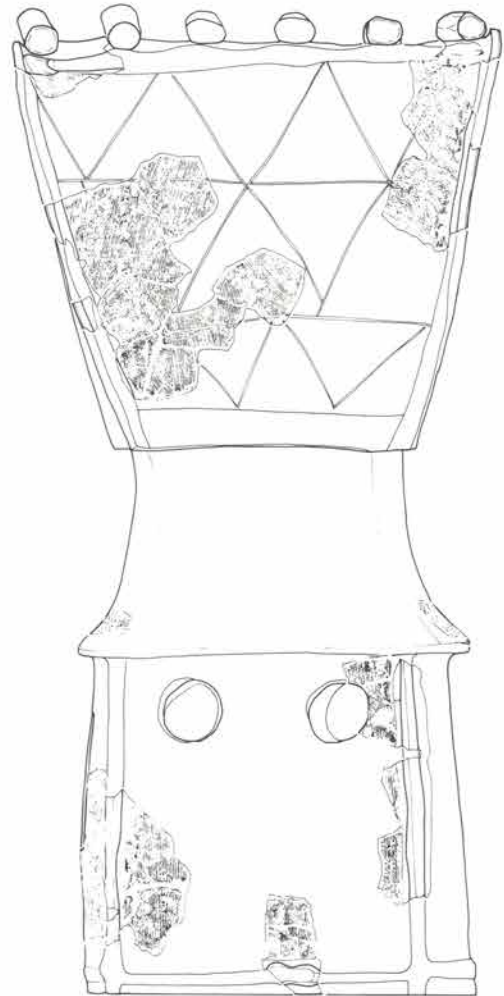
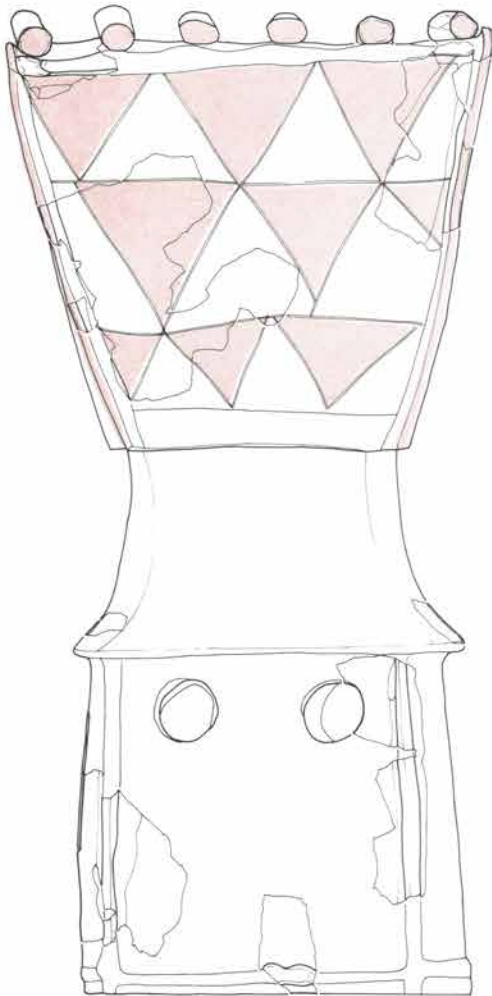
次に上屋根（切妻部）について見てみると、屋根



の傾斜がほとんど垂直に近い角度であり、合掌部分は横から見てコの字形を呈している点が特徴的である。

上屋根と下屋根の接続の仕方を具体的に観察してみると、長方形の筒状につくった下屋根の構造をそのまま上屋根の下寄り1/3のところまでのばす。この上に2枚の粘土板をコの字形に接合した上屋根をそのままのせるわけであるが、下屋根からのびてきた筒状部分で上屋根の中心寄り下端部と重複する部分のスペースを、上屋根からくりぬいておき、上屋根で下屋根を挟み込むようにのせるわけである。

上屋根は正面から見て、両側のラインが内側にやや傾斜する逆台形状を呈している。

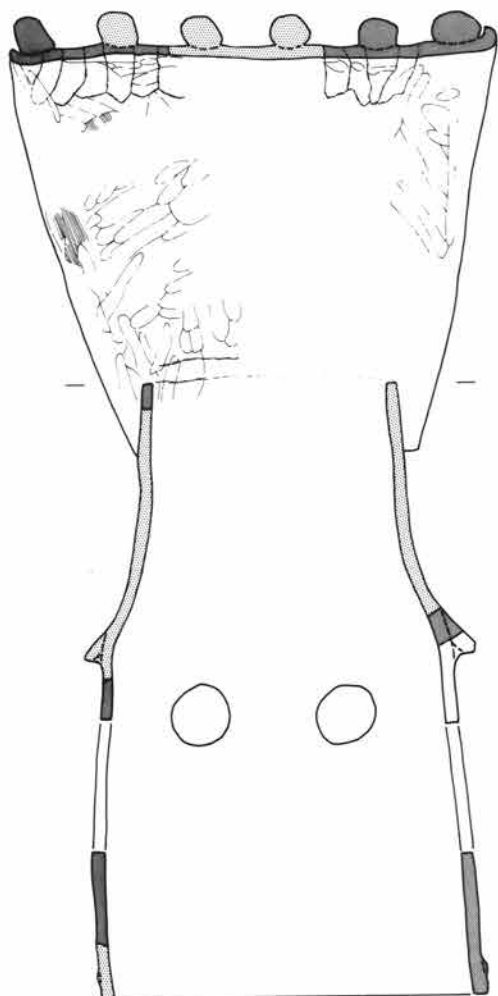
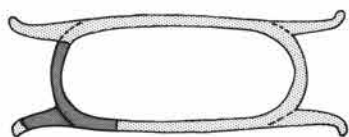


0 30cm

第39図 1号古墳家(89) (2)

II 神保下條遺跡の調査

流れの部分には、先端の鈍いヘラによる沈線が施されている。その構成は、上、中、下の三段に区画され、さらに各段の中が鋸歯状に描かれている。幾分精確さを欠く部分もあるが、上下で鋸歯の位置が1単位ずつずれる描き方を取っている。さらに、沈線で構成された区画のうち、逆三角形を呈する部分には赤色顔料が塗彩されている。横方向では一つおきに、上下方向では互い違いの位置が塗彩されることになる。

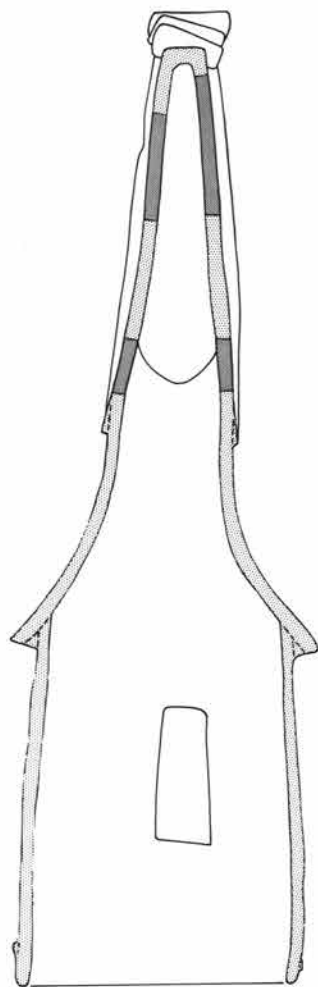


棟頂部は幅6cmの平坦面をなし、流れ部分の上端との境は、幅広の凸帯により区画している。この頂部には、径約3cm、長さ約8cmの不整の円柱状をなす堅魚木が6個(うち3個が残る)が架されており、小口面には赤色顔料が塗彩されている。

合掌部分の構造は、あらかじめコの字形に棟頂部をつくり、これと別づくりの2枚の流れ部分を接合する方法をとっている。

破風の部分は、上屋根の妻側の端部を約2cm外側に折り曲げた簡略なものである。その縁部には赤色顔料が塗彩されている。

外面は、縁部と凸帯を除いて、全体にハケ整形を残しており、内面の整形は、指ナデを主体とし、ハケ整形を一部に使用している。



第40図 1号古墳家(89)(3)

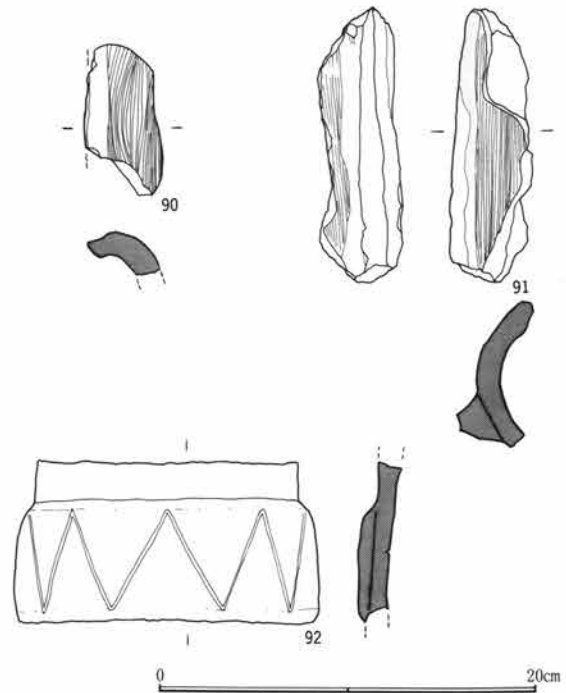
器財形埴輪等 (90.91.92) 90は家形埴輪の破風の一部の破片と考えたが、決め手に欠ける。出土位置は、1号と2号の間で、表土中からなので、2号に伴う可能性もある。

91は器財形埴輪の下部寄りの破片と思われるが、種類は特定できない。細身の長円形で筒形をなす本体部分の側部に縦位の凸帯が取り付けられている。

92は、靱形埴輪の下半部の破片である。径約13cmの円筒形をなす本体に対して、その正面側のみに幅6.5cm、厚さ4mmの帯が横位に取り巻く。その表面には、ヘラ描きにより鋸歯状の線刻がなされている。

外面はナデ整形により平滑に仕上げられ、内面は縦指ナデが施されている。

形態、製作手法等、2号古墳出土の靱形埴輪とよく似ている。



第41図 1号古墳出土家・器財形埴輪片

1号古墳出土馬・家・器財形埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
85	馬	縦 82.0 横 94.0 奥行25.0	胎 C~D 焼 良好~ふつう 色 橙色~赤褐色	12	本文参照	法量は復元推定
86	馬口	縦 3.8 横 5.4 器厚 1.5	胎 A 焼 極めて良好 色 明赤褐色		円筒状に作った口寄り部分の本体の側部下端に粘土を付けたして顎を表現している。穿孔による鼻の穴は通例より先端寄りである。	
87	馬革帯	縦 6.3 横 4.4 器厚 1.3	胎 B 焼 極めて良好 色 赤褐色		筒形を成す本体に幅広で低い革帯を表す粘土帯を貼付する。外面ハケ整形後ナデ。内面指ナデ。	帯に沿って赤色顔料塗彩
88	馬革帯	縦 5.9 横 6.1 器厚 1.3	胎 B 焼 極めて良好 色 赤褐色		筒形を成す本体に幅広で低い革帯を表す粘土帯を貼付する。外面ハケ整形後ナデ。内面指ナデ。	帯に沿って赤色顔料塗彩
89	家	縦 103.0 横 52.0 奥行32.0	胎 B~C 焼 良好 色 橙色	11	本文参照	法量は復元推定
90	不明 (家の屋根の妻部分?)	縦 7.8 横 4.0 器厚 1.3	胎 C 焼 ふつう 色 橙色	12	端部が外側に開く。内側はハケ整形、外側は指ナデ。	
91	器財 下半部	縦 14.5 横 4.0 器厚 4.0	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	11	横断面が楕円状を成す体部に、縦方向にタガが付く。外面縦ハケ、内面縦指ナデ。	
92	靱 下半部	縦 8.5 横 16.1 器厚 1.7	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		円筒形を成す体部の前面に鋸歯文を線刻した帯が取り付け付く。器面丹念なナデ。内面縦指ナデ。	

3. 2号古墳の調査

1号古墳の北北東側に隣接している。調査前には1号古墳1基のみではないかと考えていたが、調査途中で隣接してもう1基存在することが明らかになった。そのことは、本墳の墳丘の遺存状態のわるさを物語るものである。墳丘の東半分は、この土地の所有者が、かつて畑地耕作の途上で、削平し、畑地化したとの話を聞くことができた。この削平は、古墳の基底面下にまで及んでおり、痕跡すら残していなかった。墳丘の西側半分も、上寄りの削平がかなり及んでおり、畑の耕作で出てくる礫が雑然と厚く寄せかけられていた。

古墳の北側半分は、工事予定地外となっていたため、調査はその南半分についてのみ実施した。畑地化のため深く削平された部分を除くと、実際に調査できたのは、古墳全体の4分の1以下であった。

墳頂部及び墳丘周囲に樹立されていたものと推定される埴輪は、早い段階に崩落し、厚く覆土が堆積したため、予想に大きく反して、遺存状態は非常に

よかった。

主体部は横穴式石室の壁体と思われる一部が残っていたが、あまりにも遺存状態がわるかったため、具体的な内容はよくつかめていない。

(1) 墳丘及び外部施設

墳丘 本墳の場合も、墳丘の基盤をなすのは、当時の地表面であるローム層上の黒褐色土層であった。1号古墳以上に墳丘の削平が著しく、明らかに当初の状態を残していたのは、基底面から50cm前後の高さまでであった。墳丘を構成しているのは、わずかに遺存している部分について見る限り、1号古墳と同じく礫を主体とするものである。消失してしまった上半部も、墳丘裾に崩落した多量の礫と、最近耕作者が墳丘に寄せかけた多量の礫の存在から、同様の構造であったことを想定することができる。

葺石 墳丘の裾部には礫による葺石が施されていた。葺石の残存部分は、2～3段程度であり、概して人頭大程度の扁平なものが多い。根石に取り立てて大きい石が使用されているわけでなく、石の目地を揃える意図も見受けられない。



2号古墳埴輪調査風景

3. 2号古墳の調査

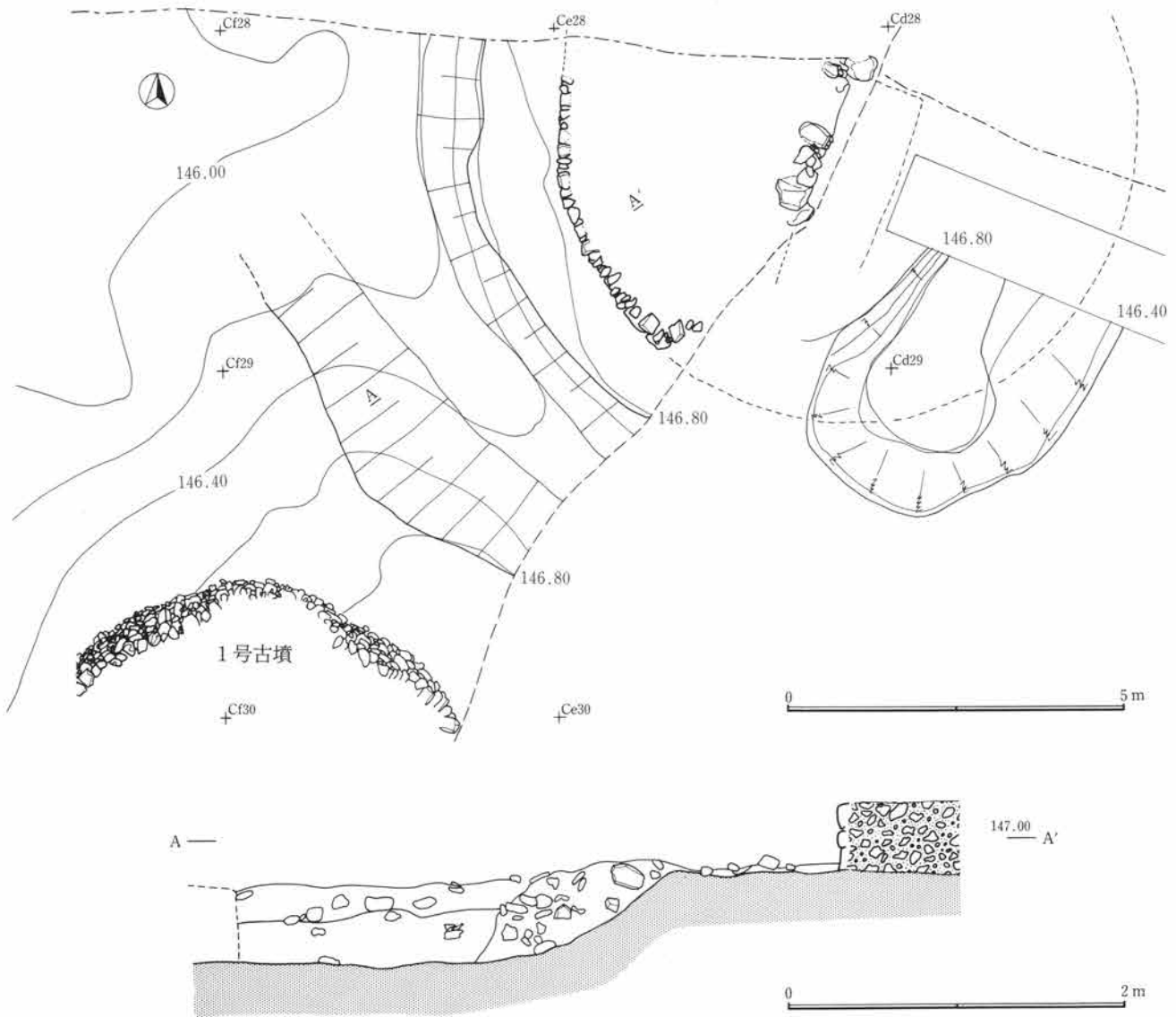
テラス面と周堀 葺石の根石部分から外側へ約1mの間は平坦面をなすテラス面となっている。この面は、墳丘基底面と同一であり、当時の地表面にあたるものである。その縁辺部に沿って周堀を削り込むことにより、テラス面を含めた墳丘の区画をしているわけである。墳丘南側では、旧地表面から約50cmの深さまで削り込んでいる。その結果、テラス面は、見かけ上の基壇面をなすことになる。この構造もまた、1号古墳と同様である。

墳丘の周囲には、明瞭な周堀は見い出されなかった。墳丘東側の削平部分にそれらしき落ち込みがあったが、層序的に古墳築成前のものであることが

明らかになった。もし、周堀があったとしても簡単に区画する程度のきわめて浅いものであったことになる。1号古墳と同様に、墳丘の構成材が礫を主体としているために、深く掘削して採土をする必要がなかったためと思われる。

墳丘の遺存部分は少ないが、円墳であることは明らかである。その規模は、葺石部分で径約8.5m、テラス縁辺部で径10.5mであったと推定される。

墳丘西側の裾部は近世の墓地と重複しており、その痕跡を物語る陶器、古銭等が出土している。ただし、この付近は、調査前の墓地移転に伴う掘削が広く及んでいたため、詳細は明らかでない。

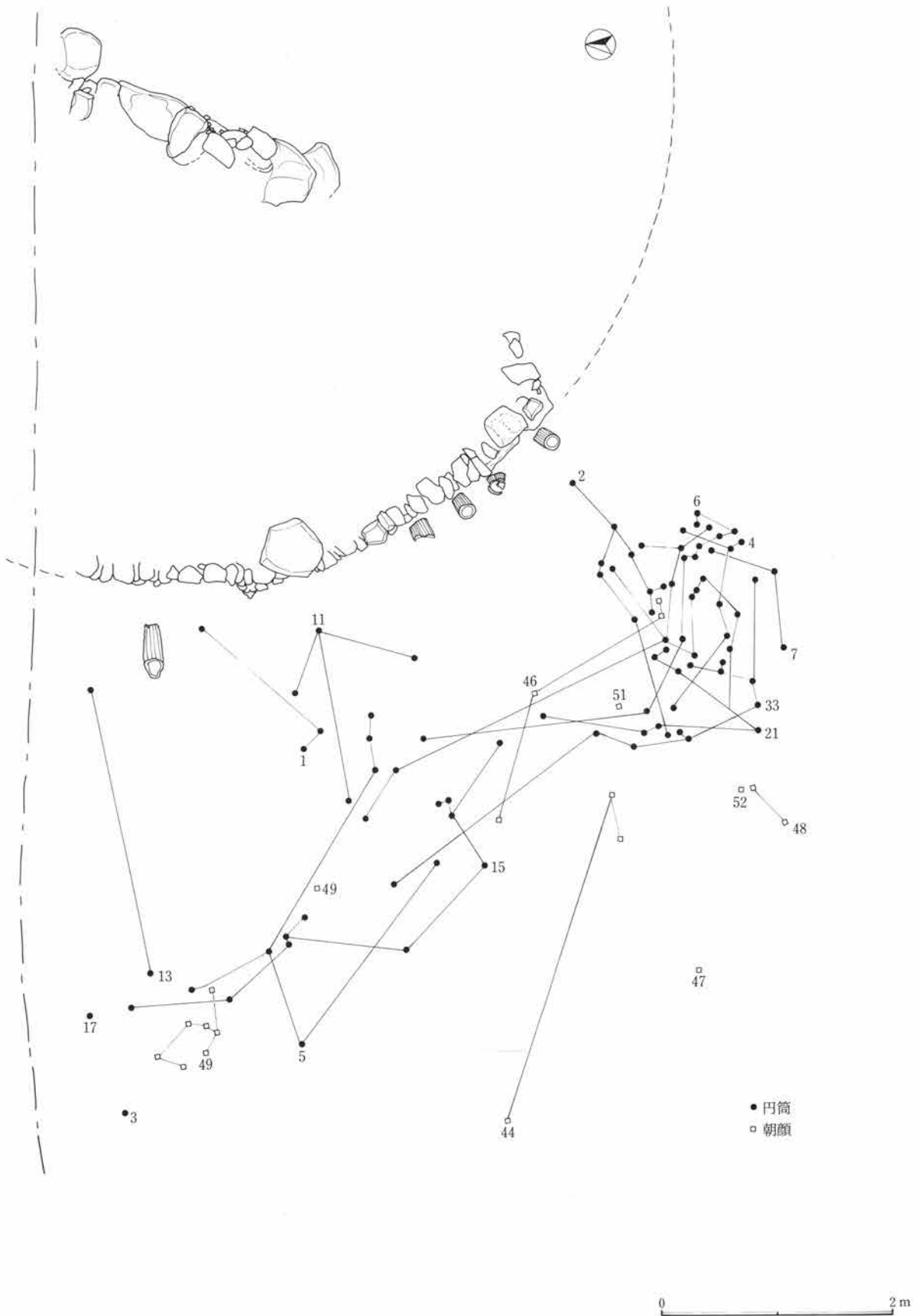


第42図 2号古墳全体図及び墳丘断面図

II 神保下條遺跡の調査

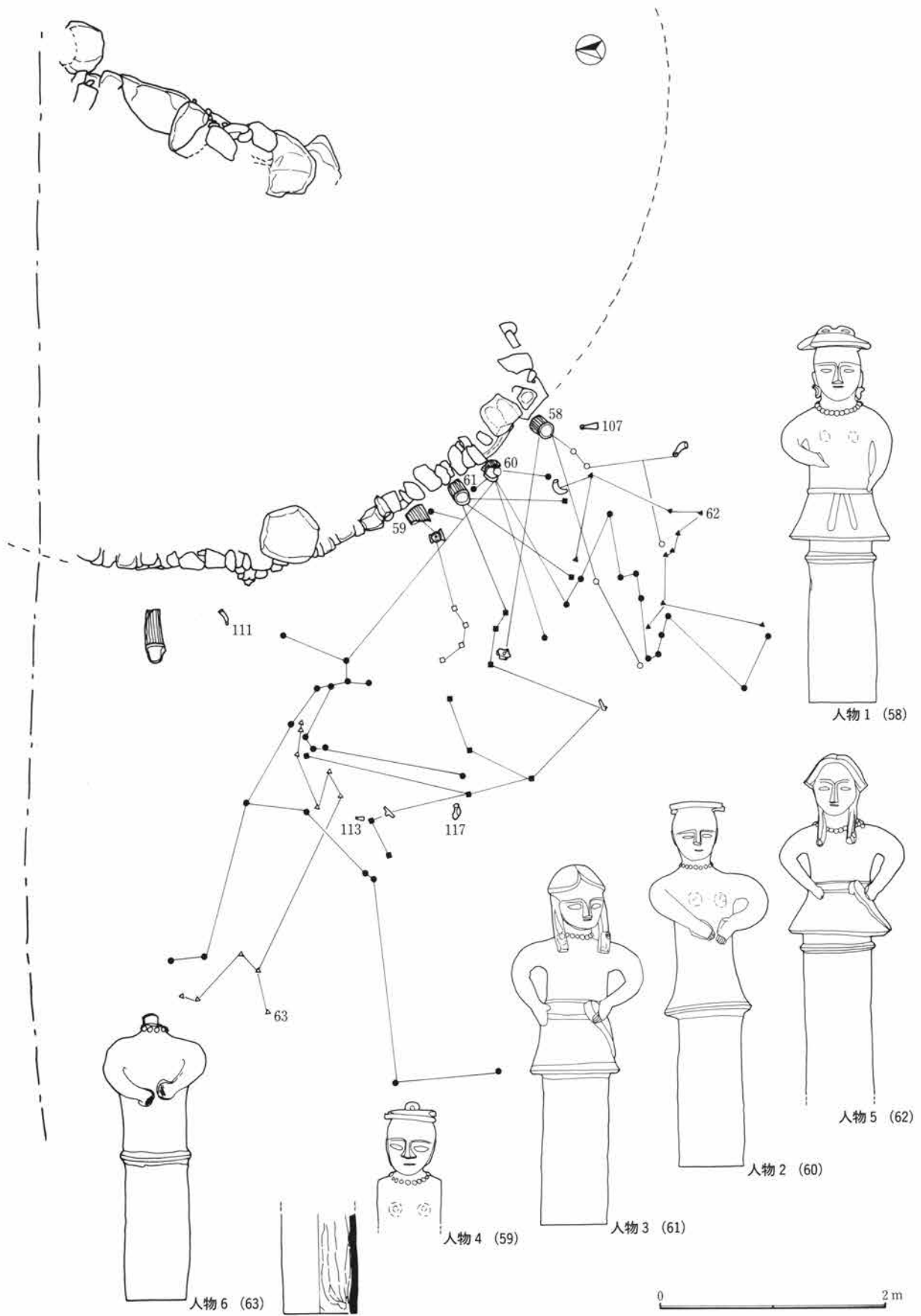


第43図 2号古墳埴輪出土状態

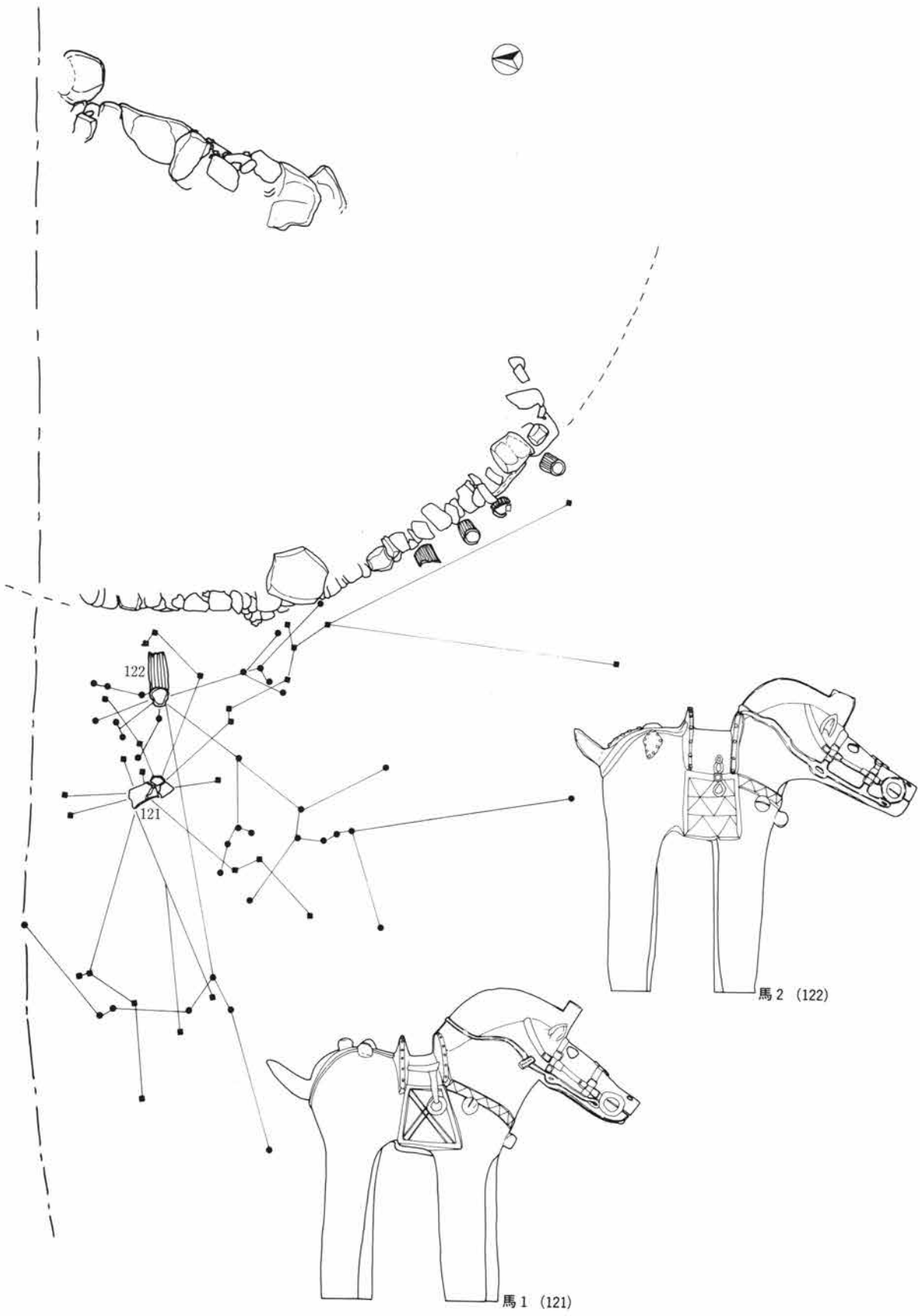


第44図 2号古墳円筒埴輪出土位置及び接合関係

II 神保下條遺跡の調査

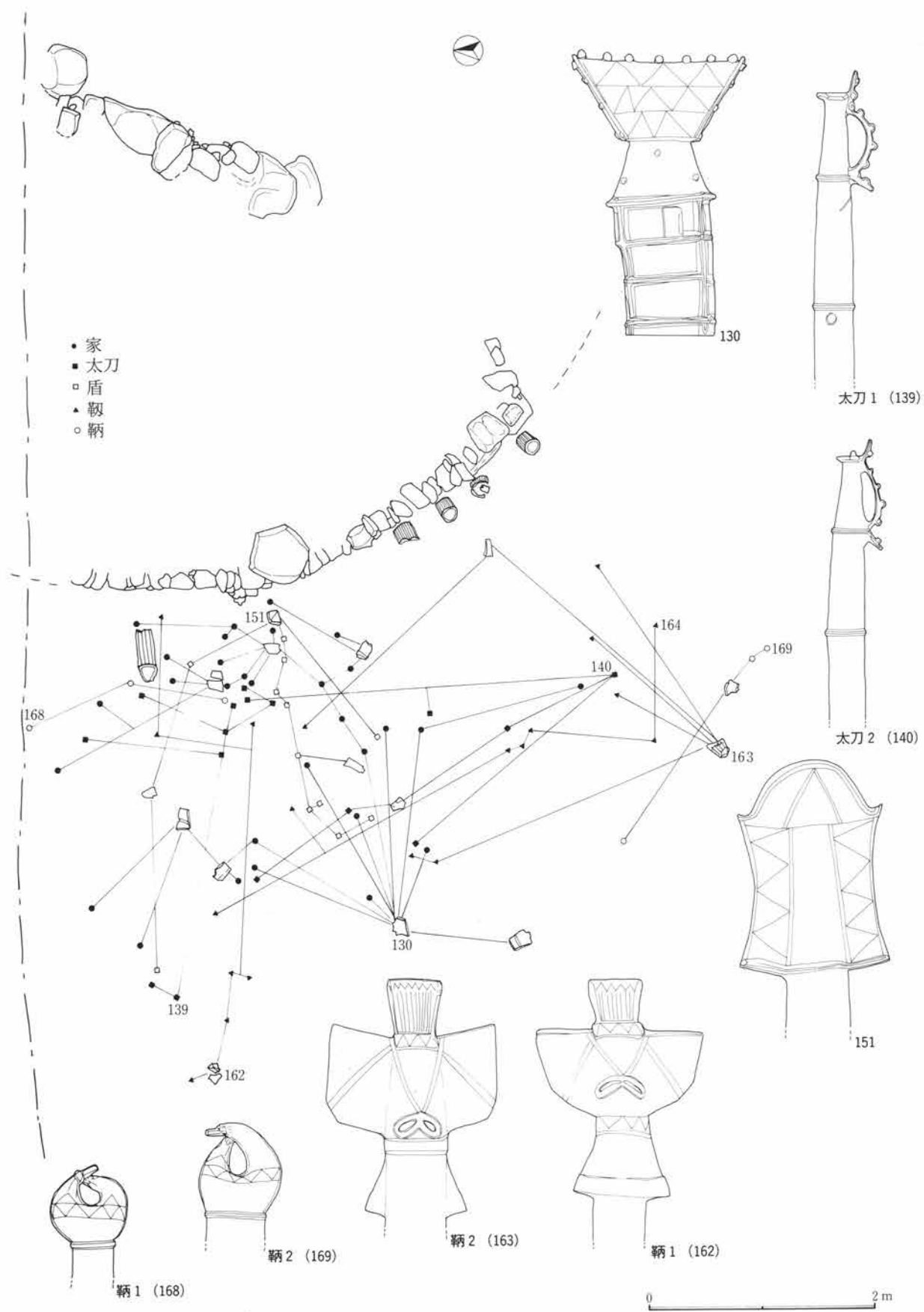


第45図 2号古墳人物埴輪出土位置及び接合関係



第46図 2号古墳馬形埴輪出土位置及び接合関係

II 神保下條遺跡の調査



第47図 2号古墳家・器財形埴輪出土位置及び接合関係

(2) 主体部

調査前のこの土地の耕作者からの聞き取りにより、本墳の主体部が横穴式石室であったことがわかった。この石室を含めて墳丘の東半分を平夷して畑地にしたわけである。石室に使用されたとおもわれる比較的大ぶりの結晶片岩、牛伏砂岩が、遺存する墳丘部分に寄せかけてあった。第42図の東寄りで南北方向に認められた石組は、畑地と古墳を区画するために石室の壁石材を使って組みなおしたものである。具体的には不明であるが、この位置に近いところに横穴式石室があったものと思われる。

(3) 埴輪列

1号古墳にくらべて遺存状態がわるく、調査範囲も狭かったにもかかわらず、これを大きく上回る埴輪が出土した。出土した範囲は墳丘の南西側で、全体の5分の1以下の範囲である。それにもかかわらず、人物、馬、家、器財（太刀、盾、鞆、鞆）等、復元できた形象埴輪は多数にのぼり、また、これらとともに大量の円筒埴輪（含む朝顔）が出土した。

出土状態 出土した埴輪の大半は、テラス面の外側にあたる、1号古墳との間に挟まれた周堀状の凹地部分から出土した。1点1点が非常に細かい破片となっており、凹地の底面から60cmぐらいの高さまで、途切れることなく幾重にも重なって出土した。この大量の埴輪片に混在して、埴輪を上回るほどの礫が出土している。これらの礫が、墳丘の崩落に伴うものであったことは、容易に想像されるところである。この墳丘（礫）の崩落が、墳頂部あるいは墳丘周囲に樹立されていた埴輪列をいっしょに下方へ押しやったものと思われる。埴輪は足の踏み場もないほどに密集しており、調査を大変手こずらせたが、それだけ調査後の整理作業に期待をもたせるものであった。

接合作業により復元できた個体が多かったことは、埴輪が正位置に樹立されていた段階からそれほど時を経ないうちに墳丘（礫）の崩落が進行したことを物語るものと言えよう。

次に埴輪の種類ごとに出土状態を具体的にみてみ

ることにする。

円筒・朝顔形埴輪で原位置をとどめるものは1点もなかった。次に述べる人物・馬形埴輪が、葦石に接するテラス面で列状をなして原位置で確認されているが、これには円筒・朝顔形埴輪が含まれていない。このことと、大半の円筒・朝顔形埴輪がテラス面の外側から出土していることを考えあわせると、テラス面の縁辺部に墳丘を画するように列状に樹立されていた可能性が考えられる。この樹立位置は、1号古墳の場合と同じであるが、後者では、同じ列状に、造り出し状施設の位置で人物・馬形埴輪が連なっていた点で異なっている。

前述したように人物・馬形埴輪の中にその基部を原位置に残していたものがあつた。人物埴輪が4個体（人物1、2、3、4）と馬形埴輪が1個体（馬1）である。それらはいずれも葦石の根石に接するような墳丘に近い位置に設置されていた。

人物1は推定される石室開口位置から北西へ1.7mほど寄ったところである。墳丘の崩落による打撃のためと思われるが、上半部を失い、基部のみが外側に少し傾いて出土した。これに接合する破片の大半は基部の外側の斜面に散乱していた。基部に穿たれた1対の円形透孔が、墳丘ラインと平行する位置にくることから、人物の正面を墳丘外側に向けて樹立していたことがわかる。

人物1から北西へ60cmの距離をおいて人物2の基部が原位置で出土している。これに接合する破片の半分ほどは、その外側の斜面部から出土し、残りの半分ほどは基部からみて北西方向の斜面部に適当なまとまりをもって出土している。この場合も、埴輪の正面を墳丘外側に向けて樹立されていたことがわかる。

人物2から北西へ35cmの距離をおいて人物3の基部が原位置で出土した。これに接合する破片は、その外側の南西斜面に比較的まとまって出土している。基部に穿たれた1対の透孔が、墳丘ラインと平行する位置にくるように樹立されていることから、この場合も人物の正面を外側に向けて樹立されてい

II 神保下條遺跡の調査

たことがわかる。

人物3から北西へ40cmの距離をおいて人物4の基部が原位置で出土した。その周辺にある人物の破片が接合して、女性像の首から頭部となった。中途の部分は欠けるが、位置関係、埴輪の胎土・色調から両者が一個体の部分をなすと推測される。

人物1と人物2の間隔は、人物2と人物3、人物3と人物4の間隔にくらべてあきすぎており、中間にもう一個体分が樹立されていたと考えると、相互の間隔がちょうど等間隔になる。人物1と人物2の基部の位置する外側の斜面部に比較的破片がまとまっており、接合の結果1個体分になった人物5が、この位置におかれていたものと推定される。

これらとは別に破片の接合によりほぼ一個体分になった人物6は、人物4と後述する馬形埴輪の間に置かれていたものが破砕して転落したことを推測させるような斜面部に比較的まとまって出土している。

馬形埴輪はこれら人物埴輪につづいてテラス面に樹立されていたようである。確認された限りでは3個体分の存在がわかるが、完形に近く復せたのは2個体分である。このうち馬1の前足が原位置で外側に向けて倒れ込んだ状態で出土した。この位置は、人物4から北へ2.5mのところであり、これに接合する破片が周囲に散乱した状態で出土している。

一方、馬2は、明らかに原位置を保っているものはないが、これに属する足の破片の大部分が、人物4と馬1の間で、馬1に寄った位置及びその下方から出土していることが、整理作業で明らかになった。これらのことから、人物6につづいて、馬2、馬1の順でテラス面に配置されていたことが推測される。馬1の前足の出土状態とテラス面のスペースを勘案すると、両者とも右側面を墳丘外側に向けて樹立されていたものと思われる。すなわち、顔を石室入口側に向けて樹立されていたわけである。

なお、断定はできないが、人物6は馬2か馬1に近接してくるものと推測され、これが腰に鎌をさげた男子像（農夫）であることから、馬に付き添う馬

子であった可能性も考えられる。

個体数からすれば、少なくとももう1頭の馬が樹立されていたことになるが、恐らく馬1につづいて配置されていたものと推測される。

最後に家・器財形埴輪について見てみると、完形に近く復元された個体は8個体にのぼり、推定される個体数はこれを大きく上回るものであったが、原位置で出土したものは1点もなかった。

その出土状態は、人物・馬以上に小破片が多く、散在的に全体にわたっている。これらのうち、特に注意されるのは、馬形埴輪の推定される樹立位置の周辺から多量の破片が出土している点である。その中には、馬よりも内側で葦石に接するようにして、墳丘の崩落層中から出土しているものもある。これらのことから、家・器財形埴輪の全てが、墳頂部に配置されていたと考えざるを得ないところである。

それぞれ2個体分を完形に復せた太刀・靱・鞆の接合関係を検討してみると、個体別にはその破片が比較的まとまりをもった分布状態を示すが、個体間では随分離れており、種類間で錯綜していることが読み取れる。このことは、墳頂部に樹立される場合、種類ごとにまとめて配置するのではなく、種類をとりまぜて配置したことを示している。

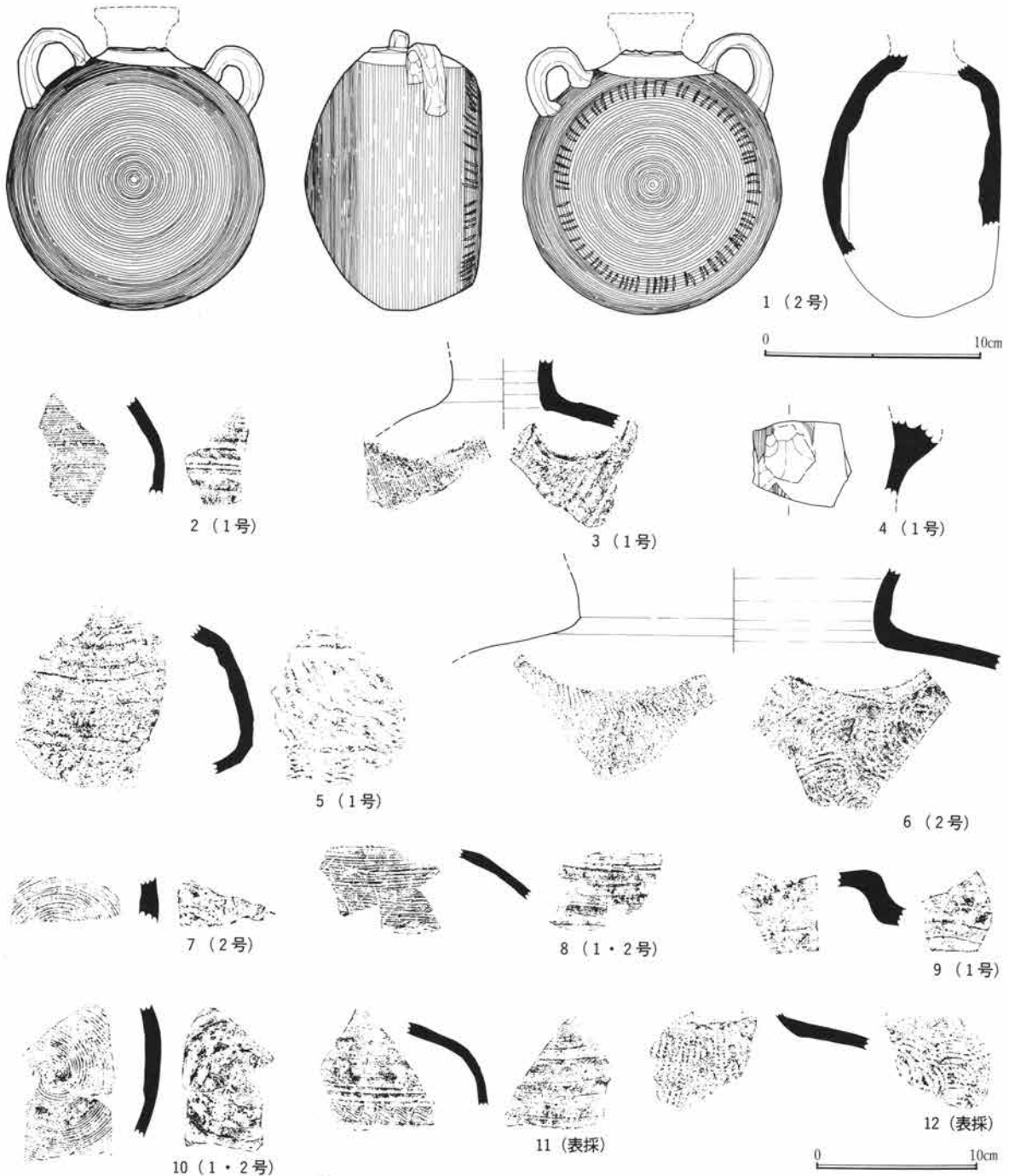
配置形態の復元 まず、墳頂部には、家・器財形埴輪が配置された。家形埴輪は1個体であったと考えられる。器財形埴輪としては、太刀・盾・靱・鞆がある。太刀は5個体以上、盾は4個体以上、靱は2個体以上、鞆は5個体以上である。恐らく各種類とも5個体以上あったと推定される。家を中心に置き、縁辺部に器財形埴輪が種類ごとに交互に一周していたものと推測される。

墳丘周囲のテラス面では、石室入口に向かって左側に、葦石根石に沿って、15体前後の上半身像の各種人物埴輪が、外側に正面を向けて連なり、それにつづいて3頭以上の馬が右側面を外側に向けて連なっていた。また、テラス面の縁辺部には朝顔形を含む円筒列が一周していたと推定される。

(4) 土 器

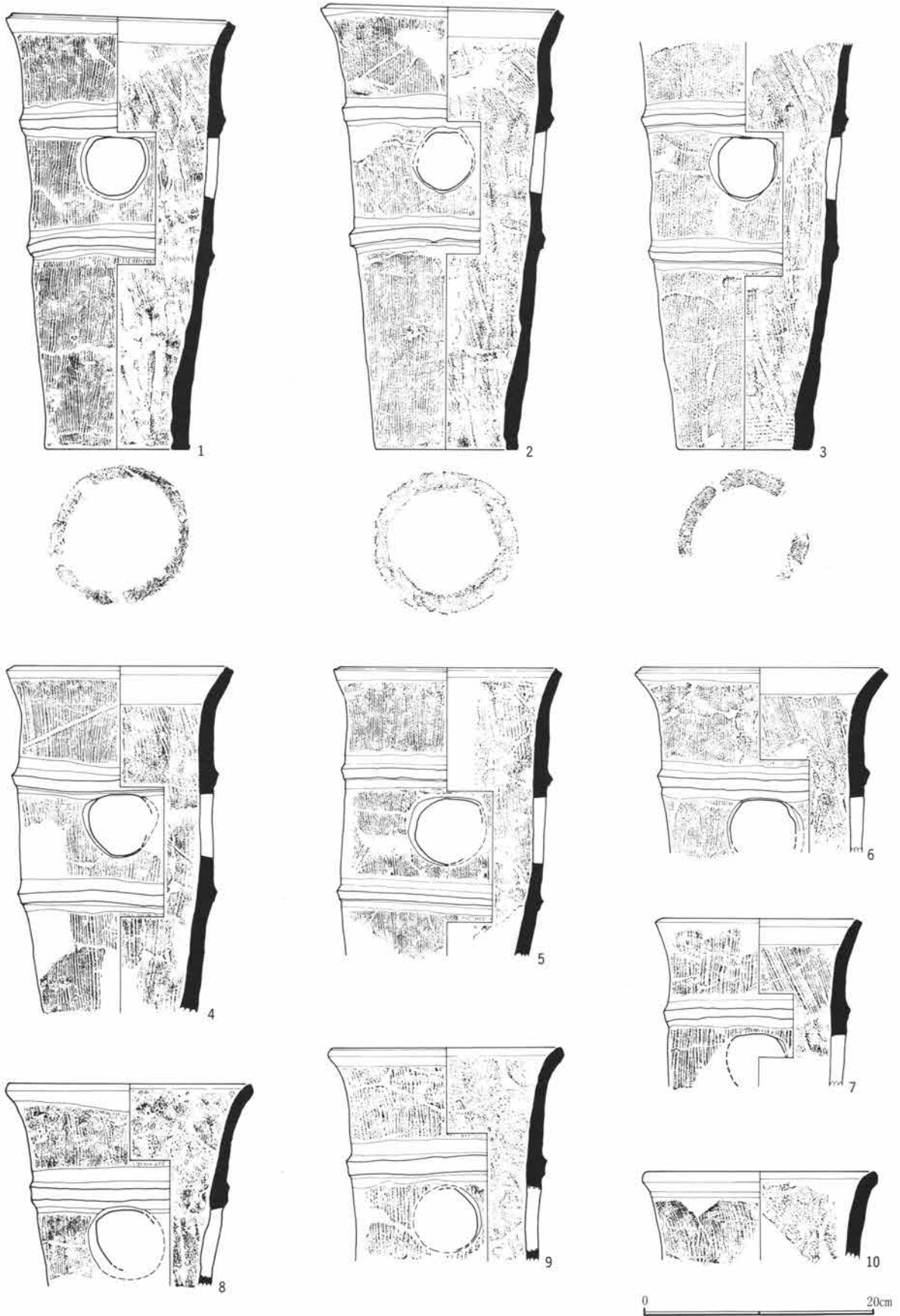
第48図に図示した土器類は、下條1・2号古墳から出土したもので、多くは崩落した礫に混じって出土した小破片である。既述のとおり両墳は隣接して位置しているため、これらの遺物の帰属を確実に特定できるものは少ない。挿図番号の横のカッコ内に付したのが出土古墳を示し、(1・2号)とあるのはいずれとも決定し難い位置から出土している。そ

のような中で1として掲げた須恵器提瓶は、大半の破片が2号古墳の南西裾の埴輪片に混在して出土していることから、これに伴うものとして間違いないであろう。黒味がかった青灰色を呈しており、器肉はあずき色に近い。焼成は極めて良好であり堅く焼き締まる。外面はきめ細かいカキ目が全面に施され、両者に環状の耳が取り付く。陶色古窯址群編年のTK43の型式的特徴に近いものと思われる。



第48図 下條1号・2号古墳出土土器

II 神保下條遺跡の調査



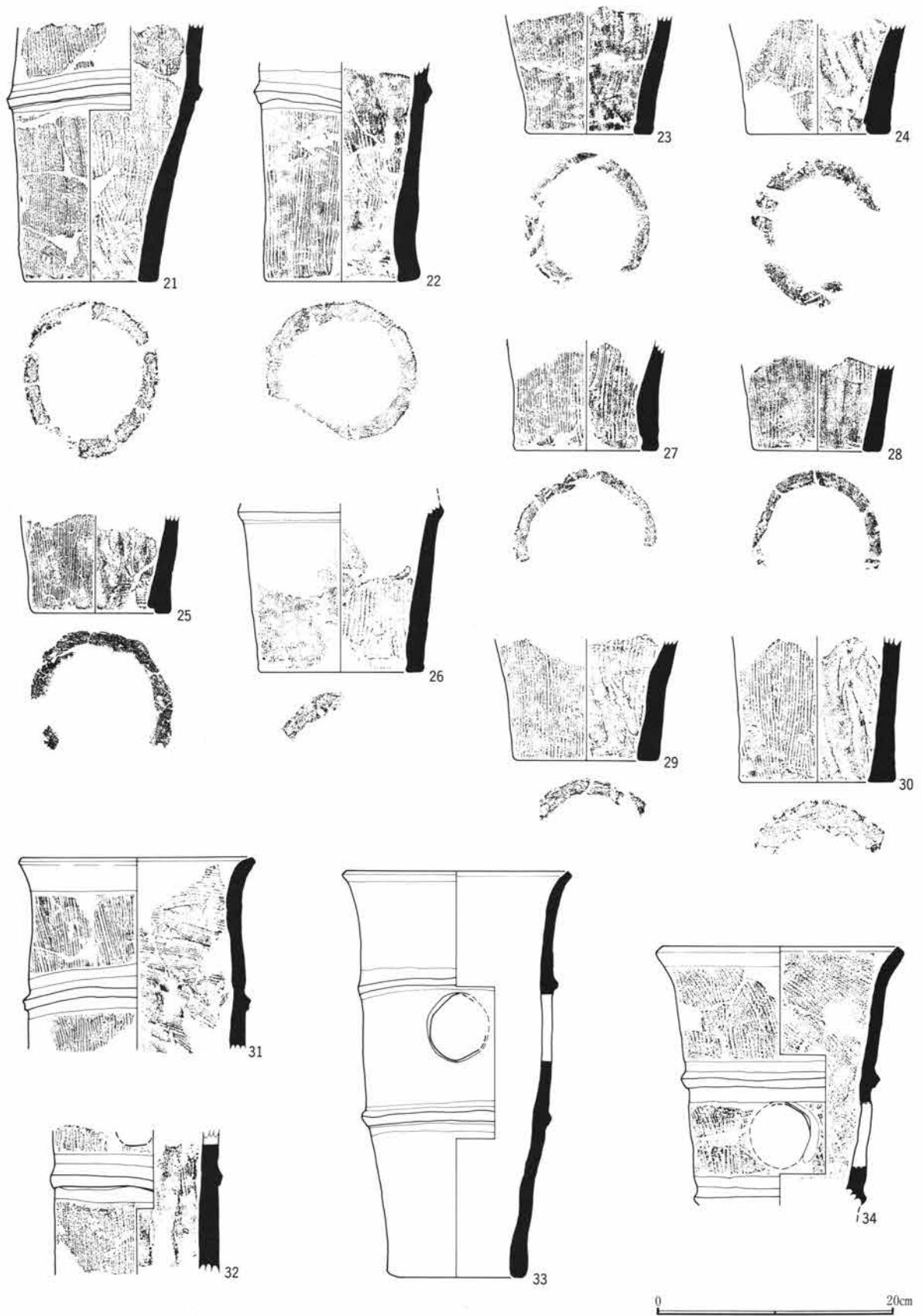
第49図 2号古墳円筒埴輪(1)

3. 2号古墳の調査

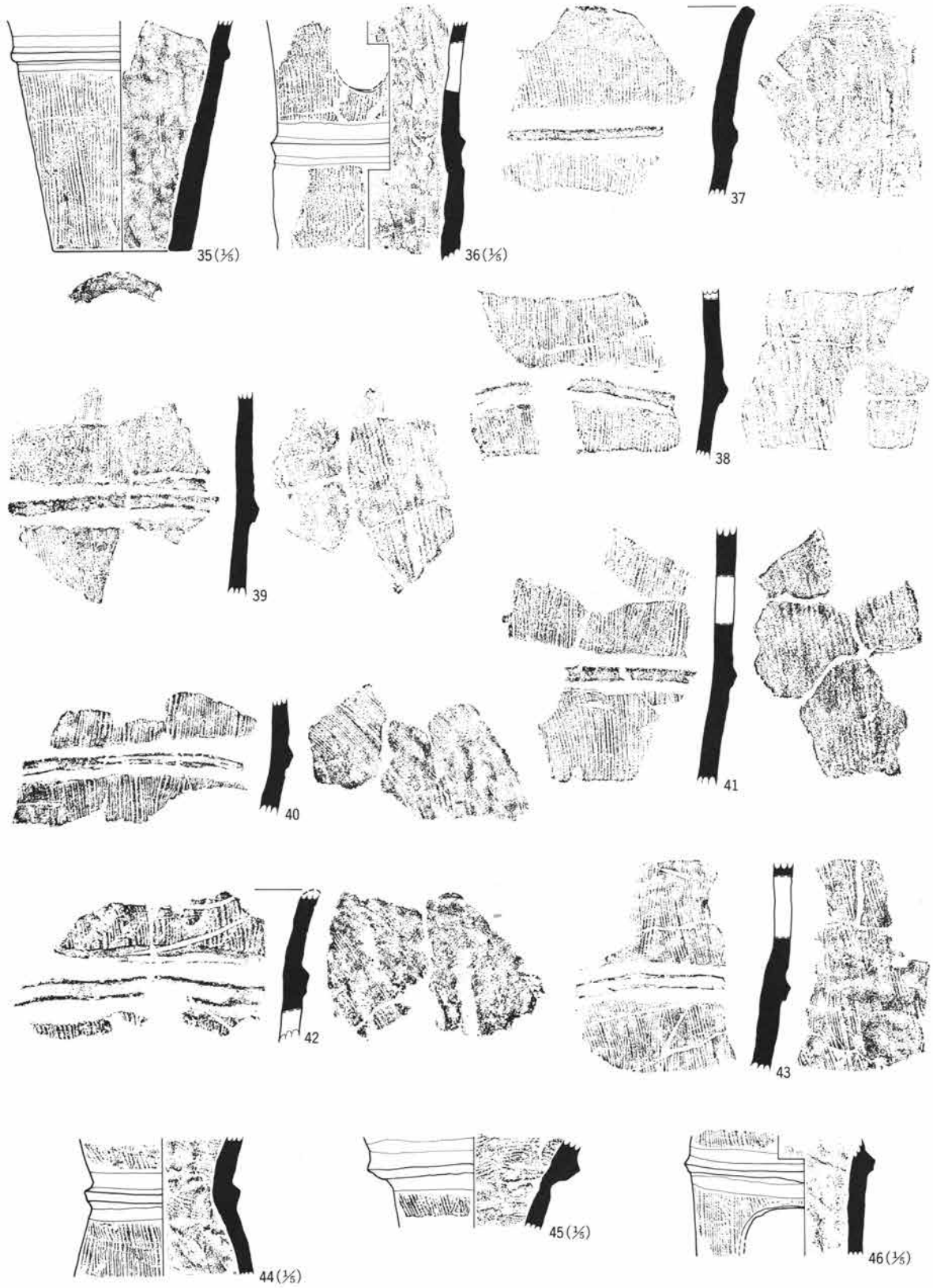


第50図 2号古墳円筒埴輪(2)

II 神保下條遺跡の調査

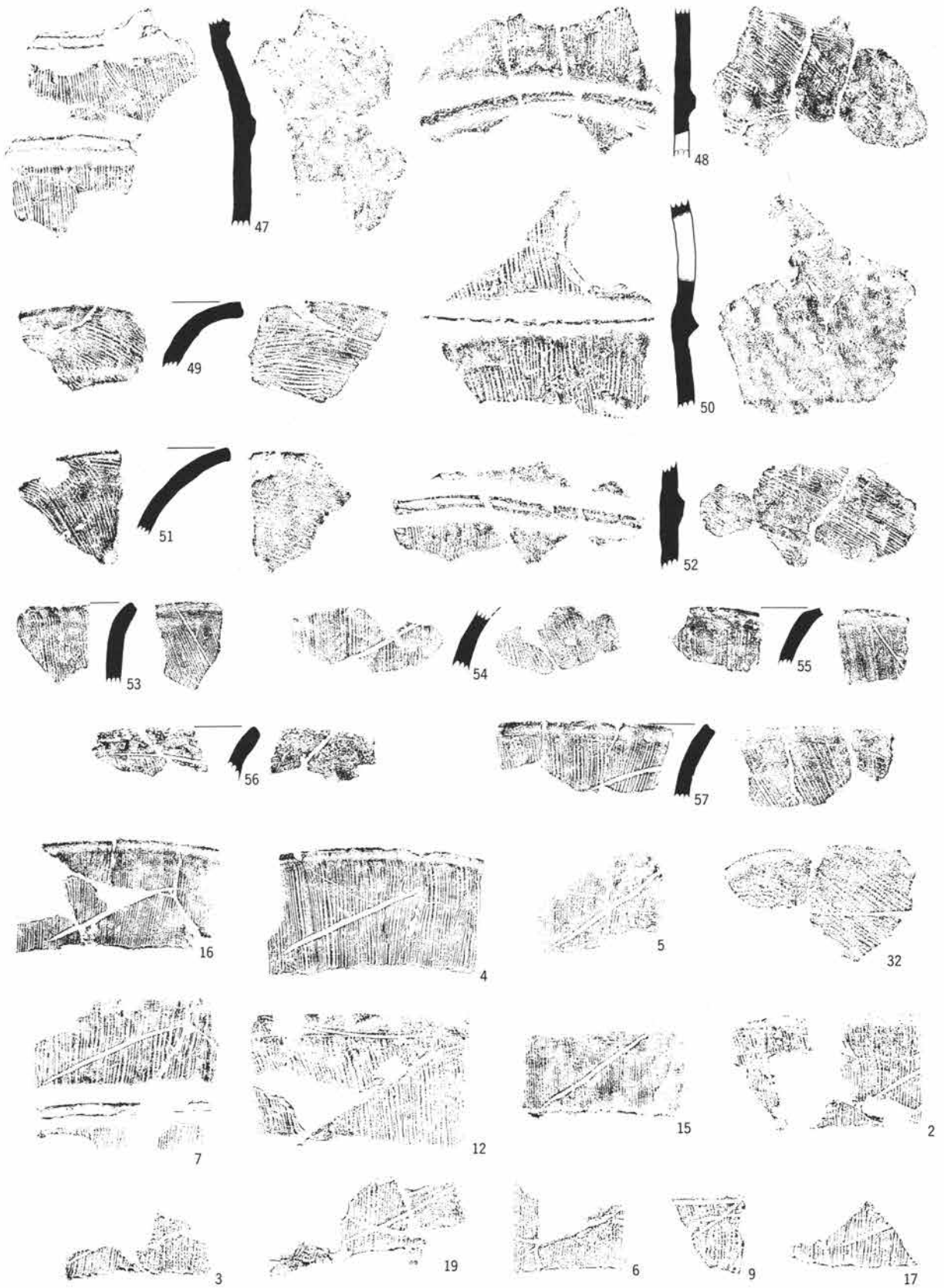


第51図 2号古墳円筒埴輪(3)



第52図 2号古墳円筒埴輪(4)

II 神保下條遺跡の調査



第53図 2号古墳円筒埴輪及びヘラ描き(5)

(5) 埴輪

既述のように、調査面積がわずかであったにもかかわらず、本墳からは大量の埴輪が出土した。種類としては円筒埴輪（朝顔形を含む）と形象埴輪がある。形象埴輪は多種多彩であり、人物、馬、家、器財（太刀、盾、鞆、鞍）形埴輪がある。

円筒埴輪 確認し得る限り全て3段構成であり、器高35～38cmを測る。底径は11～12cmで、口径は21～22cmである。各段の高さは、第1段が17cm前後で第2、3段が10～11cmである。

いずれも第2段の上寄り（第2凸帯に接して）に1対の透孔が穿たれている。透孔の形状は、確認できるものの大半は半円形である。その場合、隅部の角が取れた鈍い形状であり、一見すると円形と間違えてしまうほどであるが、よく見ると確かに半円形を意図していることがわかる。

凸帯は形態的特徴から次の7類に分けることができる。幅2cm、高さ0.3cmで、上下の稜の高さがほぼ等しいM字形（M_①）。幅1.5～1.7cm、高さ0.5cmで、上側の稜が高く、下側はかすかな高さでゆがみが目立つM字形（M_②）。幅1.7cm、高さ0.6cmで、上下の稜のメリハリが強く、上側の稜がより高いM字形（M_③）。M_②の下側の稜が、ナデつけが強すぎて消えて三角形になったもので、M_③の変形である（三）。幅1.5cm、高さ0.6cmで、丁寧な仕上げで、断面台形である（台）。高さがわずかであり、稜の角が取れた鈍いもので、粗雑な取り付けの山形である（山）。

以上の7類のうち、M_②と三が主体をなしており、これにM_①が順ずる。その他はわずかである。この凸帯の形態の差違がその他の形態的特徴、胎土・色調・焼成にも対応していることから、製作者の差違に対応したものであることが推測されよう。

2号古墳出土円筒埴輪観察表

No.	法量 (cm)	凸帯			透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状	タテ×ヨコ				
1	高 37.7 口 19.1 底 12.5	M _②	17.1	11.2	半円形	5.4×6.0 5.5×6.4	胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	11 12	外 縦ハケ 内 口縁上端横ナデ、第3段斜めタテハケ、第1～2段縦指ナデ部分的に縦ハケ残す 口縁端部仕上げシャープ	外面第3段ヘラ描き

M_①の円筒は器厚が比較的厚く、端部に丸味を持たせているのに対し、M_②は比較的薄手で、端部を全体にシャープにつくっているのが特徴である。また、焼成が硬調である点も目につく。

次に整形の特徴を見てみると、外面は、口縁端部、凸帯を除けば全体に縦ハケである。内面は、口縁端寄りを横ナデとし、第3段（口縁）を斜めハケあるいは縦ハケとし、第2、1段を縦指ナデ（部分的に一次調整の縦ハケを残す）とするものが圧倒的である。数は少ないが、8・9のように縦指ナデが内面の全面に及んでいるものがある。

多くの場合、外面の第3段にヘラ描きが認められた。完形に近く復せたもので大半のものに認められた。ヘラ描きされる内容はきわめて均一なものであり、前述の凸帯による分類区分に対応している。M_①の凸帯を有するものは、外面第3段に斜め横方向の2条のヘラ描きが施される。一方、M_②、三の凸帯の円筒では、外面第3段で透孔の真上にノの字形のヘラ描きが施されている。

前者のヘラ描きが確認できたのは、9・11・12・42で、後者のヘラ描きが確認されたのは、1・2・3・4・5・6・7・15・16・17・19である。朝顔形が推定される埴輪は44～52である。朝顔形が推定される埴輪は、この他にも若干あるが、（普通）円筒埴輪に比べるとその量は大幅に少ない。

下條1号古墳の円筒埴輪では、底部寄りを中心に形のゆがみが目立ち、また稚拙なつくりのものが散見し、形態のパラエティーが注意をひいた。これに対して、本墳の場合、M_①とM_②・三の凸帯を有するものが圧倒的で、しかも、均一な形態的特徴と手慣れたつくりが目についた。

II 神保下條遺跡の調査

No.	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状				
2	高 38.5 口 (20.1) 底 12.3	M②	18.0	10.8	半円 形に 近い	5.8×(5.4)	胎 C 焼 やや良好 色 橙色	11 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め ハケ、第1～2段縦指ナデ部分的に縦ハケ 残す 底部下半縦指ナデ部分的に横ハケ残 す 端部の仕上り比較的シャープ	外面第3段ヘラ 描き 1段上部 浅い沈線が一周 する
3	高 35.1 口 — 底 11.7	M②	16.9	11.5	半円 形	5.5×5.4 (5.6)×6.2	胎 D 焼 ふつう 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 口縁斜め縦ハケ、第1 ～2段は縦指ナデ一部に縦ハケ残す 第1 段下半は横ハケ、粘土板による基部の部分	外面第3段ヘラ 描き
4	高 29.9 口 (19.8) 底 —	M②		10.1	半円 形	5.4×(6.5) (6.5)×7.1	胎 B 焼 良好 色 赤褐色	12 外 縦ハケ 内 口縁上端横ナデ、下半縦 ハケ 第1～2段縦指ナデ	外面第3段ヘラ 描き
5	高 24.9 口 19.9 底 —	M②		9.2	半円 形	5.9×(6.8)	胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	13 外 縦ハケ 内 口縁上端横ナデ、下半斜 め縦ハケ、第1～2段縦指ナデ、一部縦ハ ケ	外面第3段ヘラ 描き
6	高 15.8 口 (21.0) 底 —	M②			半円 形		胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	12 外 縦ハケ 内 口縁上端横ナデ、口縁下 半右斜め縦ハケ、第2段斜め縦ハケ後縦指 ナデ、部分的に縦ハケ残る	外面第3段ヘラ 描き
7	高 14.5 口 17.0 底 —	M②			半円 形		胎 B 焼 良好 色 明赤褐色	9 外 縦ハケ 内 口縁上端横ナデ、口縁斜 め縦ハケ 上段部分的に縦ハケ縦指ナデ 口縁端部の仕上りややシャープ	外面第3段ヘラ 描き
8	高 17.4 口 21.6 底 —	M①			不整 円形		胎 D 焼 不良 色 橙色	12 外 縦ハケ 内 口縁端部寄り横ナデ 口縁下半以下指ナデ 口縁端部やや丸味を もつ	
9	高 18.4 口 (20.6) 底 —	M①					胎 D 焼 やや不良 色 橙色	8 外 縦ハケ、内 口縁端横ナデ以下縦指ナ デ、口縁端部丸味をもつ	外面第3段ヘラ 描き
10	高 7.7 口 (20.0) 底 —						胎 C 焼 やや不良 色 橙色	9 外 縦ハケ 内 口縁上端寄り横ナデ 口 縁部斜めハケ 口縁端部丸味をもつ	
11	高 36.2 口 19.0 底 13.4	M①	16.2	10.1	円形	5.6×6.2	胎 D 焼 やや不良 色 明赤褐色	11 外 縦ハケ 内 口縁斜め横～斜め縦ハケ 部分的にその上からナデ、第1～2段縦指 ナデ、端部の仕上り鈍い	外面第3段ヘラ 描き、口縁上端 浅い沈線2～3条
12	高 35.2 口 21.9 底 12.5	M①	14.5	10.5	円形	6.1×5.9 (4.8)×4.9	胎 D 焼 良好 色 橙色	11 外 縦ハケ 口縁は斜め縦ハケ後縦ハケ 内 口縁斜め縦ハケ後縦指ナデ、第1～2 段は縦指ナデ	外面第3段ヘラ 描き 口縁上端 寄りに沈線一周 する
13	高 18.7 口 — 底 13.7	M①	12.7				胎 D 焼 不良 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 縦指ナデ やや粗雑な作 り、形の歪み目立つ	
14	高 14.9 口 (20.1) 底 —	M①					胎 B 焼 良好 色 明赤褐色	12 外 縦ハケ 内 口縁上半横ナデ、下半斜 め縦ハケ、第2段縦指ナデ、口縁端部凸帯 の仕上りシャープ	
15	高 12.0 口 20.5 底 —	M②					胎 B 焼 良好 色 橙色	13 外 縦ハケ 内 口縁上端横ナデ、口縁縦 ハケ、第2段縦ハケ後縦指ナデ、端部の仕 上りシャープ	外面第3段ヘラ 描き

3. 2号古墳の調査

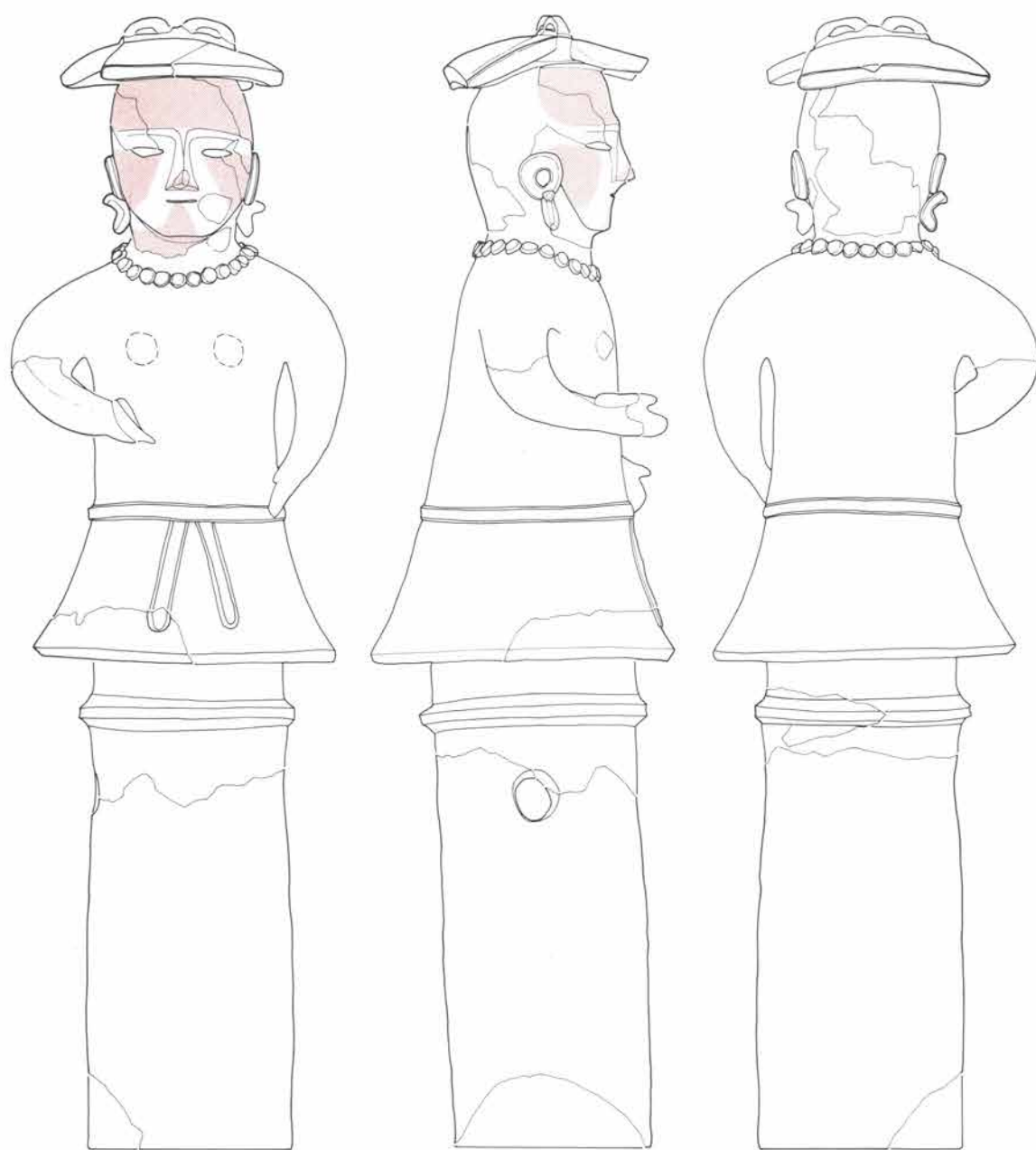
No	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛 目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状				
16	高 25.7 口 (21.6) 底 —	M②		12.5	半円 形	5.4×7.0	胎 B 焼 ふつう 色 橙色	13 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁～第 2段上半斜め縦ハケ以下縦指ナデ 15	外面第3段へラ 描き
17	高 31.2 口 — 底 11.2	M② 台	16.5	10.6	半円 形	6.0×6.4	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11 外 縦ハケ 内 口縁縦ハケ 第1～2段 縦指ナデ 12	外面第3段へラ 描き
18	高 9.8 口 — 底 —	M②					胎 B 焼 ふつう 色 橙色	9 外 縦ハケ 内 口縁縦ハケ、2段縦指ナ デ 11	
19	高 9.8 口 — 底 —	M②					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 口縁上半斜めハケ、口縁 下半～第2段縦指ナデ 11	外面第3段へラ 描き
20	高 18.9 口 — 底 —	M②		10.5		(5.3)×(5.8)	胎 B 焼 良好 色 橙色	13 外 縦ハケ 内 縦指ナデ 凸帯の端部の 仕上りシャープ	
21	高 21.4 口 — 底 11.4	M②	15.0				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	15 外 縦ハケ 内 縦ハケ後縦指ナデ	
22	高 18.5 口 — 底 13.3	三					胎 B 焼 ふつう 色 明赤褐色	9 外 縦ハケ 内 縦指ナデ後一部縦ハケ 10 底部下半横ハケ後縦指ナデ、底面ナデ	
23	高 10.0 口 — 底 10.5						胎 C 焼 ふつう 色 橙色	12 外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
24	高 9.9 口 — 底 12.0						胎 D 焼 やや不良 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
25	高 8.3 口 — 底 11.6						胎 C 焼 ふつう 色 灰赤色	13 外 縦ハケ 内 縦指ナデ、底部下半横ハ ケ後縦指ナデ 底ナデ 14	
26	高 14.3 口 — 底 —	三	13.2				胎 B 焼 ふつう 色 橙色	16 外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
27	高 9.4 口 — 底 12.0						胎 B 焼 良好 色 赤褐色	11 外 縦ハケ 内 縦指ナデ後極一部縦ハケ 12 底ナデ	
28	高 7.4 口 — 底 11.0						胎 C 焼 ふつう 色 橙色	12 外 縦ハケ 内 縦指ナデ、底部下半横ハ ケ後縦指ナデ	
29	高 10.3 口 — 底 12.4						胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	11 外 縦ハケ 内 縦指ナデ 底ナデ調整	

II 神保下條遺跡の調査

No	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考	
		形状	1	2	形状					タテ×ヨコ
30	高 12.3 口 — 底 13.0					胎 B 焼 良好 色 明赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ 底へラ削り		
31	高 16.2 口(19.8) 底 —	M③				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁横ハケ、斜め横ハケ、第2段斜めハケ後斜め指ナデ		
32	高 12.0 口 — 底 —	山				胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11 }	外 縦ハケ 内 縦指ナデ一部縦ハケ		
33	高 34.3 口(19.6) 底 12.0	M②	13.2	10.9	円形	5.7×(5.3)	胎 B 焼 ややあま い 色 橙色	12 }	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、器面の磨耗が著しく端部の仕上げシャープ	
34	高 21.7 口(21.2) 底 —	M②	8.6				胎 D 焼 やや良好 色 赤褐色	8 }	外 縦ハ 口縁部斜め縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁部斜め横ハケ、第2段縦指ナデ	
35	高 19.1 口 — 底 11.6	山		16.2			胎 B 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、底面ナデ	
36	高 18.9 口 — 底 —	三					胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色	7 }	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
37	高 12.5 口 — 底 —	台					胎 D 焼 良好 色 橙色	9 }	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁端寄り横ハケ、口縁～第2段縦指ナデ	
38	高 10.7 口 — 底 —	M②					胎 B 焼 良好 色 明赤褐色	12	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
39	高 13.5 口 — 底 —	M②					胎 B 焼 やや不良 色 橙色	12 }	外 縦ハケ 内 縦指ナデ 部分的に縦ハケ残す	
40	高 7.8 口 — 底 —	M②					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10 }	外 縦ハケ 内 口縁上半斜め縦ハケ 口縁下半～第2段縦指ナデ	
41	高 17.0 口 — 底 —	M②					胎 B 焼 ふつう 色 明赤褐色	10 }	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
42	高 9.2 口 — 底 —	M①					胎 B 焼 やや不良 色 橙色	8 }	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ後縦指ナデ	外面3段へラ描き
43	高 13.8 口 — 底 —	M②					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	12	外 縦ハケ 内 縦ハケ後縦指ナデ、縦ハケを部分的に残す	

3. 2号古墳の調査

No	法量 (cm)	凸 帯			透 孔		胎土・焼成 色調	刷 毛 目	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
		形状	1	2	形状	タテ×ヨコ				
44	高 10.8 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 橙色	7 外 縦ハケ 内 くびれ部より上は横～斜 め横ハケ、下は斜め縦指ナデ 9	朝顔形	
45	高 8.5 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 橙色	9 外 縦ハケ 内 横ハケ 形態の歪みがやや目立つ	朝顔形	
46	高 10.5 口 — 底 —				角の とれた円 形		胎 C 焼 良好 色 橙色	8 外 縦ハケ 内 縦指ナデ 10	朝顔形	
47	高 14.3 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10 外 縦ハケ 内 上半斜め横指ナデ 下半 縦指ナデ 11	朝顔形	
48	高 9.9 口 — 底 —						胎 D 焼 不良 色 橙色	11 外 縦ハケ 内 凸帯より上斜め横ハケ凸 帯より下縦指ナデ	朝顔形	
49	高 4.4 口 — 底 —						胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10 外 斜めハケ 内 口縁端横ナデ 口縁横 ハケ	朝顔形	
50	高 14.0 口 — 底 —						胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	8 外 縦ハケ 内 縦指ナデ 9	朝顔形	
51	高 4.0 口 — 底 —						胎 C 焼 不良 色 橙色	9 外 斜めハケ後2次的に縦ハケ 内 口縁 端横ナデ、口縁横ハケ	朝顔形	
52	高 6.8 口 — 底 —						胎 D 焼 ふつう 色 橙色	10 外 縦ハケ 内 斜め横ハケ後部分的に指 ナデ	朝顔形	
53	高 4.0 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	12 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め 縦ハケ	内面第3段へラ 描き	
54	高 3.9 口 — 底 —						胎 B 焼 ふつう 色 橙色	8 外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ	外面へラ描き	
55	高 3.2 口 — 底 —						胎 B 焼 良好 色 橙色	9 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁縦ハ ケ	非常に浅いハケ 整形、内面第3 段へラ描き	
56	高 2.9 口 — 底 —						胎 D 焼 良好 色 橙色	12 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ	外面第3段へラ 描き	
57	高 5.2 口 — 底 —						胎 B 焼 ふつう 色 橙色	11 外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め 縦ハケ 12	外面第3段へラ 描き	



第54図 2号古墳人物1(58)(1)

0 20cm

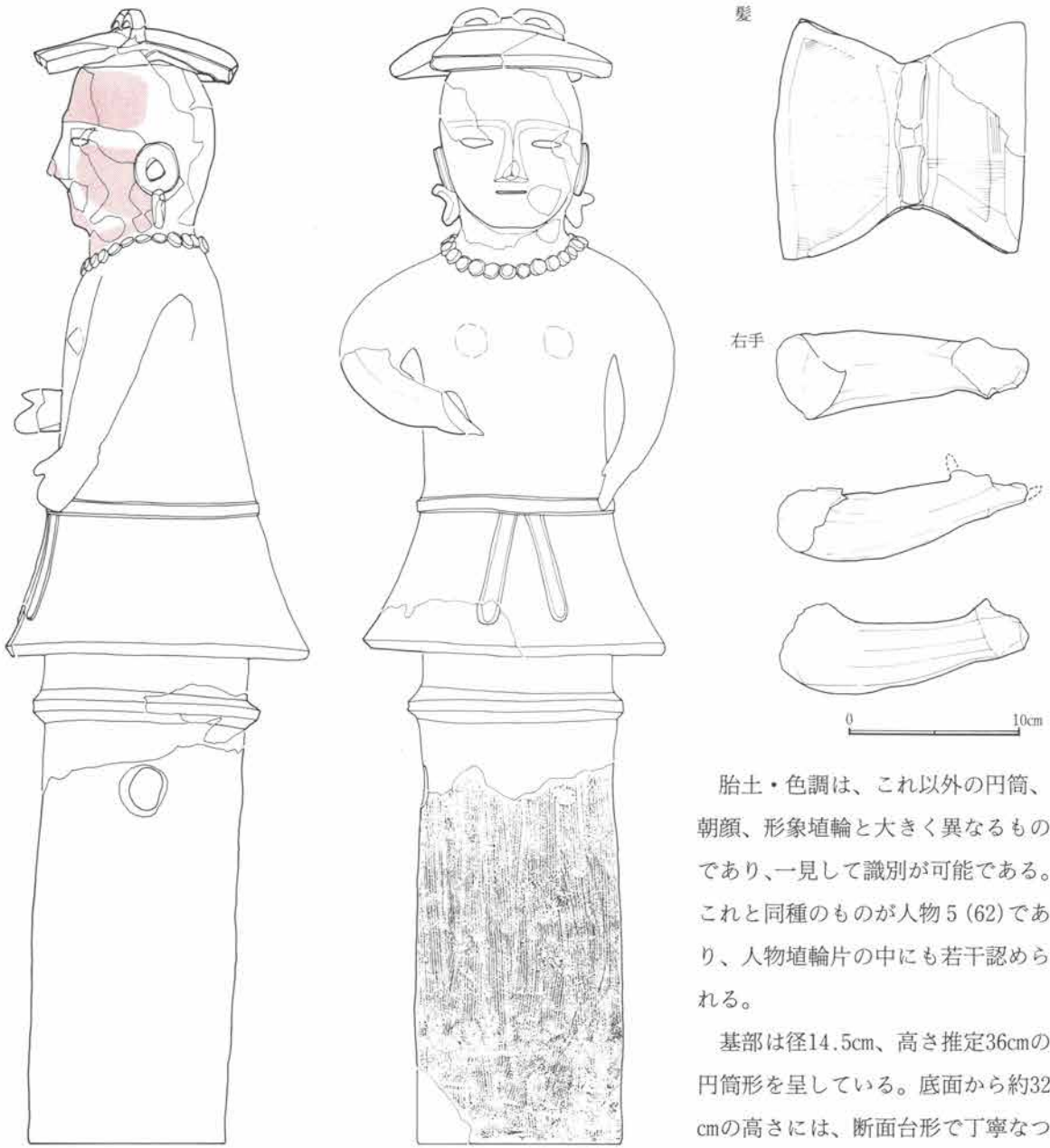
形象埴輪 種類としては、人物埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、器財形埴輪がある。完形に近く復元できたものは、人物埴輪6個体、馬形埴輪2個体、家形埴輪1個体、器財形埴輪7個体(太刀2、盾1、鞆2、鞆2)である。これらについては、円筒埴輪からの通し番号以外に、便宜上から、種類ごとの番号を付したのは1号古墳の場合と同様である。

完形に近く復元できたもの以外に、各種類とも多

量の破片資料があり、今回の調査が古墳の一部についてであったこととも合わせると、当初はさらに多量の形象埴輪が樹立されていたことを窺わせる。

人物1(58) 高さ推定82cm、最大幅推定25cm、最大奥行推定22.5cmの女性上半身像である。遺存していたのは、基部から上着の裾部にかけてと首から上の頭部及び右腕であり、胸から胴部にかけてを欠いている。直接的な接合関係を有していないのに同

3. 2号古墳の調査



第55図 2号古墳人物1(58)(2)

一図と判定したのは、破片の出土位置が、原位置にあった基部の周辺に集中していることと、胎土・色調の比較検討の結果である。胴部を中心に多量の石膏を補充しての復元に際しては、人物2(60)を参考にした。ただし、巻末の写真図版で呈示している大きさは、高さが10cmほど大きすぎたと判断したため、後に本文中の実測図にかかげた大きさに修正した。この規格でちょうど人物2に近いものとなり、また人物3(61)にも近似してくる。

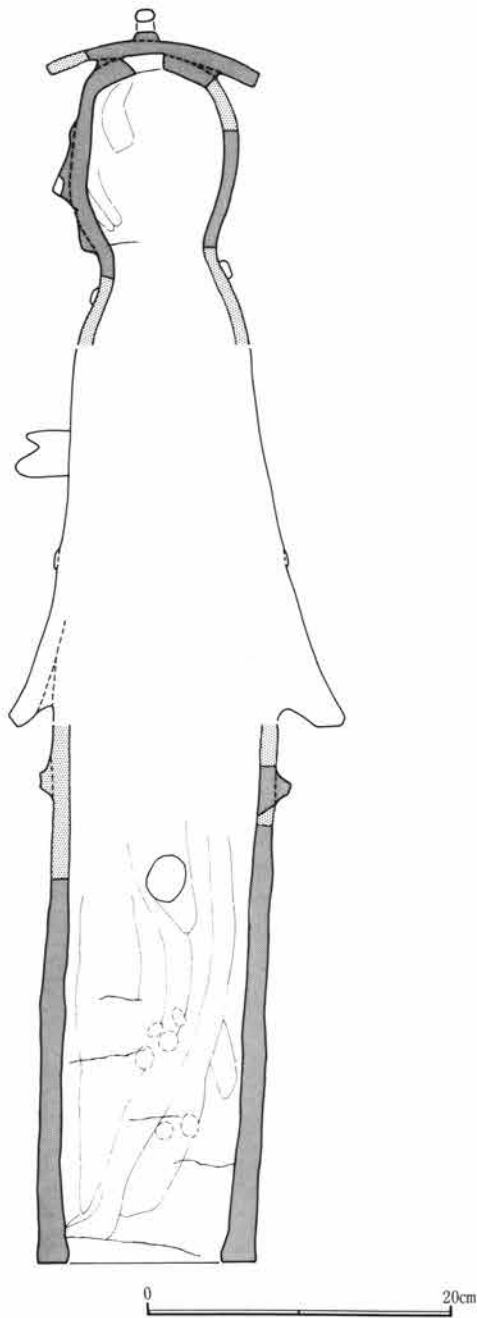
胎土・色調は、これ以外の円筒、朝顔、形象埴輪と大きく異なるものであり、一見して識別が可能である。これと同種のものが人物5(62)であり、人物埴輪片の中にも若干認められる。

基部は径14.5cm、高さ推定36cmの円筒形を呈している。底面から約32cmの高さには、断面台形で丁寧なつくりの凸帯がめぐる。この凸帯の下6cmの位置に径約3cmの円形の透孔

が一对穿たれている。この穿孔位置は、1号古墳の人物1、人物2の場合と異なる点は注意される。穿孔される位置が正面から見て、左右両側にくる点は、他例と同様である。

人物が身にまとっていた上着については、その右裾部分が遺存していたことから、ある程度知ることができる。まず、基部が全体に縦ハケをそのまま残しているのに対し、上半身は丹念なナデ整形により平滑に仕上げられていたことがわかる。裾部はラッ

II 神保下條遺跡の調査



第56図 2号古墳人物1 (58) (3)

パ状に外反しており、ナデ整形以外、複雑な表現は認められない。そのような中で、裾部に向かって垂下する幅1.3cmの帯の貼付の端部が認められる。恐らく、腰帯を正面中央で結び、その結び目から開きのあまりない端部がハの字状に垂下していたものであろう。

右腕は二の腕の肘寄りから手にかけての破片であったが、肘の部分で急角度に折れ曲がっており、

腕の部分が水平に近かったことを推測させる。手の平は内湾しており、そこにのっていたものが剝離した痕跡を残している。器物（坏？）を捧げていた可能性が強い。左腕については、復元の根拠を持たないので、一応単純に下へおろすようにしておいた。

頭部はやや面長で、きわめて丹精な作りであることから、作者の造型力の豊かさを知ることができる。髪は、つぶし島田であり、あらかじめ球形につくった頭部に板状につくった髪をのせ、隙間にくさび状に粘土を充填して接合している。髪は、頭頂部のカーブに合わせて、前後に若干弧を描いている。

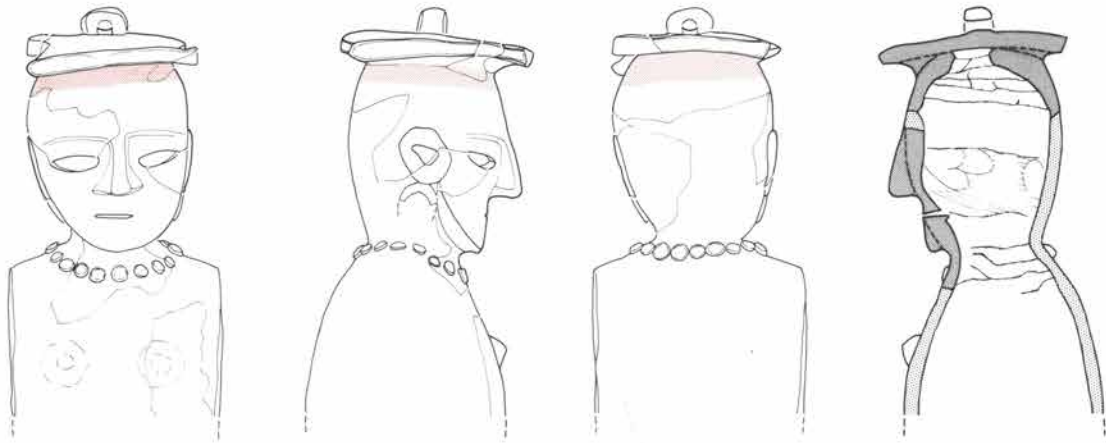
顔の作りを見てみると、眉の表現を兼ねた眼窩、鼻、顎、頬の表現は、微妙な肉付けにより巧みに行っている。鼻は鼻筋の通った丹精なものであり、耳の部分を見ると、その位置には幅1cmの粘土帯を外径3.5cmの円環状につくった耳環が貼付されているため、耳自体の表現はない。耳環の下端には、勾玉が接合されており、垂飾の表現であることがわかる。目は、開きが少なくおとなしい。口は1号古墳の場合と同様に、横一文字の細身であり、内面に貫通していない。

本例の場合、赤色顔料の塗彩をきわめて良好に残していた。顔面では、おでこの部分を全体に塗っており、目の下から頬にかけての両側を三角形に塗り、鼻の頭の部分、口の下から顎にかけての部分も塗られている。また、首の部分は、推定される首飾りの位置までは全体に及び、一周していたことがわかるが、それより下は不明である。

人物4 (59) 人物3の西側に隣接して人物埴輪の基部が原位置で出土した。その南側の周辺には、人物埴輪の破片が散乱しており、接合により女性像の胸から頭にかけてになった。胴部周辺を欠いているので決定的ではないが、両者の位置的關係、胎土・色調やハケ原体の比較検討からも同一個体としてほぼ間違いないことが明らかとなった。

胴部を欠くが、女性の上半身像である。

基部は径16cmで、高さ22cmまでを残している。内外面とも丁寧な作りで、底面には、スタレ状の敷



第57図 2号古墳人物4 (59)

物の上で製作した痕跡を残している。

頭部は一応まとまりのあるつくりにはなっているものの、人物1にくらべると硬調で、細部の表現にきめ細かさを欠いている。

目は横長で開き気味であり、眼窩のえぐれがややきつく、顎は鋭く張っている。また、鼻筋も通り過ぎていいる。口の表現は幅狭の横一文字であり、内側に貫通している。耳の位置には耳環が貼付されているが、薄手で形はいびつである。やはり、その下端になんらかの垂飾が接合していた痕跡を残す。

髪はつぶし島田であり、頂面は平らである。結びは、中心のみの痕跡で、人物1のように髪の幅いっぱいには及んでいない。

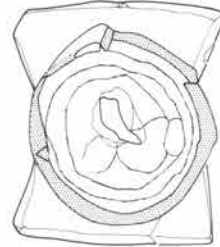
表面の摩耗のため、赤色顔料はおでこのみに残っていた。

人物2 (60) 高さ85cm、最大幅推定28cm、最大奥行20cmの大きさの女性上半身像である。

基部は径14.5cm、高さ33cmの円筒形で、凸帯をめぐらさないのが特徴である。底面から27cmの高さには、正面から見て両側に径約3cmの円形透孔が穿たれている。外面は縦ハケで内面は縦指ナデである。底面は横ナデによる2次調整が施されている。

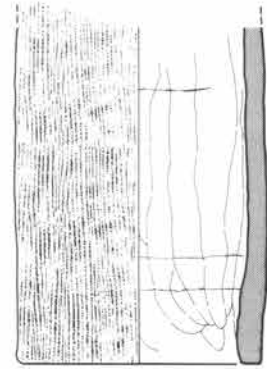
胴部は、上着の裾部の形態的表現により衣服を着ていることがろうじてわかる以外、具体的な表現は一切見られない。表面は全体に縦ハケをそのまま

頭部内面



割れ口

0 10cm



残している。構造的には円筒形につくった基部から直接に胴部へ延ばしてゆき、その後に腰まわりに断面三角形をなす裾部をめぐらして仕上げるものである。



2本の腕は前方に出され、手の平が胸の下に押しあてられるように肘から先をゆるやかに曲げている。手の先の部分は欠けているが、手の甲の内面を観察すると、指の根元が1本1本接合されているのがわかり、5本の指がリアルに表されていたことを物語っている。腕は中実であり、その根元を肩に差し込んで接続するものである。

乳房は小さい粘土塊をすり付けて山状につくったもので、愛らしい。

次に頭部について見てみると、粘土の巻き上げにより球形の本体をつくり、眉、鼻、顎等を肉付けにより仕上げている。顔の作風を見てみると、人物4

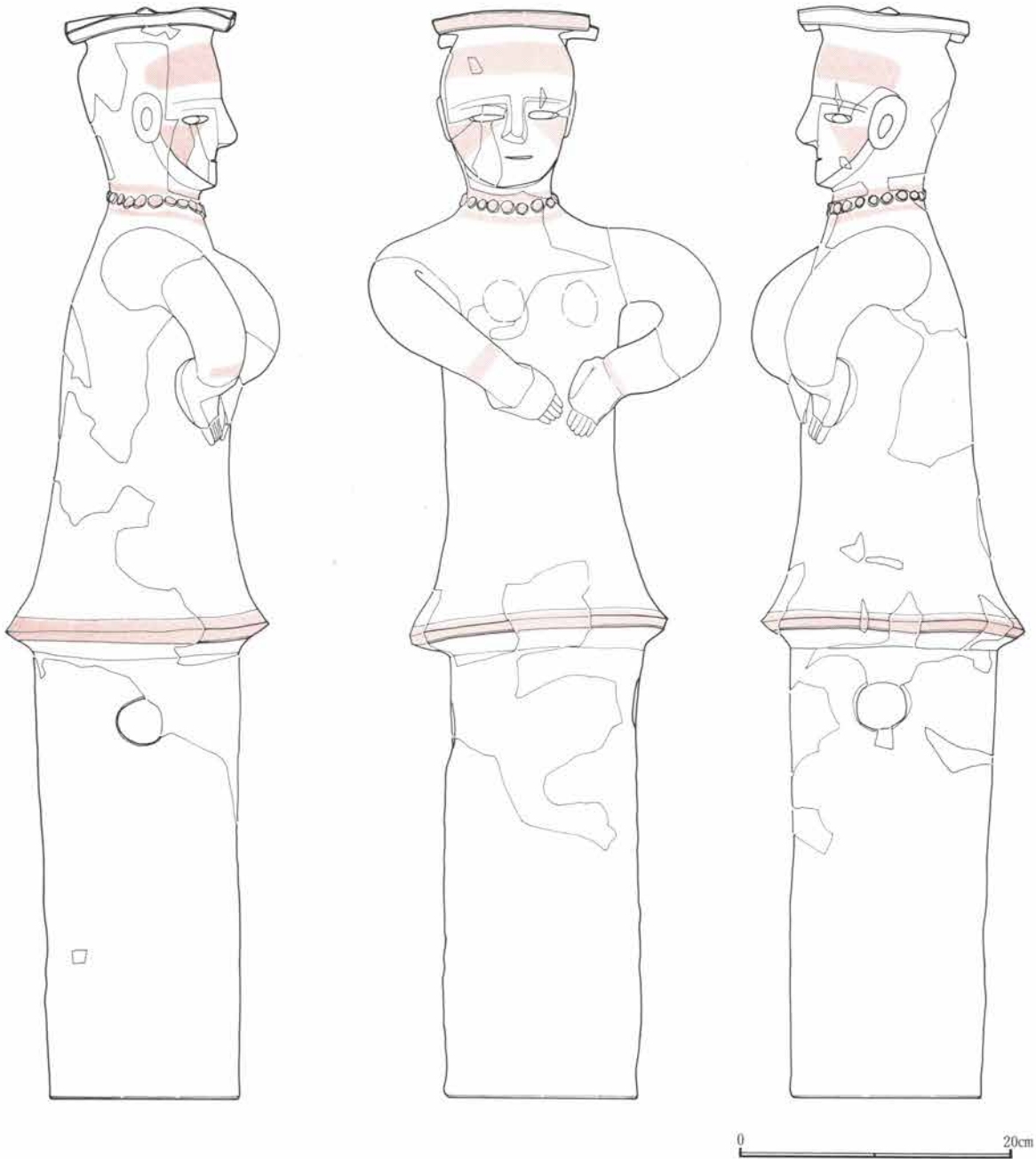
II 神保下條遺跡の調査

とまったく同じであり、同一人物の手によって製作されたものであることは、疑う余地がない。横から見ると、ナスビを逆さにしたように頭でっかちであり、眼窩は深く、鼻は高く筋が通り、目は開いている。顎から頬下にかけては、首の部分と段をなし、角張っている点もよく似ている。口は幅狭であり、横一文字にかすかに開き、内部に貫通している。

耳の部分に欠いているが、人物4の耳環と同様に薄手でややいびつなものが貼付されていたものと推

測される。首飾りは、径1cmほどの円形の浮文を密接して押し付けている。

髪の毛はつぶし島田である。島田の部分は、幅12cm、奥行き13cmで、中心で幅7.5cmにくびれている。頂面の形状を見ると、基本的には平板なものであるが、くびれの位置が横から見てくぼんでいる。この位置には横方向いっぱい幅1cmの髪の毛の結び目の痕跡がある。輪が2つ並ぶ蝶結びのようなものであったことがわかる。この結びに呼応させた髪の毛の起伏の



第58図 2号古墳人物2(60)(1)

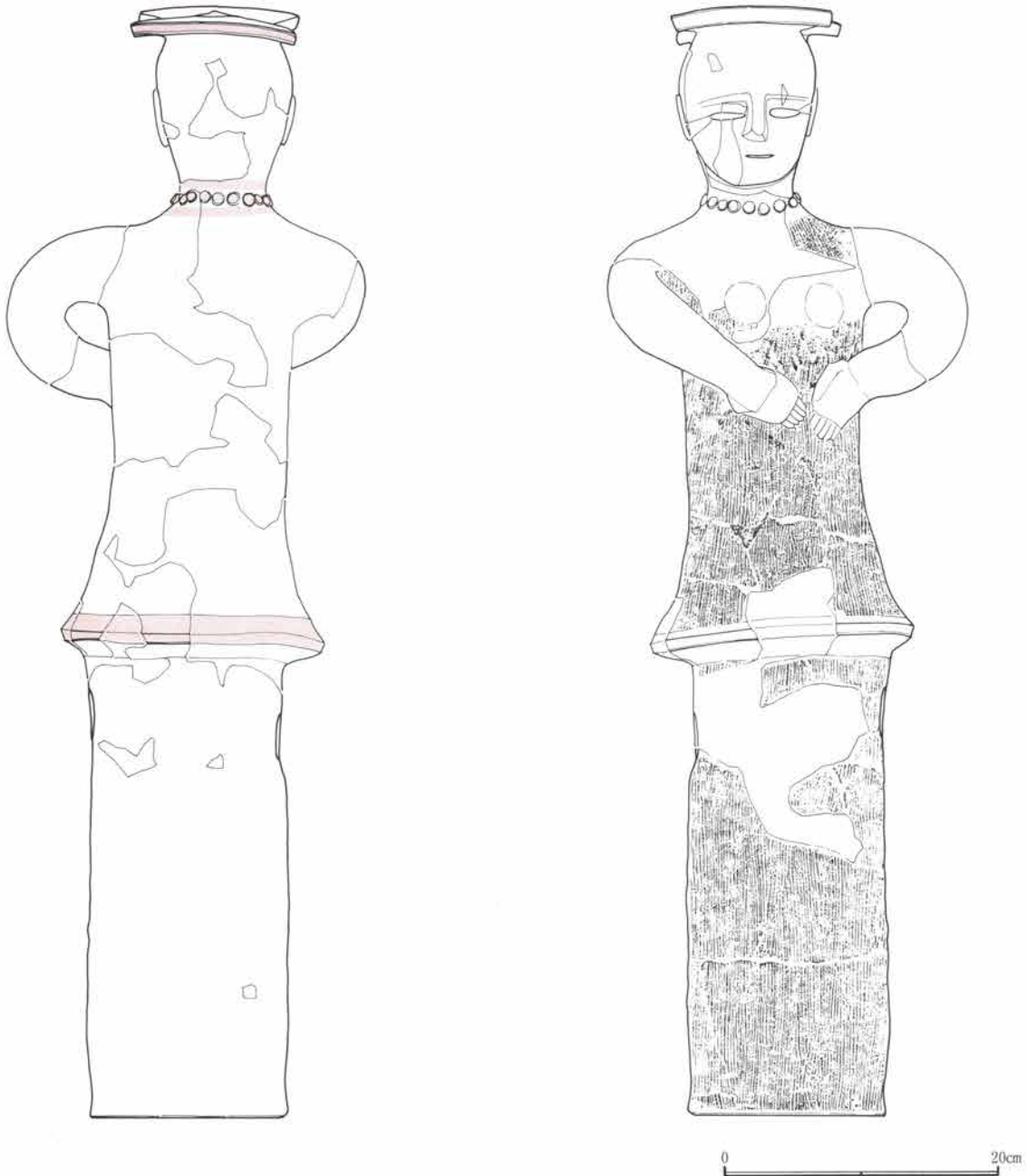
表現をしていたものと思われる。

髪の毛と頭部との接合状態を見てみると、球形につくった頭本体の上に板状に別づくりした髪をのせ、両者の間に生じた隙間にくさび状に粘土をすり込んで充填し接合している。なお、頭本体の頂部中央は円形の小孔になっている。これは、巻き上げ成形により、頂部へとしぼり込みながら収束させていったことを示すものである。

顔面、腕、乳房、上着の裾回り等を除くと外面の

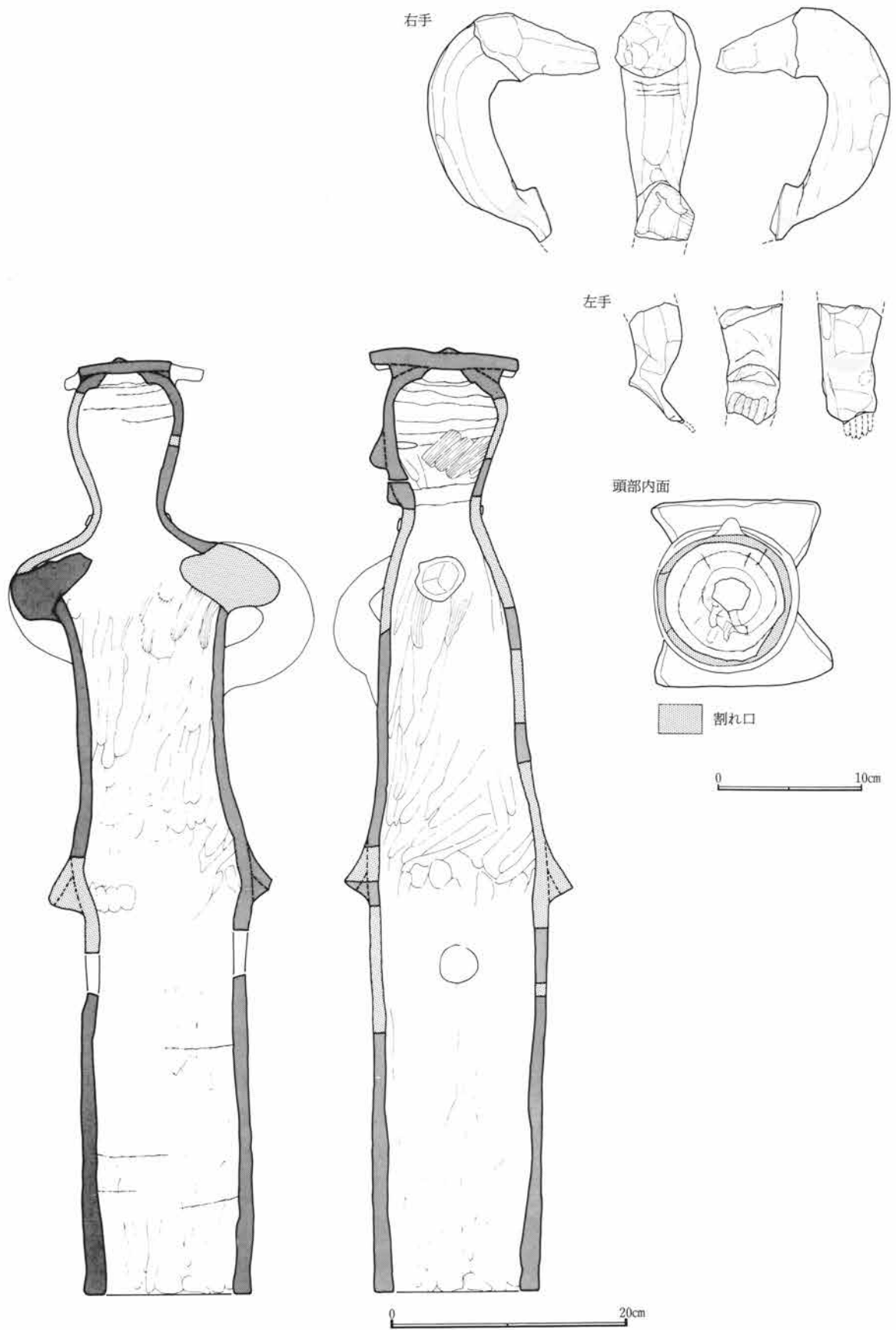
大半の部分は、ハケ整形をそのまま残している。

本例の場合、塗彩されている赤色顔料が全体に明瞭に残っていたため、位置と範囲を知ることができた。髪の毛の部分では、前端と後端である。顔面では、おでこの部分が前髪の生え際から眉の上1cmまでに幅広に及び、目の下から頬にかけて外側に開く三角形状に塗られている。首まわりでは、首飾りを挟んで上下に幅約2.5cmで一周し、首飾りの上面にも塗られている。次に手首には、両手とも腕輪状に幅1cm



第59図 2号古墳人物2(60)(2)

II 神保下條遺跡の調査



第60図 2号古墳人物2(60)(3)

3. 2号古墳の調査

で一周している。また、上着の裾部に沿っても縁取りをするように一周している。

人物3 (61) 高さ80.5cm、最大幅30cm、最大奥行20cmの男性上半身像である。刀を腰に差していることから武人像に属するものと考えられる。

基部は底径約14.5cmで、高さ33.5cmの円筒形をなしている。この部分に凸帯がめぐらされていない点は、人物2に共通している。底面から約29cmの高さの、正面から見て両側には円形の透孔が穿たれている。底面を丁寧にナデ調整しており、外面縦ハケ、内面縦指ナデである。内面底部下端には外面のハケよりは粗い目の横ハケを残し、幅8cmほどの粘土板を巻き付けて基底部を作っている点は円筒埴輪の場合と同様である。

胴部は、基部の円筒をそのまま延ばして本体をつくり、さらに上着の裾を表すため下端部に断面三角形の粘土帯を一周させている。腰のくびれには、幅約3cmの腰帯が巻き付けられている。外面は一部を除くと全体に縦ハケを残しており、裾と腰帯の表現がなかったならば、まったく衣服をつけているものとは想像できないほどに簡略化されている。

2本の腕は、肩から真横に出て垂下し、右手は失っているが、手首の位置から手を腰にあてていたものと推定され、左手は若干前方部に出て、腰に差している太刀の把に近い部分を握っている。太刀は、端部を丸くした細長い板状のものを左腰に斜めに貼付したもので残っていた部分では細かい表現はない。残っていた左手のつくりを見ると、手の甲を丸い円盤状につくり、その内側に4本の粘土紐を接合して手の先から親指をのぞく4本を出している。指先は第2関節のところで内側に折れ、手の甲から直接つくり出した親指との間に太刀の先端寄りが挟まれている。手の甲、指のつくりは、人物2と同じであり、腕の形態、大きさもよく似ている。腕は中実であり、根元が肩の中に差し込まれて、接続する構造である。腕は全体にナデ整形が施されている。

頭部は、本体を巻き上げ成形により球形につくったものを首の上ののせている。下から上へと巻き上

げ、頭頂部へしぼり込むようにすぼめていく。頂部の中心は、小孔があいた状態で終わっている。

顔面の作風は、人物2、人物4と同じである。眉を兼ねた眼窩を明瞭につくり、目は見開き気味である。顎から頬にかけては、肉付けにより首との間に鋭角な段をなしている。口はヘラにより小さく横一文字に刻まれたもので、かすかに開いているのみで、内側にはかろうじて貫通している。

髪は、中心から振り分け髪にし、両脇（美豆良）と後ろで束ねている。振り分け髪は、球形をなす頂部の本体に粘土板を重ねあわせ、端部を本体からつまみあげて離している。表面は、ハケ整形の方向をうまく利用して髪の毛を表現している。美豆良と後ろ髪はこれとは別づくりとしている。

美豆良は長さ13cmの中実で、棒状につくったものの上端を耳の上方に押し付けている。その上寄りの内側は頬の脇に接触し、下端寄りには胸の上寄りに押し付けられている。根元には結び飾りと思われる貼付が見られ、下寄りには前方に出る突起がついている。後者は、髪の形状を強調したものと思われる。

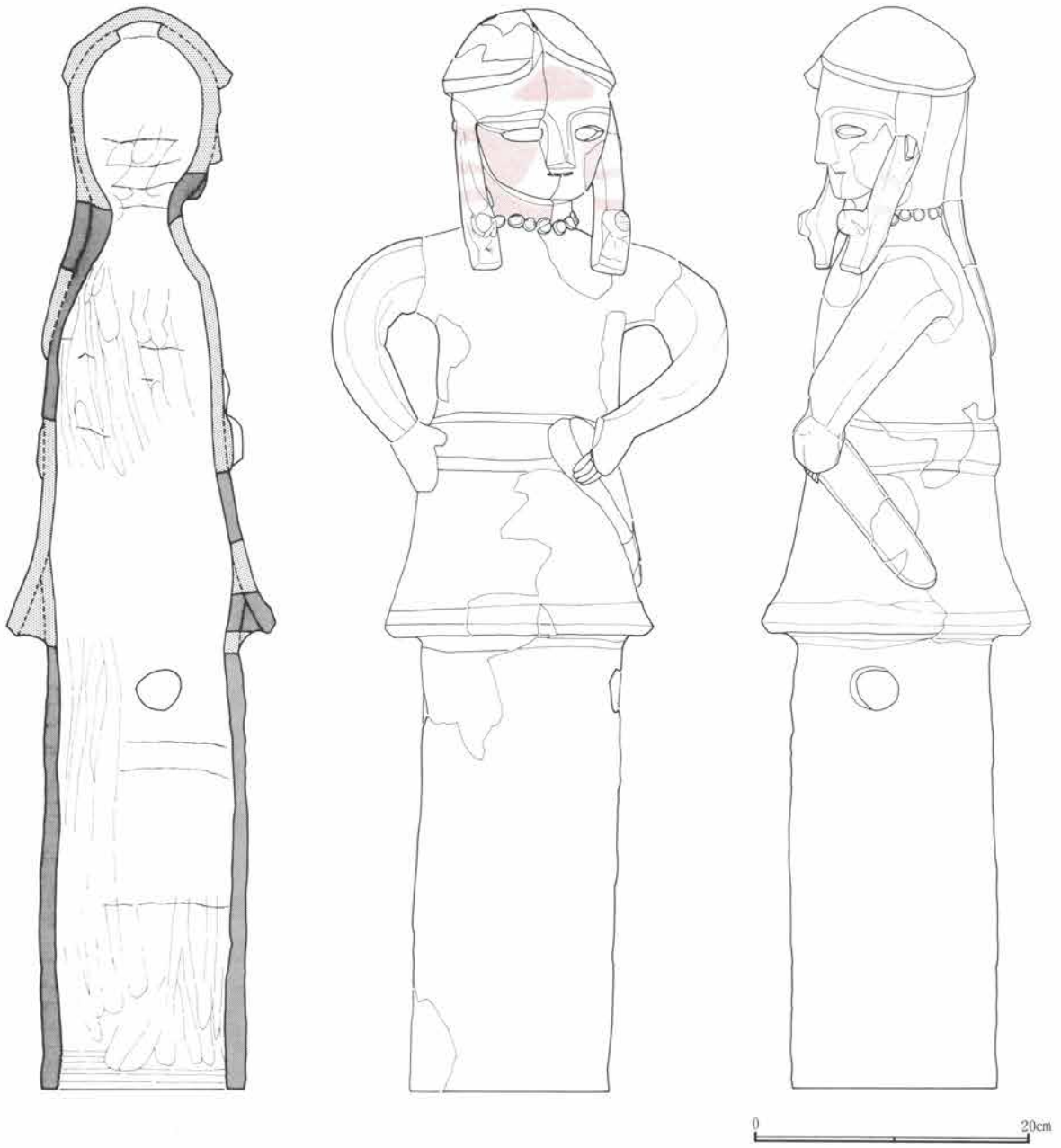
後ろ髪は、幅約3cmの無文の粘土帯である。後頭部の中心から垂れ下がり、背中中央へと達する。長さは約20cmで、下端は隅丸につくられている。

首回りには首飾りがある。径約1cmの円形の浮文を密に連ねたものである。背面の後ろ髪で覆われて死角になってしまう部分にも連なっている。

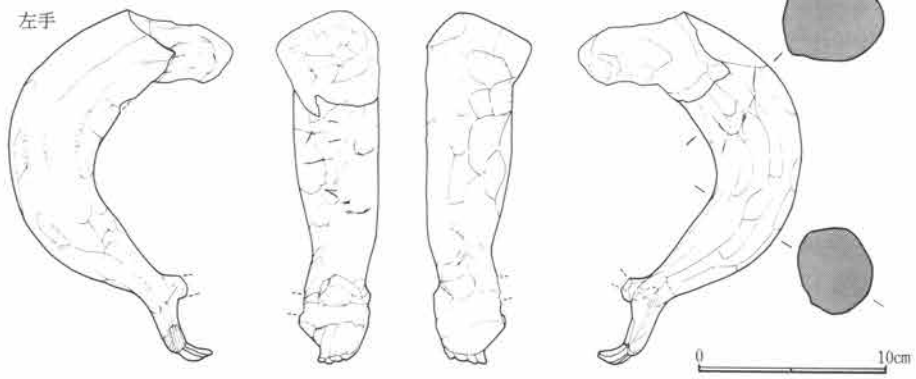
赤色顔料の塗彩が顔面と美豆良にある。眉の上から髪の毛の生え際までのおでこ全体と、目の下から頬にかけて外側に開く三角形に塗られている。首の部分は、首飾りの上から顎の下までに認められるが、本来は首飾りを挟んだ上下で一回りしていたものであろう。美豆良には、右側で幅約1cmで3段にめぐらされており、結び紐を表しているものと思われる。

外面は、顔面、美豆良、胸から背にかけての上寄り腕がナデ整形され、他の部分の大半はハケ整形痕をそのまま残している。内面は、縦指ナデを基調としている。

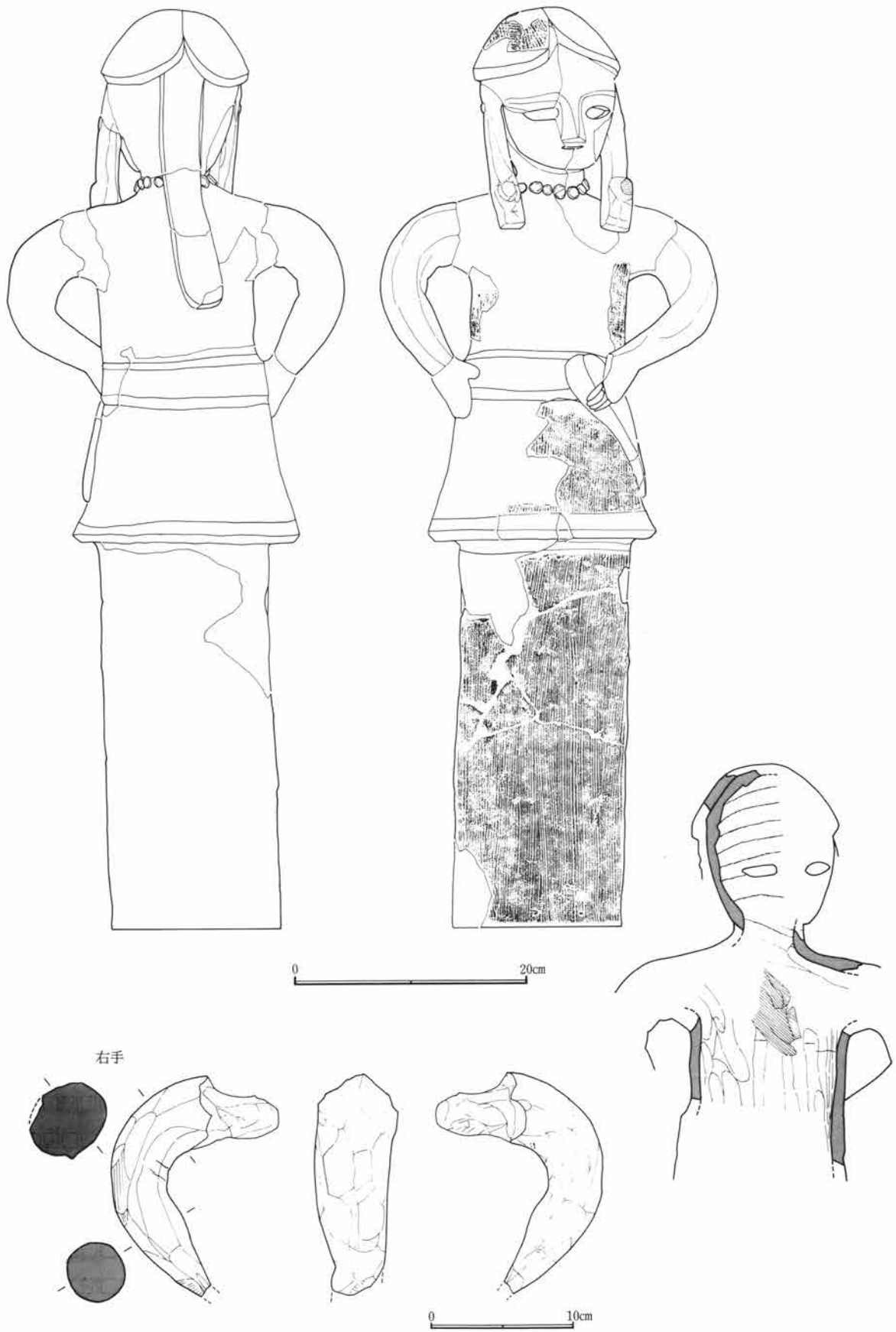
II 神保下條遺跡の調査



左手



第61図 2号古墳人物3(61)(1)



第62図 2号古墳人物3(61)(2)

II 神保下條遺跡の調査

人物5 (62) 高さ推定75cm、最大幅推定28cm、最大奥行推定23cmの男性上半身像である。基部の下寄り、胸部と頭上半部を欠いている。

胎土・色調が人物1に近いものであり、後述するように製作手法・作風もよく似ていることから、同一人物の製作にかかるものである可能性が強い。

基部は径約15cmの円筒形で、高さ推定35cmである。底面から約32cmの高さには、断面M字形の凸帯がめぐらされており、その下側5cmの両側には一対の円形透孔が穿たれている。この構造は、2号では本例と人物1に限られるものである。外面は縦ハケで内

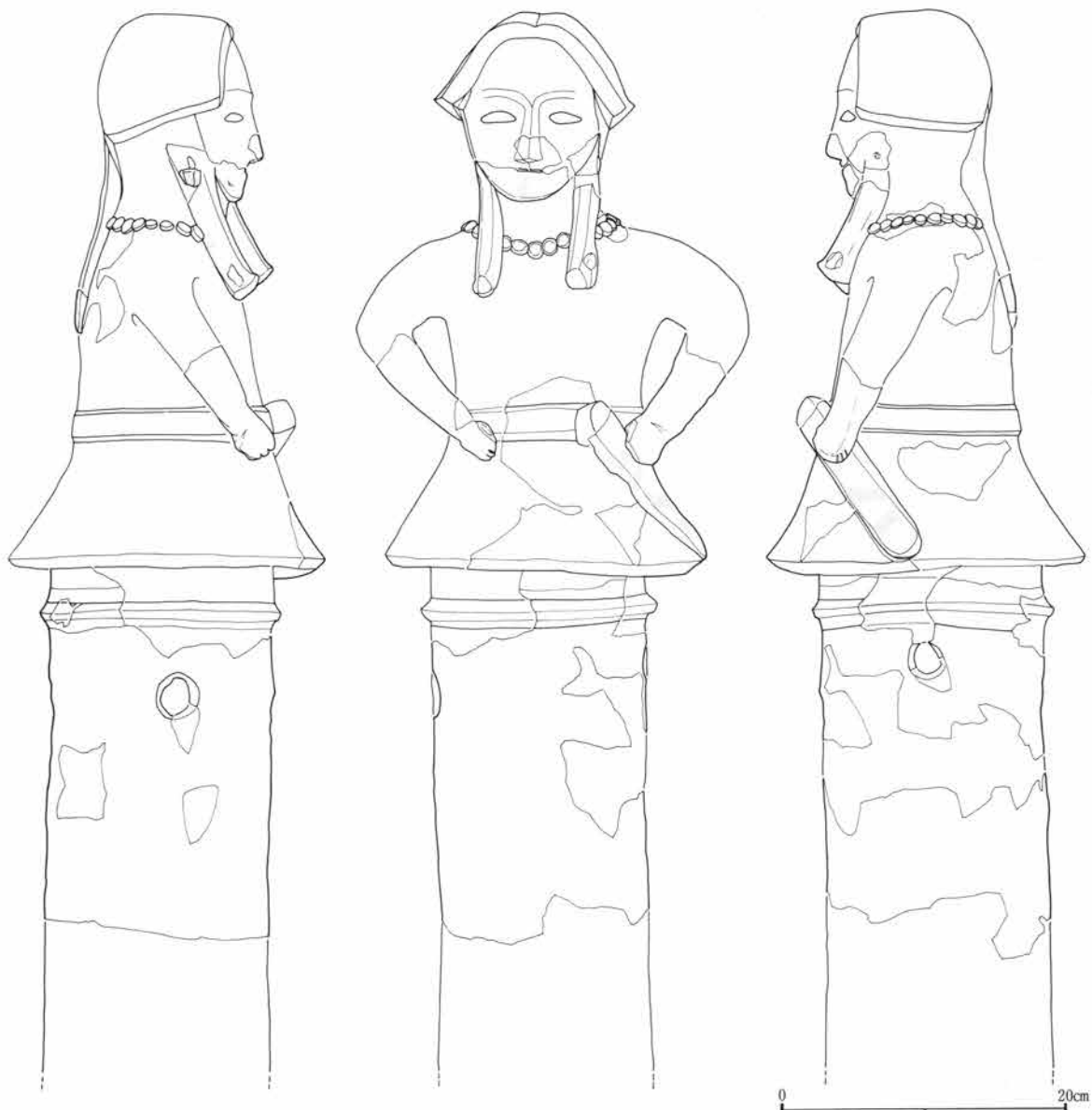
面は縦指ナデである。

基部の上のにせられた上半身の外面は、すべて丹念にナデ整形されている点の特徴である。

基部の円筒の上に直接胴部の本体部分がのばされてゆく。その後上着の裾部を表現した断面三角形の取り巻きがなされている。

胴のくびれ部には幅2cmの腰帯が取り巻いている。結び目が正面中央にこないことは明らかである。

左脇には、腰帯から上着の裾にかけて斜めに太刀が装着されている。幅2cmの板状を呈し、把寄りで厚さ1.3cm、鞘尻で0.4cmと徐々に細身になっている。



第63図 2号古墳人物5 (62) (1)

表面には、鋸歯状に赤色顔料が施されている。

本例に直接伴う腕を完全に特定することはできないが、胎土・色調等からは、復元に使用した2本の肘から手までの破片が最も近い。中実で、手の甲から指を直接つくり出している点が、人物2・3との大きな相違である。

ほぼ残っていた胴下半部の大きさから推定して、本例が他の人物像にくらべて若干小づくりであると思われたのであるが、これに伴う顔の部分の大きさも、やはり小づくりであり、両者のバランスがうまくとれていることがわかる。

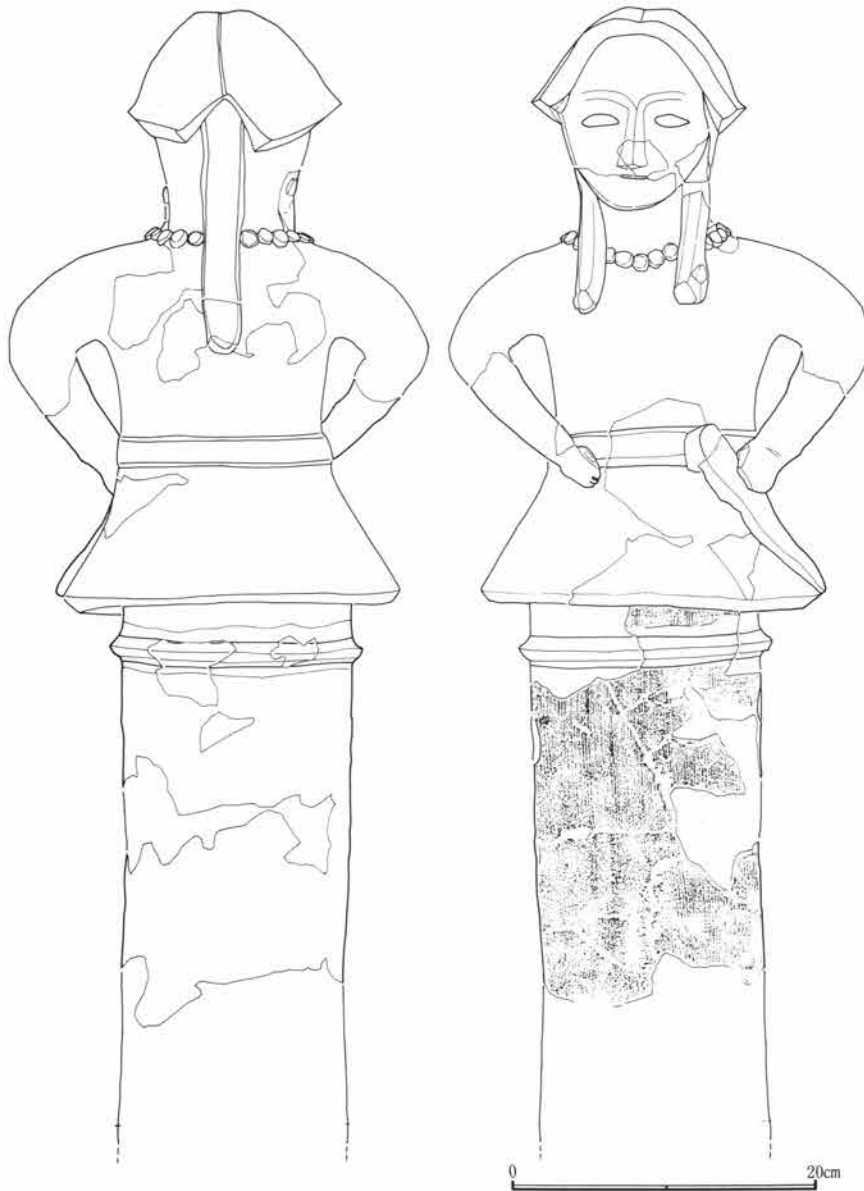
頭の上半部を完全に失っているが、美豆良と背中に取り付く束ねられた後ろ髪の下端部の遺存から、人物5と同様の髪形をしていたものと推定されたので、欠落する部分はこれを参考に復元している。

人物1と同じく顔のつくりのきめ細かさから、造型力の豊かさを窺い知ることができる。顎から頬にかけては、ふっくらと丸味をもっており、鼻も適度の大きさと高さであり、リアルなできばえである。それでも口だけは、やはりヘラにより横一文字に刻み込まれたもので、小さくかすかに開いている。顎の中心寄りには、赤色顔料の塗彩が認められ、人物

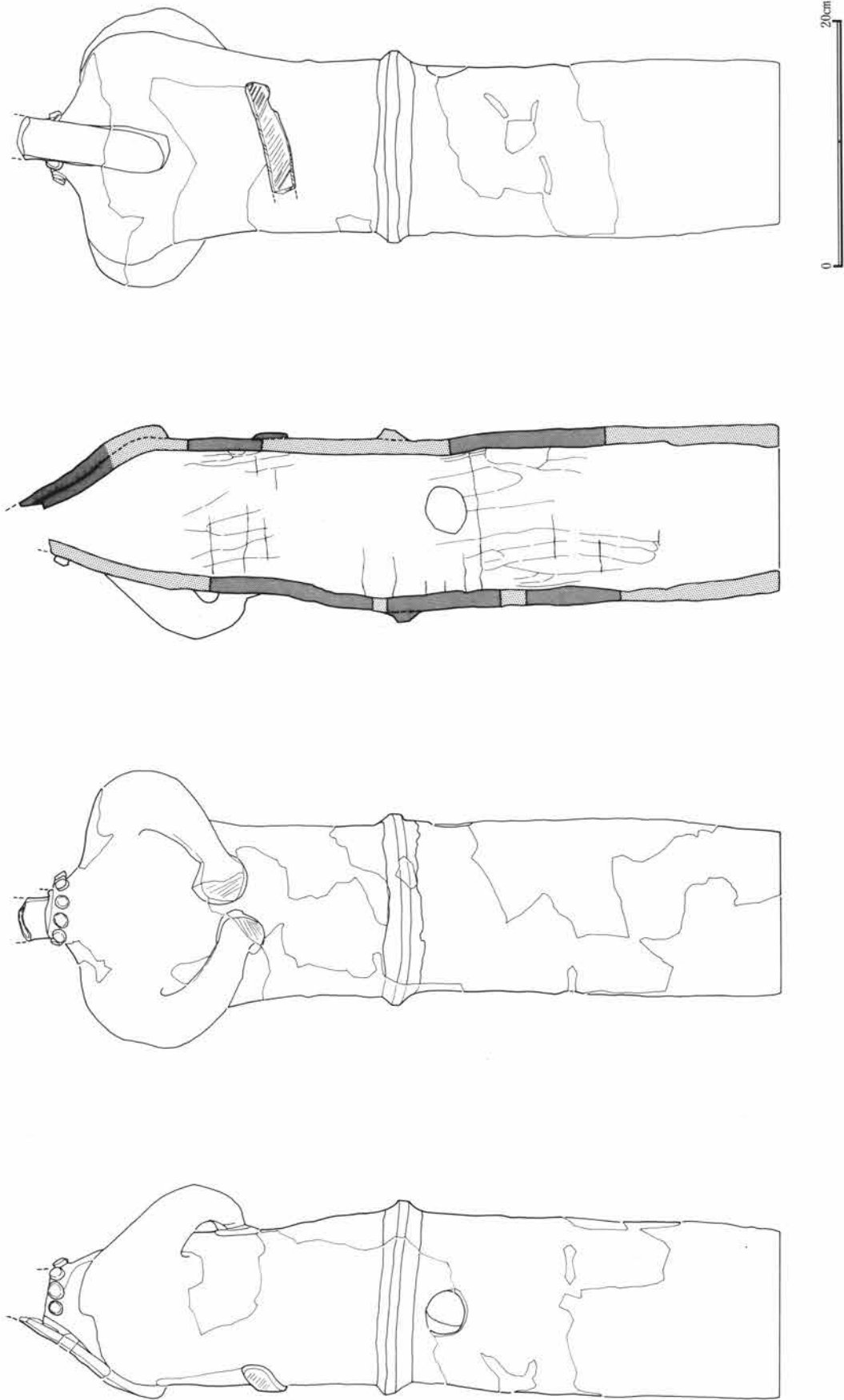
1と同じ表現であったと推定される。

美豆良は、頬の後ろでちょうど耳の位置で取り付けられている。取り付け部分に、斜め上からつき射した径4mmの棒状の小孔があげられており、本体に向けて通っている。位置的に見て耳の穴の表現とも考えられなくもないし、実際、視覚的にはそのような効果もあるが、斜め上から深くあけているのが不自然である。製作手法上のものと考えたい。先端寄りには胸に取り付いており、先は前方へ若干突出している。根元と先端に結び飾りの剥落痕が認められる。また、2ヶ所に赤色顔料をぐるりと塗彩していた痕跡が認められる。後ろ髪は幅2cmの板状で先端寄りが残っている。

首の付け根には、径1cmの円形浮文を密に連ねた首飾りが付されている。



第64図 2号古墳人物5(62)(2)



第65図 2号古墳人物6(63)(1)

3. 2号古墳の調査

人物6 (63) 現状で高さ64cm、最大幅推定24cm、最大奥行推定20cmの男性上半身像で頭部を欠いている。人物3の頭部を参考にするならば、高さ約80cmに復元される。

本例の場合、明確な衣服の表現が全くない点が、これ以外のものと異なっている。

基部は、底径13.5cmで高さ30cmの円筒形で、底面から27cmの高さの両側に円形透孔を有している。外面縦ハケで内面縦指ナデである。

底面から高さ約31.5cmの位置には断面台形のやや発達した凸帯がめぐる。人物2、人物3ではこの位置に上着の裾が位置している。上半身と基部を区分する機能は果しているが、裾部でないことは明らかである。

上半身は、両手を胸の下に押しあてており、人物2の仕草に近い。ただし、押しあてているのが丸い円盤状につくられた手の甲のみであり、指の表現がない点でより簡略なものである。押しあてる手の位置が左右で上下に若干ずれているのは、人物2と同様である。

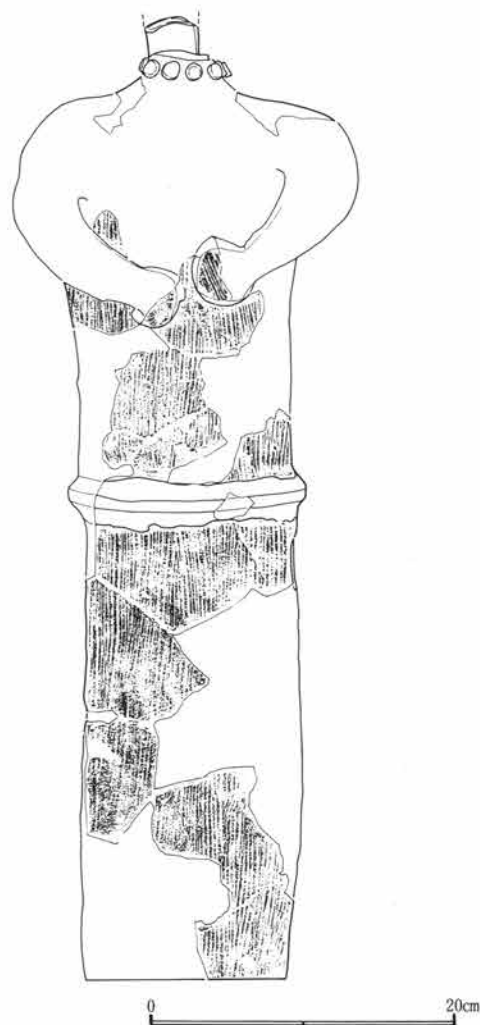
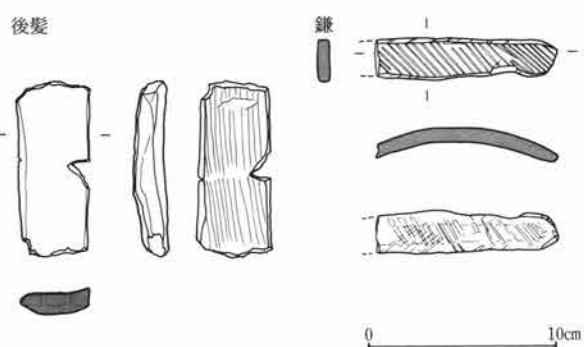
うしろにまわると、背中の上部中心には、垂下してきた後ろ髪が取り付けられている。上寄りでは幅4cmで下へ行くにつれ若干狭まっている。

首のつけねには、径約1cmの円形浮文の貼付による首飾りがめぐる。後ろ髪の下にくる死角にも首飾りが連なる点は、人物3と同様である。

背中のはぼ中央、人物3で言えばちょうど腰帯がくる位置に、幅2cmで長さ10cmあまりの粘土帯が斜めに貼付されている。上側の先端は丸く仕上げられ、その下は少しくびれている。形状にはリアルさはないが、位置的關係と貼付の仕方から、鎌と考えるのが最も妥当であろう。

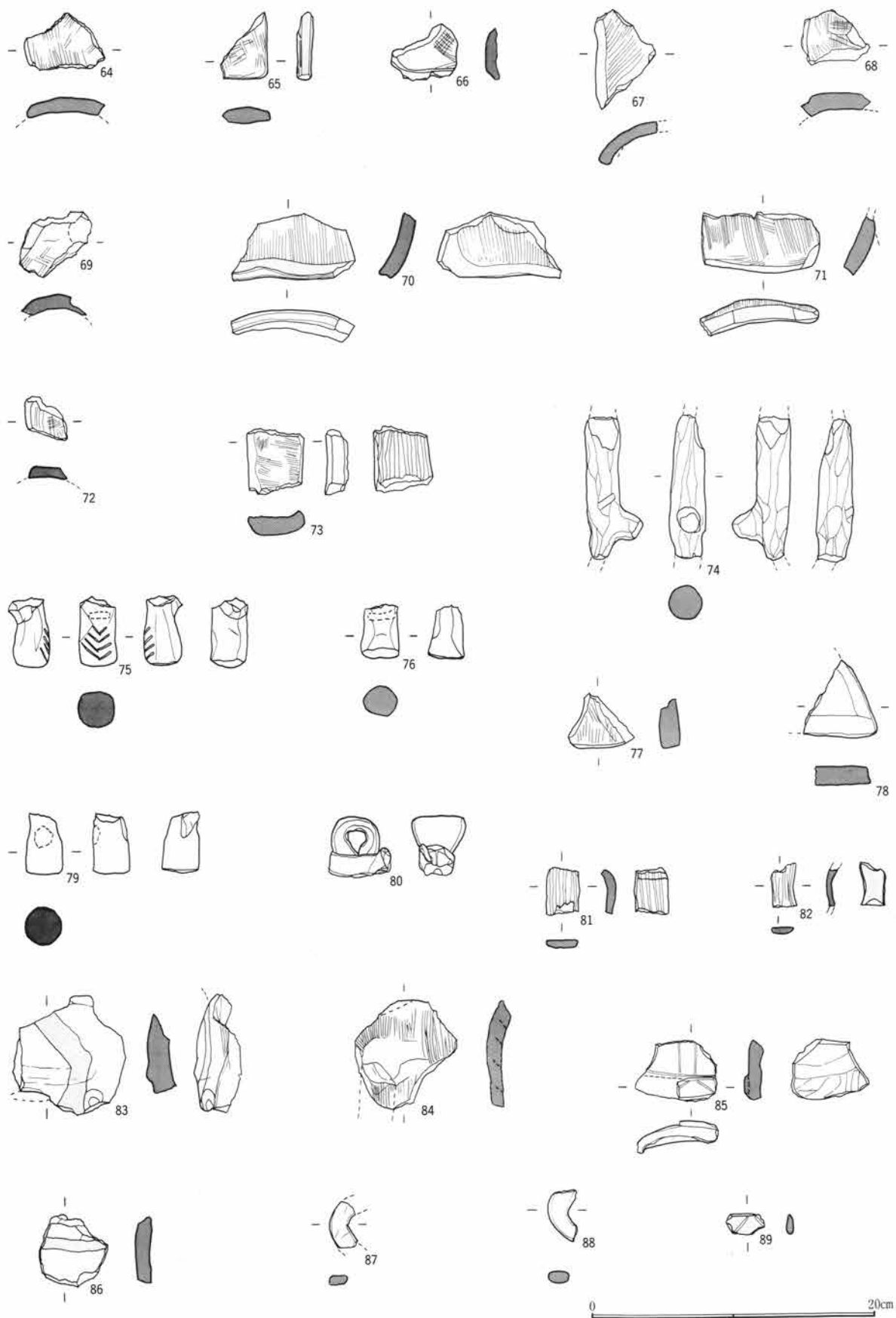
一部を除けば、上半身の外面は全体にハケ整形をそのまま残している。内面は縦指ナデ整形である。

衣服の表現を全く欠き、太刀を保持していないことと、鎌を腰に下げていることから、本例は身分的に低い地位のものを表そうとしたことが窺われよう。出土位置から馬に伴う馬子を想定している。



第66図 2号古墳人物6 (63) (2)

II 神保下條遺跡の調査



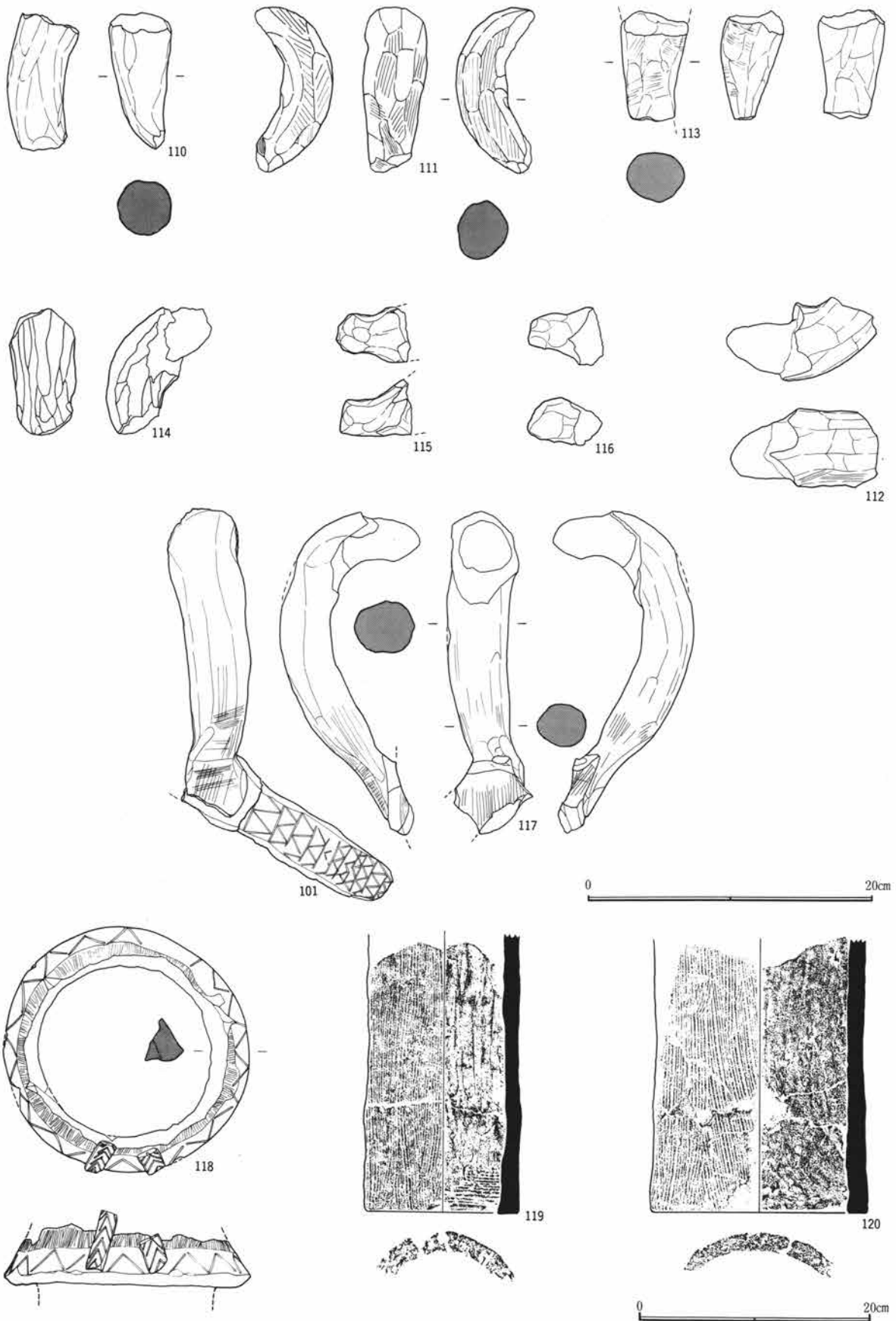
第67図 2号古墳人物埴輪片(1)

3. 2号古墳の調査



第68図 2号古墳人物埴輪片(2)

II 神保下條遺跡の調査



第69図 2号古墳人物埴輪片(3)

その他の人物埴輪の破片(64~120) 完形に近く復元できた6個体(人物1~6)は、これまで検討してきたように、形態的特徴・製作手法・作風等の比較検討から、人物1・5(人物A群)と人物2・3・4・6(人物B群)の2つのグループに分けられることが明らかとなった。また、この2群は、胎土・色調からも容易に識別できる点が注意される。

ところで、この6個体の人物埴輪に加えて、本墳からは人物埴輪の破片が多量に出土している。この6個体を大きく上回る数があったことが推測される。そこで、破片の人物像における部位を特定し、それに製作手法・胎土等を加味していけば、かなり具体的にその全体像に迫ることが可能と思われる。

まず人物A群に属すると思われる破片について見てみよう。

腕は2個あるが、このうち105は肩に差し込まれる部分であるから、人物1・5に属する可能性があるが、107は右手で、肩から指先までの破片であるから、別個体であることは明らかである。右脇に垂下しており、物に手をそえている。

髪の毛は、女性の島田の破片が1個(78)と男性の美豆良が1個(79)と同じく男性の振り分け髪が1個(68)ある。島田は、人物1のものとは別種であることから、もう一体の女性像の存在を推定できる。これに関連して、人物1と同種の耳環の下端に垂下される勾玉が2点(94・95)ある。もう一体が同じ顔の造作であったことが推定される。美豆良は長さが4cmと短く、人物5とは別個体の男性像があったことは明らかである。

85は衝角式の冑を表したものと思われる。大きさから、人物埴輪の頭部と考えられる。これに関係して、86は人物の額の部分で赤色顔料が認められる。その上端に沿って幅1.2cmの帯の貼付の剝落痕がある。冑の裾の帯金を形どったものが剝がれたもので89が接合する。85と同一個体と考えられる。このことから、人物5とは別の甲冑をまとった武人埴輪の存在が推定されてくる。

次にB群に属すると思われる破片について見てみ

よう。

まず、基部が2個体分(119・120)ある。人物2・3・4・6はいずれも基部を備えていることから、これ以外にもう2個体あったことは明らかである。119は底径13.5cmを測り、人物6に近い大きさである。120は19cmを測り、最も大きい部類に属する。

腕が肩へ差し込まれる部分は3個体(112・114・117)ある。このうち117は左手で、左腰に装着された太刀の把に手をそえているもので、人物3の像容にきわめて近かったことがわかる。しかし、本例の場合、線刻により鞆に文様を施している点でやや手が込んでおり、逆に指の表現をしていない点で簡略である。この場合の手の甲を円盤状に作っているのは人物6と同一であり、指の貼付を除けば人物3も同じである。人物3と同種の武人像をもう1個体加えることができよう。74の美豆良や73の後ろ髪は、これと同一個体の可能性もある。

106は、手を本体に押し当てた状態のものである。これは人物4の手である可能性がある。手の甲の部分のみであるが、円盤状につくる種類とは異なり、人物の手に近く、甲の内側に5本の指をつけていたことがわかる。人物2と同じように両手を胸の下に押し当てていたのであろうか。

104は本体部分に対して垂直にあてていた手と思われる。腰の付近に当てられていたものと考えられ、今まで見てきたものとは別個体と考えられる。

83は顔の左寄りの破片である。耳の位置に外径約2cmで細身の耳環の剝落痕がある。また、頭部から髪が剝がれた痕跡があり、つぶし島田が推定される。人物2・4に加えてもう1体の女性像があったことがわかる。77の髪はこれに伴う可能性がある。

75・76は、A群の79と同種の小ぶりの美豆良である。75は長さ4.5cmで根元の部分に結び飾りの剝落痕がある。表面には綾杉状の線刻があり、髪の編み目をあらわしているものと思われる。76はこれとは別種であり、やはり根元に結び飾りの剝落痕があるが編み目の表現はない。これらを、美豆良とする想定が正しければ、2個体の男性像の存在を考えると

II 神保下條遺跡の調査

ができる。これを人物6の馬子の美豆良と考えたとしても、最低もう1体分の男子像の存在が考えられる。

102・103は形態的には人物の胸部の可能性を考えている。そこでもっとも気掛かりなのは、両脇のところにくる小孔である。これ以外の人物像にはこのような透孔は認められていないからである。人物以外の形象を考える必要もあるが、現在のところ具体的に特定できる種類が思い当たらない。人物の可能性を補強するのは109の後ろ髪の剥落痕を残す背中の破片である。この内面の整形手法は、ハケを全体にそのまま残しており、他の人物像が全面を縦指ナデとしているのと異なり、特徴的である。両者が同一製作者の手にかかるものであったことからきている共通項であろう。この内面の手法は、これらに加えて、後述する軛にも限定的に認められる。

118は、人物の上着の裾部の破片であり、全周している。この破片によって上半身像の製作法がよくわかる。1・2号古墳を含めて、確認されたものでは、唯一、衣服に文様を施したものである。裾部に沿って線刻による鋸歯文が全周している。また、正面中心には、腰帯の結び目から垂下してきた帯先がハの

字形に取り付いている。表面には帯の編み目を表していると思われる綾杉状の線刻が認められる。この裾部は内径15cmであり、これに取り付く基部の径を示しているわけである。直接的に接合する部分は持たないが、現状では人物4の基部が、大きさ、つくりの丁寧さからふさわしい。

以上の検討をまとめてみると、本墳の人物埴輪の構成は、最低限、以下のものであったと思われる。A群は、女性上半身像が人物1の他にもう1体ある。男性上半身像は、人物5に加えて、甲冑を装着した武人像が1体ある。最低この4個体であり、79が85と別個体なら5個体である。

B群は、女性上半身像が人物2、人物4に加えて最低83に関わる1個体加わる。男性上半身像では117に関わる武人像が1個体あり、74・75・76の三種の美豆良から、最低でも1個体さらに加わる。さらに、102・103の性別不明の2個体の人物像を加えることができよう。

A、B両群を合わせると、女性像5個体、男性像6ないし7個体、不明2個体の13ないし14個体の人物埴輪が樹立されていたことが推定される。

2号古墳出土人物埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
人物1 58	人物 女性像	縦(82.0) 横 25.0 奥行22.0	胎 F 焼 良好 色 明褐色	12~13	本文参照	法量は復元推定
人物4 59	人物 女性像	縦(27.0) 横(14.0) 奥行(15.0)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	8	本文参照	
人物2 60	人物 女性像	縦 85.0 横 28.0 奥行20.0	胎 B~C 焼 ふつう 色 橙色	11~13	本文参照	
人物3 61	人物 男性像	縦 80.5 横 30.0 奥行20.0	胎 B~C 焼 良好 色 橙色	11~12	本文参照	
人物5 62	人物 男性像	縦(75.0) 横 28.0 奥行23.0	胎 F 焼 良好 色 明褐色	12	本文参照	法量は復元推定

3. 2号古墳の調査

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
人物6 63	人物 男性像	縦 64.0 横 24.0 奥行20.0	胎 B~C 焼 良好 色 明赤褐色	9~10	本文参照	頭を欠く
64	人物男性像 髪	縦 3.8 横 5.4 器厚 1.0	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		球形の頭部に被せられた粘土板である。ハケにより髪の毛を表現している。振り分け髪の前寄りの分け目の部分と思われる。	
65	人物男性像 髪	縦 4.3 横 3.1 器厚 1.0	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		振り分け髪の前寄り。外面ハケ整形後部分的にナデ。内面指ナデ。	端部に赤色顔料塗彩
66	人物男性像 髪	縦 3.7 横 4.6 器厚 0.8	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		球形の頭部に被せたものが剥落。ハケ整形により髪の毛を表現。	
67	人物男性像 髪	縦 6.8 横 4.3 器厚 0.8	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		板状に成形した物を球形の頭部に被せている。内外ともハケ整形、その後外面のみナデ。	振り分け髪の横部分
68	人物男性像 髪	縦 4.8 横 3.4 器厚 1.1	胎 F 焼 ふつう 色 橙色		球形の本体から剥落したもの。外面はハケにより髪の毛を表現し、端部はナデにより整形。	
69	人物男性像 髪	縦 4.5 横 4.0 器厚 1.0	胎 F 焼 ふつう 色 橙色		振り分け髪の前寄り。端部に赤色顔料塗彩。	
70	人物男性像 髪	縦 4.5 横 8.7 器厚 1.0	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		振り分け髪の後ろ寄り部分。板状に成形し球形の頭部に被せている。内外ともハケ整形。外面のみナデ整形。端部に赤色顔料を塗彩。	
71	人物男性像 髪	縦 4.2 横 8.3 器厚 1.2	胎 C 焼 良好 色 橙色		振り分け髪。外面ハケ整形、内面ナデ。上端に頭部からの剥離痕。	
72	人物男性像 髪	縦 2.6 横 2.4 器厚 0.8	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		振り分け髪の部分、内面は球形の頭部からの剥離を示す。ハケにより髪の毛を表現。端部に赤色顔料塗彩。	
73	人物男性像 後髪	縦 4.2 横 4.0 器厚 1.0	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		ハケ成形による粘土板の外面をナデ整形。内面に背中からの剥離痕あり。	
74	人物男性像 美豆良(右)	縦 10.0 横 3.8 器厚 2.3	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		断面円形の棒状で上端は厚さを減じ、顔の側面に貼付される。表面は全体にナデ整形。	先端寄りに赤色顔料の塗彩あり
75	人物男性像 美豆良	縦 4.8 横 2.9 器厚 2.5	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		上寄りで押圧により本体と接合、接合周辺の隙間に充填した粘土が残る。外面ハケ整形後ナデ、表面に髪の毛の編み目を表したと思われる綾杉状の線刻あり。また上寄りに長軸と直交する突起の剥落痕。	
76	人物男性像 美豆良	縦 3.7 横 2.6 器厚 2.1	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		上寄りで押圧して本体に接合、長軸に直交して、上寄りに突起が貼付されていたのが剥落した痕跡、結び紐の表現か。表面はハケ整形後ナデ、底面に赤色顔料の塗彩が残る。	長さが短いことから農夫の美豆良が推定される

II 神保下條遺跡の調査

No	種 類	法量 (cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備 考
77	人物女性像 髪	縦 3.8 横 4.5 器厚 1.5	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		内外ともハケ整形後ナデ。	
78	人物女性像 髪	縦 5.3 横 5.1 器厚 1.4	胎 F 焼 ふつう 色 橙色		内外ともハケ整形後ナデ整形後端部横ナデ。	胎土、色調は人物 1(58)に近い
79	人物男性像 美豆良?	縦 4.2 横 2.6 器厚 2.5	胎 F 焼 良好 色 におい橙色		断面円形で上に行くにつれて細くなる。外面は丹念なナデ仕上げ。上寄りに突起の剝落した痕跡。その背面に接続面の隙間に充填した粘土が残る。	
80	人物女性像 髪 ?	縦 4.2 横 4.4 器厚 4.0	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		長方形の粘土板を折り曲げて両端を合わせ、その上から薄い粘土板を巻き付けて結びの表現をしている。底面には本体からの剝離痕あり。髪の頭部の結びの表現とも考えられるが類例がない。表面ナデ整形。	
81	人物女性像 髪の結び?	縦 3.3 横 2.2 器厚 0.6	胎 B 焼 ふつう 色 赤褐色		薄い板状の物を折り曲げて成形。表裏とも粗いハケ状工具により整形。部分的に赤色顔料を塗彩。	
82	人物女性像 髪の結び?	縦 3.0 横 1.5 器厚 0.4	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		薄い板状の物を折り曲げて成形。表裏面ともハケ整形その後表面のみナデ。	
83	人物女性像 顔	縦 8.3 横 8.0 器厚 2.1	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		顔の左側部の破片。外面は丹念にナデ整形し、眉を粘土紐の貼付、ナデ付けにより表現。耳環の剝離痕がある。	顔面に赤色顔料の 塗彩あり
84	人物男性像 左側頭部	縦 7.3 横 7.1 器厚 1.1	胎 B 焼 ふつう 色 明赤褐色		巻き上げ成形により頭部本体を作り、美豆良を貼付している。美豆良は根元から破損している。外面はハケ整形により髪の毛を表現し内面は縦指ナデ。	
85	人 物 胃	縦 5.6 横 4.2 器厚 1.1	胎 F 焼 良好 色 におい橙色		球形の本体に被せられていたもの。線刻により鉄板を表現し、薄い帯を巻き付けて腰巻板を表現している。	衝角付式の可能性。 胎土、色調は人物 5(62)に似ている
86	人 物 顔	縦 5.0 横 4.9 器厚 1.1	胎 F 焼 ふつう 色 明褐色		外面ナデ。内面指ナデ。赤色顔料を一部に塗彩。	人物1(58)の胎土、 色調に近い
87	人 物 耳 環	縦 3.3 横 1.9 器厚 0.6	胎 B 焼 良好 色 橙色		粘土紐を環状に作り頭部に押し付けることにより扁平している。外面はナデ整形。	
88	人 物 耳 環	縦 3.4 横 1.6 器厚 0.9	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		表面を平坦に仕上げ、環状を呈する。表面はナデ整形。	
89	人 物 帯	縦 1.4 横 2.8 器厚 0.4	胎 F 焼 良好 色 明赤褐色		85と器形が同じ。	85の帯と同一と思 われる
90	不 明	縦 3.8 横 1.0 器厚 1.1	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		断面円形で棒状をなす。外面ハケ整形後ナデ。	

3. 2号古墳の調査

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
91	不明	縦 3.1 横 0.8 器厚 0.5	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		断面円形の細身の紐状を呈する。表面ハケ整形後ナデ。上端部に押圧により本体に接合した痕跡。	
92	不明	縦 6.0 横 1.1 器厚 1.0	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		断面円形の棒状に作る。外面はハケ整形後ナデ。上端に本体への貼付の為の押圧痕と剝離痕がある。	
93	不明	縦 2.8 横 1.5 器厚 1.2	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色		断面円形で棒状をなす。外面ハケ整形後ナデ。上端裏面に押圧により本体に貼付した痕跡あり。	
94	人物耳飾り 勾玉	縦 2.2 横 1.0 器厚 1.6	胎 F 焼 ふつう 色 明褐色		断面三角形。裏面は本体から剝離痕あり。	
95	人物耳飾り 勾玉	縦 1.9 横 1.6 器厚 1.5	胎 F 焼 ふつう 色 明褐色		断面三角形の小型の勾玉を押し付けて耳環下端に貼付。	
96	不明	縦 4.6 横 1.2 器厚 0.8	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		断面円形の紐状に作る。表面ハケ整形。上端部に押圧により本体に接合した痕跡。	
97	不明	縦 2.9 横 0.8 器厚 0.6	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		断面円形の細身の紐状。表面はナデ整形。	
98	人物 帯	縦 2.6 横 3.5 器厚 0.6	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		円形の本体に横方向に取り巻く。平行する2条の線刻により鋸歯状に施文している。	人物の胴を取り巻くものでは小さすぎる
99	人物 帯	縦 3.8 横 7.2 器厚 0.6	胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色		薄い粘土板を内外ともハケ整形し、外面にナデ整形後鋸歯文を線刻する。円筒形をなす本体に横位に巻き付けられる。	
100	人物 帯	縦 5.2 横 5.1 器厚 1.1	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		円筒形の本体に取り巻いていたもの。外面ハケ後ナデ、鋸歯状の線刻。両縁辺及び中央に円形の浮文を貼付。	
101	人物男性 太刀	縦 5.0 横 7.9 器厚 1.1	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		人物像の左腰に斜めに取りつく。長方形の板状に成形し、鞘尻に向けて厚さを減じている。表面に鋸歯文を線刻し、鞘の文様を表現している。内面は本体からの剝離痕あり。	117に接合
102	人物 胸部	縦 12.8 横 11.6 器厚 1.4	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		103と同一の形態、製作手法であるが別個体である。	
103	人物 胸部？	縦 16.2 横 15.7 器厚 1.3	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11	外面縦ハケ、上寄りはナデ。現状の下端に横ナデが一周し、その下に帯状にめぐる貼付があったことを推定させる。脇部上寄りに小透孔が一對あり。脇上端部の形態、整形から腕が装着されていたことがわかる。内面は縦ハケ、部分的にその上から縦指ナデ。	
104	人物 身体に当てる手	縦 7.7 横 5.0 器厚 2.5	胎 B 焼 良好 色 橙色		本体と別作りの手の平を当てている。手の先端ハケ整形。他はナデ。	

II 神保下條遺跡の調査

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
105	人物腕	縦 6.6 横 4.2 器厚 3.3	胎 F 焼 ふつう 色 鈍い橙～橙色		肩に差し込まれる部分2.5cm。外面は丁寧なナデ。	
106	人物右手	縦 3.9 横 4.4 器厚 2.0	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		粘土細紐を内面に貼付し、先を手の甲から出す事により指を表現している。内面に器本体から剝落した痕跡があり、胸に手を押し当てていたことがわかる。	胎土、色調から人物4(5)に着く可能性あり
107	人物右腕	縦 17.6 横 4.2 器厚 4.1	胎 F 焼 良好 色 明褐色		外面は全体に指ナデ。指を1本1本表現している。手の甲も写実的である。肩から真下に近く下げている。何らかの物を掴んでいる表現である。	手首に赤色顔料を塗彩
108	人物腕から手首	縦 5.7 横 3.3 器厚 2.6	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		器面はナデ整形。手の平が別の物に接着していた痕跡。	
109	人物男性像背中	縦 15.8 横 8.4 器厚 1.2	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色		人物男子像の背中破片と思われる。外面縦ハケ後、後髪の束ねた表現が剝落した跡あり。内面は斜め縦ハケ後部分的に指ナデ。	
110	人物右腕	縦 9.5 横 4.3 器厚 4.3	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		外面へラ整形後ナデ。手首の所で急に細くなる。	
111	人物腕(肘から手首)	縦 11.2 横 4.4 器厚 3.5	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		器面ハケ整形後ナデ。肘を境に90°程に折れ曲がる。	
112	人物二の腕	縦 10.5 横 5.5 器厚 4.0	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色		肩が約90°下に折れ曲がる。外面ハケ整形後ナデ。根元5.5cmは肩部に挿入される。	
113	人物腕から手首	縦 6.8 横 4.6 器厚 4.0	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		外面ナデ。手首の所で急激に細くなる。	
114	人物二の腕	縦 9.0 横 4.5 器厚 4.2	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		肩から直角に近く折れ曲がる。外面ナデ。	根元の約3cmが肩に挿入される
115	人物腕装着部分	縦 5.1 横 3.8 器厚 3.3	胎 F 焼 ふつう 色 橙色		手捏後ナデ整形。	
116	人物腕	縦 4.9 横 3.3 器厚 2.7	胎 F 焼 ふつう 色 鈍い黄橙色		装着部分手捏成形。	
117	人物左腕	縦 22.5 横 4.5 器厚 3.8	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色		肩から90°折れ曲がり左脇にくる刀の杷頭寄りに手を当てている。手の部分は円盤状に作る。刀は幅3.5cm高さ1cm。外面ナデ、根元約5cmが肩に挿入される。	101に接合

2号古墳出土人物・馬形埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
118	人物衣服裾部	高 5.3 径 21.5 器厚 3.1	胎 B 焼 ふつう 色 橙色	9~10	筒形の本体の外側を取り巻く。外面裾部は横ナデ後鋸歯状の線刻を施す。中央部には帯の結びの垂下した部分がハの字状に残存している。帯の表面は綾杉状の線刻を施す。	
119	形象基部	高 24.2 径 13.8 器厚 1.9	胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10	外面縦ハケ 内面縦指ナデ、下端部は横ハケ後部分的に縦指ナデ。	
120	人物基部	高 23.7 径 19.0 器厚 1.7	胎 C 焼 良好 色 淡赤褐色	8	径19cmの円筒形。外面縦ハケ、内面縦指ナデ、下端部斜め指ナデ。	
馬1 121	馬	縦 86.0 横 105.0 奥行32.5	胎 B~C 焼 良好 色 橙色	10~12	本文参照	
馬2 122	馬	縦 87.0 横 95.0 奥行31.0	胎 B~C 焼 良好 色 赤褐色~橙色	10~11	本文参照	

馬1(121) 推定最大長(口先から尻尾まで)105cm、最大幅32.5cm、最大高86cmを有する飾り馬である。部分的に欠けているが、長時間をかけての接合資料の探索により、ほぼ完全に復元できた。

つくりが丁寧で、バランスのとれた形態から作者の手慣れた技術力と造型力を知ることができる。

頭部は、口先で径7cm、眼のところで13cm、長さ24cmの巻き上げ成形による円筒を本体とし、両側の下端いっばいに貼付された粘土板により顎を表現している。取り付けられた顎の先端は、側面から見て丸く仕上げられている。口先は前から見て空洞で閉じる造作は行われていない。

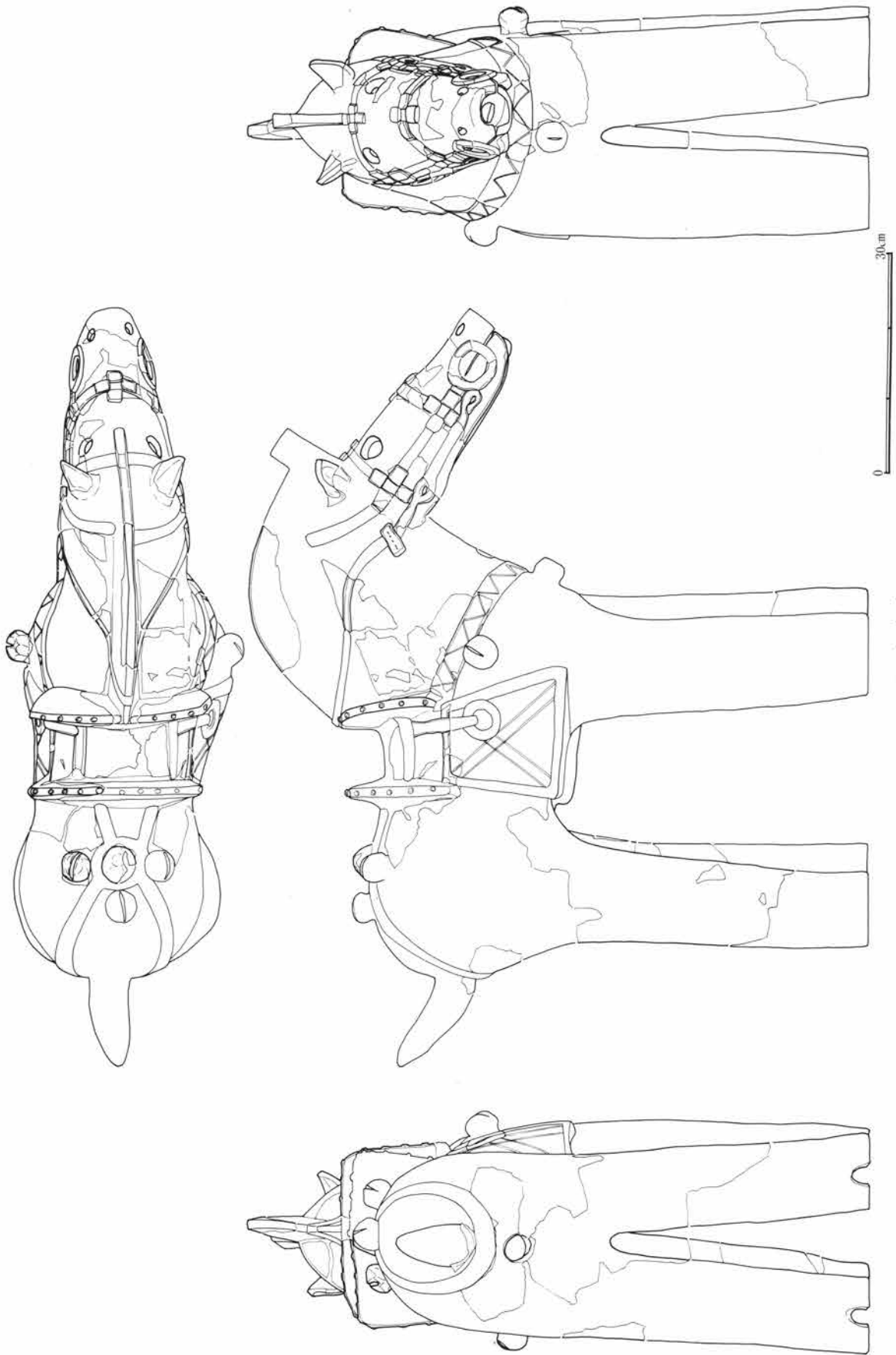
口先から3cm入った頂部の両端には、径1.5cmの鼻孔が奥へ斜めに穿孔されている。眼は口先から23cm入った頂部の両端で、径2.5cmの円孔である。眼の回りは、周囲より若干盛り上げており、眼球をおおう臉のふくらみを表現している。顎の下面には、口先から4cm入った位置に径3cmの円形透かしが、14cm入った位置に7×3cmの長円形透かしが穿たれている。これは、1号古墳の事例と同様で、やはり製作上の必要性からくる造作と考えられる。その点で注意されるのは、この孔が指頭により強くナデ付けら

れている点であり、円筒埴輪等に見られる工具による単なるくりぬきとは異なるものと思われる。

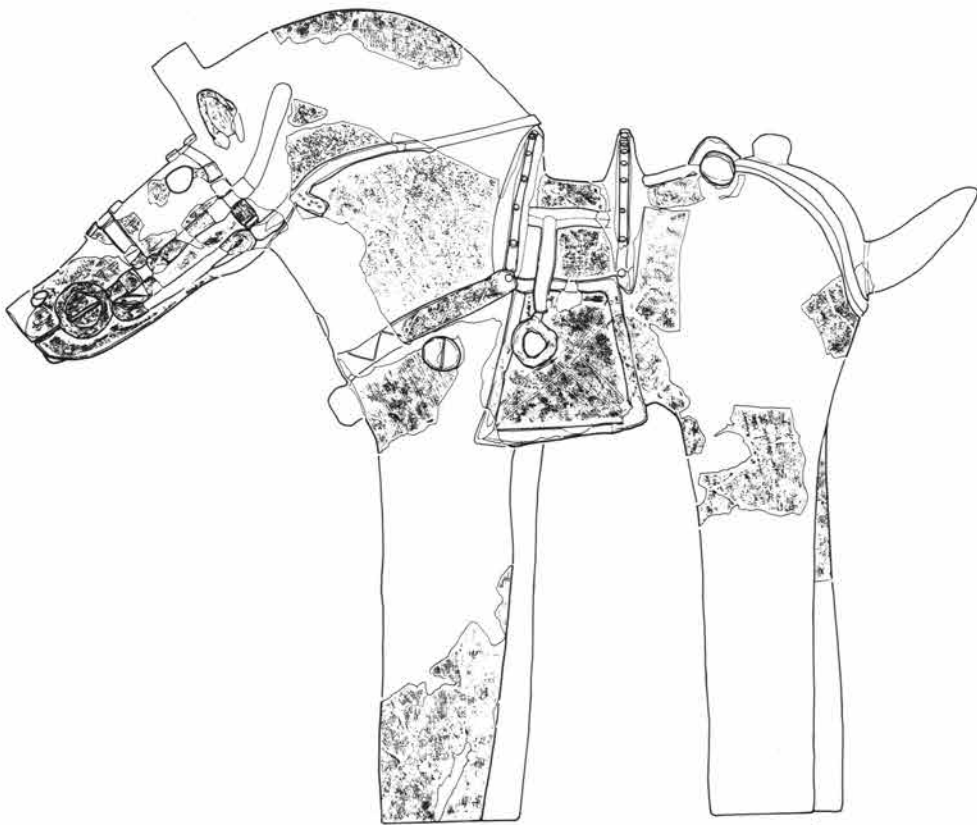
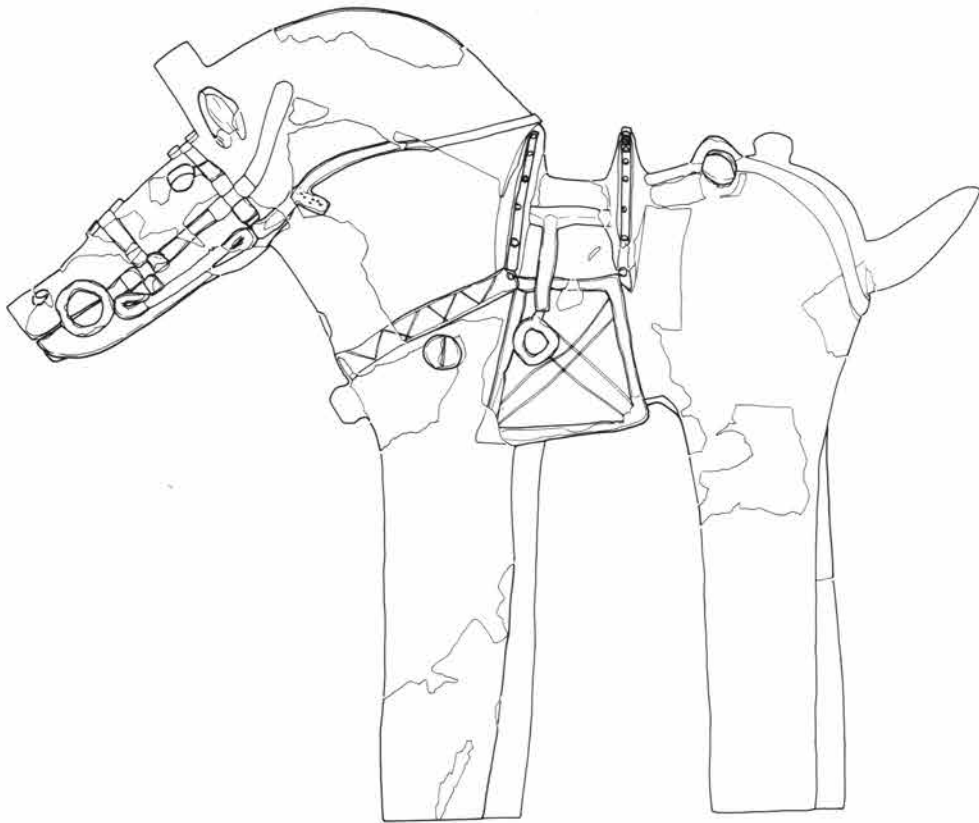
耳の取り付け位置を失っているため、復元での位置は全体のバランスを考慮して決定した。耳の形態は、長さ7cmほどの木の葉状の粘土板を少し折り曲げたもので、先端は尖っている。

面繫は幅1.5cmの粘土帯の貼付によるものであり、口先に貼付された鏡板から出て、眼と耳の下側を通り、後頭部にあたるたて髪の前寄りに取り付いている。これに対して、口先から14cm入ったところと26cm入った眼と耳の間の2ヶ所で横巻きにされている。その場合、下側へ回り込む部分は省略されている。帯の交差する部分及び鼻の上寄りと、たて髪結び飾りの前の6ヶ所には辻金具が配されている。その表現は、1号古墳と同じく一辺1.5cmの方形板4個を帯の上に十字形に重ね合わせたものである。

鏡板は素環式であり、幅約1cmの粘土帯を径6cmの環状に貼付している。鏡板の貼付後に、その中心を横方向に通すように、本体に口を表現した切り込みが入れられている。引手は長さ17cmの粘土紐を面繫の下側に沿って貼付しており、鏡板と手綱に接続する両端は、環状に仕上げられている。



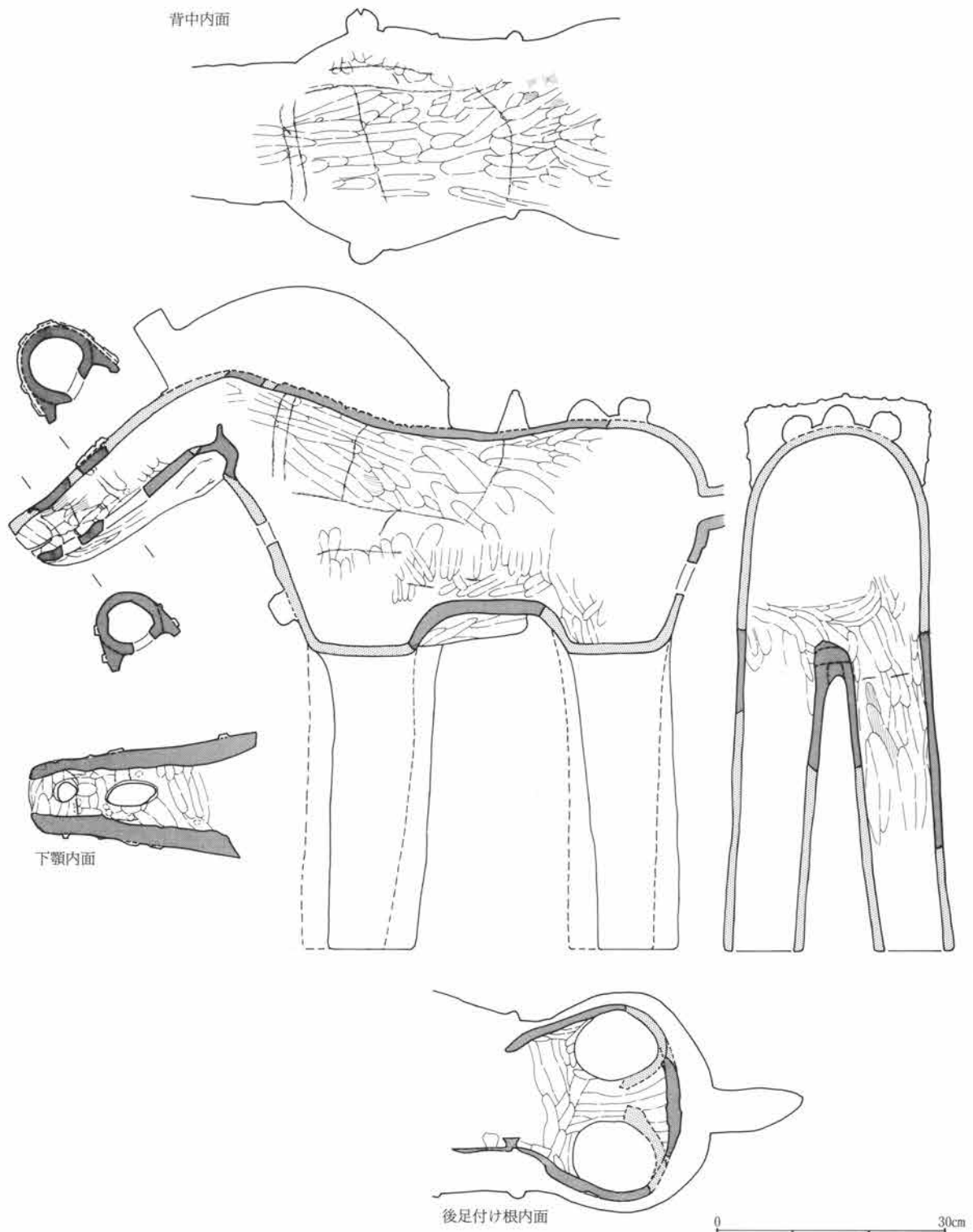
第70図 2号古墳馬1 (121) (1)



0 30cm

第71図 2号古墳馬1(121)(2)

II 神保下條遺跡の調査



第72図 2号古墳馬1(121)(3)

引手壺から出る手綱は、幅1cmの粘土帯の貼付によるもので、首の脇を通して、たて髪と前輪の接合部で合流していたものと思われる。首の脇にあたる位置では、手綱から下側に幅1.5cm、長さ3cmの長方形の粘土板が両側で取り付いている。表面の中心には、主軸方向に列点が一条連なっている。革の縫い目のようで、一種の飾り具のように思われるが、具体的に何であるか特定できない。

胸繫は、前輪の下端から出て、胸の前面から反対側の前輪下端にいたっている。幅2.5cmの粘土帯の貼付であり、表面には鋸歯文が線刻されている。前面の中央と両側の中心の3ヶ所には、帯の下側に径3cm、高さ4cmの鈴が取り付けられている。鈴は団子状の中実で、中心に刻みが根元近くまで入れられている。馬2の構造を参考にすると、前面の胸繫の上には径約4cmの円形の孔があげられている。意匠的な役割を備えた透孔とは異なり、製作上の必要によるものと考えられる。

たて髪は、曲線の山形をなすもので、板状をなしており、上端に沿って横ナデを施している。本例の場合、前端の結び飾りの部分を失っているが、1号古墳例及び本墳の馬2が、たて髪に連続して前端をL字形に形どったものであることから、これらと同様のものではあったと思われる。

次に鞍の部分の構造を見てみる。前輪、後輪と障泥および鐙からなる。前輪、後輪とも粘土板を本体に直接取り付けただの居木、鞍褥を省略している。前輪は幅24cm、高さ13cmの長方形板の背中に接する部分をU字形にくりぬき、両角を丸く仕上げたものをほぼ垂直にのせている。表面はハケ整形後、縁部に沿って横ナデによる面取りを施し、頂部には、笠鉾を表した径8mmの粘土粒が2.5ないし3cmの間隔で貼付されている。後輪は前輪より小さめであるが、形態は同じである。

鐙は、鉄製の輪鐙を模したものである。幅1cmの粘土帯を外形5cmの環状に貼付しており、前輪と後輪を背中の縁部でつなぐ幅2cmの粘土帯の前輪寄りから幅1.5cm、長さ10cmの粘土帯により垂下されてい

る。

障泥は、胴体の側面下端に4cmほど粘土板を付け足した後、この付け足し部分の下端から、胴体側面の中位にかけて、幅1cmの粘土帯の貼付により台形に縁取りをして表している。この区画内の表面には、平行する2条の線刻をX字状に交差させて、簡易な意匠としている。

尻繫は実際に残っている部分はないが、尻尾の下側の剝落痕から幅約2cmの粘土帯によるものであったと推定される。これに後輪の後ろの背に残る剝落痕を合わせて考えると、後輪から出た2条の帯が腰頂部中央にある雲珠に合流し、その先で二手に分かれて、尻尾の下側を回っていることがわかる。雲珠は径4.5cm、高さ3.5cmの先の尖った半球形であり、中空である。この雲珠から両側と後方の三方に胸繫のものと同じ単体の鈴が配されていたようであるが、実際に確認できたのは左側部の一ヶ所である。

腰から尻にかけて残っているのはわずかである。尻尾のつくりは、1号古墳例の尻の本体に中実の尻尾を差し込む方法とは異なっている。尻尾のくる位置で本体から直接つくり出しており、中空になっている。尻尾の下には、径3.5cmの円形の孔があくが、顎の下面の場合と同じように、強くナデつけており、単なる意匠上のものではなく、製作上の必要によるものと考えられる。

足は左前足と右後足が残っており、他は大半が石膏復元である。底面で径10.5cm、付け根の部分で径14cm、長さ約41cmを測り、4本とも同形、同大と思われる。底部の踵の部分には、蹄を表すための逆U字形のくり込みが認められる。

外面は、全体にハケ整形後、丹念にナデ整形を施しているのが特徴であり、丁寧なつくりであることがよくわかる。ナデ整形の下にハケ整形痕が残る部分でも、形状の向きに合わせて整形が施されているのが認められる。

表面が幾分摩耗しているため、赤色顔料の塗彩された部分はわかりにくい。確認できたのは次の箇所である。前輪の縁部、辻金具の方形板の表面、障泥

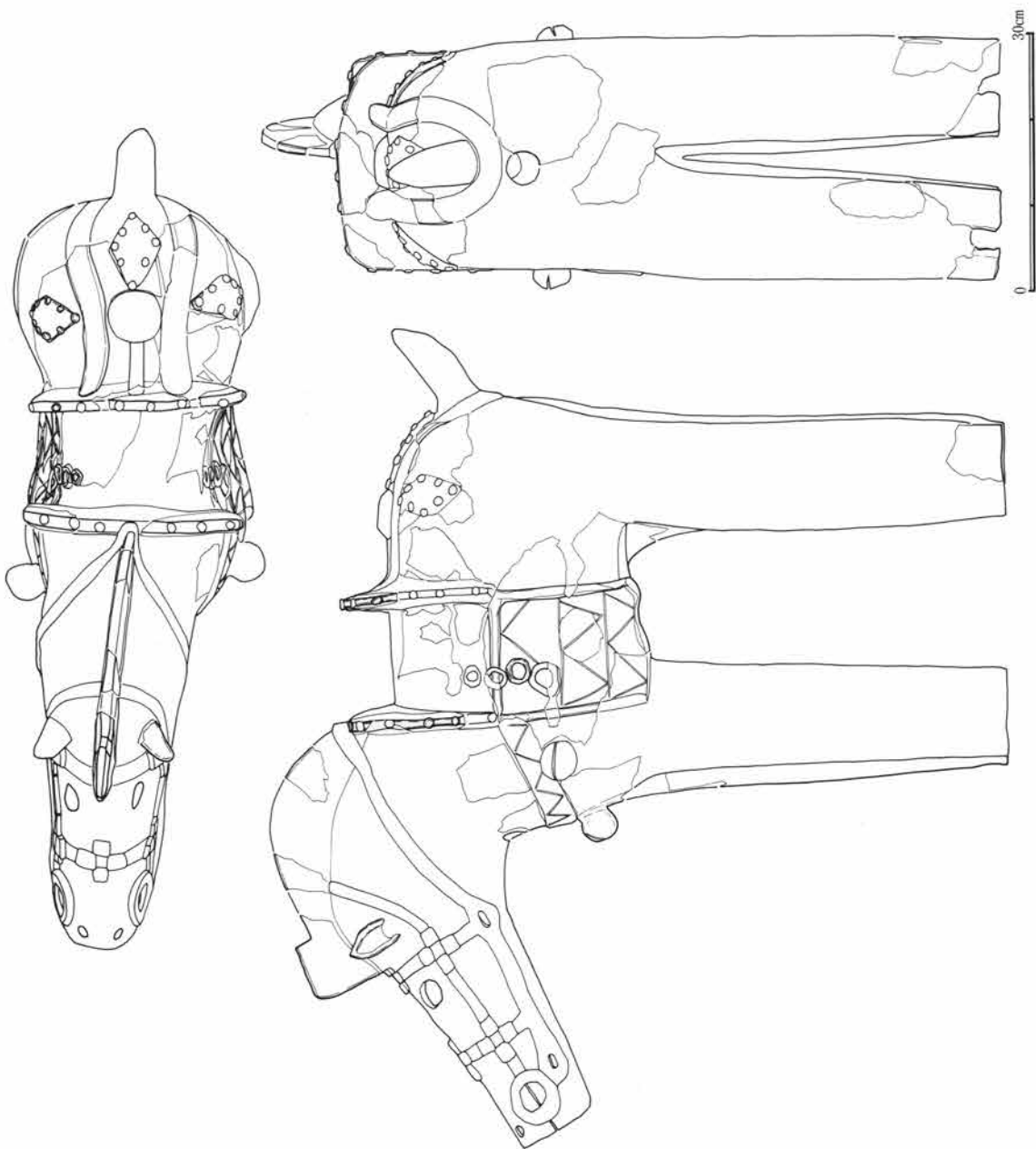
II 神保下條遺跡の調査

の表面に施されたX字状の線刻の中側、雲珠の表面の4ヶ所である。

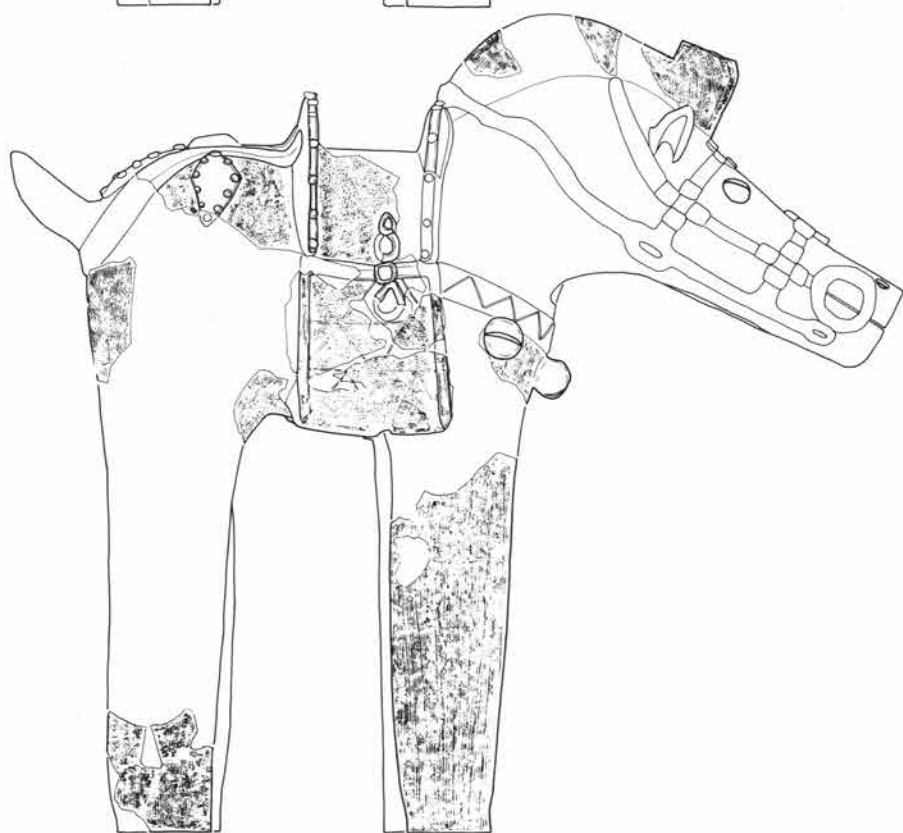
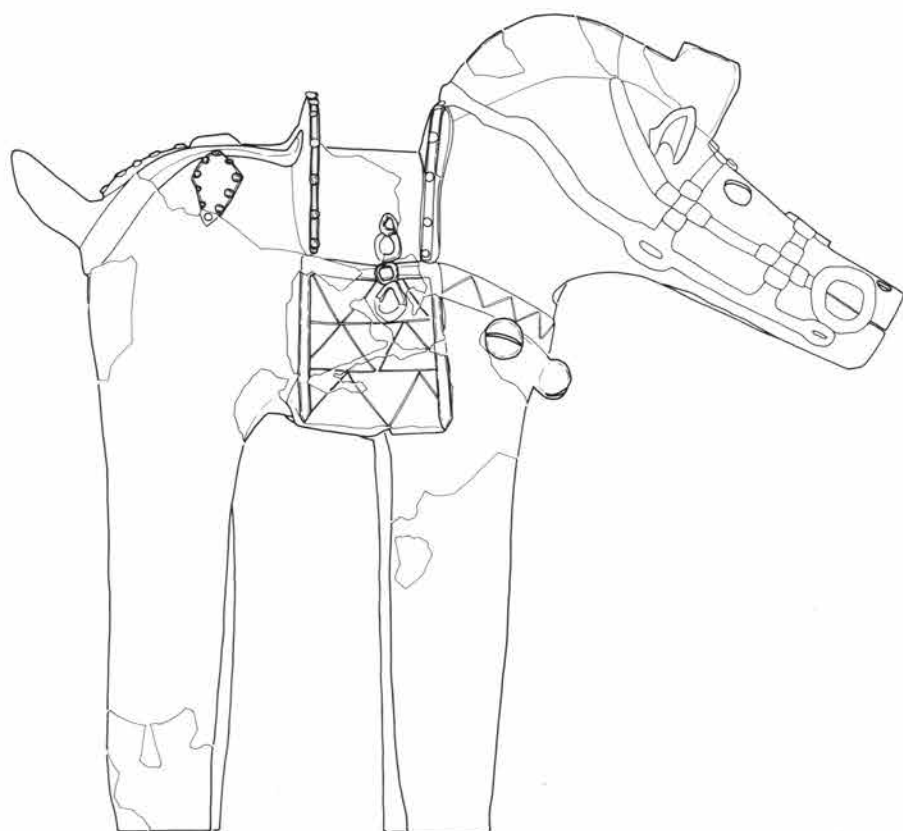
内外面の観察、接合部分の特徴等から、この馬形埴輪の基本部分は、大略、次のような製作工程をたどったものと推測された。まず、4本の足をつくり、正しい位置関係に配置する。この時、踵の位置により、馬の前後が決定される。次に前足2本、後足2本が粘土をブリッジ状に渡して接合され、さらに前後の接合が行われ、基礎部分ができあがる。この上

にまず胴体部分がのせられる。その場合、半分から下を先につくり、その上に背中にあたる上半分をのせる、大きく2工程でつくる。頭側と尻側はあいているから、ちょうどトンネルのような形になり、両方から手を入れて、接合、内面整形を行っている。次に頭側では首の部分をつくり上げる。さらにこれに頭部を接合する。尻の側では、腰から尻の部分を接合する。これにより馬の本体部分は完成する。

その後、たて髪、鞍、面繫、障泥、等々が接合、



第73図 2号古埴馬2 (122) (1)

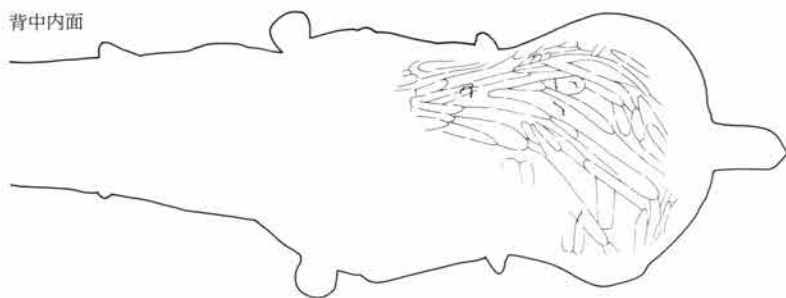


0 30cm

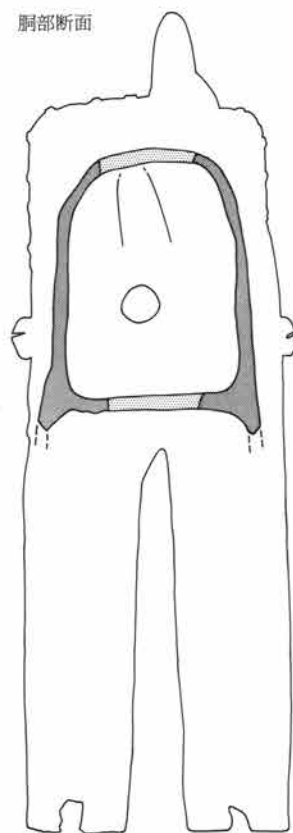
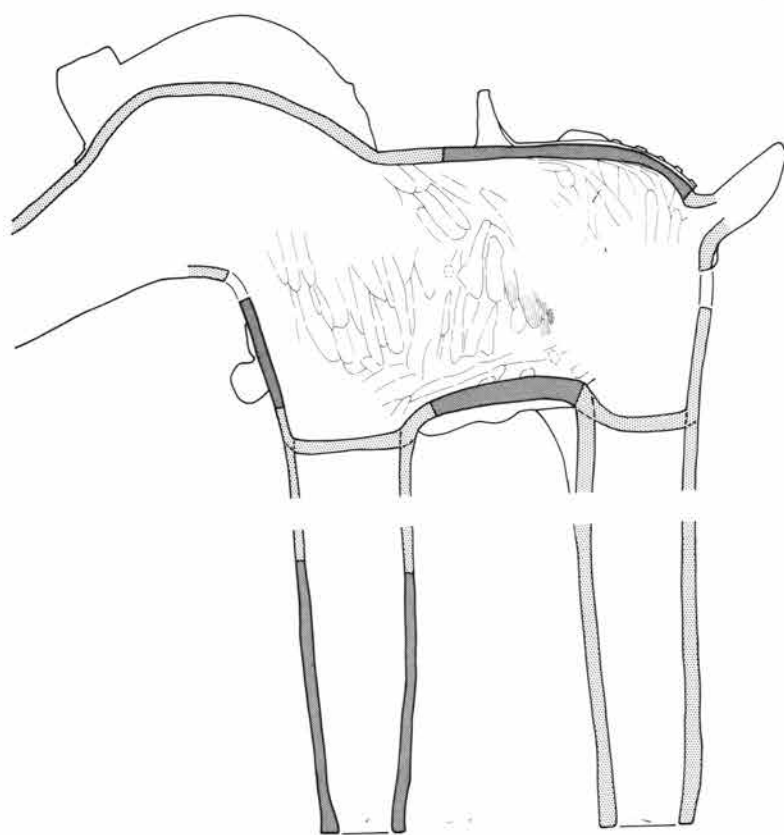
第74図 2号古墳馬2(122)(2)

II 神保下條遺跡の調査

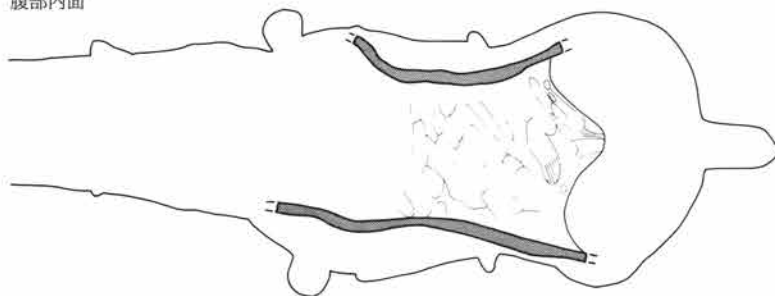
背中内面



胸部断面



腹部内面



0 30cm

第75図 2号古墳馬2(122)(3)

貼付されて最終的な仕上げにいたるわけである。

馬2 (122) 推定全長95cm、推定最大高87cm、最大幅31cmである。馬1より若干小づくりである。顔、足の大半を欠いているが、他の部分は比較的良好に残っていた。基本的な構造は馬1とほぼ同じであるが、細部の表現はかなり異なっている。また、製品の完成度の高さでは、馬1にくらべかなり見劣りする。例えば、ハケ整形が粗雑であり、表面のナデ仕上げも十分でない。また、形にいびつな部分が認められる点等に顕著である。

頭部は全く残っていなかったが、馬1と同じつくりであったと思われる。

たて髪は、板状をなし、外面にハケ整形を施し、端部を横ナデして縁取りしている。先端につくられた結び飾りは、板状の本体部分の前端をL字形に欠き取っただけの簡易なものである。

胸繫は幅約3cmの粘土板の貼付によるもので、その剥落痕のみが残っていた。前面中央と両側には、帯の下側に接して鈴が取り付けられていた。鈴は径4cm、高さ3cmの中実の団子状を呈しており、中心に根元近くまで達する一文字の刻みが入れている。前面の中央で胸繫の上4cmの位置には、径約3cmの円形の穴があいている。指で強くナデ付けられており、通例の円形透孔ではなく、製作上の必要からのものと考えられる。

鞍の部分は、前輪、後輪と障泥、鐙から構成されている。前輪は、幅25.5cm、高さ16cmの長方形の粘土板を馬の背中にあたる部分をU字形にくりぬいて接合したものである。縁に沿っては横ナデにより面取りが施され、頂面には径1cmの円形浮文が3.5cmほどの間隔で貼付され、覆輪を留めた笠鉤を模している。後輪も前輪とほぼ同形同大であり、鉤を等間隔に打つ点も同様である。

障泥は、胴部の側面下端に5cmほど粘土板を付け足した後、幅1cmの粘土紐で横15cm、縦16cmの正方形に近い区画をつくって表している。その場合、下端に沿っては粘土紐が貼付されない。区画内の表面は、線刻により上下3段に区切られ、格段ごとに鋸

齒文が施されている。その場合、右側と左側では線刻に差がある。右側の方が整然としており、左側の方が雑である。墳丘外側から見て馬の右側面が外に向くことと関係しているとも考えられる。

居木の側面に相当する部分の前輪寄りには鐙が取り付けられている。幅5mmの粘土紐を径2cmの環状にして上下に3個連ね、その下に径3.5cmの環状に1個貼付している。上の3個は兵庫鎖を表し、下の一回り大きいものが輪鐙を表していることがわかる。

尻繫は、後輪の背後から腰の縁に沿って走り、尻尾の下側を廻って反対側を通り後輪に取り付いており、幅3cmの粘土帯の貼付により表している。帯に囲まれた腰の頂部中心には、径約6cmの円形の剥落痕があり、雲珠が配されていたものと思われる。この雲珠から両側と後方に垂下するようなかたちで3枚の杏葉が取り付けられている。右側面にあるものは縦10cm、横5.5cmの菱形の粘土板を貼付したもので、表面の縁に沿って笠鉤を表したと思われる径1cmの円形浮文が約2cmの間隔で貼付されている。残りの2ヶ所はこれと同形同大の剥落痕であることから、同じつくりの杏葉が貼付されていたものと思われる。尻尾を取り巻く尻繫の帯の下側に接して、径4cmの円孔が認められる。やはり強く指でナデ整えられており、単なる円形透孔でないと考えられることは馬1の場合と同じである。

足は右前足がほぼ完全に残り、後足は踵を中心に少し残っていた。ただし、後足については、必ずしも位置関係が正しいわけではない。底部の後側には幅3.5cm、高さ3cmの逆U字形に近い、蹄を表現するための欠き取りが認められる。前右足について見ると、底部で径10cm、付け根寄りで径12.5cm、高さ43.5cmである。

外面に施されたハケ整形は、そのまま残る部分が多く、目の方向が揃っていない。

埴輪の製作工程、製作手法は基本的に前述した馬1のそれと同じであったことが、内外面の観察からわかる。

ところで、これまで見てきた結果から考えると、

II 神保下條遺跡の調査

馬1と馬2は別の作者によるものであったと考えられる。馬1の方が手慣れており、丁寧な作りである点等に明瞭な差がある。一方、製作工程、製作手法がほぼ同一であり、大きさも近いことから、両者が細部に至るまで同一の制作技術を有していたことは明らかである。

その他の馬形埴輪片 (123~129) 馬1、馬2には属さない6点の破片が存在している。図示したもののうち、123は馬1の前右足に重なる障泥であることが、馬1の石膏復元終了後に判明した。

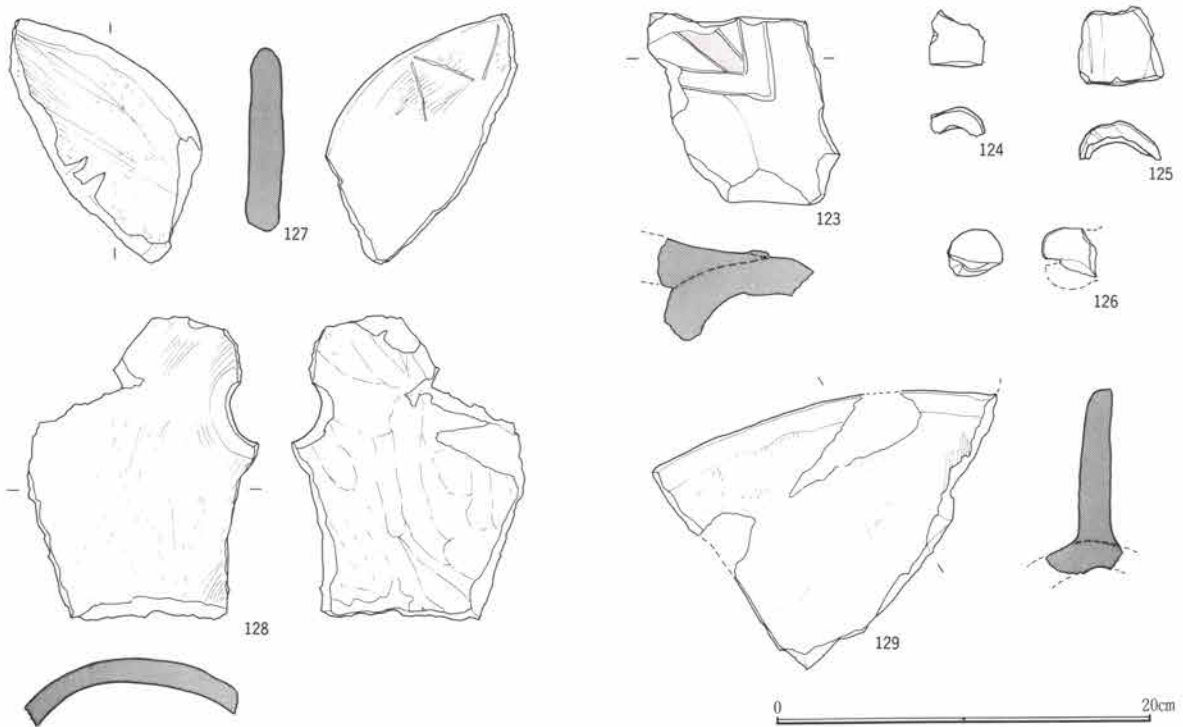
その他の主なものとしては、鞍橋 (127)、たて髪

(128)、尻の部分 (129) がある。

鞍橋は、頂部に笠鉾を打つ表現が認められず、また、縁寄りに線刻の鋸歯文を連ねている点で、馬1、馬2のそれとは異なっている。

たて髪は、その下側の首に取り付けられていた痕跡を残している。鋭角となっている端部には、たて髪とは別づくりの結び飾りの剝落痕が認められ、馬1、馬2とは異なる構造であったことがわかる。

これらの破片が幾体の馬に伴うものなのか、明らかにしがたい。しかし、本墳に少なくとも3頭以上の馬が樹立されていたことだけは明らかであろう。



第76図 2号古墳馬形埴輪片

2号古墳出土馬形埴輪観察表

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
123	馬障泥	縦 10.1 横 10.1 器厚 5.5	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		筒形を呈する腹部の側部に板状の障泥が取り付けられている。障泥は低い粘土帯の貼付で区画され、内部に2条の平行する線刻が施され、線の間は赤色顔料が塗布されている。外面ナデ、内面指ナデ。	
124	馬鐸?	縦 2.9 横 2.9 器厚 0.8	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		径3.3cmの円錐状の器形の一部である。外面ナデ粘土板による成形である。	125と同種の物

3. 2号古墳の調査

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
125	馬鐸?	縦 4.0 横 4.5 器厚 0.9	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		粘土板による円錐状の器形の一部である。向かって右側部の形状からの円錐状のものと半載して使用していることが推測される。	
126	馬の鈴	縦 2.3 横 2.9 器厚 2.9	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		手捏成形後、ナデ整形。丸く仕上げた後に中心に刻みを入れる。	
127	馬鞍	縦 10.0 横 10.8 器厚 1.6	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		器面ハケ整形後部分的にナデ。端部はやや強いナデにより面取りをしている。鋸の表現なし。縁部に沿って鋸歯状の線刻を施す。	
128	馬	縦 12.0 横 18.0 器厚 1.3	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		外面ハケ整形後ナデ、端部横ナデ。筒形を成す本体の頂部に、長軸と平行して、板状のたて髪を取り付けている。	
129	馬尻部分	縦 15.0 横 12.0 器厚 1.3	胎 B 焼 ふつう 色 橙色	12	径3.4cmの円形透孔が空く。切口面を指ナデ。外面縦ハケ。内面縦指ナデ。	

家形埴輪 (130) 高さ100.5cm、幅屋根頂部で62cm、最大奥行下屋根で39cmを測る。入母屋造り式であり、ほぼ全体を残すものであった。写真図版に示したものは、復元作業時において、上屋根と下屋根の接合構造の理解に、若干の事実誤認があったため、実測図に示したものと少し異なる点があるが、後者を最終的なものとした。

本例の形態上の大きな特徴は、1号古墳例ほどではないが、上屋根が大きく誇張されている点と、四柱部が3層になっている点である。この3層の場合、3階建てであったとすることには問題が残ろう。窓あるいは、入口施設の位置との関係で考えるならば、単層の家を念頭におき、これに2段を付け足して高く造り上げようという意図であったと解したい。

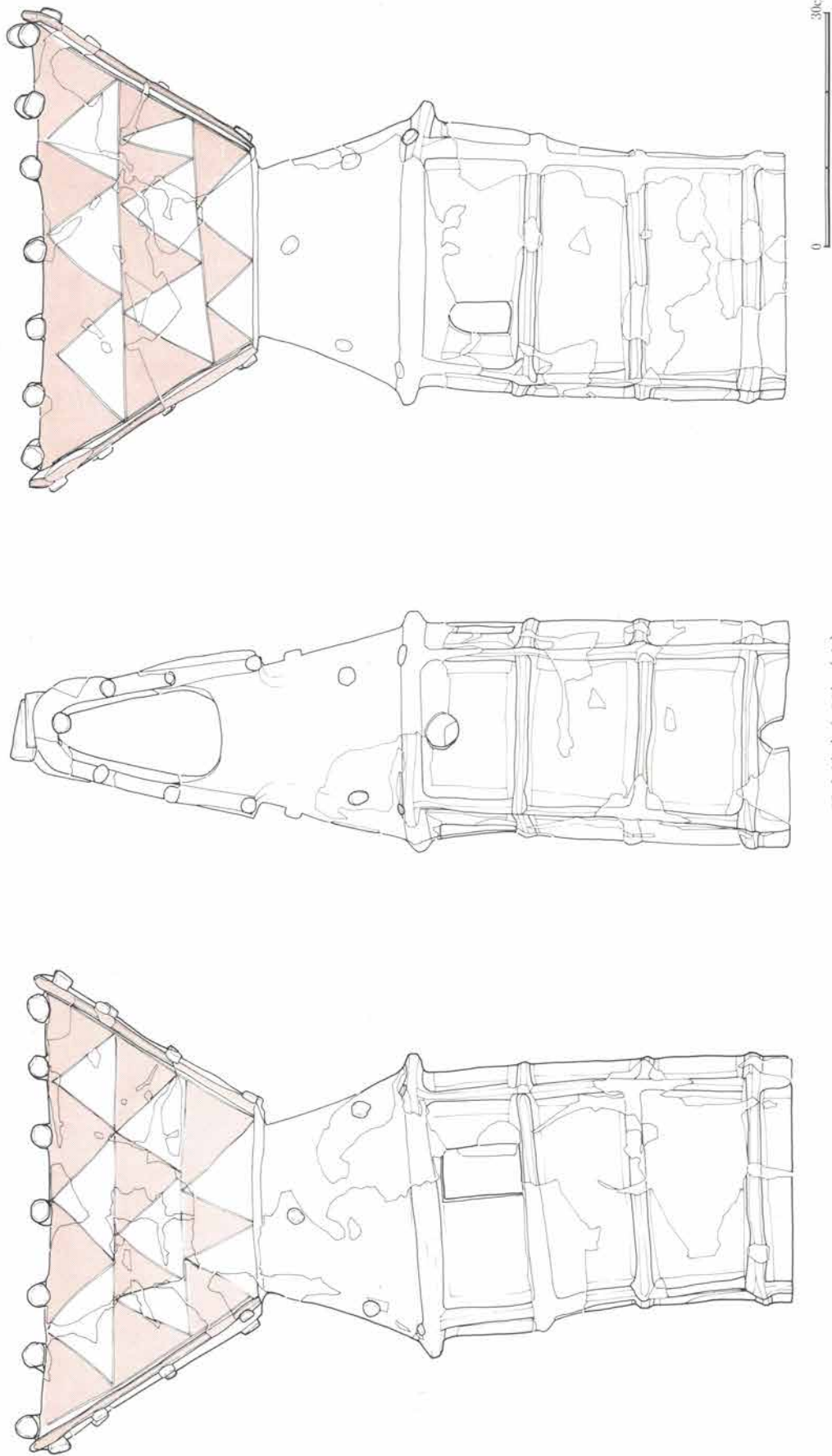
四柱部は、基底で桁方向33cm、梁方向28cmで、平面形は楕円形に近い隅丸長方形で、高さ48cmである。各壁面はゆるい弧状を描いており、辺の中心が最も外側へ出ている。四隅に配された縦方向の凸帯により、視覚的に四角い形状に見えるわけである。この曲線は、粘土板を巻いて造るという四柱部の製作方

法と関係した形態と推定される。

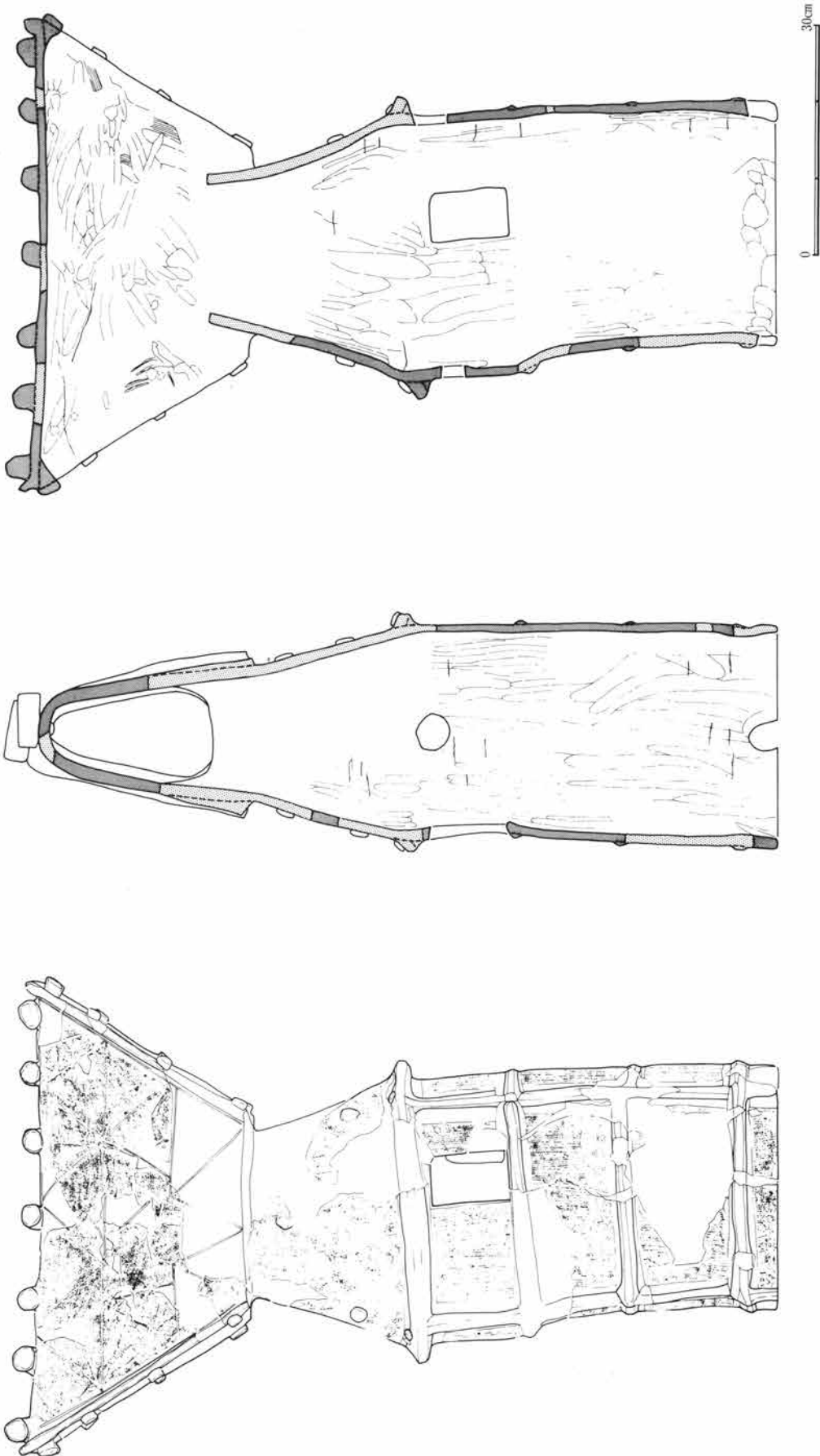
四柱部を横方向に取り巻いている凸帯は、底面から5cm、21cm、34.5cmの位置をめぐる。床下部分を表現していると思われる基底部の梁側の中心には逆U字形のくり込みが認められる。下から2段目、3段目には何も認められない。4段目（これが本来の壁面）には、桁側で中心からやや横にずれて、縦10.5cm、横6.7cmの長方形の透かしがある。切り込みの底辺は、3段目の凸帯の上端と一致している。家の入口部分を表していると思われる。これと反対側の壁面には、隅寄りに偏して縦8cm、横4cmの長方形の透かしがある。こちらの場合は、凸帯との間が1cmほどあいている。大きさ、位置等も勘案すると、窓を表していると考えられる。一方、梁側の壁面には、軒寄りに径4cmの円形の透かしが両側とも穿たれている。この場合は、他の形象、円筒埴輪の円形透孔と同様のものと考えられよう。

下屋根は、四柱部の上に巻き上げ、あるいは輪積み成形によりつくられたもので、その後、軒の部分を取り付けている。軒は壁面から2cmほど出してお

II 神保下條遺跡の調査



第77図 2号古墳家(130) (1)



第78図 2号古墳家(130)(2)

II 神保下條遺跡の調査

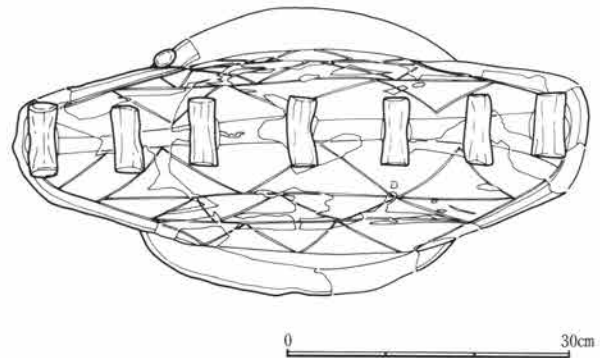
り、上から見るとその輪郭がまさしく楕円形になっていることがわかる。高さ23cmを測り、屋根の面の傾斜は垂直に近いほどに急角度である。ここで興味深いのは、確認できただけでも10個の径約2cm、高さ約1cmの円形突起あるいはその剝離痕が、屋根の各所に貼付されていることである。その位置を見ると、屋根の中でポイントになるような部分に規則的に配置されているので、具体的な構造を表現したものと思われる。まず軒の先端寄りの四隅の4ヶ所にある。また、そこから上へ延長していった屋根の傾斜面の中途の4ヶ所があり、さらに桁側で上屋根寄りの中心部の2ヶ所にある。具体的には、建築学的な検討に期したいが、恐らく家の構造材の先端が屋根から顔を出している状態を表しているものと思われる。

下屋根と上屋根の接合法は、1号古墳の家形埴輪について推定されたのと同じ方法をとっているものと考えてまず間違いはない。上屋根の内面に1号古墳と同様の接合痕が認められたことと、接合部付近の両者の形態がよく似ているからである。

上屋根は、2枚の逆台形状を呈する粘土板を頂部で合掌させることによりつくっている。その場合、1号古墳例に見られるような頂部の平坦面はなく、2枚を直接つなぎあわせている。そのため、この接合部からきれいに2つに割れていた。

上屋根の流れ部分は線刻により上下3段に等分に近く区画されており、各段ともさらに鋸歯状に線刻されている。その構成が規則性をもって整然と描かれている点で、1号古墳例とは大きく異なっている。各段に連なる三角形のうち、底辺を上側にとるものについて赤色顔料による塗彩が施されている。

上屋根の妻側の端部は、外側に向けて直角に折り曲げられている。これは、妻側から見ると幅2.5cmの破風の面となっている。横から見て、合掌部の下側には、径3cm、奥行2cmの棒状の突起が取り付けられている。棟木を表しているものと思われる。また、破風に沿っては、3段の上下の区画に対応するように、同様の突起が貼付されている。上屋根の構造材



第79図 2号古墳家(130)(3)

を表していることは明らかであろう。

棟の頂部には、7ヶ所に堅魚木がのせられている。径3cm、長さ7cmの円柱状を呈しており、頂部にのせて、側面を頂部に押し付けるように貼付している。

外面は、ハケ整形後、非常に丹念にナデ整形を行い、平滑に仕上げている。特にその傾向は上屋根に顕著であり、四柱部では、一次調整の縦ハケがかすかに顔をのぞかせている。

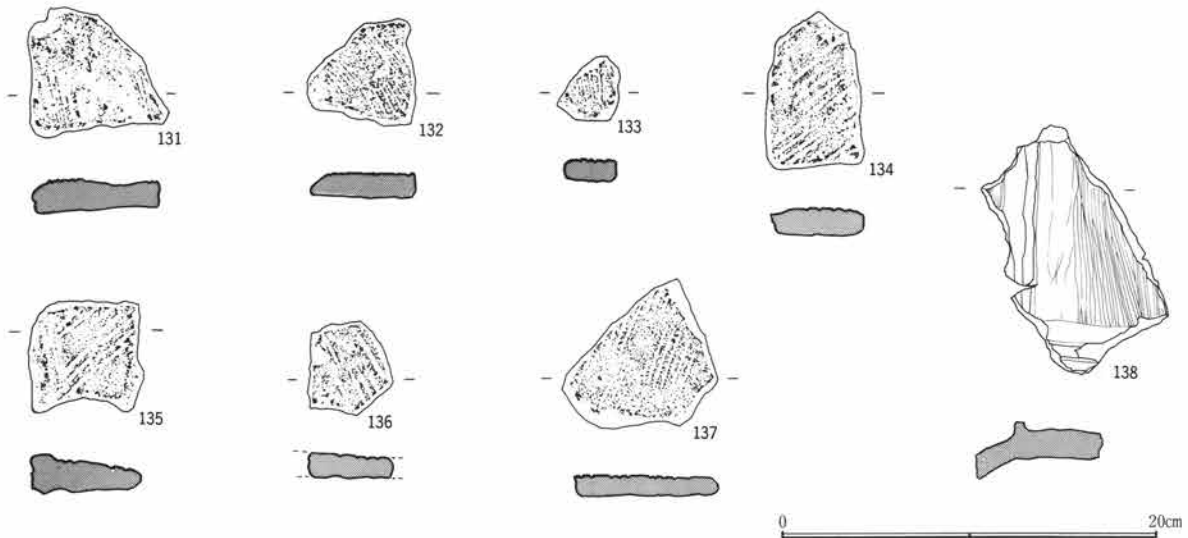
本例は、非常に手慣れた、しかも丁寧な作りであることが窺われ、1号古墳例とはきわめて対照的であった。

全体には正面(入口のある面)から見て左側が歪んでいるのがよくわかる。四柱部の上に屋根をのせるまでにあまり時間をおいていなかったことを物語るものであろう。

その他の家形埴輪の破片(131~138) 推定される8点のうち138は明らかに家形埴輪の破片としてよいであろう。四柱部の隅部の破片であり、柱を表す縦位の凸帯と、これと直交する底部寄りの横方向の凸帯があり、壁面には縦ハケをそのまま残す。凸帯が細身でシャープなこと、壁面に縦ハケをそのまま残す点等、明らかに130の家とは別個体である。

131から137の7点は同一個体に属するものであることは明らかである。板状に成形されており、130の上屋根の形状によく似ている。表面に描かれた間隔の粗いハケ目は、内面の整形痕から推定される軸線方向に対して約45度の角度であり、葺かれている屋根材の表現とも受け取れる。これらが130・138とは別個体であることは整形・色調から間違いはない。

3. 2号古墳の調査



第80図 2号古墳家形埴輪片

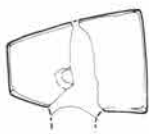
2号古墳出土家形埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
130	家	縦 100.5 横 62.0 奥行 39.0	胎 B~C 焼 良好 色 橙色	9~10	本文参照	
131	家 ?	縦 6.8 横 7.3 器厚 1.6	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		板状を呈し、外面ナデ整形後、斜めの平行する線刻を施す。内面は指ナデ。	
132	家 ?	縦 5.7 横 5.7 器厚 1.3	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		板状を呈し、外面ナデ整形後、斜めの平行する線刻を施す。内面は指ナデ。	
133	家 ?	縦 3.3 横 3.2 器厚 1.1	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		板状を呈し、外面ナデ整形後、斜めの平行する線刻を施す。内面は指ナデ。	
134	家 ?	縦 8.2 横 5.1 器厚 1.4	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		板状を呈し、外面ナデ整形後、斜めの平行する線刻を施す。内面は指ナデ。	
135	家 ?	縦 5.9 横 7.1 器厚 2.2	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		隅丸方形を呈すると思われる、家の本体の隅部の破片で、柱を表わすと思われる垂直方向の粘土帯の貼付がある。	
136	家 ?	縦 4.9 横 4.5 器厚 1.3	胎 C 焼 ふつう 色 橙色	4	板状を呈し、外面ナデ整形後、斜めの平行する線刻を施す。内面は指ナデ。	
137	家 ?	縦 7.6 横 8.3 器厚 1.1	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		板状を呈し、外面ナデ整形後、斜めの平行する線刻を施す。内面は指ナデ。	
138	家	縦 13.0 横 10.0 器厚 2.1	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	13	隅丸長方形をなすと思われる家本体の隅部の破片。外面縦ハケ後、隅部に垂直方向とこれと直交する横方向の柱及び横木を表す粘土帯を貼付している。粘土帯の上端には赤色顔料が施される。	

II 神保下條遺跡の調査

太刀1 (139) 高さ推定113cmを有する。勾金の大半と鞘の部分に欠けている。鞘の長さは、把の長さとのバランスを考慮して復元してみた。

基部は、底部寄りを欠いているが、太刀2 (140) で完存している長さに近いものであったとすると、30cmぐらいであったとすることができる。底径は、約16cmと推定される。基部と鞘の境は断面三角形の凸帯をめぐらしただけである。凸帯の下には、径3.5cmの円形透孔が一对穿たれている。本墳における他の形象埴輪の場合、埴輪の正面(墳丘外面に向く面)



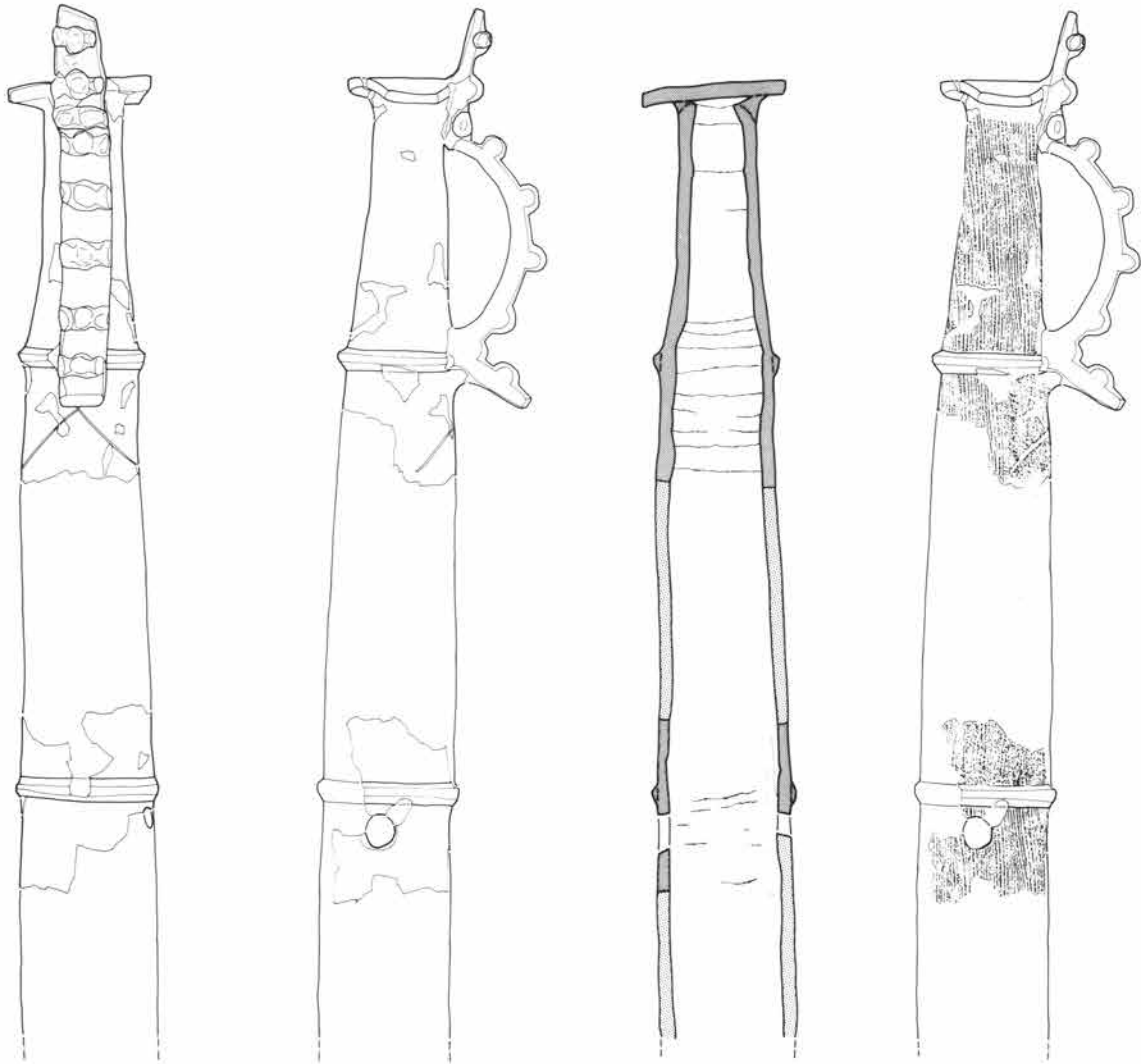
に対して両側に位置しているが、本例については、具体的に正面観を知る手掛かりがなかったので、

一応の案として太刀を装着した時の側面が正面であったろうと考えて復元した。

鞘は長さ推定43cmである。上野地域の太刀形埴輪の初現的なものに認められる刃の側を意識して、この部分の断面形を倒卵形につくるようリアルな表現はなく、円筒形を呈している。鞘尻から鞘口に向かうにつれて徐々に径を減じていく。両者の差は3cmほどある。鞘口寄りの側面には逆V字形に線刻が施されており、鞘の意匠とも考えられる。

鞘口(把口)の部分もやはり断面三角形の凸帯をめぐらすだけの簡単なものである。

把は長さ28cmで、把口の径10.5cmから把頭寄りの径8cmへと細身になっている。やはり断面は円筒形



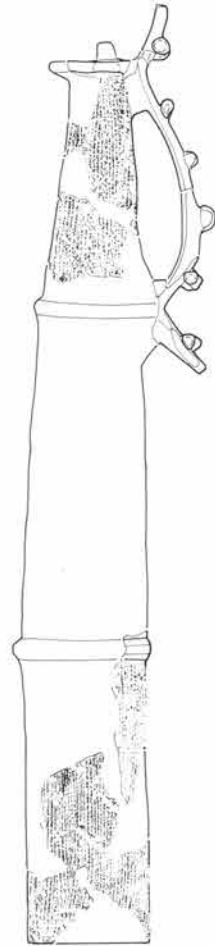
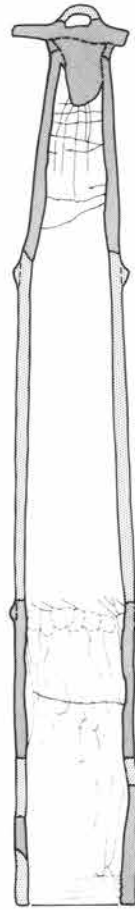
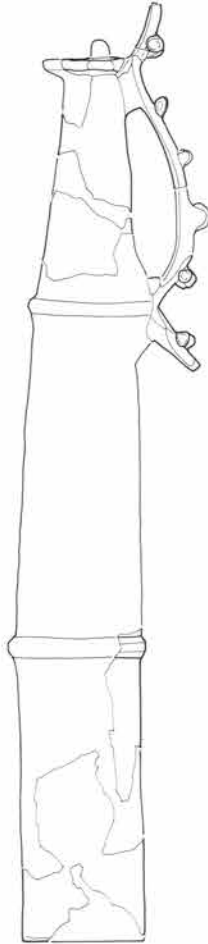
第81図 2号古墳太刀1 (139)

を呈している。

把頭は、太刀の長軸に直交し、握り部分より大きい15×10.5cmの台形で板状を呈するものである。その上面の中心には、径1cmの円形の剝離痕が4cmの間隔であり、粘土紐が先端に半円形に取り付いていたものと思われる。

勾金は、残っているのは把頭の側部に取り付いて、これより上にのびる先端部分のみである。幅5cm、長さ13cmをはかり、先端は斜めに切り落とされている。把頭寄りの本体との接合部分は幅2cmの帯が取り巻いて、接合状態を表している。表面には先端に

向かって2個の三輪玉が、長軸と直交して貼付されている。本体の剝離痕から、もう一方は把口の部分で接



合していたことがわかる。

表面の摩耗が著しいが、本体の外面は、一次調整の縦ハケをそのまま残していたことがわかる。勾金のみがナデ整形されている。また、勾金の表面には全体に赤色顔料の塗彩が認められる。

太刀2 (140) 高さ推定98.5cmを測る。鞘部を除くと全体によく残っている。太刀1と比べると一回り小ぶりにつくられている。

基部は底径13cm、高さ30.5cmの円筒形で、内面の整形痕を見ると円筒埴輪の基部と同じ作りであることがわかる。鞘部との境は断面台形の凸帯によってなされており、鞘としての具体的な表現は認められない。

把部は、把口寄りで径10cm、把頭寄りで径6.4cm、

第82図 2号古墳太刀2 (140)

II 神保下條遺跡の調査

長さ把頭を含めて24.5cmである。

把頭は、太刀1と同形態で、12×9.5cmの長めの台形を呈し、板状である。平坦面には長軸と平行して径1.2cmの粘土紐を半円形状に取り付けている。本例の場合、把本体と把頭の接合法がよく観察できた。把本体は巻き上げ成形によって中空につくられる。把頭の本体との接合部分には棒状の突起が取り付けられており、この部分を把の上端から差し込んだ後、接合部の周辺に粘土を押し付けるように充填して取り付けるわけである。

勾金ほぼ全体が残っていた。幅4.3cmの粘土帯で、把頭から上に先端が7cm突き出ている。端部は一部かけているが、丸くつくられているようである。把頭の側面で接合し、そこから外へゆるやかに湾曲して、把口（鞘口を兼ねる）で接合され、下端はやや外反するように出て、6.5cmで終わる。表面には全部で6個の三輪玉が長軸と直交して貼付されてい

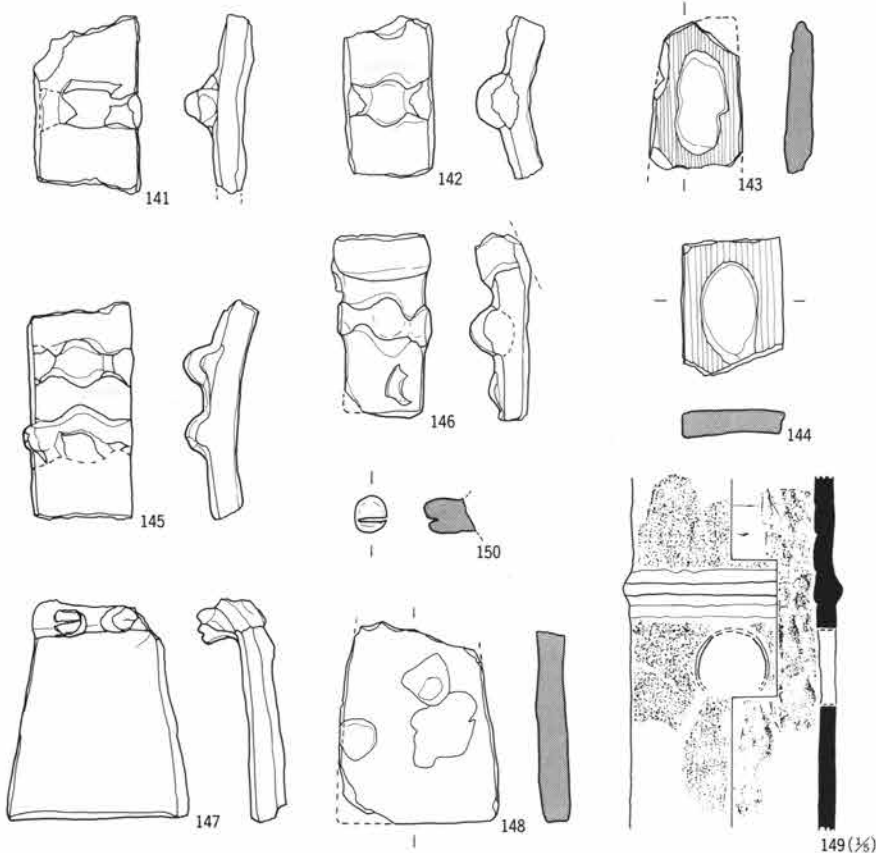
る。玉のつくりは、太刀1に比べると貧相でリアルさに欠ける。

太刀本体の外表面は、全体に1次調整の縦ハケをそのまま残している。

その他の太刀形埴輪の破片（141～150） これらのうち、141～146と149は明らかに太刀の破片であるが、147・148は必ずしもそうとは言えない。少なくとも、この2点が器財埴輪の本体に取り付くもので、太刀形埴輪の勾金の鞘口から下へ出る部分の角度とほぼ同じであることだけは明らかである。

145は、大きさから太刀1の勾金の一部である可能性が高い。これに対して、141、142・146、143・144が別個体であることが、色調・形態的特徴からわかる。149はこれら3個体のいずれかの基部をなすものである可能性もあるが、別個体かもしれない。このことから、確認された範囲内では、少なくとも5個体分の太刀形埴輪が存在していたことがわかる。実際は四方へ転落したと思われるので、これを上回る数量であったと思われる。

これらのうち、143・144は、他のものに比べてやや異質である。勾金の表面に粗い目のハケ整形を明瞭に残しているのは、本例だけであり、他はすべてナデ整形を施している。このハケ整形は、板状に粘土をつくる時の整形痕である。また、勾金に貼付される三輪玉が、長軸方向に平行して取り付けられているのは本例だけである。



第83図 2号古墳太刀形埴輪片

2号古墳出土太刀形埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
太刀1 139	太刀	縦(108.0) 横 14.4 奥行(22.4)	胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	11	本文参照	法量は復元推定
太刀2 140	太刀	縦 98.5 横 14.4 奥行(19.2)	胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	11~12	本文参照	
141	太刀形の 勾金	縦 9.0 横 5.5 器厚 1.1	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		表面ハケ整形後部分的にナデ。三輪玉貼付後ハケ整形。長軸に直交して三輪玉を貼付。三輪玉は中空でない。	
142	太刀形の 勾金	縦 7.5 横 4.4 器厚 1.3	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		粘土板成形。表面ナデ、裏面ハケ。4cmの間隔で三輪玉が長軸に直交して貼付される。	部分的に赤色塗彩が認められる
143	太刀形の 勾金上端部	縦 7.8 横 4.8 器厚 1.3	胎 B 焼 良好 色 橙色	6	表面ハケ整形後部分的にナデ。裏面指ナデ。長軸に平行して三輪玉を貼付。	
144	太刀形の 勾金	縦 6.7 横 5.4 器厚 1.2	胎 B 焼 良好 色 橙色		表面ハケ整形後ナデ。長軸と平行して三輪玉を貼付。	表面に赤色塗彩
145	太刀形の 勾金部分	縦 11.4 横 5.4 器厚 1.4	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		粘土板成形。4cmの間隔で長軸に直交させて三輪玉を貼付している。三輪玉の中心の玉は中空である。	赤色塗彩をしていることがわかる
146	太刀形の 勾金下端部	縦 9.5 横 5.3 器厚 1.4	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		勾金の括れ部に帯が取り巻く。三輪玉一個が長軸に直交して貼付される。端部には径2.3cmのドーナツ状の貼付及び痕跡が左右に並列して一対認められる。	
147	器財?	縦 11.5 横 9.8 器厚 1.1	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		台形の板状の器形の上底部で本体に約45°の角度で装着される。その部分には幅1.5cmの帯が取り巻き、一対の小鈴が左右に並列して取り付く。外面ハケ整形後ナデ。	
148	器財?	縦 10.5 横 8.5 器厚 1.2	胎 C 焼 あまい 色 橙色		法量、形状が147にほぼ同じ。外面ナデ。	
149	器財基部	高 23.4 径 14.6 器厚 1.3	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	9	円筒埴輪と同一の成・整形で、径が小さい点の特徴。	大きさ、形状から太刀形の基部が推測される
150	鈴	縦 2.7 横 1.8	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		手捏により球形に成形し本体に貼付している。	147に貼付されている物と同一

II 神保下條遺跡の調査

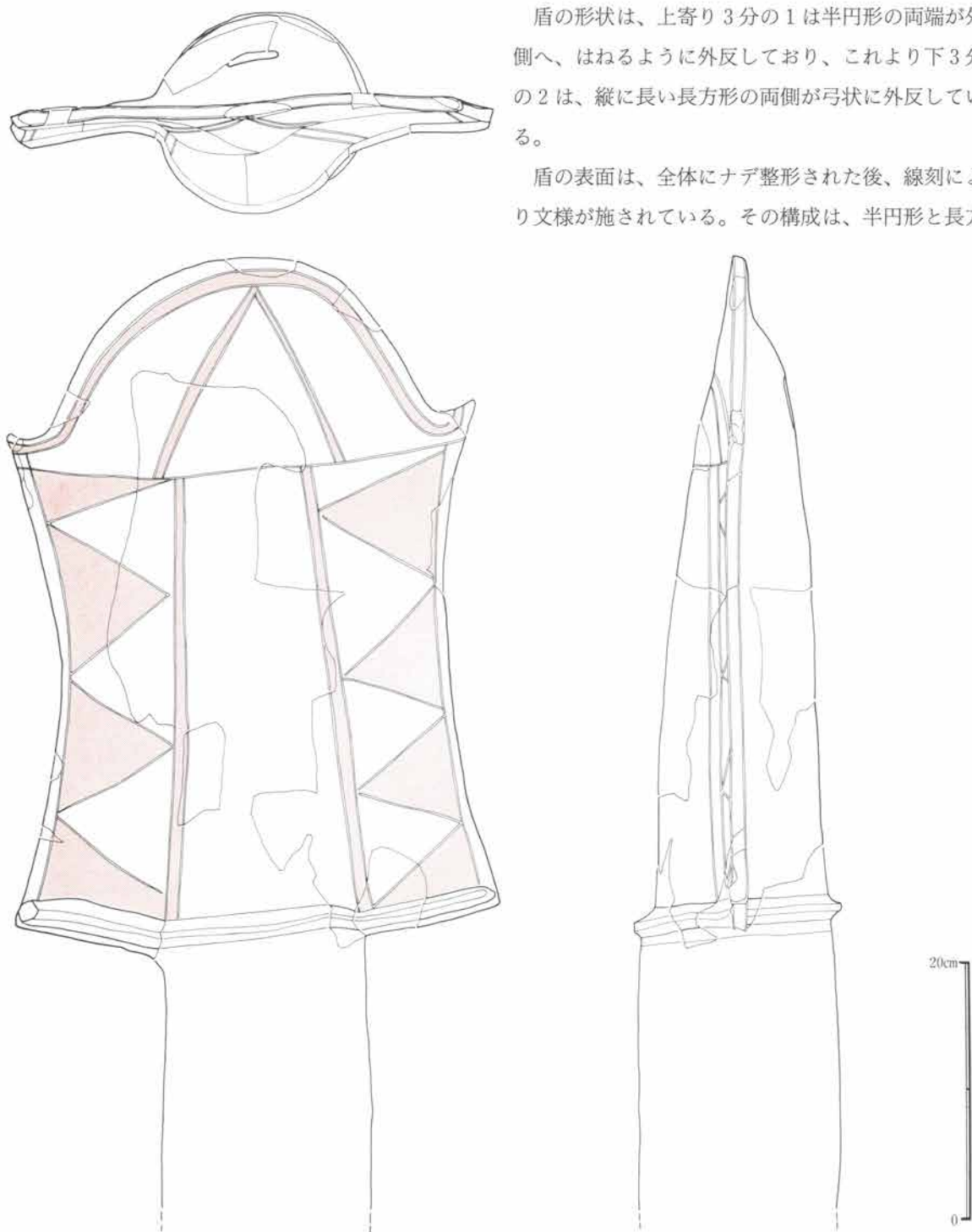
盾(151) 高さ54cm以上、最大幅38.5cm、最大奥行推定17cmである。円筒形をなす基部の上に直接盾部分をつくり付けている。両者の境は断面台形の凸帯によってなされている。

盾部分の構造は、高さ44cm、下端で径14cm、上端で径6cmの巻き上げ成形による円筒を中心にして、

その周囲に粘土板をヒレ状に取り付けている。その場合、両側と上側では、接合の方法が異なる。前者では、側部中心に粘土板を縦位に取り付け、その接合部に前後から粘土をこすり付けるように重ねて補強している。後者では、2枚の粘土板で逆V字形につくり、これを円筒の上端にのせて接合している。

盾の形状は、上寄り3分の1は半円形の両端が外側へ、はねるように外反しており、これより下3分の2は、縦に長い長方形の両側が弓状に外反している。

盾の表面は、全体にナデ整形された後、線刻により文様が施されている。その構成は、半円形と長方



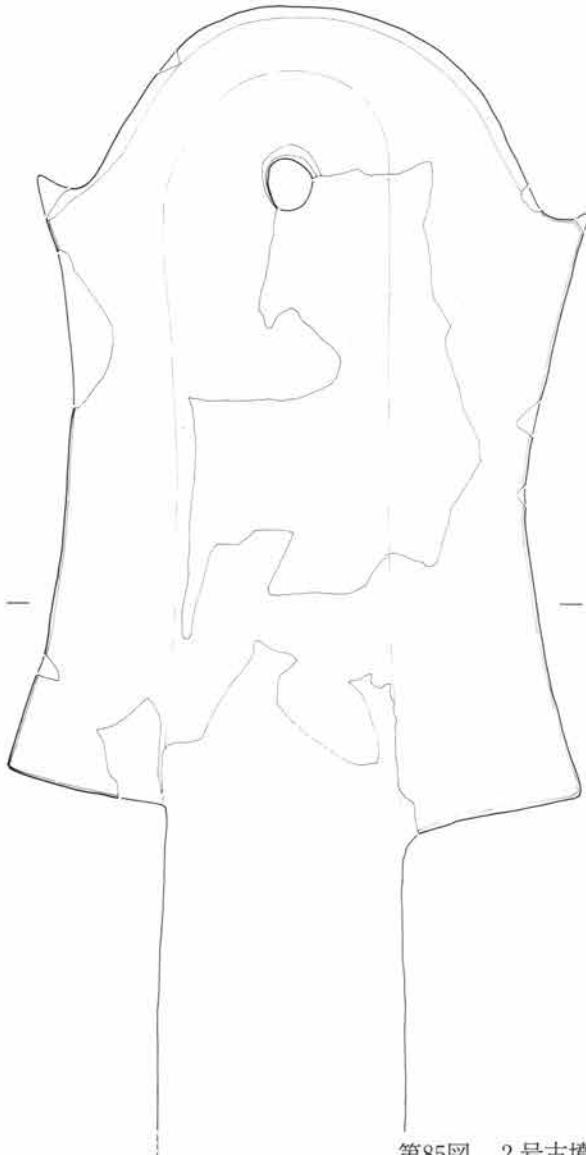
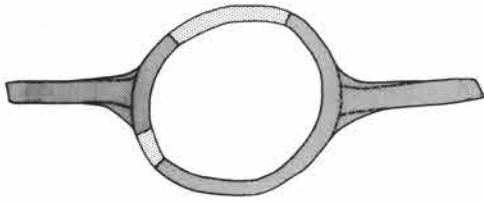
第84図 2号古墳盾(151) (1)

形部分の境に横線が入り、これより下は、円筒部分とヒレ状部分の接合部に沿って2条の縦線が入る。さらに、両側のヒレ部分には鋸歯文が施される。また、上寄りの半円形部分では、横線を3等分した2点から頂部中心へ向かう2条により三角形を描いている。両側と上側の端部に沿っては、線刻により縁取りされているが、前者が1条で、後者が2条線によっている点で異なっている。一方、下端部に沿っ

ては断面台形の凸帯を貼付して縁取りしている。

以上のようにして構成される文様の区画に対応して、規則的に赤色顔料が塗彩されている。塗彩されているのは、2条線で線刻している両線の内部と、ヒレ部分の鋸歯文の一つおきの三角形である。

裏面は全体に縦ハケを残しており、文様等は一切施されていない。視覚に入らない部分であったことがよくわかる。その中心で上端寄りに、径約3.5cmの円形の孔があいている。円筒部分の上端寄りにあたる位置である。これが、いわゆる透孔ではなく、製作上の必要性から空いていることは容易に想像できるところである。円筒部と粘土板の接合作業をこの部分で収束させていることが推測される。



第85図 2号古墳盾(151) (2)

II 神保下條遺跡の調査



第86図 2号古墳盾(151) (3) 及び盾形埴輪片

3. 2号古墳の調査

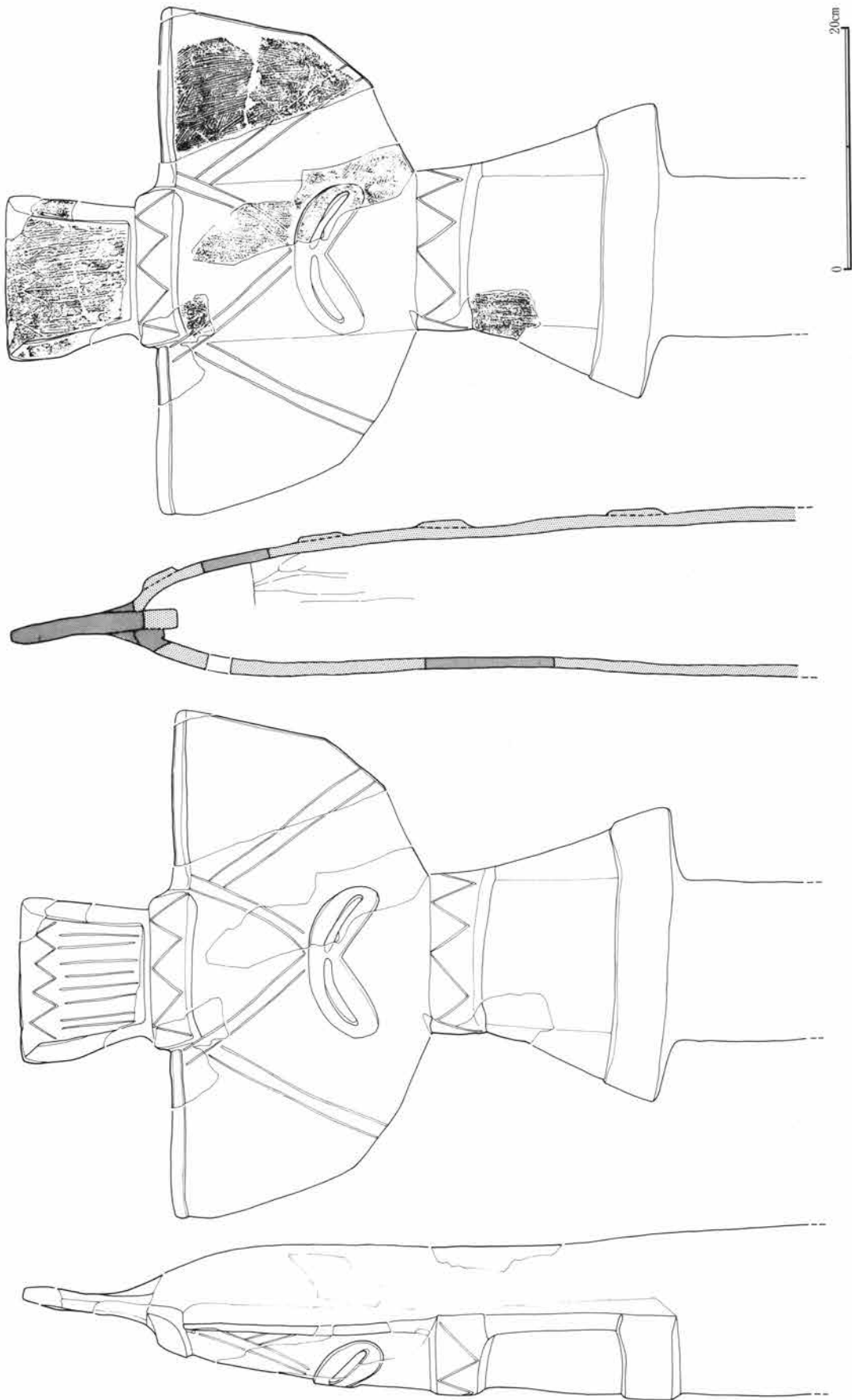
その他の盾形埴輪片 (152~161) 152・153はヒレ部に縁取りの線刻が認められないものである。154・156は、上寄りの半円形をなす部分の下端の破片であるから、151、152・153とは別個体であることは明らかである。155は半円形部分の破片であるが、この1点だけ器厚が他のものより厚いことと、文様構成が異なることから前記のものとは別個体であることがわかる。一方、160は円筒とヒレ状部分の接合部の破片であるが、他例では円筒部分に文様が施さ

れないのに、本例では鋸歯文と思われる線刻が認められる。胎土・色調・器厚からすれば、154・156と同一個体となる可能性もある。

以上、破片資料もあわせて考えると、盾形埴輪は最低で、151、152・153、154・156、155の4個体が存在したことがわかる。ただし、152・153、154・156は必ずしも同一個体との確証はないし、160もこれらと別個体である可能性もある。

2号古墳出土盾形埴輪観察表

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
151	盾	縦(72.5) 横 38.5 奥行17.0	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	12	本文参照	高さはさらに高くなると思われる
152	盾	縦 19.4 横 15.2 器厚 1.4	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体に板状の側部を接合。表裏ともハケ整形。表のみナデ。上半部は縁に沿って2条の線刻、下半部にはない。線刻に囲まれた部分に赤色顔料を塗彩。	
153	盾	縦 18.4 横 12.7 器厚 1.3	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		表裏面ともハケ整形。表面のみその後丹念にナデ整形。縁辺部に沿って線刻で縁どりしない点が151と異なる。鋸歯文を線刻し、一つおきに赤色顔料を塗彩。	
154	盾	縦 7.3 横 7.6 器厚 1.4	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		表裏ともハケ、その後表面のみ部分的にナデ。縁部に沿って平行する2条の線刻。線刻の間赤色顔料塗彩。	
155	盾 (上端寄り)	縦 7.4 横 8.1 器厚 1.6	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		表面、ハケ整形後ナデ。縁部に沿って2条の線刻。間に赤色顔料塗彩。	
156	盾	縦 14.3 横 11.9 器厚 1.5	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		表裏面ともハケ整形。その後表面のみナデ。縁部に沿って、上半部には2条の、下半部には1条の線刻が施される。	
157	盾	縦 8.8 横 6.8 器厚 2.0	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		円筒形に本体を作り、板状の側部を接合する。	
158	盾	縦 12.7 横 7.6 器厚 1.3	胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色		表裏面ともハケ整形。その後表面のみナデ。縁部に沿って1条の縁取りの線刻が施される。	
159	盾	縦 11.4 横 4.8 器厚 1.2	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色		円筒形の本体に板状の側部を接合。外面は縦ハケ後部分的にナデ。内面は縦指ナデ。円筒部と側部の接合部に縦に平行する2条の線刻あり、間を赤色顔料塗彩。	
160	盾	縦 17.4 横 7.7 器厚 1.5	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体に板状の側部を接合する。表面は縦ハケ後ナデ。内面縦指ナデ。表面の円筒部と側部とも鋸歯文を、また両者の境に縦に2条の線刻を施す。	
161	盾	縦 8.6 横 7.2 器厚 1.0	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体と板状の側部との接合部。円筒形の縁部に沿って線刻が施され間に赤色顔料が塗彩される。	



第87図 2号古墳朝I (162)

靱1(162) 高さ推定62cm以上、最大幅推定41cm、奥行推定12cmを測る。本例とほぼ同型同大と思われる163も完形に近く復せた。これら2点には、164の下半部と同形態のものが取り付いて本来の形状に復せるものと思われるが、直接接合する部分がなく、また靱1とは重複する部分があることから別個体であることは明らかである。そこで、164に近いものが下半部にくることを前提として、全体について検討することにする。

基部は径約12cmの円筒形で、上端寄りの両側には径4cmの円形透孔が穿たれている。この上に円筒を直接のぼしてゆき、矢筒にあたる部分をつくる。164と合わせると矢筒部分の長さは45.5cmであり、上に行くにつれてすぼまっている。その横断面形は、下寄りに向かって左右方向に長い長円形を呈している。基部との境およびこれより11cm上の位置には、幅6.5cmの帯が横巻きにされている。ただし、取り巻くのは側面までであり、裏面へは及んでいない。帯の表面には線刻により鋸歯文が施されている。これら2つの帯に挟まれた両側には、縦位にヒレ状の凸帯が貼付されている。凸帯は上寄りが幅狭で、下へいくにつれてわずかではあるが幅を広げている。矢筒の上端と下から2番目の横帯の間の両側には、縦位に翼状をなす粘土板が取り付く。上端は矢筒から外側へ水平に、15cm出ており、そこから直角に近く屈曲し、下寄りで斜めに切れ込んで矢筒に取り付いている。

上端に沿っては、断面台形の細身の凸帯が貼付され、また、本体の中心に向かって斜めに2条の平行する線刻が施されている。後者は、靱を背負うための紐の一部の表現と思われる。

矢筒本体の上寄りには、靱を背負うための紐が線刻により表現されている。紐と矢筒との結び目は幅1.5cmの粘土帯を蝶々結びにして表している。

矢筒の上端は幅3cmの帯を横巻きにしたもので、やはり、側面までで、裏面には及んでいない。表面には線刻により鋸歯文が描かれている。

この矢筒の上端に矢を入れる先端部分が取り付い

ている。縦11cm、横14cmの粘土板で、板の下端を矢筒に差し込んで接合している。その両側は縁に沿って縦位に凸帯が貼付されており、矢が横へずれない構造を表しているものと思われる。

この板状部分の表面に、線刻により弓矢が描かれている。直線と逆V字を組み合わせた簡易なものであり、鏃が4本、柄が8本あり、両者の対応関係は、はっきりしない。矢の先端が上を向いている点は他の事例と同じく、靱であることを強調するための表現であろう。

表面は、縦ハケ後にナデ整形を施しているが、ハケ目は全体に残る。裏面はハケ整形後、一部を除くと未調整である。裏面は目に触れない部分との意識があり、帯、文様等の一切が及んでいない。内面は全体に縦指ナデである。

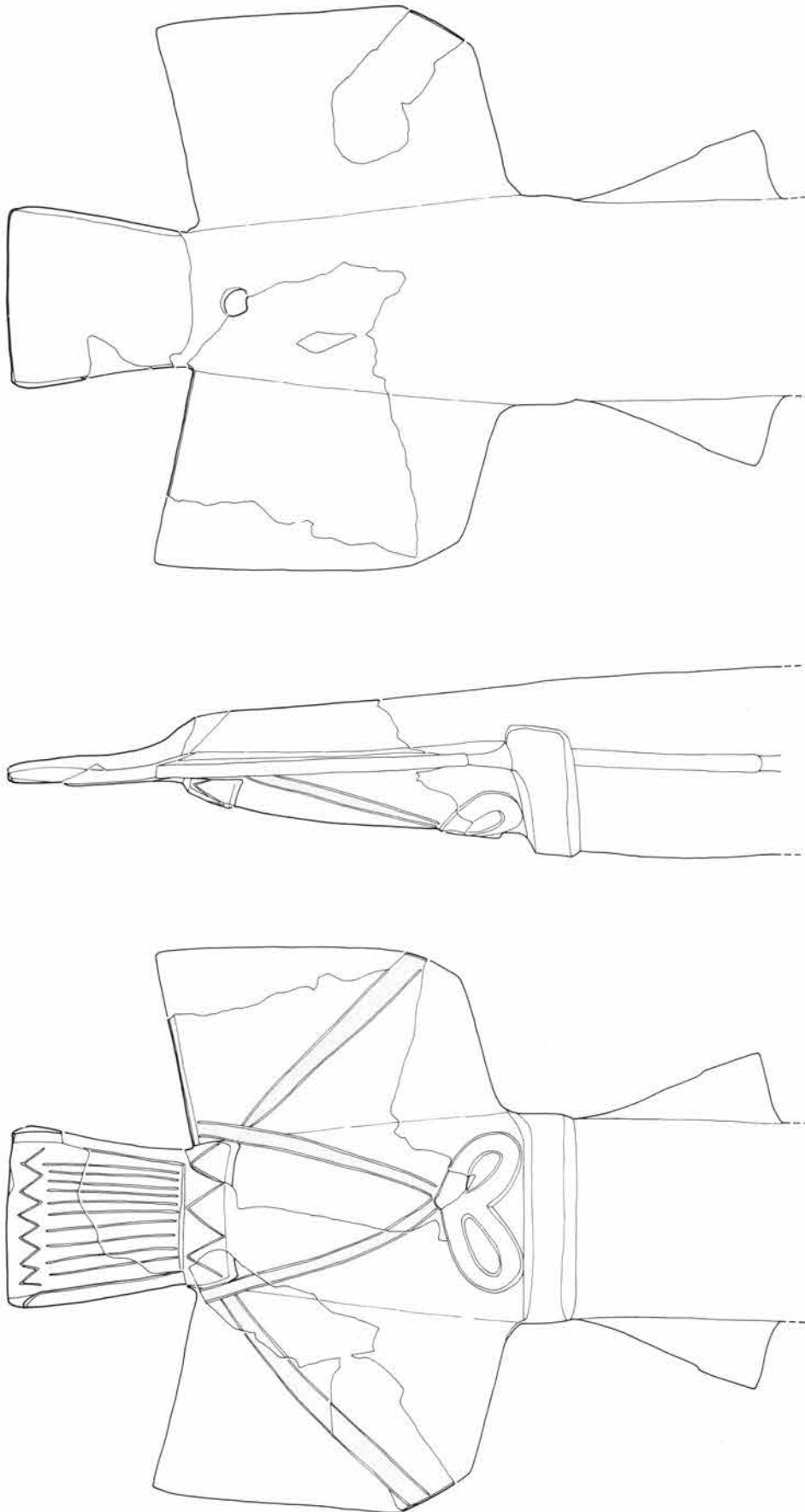
靱2(163) 基本的には靱1と同じ形態・構造であるが、細部の表現・大きさは微妙に異なる。この場合も164を下半部と仮定すると、高さ62cm以上、最大幅推定43cm、最大奥行推定12cmである。

矢筒の本体部分は円筒形で、背負う紐の表現を線刻とし、結び目を粘土紐の貼付によっている点は同様である。ただし、この部分の長さが、26cmを測り、靱1より縦長である。このことに対応して両翼も長めにつくられている。翼部の上端には、縁に沿って貼付された凸帯の剥離痕が認められる。

矢筒本体の上端に差し込まれる板状の先端部分は縦14cm、横14.5cmで、やはり靱1より長めであり、全体もこれより長めにバランスを取って作られていることがわかる。その両側には、縦位に凸帯が貼付され、内部に弓矢が線刻されるわけであるが、鏃の部分が6本分、柄の部分が10本分描かれており、数の点でも靱1より多くなっている。

本例の場合、表面が少し摩耗していたため、赤色顔料の塗彩はあまりよく残っていなかった。確認できたのは、矢筒の表面に描かれた背負い紐の部分のみであった。靱1の場合は、この部分に痕跡が確認できなかったが、同じ手法による表現なので、本来的には塗彩されていたものと思われる。

II 神保下條遺跡の調査



0 20cm

第88図 2号古墳 2 (163)



第89図 2号古墳鞆2 (163) 及び鞆下半部(164)

II 神保下條遺跡の調査

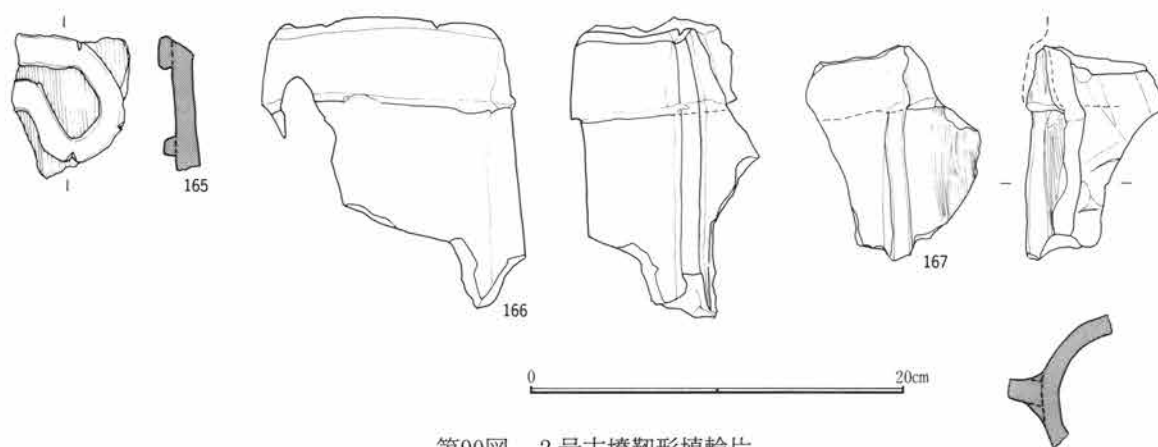
その他の靱形埴輪片 (165~167) 165は矢筒部の中央にくる蝶々結びの周辺の破片と思われる。この部分は、靱1・靱2ともあるので別個体の破片であることは明らかである。また、紐が幅1.3cmで厚さ8mmを測り、肉厚で丸味をもっている点が異なる。

胎土・色調・焼成の比較からすると、165と167は同一個体である可能性が高い。表面のハケも共通している。167は矢筒の下半部の破片であるが、横巻きされる帯が表裏全体に及んでいる点が、靱1・2と

は異なっている。

166もこれと同様の矢筒の下半部の破片と思われる。この場合も横巻きされる帯が、表裏全面に及ぶものである。帯の表面には鋸歯状の線刻は施されない。胎土・色調等からすると、靱2の下半部である可能性もある。

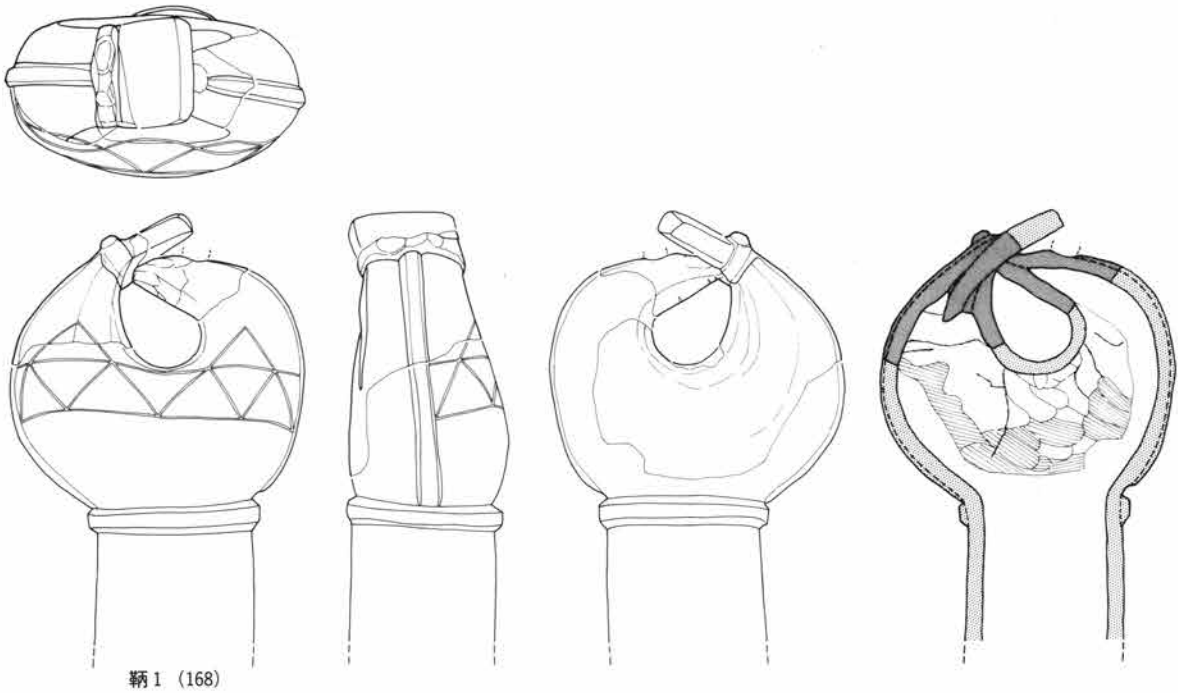
164は靱1とは重複する部分があるので別個体であることは明らかである。以上の検討からすると、本墳には、最低4個体以上存在したことがわかる。



第90図 2号古墳靱形埴輪片

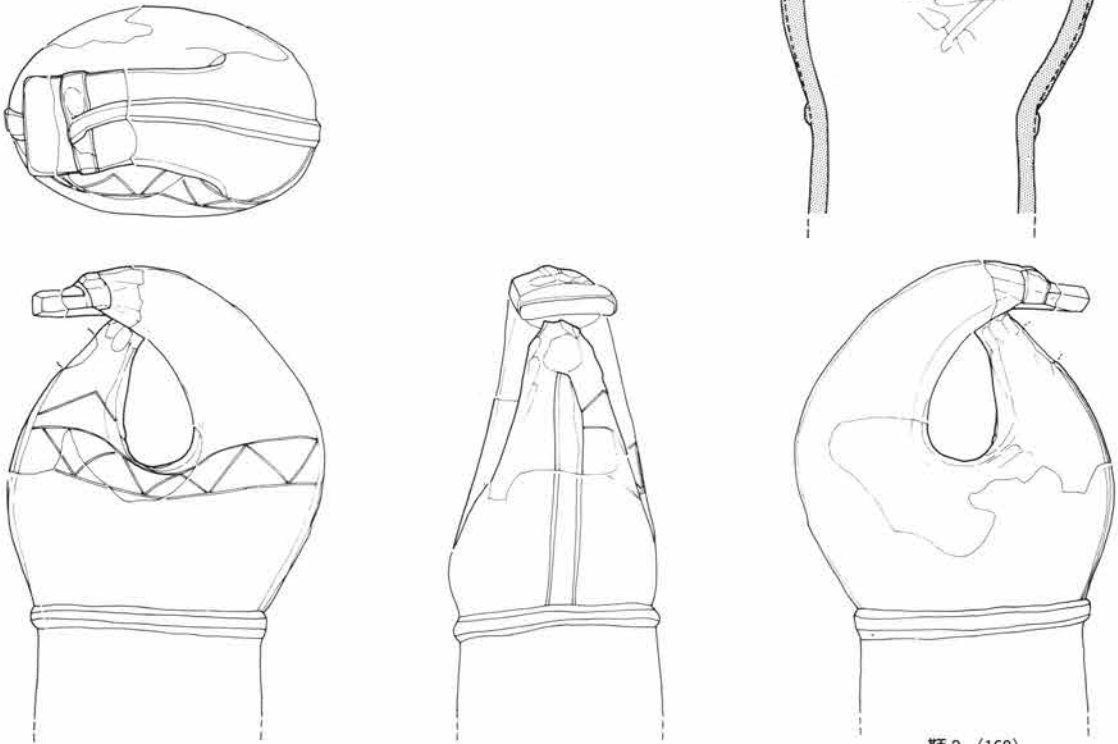
2号古墳出土靱形埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
靱1 162	靱	縦(65.0) 横 41.0 奥行12.0	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11~12	本文参照	法量は復元推定
靱2 163	靱	縦(62.0) 横 43.0 奥行12.0	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11	本文参照	法量は復元推定
164	靱	縦(41.5) 横 19.0 奥行15.0	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	13	本文参照	法量は復元推定
165	靱	縦 7.5 横 6.5 器厚 1.2	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		円筒形をなす本体にトンボ結びに紐が着く。紐は幅1.3cm、高さ0.7cmの粘土帯で表現する。円筒部外面縦ハケ。	内面縦指ナデ 紐部分はナデ
166	器基 財部	縦 15.2 横 14.4 器厚 1.3	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		円筒形の本体に幅広の帯を一周させ、両側に張り出しの少ないヒレが取り付く。外面縦ハケ、内面縦指ナデ。	
167	器基 財部	縦 11.3 横 9.4 器厚 1.1	胎 A 焼 良好 色 明赤褐色	12	断面楕円形の筒形をなし、側部に張り出しの少ないヒレを取り付けその上から幅広で低い帯を一周させる。外面縦ハケ、内面縦指ナデ。	



柄1 (168)

0 20cm



柄2 (169)

第91図 2号古墳柄1 (168)・柄2 (169)

II 神保下條遺跡の調査

軛形埴輪 (168~172) 同じ部位の数量から、最低4個体以上存在したことがわかる。すべて上寄りの破片であり、軛部分をのせていた円筒形をなすと推定される基部まで残すものは認められなかった。

軛1 (168) は、中空の筒形をなす本体をエビ状に曲げ、板状をなす片方の先端の下側に角状をなすもう一方の先端を6の字状に接合している。その表面の中心部には横方向に幅いっぱい線刻による鋸歯文が施され、裏面には認められないため、表裏を決定することができる。

背側の中心部には縦位に幅1.3cmの帯が貼付されており、板状の先端寄りには横巻きに帯がめぐり、その上側には結び目あるいは飾りを表すと思われる2つの突起の剥落痕がある。またもう一方の角状の先端には径2cmの貼付物の剥落痕が認められる。

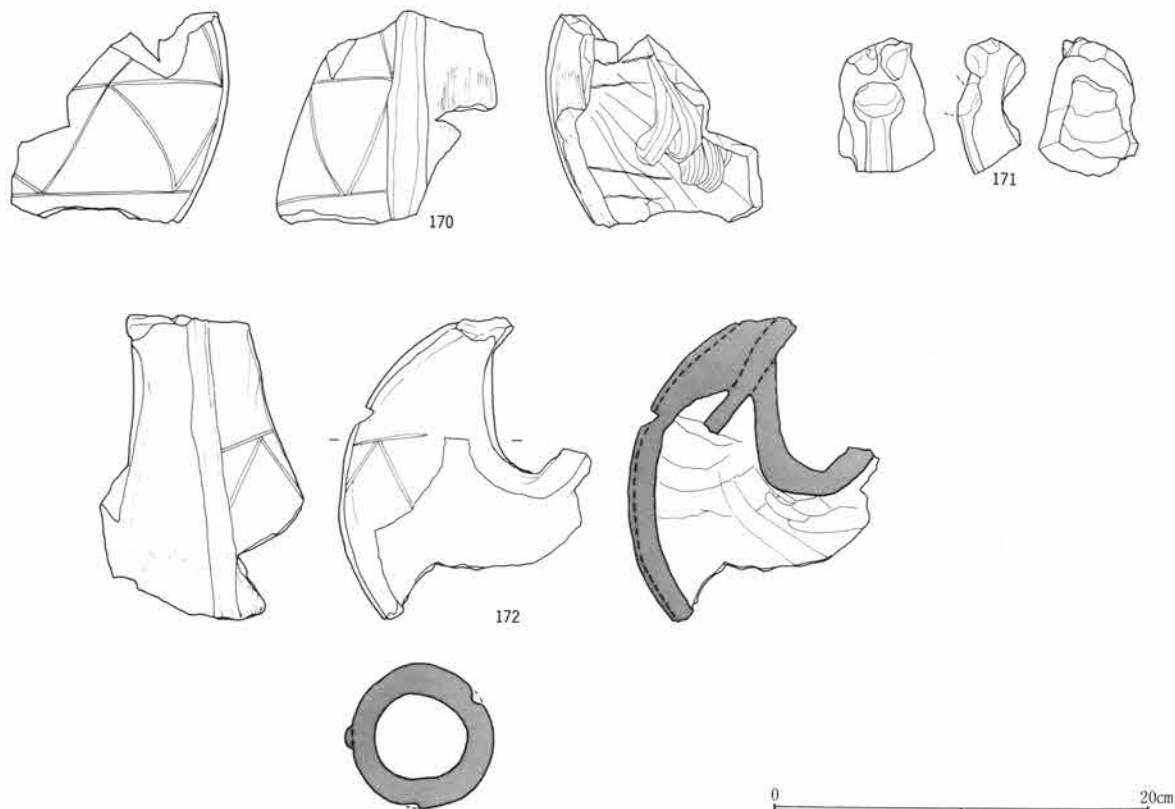
外面は全体にナデ整形が施され、内面は指ナデとハケ整形を残している。基本的には巻き上げ成形によっており、板状の先端部は粘土板を差し込んで成形している。

軛2 (169) は、軛1とは異なり、正面から見て逆6の字形につくられている。細部の表現は基本的には軛1と同一である。外面はハケ整形後にナデ整形を施すが、十分でないためハケ目が全体に残っている。内面は全体に指ナデである。

170は正面側の右寄りの破片である。軛1・2との比較から、この場合は、軛2と同じ逆6の字形になるものであることがわかる。

これに対して172は、軛1と同じ6の字形になるものであったことがわかる。

以上、本墳の軛形埴輪は、6の字形と逆6の字形をなす両方があり、いずれも両端が接続していることがわかる。富岡5号墳例をもって両端が接続しない Gondola 状のものがあるとの指摘がされている(高橋克壽「器財埴輪」『古墳時代の研究9』)が、この資料に関する限り事実誤認であり、本墳と同様に接続していたと思われる。また、当地域ではこれがごく一般的な軛の構造である。



第92図 2号古墳軛形埴輪片

2号古墳出土靱・器財形埴輪観察表

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
靱1 168	靱	縦(27.5) 横(19.5) 奥行(11.0)	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		本文参照	法量は復元推定
靱2 169	靱	縦(30.0) 横(21.0) 奥行(11.0)	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		本文参照	法量は復元推定
170	靱	縦 11.0 横 11.5 器厚 1.4	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		本文参照	
171	靱	縦 7.0 横 5.0 器厚 1.4	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		本文参照	
172	靱	縦 16.0 横 13.4 器厚1~1.5	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		本文参照	
173	器財基部	高 7.9 径 10.8 器厚 1.8	胎 A 焼 良好 色 橙色	11	円筒形をなし、凸帯の位置から上で外側に開く。外面縦ハケ、内面凸の位置から上は斜め横～横ハケ、下は縦指ナデ。	
174	不明	縦 5.5 横 2.7 器厚 2.3	胎 B 焼 ややあまい 色 橙色		円柱状をなし、緩やかに曲がる。表面は丁寧なナデ。	人物の腕にしては小さすぎるのと断面が正円に近いので疑問である。
175	器財基部 (靱?)	縦 15.6 横 9.8 器厚 1.2	胎 A 焼 良好 色 橙色	10	径11.8cmの円筒形を呈し、外面ハケ整形後斜めの平行する線刻を施し、線刻の間に1つおきに赤色顔料を塗布する。線刻は綾杉状に施されていると推定される。内面は縦指ナデ。	
176	不明	縦 8.8 横 8.8 器厚 2.0	胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色		円筒形を成す本体の一部に肉付けをして、成形し細い帯を貼付している。	
177	器財基部	縦 23.8 横 9.1 器厚 1.1	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		下へ行くにつれて窄まる筒形をなす。外面縦ハケ後、幅狭で低い帯を垂直に近く垂れ下げて貼付し、これを中心に左右対称に斜めの2条の線刻を施している。内面縦指ナデ。	
178	形象部	縦 16.0 横 15.1 器厚 1.2	胎 C 焼 良好 色 赤褐色	7	径14.4cmの円筒形をなし、幅広くしっかりした凸帯が廻る。外面縦ハケ、内面縦指ナデ。	
179	器財	縦 15.8 横 6.1 器厚 1.3~1.7	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		筒形の本体に斜めに張り出すヒレが取り付く。外面ナデ整形、内面縦指ナデ。本体からヒレ部にかけて斜め縦の線刻がある。	

II 神保下條遺跡の調査

その他の器財形埴輪片 (173~179) ここで取り扱っているものは、一応器財形埴輪としたが、種類が特定できなかったものである。それゆえ、器財形以外の形象埴輪である可能性も残している。

173は器財形埴輪の基部にあたる破片と推定した。円筒形をなし、径が10.8cmと小さいので、この上にのるものは限定されてくる。考えられるのは太刀、靱である。

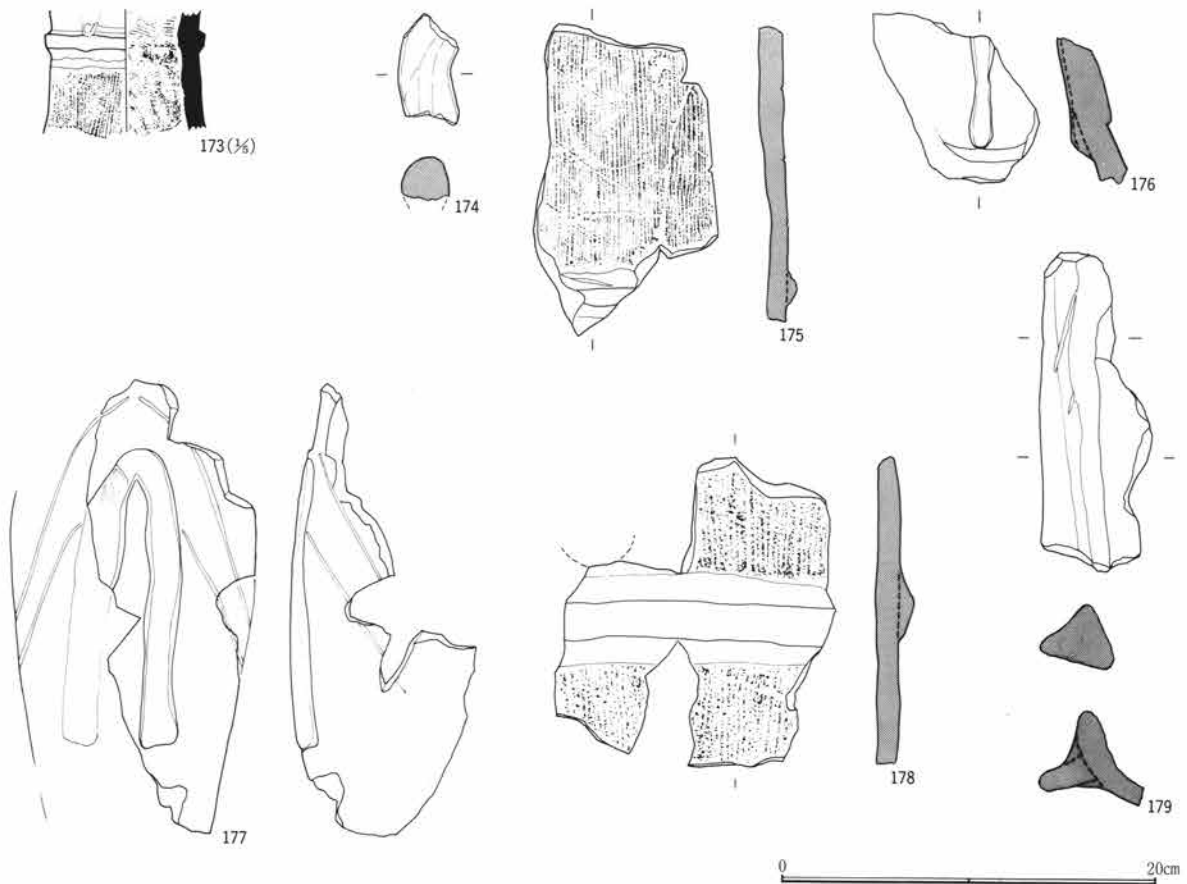
175はやはり円筒形をなし、表面に綾杉状と推定される線刻が施されており、形象の基部が推定される。

176は円筒形の本体に低い帯状の貼付が縦位に認められる。器財以外の種類である可能性も十分ある。

177は種類を特定できないが、円筒形をなし、図上復元すると先すぼまりの形状になる。逆U字状をなす帯の貼付が認められ、その縦の中心線を軸線にして左右対称に逆V字形の2条線刻が認められ、正面観を推定させる。

178は幅4.8cmの幅広の凸帯を有する円筒形を呈しており、普通円筒でないことは明らかである。径が14.4cmを有しており、盾か靱の基部が推定される。

179は円筒形の本体の側部に縦位に凸帯が取り付けられている。表面には凸帯にまで及ぶ斜めの線刻が認められる。靱の下半部の破片である可能性がある。



第93図 2号古墳器財形埴輪片

4. 3号古墳の調査

1・2号古墳の東約200mの一段上がった台地の西側縁辺部から新たに発見されたものである。付近の標高は162m前後であり、1・2号古墳との比高差は20m近くある。

本墳の北側には隣接して3基の中小規模の円墳があり、これらとともに多胡古墳群の南端の一角を形成している。

古墳の東から北東側にかけては、この台地を南東から北西に開析する小支谷が形成されており、古墳の西側の大沢川に面する南北走向の斜面とにより、古墳の位置する部分が南北の小丘陵状を呈しており、その頂部に隣接している3基とともに築造されたものであることがわかる。

調査前の段階では、ここに古墳があることは知られていなかった。墳丘の存在が認められなくなるほどに削平が及んでいたわけである。古墳の可能性が考えられるようになったのは、現状での墳頂部に天

井石を思わせるような牛伏砂岩の大ぶりの石が認められたからである。調査が進んで見ると、この石は、破壊された石室の石材が寄せかけられたものであることがわかった。

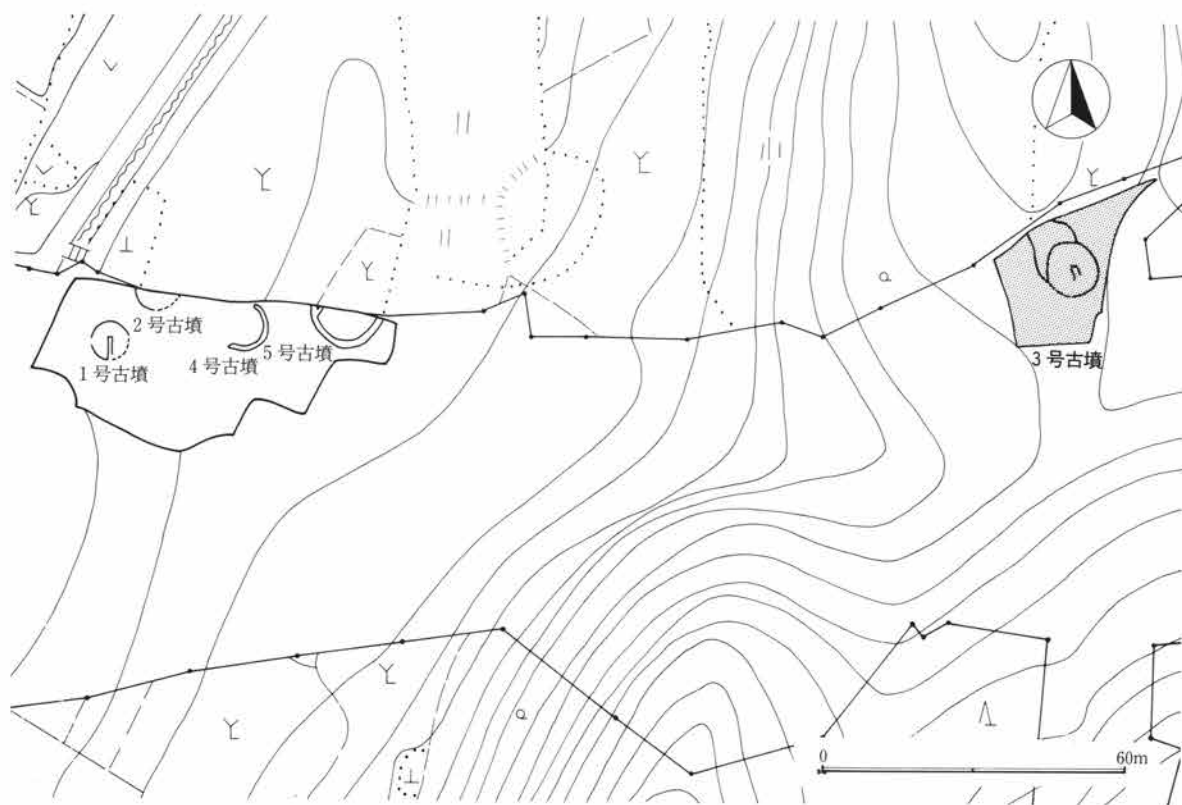
調査の結果、ほぼ南に開口する横穴式石室を主体部とする小型円墳であることが明らかになった。その遺存状態は極めてわるく、墳丘は盛土の全てを失い、石室は玄室の壁石の下端部がかろうじて残っているのみであった。

(1) 墳丘及び外部施設

古墳は北から南へと緩やかに下がる斜面上に築造された「山寄せ」型である。

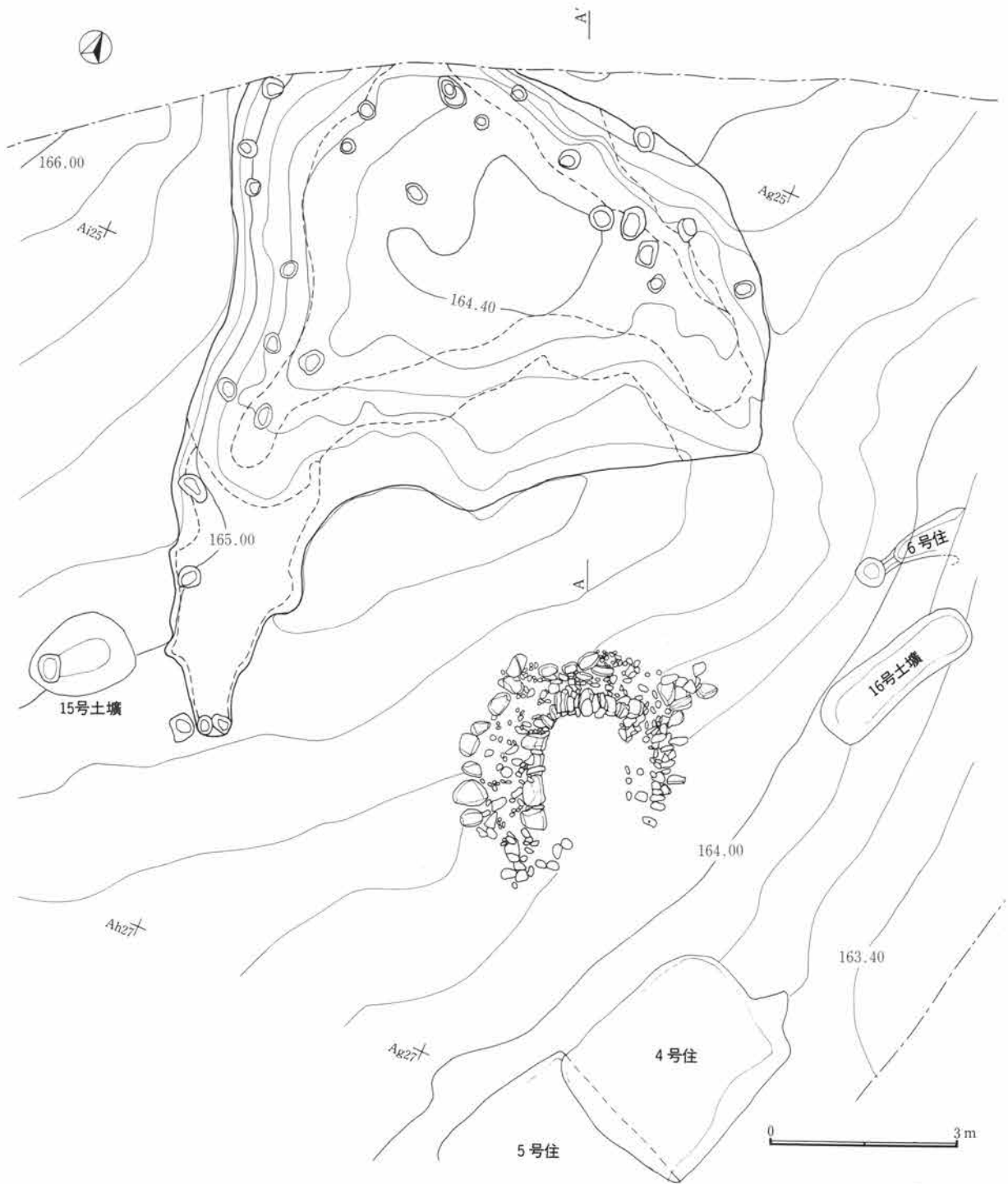
後世の削平により墳丘を完全に失っていた。その削平は、墳丘の基盤層である当時の地表面の下まで及んでおり、特に南寄りが著しかった。

古墳の形状を知る手がかりは、その背後に掘られた周堀状の施設である。これにより尾根筋の一端を切断し、旧地形をうまく利用して墳丘を築成しているわけである。周堀の墳丘側の掘り込み部分の形状

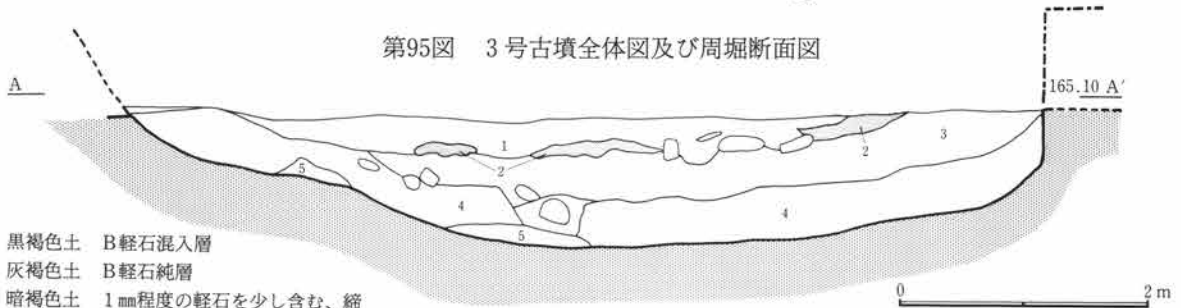


第94図 3号古墳位置図

II 神保下條遺跡の調査



第95図 3号古墳全体図及び周堀断面図



1 黒褐色土 B軽石混入層

2 灰褐色土 B軽石純層

3 暗褐色土 1mm程度の軽石を少し含む、縮り粘性とも強い。

4 茶褐色土 1mm程度の軽石、ローム粒子を少し含む。縮り粘性とも強い。

5 黄褐色土 ロームを主体とする

からするならば、円墳であったことが推定され、直径約10mの規模に復元された。

周堀は、現状では古墳の背後のみであり、平面形状が半月形をなす不整形なものである。最大幅約5.5mで、深さ約1mを測る。古墳の形状をトレースするようにドーナツ形に一周する通例のものからは程遠い。堀の内側には、掘削により円形に区画する意図が読み取れる。古墳を周囲から区画することよりも、掘削により、墳丘の盛土材を確保することに意味があったことがわかる。

周堀の底面から80cmの高さに、天仁元年(1108)降下の浅間山B軽石の純堆積層が確認されている。また、B軽石層下の覆土中からは、周堀全体にわたって人頭大を中心とした多量の円礫が出土している。葺石が崩落した結果と思われる。

後述するように本墳の主体部である横穴式石室は裏込めと裏込め被覆を伴うものであったことから主として石のみから構成されていた1・2号古墳の墳丘構造とは異なるものである。石室の外側を盛土で覆い、表面を葺石で固定するものであったと推測される。

古墳が使用されなくなり、周堀の中途まで土が埋没した段階で、ここに土器が大量に投棄されたようである。同じ面から、須恵器がまとまって出土している。これとともに布目瓦片も出土している。いずれも平安期(9世紀後半)に属するものである。

古墳の南側の隣接地から、4・5・6号住居跡が確認されている。これらのうち、4・5住居は不明確な部分が多く、住居跡でない可能性を残している。しかし、6号住居は、カマド部分のみの遺存ではあるが、明らかに住居跡である。出土土器の特徴から8世紀後半に属することがわかる。このことは、遅くともこの時期には、この地域が墓域から居住域に変わっていたことがわかる。

(2) 主体部

南に開口する横穴式石室である。後世の削平のため入口寄り半分ほどは完全に失っていた。遺存していたのは、玄室の奥壁寄りであったが、これとて、

基底部分をかるうじて残すだけであった。石室は幅4.4m、深さ50cmの掘り方内に構築されている。石室の規模は、奥壁下で幅155cmを測る。壁体の構成を見ると、左側壁では基底石に40×30cm前後の石を平積みにして連ねている。これらの石と掘り方底面との間には、小礫を支って安定をはかっている。これに対して奥壁及び右側壁では、20×10cmで奥行25cm前後の棒状を呈する小ぶりの石を小口積にしている点で対照的である。ただし、この相違が壁体の上部にまで続いていくものかどうかは不明である。

遺存する部分では、壁体で使用されている石材はいずれも結晶片岩であり、牛伏砂岩を含んでいない。調査前に頂部に寄せかけてあった石材は、大ぶりの牛伏砂岩であり、付近一帯の横穴式石室の天井石の使用形態とあわせると、これが本石室の天井石に使用されていたものである可能性が高い。

床面は、掘り方底面の上に約15cmの厚さで敷きつめた砂礫層の上面である。この面が最終時の床面であったことは、ここから多量の歯冠と人骨および少量の副葬品が出土していることから明らかである。

石室は後世の削平により玄室の手前寄りから羨道を失っていた。玄室の最大幅が180cmを測ることからすると、1号古墳のような袖無型である可能性は少なく、胴張りの両袖型であったと推測される。

周囲からは、埴輪は1片も確認されなかったことから、樹立されなかったものと思われる。本墳が、



3号古墳調査風景

II 神保下條遺跡の調査

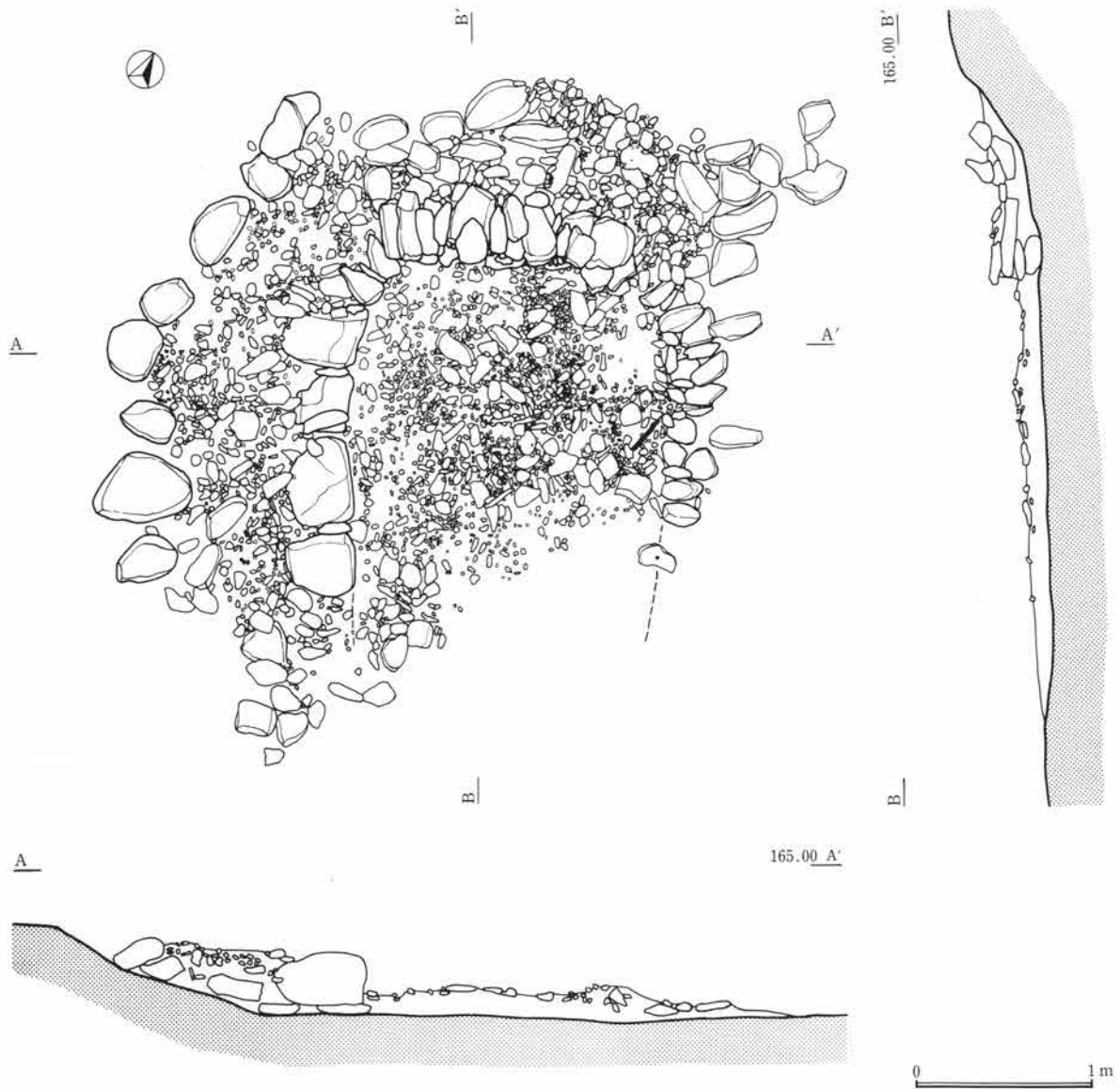
当地域で埴輪が消滅する6世紀末葉ないし7世紀初頭以降に築造されたことと関係している。石室入口前には恐らく前庭が存在していたものと推測される。

次に、石室背後の構造について見ることにする。左側壁と奥壁の背後がかろうじて遺存しており、構造を観察することができた。左壁の背後には、拳大前後の円礫を主体とし、これに砂礫の混じった裏込めが約50cmの厚さでおおっている。さらに、この裏込めを包み込むように外側に40cm大の中ぶりの礫を

葺石状に組んだ裏込め被覆が施されている。この位置は、ちょうど石室掘り方の縁部と一致している。

一方、奥壁の裏込めは、側壁のものにくらべると石材が大ぶりであることに気づく。側壁以上に背後を強固に仕上げる意図があったものと推測される。

石室の掘り方の深さは、確認された深さから大きく出るものではなかったと思われる。1号古墳と同様、壁体の最下部のみが取まるもので、他地域に見られるような石室の大半が取まるものではない。



第96図 3号古墳石室(1)

(3) 遺物の出土状態

石室の破壊が著しかったことと相俟って、石室内の副葬品等の遺存状態もあまりよくなかった。

石室内からは、床面上で鉄製直刀の切先寄りの破片が出土している。その位置は、右側壁際で、奥壁から80cm南である。本来的位置ではないものと思われる。調査後、床土をふるいにかけたところ、鉄直刀に伴うものと思われる鉄製責金具1とガラス製ビーズ玉1を確認することができた。破壊を受けなければ、これらをかなり上回るものであったことは明らかであろう。

わずかな副葬品のほかでは、床面上から人歯、人骨がまとまって出土している点に注意された。

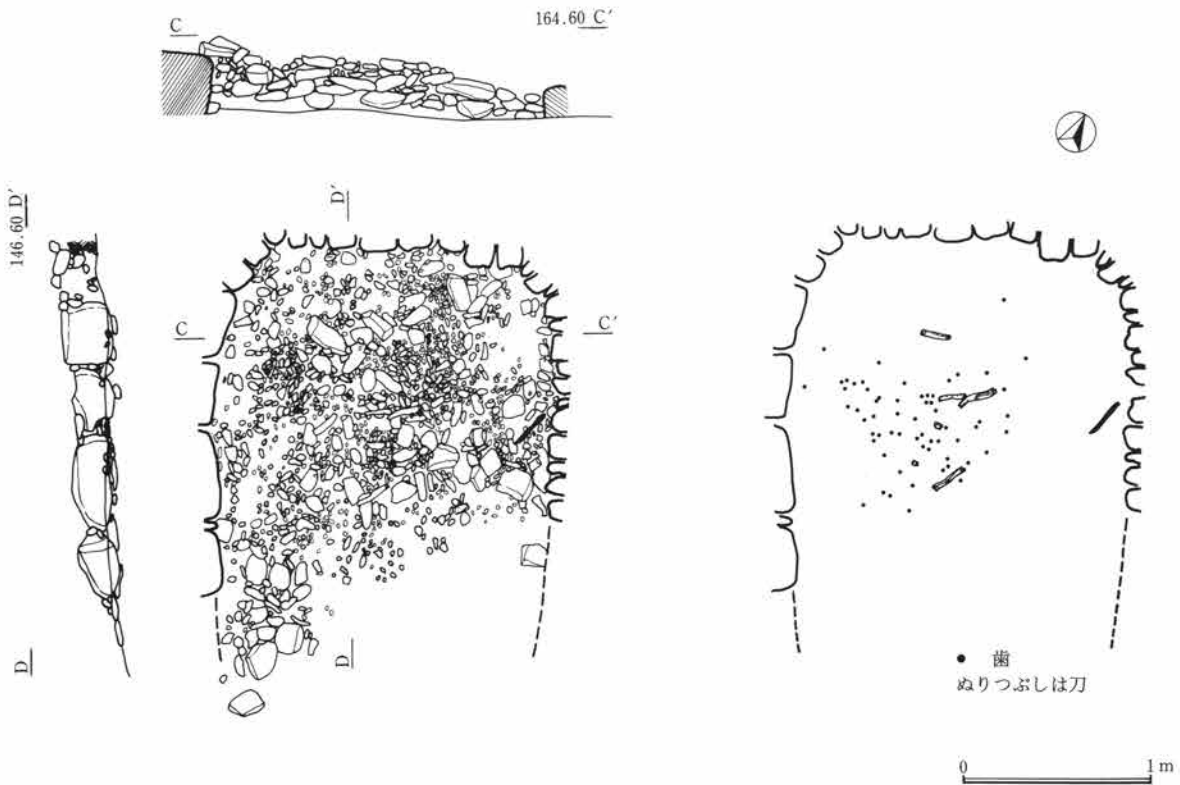
人歯の出土位置は、遺存する床面の中心寄りであり、散在的な状態である。床面から確認されたものは、43点で、床土をふるいにかけてさらに2点が加わった。詳細は後述するが、数量的にみて、複数個体に伴うものと考えられる。本来ならば、頭骸の位置に集中するはずであるから、石室内の攪乱に伴い

散らばったものと思われる。

歯に加えて、腕あるいは足の骨の一部も出土している。全部で6点出土しており、人歯の出土範囲に重複している。これらもまた、散在的であり、人歯の場合と同じく、遺骸の埋葬状態を推測させるものではなかった。これらの人骨は、風化が著しく、確認時にはかろうじて形状を保っていたが、骨粉の集合体といってもよいほどのものであった。



3号古墳石室調査風景



第97図 3号古墳石室(2)及び遺物出土状態

II 神保下條遺跡の調査

(4) 出土遺物

3・4・5は石室内からの出土であり、1・2・8～14が墳丘背後の周堀の覆土中からの出土である。6・7・15・16は墳丘周囲からの出土である。

4は現存長26.5cmの鉄製直刀の刀身部の破片である。幅は中心寄りで2.6cmであり、厚さは背側で6.5mmを測る。

3は鞘の鉄製責金具である。倒卵形に近い形状であり、外郭でたて4cm、よこ2.2cmである。法量から考えると4の直刀に伴う付属具であると推定される。

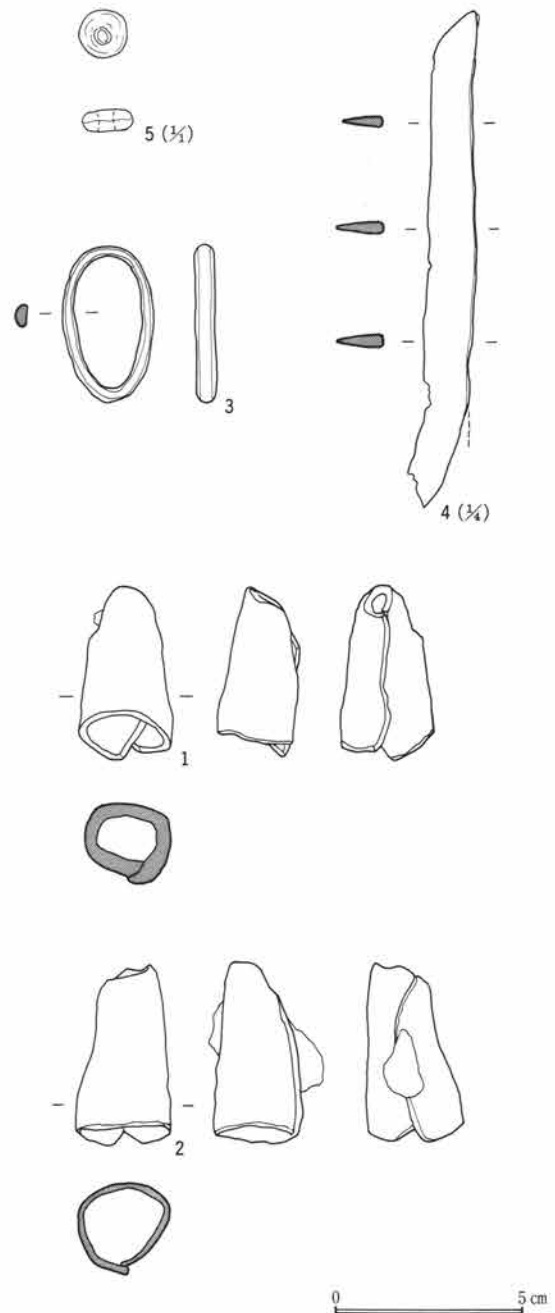
5はガラス製のビーズ玉である。外径6mm、厚さ3mmで、孔の位置はやや片寄っているが、形は整っている。色調は淡紺青色である。分析を経てはいないが、色調から鉛ガラスが推測される。

1・2、8～14は周堀内の覆土上層部から一括で出土したものである。鉄製品については明らかにし難いが、土器類は時期的に接近しているものであることから、平安期にまとめてこの地点に投棄されたものと思われる。

1・2はほぼ同じ形態の鉄製品である。鉄板を折り曲げて先端のすぼまる筒状につくっている。形態からすると木質の本体の先端に装着されるものと推定される。

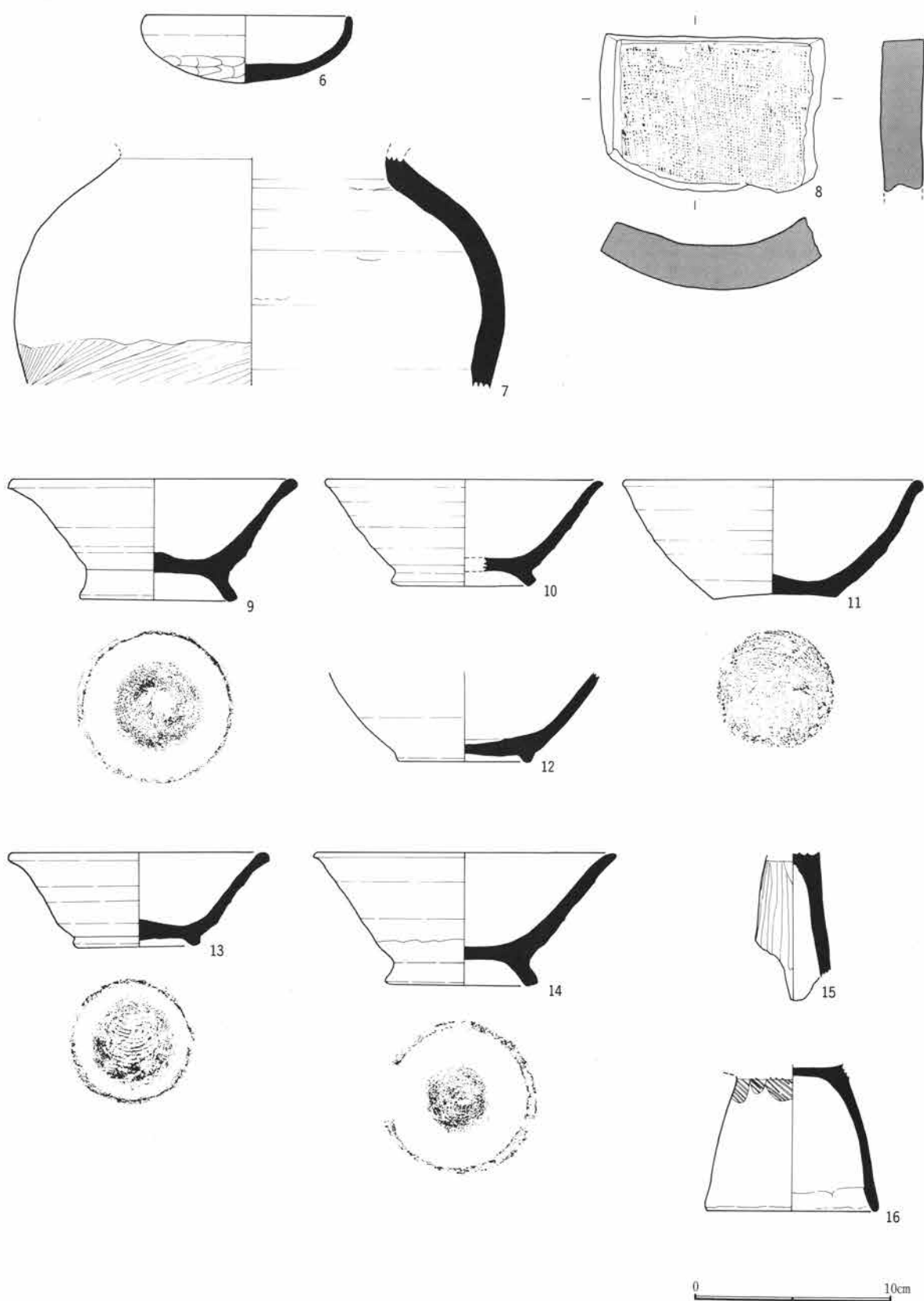
15・16は下の段で確認された古墳時代前期の集落跡とほぼ同時期のものと思われる。具体的な遺構は確認されなかったが、この上の段にも集落が営まれていたことが推測されよう。

本墳の築造時期を直接示す遺物はなかったが、埴輪を伴わないこと、胴張りを持つ両袖型石室が推定されること、墳丘と石室の位置的關係から前庭を伴うことが推定されること等を根拠にして、7世紀代のものとするのが妥当であろう。周辺から採集された土器類のうち、6・7は本墳に直接伴うものである可能性が高い。6は深めの形態と内傾する口縁部の特徴から7世紀後半を中心とした時期の所産と考えられる。



第98図 3号古墳出土遺物(1)

4. 3号古墳の調査



第99図 3号古墳出土遺物(2)

II 神保下條遺跡の調査

3号古墳出土土器観察表

No.	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
6	土師器 坏	北側周堀	口径 10.2 高さ 3.4 底径 丸底	胎 砂粒を少量混じる 焼 ふつう 色 橙色	外面上半横ナデ、下半手持ちへら削り。内面横ナデ。	
7	須恵器 壺	北側周堀	口径 — 高さ 11.0 底径 —	胎 緻密、長石粒を含む 焼 極めて良好 色 灰色	外面上半横ナデ、下半斜めのかき目。内面横ナデ。	
8	瓦 平瓦	北側周堀	縦 7.7 横 10.4 器厚 2.1	胎 結晶片岩粒含、砂粒を 混じる 焼 良好 色 黒褐色	表面 布目痕、端部へら削り。裏面 側面へら削り。	
9	須恵器 高台付埴	北側周堀	口径 14.7 高さ 6.0 底径 8.0	胎 砂粒を混じる 焼 不良、瓦質をおびる 色 褐灰～黒褐色	内外面とも横ナデ、高台取付後、底面ナデ整形。	
10	須恵器 高台付埴	北側周堀	口径 14.1 高 5.3 底径 7.3	胎 夾雑物をほとんど含ま ない 焼 不良、瓦質 色 灰黄色～黒色	内外とも横ナデ、付高台。	
11	須恵器 埴	北側周堀	口径 15.2 高 6.7 底径 6.3	胎 結晶片岩粒含、砂粒を 多量混じる 焼 あまい瓦 質 色 褐灰色	内外とも横ナデ、底部糸切り未調整。	
12	須恵器 高台付埴	北側周堀	口径 — 高さ 4.5 底径 7.0	胎 砂粒混じる 焼 あまい、酸化 色 灰黄色	内外とも横ナデ、底部糸切り未調整。付高台。	
13	須恵器 高台付埴	北側周堀	口径 13.2 高さ 4.7 底径 6.4	胎 砂粒、褐色粒混じる 焼 あまい、瓦質 色 褐灰～黒褐色	内外とも横ナデ、底部糸切り未調整。付高台。	
14	須恵器 高台付埴	北側周堀	口径 15.4 高さ 6.6 底径 7.8	胎 砂粒を多量混じる 焼 あまい、瓦質おびる 色 灰黄色	内外面とも横ナデ。高台取付後、底部ナデ調整。	器面の磨耗が著しい
15	土師器 高坏脚	北側周堀	口径 — 高さ 7.3 底径 —	胎 緻密、砂粒、黒色粒を 混じる。焼 良好 色 赤褐色	外面縦へら磨き、内面ナデ、絞り込みの痕跡	
16	土師器 台付甕台	北側周堀	口径 — 高さ 7.2 底径 8.7	胎 微砂粒を混じる 焼 ふつう 色 明黄褐色	外面斜めハケ整形後ナデ。内面ナデ 底部折り返し。	

5. 4・5号古墳の調査

1・2号古墳の東側から、円形の周溝状の遺構が2基確認された。出土遺物をまったく伴わないことから、時期を特定することはできない。それゆえ、遺構の性格についても断定できる根拠に欠ける。

4号古墳は館の堀跡によって切られていることから、時期的な下限は明らかである。周溝の形状からすれば、古墳時代の墳墓であった可能性が高い。その場合、古墳時代前期の円形周溝墓と5世紀後半から6世紀初頭にかけて県内各地で盛んに築造される低墳丘の円墳の2つの可能性が考えられる。

当地域の場合、古墳時代前期の周溝墓としては、方形周溝墓が円形周溝墓を圧倒的に上回っている。また、本遺構の場合、1～3号の古墳時代前期の住居群との間があまりに近接し過ぎており、墓域と生活域の同時併存は考えにくい。そこで、消極的な根拠からであるが、これら2基を5世紀後半以降の小円墳として取り扱うことにする。

(1) 4号古墳

1号古墳の東28mに位置している。後世の削平が著しく、周堀の下半部を残すのみである。

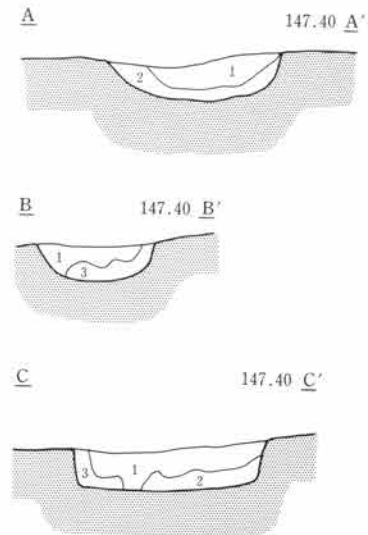
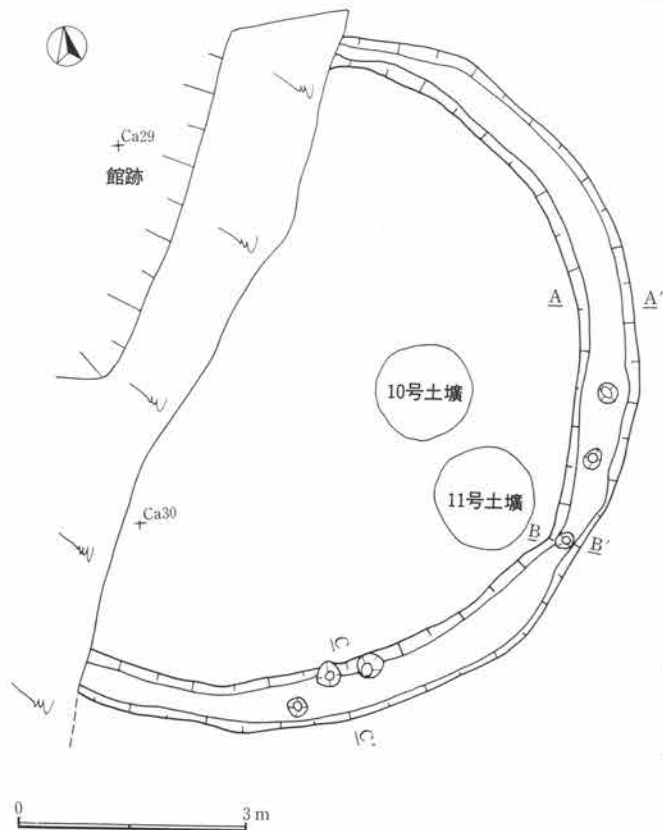
古墳の西側半分は、時期的に後出する館の堀跡と溝状遺構によって切り取られている。

堀は幅80cm、深さ20cmと規模の小さいものであるが、両側の立ち上がりは明瞭であり、円形の区画を明確にとらえることができる。堀の覆土は、黒味の強い黒褐色土でしまりがあり、遺構の古さを物語っている。堀の墳丘側の掘り込み面を基準にすると、径約8.3mの円墳であったことがわかる。

後世の削平が当時の地表面下まで達しているため墳丘の状態についてはわからないが、周堀の掘削土を盛土に供したとするならば、墳丘の高さは1mにも満たなかったことが推測される。

墳丘の中心部がかろうじて残っていたが、主体部は、痕跡すら確認できなかった。主体部は、小規模な竪穴系のものであったと思われるが、地表下に深く掘り方を穿つものではなかったことになる。

周堀内から遺物はまったく出土していない。



- 1 黒褐色土 1mmの黄色軽石を少量、5mmのローム細粒、3mmのローム小ブロックをやや多めに含む、あまり締っていない。
- 2 暗褐色土 ロームと黒褐色土がほぼ同じ割合で混入した層、あまり締っていない、2mmの黄色軽石を少量含む。
- 3 茶褐色土 ロームを主体とし、黒褐色土が混入した層 3mmの黄色軽石を少量含む、地山に近い。

第100図 4号古墳全体図及び周堀断面図

II 神保下條遺跡の調査

(2) 5号古墳

4号古墳の東側に隣接している。両古墳の中心間の距離は21mである。古墳の北側半分は、道路建設予定地外となっているため未調査である。

周堀は、幅1.2m、深さ30cmを測り、4号古墳よりも地表下に深く及んでいたことがわかる。堀への覆土はしまりのある黒味の強い黒褐色土を主体としている点は4号古墳と同じであり、両者の時期的接近を窺わせる。堀の掘り込みは明瞭であり、両側とも急角度で立ち上がっている。周堀の墳丘側の掘り込み面を基準にすると、径約11.7mの円墳に復元される。

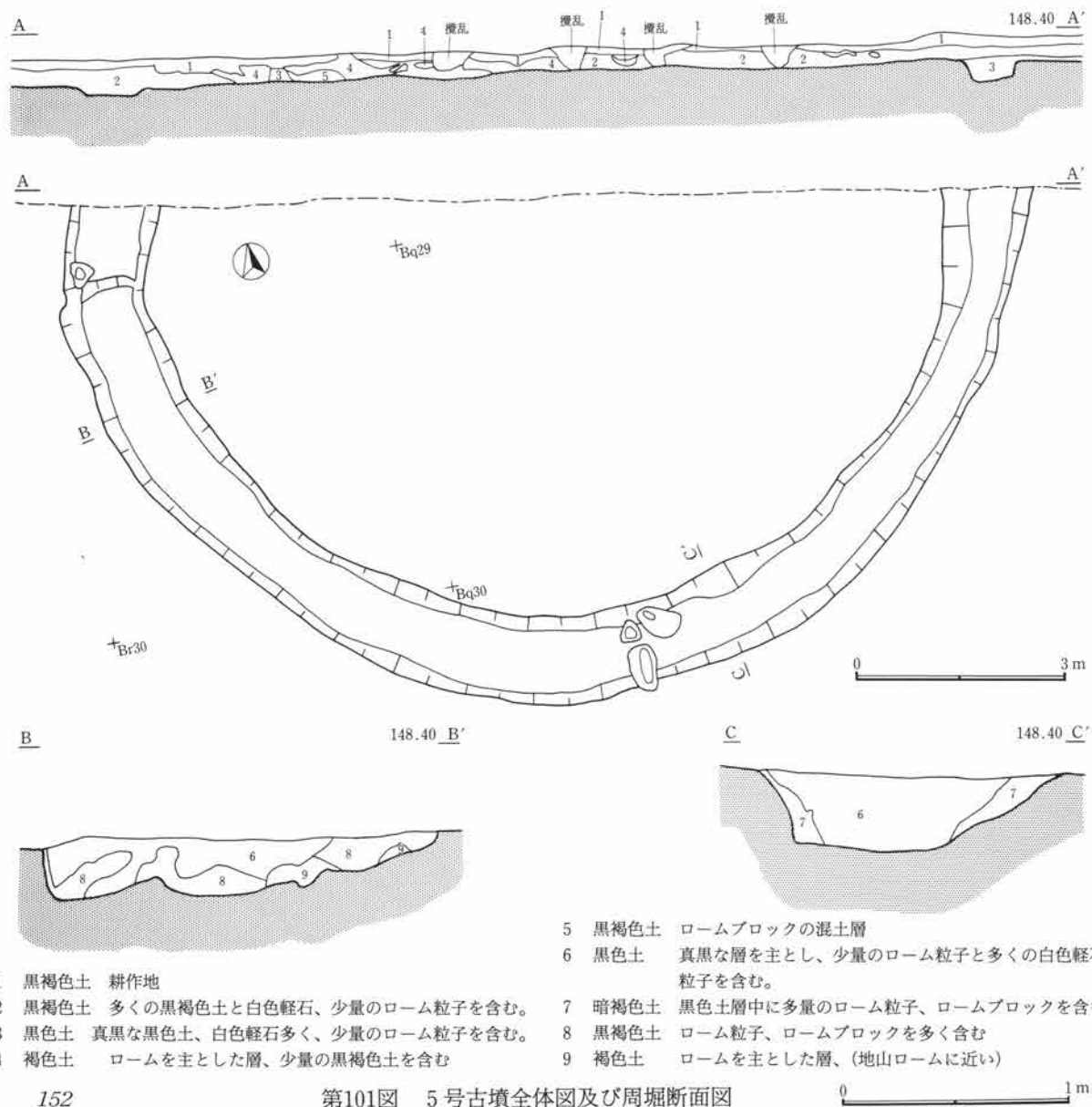
墳丘の平面規模が4号古墳よりも大きいことか

ら、周堀の幅、深さが上回っても、盛土の高さは同程度で、1mに満たないものであったと推測される。

墳丘の中心を少し越えて調査が行われたが、主体部は痕跡すら確認されなかった。

また、周堀内や周辺からは、直接伴う土器・埴輪等は出土していない。

本墳の南側は、東から西へ向かう浅い谷が入り、東側にも南から北へ向かう浅い谷が入っている。今回確認された2つの古墳が、初現期に属する群集墳の一部をなすとするならば、群は4・5号古墳を南限とし、これより北に形成されていたことが予想されよう。



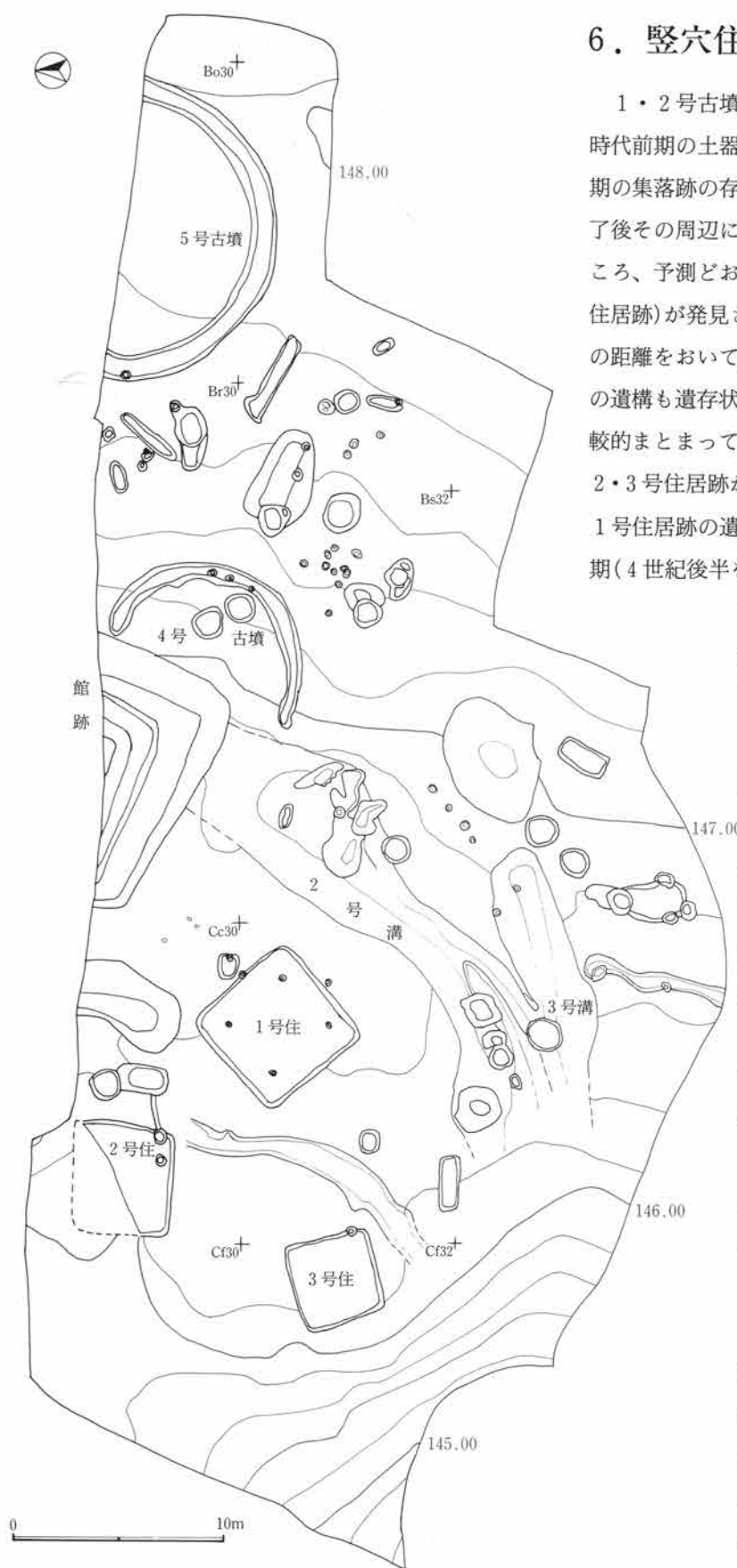
6. 竪穴住居跡の調査

1・2号古墳の調査中、埴輪に混じって古墳時代前期の土器片があることから、付近に当該期の集落跡の存在が推測された。古墳の調査終了後その周辺について遺構確認作業を行ったところ、予測どおり3軒の竪穴住居跡（1～3号住居跡）が発見された。これらは互いに5m前後の距離をおいて近接して位置していた。いずれの遺構も遺存状況が悪かったが、1号からは比較的まとまって遺物が出土した。これに対して2・3号住居跡からはほとんど出土しなかった。1号住居跡の遺物からすると前期の中では後半期（4世紀後半を中心とした時期が推定される）

に属する特徴を示していると思われた。2・3号住居跡もほぼ同時期と推定される。

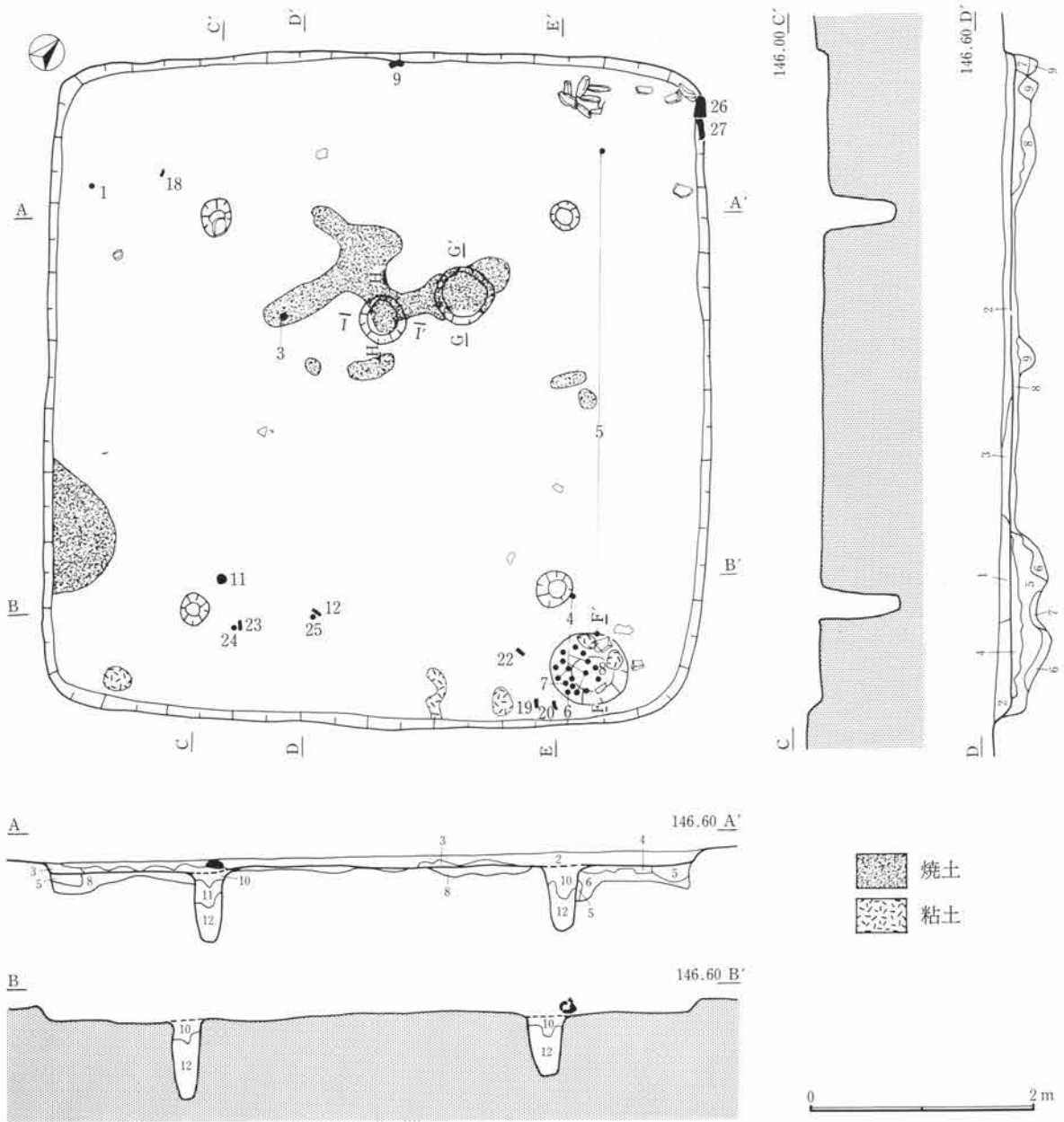
既述の通り、付近の地形は、南が浅い谷となり、東は上の段を接続する急斜面となり、西は大沢川に面する沖積地となっているためこれらの方向へ集落が広がる可能性は少ない。これに対して北側へは、住居跡が確認された部分と同じ地形が続くので集落域がのびて行く可能性がある。

一方、3号古墳の位置する西側の上の台地面でも住居跡（4～6号住居跡）が確認された。このうち、4・5号は住居跡としての決め手に欠けるきらいはあるが、一応住居として扱っておく。6号住居跡はカマドのみの遺存であったが間違いのないものであり、奈良後半期の時期が推定される。



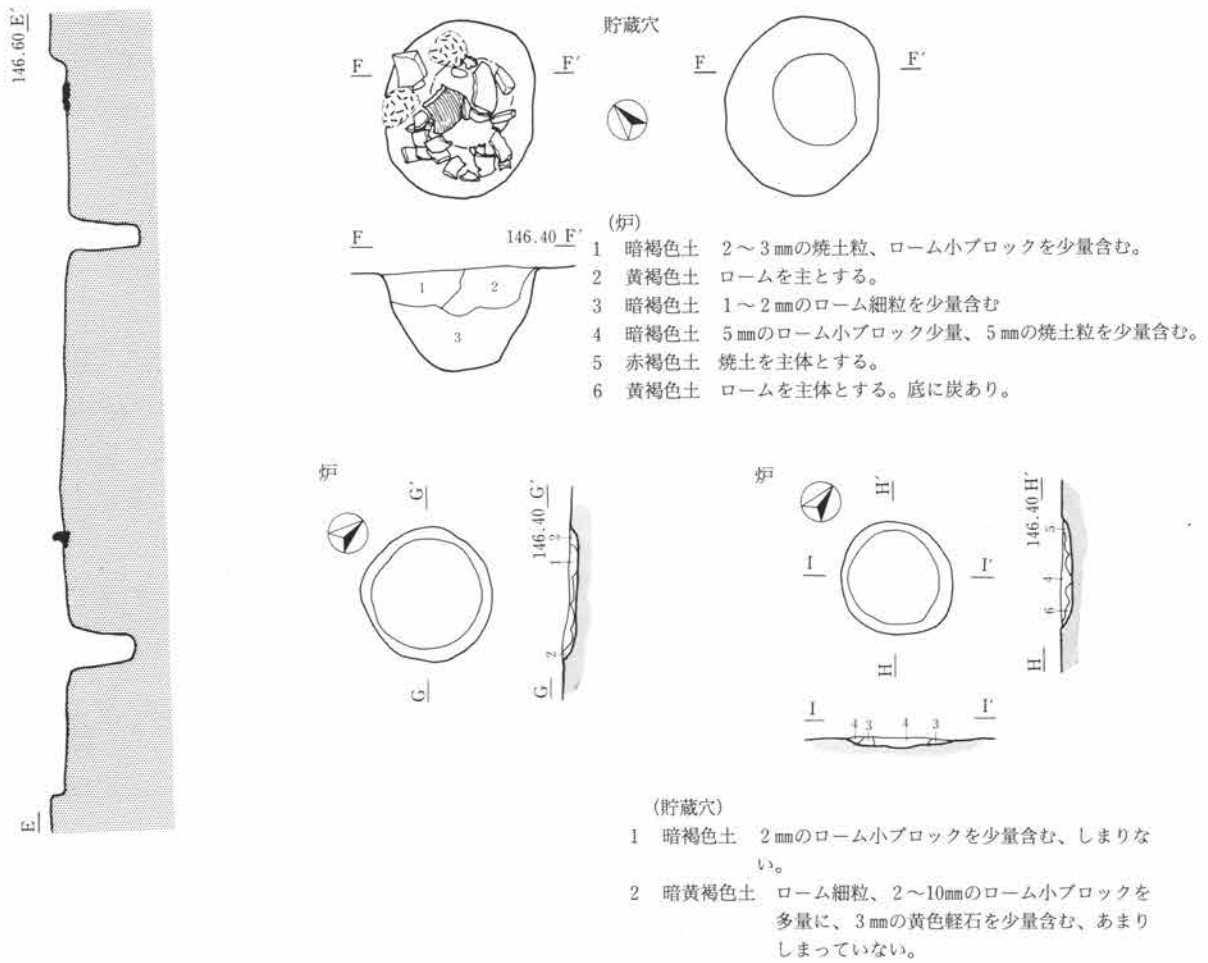
第102図 集落・中近世遺構全体図

II 神保下條遺跡の調査



- 1 黒褐色土 1～2mmのローム細粒を少量含む、あまり締っていない。
- 2 黒褐色土 1層よりも明るい色調、1～2mmのローム細粒をやや多めに、10mmのローム小ブロックを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックと黒褐色土の混土層
- 4 暗褐色土 2～20mmのローム小ブロックを少量含む。締っている。
- 5 黒褐色土 1mm内外のローム細粒をやや多めに、3mmの黄色軽石を少量含む。
- 6 暗黄褐色土 やや大きめのロームブロックと黒褐色土の混土層
- 7 黄褐色土 ロームを主体とし、3～5mmの黄色軽石を多量に含む。
- 8 黄褐色土 ロームを主体とし、固く。
- 9 明黄色土
- 10 暗褐色土 2～5mmのローム小ブロックを少量含む
- 11 暗黄褐色土 2～5mmのローム小ブロックを多量に含む。
- 12 暗黄褐色土 5～10mmの粗いローム小ブロックを多量に含む。

第103図 1号住居跡(1)



第104図 1号住居跡(2)

(1) 1号住居跡

住居跡の概要 本住居跡は、台地の西側裾部にあたる平坦面にあり、Cc29～Cd31グリッドに位置する。1号・2号古墳の調査に続く第3次調査において確認された。周囲には、北西側と南西側に隣接して同じ古墳時代前期(石田川期)の2号住居跡、3号住居跡が所在する。当該期の集落については、平坦面全域に広がる可能性があるが、調査区が狭長なため詳細は不明である。

平面形は、南北5.88m、東西5.86mの長さを測る比較的整った正方形を呈し、面積は33.39㎡を測る。主軸方向はN-43°-Eを示す。

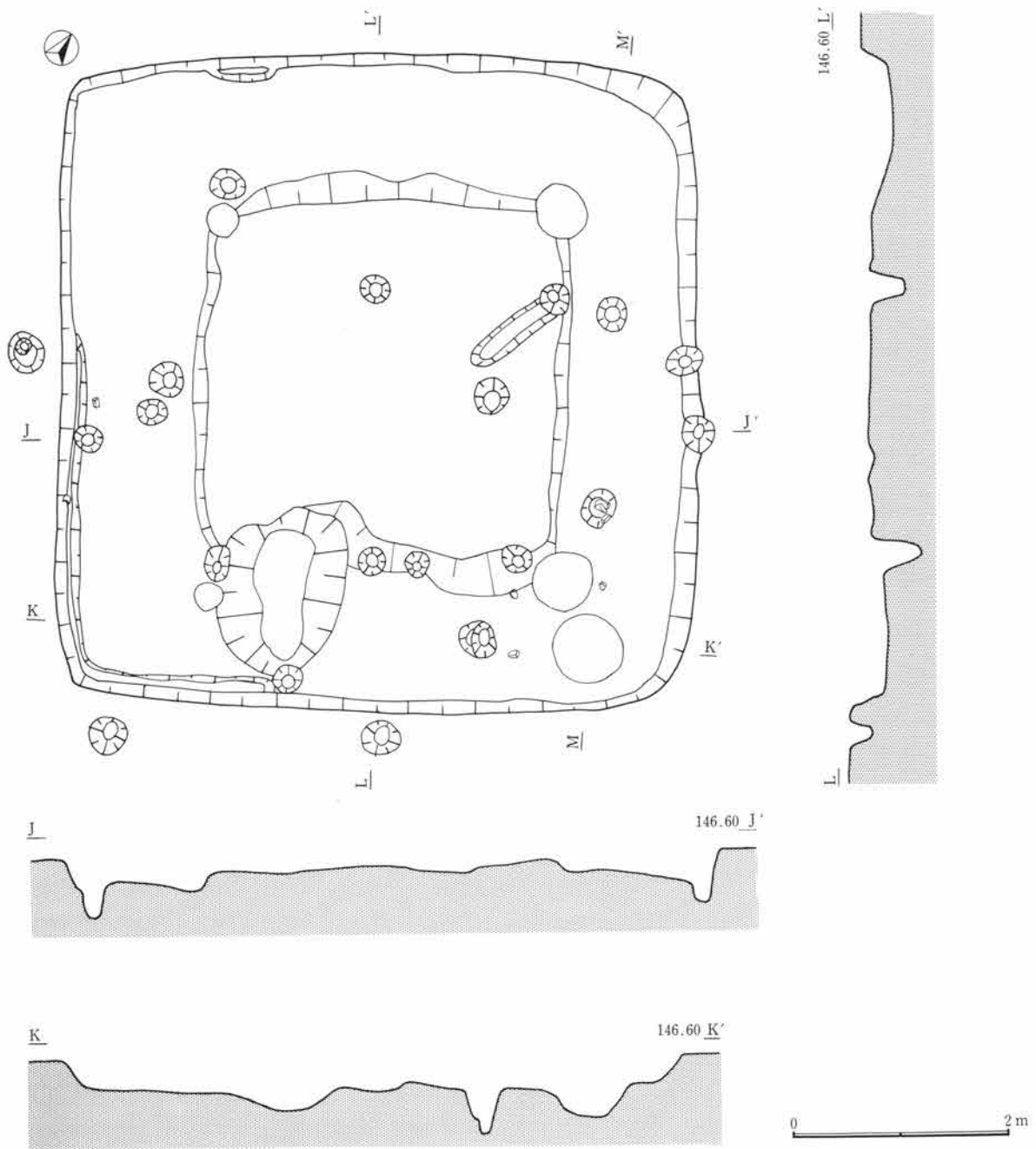
覆土は基本的には自然堆積をしており、大略3層に分層できる。第1層は本遺跡の古墳時代前期の住居跡に共通して分布する土壌で黒褐色を呈する。4

世紀中頃の降下とされる浅間C軽石は認められなかった。

周壁は全体にわたって良好に確認されており、直線的で緩やかに立ち上がっている。確認面からの壁高は最大でも13cm程度で、古墳築造あるいは、後世の耕作により削平されたものと思われ、残存状況は不良である。

床面については、住居中央部のローム層を生活面とほぼ同じレベルで掘り残し、縁辺部の支柱穴と周壁の間を幅1m内外でやや深く掘り込んだ後に、貼床を施していたと思われる。住居中央部では炉跡とその周囲、縁辺部では柱穴の周辺及び南隅付近の硬化が顕著であった。また、部分的に周壁に沿って矢板を埋め込んだと思われる幅3～5cm、深さ5cm程の細い溝が、西南及び東南周壁沿いに良好に確認さ

II 神保下條遺跡の調査



第105図 1号住居跡（掘り方）（3）

れた。断面形はU字状を呈し、その覆土は黒褐色土である。

また、炉跡周辺と南西周壁の南寄りの位置に灰の散布が認められることから、火災にあった可能性も想定される。東南周壁付近には粘土の分布が認められるが、恐らくこの周辺が何らかの作業空間であったのだろう。粘土の分布と床面の硬化の状況等から、

出入口については、東南周壁のやや南寄りの位置が該当するものと思われるが確認はない。

柱穴については、支柱穴が4ヶ所で良好に確認された。柱穴の規模は、口径26～32cm、底径15～22cm、深さ62～70cmである。それ以外には、径152×115cmで深さ37cmの楕円形を呈するピットと柱穴状のピットが多数確認されているが、その性格・機能等につ



いては不明である。

炉跡は、住居中央部北西寄りの位置に2箇所認められている。いずれも地床炉で、それぞれ径52cm、径44cmの範囲が火床面であり、焼土化していた。炭化物・灰の散布は小さい炉跡の方が顕著であった。

貯蔵穴は、東隅の東南周壁付近にある径69×59cm、深さ39cmを測る円形を呈するピットが該当するものと思われる。

遺物は、貯蔵穴を含む縁辺部に分布し、全体量は少ないものの、種類が豊富である。その大半は床面直上からの出土であることから、これが直接住居跡に伴うものと思われる。

遺物の出土状態 出土遺物と数量を掲げると以下の通りである。鏡1、鉄斧1、石製管玉12、ガラス製小玉2、砥石2、土器である。

鏡は住居の南西の柱穴の内側から出土しており、鏡面を表にしていた。管玉、小玉の大半は、鏡と同じ南の壁寄りから出土しており、鏡の出土位置周辺と、南東隅の貯蔵穴周辺の大きく2つのブロックにわかれる。これに対して斧・鎌は北東隅の壁に接するようにして2点がまとまって出土している。

土器類は主として貯蔵穴周辺からの出土である。

もう一つ注意されたものとして、北東隅にまとまって結晶片岩の棒状礫7点が出土している。これらは長さ15cm前後の一握りほどの大きさであり、よく「こも編み石」と言われているものに似ている。

遺物 次に出土遺物のうち土器を除いた主なもの

について詳しく見ていくことにしたい。

銅鏡 面径6.1cm、厚さ中心で1.5mm、縁で2.0mm、重さ27gを測る小型仿製鏡である。また、約2mmの反りをもっている。鏡面は淡灰青色で、背面も本体は同様の色調であるが、半分ほどは緑錆でおおわれている。

紐は径1.5cm、高さ0.6cmを測り、紐座を持たない。そのまわりは、3重に同心円文があり、その外側に直交する櫛歯文が施されている。その外側には同心円文が2重にめぐり、さらに歯を外側に向けた鋸歯文がめぐっている。外区は幅0.9cmの素文縁である。内区の文様は全体にメリハリに欠ける鈍いものであり、はっきりしないところもあるが、外区は形も整っており、比較的しっかりしている。

背面のくぼんだ部分にはところどころ赤色が認められるが、顔料なのか、鉄分の付着であるのかは明らかにできなかった。

鉄製斧 長さ14.2cm、根元で幅3.7cm、厚さ0.6cm、中心で幅4.4cm、厚さ1.1cm、先端で幅4.2cmの短冊形である。重量は345gを測る。よく使用されていたものと思われ、根元の頂部は打痕により潰れて広がっており、刃先は隅が刃こぼれした後に再調整していることがわかる。

鉄製鎌 長さ9.9cm、幅根元で3.3cm、先端で2.25cmの直刃鎌である。重量は40gを測る。

背部はほぼ直線であるのに対し、刃部はやや反り気味である。根元の端部は0.3cmほどが木柄の装着のために、手前にわずかに折り曲げられている。

管玉 全部で12点がある。12は長さ1.75cm、径6mmを測る。頁岩製の優品である。色調はやや黄色味をおびた灰色であり、つくりの精巧さがよくわかる。両面穿孔であり、両端部は真平らで長軸に対して完全に直角である。

13～23の11点はすべて蛇紋岩製である。色調は16が緑灰色であるのを除けば、青味がかった灰黒色である。径は16が6mmであるのを除くと他は4mm前後でほぼ一定である。長さからは、約1.5cm(17、23)、約1.8cm(13、14、18、20、22)、約2.2cm(19、21)、

II 神保下條遺跡の調査



第106図 1号住居跡出土遺物(1)

6. 竪穴住居跡の調査

2.9cm (15) に分類することができる。

16は比較的丁寧なつくりであり、全体に平滑に仕上げられており、12に近いものである。これに対して、残りの10点は、側面は平滑に仕上げられ、正確な円柱状につくられているが、両端部の仕上げがやや粗雑である点が特徴的である。いずれの場合も両面穿孔である。

ガラス小玉 全部で2点である。24はいわゆるビーズ玉である。外径3.5mmで厚さ2.5mmを測る。両端は平らに仕上げられている。色調は淡い水色であり、分析を経てはいないが、アルカリ石灰ガラス製と思われる。

25も色調は24と同じである。形状は著しく異なり、長さ(厚さ)5mm、外径4mmを測り、ビーズ玉と管玉の中間的な形態である。

砥石 9はきめの細かい砂岩製である。付近ではこの石材は自然石として得られないことから、搬入品であることがわかる。各面とも非常によく使い込まれており、また弧状にえぐれるような形態をしている。刃部をもつ鉄製品の研磨の最終仕上げに使われたものと推定される。

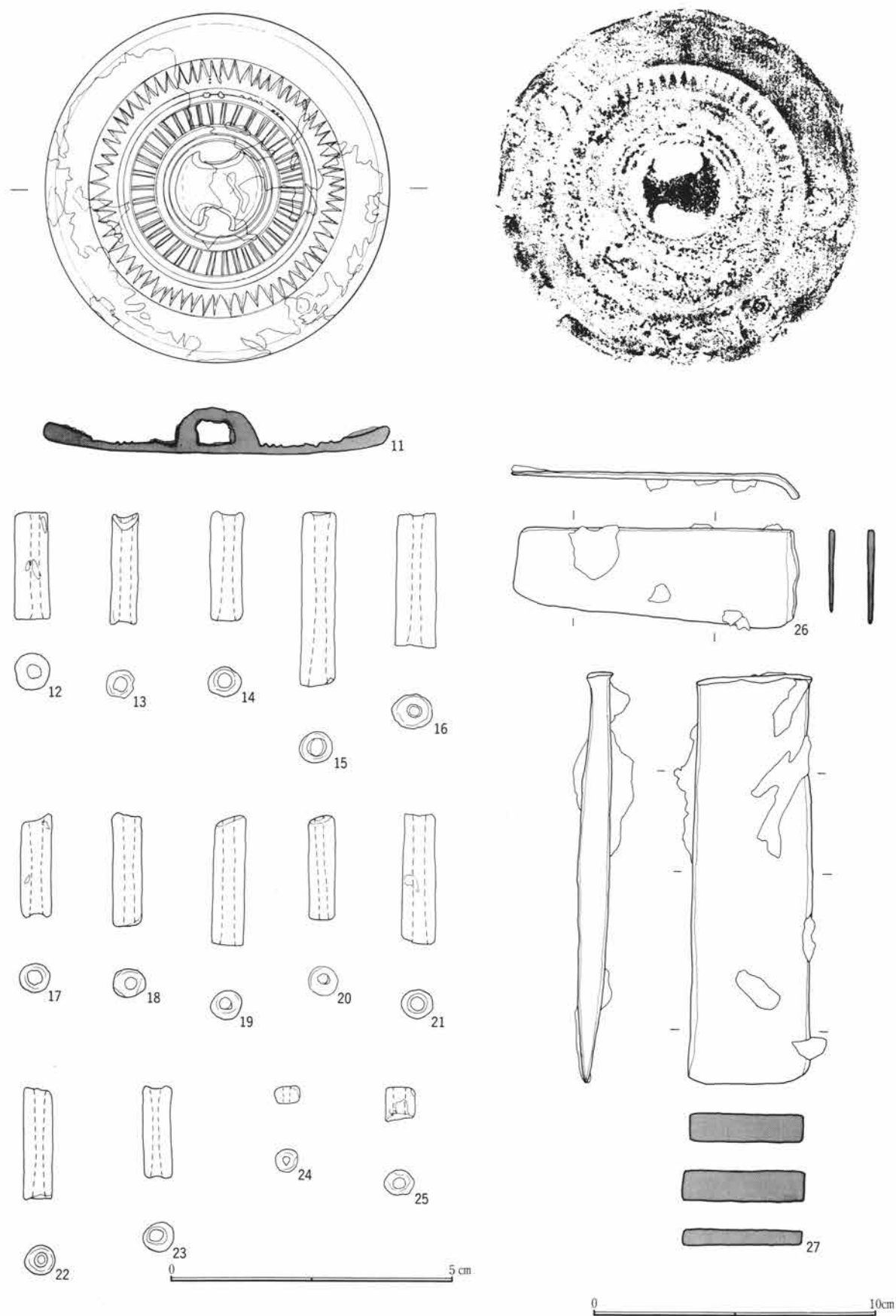
10は、牛伏砂岩の偏平な自然礫である。図示した面のみに線状痕が幾条も認められる。鉄製品の刃部の粗い調整が推測される。

1号住居跡出土土器観察表

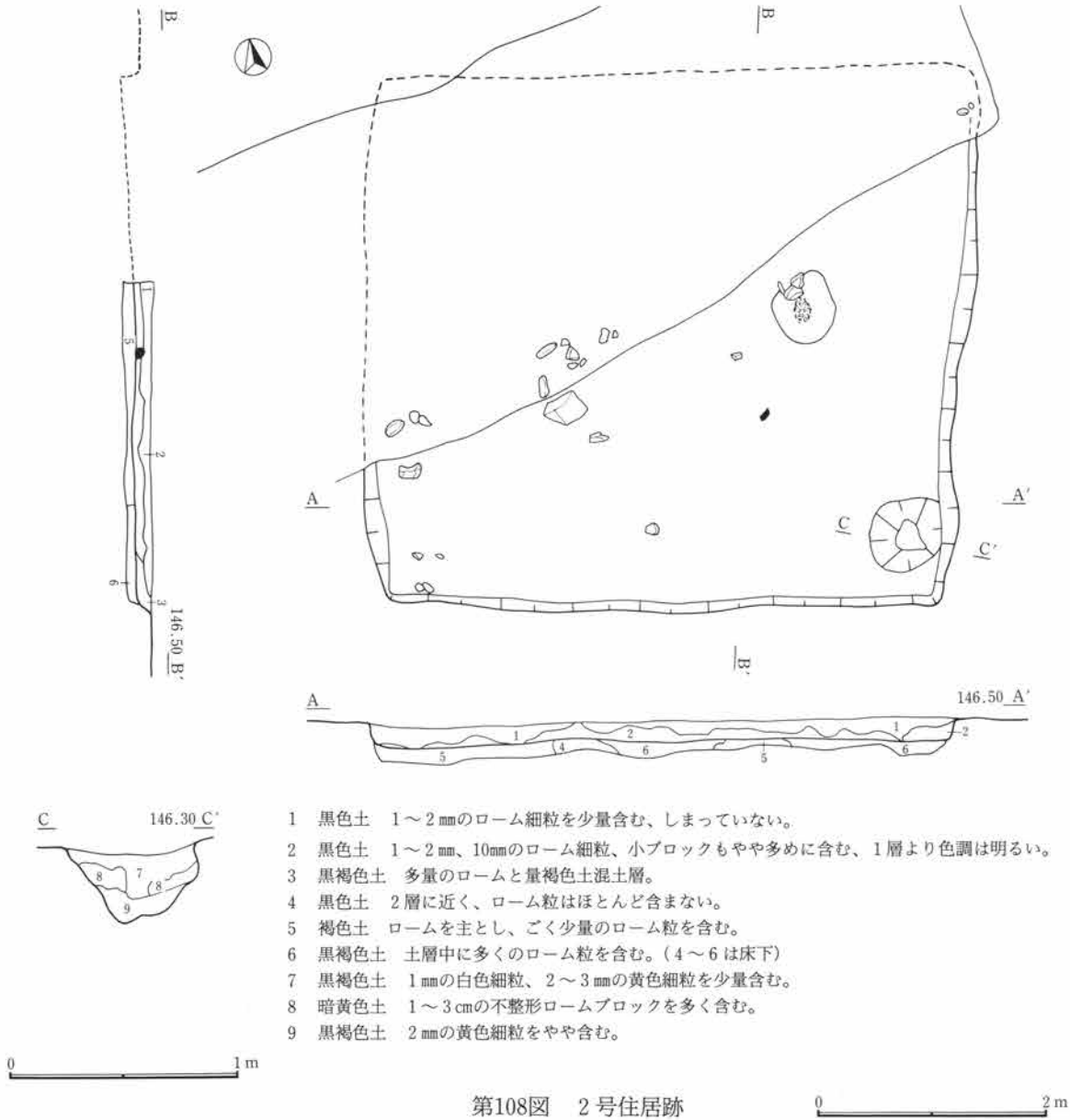
出土位置単位cm、以下同

No	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	土師器 手捏鉢	床面+3	口径 8.7 高さ 3.3 底径 —	胎 砂粒を含み粗い 焼 ふつう 色 鈍い褐色	薄手の巻き上げ成形で粗雑な作り。内面に巻き上げ痕を残し外面荒いナデ整形後、部分的に横へら削り。	甕、高環の脚部の可能性もある
2	土師器 台付甕	貯蔵穴内 -17	口径 — 高さ 5.4 底径 —	胎 微砂粒を混じる 焼 ふつう 色 灰黄褐色	外面体部下端縦ハケ、それより上は縦ハケ後縦へら削り。台部斜め縦ハケ。内面体部底面縦指ナデ、それより上は横ナデ。台部縦指ナデ。	体部外面煤付着
3	土師器 台付甕	床面+1	口径 — 高さ 7.0 底径 9.6	胎 緻密、微砂粒を少量混 じる 焼 良好 色 明黄褐色	外面斜めハケ整形後横ナデ。内面斜め縦指ナデ後、下端を折り返し指押え。	
4	土師器 台付甕	掘り方覆土	口径 — 高さ 8.3 底径 8.4	胎 緻密、微砂粒混じる 焼 良好 色 鈍い黄橙色	外面体部下半へら削り後ハケ整形。台部はハケ整形後、下端寄りを横ナデ。内面横ナデ、下端部折り返し後指押え。	
5	土師器 甕	床面+4	口径 — 高さ 11.1 底径 6.8	胎 砂粒の混入が目立つ 焼 ふつう 色 鈍い褐色	外面体部中位以上は縦ハケ後、縦へら削り。底部寄り縦ハケ後横ナデ、両者の間は縦ハケ。底面ナデ。内面不定方向ハケ整形。	外面体部中位以上煤付着
6	土師器 小型甕	貯蔵穴内 -15	口径 9.6 高さ 13.9 底径 4.2	胎 緻密、砂粒を多量に含 む 焼 良好 色 鈍い黄橙色	外面口頸部ハケ整形後横ナデ。体部上半縦へらナデ、下半横へら削り。底面へら削り後ナデ。内面口頸部横ナデ。それ以外荒い横へらナデ。	外面体部煤付着
7	土師器 甕	貯蔵穴内 -16	口径 — 高さ 21.7 底径 6.8	胎 微砂粒混じる 焼 ふつう 色 鈍い褐色	外面体部縦へらナデ。体部下端～底部ナデ。内面横ナデ。	
8	土師器 高環脚	貯蔵穴内 -19	口径 — 高さ 10.8 底径 11.6	胎 緻密、微砂粒を少量含 む 焼 ふつう 色 鈍い黄橙色	外面脚部縦へらナデ、底部横ナデ。内面横ナデ。	

II 神保下條遺跡の調査



第107図 1号住居跡出土遺物(2)



第108図 2号住居跡

(2) 2号住居跡

本住居跡は、台地の西側裾部にあたる平坦面にあり、Cd・Ce-28・29グリッドに位置する。2号古墳調査終了後に、住居跡南半部のみ確認されたが、残存状況は極めて不良であった。

半壊状態の為、南北方向は不明であるが、東西方向は長さ5.13mを測り、本来の形状は方形を呈していたものと思われる。主軸方向はN-100°-Eを示す。確認面からの壁高は残存する南壁で20cmを測る。

床面は、竹の根による攪乱が著しく、明瞭な硬化面としては確認されていない。床下には、若干の掘り込みが認められるが、基本的に地山を直接叩き締

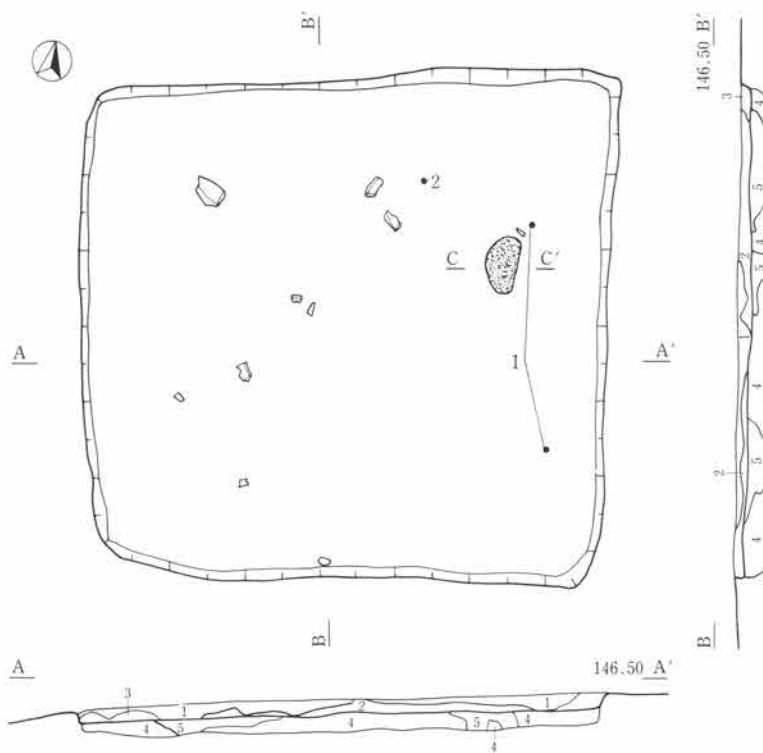
めて床面としていたと思われる。柱穴に相当すると思われるピットや、壁溝等の付属施設については確認されていない。

炉跡については不明な点が多く、住居跡中央やや東壁よりの位置に66×48cmの範囲で焼土粒の散布が認められたのみである。

貯蔵穴は、南東隅付近の径98cm、深さ36cmを測るピットが該当するものと思われる。

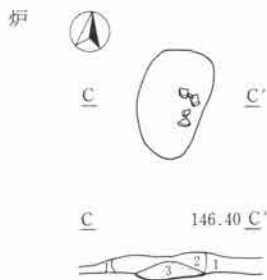
遺物は極めて少ない。覆土中より台付甕の胴部と、貯蔵穴内より台付甕のS字状口縁部が出土しているが、いずれも小破片で図化できない。

II 神保下條遺跡の調査



- 1 黒褐色土 1mmの黄色細粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 1層より色調は明るい。1mmの黄色細粒をやや多めに含む。5mmのローム小ブロックを少量含む。
- 3 褐色土 ロームと黒褐色土の混土层、2～3mmの黄色軽石を少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5 黒色土 ローム粒をほとんど含まない真黒な土

0 2m



(炉)

- 1 黒褐色土 1mmの黄色細粒を少量含む。
- 2 暗赤褐色土 3mmの焼土粒を少量含む、ロームを少量含む。1mmの黄色細粒を少量含む。
- 3 濃い赤褐色土 焼土を主体とする。

0 1m

第109図 3号住居跡

(3) 3号住居跡

本住居跡は、台地の西側裾部にあたる平坦面にあり、Ce・Cf-30・31グリッドに位置する。東側に1号住居跡、北東方向に2号住居跡が隣接して所在するが、西側は緩斜面になっており、住居跡は認められない。

平面形は東西4.16m、南北4.02mの長さを測る正方形を呈し、面積は16.38㎡を測る。主軸方向はN-82°-Eを示す。当時の地表面である黒色土を掘り込んで構築されたと思われるが、確認面からの壁高は、

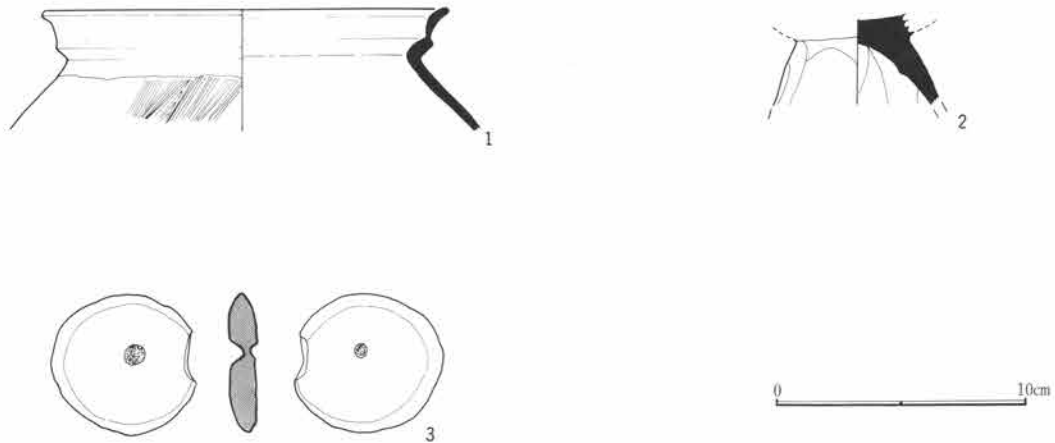
最大で9cm程度で残存状況は不良である。後に築造される1号古墳の玄室から羨道に重なっており、恐らく削平を受けたことと思われる。

覆土は3層に分層できるが、大略自然堆積状況を呈している。

床面は、掘り込みがローム層まで及んでいるものの、面的には黒色土を踏み固めている部分が多く、堅緻ではあるが、あまり明瞭ではない。掘り方は比較的平坦であるが、貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

炉跡は地床炉であり、住居中央部やや東寄りに認められた。45×25cmの範囲が著しく赤褐色に焼けており、浅い凹みが認められた。

遺物は、炉跡と東壁周辺を中心に散漫に分布するが、種類に乏しく、個体の残存率も低い。浮いた状態で出土するものがほとんどで注意を要する。石材については、原位置を保っていない可能性が高く、古墳の墳丘に用いられた物との分別は困難であった。そうした中では、炉跡周辺から台付甕のS字状を呈する口縁部と脚部及び、南壁際から石製品が出土している。



第110図 3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	土師器 甕	床面+9	口径 16.2 高さ 4.8 底径 —	胎 緻密、砂粒を混入する 焼 ふつう 色 鈍い褐色	外面口縁横ナデ、肩斜め縦ハケ。内面横ナデ	
2	土師器 台付甕	床面直	口径 — 高さ 2.9 底径 —	胎 砂粒を混じる 焼 ふつう 色 明赤褐色	台部分の破片である。外面縦～横ヘラ削り。内面指ナデ。	
3	石製品 不明	覆土	縦 5.5 横 5.8 器厚 1.0		扁平が牛伏砂岩の川原石の中心に表裏とも小穴が穿たれているのが、貫通していない。	

出土遺物はわずかであった。

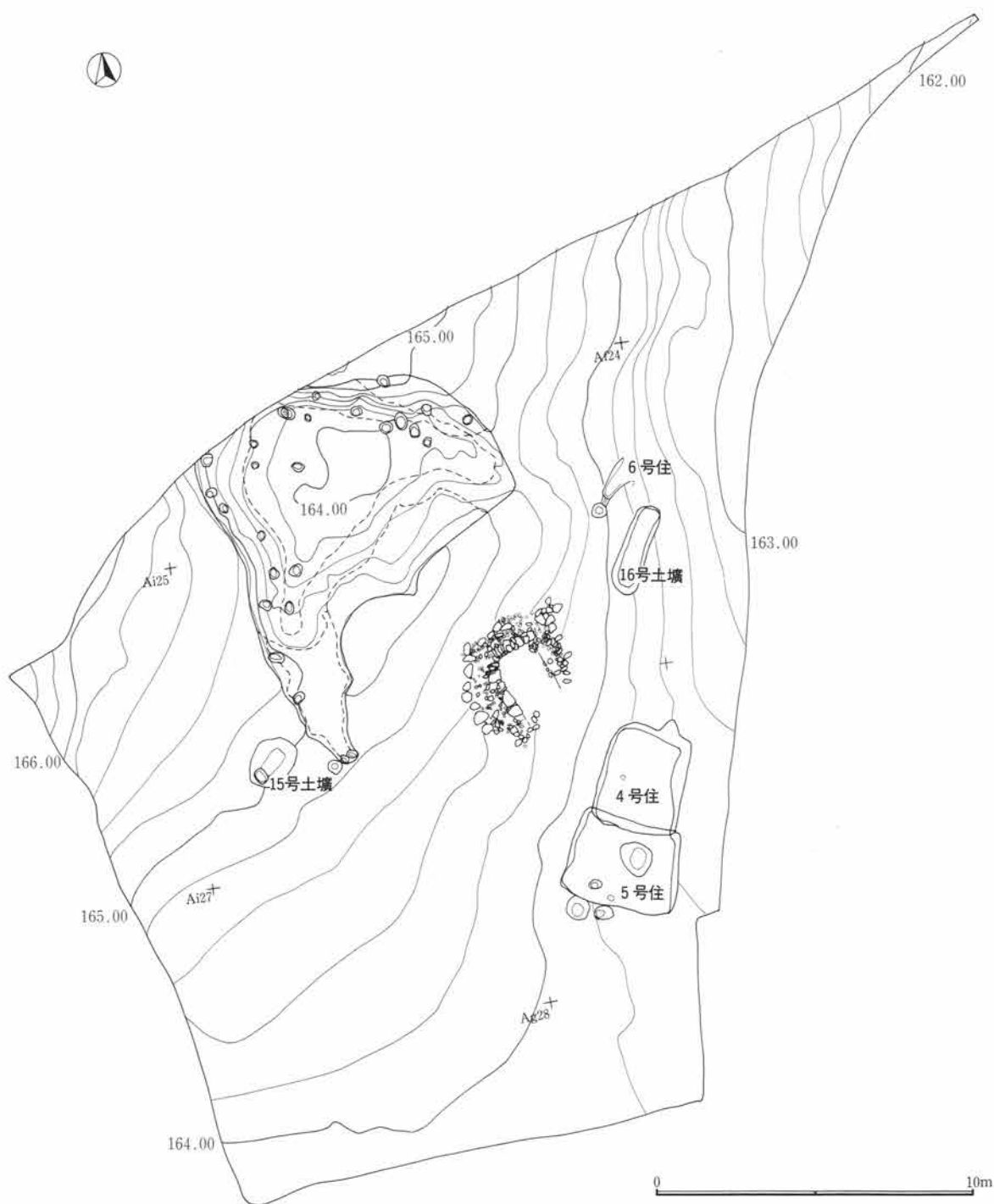
1・2のS字状口縁の台付甕の破片の存在から、この住居跡も1・2号住居跡とほぼ同時期であることが推測された。

3は径約5.5cm、厚さ約1cmの円盤状を呈する牛伏砂岩の自然礫を利用したものである。平の面の中央寄りに径0.8cm、深さ0.7cmの円錐状のくぼみがあり、

貫通していない。回転で揉むようにした痕跡と思われる。この反対側の面の対応した位置にわずかであるが、同様のくぼみが認められる。

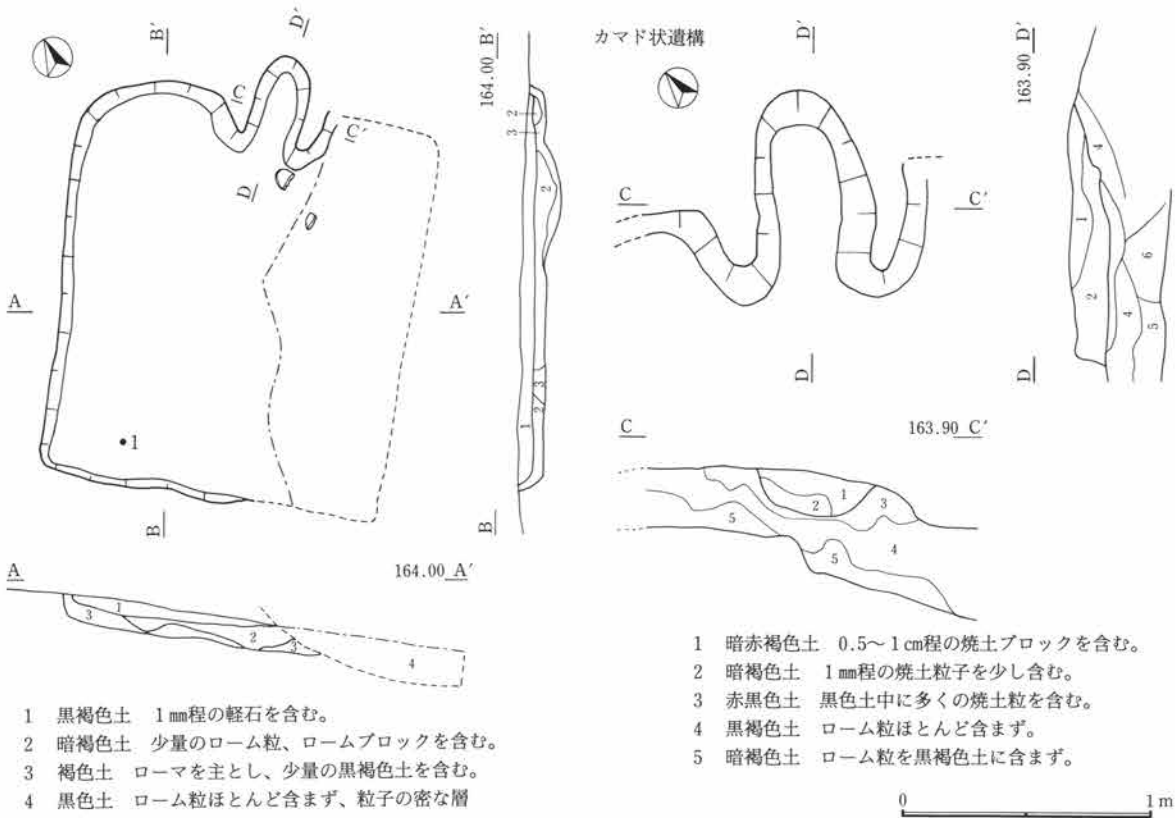
このくぼみを使用痕と見るか、穿孔の中途と見るかは判断に苦しむところである。穿孔を途中で止めた理由も見いだしがたいので、一応前者の可能性を考えている。

II 神保下條遺跡の調査

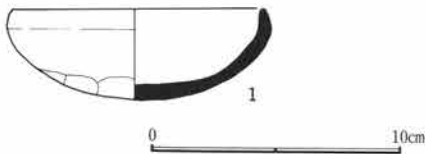


第111図 4・5・6号住居跡位置図

6. 竪穴住居跡の調査



第112図 4号住居跡



第113図 4号住居跡出土土器

(4) 4号住居跡

本住居跡は、上側の台地の西側縁辺部の緩斜面にあり、Ae・Af-26・27グリッドに位置する。表土の流失が著しく、住居跡西半部のみ確認された。南壁が5号住居跡と重複するが、その前後関係は不明である。

住居跡の東半部が小支谷に関係する黒色土中にかかるため、東西方向は不明であるが、南北方向は長

4号住居跡出土土器観察表

No.	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	土師器 坏	床面+8	口径 10.5 高さ 3.5 底径 丸底	胎 微砂粒を多量混じる 焼 あまい、瓦質おびる 色 鈍い褐色	外面上半横ナデ、下半手持ヘラ削り。内面横ナデ。	

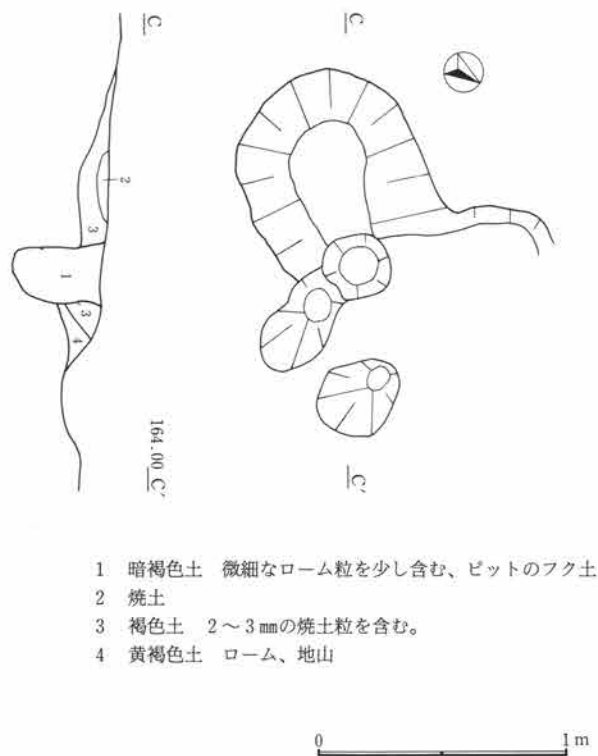
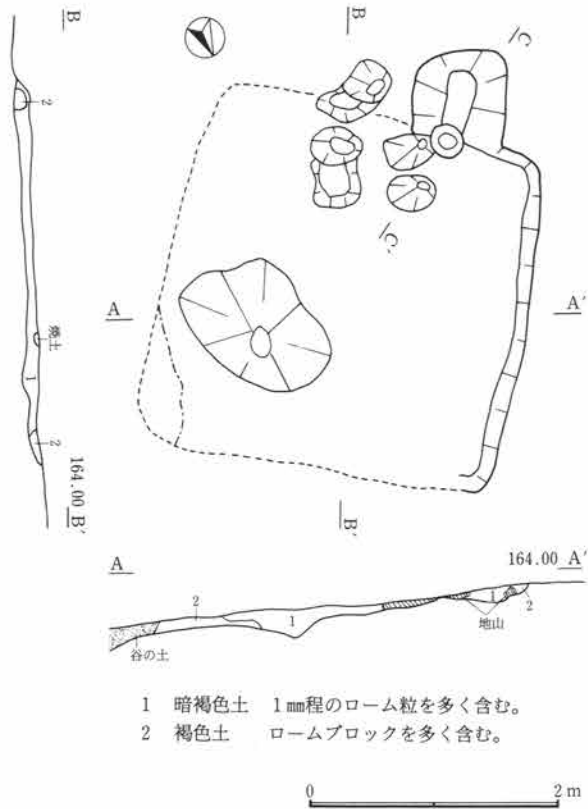
さ3.18mを測り、本来の形状は長方形を呈していたと思われる。主軸方向はN-36°-Eを示す。

床面には貼床を施していたと思われるが、明瞭な硬化面としては確認されなかった。掘り込みは比較的平坦で、傾斜に沿って緩やかに認められた。壁高は最大で12cmを測る。貯蔵穴・柱穴・壁溝等の付属施設については、確認されていない。

竈は北壁ほぼ中央と推定される位置にあり、幅42cm・奥行82cm・深さ14cmを測る。両袖の位置に、焼土の分布が認められたが、火床面の焼土化はさほど顕著ではなく、痕跡というべきであろう。

遺物は極めて少ない。7世紀後半に属するものと思われる土師器坏の完形品が、南西隅付近の床面上8cmの位置で底部を上にした状態で出土しているが、流れ込みの可能性もあり、注意を要する。

II 神保下條遺跡の調査



第114図 5号住居跡

(5) 5号住居跡

本住居跡は、上側の台地の西側縁辺部の緩斜面にあり、Af-26・27グリッドに位置する。東側には南東方向から北西方向に台地を開析する小支谷がはしり、その小支谷を挟んで、東側に多胡蛇黒遺跡が所在する。残存状況は極めて不良で、殆ど痕跡の状態であった。前出の4号住居跡の南壁と重複するが、その新旧関係は遺構の残存状態及び土層観察からでは、推定できなかった。

痕跡状態の為、不確定な要素が伴うが、平面形は方形を呈していたと思われる。東西方向は不明であるが、南北方向は2.76mを測る。想定される主軸方向は、N-142°-Wを示す。

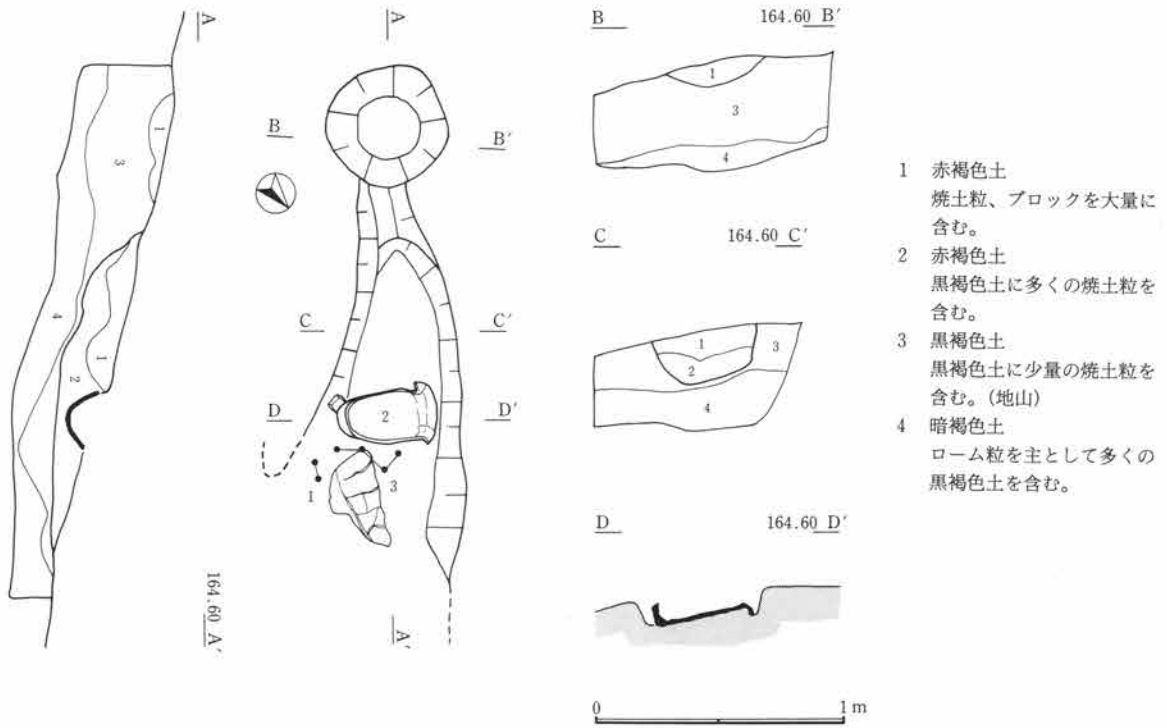
掘り込みは、傾斜に沿って西側から東側にかけて緩やかに認められ、最大で14cmを測る。4号住居跡の床面レベルに比し、8cm程度浅い掘り込みになっている。ピットに関しては、二時期に亘るものも含め合計8基が確認されている。最大のもので径106×84cm、深さ23cmを測る。その他のピットはいずれも小規模で、住居状の掘り込みの後に、掘り込まれた可能性が高く、その性格・機能については不明である。

発掘調査時に竈の痕跡と想定されていた焼土粒の分布は、掘り込みの南壁やや西よりに位置し、その分布する範囲は、径70cm、深さ12cmを測る。

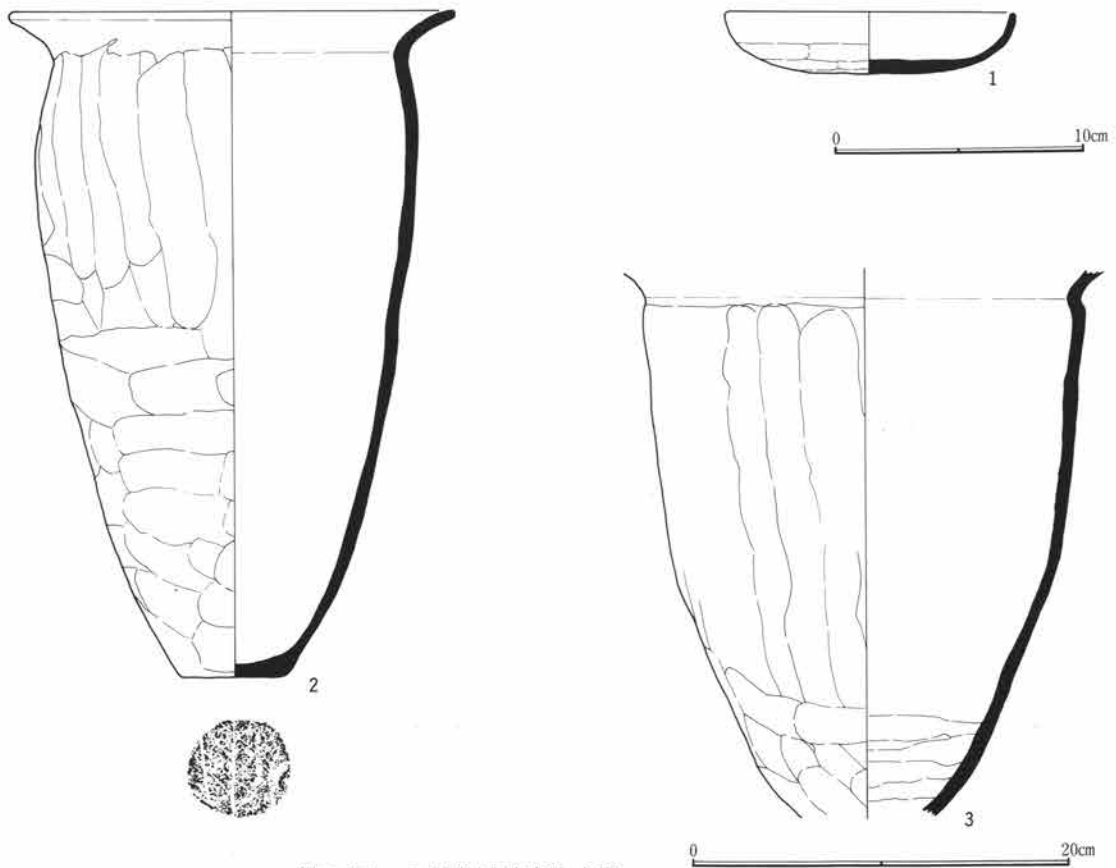
遺物は、極めて少ない。古墳時代後期に属すると思われる土師器甕の小破片が数点認められるが、流れ込みの可能性が高い。床面付近から出土したものは自然礫だけであるが、土器同様に原位置を保っていないものと考えられる。

プラン・遺物・竈等の諸状況から判断すると、全体としては住居跡とする根拠に乏しいと言わざるを得ない。

6. 竪穴住居跡の調査



第115図 6号住居跡



第116図 6号住居跡出土土器

II 神保下條遺跡の調査

(6) 6号住居跡

本住居跡は、やはり上側の台地の西側縁辺部の傾斜面にあり、Af-24・25グリッドに位置する。南方向に前出の4号・5号住居跡が所在するが、その中では最も傾斜の急な位置に占地がなされている。本住居跡も含め、いずれも削平された3号古墳の墳丘の外周ライン上に構築されている。

基本的には地山のロームを掘り込んで構築されていたと思われるが、傾斜の影響や後世の削平等の諸事情により住居跡の周壁は既に流失しており、傾斜に沿って径1cm内外の焼土粒が散布するのみで、残存状況は不良である。特に焼土粒の散布する地点から、竈の煙道部及び燃焼部の一部のみ確認された。規模は現状で、幅64cm・奥行149cm・深さ22cmを測る。竈の主軸方向は、N-133°-Wを示すが、竈の付設される竪穴住居跡としては、極めて例外的な主軸方向であると言える。その理由については、地形に制約を受けた可能性が考えられるが、詳細は不明である。

竈の覆土は4層に分層されているが、3、4層は地山で、本来は2層までである。特に1層は焼土化が著しい。遺物は2層より出土することから、1層は天井部が崩落したものと思われる。

残存する煙道部は、やや段状をなして緩やかに立ち上がりながら突出し、先端に径47cm、深さ15cmの窪みをもつ。開口部としては燃焼部からの段差が少なく、その可能性は低い。燃焼部には天井石と思わ

れる板状の石材が、破損した状態で出土し、右袖の周辺にも石材が遺存することから、本来は石組構造であった可能性があるが、断定はできない。支脚を含むその他の石材については、遺存していない。焼土化は、燃焼部から煙道部にかけての側壁において顕著であったが、火床面の焼土化は流失のためか明瞭ではなかった。

貯蔵穴も竈周辺を中心に精査を試みたが、該当する掘り込みは認められなかった。

遺物の量は少ない。種類も乏しく、土師器の甕類・坏類の破片のみである。それらのうち図化できたのは以下の3点である。

土師器甕2は、横転した状態で出土したが、口縁から底部にかけて半分が欠損していた。胴部から頸部にかけて斜めに粘土が付着し、その粘土より下部に煤が認められた。内部には煤に対応するように汚れが認められた。すくなくとも燃焼部天井材は、粘土を使用していたことが想定される。

土師器甕3は右袖部分から小破片で出土したが、2より丈が低い。その他の土器片については構築材の可能性も想定できるが、判然としない部分が多い。

土師器坏1は、甕2・3より古い古墳時代後期のもので、流れ込みの可能性が高い。

遺物から想定される住居跡の廃絶時期は8世紀後半であると思われる。

6号住居跡出土土器観察表

No	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	土師器 坏	カマド内 +11	口径 11.4 高さ 2.4 底径 丸底	胎 微砂粒を少量混じる 焼 ふつう 色 橙色	外面口縁横ナデ、底面へら削り。内面横ナデ	
2	土師器 甕	カマド内 +2	口径 23.8 高さ 35.0 底径 5.7	胎 砂粒を多量に混じる 焼 良好 色 橙～灰褐色	外面口縁横ナデ、体部上半縦へら削り。体部下半横へら削り。内面横ナデ。	外面体部カマドの粘土付着。2次加熱受けている。
3	土師器 甕	カマド内 +1	口径 — 高さ 28.6 底径 —	胎 砂粒を多量に混じる 焼 良好 色 橙色	外面口縁部横ナデ、体部の下寄り4分の1が斜め横へら削り。それ以外の体部は縦へら削り。内面横ナデ。	

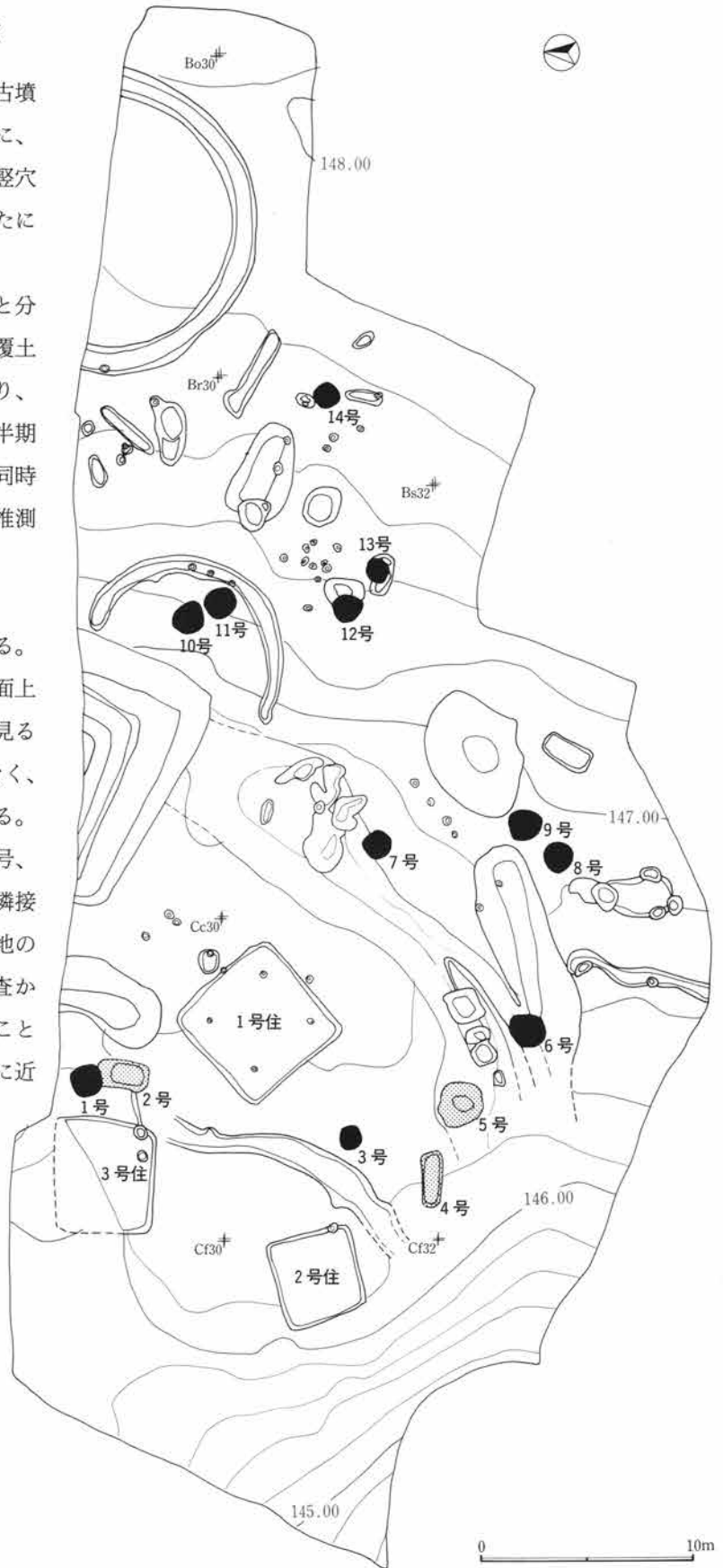
7. 弥生土壌の調査

1・2号古墳の調査終了後に、古墳時代前期の集落跡を調査するために、調査地を拡張したところ、3軒の竪穴住居跡に加えて、様々な遺構が新たに確認された。

それらの遺構にまじって、点々と分布する円形の土壌が注意された。覆土が同質であり、埋没状態も似ており、また、出土する遺物が弥生中期前半期の土器に限られることから、ほぼ同時期に存在した土壌群であることが推測された。

(1) 分布

発見されたのは全部で11基である。東から西へとゆるやかに下がる斜面上に分布している。その分布状態を見ると、1ヶ所に密集しているのではなく、10m前後の適当な間隔をおいている。それらの中に、8・9号、10・11号、12・13号のように、2基の土壌が隣接しているものが注意される。調査地の南側は現状の地形とトレンチ調査から、浅い谷状の地形をなしていることがわかり、土壌分布の南側の限界に近いものと思われる。これに対して、北側には分布域と同様の地形が続いていることから、土壌の分布はさらにのびていくものと思われる。一方、東側は上側の台地面向けて角度を増し、また、西側は1・2号古墳をこえるとすぐに沖積地となるから、両側とも限界に近い。これらのことを考慮して、もう一度分布状況を見てみると、後世の館の堀の西寄りを中心にして環



第117図 弥生・中近世土壌分布図

II 神保下條遺跡の調査

状にめぐっている可能性がある。

(2) 形態的特徴

11基の土壌は、表土除去後の遺構確認作業の過程で一目瞭然に確認することができた。遺存状況のよいものが、次のような共通した特徴を有していたからである。直径130cm前後の正円形に近いものである。覆土の主体が黒色土ないし黒褐色土のしまりのある黒味の強いものである。

調査の結果、次のような特徴が認められた。平面形は正円形に近く、断面形は、壁面が垂直に近く立ち上がり、底面が平底ないし鍋底形を呈するものである。遺存状態の比較的よかった10・11・12号では、直径122～146cmで、深さ72～82cmを測る。これ以外

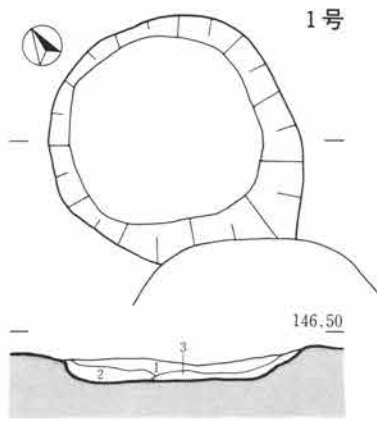
のものも9号を除くと、直径は130cm前後であり、比較的均一な規模であることがわかる。深さについては、4・5号古墳からも明らかなように、付近一帯がかなり削平されていることを考えると、当初は1m以上に及ぶものであったと推定される。

土壌内を埋めている覆土の状況を見ると、その主体は黒色土ないし黒褐色土である。埋没状態は自然埋没であり、人為的に埋め戻されたものは一つも認められなかった。これらの土が、腐蝕作用の結果により、黒味を帯びていることは明らかであり、土壌が機能しなくなってから、徐々に埋没していったものであろう。

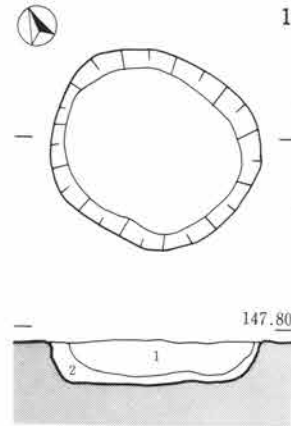
第5表 弥生・中近世土壌一覧表

No	平面形	断面形	縦×横×深さ(cm)	覆土の主体	遺物	備考
1	円	鍋底形	134×130×26	黒褐色土	円礫、土器	大半は削り取られ、底寄りのみ。弥生か？
3	円	鍋底形	104×102×26	暗褐色土	なし	
7	円	鍋底形	127×126×48	黒褐色土	土器片、砥石(牛伏)	形もよくしっかりしている。人為的。弥生か？
8	円	底面が凹凸	132×126×64	黒褐色土	土器片、砥石	弥生か？
9	円	ややフラスコ形	160×152×66	黒褐色土	すり石	形もしっかりしており人為的なものと考えられる。弥生
10	円	平底	146×134×80	黒褐色土	土器小片	弥生
11	円	平底	138×130×82	黒褐色土	土器片	弥生
12	円	平底	122×120×72	黒色土	土器片	弥生
13	円	袋状	132×128×80	黒褐色土	土器	弥生
14	円	鍋底形	116×112×26	黒色土	なし	弥生
15	円	鍋底形	146×130×58	暗褐色土	なし	時期不明、4～6号住居に近接
2	隅丸長方形	鍋底形	230×122×46	しまりのない黒褐色土	須恵器片、弥生片	覆土の状況から中近世以降と考えられる。
4	隅丸長方形	平底	250×142×62	黒褐色土	土器小片	しっかりした形、中近世以降か。
5	円	底面は逆山形	224×216×76	暗褐色土～黒褐色土	自然礫が上面に多数	中近世以降、底面に凹凸が目立つ。
6	円	平底	170×160×108	黒褐色土		弥生
16	隅丸長方形	鍋底形	284×82×36	暗褐色土	土師甕	4～6号住居に近接

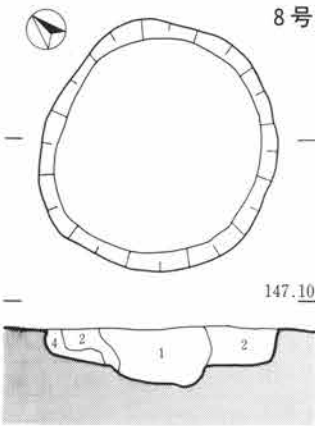
7. 弥生土壌の調査



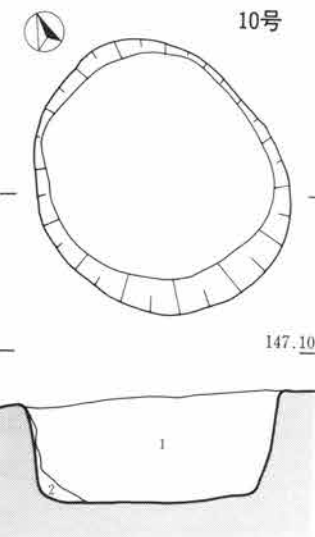
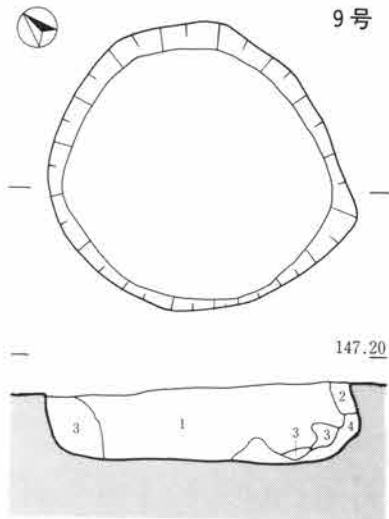
- 1 黒褐色土
0.5mmのローム細粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土
ローム細粒、ロームブロックを多量に3mmの黄色軽石をやや多めに含む。
- 3 暗黄色土
にぶいロームを主体とする、黄色軽石を少量含む



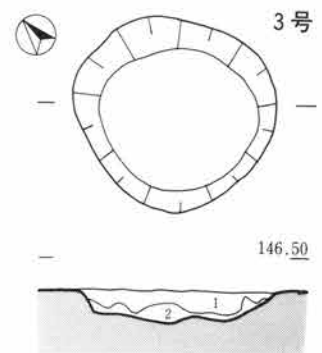
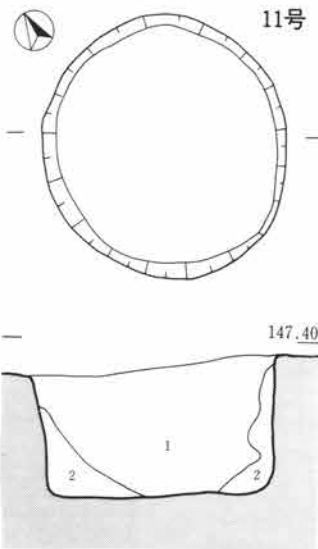
- 1 黒色土
真黒な層、白色軽石粒子を多く含む。
- 2 暗褐色土
多くのローム粒子、ロームブロックを含む。



- 1 黒褐色土 2~3mm白色軽石、0.5~2mmのローム細粒を少量含む。
- 2 褐色土 薄い黄色のロームを主体とし、2~3mmの白色軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームと黒褐色土の混生で、やや粘性あり。
- 4 暗黄色土 ローム主体とし、黒褐色土が混入する。



- 1 黒褐色土 3mmの黄色軽石、1mmのローム細粒を少量含む、桑の根によるカクランを受けている。
- 2 暗黄色土 ロームを主体とし黒褐色土を混入する。

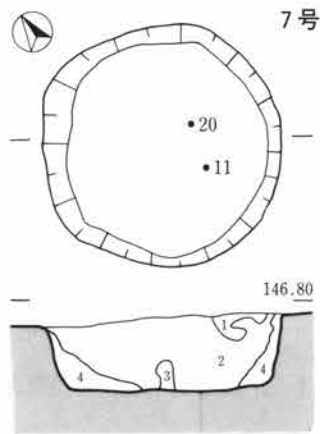


- 1 暗褐色土 ローム細粒、ローム小ブロックを少量と3mmの白色軽石を少量含む。
- 2 暗黄色土 ロームを主体とする。

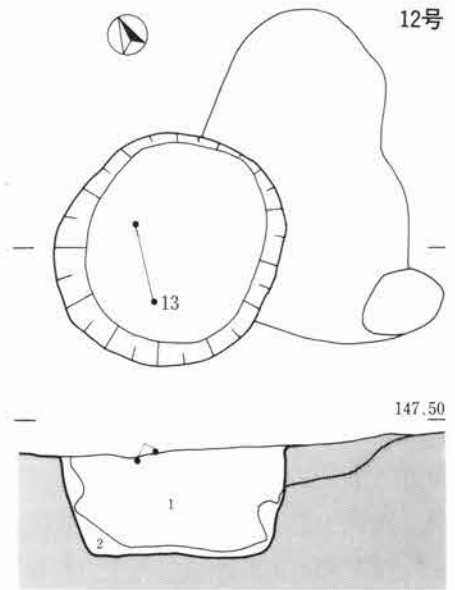
0 1m

第118図 弥生土壌実測図(1)

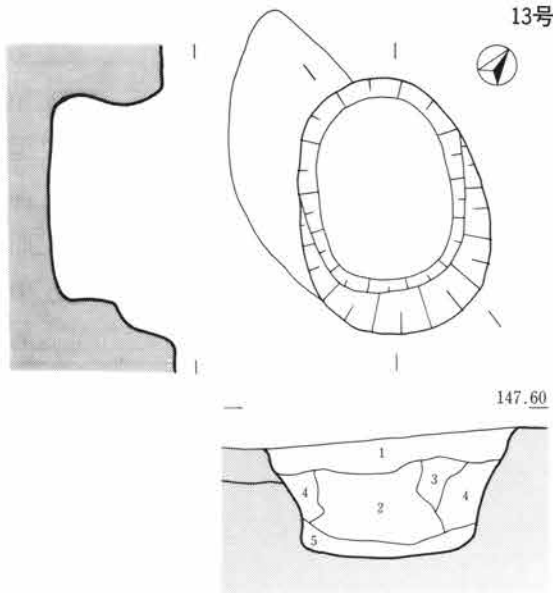
II 神保下條遺跡の調査



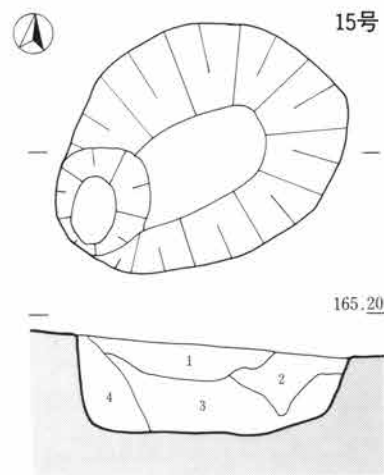
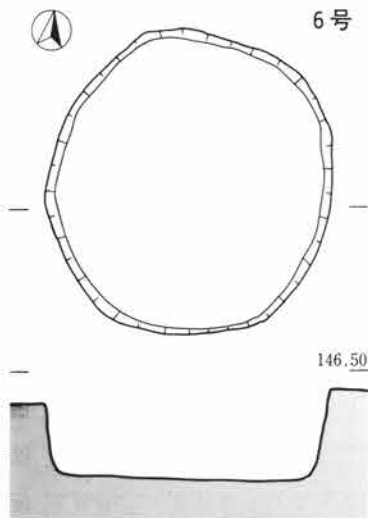
- 7号
- 1 暗灰黄色土 3mmの小石を少量含む。
 - 2 黒褐色土 ローム細粒を少量含む。
 - 3 黄褐色土 ロームを主体とした層やわらかい。
 - 4 暗黄色土 黒褐色土中に2~2mmの不整形のロームブロックを斑に少量含む。



- 12号
- 1 黒色土 真黒な土層、ごく少量のローム粒子を含む。
 - 2 黒褐色土 黒色土層に多くのローム粒子を含む。



- 13号
- 1 黒褐色土 1~2mm程の軽石を念む。
 - 2 黒褐色土 2~5mm程のローム粒を含む
 - 3 暗茶褐色土 1mm以下の軽石を少しローム粒を多く含む。
 - 4 黄褐色土 ローム主体で暗色土を少し含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む。

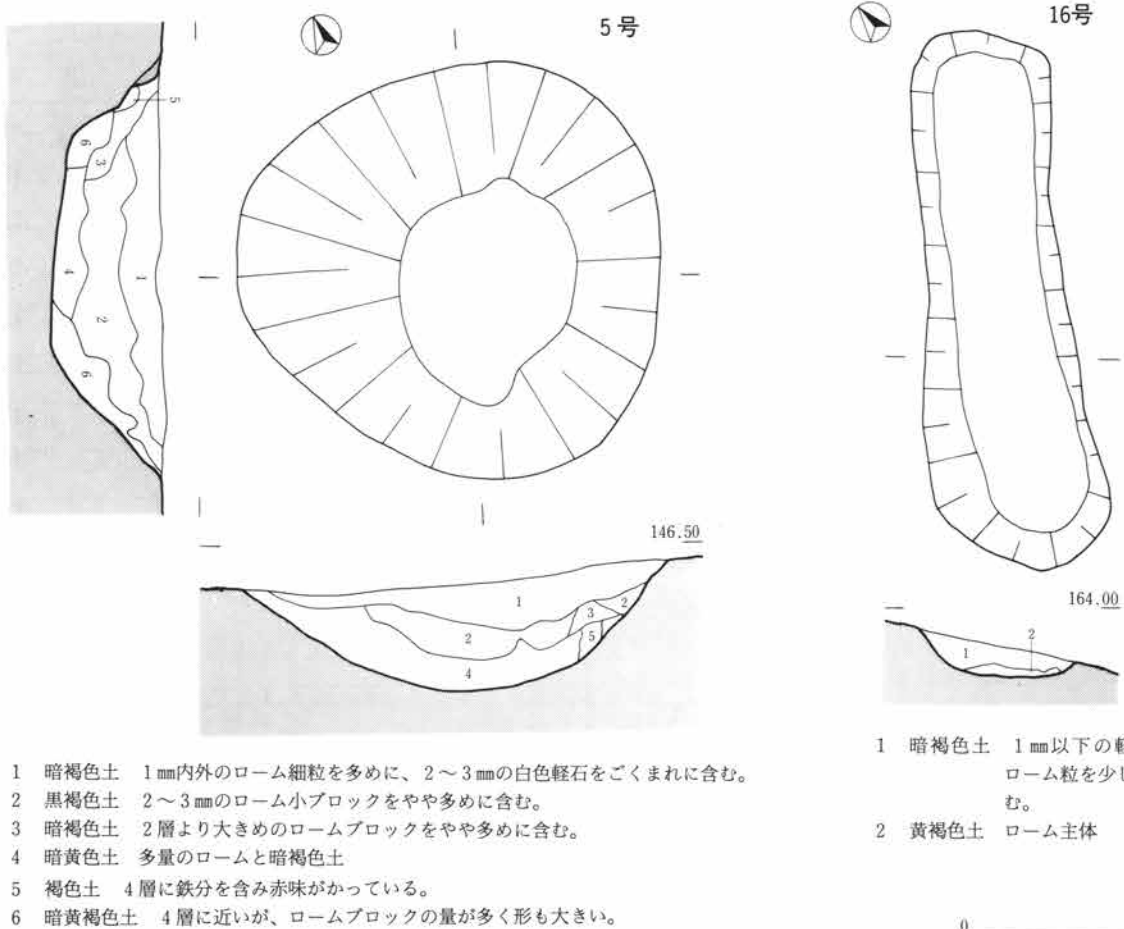
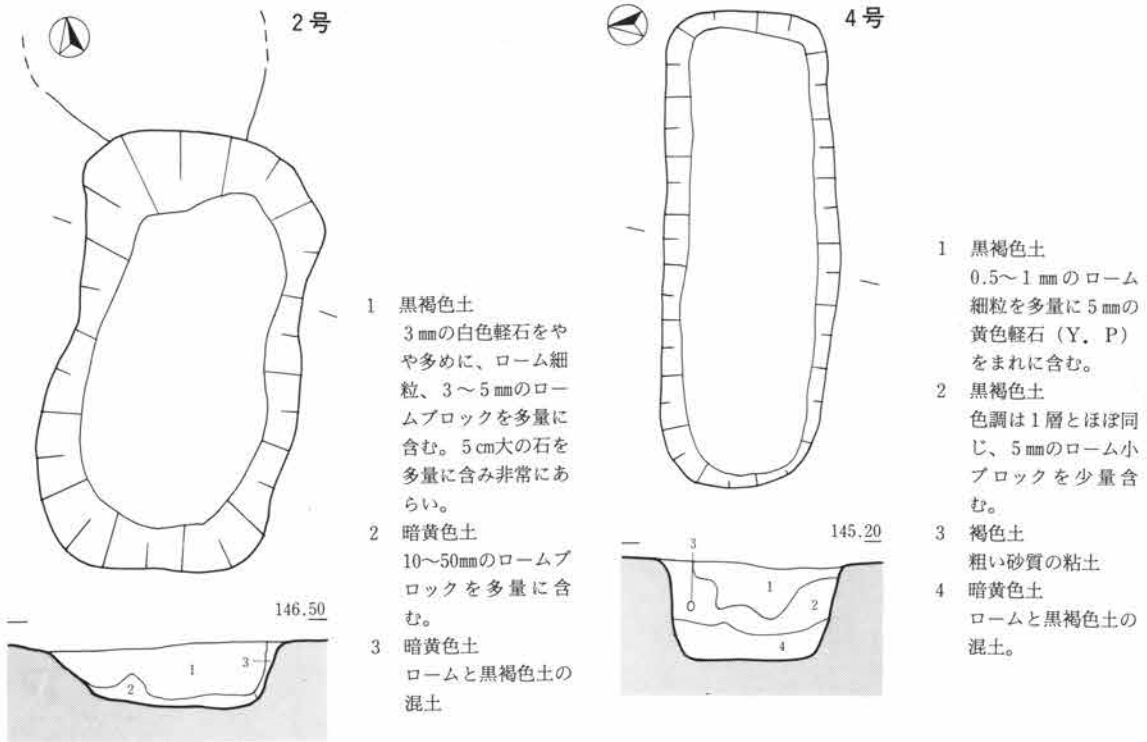


- 6号
- 15号
- 1 暗褐色土 1~2mm程の軽石を含む。
 - 2 暗褐色土 1層よりやや明るい。3~5mm程の粗い軽石を含む。
 - 3 茶褐色土 1mm程の軽石を少し含む。
 - 4 黄褐色土 ローム主体。

0 1m

第119図 弥生土壌実測図(2)

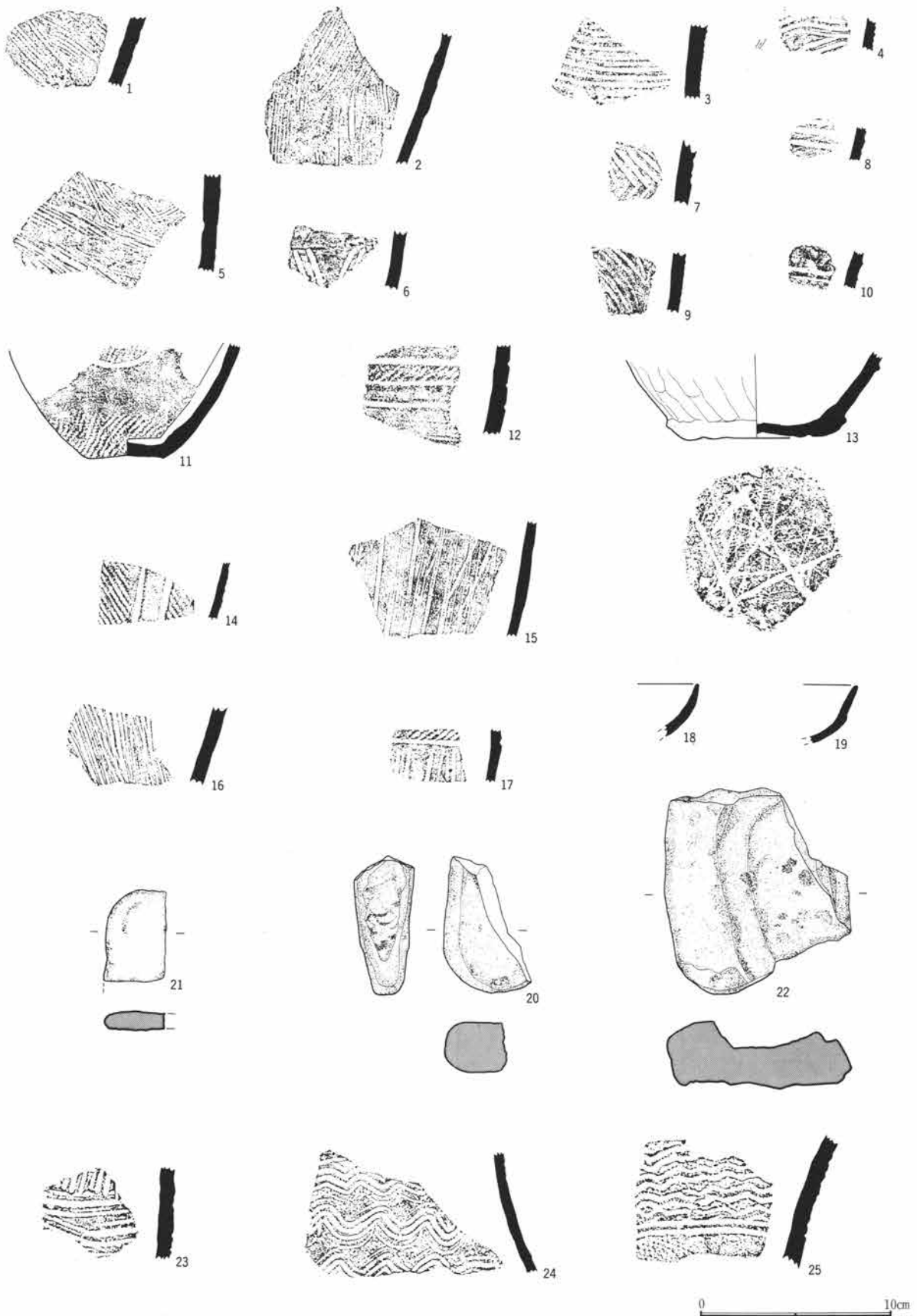
7. 弥生土壌の調査



0 1m

第120図 中近世土壌実測図(3)

II 神保下條遺跡の調査



第121図 弥生土壙等出土遺物

7. 弥生土壌の調査

(3) 遺物の出土状態と特徴

土壌に直接伴うと思われる遺物は1点も認められなかった。このことは、埋没状態が自然埋没を示していることともあわせて、再葬墓のような墓である可能性はほとんどないといってもよからう。

覆土中からは、土器片と石器片が出土しているものが7基認められた。土器片の多くは小破片であり、完形に近いものはまったく認められなかった。いずれも、広義の弥生時代中期前半段階に位置づけられるものであり、土壌がほぼ同一時期に属していることがわかる。遺物の出土していないものについても、形態が類似し、覆土が共通していることから、同じ扱いができればよい。

なお、遺構外から採集された土器片の中にも同時期のものが散見している。

石器はいずれも牛伏砂岩の転石を使用したもので、20・21が砥石、22が石皿様のものである。後者は、縄文期に属する可能性もある。

以上から、これら11基の土壌は、弥生中期前半の同一時期に属する一群であり、貯蔵穴として使用されたものと推定される。大沢川を挟んだ対岸(西岸)の神保植松遺跡、神保富士塚遺跡でも、これらとほぼ同時期の遺構が見つかっており、その関連の中でとらえていくことができよう。

弥生土壌等出土土器観察表

No	器種	出土遺構	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	深鉢 胴下半	1号土壌	器厚 0.6	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	外面 楕斜走痕を残し、煤付着。 内面 ハケ調整後ヘラナデ。	中期前半
2	深鉢 胴下半	1号土壌	器厚 0.6	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	外面 斜位の楕状痕、煤付着。 内面 ハケ調整後ヘラナデ、煤付着。	中期前半
3	壺 胴肩部	1号土壌	器厚 0.8	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 灰黄褐色	外面 横走条痕を残す。 内面 ナデ。	中期前半
4	壺 胴上部	8号土壌	器厚 0.7	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 褐色	外面 ヘラ状工具による沈線文様を施す。 内面 ナデ。	中期前半
5	壺 胴上部	8号土壌	器厚 0.8	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 褐色	外面 楕状工具による横、斜走条痕を施す。 内面 ナデ。	
6	壺 胴中位	8号土壌	器厚 0.6	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 明黄褐色	外面 ヘラ描きの縦走羽状文を施し、横方向の隆帯の剝落痕あり。 内面 ナデ。	中期前半
7	壺 胴上部		器厚 0.6	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 灰黄褐色	外面 ヘラ描きの横走羽状条痕を施す。 内面 ナデ。	中期前半
8	壺 胴中位	8号土壌	器厚 0.6	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 黒褐色	外面 単節のLR後横走のヘラと斜走のヘラ描き沈線が施される。 内面 ナデ。	中期前半
9	壺 胴上半	8号土壌	器厚 0.6	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 暗褐色	外面 斜走の条痕を施し、煤付着。 内面 ナデ。	中期前半

II 神保下條遺跡の調査

No.	器種	出土遺構	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
10	壺	8号土壇	器厚 0.6	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 暗褐色	外面 横位の沈線を施し、その下側は連続押 圧文を施している。 内面 ナデ。	中期前半
11	壺	7号土壇	器厚 0.5	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 鈍い黄褐色	底部縁辺がLR、後沈線、ヘラナデ。	中期前半 須和田系
12	深鉢 胴中位	11号土壇	器厚 0.8	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 褐色～暗褐色	外面 LR 後に横位に沈線を施し、一つおき にナデ消している。下位に横走の擦痕を残す。 内面 ナデ。	中期前半
13	深鉢	12号土壇	器厚 0.7	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 鈍い赤褐色	底部に木葉痕を3葉重ねる。外面櫛状工具に よる調整後ヘラ削り。上寄りに煤付着。 内面には使用痕と思われる細かい剥落あり。	中期前半
14	壺	12号土壇	器厚 0.5	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 橙色	外面 RL 後縦位の沈線を施し、ナデ消して いる。	
15	深鉢 中位部	12号土壇	器厚 0.5	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	外面 櫛縦走文、煤付着。 内面 横ナデ。	中期前半
16	深鉢 胴下部	13号土壇	器厚 0.8	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 黄褐色	外面 縦位の櫛状条痕を施す。 内面 ナデ。	中期前半
17	甕 胴上部	13号土壇	器厚 0.5	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 明褐色	外面 LR 単節後横位の沈線を施し、ヘラ縦 走の条痕を施している。煤付着。 内面 横ナデ。	中期前半
23	壺 胴上部	表採	器厚 0.8	胎 砂粒を混入する 焼 良好 色 鈍い黄橙色	外面 ヘラ描きの充填縦走文の下側に横位、 斜走の条痕文を施す。 内面 ナデ。	
24	甕 頸部	中近世溝 Cc-33グ リッド	器厚 0.5	胎 砂粒を少量含む 焼 良好 色 橙色	外面 反転を意識した櫛描き波状条痕文で3 段に施される。その下側に横位の条痕文を施 す。内面 ナデ。	中期前半
25	深鉢 胴上部	表採	器厚 0.8	胎 砂粒を混入する 焼 ふつう 色 灰褐色	外面 RL 後、竹管状工具による波状文を4 条施し、上下を横位の竹管による沈線で区画 する。内面 ナデ。	

8. 中近世遺構の調査

本遺跡の主要部分をなす調査区の西寄り部分には古墳、集落跡、弥生土壌の分布と重複して中近世に関わる各種の遺構が確認された。遺構の種類としては、館跡、溝(道路状遺構)、土壌、墓である。このことから、この付近一帯が現在のような畑地になったのは、それほど古いことではなく、少なくとも近世以降であったことがわかる。

(1) 館跡

確認されたのは、堀によって囲まれた長方形の区画の南寄り部分であり、残りは調査地外となっている。

堀は、上幅4.4m、下幅0.7mで、深さ1.4mほどである。断面形状を見ると、掘り込み面から90cmぐらいの深さまではゆるやかな傾斜であり、それより下で急角度となっており、葉研状を呈している。堀の長さは、東西に近い方向で、上端で11.6mを測り、その両端から北へ直角に屈曲しているが、少しいったところで、調査地外となってしまう。堀の向きは、正確には東西方向から約20度ずれた南南東から西北西に取っている。この向きは、周辺の微地形の傾斜方向と一致していることから、これに制約された方向決定であったと思われる。ちなみに、北側の調査地外の畑地の区割りの方向は、堀と完全に一致していることから、前者が後者の影響を受けていることが推定される。東西の長さは11.6mであったが、南北方向はこれより長いものであることが推測される。

堀の底面近くから、ロクロ使用の土師質小皿が1点出土しており、館の時期を推定するための唯一の手掛かりとなっている。

(2) 溝

館跡の堀の南東隅から出て南西方向に向かう溝状を呈する遺構が確認されている。6・7号の弥生土壌を切っている。覆土が堀内のものに近いことや、堀との直接的な関係を窺わせる位置関係から、両者が一体のものである可能性が高い。

溝の幅は、上端で3～6mであり、深さは10cm前後と浅い。それゆえ、館の堀と直接連結したものでないことは明らかである。溝内の底面には、ところどころに円礫を敷き詰めたような部分が認められる。

このようなことから想起されるのは、本遺構が簡易な道路敷ではなかったかということである。そして、雨時にぬかりやすくなってしまふ部分に礫を敷き詰めたものと推測される。

(3) 土壌

2・4・5号の土壌は、しまりがなく、粒子のあらい覆土の状況から、古い段階のものでないことは明らかである。

これらのうち、5号土壌は前述の溝と重複しており、時期的に後出するものと思われる。直径約2mの円形で、断面は山形を呈している。覆土は自然埋没であり、その上面には円礫が全体に認められる。

2・4号土壌は平面長方形であり、覆土は自然埋没である。このうち4号土壌は形もしっかりしているが、2号はいびつである。

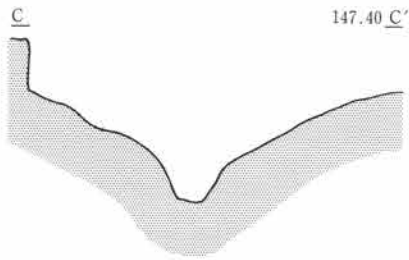
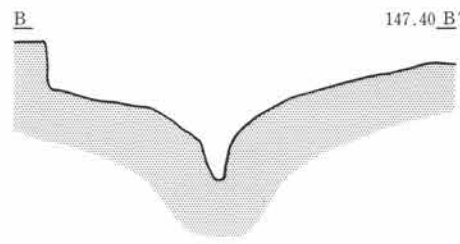
3基とも、直接伴う遺物は認められない。

(4) 墓

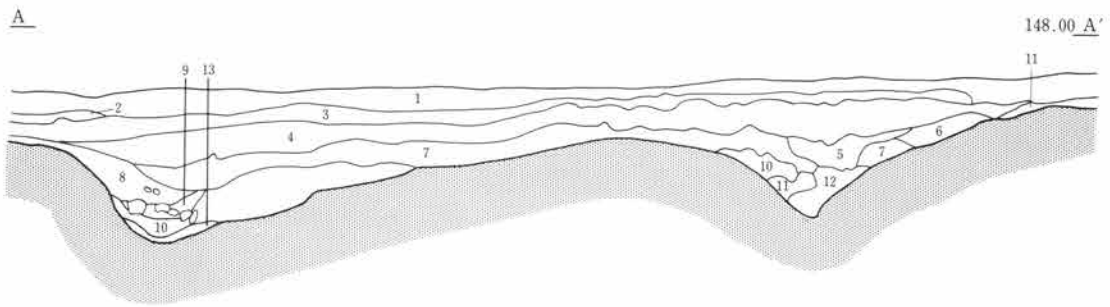
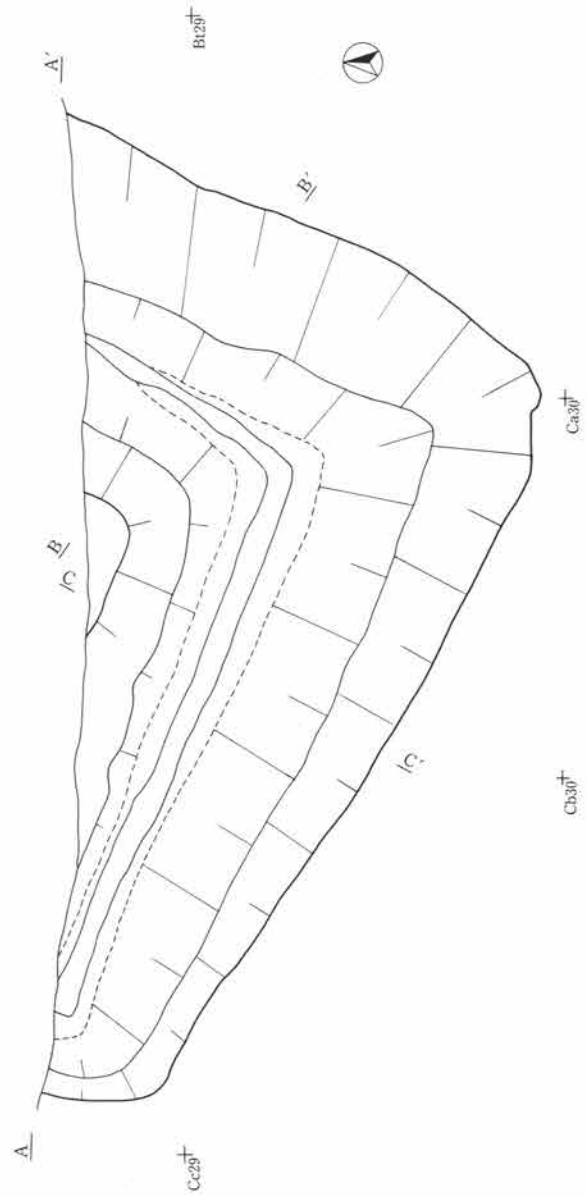
2号古墳の西約4mの墳丘裾部にあたる位置から陶器の小皿が2枚出土した。これらは、2枚が重ねられて底面を上に向けた状態で出土しており、原位置からほとんど動いていないものと思われた。この小皿と同じ位置から、人骨の歯が少量出土しており、これらが墓に伴うものであったことが推定された。その付近を精査したが掘り込みのようなものは認められなかった。恐らく、直葬の土壌墓の底面がかろうじて遺存していたのであろう。

後述するように、これらの小皿は美濃系の製品であり、その特徴から江戸前期を中心とした時期の特徴を備えている。土壌墓の時期もこれに近い時期であったと推定される。ところで、1・2号古墳の場所は、調査前には下條地区の3軒の墓地として利用されており、調査直前に改葬をすませたところであった。この墓地に建てられていた墓石銘には、江戸後期以降の銘を有するものもあり、近世にはす

II 神保下條遺跡の調査

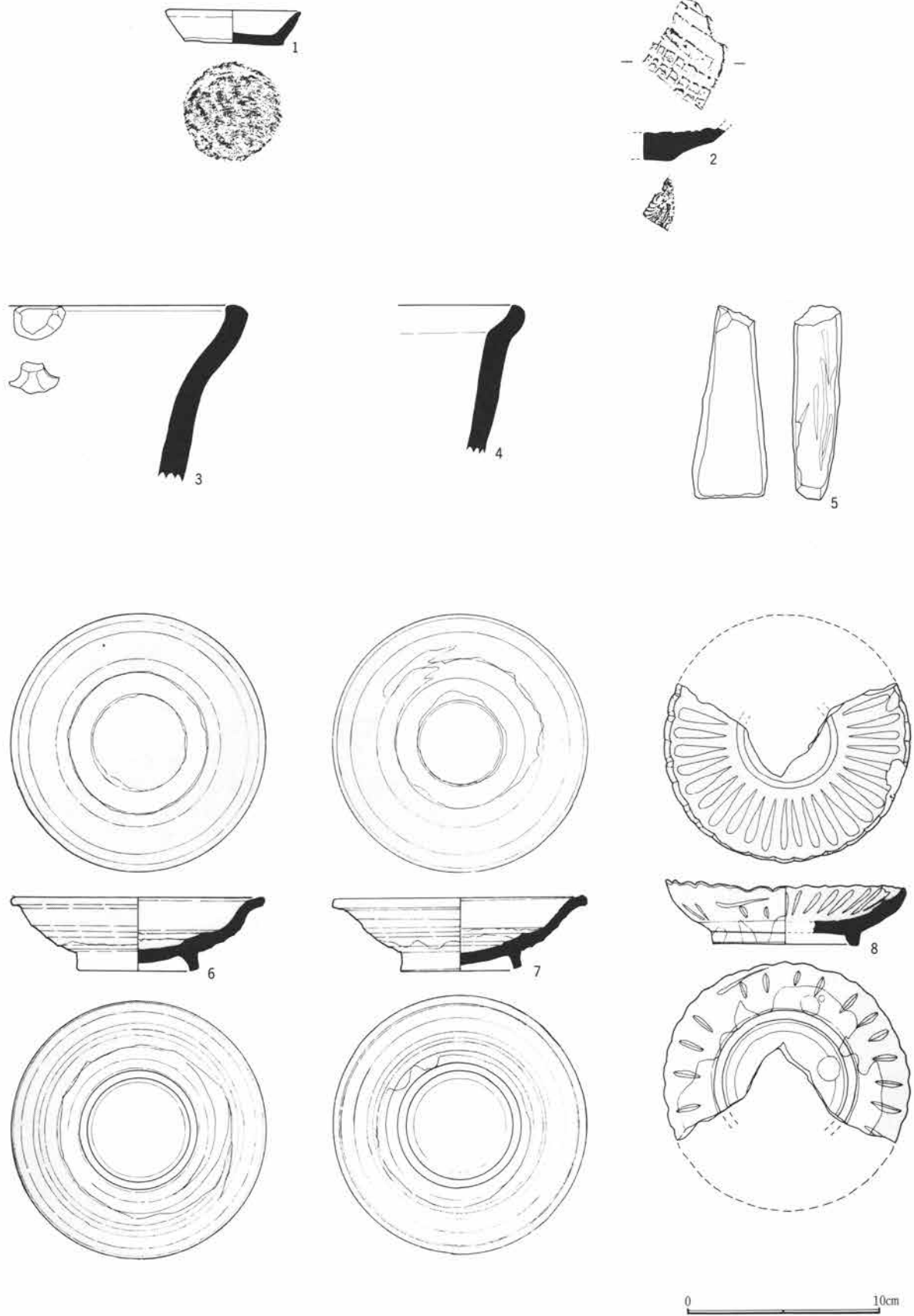


- 1 黒褐色土 3mm内外の白色軽石を多量に含む。(耕作土)
- 2 褐色土 3mm内外の白色軽石を主体とする層
- 3 黒褐色土 1層よりやや少ない白色軽石を含む。
- 4 黒褐色土 3mm内外の白色軽石、3mmのローム小ブロックを少量、ローム粒を含む。
- 5 暗褐色土 ローム細粒を多量に、3mmのローム小ブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム細粒を多量に、10mmのロームブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土 3~10mmのロームブロックをやや多めに含む。
- 8 黒褐色土 7層とほぼ同じ、色調は暗い。
- 9 黄褐色土 少量の鉄分、砂の沈殿あり、3~10mmのローム小ブロックを少量含む。しまりない。
- 10 黄褐色土 5~10mmのロームブロックを多量に含む、色調は最も明るい。
- 11 暗褐色土 ロームを主体とする層
- 12 暗褐色土 5mmのローム小ブロックを多めに含む、10mmの炭化物をまれに含む。
- 13 褐色土 鉄分の沈殿を少量含む、灰白色粘土をまれに含む。



第122図 中近世館跡

8. 中近世遺構の調査



第123図 中近世遺構出土遺物

II 神保下條遺跡の調査

に墓地として利用されていたものと思われる。今回確認されたものは、その先駆けをなすもののひとつであった可能性が考えられよう。

(5) 出土遺物

これまで報告してきた諸遺構に伴う遺物は少ない。館跡と推定された堀内からもわずかに1点の土師質土器が出土しただけである。このことは、この地点が恒常的な生活空間としてはあまり機能していなかったことを物語っているものと思われる。

この周辺一帯から10枚の古銭が出土しているが、いずれも渡来銭である。一般的に遺跡での古銭の出土は墓に伴う場合が多い。これら10枚のうちの7枚は1・2号古墳の周辺から採集されたものであり、

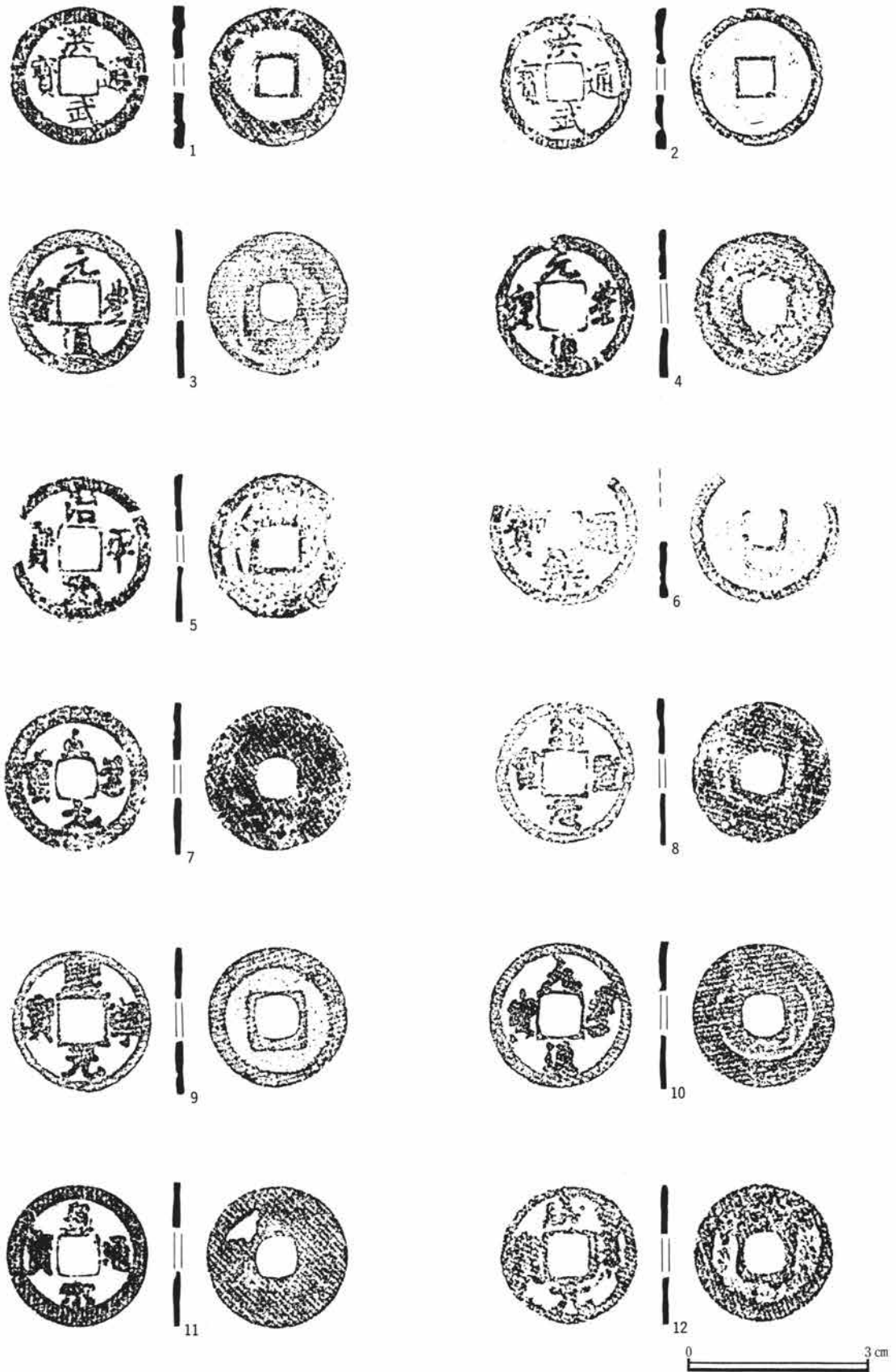
墓に伴うものであった可能性が高い。また、溝（道路）の底面から出土しているものが4枚あり、その時期を考える上での一つの手掛かりとなろう。

8は6・7と同様に墓に伴うものであったと推定される。これらはいずれも美濃系の製品であり、江戸時代前半期（17c）に位置づけられるという。これが、付近の一連の遺構に伴う遺物の中で下限を示すものであろう。

館跡とこれに付随する道路跡は、この17世紀の段階よりは一段階古く、戦国末期を中心とした時期に位置づけられよう。堀内から出土した土師質小皿と溝から出土した渡来銭を主な根拠としている。

中近世遺構出土遺物観察表

No	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	土師質土器 小皿	堀	口径 7.0 高さ 1.6 底径 5.0	胎 砂粒、赤色粒混じる 焼 良好 色 橙色	ロクロ成形、内外とも横ナデ、底部糸切り後ヘラ調整。	
2	陶器 灰釉おろし皿	堀	口径 — 高さ 1.5 底径 —	胎 緻密 焼 極めて良好 色 灰白色	内外とも横ナデ、内面に格子状に線刻しておろし面を作る。外面底部糸切り未調整。	
3	内耳鍋	1・2号古墳 周辺表採	口径 29.6 高さ 8.7 底径 —	胎 砂粒を混じる 焼 ふ つつ、瓦質をおびる 色 灰色	ロクロ成形。内外とも横ナデ、外面全体に煤付着。	
4	土鍋	1・2号古墳 周辺表採	口径 28.4 高さ 7.4 底径 —	胎 緻密 焼 良好 色 灰色	内外とも横ナデ。	
5	砂岩製 砥石	堀	縦 9.9 横 4.4 器厚 2.3		四面とも使い切っており、すり減りが著しい。側面に溝状の擦痕がある。	
6	陶器 皿	中近世墓	口径 13.3 高さ 3.8 底径 6.3	胎 緻密、長石粒を含む 焼 良好 色 釉薬は乳灰黄色、地は淡黄褐色	内外面とも横ナデ後、外面下半回転ヘラ削り。釉薬を付掛け後、内面下半寄りをヘラ削りして、焼成時の重ね部分について釉薬を削り取っている。高台は付け高台。	17C 美濃 長珪石釉、輪ハゲ皿
7	陶器 皿	中近世墓	口径 13.3 高さ 3.7 底径 6.3	胎 緻密、長石粒を含む 焼 良好 色 釉薬は乳灰黄色、地は淡黄褐色	内外面とも横ナデ後、外面下半回転ヘラ削り。釉薬を付掛け後、内面下半寄りをヘラ削りして、焼成時の重ね部分について釉薬を削り取っている。高台は付け高台。	17C 美濃 長珪石釉、輪ハゲ皿
8	陶器 菊皿	中近世墓	口径 12.4 高さ 3.0 底径 7.3	胎 極めて緻密、白色粒(長石?)を含む 焼 良好 色 胎土 灰色、器面オリーブ灰色	内外とも横ナデ後、底部寄りヘラ削り、付高台。口唇部を削り込んで花卉状に作り、内外面に放射状に刻線を施している。釉は付掛けである。	17C 瀬戸美濃



第124図 神保下條遺跡出土古銭

II 神保下條遺跡の調査

第6表 神保下條遺跡出土古銭一覧表 単 (cm・g)

番号	出土遺構	たて	よこ	孔径	厚み	重量	銭貨銘
1	中近世溝	2.31	2.33	0.58	0.15	2.8	洪武通寶
2	中近世溝	2.29	2.26	0.56	0.15	2.1	洪武通寶
3	Cb-30グリッド	2.42	2.43	0.59	0.1	2.5	元豊通寶
4	中近世溝	2.42	2.40	0.77	0.1	1.8	元豊通寶
5	中近世溝	2.35	2.35	0.65	0.1	1.9	治平元寶
6	1号古墳周辺	2.20	2.50	0.45	0.1	1.3	楽通寶
7	1・2号古墳周辺	2.47	2.45	0.62	0.1	2.6	
8	1・2号古墳周辺	2.38	2.38	0.66	0.1	2.3	紹熙元寶
9	1・2号古墳周辺	2.38	2.38	0.70	0.1	2.9	熙寧元寶
10	1号古墳周辺	2.42	2.42	0.67	0.1	3.2	元通寶
11	1号古墳周辺	2.40	2.39	0.65	0.1	2.8	通寶
12	1号古墳周辺	2.25	2.34	0.65	0.1	3.0	咸元寶

9. A軽石下の水田・畠跡の調査

前年度に実施された試掘調査により、台地の裾部から沖積地に面する接点の付近に、幅約10mで長さ45mほどにわたって、南北に帯状をなして天明3年(1783)噴火の浅間山A軽石の厚い広がり確認された。付近の地形と従来の県内各地での調査例から考えて、この軽石層の下に水田、畠等の生産遺構の存在が十分予測された。

調査の最初の段階で一部について軽石を最下部まで除去したところ、良好な水田面と思われる部分が約1mほど下で確認された。ところで、調査地付近は、東側の台地から下りてくる谷筋が沖積地へ出る部分にあっているため、多量の自然水が遺跡地内に流れ込んできた。一方、低地部分にあたる西側は先行工事が進められ一種のダムのような状態になってしまい、水の扱いに苦慮した。そこで、遺構部分の西側に沿ってやむを得ず排水のための溝を深く掘って調査にあたることとした。

(1) 水田跡

東から西へと下がる傾斜面に2段に造られた2枚の水田跡を確認した。2枚の水田は南北に隣合わせにあり、両者の東側は一段高い平坦面となっており、後述する畠地部分であった。

水田面は南側の方が北側より約35cm高く、さらにこの南側の面より畠地面の方が約40cm高かった。2枚の水田ともその東側に沿って水を引き入れるための幅20~40cmの溝が仕切られていた。この溝へ導かれる水は東側の谷からの自然水を利用していただけと推定される。これにあたると思われる溝が畠跡を東西に横断して、その先で南と北の二方向に分岐し、南の溝が上段の水田面に取り付き、北の溝が下段の水田面に取り付く(推定)ことがわかった。水路から水田に直接水を取り入れないで、まわり道をさせて引き入れている状況が認められたが、低温の自然水が直接水田面に入ることを避けるための方法で、勢多郡新里村峯岸遺跡の調査で注意されるようになった(能登健氏教示)。当地域では、これを「冷え堀」と呼称してきている。

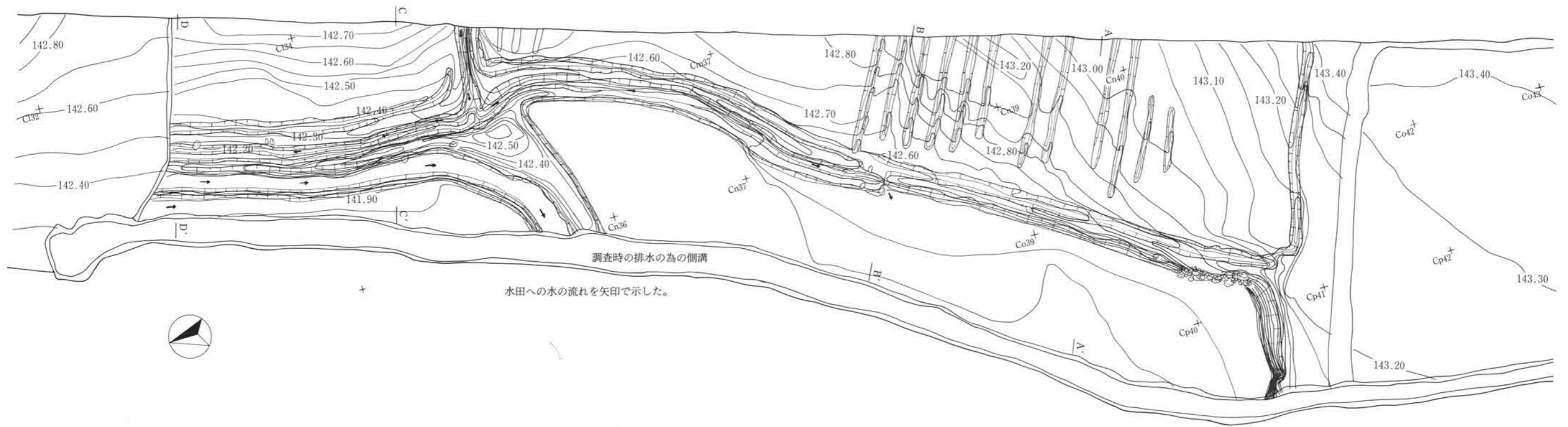
水田面の上には1m以上の軽石層が堆積していたが、直接おおっている一次堆積層よりも流れ込み、かき寄せ等による二次堆積層の方が厚く認められた。

(2) 畠跡

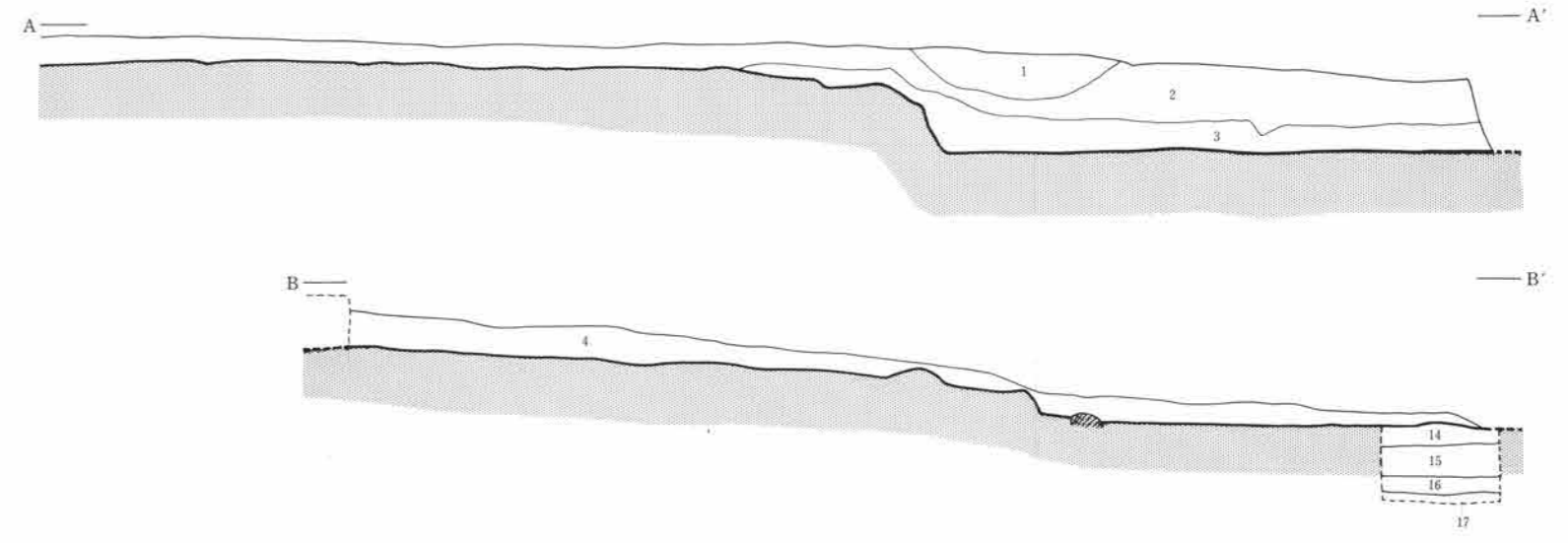
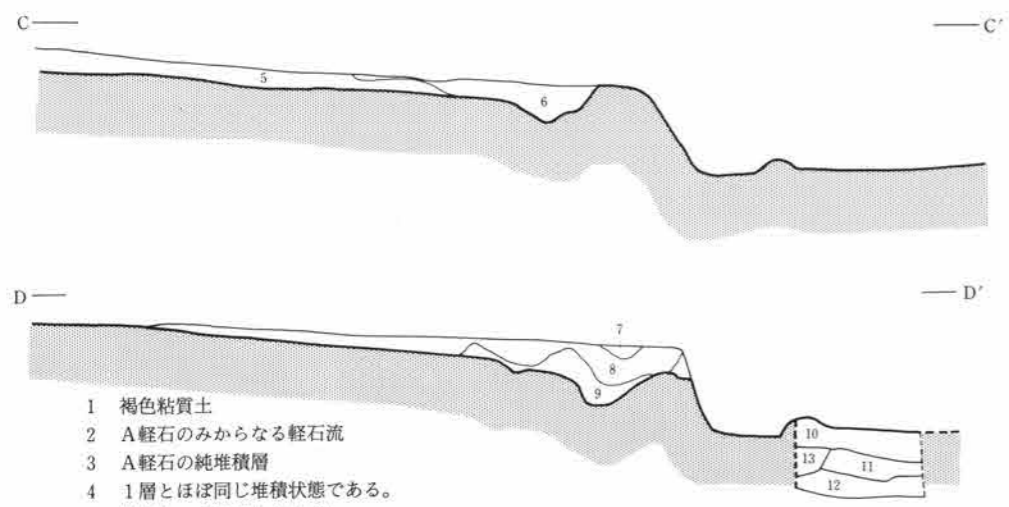
水田面の東側の一段高い面から畠跡が確認された。水田跡と同じくA軽石によりおおわれていたが、その厚さがあまりないため、遺存状態は水田ほどではなかった。前述の水路によって南北に二分されており、さらにその周囲に沿って幅約40cmの区画溝がめぐらされている。

畠地からは部分的に畝が確認された。本来はその全面に及んでいたものと思われるが、後世の削平により一部残ったものと思われる。その向きは東西方向であり、南北に中心間で約80cmの間隔をおいて平行していた。

なお、水田、畠に伴う遺物は認められなかった。



調査時の排水の為の側溝
水田への水の流れを矢印で示した。



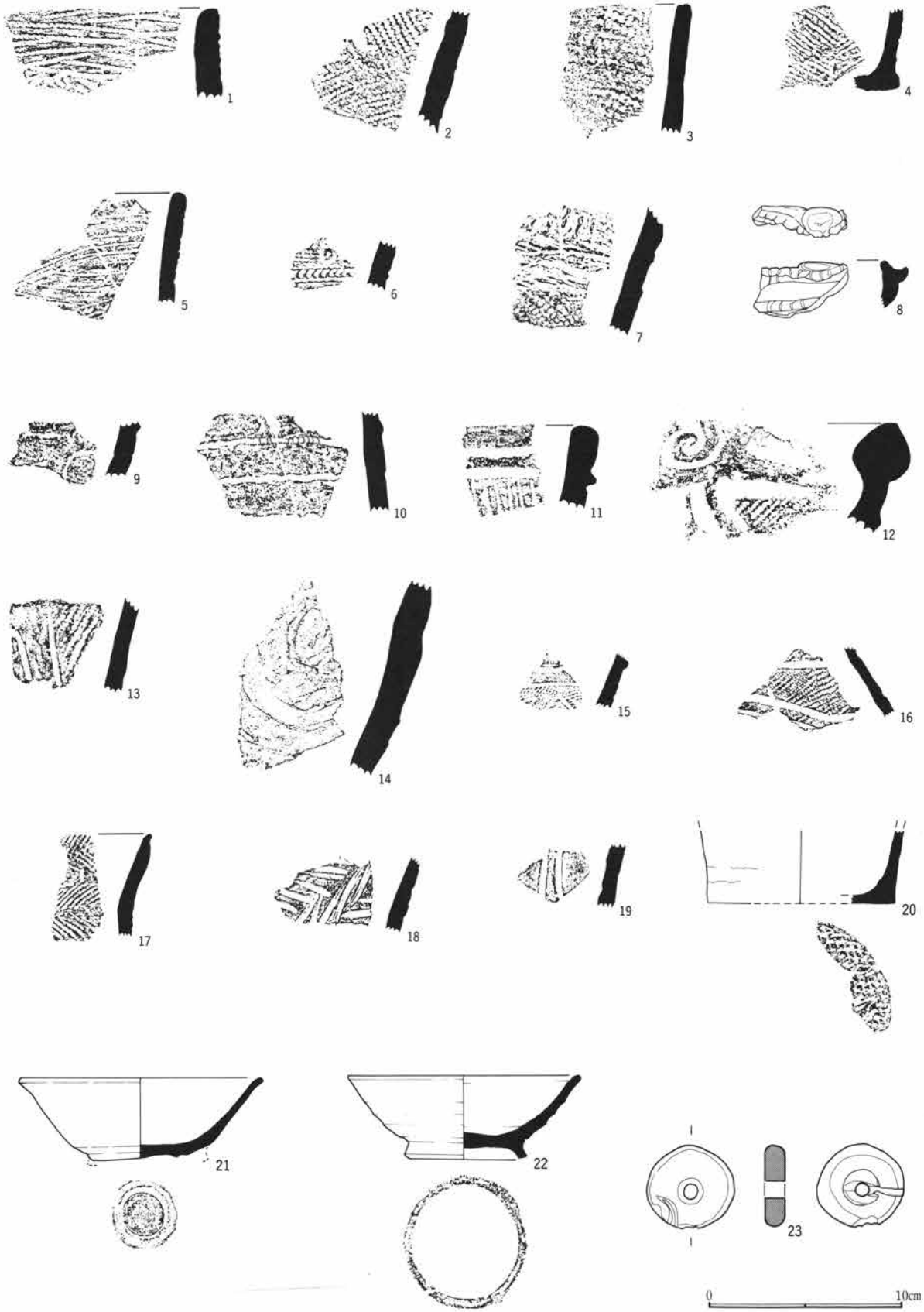
- 1 褐色粘質土
- 2 A軽石のみからなる軽石流
- 3 A軽石の純堆積層
- 4 1層とほぼ同じ堆積状態である。
- 5 褐色土 A軽石を少し含む。
- 6 流れ込みのA軽石を主とし砂を多く含む。
- 7 A軽石のみ。(2次堆積)
- 8 A軽石を主とし砂を多く含む。(2次堆積)
- 9 A軽石の純堆積
- 10 水田土壌
- 11 青味がかつた暗褐色シルト
- 12 11層と同質でさらに砂質をおびる。
- 13 11層と同質だが鉄分の凝集が見られる。
- 14 茶褐色粘質土 水田土壌、鉄分の凝集が目立つ。
- 15 青味がかつた黒褐色シルト質土 砂質が強い。
- 16 暗褐色粘質土
- 17 黒褐色粘質土

レベルは144.60



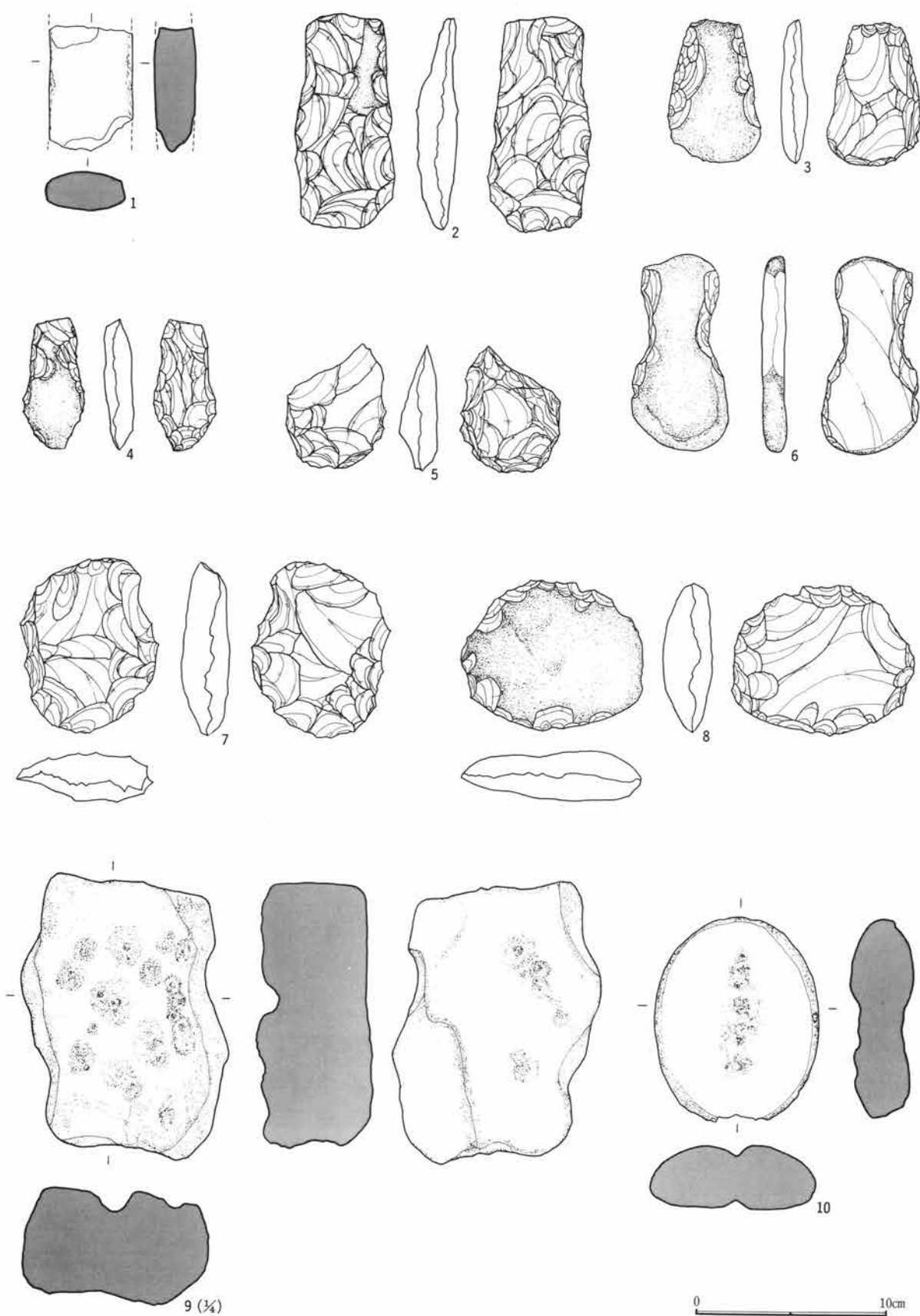
第125図 A軽石下水田畠跡全体図及び断面図

9. A軽石層下の田畠跡の調査



第126図 遺構外出土土器・紡錘車

II 神保下條遺跡の調査



第127図 遺構外出土縄文石器

9. A 軽石層下の田畠跡の調査

遺構外出土土器観察表

No	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
1	深鉢 口縁部	遺構外	器厚 1.3	胎 繊維多く含む 焼 良好 色 黄褐色	縄文原体の側面圧痕。口唇部が角頭状を呈する。	花積下層式
2	深鉢 胴部	遺構外	器厚 1.1	胎 繊維多く含む 焼 やや不良 色 橙色	原体 RL の単節斜縄文と原体 LR の単節斜縄文を羽状に施す。	黒浜式
3	深鉢 口縁部	遺構外	器厚 0.9	胎 繊維多く含む 焼 やや不良 色 黒褐色	原体 RL の単節斜縄文を施す。内面は丁寧に磨かれている。	黒浜式
4	深鉢 底部	遺構外	器厚 0.8	胎 石英少し含む、パミス 少し含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	原体 R の無節と原体 L の無節の斜縄文を羽状に施す。底部が張り出す。	諸磯 a～b 式
5	深鉢 口縁部	遺構外	器厚 0.8	胎 石英少し含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	半截竹管状工具により文様を描出する。口縁部に突起をもつ。内面は丁寧に磨かれている。	諸磯 a～b 式
6	深鉢 胴部	遺構外	器厚 0.9	胎 石英少し含む 焼 良好 色 鈍い褐色	施文に原体 RL の単節斜縄文を施した後、円形刺突。半截竹管状工具による爪形文を施す。	諸磯 a～b 式
7	深鉢 胴部	遺構外	器厚 1.0	胎 片岩少し含む、石英少 し含む 焼 良好 色 明赤褐色	施文に原体 RL の単節斜縄文。浮線文上を篋状工具による刻みを施す。	諸磯 b 式
8	深鉢 口縁部	遺構外	器厚 0.6	胎 パミス少し含む 焼 良好 色 赤褐色	無文地に結節浮線文。口唇部上面に円形の貼付文。丁寧に磨かれている。	十三菩提式併行付文。丁寧に磨かれている。
9	深鉢 胴部	遺構外	器厚 0.8	胎 石英多く含む 焼 良好 色 灰褐色	棒状工具による結節沈線で文様を描出する。	阿玉台 I b 式
10	深鉢 胴部	遺構外	器厚 0.9	胎 石英と金雲母を多く含 む 焼 良好 色 赤褐色	断面三角形の隆帯を貼付。棒状工具による波状沈線と結節沈線を施す。	阿玉台 I b 式
12	深鉢 口縁部	遺構外	器厚 1.2	胎 雲母多く含む 焼 良好 色 明赤褐色	口縁部に1条の隆帯を巡らし、隆帯に沿って幅広の沈線を施す。篋状工具による縦位の沈線。	勝坂式
13	深鉢 胴部	遺構外	器厚 0.8	胎 礫少し含む 焼 良好 色 鈍い橙色	原体 RL の単節斜縄文を施す。棒状工具による沈線間は磨消部である。	加曾利 E 3 式
14	深鉢 胴部	遺構外	器厚 1.5	胎 石英少し含む、砂多く 含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	微隆起による渦巻文。	加曾利 E 4 式

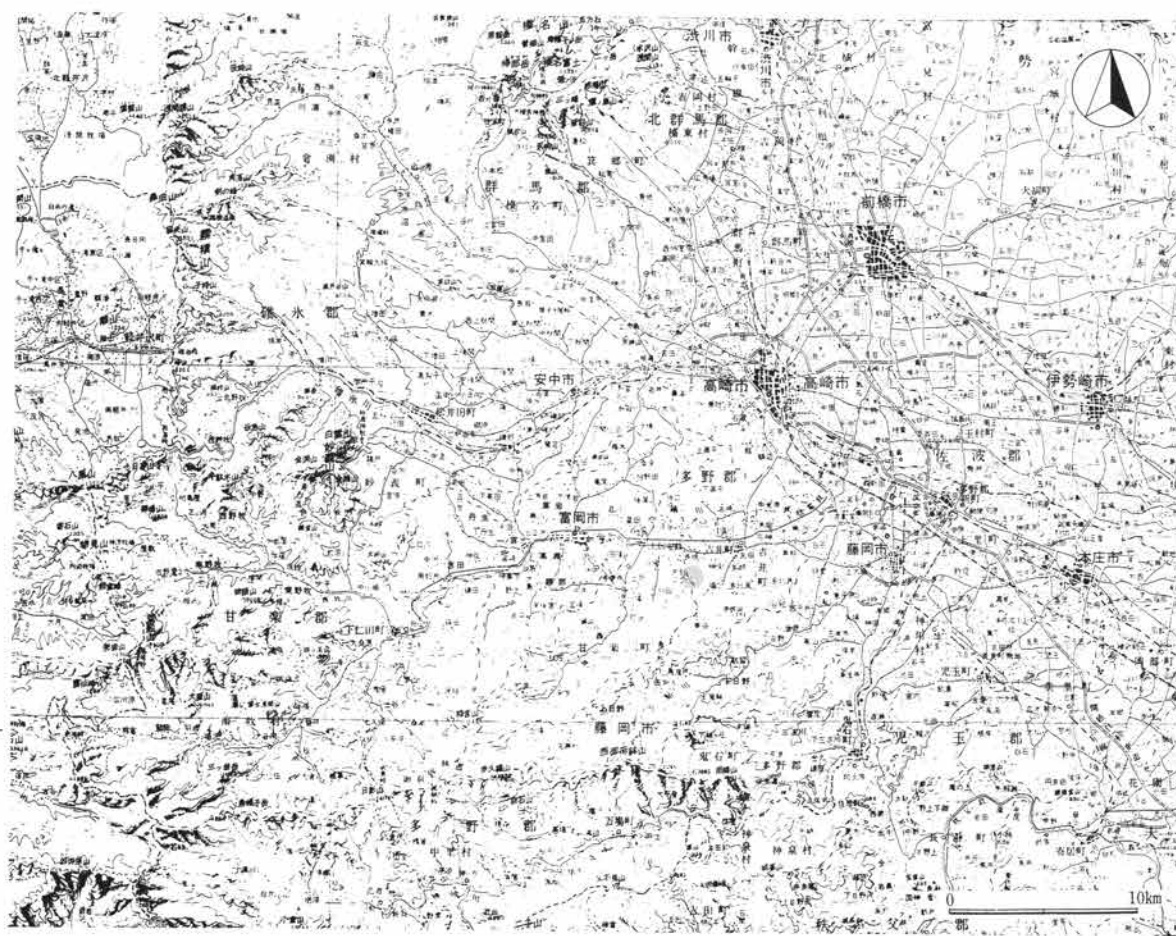
II 神保下條遺跡の調査

No	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
15	深鉢 胴部	遺構外	器厚 0.6	胎 礫少し含む 焼 良好 色 鈍い黄褐色	棒状工具による文様を描出したのち、原体 LR の単節斜縄文を充填する。8 の字状の貼付文が一部残存する。	堀之内II式
16	壺？ 胴部	遺構外	器厚 0.5	胎 礫少し含む 焼 良好 色 暗褐色	原体 LR の単節斜縄文を施したのち棒状工具による幅広の沈線で文様を描出し、沈線間を磨消す。	弥生時代中期か
17	壺？ 胴部	遺構外	器厚 0.7	胎 礫少し含む 焼 良好 色 褐色	口唇部が肥厚する。原体 LR の単節斜縄文と原体 RL の単節斜縄文を羽状に施す。	弥生時代中期か
18	甕？ 胴部	遺構外	器厚 0.8	胎 バミス少し含む 焼 良好 色 褐色	棒状工具により、矢羽根状の文様を描出する。	弥生時代中期か
19	甕？ 胴部	遺構外	器厚 0.8	胎 砂少し含む 焼 良好 色 鈍い褐色	棒状工具により文様を描出する。内面に輪積痕が残る。	弥生時代中期か
20	深鉢 底部	中近世溝	器厚 0.5 底径 9.6	胎 砂多く含む 焼 良好 色 褐色	底部に網代痕。内外面は丁寧に磨かれている。	堀之内II式
21	須恵器 高台付埴	表採	口径 12.7 高さ 4.7 底径 6.2	胎 砂粒を少量混じる 焼 ふつう 色 鈍い黄褐色	内外面とも横ナデ。底部糸切り未調整。高台取付後周辺部横ナデ。	平安時代
22	須恵器 高台付埴	表採	口径 12.2 高さ 4.3 底径 6.4	胎 砂粒を少量混じる 焼 ふつう 色 黒褐色～褐色	内外面ともナデ。底部は回転糸切り、その後高台を付け、周辺部横ナデ。内面黒色仕上げ。	平安時代
23	滑石製 紡錘車	1・2号古墳 周辺	径 4.2 厚 1.0 孔径 0.7 重量 32.1g	色 灰色	側面は正確な円をなさず、直線の連続により円に近い形状している。痕跡から砥石により成形している事がわかる。中心の小孔の周辺の軸に装着した際の痕跡を残す。	平安期を中心とした時期のものと思われる

遺構外出土石器観察表

No	器種	出土位置	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	磨製石斧	遺構外	熱変成岩	11.0	5.3	2.2	135	破損品
2	打製石斧	遺構外	熱変成岩	7.3	4.8	1.4	55	短冊形を呈する
3	打製石斧	遺構外	熱変成岩	6.7	3.3	1.5	30	表面に礫面を残す
4	打製石斧	遺構外	熱変成岩	6.4	5.6	2.0	55	表面に礫面を残す
5	石製磨石	遺構外	熱変成岩	6.3	4.4	2.0	122	短冊形を呈する。1/2欠損
6	異形石器	遺構外	結晶片岩	9.0	7.2	2.6	184	両側の中心寄りを調整している
7	削器	遺構外	熱変成岩	7.7	9.4	2.6	210	縁辺すべて使用面
8	礫器	遺構外	熱変成岩	10.5	8.4	3.3	350	表面に礫面を残す
9	多孔石	遺構外	牛伏砂岩	19.5	14.5	8.2	2,500	表裏とも多孔石である
10	凹石	遺構外	安山岩	10.0	5.1	1.3	95	表裏とも3個の凹みあり

天引口明塚遺跡



第128図 天引口明塚遺跡位置図

III 天引口明塚遺跡の調査

1. 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の概要

本遺跡は、甘楽郡甘楽町天引字口明塚に所在する。調査前の付近一帯は低平な畑地であったが、これは、先年に実施された土地改良事業の結果であった。調査の前年にあたる平成元年2月、当遺跡の周辺について、遺構の存在の有無と内容を具体的に把握するため試掘調査が実施された。その結果、畑地の下から、1基の小型円墳（2号古墳）の周堀部分の一部が確認されたが、他には顕著な遺構は認められなかった。

この試掘結果をもとにして、平成2年7月から8月にかけて本調査を実施したところ、小型円墳2基と中近世の竪穴式遺構1基が発見された。

円墳2基は、東西にほぼ並列していた。このうち、東側に位置し、ほぼ全掘した方を1号古墳とし、西側に位置し、南側半分を調査した方を2号古墳とした。両墳とも埴輪を伴うものであり、特に2号古墳からは、破片ながら大量に出土しており、その具体的組成をある程度復元することが可能であった。しかし、墳丘は完全に削平されており、主体部の確認はできなかった。

(2) 地理的環境

本遺跡は、群馬県の南西部を西から東へと流れる鎭川の南岸に位置している。この南岸は、富岡市から藤岡市にかけて東西にのびる段丘が2段に形成されている。その第二段の背後にあたる南側は、関東山地へと連なっている。

この山地部分から鎭川へ向けて、いくつもの中小河川が注いでおり、これらにより開析された谷が適当な間隔をおいて東西に平行して位置しているわけである。本遺跡の位置する地は、鎭川の一支流である天引川によって開析された谷筋にあまっている。

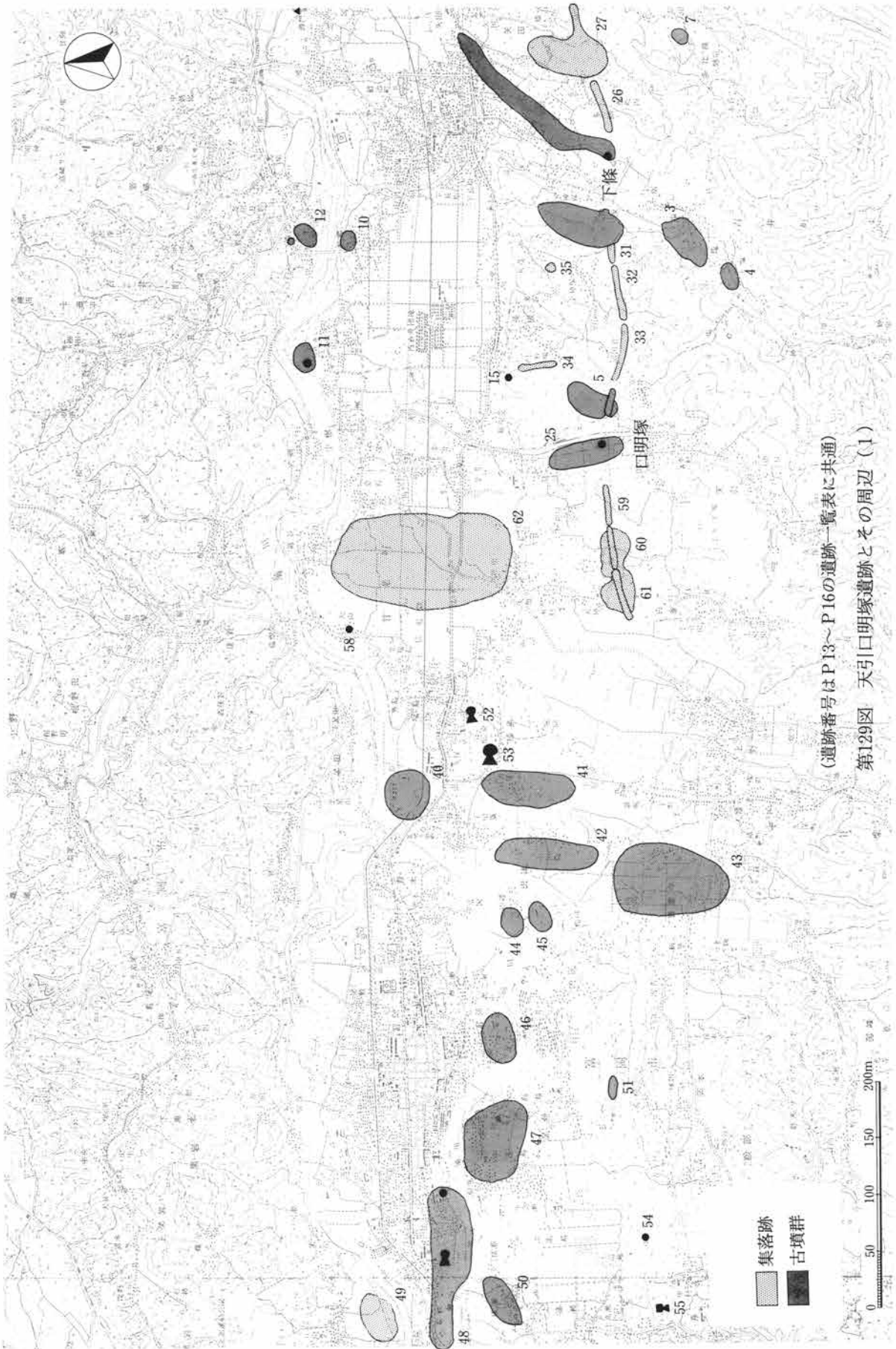
天引川は、当地から南へ約18kmさかのぼった山あいに源を発している。この付近は、広域変成岩である

三波川結晶片岩とみかぶ緑色岩を基盤としているため、これらの岩塊が河川を介して下流へ供給されている。さらに南側へ進むと第三紀中新生の海成層である富岡層群を抜けていく（遺跡地から北へ10kmほどの付近）ため、その最下部層にあたる牛伏砂岩の岩塊がやはり河川を介して下流へ供給されることになる。それゆえ、本遺跡の東側を南流している河川敷におり立つと、結晶片岩と牛伏砂岩の川原石が認められる。そのうち、軟質な牛伏砂岩は、流下による摩耗のため、小ぶりであり、しかも河川礫に占める割合が少ないのに対し、硬質の結晶片岩は量も多く、比較的大ぶりの石を多く含んでいる。

本遺跡の位置する地は、天引川が鎭川の南岸の第二段を開析した結果形成された小規模な扇状地状の地形上にあまっている。遺跡の東方約80mの目と鼻の先の位置に天引川の現在の流路があり、その東側は、70mほどで切り立った崖面から吉井町安坪の位置する段丘となっている。一方、遺跡の西側は約1.6kmほどにわたって平坦な低地部が広がり、再び段丘崖へとたどりついている。

2基の古墳の位置は、現在の河川の西側に沿って形成された帯状の微高地部分にあまっている。調査時には当時の地表面の下まで削平が及んでいたが、地山面は、ほとんど砂礫層に近い状態であり、現在の耕作土にあたる表土20cmほどがかるうじて黒褐色の土であった。この砂礫層が天引川の沖積作用によって形成されたものであることは言うまでもないところである。古墳の周堀を埋めていた覆土は、粒子が粗く、砂質をおびた黒褐色土で、砂礫を多く混入するものであった。築造当時の地表面はこれに近い黒褐色土であったものと推測され、その下は直接、前記の砂礫層に連なっていたものと思われる。周堀の底面までは、この砂礫層を現状で約50cm掘り込んでいることから、黒褐色土の厚さがそれほどなかったことを物語っている。現在は完全に消失しているが、墳丘もこの黒褐色土を主体とするものであった

III 天引口明塚遺跡の調査



(遺跡番号はP13～P16の遺跡一覧表に共通)
 第129図 天引口明塚遺跡とその周辺 (1)

と思われる。

(3) 歴史的環境

今回調査した2古墳は、次節以下で詳述するように、6世紀後半を中心とした時期に築造された横穴式石室を主体部とした小型円墳と考えられる。そこで、本項では、周辺地域における古墳時代を中心とした歴史的環境について述べてみることにしたい。

鎭川の中流域にあたる富岡市から甘楽町にかけての地域は、古墳時代の地域展開は、この川の南岸(右岸)に形成された段丘部分を中心に進められていった。現在の鎭川の流路は、この河川によって開析されたいわゆる「甘楽の谷」の北端寄りを東西方向にとっており、その北岸は高崎市から松井田町にかけて東西方向に形成された岩野谷丘陵へと急崖をなして取り付いているため、段丘面は未発達である。そのため、北岸部には顕著な遺跡の分布は認められない。

南岸は下位段丘と上位段丘から構成されており、両段丘面とも濃密な遺跡の分布が認められる。現在の鎭川の流路は、古墳時代には既にこれに近い位置に定まっていたようである。本遺跡の北約1kmに所在する吉井町片山古墳群(11)からは、中期初頭にさかのぼる小型前方後円墳(18)が発見され、長大な粘土槨から豊富な副葬品が出土している。この古墳群の位置は鎭川の南岸の縁辺部であり、近接する本郷古墳群(10)、岩崎古墳群(12)も現流路の縁辺部にあたるのが前の推定の妥当性を裏付けている。

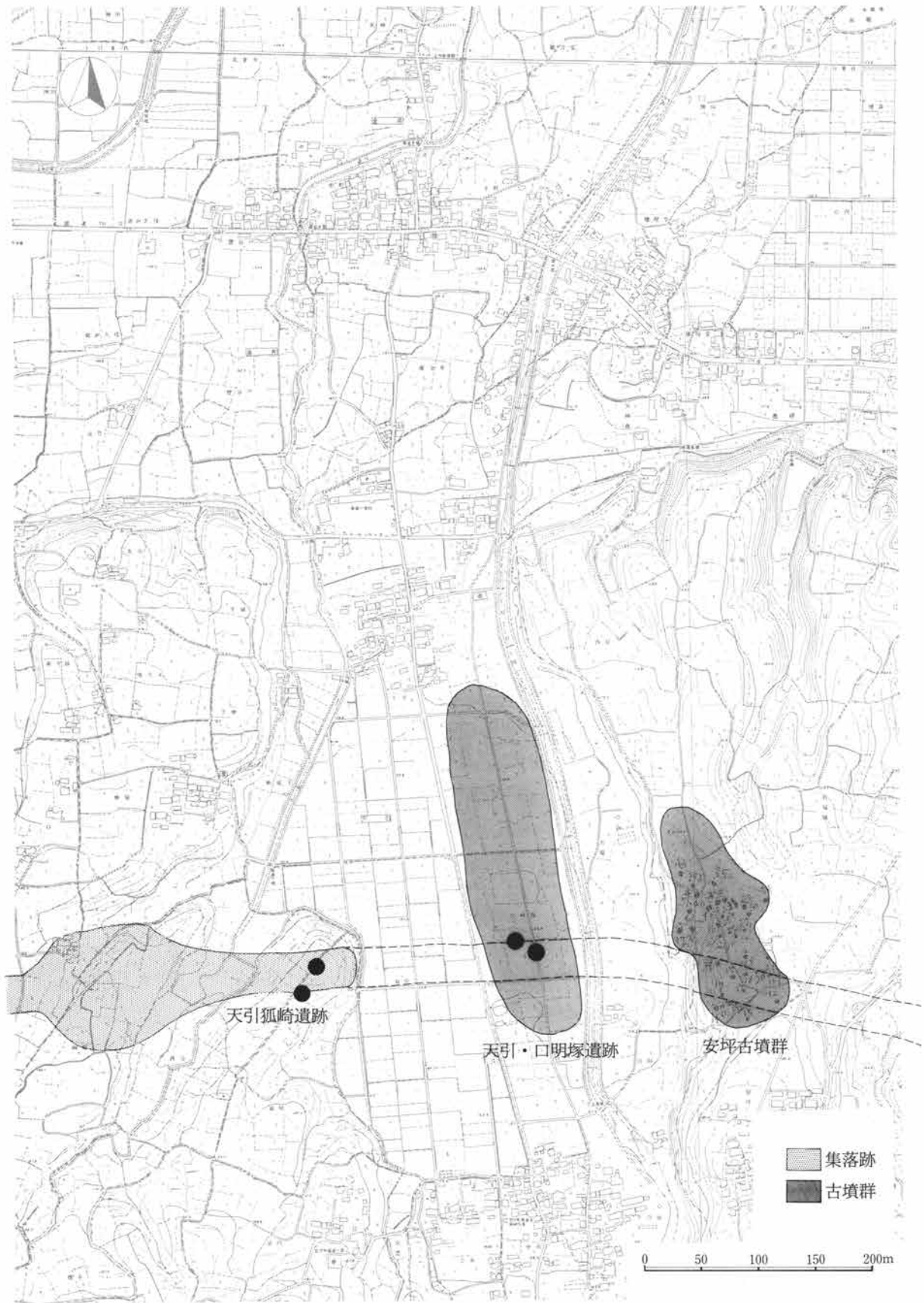
これらの古墳群は、片山古墳群中の中期初頭の事例を除けば、いずれも横穴式石室を主体部とする小型古墳からなる小規模群集墳である。これらと同様の群集墳は、鎭川に沿って遡上していくと、点々と認められ、富岡市域に入ると、比較的規模の大きな群集墳が両岸に沿って現れる。塚原古墳群(40)、芝宮古墳群(46)、桐瀬古墳群(47)、七日市古墳群(48)、横瀬古墳群(50)、等が主なものである。これらの占地が、生産域・集落域と密接に結び付いたものであることは想像に難くない。と同時に、鎭川の河床を形成している凝灰質砂岩を石室石材として利用していることも見逃せない点である。

一方、この鎭川に南から流入する天引川、雄川の両岸に沿って分布する古墳群が対照的なあり方を示している。天引川の東岸に位置する安坪古墳群(5)、雄川の東岸の二日市古墳群(41)、西岸の上田篠古墳群(42)、善慶寺古墳群が主なものである。横穴式石室を主体部とする小型古墳を中心とした群集墳であり、いずれも比較的規模の大きいものである。これらの古墳群もまた、天引川、雄川に流下してきた結晶片岩、牛伏砂岩を石室石材として利用しやすい地点に占地していることは、想像に難くないところである。

口明塚1・2号古墳の占地が、天引川の存在を念頭においたものであることは明らかであろう。現在は、古墳の存在した痕跡すら認められないが、土地改良以前には、この付近に複数の墳丘が認められたという。調査地の小字名である「口明塚」は、かつて所在していた横穴式石室のなごりであろう。『上毛古墳総覧』によれば、旧北甘楽郡新屋村天引字口明塚所在の古墳として、前方後円墳1基、円墳3基、墳形不明1基の計5基(新屋村3号~7号古墳)が記載されている。このうち、前方後円墳とされているものは、全長が18mであり、規模的にみてその可能性は弱い。不明のものも含めて小型円墳5基からなる小規模群集墳であったと考えたほうが妥当かと思われる。口明塚1・2号古墳が、これら5基のうちのいずれかに該当することは間違いないところである。しかし、具体的に特定するに至らなかった。これら5基からなる古墳群を「口明塚古墳群」と仮称しておきたい。

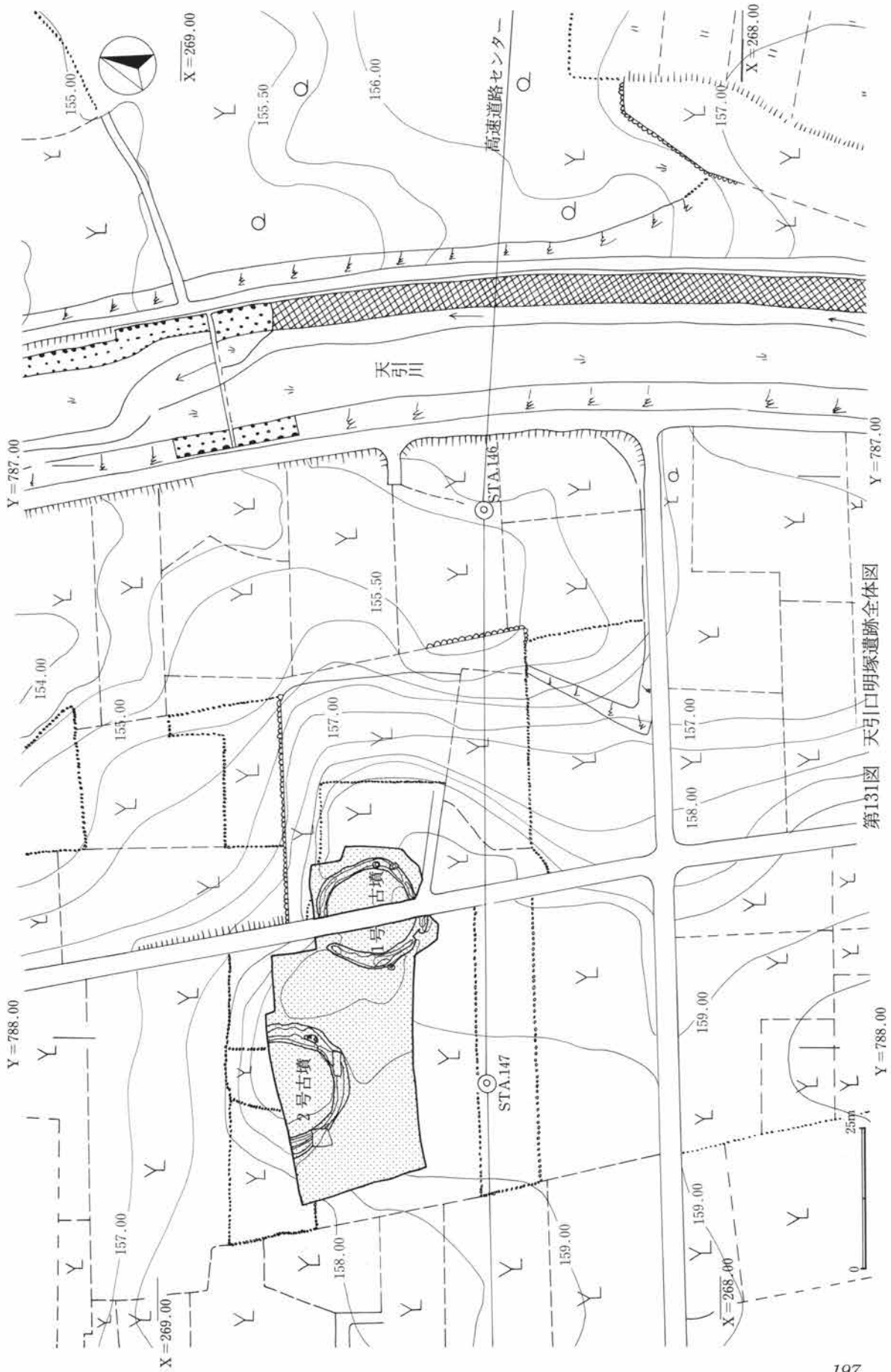
口明塚古墳群は、付近の小規模な低地部分で水田を経営していた集団に関わる古墳群であったと思われる。当遺跡の西方約1kmで天引狐崎遺跡が調査されたが、天引川に合流する小河川である三途川の旧流路とこれに伴う河岸補強の杭列が発見された。これらは、弥生後期段階までさかのぼるものと推定され、その北側での水田経営に伴うものであった可能性が推測される。口明塚古墳群をこれらと一体のものとして捉えることも可能であろう。

III 天引口明塚遺跡の調査



第130図 天引口明塚遺跡とその周辺（2）

1. 遺跡の立地と環境



第131図 天引川明塚遺跡全体図

2. 1号古墳の調査

調査した2古墳のうち、東側に位置するものである。現在、古墳の東側約80mに天引川が北流しており、西岸の縁辺部の先端ギリギリの位置である。

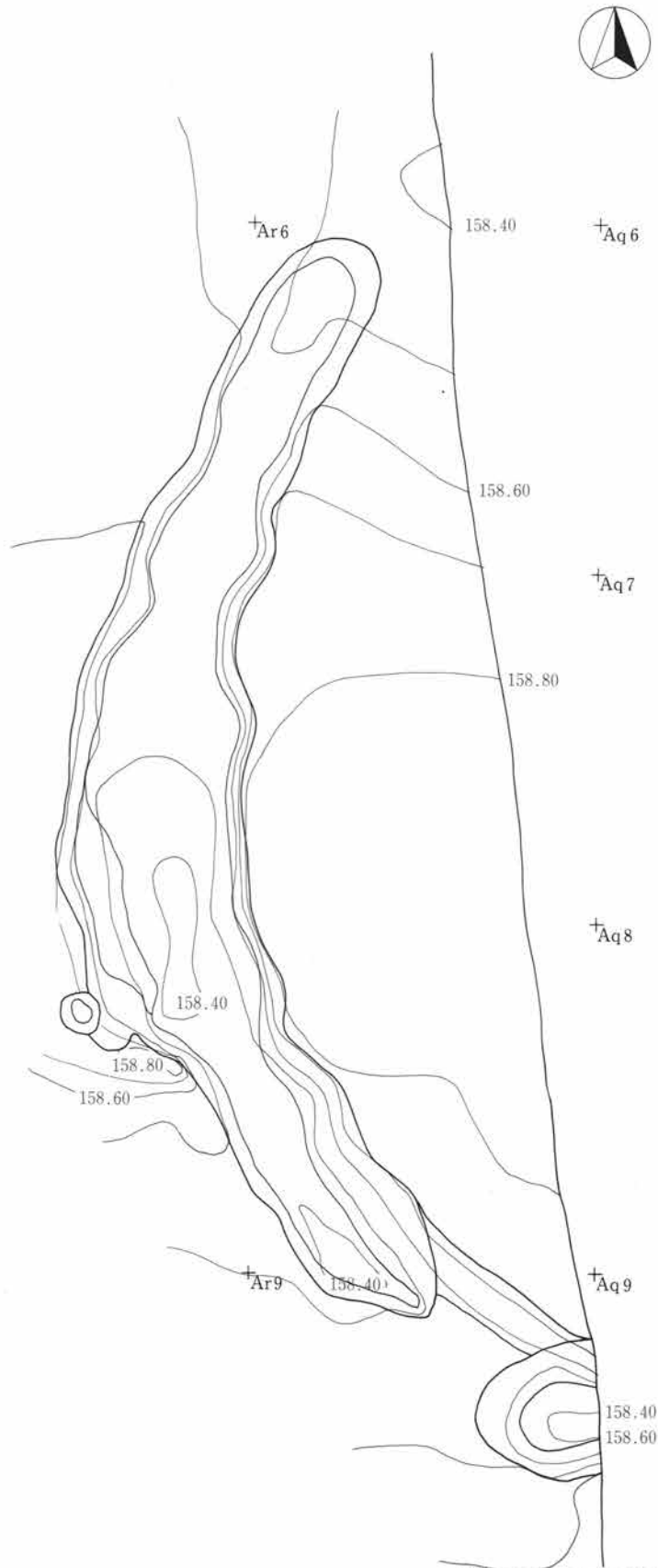
調査前にすでに削平が深く及んでおり、当時の地表面と推定される黒褐色土層の下位の層順と推定される砂礫層にまで達していた。そのため、現在の耕作土である表土をはがすと、あたりいちめんは河川敷と見間違えうほどの砂礫面となった。

この砂礫面にドーナツ状に周堀と推定される黒褐色土を覆土とする掘り込み面が確認されたため、古墳の存在を知ることができた。

古墳の占地する部分の微地形を見ると、北から南へとゆるやかに傾斜していることが推定され、古墳の北端と南端で、現状で60cmの比高差がある。

古墳の中心を南北に農道が通過していたが、これが頻繁に使用されている生活道路であったことと、この部分はずしても、古墳の調査データに大きな支障を来さないと考えられたので、調査対象からとりあえず除外することにした。

調査によって確認できたの



第132図 1号古墳全体図

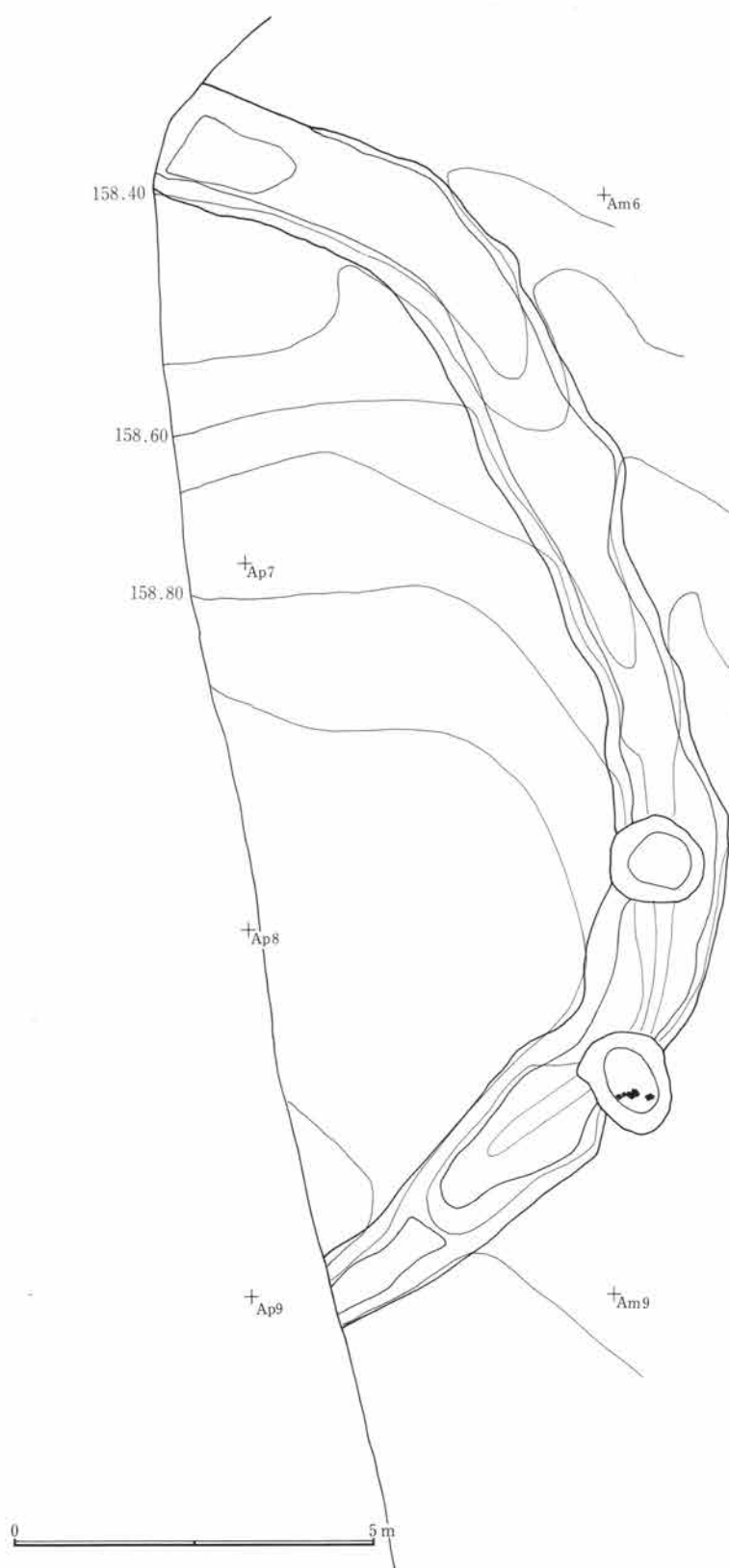
2. 1号古墳の調査

は古墳の周囲にめぐらされていた周堀部分のみであった。その形状からすると、堀の墳丘側の掘り込み部分を基準にして、径が東西で約12m、南北で約16mの、長円形ぎみの円墳であったことがわかる。堀の幅は、最も広い部分で上幅2.5m、狭い部分で上幅1.6mである。深さは、墳丘の西から南にかけての部分が最も深く約30cmである。本来の周堀の深さが、これより大幅に深く、また幅も広がったであろうことは言うまでもない。

堀の底面を見てみると、北側で標高158.3mであるのに対し、南側158.9mを測り、60cmの高低差が認められる。

墳丘が完全に削平されてしまったため、主体部が何であったかを具体的に知る手掛かりはない。しかし、次のようないくつかの理由から横穴式石室を主体部とするものであったと考えている。一つは、小字名の「口明塚」である。これがこの付近に5基存在していた小型古墳のうちの1基の横穴式石室が開口していたことに由来しているであろうことは、前述した通りである。事実、これらのうちの新屋村7号古墳は横穴式石室の存在が『上毛古墳綜覧』に記されている。近接して所在する5基のすべてが横穴式石室であった可能性が高い。また、墳丘の南西側の周堀が最も深く掘られている点も、南に開口する横穴石室を有する円墳の場合によく認められる特徴である。

墳丘の南東側の周堀に接した土壌状の掘り込みから円筒埴輪片が出土しており、古墳に伴う可能性もある。しかし、全体的には量が非常に少ないのでむしろ伴わなかった可能性が高い。



3. 2号古墳の調査

1号古墳の西約30mに位置している。本調査の前年に実施した試掘調査で確認されたものである。古墳の北側半分は道路建設予定地外であったため、南側半分のみを調査した。古墳の南西側部分に重複してこれに後出する竪穴状遺構が1基確認された。

(1) 墳丘及び外部施設

古墳の位置する地は、天引川の西岸に沿って帯状にのびる微高地上にあたっている。その東側の縁辺に1号古墳が位置しているのに対し、本墳は西側の縁辺部に位置している。そのため、本墳の西側は徐々に低くなっていく。そのことは、帯状の微高地部分が畑地として利用され、西側部分が水田として利用されていることからわかる。

墳丘ののる部分の微地形も東から西へと下がる緩傾斜面であり、70cmほどの高低差を有している。

墳丘は完全に削平されてしまっており盛土部分が欠いている。しかし、前章で報告した神保下條遺跡の1・2号古墳の場合と異なって、しっかりした周堀が全周していることから、盛土による墳丘築成がなされていたとして間違いないところである。

墳丘の形状は、全周していることが推測される周堀の形状から円墳であることがわかる。1号古墳の場合と同様に、周堀の掘り込みが砂礫を多量に含む灰黄褐色土ないし砂礫層であるため台地面のローム質の土に対して掘り込まれる周堀のような整然とした形状にはならない。全体を巨視的に見れば円墳であることは一目瞭然であるが、細部では形のゆがみあるいはくずれが目立つ。

周堀の墳丘側掘り込み面を基準にして計測すると東西方向で直径約18.4mである。

周堀の幅は場所によって一様でない。墳丘の南東から東にかけてが最も広く、上端で3～4mを測る。同様に南西部分も上端で3.4mと広い。これに対して、南側部分は1.6～2.6mと幅狭になっている。深さについても同様に場所によってのバラツキがある。最も深いのは、東側部分及び西側部分であり50cmを

有している。これに対して、南側は40cmとやや浅い。堀の底面のレベルを比較してみると、東側と西側で50cmの高低差があり、西下がりの緩傾斜面に占地している状況に対応している。

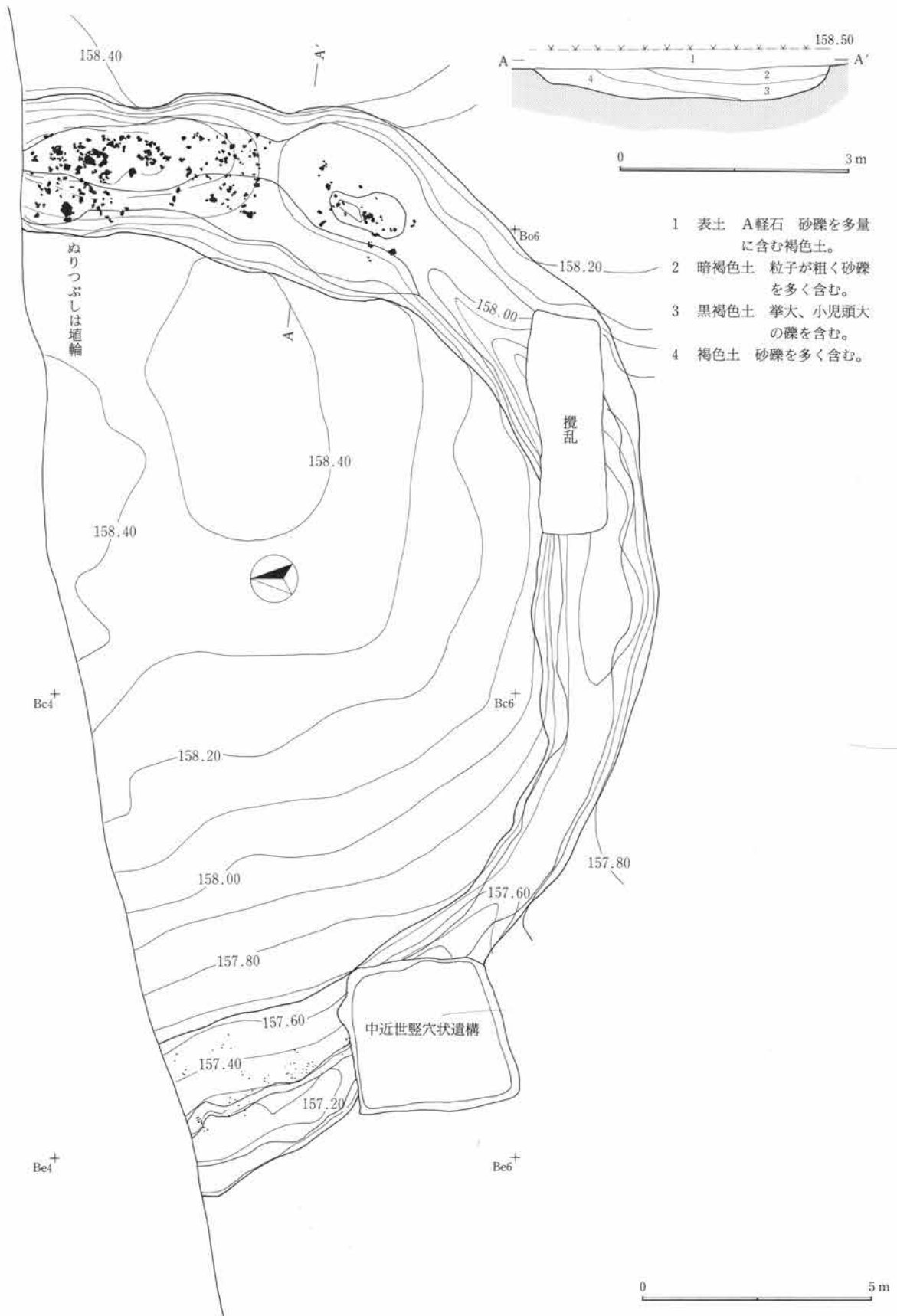
堀を埋めていた覆土は、褐色土ないし黒褐色土で粒子が粗く、砂礫を多量に含むものである。覆土の主体をなす黒褐色土中には、多量の埴輪片とともにこれに劣らず多量の円礫が含まれていた。これらは小児頭大を前後する大きさであり、すべて結晶片岩である。墳丘の葺石が崩落したものと推定される。鑄川流域で確認される横穴式石室墳は、周辺から得られる豊富な石材（結晶片岩）を駆使して、整然とした葺石を築くことを不可欠の要素としている。削平が著しいため、推測の域は出ないが、本墳の場合も同様の構造であったものと思われる。その場合、周堀の墳丘側掘り込み面から1.5～2mほどのテラス面をおいた内側に葺石を施した盛土部分がくるのが一般である。本墳の場合も、葺石の施された盛土部分の直径は15m前後であったと思われる。

(2) 主体部

本墳の主体部も1号古墳と同様、横穴式石室であったと考えられる。墳丘の東及び西側の周堀を幅広く、深く掘り、南側をこれより幅狭く、また浅く掘っている点は、南に開口する横穴式石室を意識したものである。

このことと合わせて、本墳の場合、決定的な理由がもう一つある。それは、次項で詳述するが、墳丘南東側から東側の周堀内に限定されて、しかも集中的に人物・馬形埴輪が出土した点である。このありようは、6世紀後半を中心とした時期の横穴式石室を有する円墳の埴輪の樹立形態に呼応するものであり、下條2号古墳で具体的に確認することができた。すなわち、石室の入口に向かって、左右いずれかの側のテラス面に列状に人物・動物埴輪を並べていくのが、当地域の埴輪樹立形態の大原則になっているからである。墳丘規模からすると、本墳の横穴式石室は、比較的規模の大きなもので、前方後円墳のそれに順ずるようなものであったと推測される。

3. 2号古墳の調査



第133図 2号古墳全体図

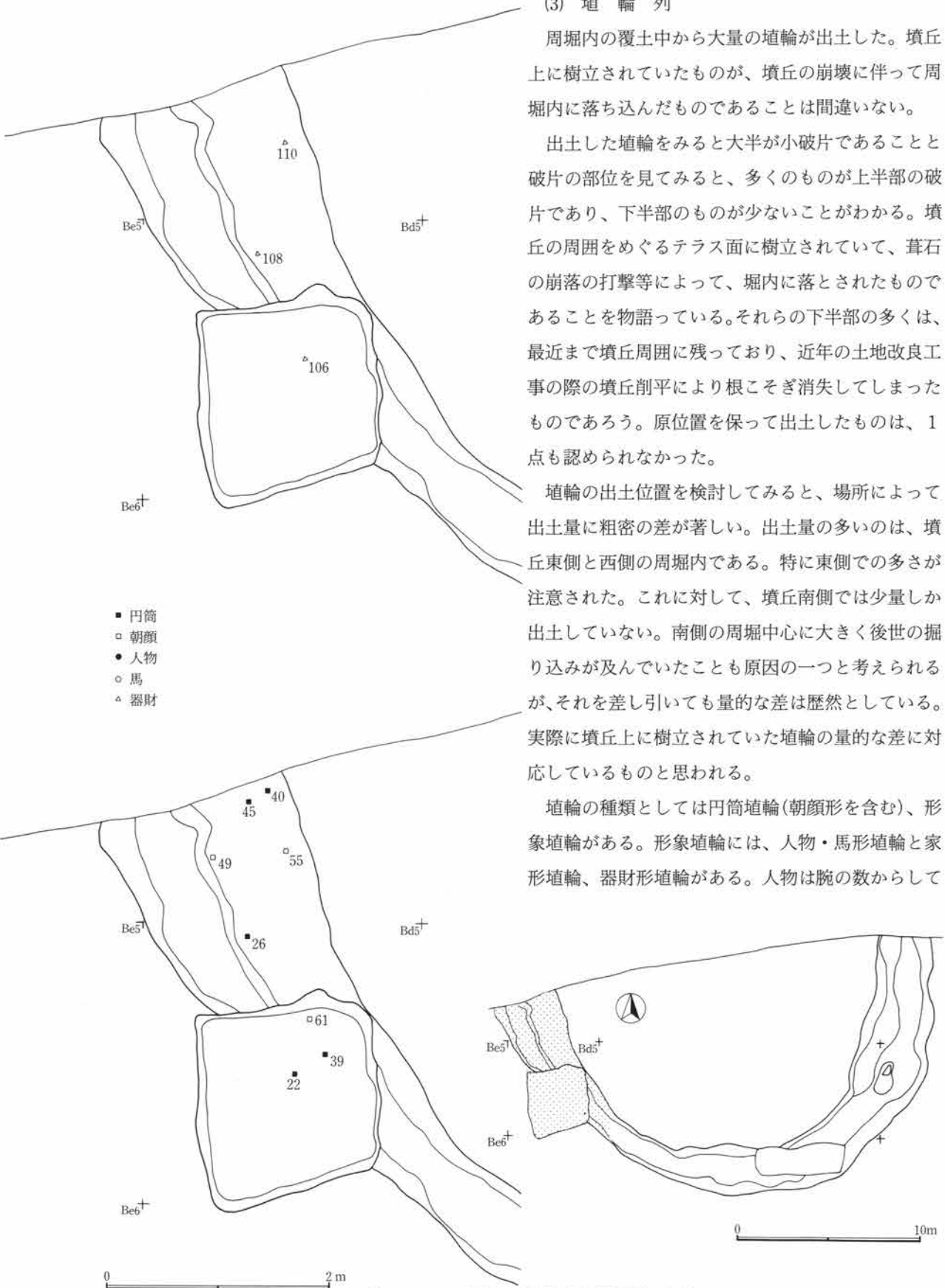
(3) 埴輪列

周堀内の覆土中から大量の埴輪が出土した。埴丘上に樹立されていたものが、埴丘の崩壊に伴って周堀内に落ち込んだものであることは間違いない。

出土した埴輪をみると大半が小破片であることと破片の部位を見てみると、多くのものが上半部の破片であり、下半部のものが少ないことがわかる。埴丘の周囲をめぐるテラス面に樹立されていて、葺石の崩落の打撃等によって、堀内に落とされたものであることを物語っている。それらの下半部の多くは、最近まで埴丘周囲に残っており、近年の土地改良工事の際の埴丘削平により根こそぎ消失してしまったものであろう。原位置を保って出土したものは、1点も認められなかった。

埴輪の出土位置を検討してみると、場所によって出土量に粗密の差が著しい。出土量の多いのは、埴丘東側と西側の周堀内である。特に東側での多さが注意された。これに対して、埴丘南側では少量しか出土していない。南側の周堀中心に大きく後世の掘り込みが及んでいたことも原因の一つと考えられるが、それを差し引いても量的な差は歴然としている。実際に埴丘上に樹立されていた埴輪の量的な差に対応しているものと思われる。

埴輪の種類としては円筒埴輪(朝顔形を含む)、形象埴輪がある。形象埴輪には、人物・馬形埴輪と家形埴輪、器財形埴輪がある。人物は腕の数からして



第134図 2号古墳埴輪出土位置図(1)

最低4個体以上あったことがわかる。馬は鞍や尻部の破片から最低2個体以上あったことがわかる。

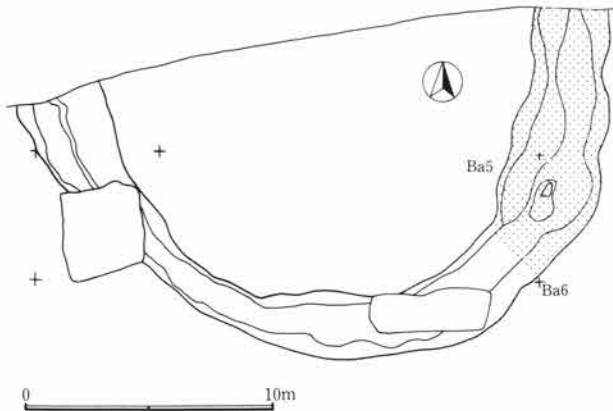
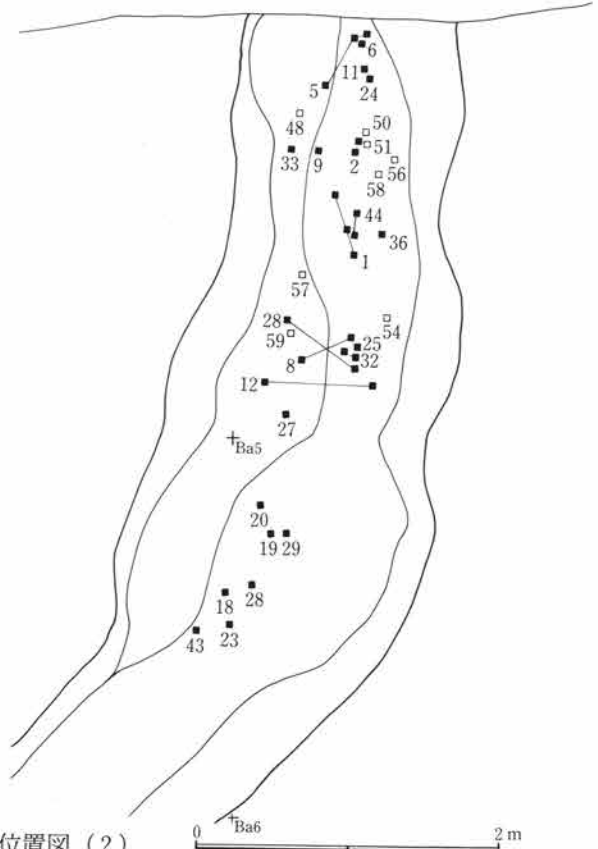
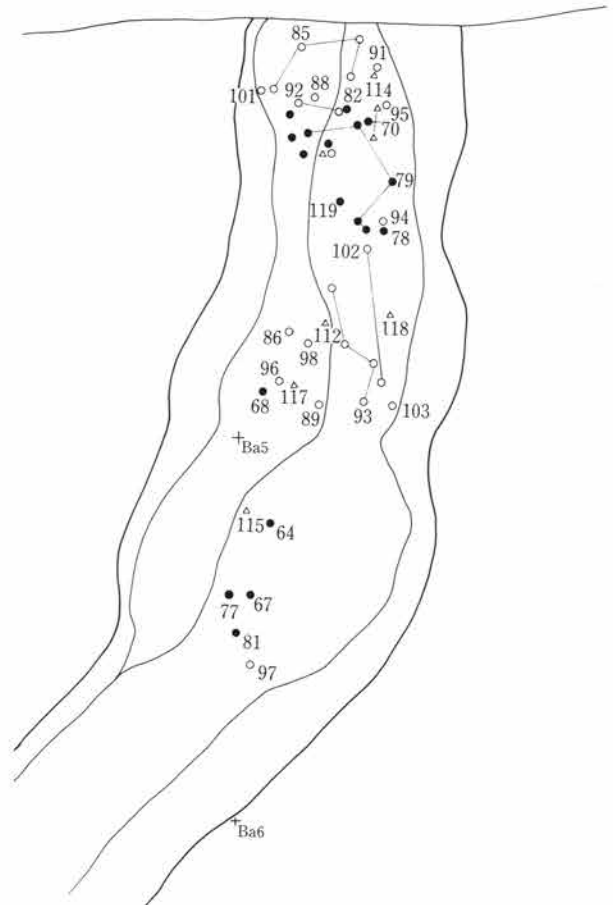
器財形埴輪には、太刀、盾、靱の存在を知ることができ、やはり複数個体あったことがわかる。

各種類ごとの出土位置には、明確な傾向を読み取ることができる。

円筒埴輪は各地点ともまんべんなく出土しており、量的にも最も多い。器財形埴輪も同様に全体にわたっている。これに対して、人物・馬形埴輪は、東側部分のみに集中的に出土していて、南及び西側からはまったく出土していない点が注意される。さらに細かく見ていくと、人物の破片が東から東南にかけて分布しているのに対し、馬は東側のみであり、しかも南北方向の2ヶ所に集中している。

以上の分布の傾向から、次のような埴輪配置が推定される。円筒埴輪は、テラス面の縁辺部寄りを全周していた。この列の主体は円筒埴輪であり、適当な間隔をおいて朝顔形が配置されていた。南に開口する横穴式石室に向かって右側には、円筒列の内側に、これと平行するように、人物・馬が列状に配されていた。石室寄りに人物が並び、これにつづいて馬が2頭以上配されて収束していたものと思われる。最後の馬は、テラス面の東側から、延びたとしても北東側で終わっていたものと思う。

器財形埴輪が全体にわたって出土しているということは、人物・馬形埴輪と別の樹立形態が取られた



第135図 2号古墳埴輪出土位置図(2)

III 天引口明塚遺跡の調査

と考えるのが妥当であろう。そして、やはり墳頂部の縁辺部に沿ってめぐらされていたと考えるのが妥当であろう。

ここで推定された口明塚2号古墳の埴輪樹立形態は、下條2号古墳と基本的には同じであるが、人物・馬形埴輪列が、前者は石室入口から右へ展開するのに対して、後者は左へ展開するという興味深い差異を示した。

(4) 埴輪

円筒埴輪 完形に復せたものが1個体であったため、円筒埴輪の形態的特徴を具体的に知ることのできるものは少ない。しかし、少なくともすべて3段構成で、第2段に一对の透孔が穿たれたものであったことは明らかである。

胎土は、結晶片岩粒を多く含んでいる点が目立ち、また砂粒を混入している。中でも赤色粒の混入が目立つ資料の多い点は、下條2号古墳の場合と同じである。砂粒の混入の度合の相対的な多寡から、下條1・2号古墳の場合と同じく、少ない方から多い方へ順にA～Dに分類した。

凸帯は、断面の形状、大きさから次の6種類に分類することができる。幅1.8cm、高さ0.4cmで、上下の稜の高さが同じM字形で稜線がにぶい(Ma)。幅2.0cm、高さ0.9cmで上側の稜が高いM字形でしっかりしている(Mb)。幅1.3cm、高さ0.4cmで、下側の稜が上よりやや高いM字形(Mc)。幅1.2cm、高さ0.5cmで上側の稜が下より高い台形で、貧弱であるがしっかり取り付けられている(台)。幅1.3cm、高さ0.5cmの三角形で、稜が鈍く、取り付けがやや粗雑で貧弱である(三a)。幅2.0cm、高さ0.9cmの三角形でしっかりしている(三b)。以上の6種類であるが、そのうち、Ma、Mb、台、三aの量が多く、Mc、三bはわずかである。

透孔は確認し得た範囲ではすべて半円形である。それらのうちでは、25のように隅部が鋭角をなすものは少なく、大半はその部分が鈍く、円形に近いものである。

外面の整形はすべて一次調整の縦ハケである。内

面は、粘土紐の積み上げの痕跡を完全に消している点はすべてに共通しているが、最終の面調整にはバラエティーがある。口縁部に横ハケ、あるいは斜めハケを残す点は共通するが、第2段以下にハケ整形後縦指ナデを施すもの(1に代表される)と2次調整の縦ハケを施すもの(17に代表される)の2者が認められる。

1・3・17・23でヘラ描きが認められるが、いずれも外面第3段であり、透孔の斜め上の凸帯に接触する位置で共通している。

朝顔形は、円筒埴輪にくらべて明らかに丁寧なつくりであり、しっかりしている。

凸帯は、断面M字形ないし台形で発達したものであり、丹念に取り付けている。

透孔は形状の明瞭にわかるものは1点(62)であるが、円形に近い半円形である。

すべて破片であるため、全体の形状は具体的に知ることにはできないが、くびれ部までを4段で構成し花卉部を2段とする小型のものに通有の形態であったと推測される。花卉部は、大きく2段に外反するもので、第3段に一对の透孔が穿たれたものと思われる。

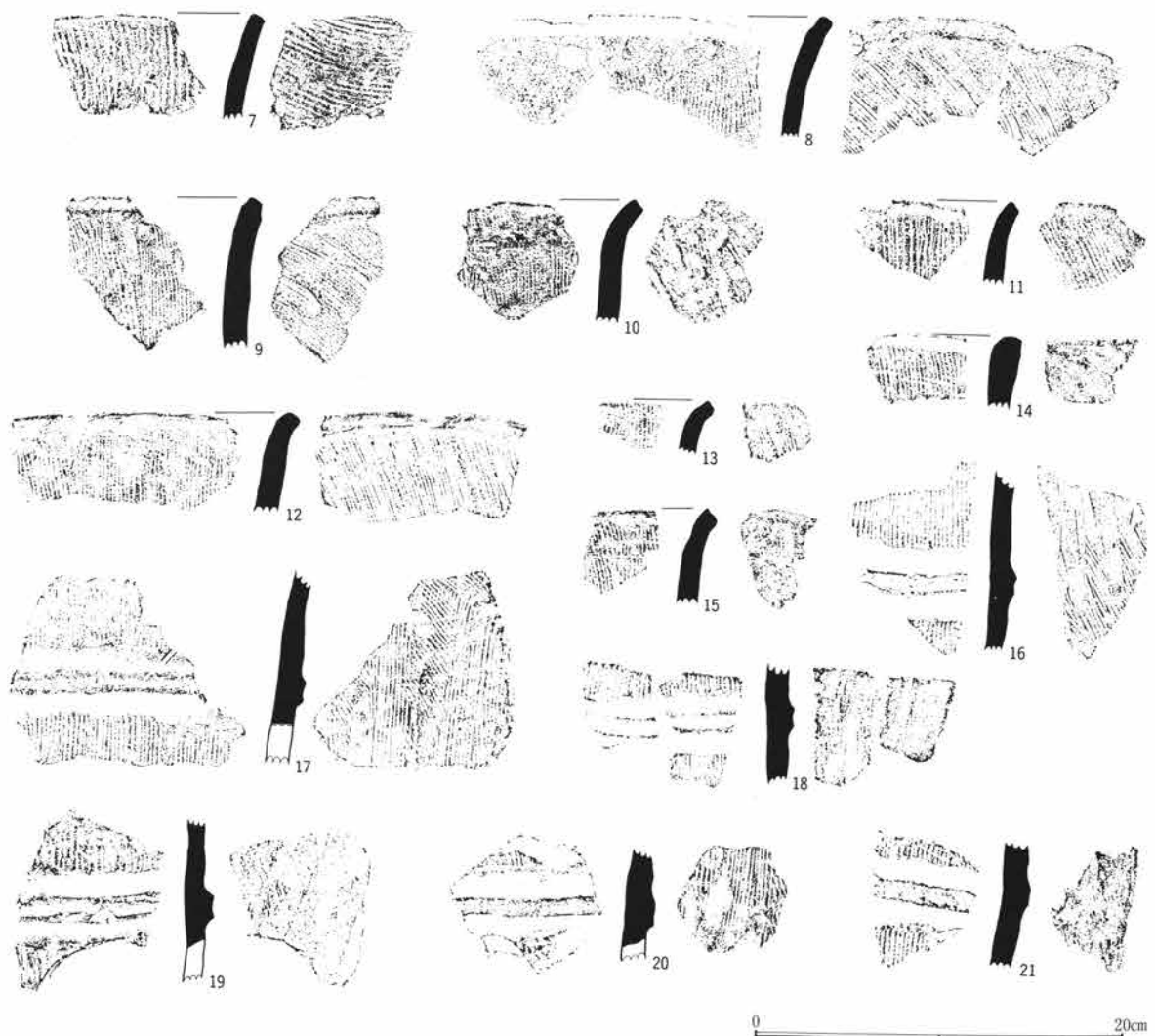
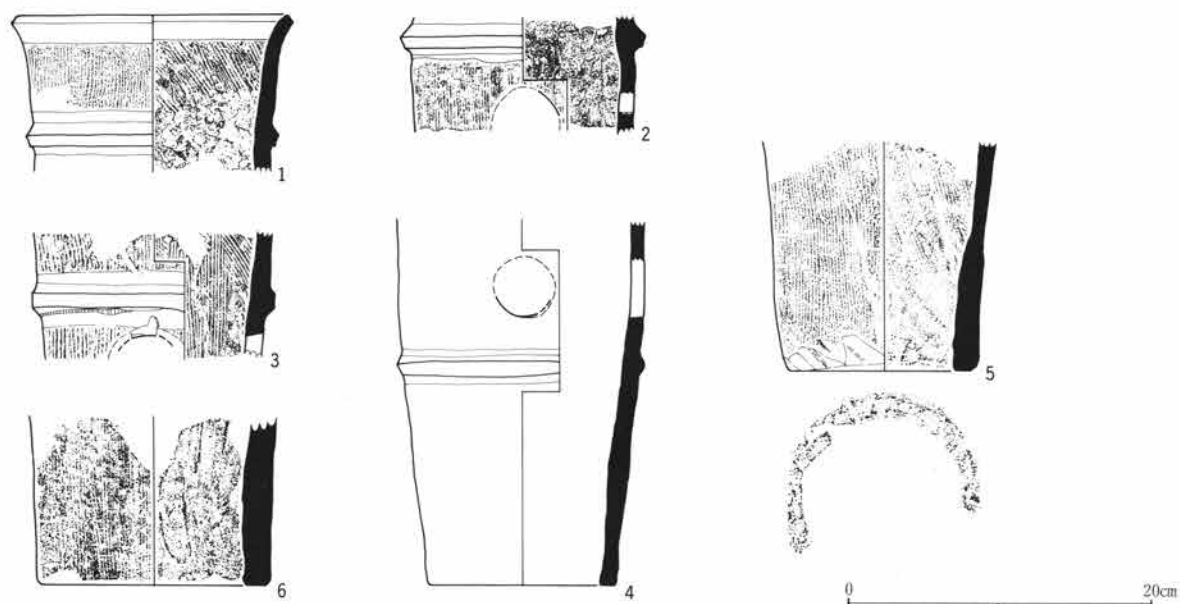
外面は縦ハケであり、内面は口縁部にハケを残す以外は、丹念に縦指ナデが施される。

埴輪に付した番号は本墳出土のもののみでの通し番号であり、形象埴輪も含めて付してある。

形象埴輪 原位置を保っていたものは1点もなくまた完形に近く復せたものもなかった。63の人物と85の馬を除けば、他はすべて小破片であった。しかし、その量が多いことから、細部を観察していくと当初の具体的な全体像がある程度復元できそうである。

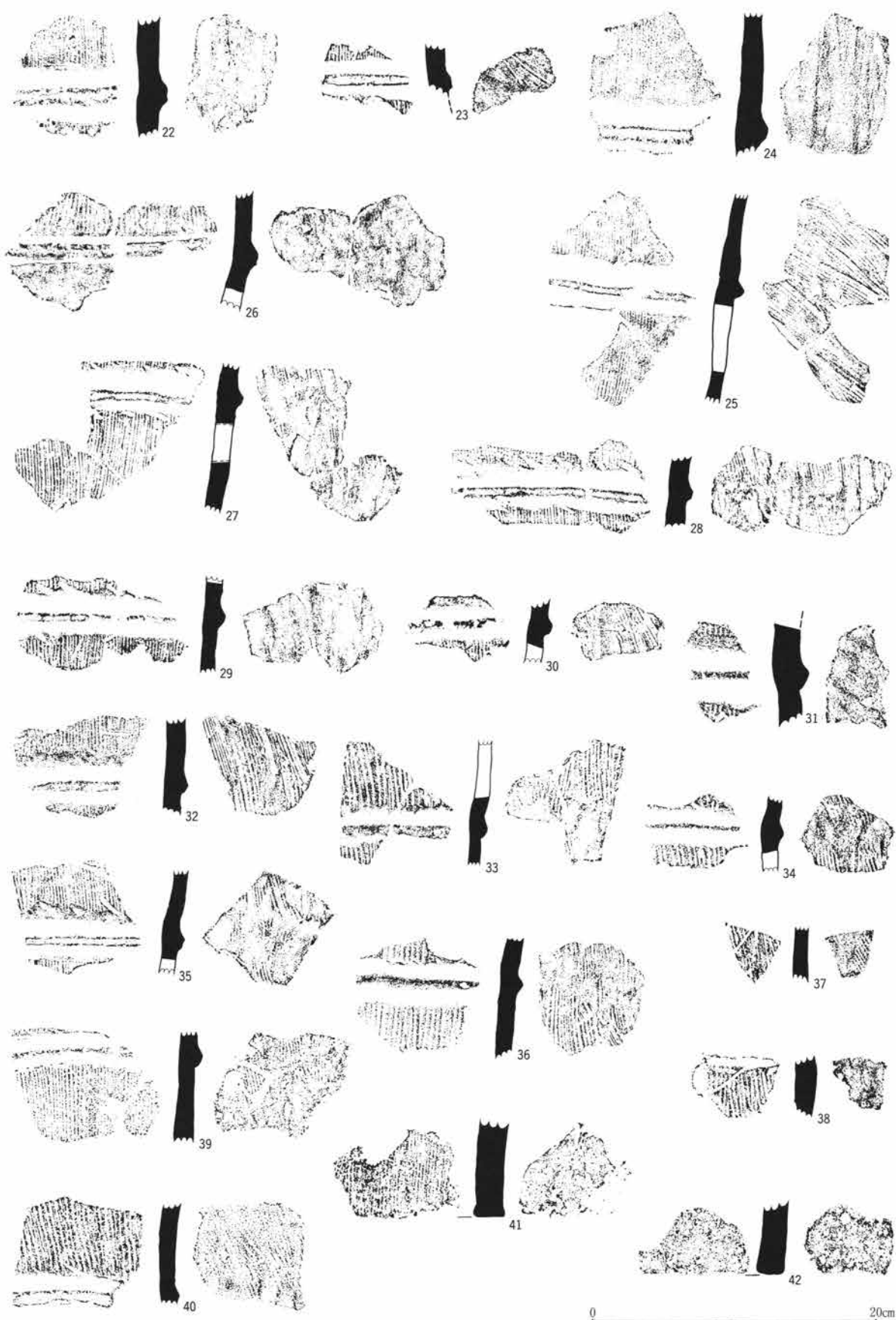
胎土は基本的には同一であり、砂粒の混入度合が高いのが目立つ。色調は、橙色ないし赤褐色であり下條例のように際立った差のあるものは認められない。

つくりは下條2号古墳例にくらべると全体にやや粗雑である。

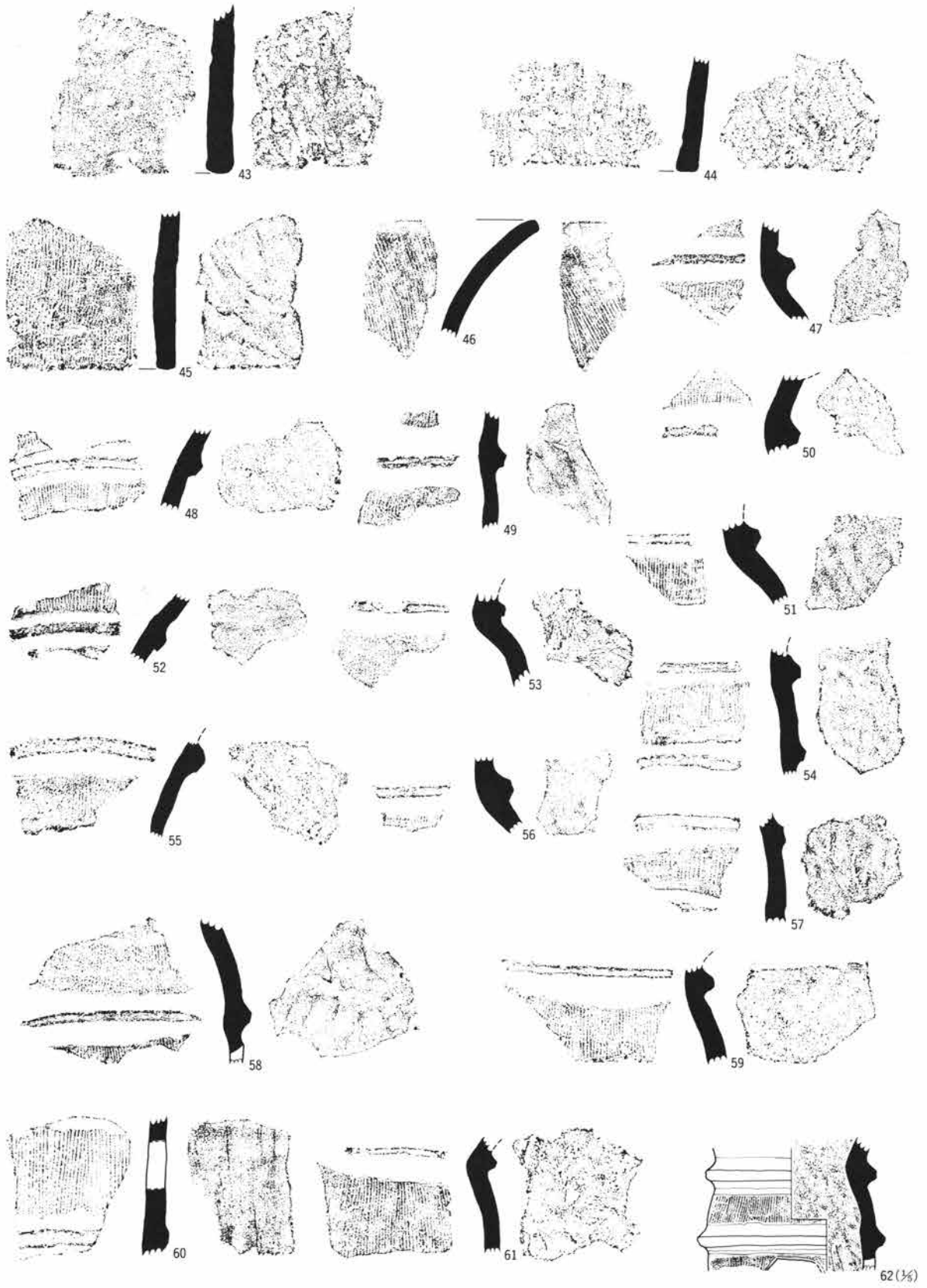


第136図 2号古墳円筒埴輪(1)

III 天引口明塚遺跡の調査



第137図 2号古墳円筒埴輪(2)



第138図 2号古墳円筒埴輪(3)

III 天引口明塚遺跡の調査

2号古墳出土円筒埴輪観察表

No.	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状				
1	高 10.3 口 17.8 底 —	M _c				胎 B 焼 縦織 色 橙色	9 11	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜めハケ、第2段斜めハケ後指ナデ	
2	高 7.4 口 — 底 —	M _b				胎 B 焼 良好 色 赤褐色	10 11	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
3	高 8.2 口 — 底 —	M _a				胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 第2第3段とも縦及び斜めハケ	外面3段へラ描き
4	高 23.9 口 — 底 12.3	三 _a	14.5			胎 D 焼 不良 色 橙色	7 8	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
5	高 15.0 口 — 底 12.6					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10	外 縦ハケ、底部下端へラ調整 内 縦指ナデ、底部下端横ハケ	
6	高 11.0 口 — 底 (15.0)					胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色	12	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
7	高 5.7 口 — 底 —					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	6	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め横ハケ後部分的に横ナデ	
8	高 6.4 口 — 底 —					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜めハケ、口縁端仕上りシャープ	
9	高 7.9 口 — 底 —					胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	12	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜めハケ	
10	高 6.6 口 — 底 —					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め縦ハケ後、斜め縦指ナデ	
11	高 4.4 口 — 底 —					胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色	7	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜めハケ後部分的にナデ	
12	高 5.3 口 — 底 —					胎 B 焼 良好 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め縦ハケ	
13	高 2.7 口 — 底 —					胎 B 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め縦ハケ	
14	高 3.9 口 — 底 —					胎 B 焼 ふつう 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め指ナデ	

3. 2号古墳の調査

No	法量 (cm)	凸帯			透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状	タテ×ヨコ				
15	高 5.1 口 — 底 —						胎 B 焼 良好 色 橙色	9	外 縦ハケ 内 口縁端横ナデ、口縁斜め 縦ハケ後斜め指ナデ	
16	高 9.8 口 — 底 —	M _a					胎 B 焼 堅緻 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ後部分的に縦 指ナデ	須恵質に近い
17	高 10.5 口 — 底 —	M _a					胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 第2第3段縦斜め縦ハケ	外面3段ヘラ描き
18	高 5.9 口 — 底 —	M _a					胎 B 焼 ふつう 色 明赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
19	高 8.8 口 — 底 —	M _a			半円		胎 C 焼 良好 色 橙色	7	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ後縦指ナデ	
20	高 5.5 口 — 底 —	M _a					胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	8	外 縦ハケ 内 縦ハケ	
21	高 6.7 口 — 底 —	M _a					胎 C 焼 ふつう 色 明赤褐色	8	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
22	高 8.3 口 — 底 —	M _b					胎 B 焼 ふつう 色 橙色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
23	高 3.4 口 — 底 —	M _c					胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	10	外 縦ハケ 内 斜めハケ後斜め指ナデ	外面ヘラ描き
24	高 9.5 口 — 底 —	M _b					胎 C 焼 良好 色 橙色	11	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
25	高 14.5 口 — 底 —	台					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 弱い縦ハケ 内 第2第3段斜め縦ハケ	
26	高 8.4 口 — 底 —	M _b			半円		胎 C 焼 ふつう 色 橙色	6	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
27	高 10.5 口 — 底 —	台					胎 B 焼 良好 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 第3段斜め縦ハケ、第2 段斜め縦ハケ後縦指ナデ	
28	高 4.9 口 — 底 —	台					胎 B 焼 良好 色 橙色	9 10	外 縦ハケ 内 第3段縦ハケ、第2段縦 指ナデ	

III 天引口明塚遺跡の調査

No	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状				
29	高 6.8 口 — 底 —	台				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
30	高 4.6 口 — 底 —	台			半円	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	9	外 縦ハケ 内 斜めハケ	
31	高 6.0 口 — 底 —	三 _b				胎 D 焼 ふつう 色 明赤褐色	6	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	円筒にしては厚すぎる
32	高 6.8 口 — 底 —	台				胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 第3段縦ハケ、第2段縦指ナデ、器面磨耗	
33	高 8.7 口 — 底 —	三 _a				胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色	5 7	外 縦ハケ 内 第2段縦ハケ、第3段縦ハケ後部分的に縦指ナデ	
34	高 5.0 口 — 底 —	三 _a				胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色	5 6	外 縦ハケ 内 縦ハケ後部分的に縦指ナデ	
35	高 7.3 口 — 底 —	台				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11	外 縦ハケ 内 第3段斜め縦ハケ、第2段縦指ナデ	外面3段ヘラ描き
36	高 8.4 口 — 底 —	三 _a				胎 C 焼 良好 色 赤褐色	6	外 縦ハケ 内 縦ハケ	
37	高 3.8 口 — 底 —					胎 B 焼 ふつう 色 明赤褐色	8	外 縦ハケ 内 縦ハケ	外面ヘラ描き
38	高 4.4 口 — 底 —					胎 C 焼 ふつう 色 赤褐色	7	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	外面ヘラ描き
39	高 7.8 口 — 底 —	三 _a				胎 D 焼 ふつう 色 明赤褐色	9	外 縦ハケ 内 斜め縦指ナデ	
40	高 7.0 口 — 底 —	三 _a				胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色	6	外 縦ハケ 内 斜め縦ハケ、下端から縦指ナデが始まる	
41	高 6.9 口 — 底 —					胎 D 焼 あまい 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	
42	高 5.1 口 — 底 —					胎 C 焼 ふつう 色 橙色	12	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	底面に棒状圧痕

3. 2号古墳の調査

No	法量 (cm)	凸帯			透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状	タテ×ヨコ				
43	高 11.4 口 — 底 —						胎 C 焼 不良 色 橙色		器面磨耗、内 縦指ナデ	
44	高 7.8 口 — 底 —						胎 D 焼 ふつう 色 赤褐色		外 縦ハケ 内 縦指ナデ 底面ナデ調整 器面磨耗	
45	高 10.6 口 — 底 —						胎 C 焼 不良 色 橙色	9	外 縦ハケ 内 斜め縦指ナデ 底面ナデ調整	瓦質おびる
46	高 10.1 口 — 底 —						胎 C 焼 ふつう 色 橙色	8 9	外 縦ハケ 内 口縁端寄り横ナデ、口縁 斜め縦ハケ	朝顔形
47	高 6.5 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 斜め縦指ナデ	朝顔形
48	高 5.8 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11	外 縦ハケ 内 斜め指ナデ	朝顔形
49	高 8.1 口 — 底 —						胎 B 焼 良好 色 赤褐色	9	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	朝顔形
50	高 5.0 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 斜め指ナデ	朝顔形
51	高 6.0 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	9 10	外 縦ハケ 内 斜め縦指ナデ	朝顔形
52	高 5.4 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	10	外 縦ハケ 内 斜め～斜め縦指ナデ	朝顔形
53	高 6.7 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 橙色	10 11	外 縦ハケ 内 斜め指ナデ	朝顔形
54	高 8.6 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、丁寧な作り	朝顔形
55	高 6.8 口 — 底 —						胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10	外 縦ハケ 内 斜め指ナデ	朝顔形
56	高 5.6 口 — 底 —						胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11	外 縦ハケ 内 斜め指ナデ	朝顔形

III 天引口明塚遺跡の調査

No.	法量 (cm)	凸帯		透孔		胎土・焼成 色調	刷毛目	成形・整形の特徴	備考
		形状	1	2	形状				
57	高 7.4 口 — 底 —					胎 C 焼 ふっ 色 赤褐色	8	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	朝顔形
58	高 9.9 口 — 底 —				半円 ?	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11	外 縦ハケ 内 縦指ナデ、丁寧な作り	朝顔形
59	高 6.6 口 — 底 —					胎 C 焼 ふっ 色 橙色	10	外 縦ハケ 内 斜め横指ナデ	朝顔形
60	高 9.1 口 — 底 —					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	8	外 縦ハケ 内 縦指ナデ	朝顔の一部か
61	高 8.5 口 — 底 —					胎 D 焼 良好 色 明赤褐色	11	外 縦ハケ 内 斜め縦指ナデ、丁寧な作り	朝顔形
62	高 11.0 口 — 底 —					胎 C 焼 良好 色 赤褐色	11	外 縦ハケ 内 斜め横指ナデ、非常に丁寧な作り	朝顔形

人物埴輪 63を除くと、いずれも小破片であるため、具体的な内容はわかりにくい。破片について見る限りでは、下條1・2号古墳と同様にいずれも円筒形の基部の上に造り付けられた上半身像であることが推測される。細部の表現を比較してみると、少なくとも下條例よりは手の込んだものであるが、簡略なものである点は変わらない。

胴部の破片について見る限り、外面はハケ整形をそのまま残しており、大半のものには衣服の具体的な表現が認められない。

腕から手にかけての破片からは、大きく2種類に分けられる。一つは78・79に見られるように大ぶりなもので、二の腕の付け根で径5.3cmを測る。しかし、その場合も肘から先は急激に細く、短くなりアンバランスな点が目立つ。もう一方は、73・77に代表されるように、小ぶりで、二の腕の付け根で径3cmである。前者に較べればまだバランスはましであるが、それでも肘から先が短い。

両種の数量からすると78・79、73・77、72、80が少なくとも別個体とすることができるので、最低4

個体以上の人物があったことがわかる。

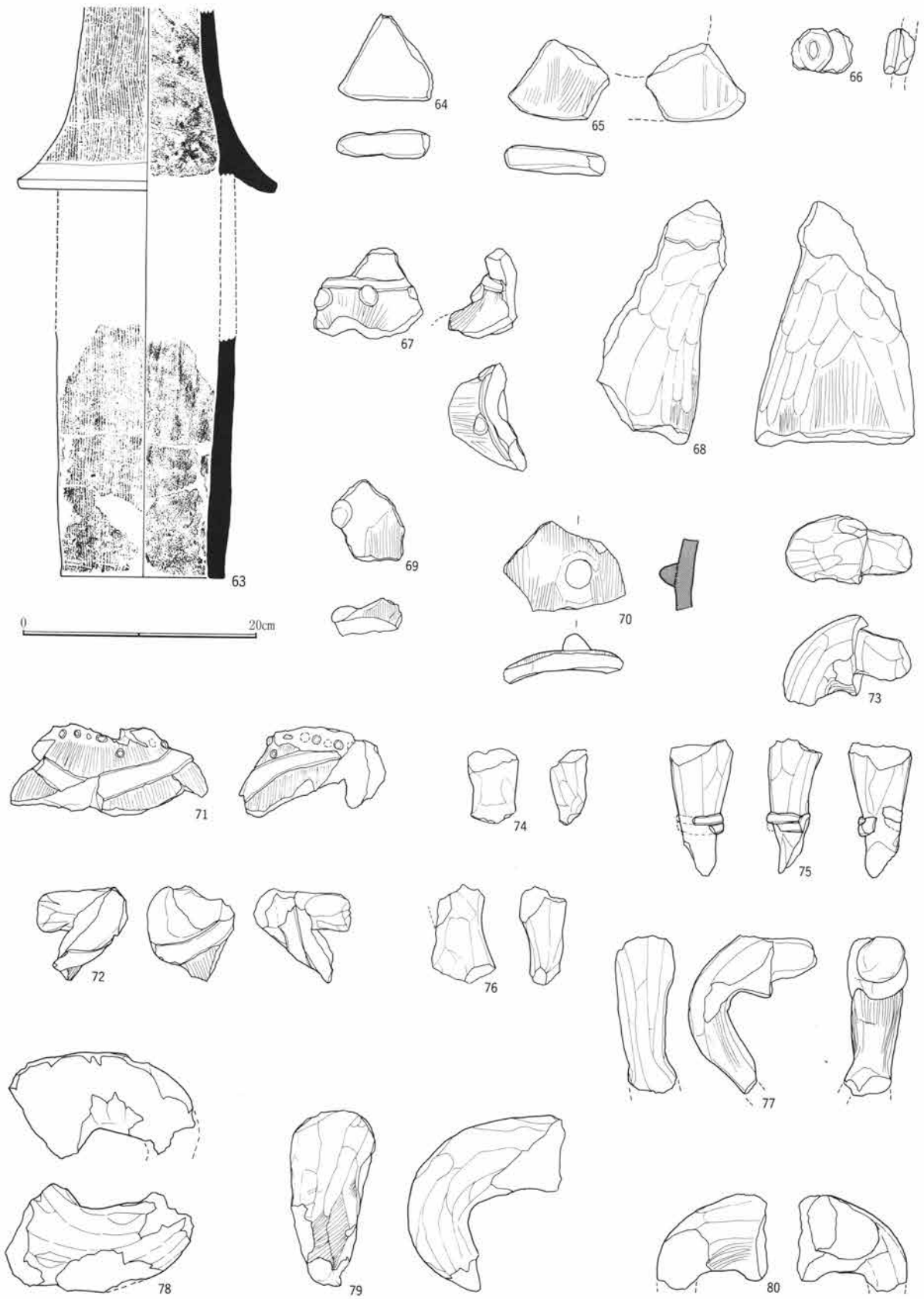
男子像として特定できるのは81である。外面に斜めに貼付されている棒状のものが、腰に下げた鎌と推定できるからである。

女性像の一部と理解できるものはいくつかある。まず、69・70は乳房の表現で、小粒の突起を貼付している。同形同大であるから同一個体の左右であるかもしれない。

71・72は同一個体と思われる。幅1.5cmの粘土帯を纏掛けにしている女性像であり、小づくりである。首の付け根には首飾りをあらわす径7mmの円形の粒が貼付されている。

この他では、64・65・66が女性像に伴うものである。このうち、64・65は島田髷の破片で、形状の差から別個体と思われる。66は耳環の部分であり、粗雑な作りである。

男女の別を特定できないものの中で注意されるものとしては、67・75がある。67は首から肩にかけての破片であるが、首飾りが特徴的である。首の付け根には紐状のもので一周させており、その下端に



第139図 2号古墳人物埴輪片(1)

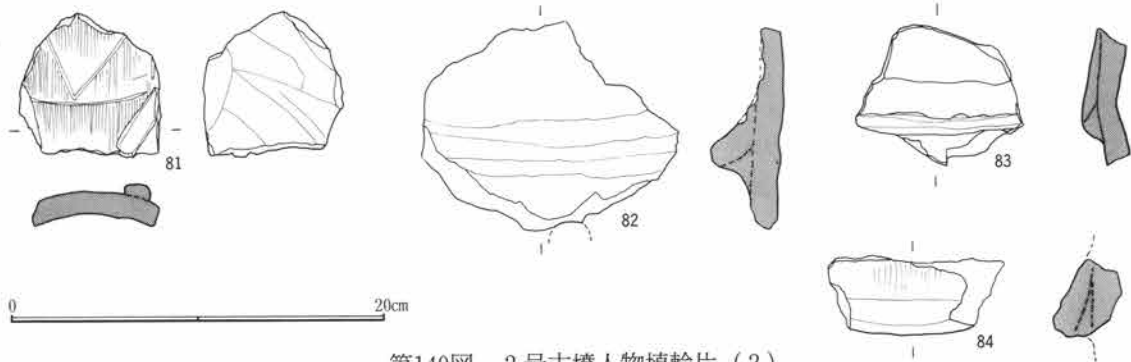
III 天引口明塚遺跡の調査

沿って3cmほどの間隔で玉を表した浮文が貼付されている。75は腕から手に掛けての破片であるが、手首の部分には、腕輪を表した2条の幅狭の粘土紐が取り巻いている。また、手の平は何か押し当てられていたように平らである。

手の平のあるもので見る限り、下條例のように、指を一本一本表現しているものは認められない。

最後に上着の裾部にあたる破片が63・82・83・84の4点あるが、その形態的特徴からいずれも別個体と思われる。

以上、破片の内容からしても、これらが極めてバラエティーに富むものであったことを十分窺うことができよう。



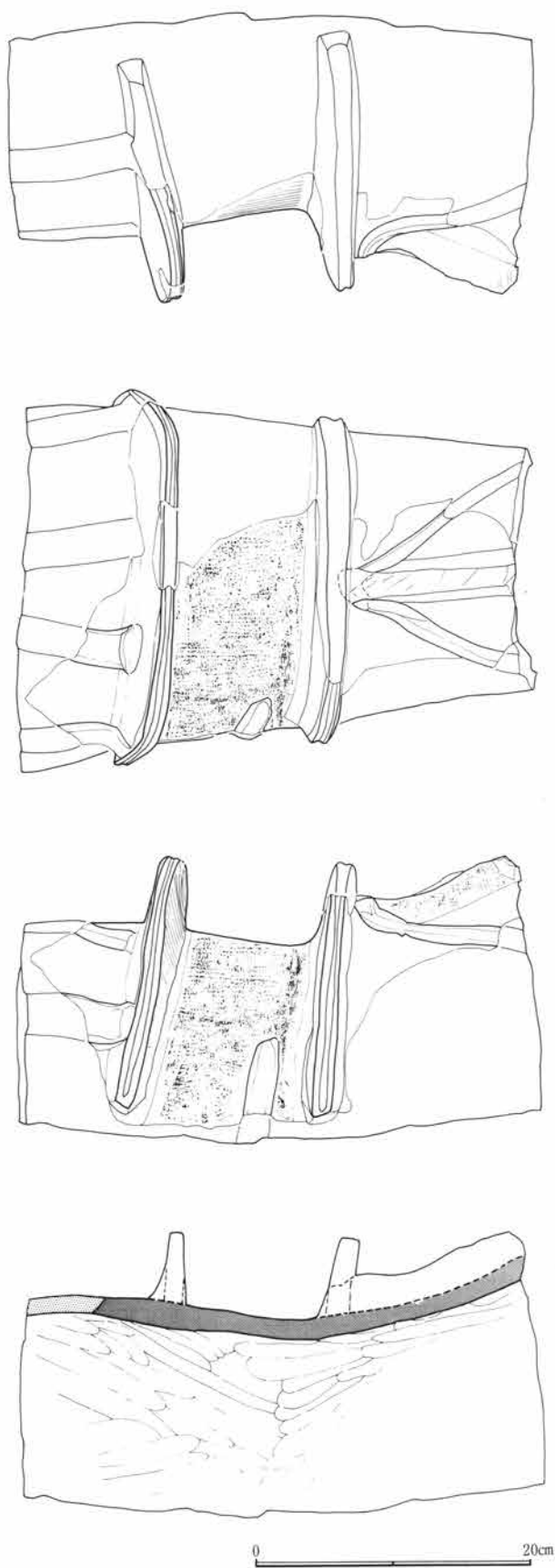
第140図 2号古墳人物埴輪片(2)

2号古墳出土人物埴輪観察表

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
63	人物下半部	縦 20.8 横 22.4 器厚1.9	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	10	人物の上半身像である。衣服等の細部の表現を一切欠いている。外面縦ハケ、内面衣服部分斜め縦指ナデ。基部縦指ナデ。	
64	人物女性像 髪	縦 5.4 横 6.5 器厚1.5	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		板状に成形し、内外面ともナデ整形後、端部横ナデ。端部は直線状をなしている。	
65	人物女性像 髪	縦 5.3 横 7.0 器厚1.7	胎 C 焼 ややあまい 色 橙色		板状を呈し、端部はやや曲線気味である。表面はハケ整形後、端部をナデ整形する。	
66	人物 耳環	縦 3.0 横 4.1 器厚1.5	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		筒形を成す本体の側面に、耳環を表す円形の粘土帯を押圧貼付する。	
67	人物 肩から首	縦 5.2 横 7.4 器厚1.7	胎 B 焼 良好 色 明赤褐色	9	首飾りが首の付け根に廻るが、紐状のものを廻らし、その下端を疎な間隔で玉を表わす円形浮文の貼付が見られる。	外面ハケ整形後、部分的にナデ内面指ナデ
68	人物 上半身	縦 16.5 横 8.8 器厚1.4	胎 D 焼 良好 色 明赤褐色		人物の左側の腰から脇の下にかけての部分外面ハケ整形後部分的にナデ。内面縦指ナデ。	
69	人物女性像 胸	縦 5.6 横 5.0 器厚1.3	胎 B 焼 ふつう 色 赤褐色	9	外面縦ハケ、内面指ナデの本体に、乳首を表わす山形の粘土を貼付しナデ整形している。	
70	人物女性像 胸	縦 9.1 横 8.4 器厚2.5	胎 B 焼 良好 色 赤褐色	10	外面縦ハケ、内面指ナデの体部に山形突起を貼付して乳首を表現。	

3. 2号古墳の調査

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
71	人物胸部	縦 5.9 横 13.5 器厚1.6	胎 D 焼 ふつう 色 明赤褐色	10	幅1.8cmの薄い帯を纏掛けにしている。首の付け根には径6.5mmの円形浮文を密に貼付して廻らし、首飾りを表わす。体部の外面ハケ整形、内面指ナデ。	
72	人物脇の下	縦 6.5 横 5.8 器厚2.0	胎 D 焼 ふつう 色 橙色		脇の下を粘土帯による帯が廻る。腕の肩への装着部分が残る。	
73	人物腕	縦 6.2 横 8.8 器厚4.6	胎 C 焼 ややあまい 色 橙色		肩の部分で人物本体に装着している。表面はハケ整形後ナデ。	
74	人物手	縦 5.1 横 3.1 器厚2.4	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		手首の部分でくびれ、厚さも薄くなる。外面ナデ整形	
75	人物腕～手	縦 9.2 横 4.3 器厚3.3	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		手首に腕輪が2重に廻る。手の平は平坦になっており、何らかのものに当てていたことがわかる。表面ナデ整形。	
76	人物手首周辺	縦 6.8 横 4.3 器厚3.2	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		手首を境に薄くなり、手の表現をしている。手の平は平坦に仕上げられており、腰の付近に当てていたものを推定される。	
77	人物腕	縦 10.7 横 4.0 器厚4.3	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		人物本体の真横に出て、腰部に連なる物である。外面はハケ整形後脇の下を覗いてナデ整形。	
78	人物腕	縦 6.9 横 13.0 器厚4.7	胎 C 焼 良好 色 橙色		肩から水平に前へ出ている。肉厚の部類に属する腕である。全体に焼ヒビが目立つ。	
79	人物腕(右)	縦 12.0 横 5.7 器厚4.7	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		肩から真横に出た腕は、腰に向けて折れ曲がっている。外面は全体にナデ整形。	
80	人物肩	縦 6.5 横 7.5 器厚3.8	胎 D 焼 ふつう 色 明赤褐色		外面ハケ整形後ナデ。肩から真横に出た腕は、先に行くにつれ前方へ出て行く。	
81	人物?	縦 7.6 横 7.5 器厚1.2	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色	11	筒形の本体で外面縦ハケ、内面斜めヘラ削り。表面に鋸歯状の線刻を施し、斜めに棒状の粘土を貼付する。	
82	人物衣服裾	縦 10.9 横 13.6 器厚4.2	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		円筒形の本体に斜めに粘土帯を廻らし、隙間に粘土を充填している。裾下側に円形の透孔が穿たれる。外面ナデ、内面斜め指ナデ。	
83	人物衣服裾	縦 7.2 横 8.4 器厚2.1	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		裾部を表現する為の粘土帯の貼付痕が外面に残る。やや粗雑な作り。外面ナデ。内面指ナデ。	
84	人物衣服裾	縦 4.4 横 9.5 器厚2.5	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		外面縦ハケ後、端部を横ナデ。	



第141図 2号古墳馬(85)

馬形埴輪 85は本墳から出土した埴輪資料の中では最も大きい破片であった。これ以外に、周辺から多くの馬形埴輪の一部と思われる破片が出土している。大まかな様相からすると、鞍、鈴、尻部の破片等から、2つのグループに分けられるので、最低2頭以上が存在していたことは明らかである。さらに鞍の部分について検討していくと3個体以上存在した可能性が強い。

85は鞍とその前後の背中の破片である。全体に厚手であり、下條1・2号の馬形に見られた繊細さはない。鞍橋は、前・後輪とも端部に丸味を持たせたものであり、覆輪に鉾の表現は認められない。たて髪と前輪との接続部に両側から手綱がきいている点は一般的である。

前輪寄りの右側部には、輪鐙のつり下げ部分を表す縦位の帯が貼付されている。

尻繫は後輪の背後から平行して4条が出ており、帯の幅は3cmと幅広である。

胎土・色調・焼成の比較からすれば、中空で頂部中心に刻みの入る94・97・99のタイプの鈴が伴うものと思われる。

外面は全体にハケ整形をそのまま残しており、内面は、前後の両方向から手を入れて指ナデをした痕跡をよく残している。

93は後輪から腰にかけての右側部の破片であり、85とは別個体である。後輪は、85のものより薄手でシャープなつくりであり、覆輪の頂部に笠鉾をあらわす浮文が貼付されている。後輪の背後に連なる尻繫の帯は、部位により幅に広狭があり、よりリアルな表現を示している。後輪との接続部には、接続の金具を表していると思われる径1.3cmの円形の貼付が認められる。これに伴う鈴は、中実で、刻みの施されないものであり、92・96・98が伴うことがわかる。

3頭目の馬の存在を知ることができるのは、88・90の鞍橋である。85・93に較べて薄手であり、外面を全体にナデ整形している点の特徴である。覆輪の鉾留の表現は認められない。

3. 2号古墳の調査



第142図 2号古墳馬形埴輪片(1)

III 天引口明塚遺跡の調査



第143図 2号古墳馬形埴輪片(2)

次に上記の3頭のいずれに属するかは確定できないが、特徴的な破片について見ておくことにする。

86は顔の部分の破片である。鼻孔が先端に接する位置にあけられているのが特徴であり、鏡板は素環式で、面繫、引手とも丁寧に取り付けられている。筒形の本体の側部に取り付けられる顎の表現はわずかである。

87は耳の破片である。粘土板を折り曲げて径3.5cmの円筒形につくり、上端寄りを斜めに切り落としている。

101は尻部の破片である。尻尾の下にあたると思われる位置には不整形な径2.5cmの孔があいている。周囲は指で強くこすって整形している。

102も同じく尻部の破片である。尻尾の部分をわず

かに残しているが、尻本体から造り出した中空の尻尾であったことがわかる。尻尾の下側を取り巻いている尻繫の帯は幅3cmを測る。その下側には径約3cmの円形の孔があいており、内側に強くこすり付けたナデの痕跡を残している。

116は雲珠が推定される。中空であり、頂部に小突起が付いている。

胎土・焼成・色調等の検討から帰属関係を推定するならば、86・101は85に伴い、102は93に、87・116は88・90に属するものと思われる。

推定された3頭分の馬形埴輪は、細部で異なる点が若干認められるものの、基本的にはよく似たものであり、下條古墳例に較べてつくりが大味で、リアルさに欠ける点が指摘できよう。

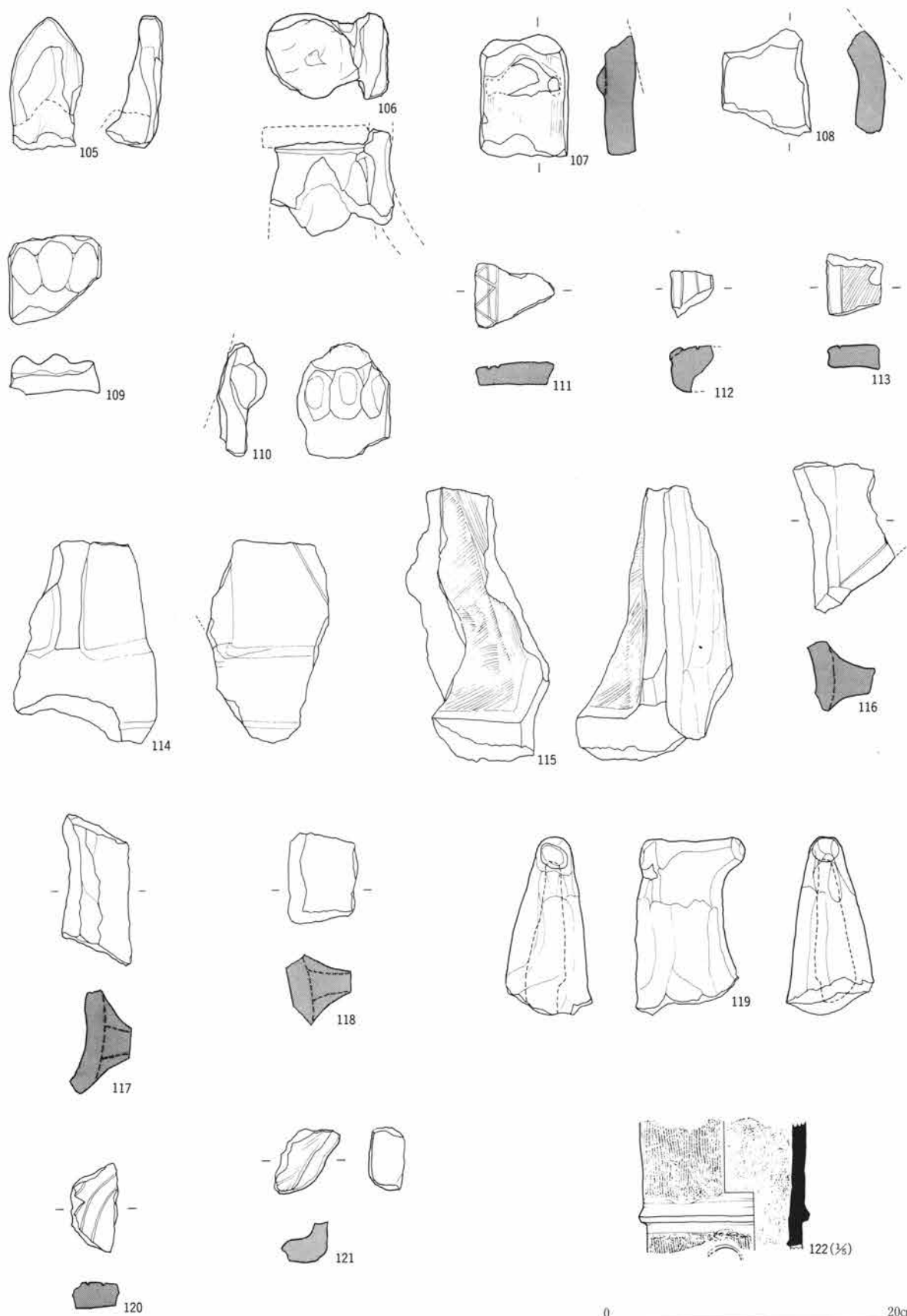
2号古墳出土馬形埴輪観察表

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
85	馬鞍	縦(21.0) 横(37.5) 奥行(27.5)	胎 D 焼 良好 色 赤褐色	7~9	本文参照	
86	馬顔	縦 17.7 横 9.5 器厚1.5	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体に顎の部分を表わす粘土板を付けた。鏡板は素環であり、その前方に口を表わす刻みが入る。外面ナデ、内面粗雑な指ナデの為粘土紐痕を明瞭に残している。	
87	馬耳	縦 7.5 横 4.2 器厚1.6	胎 D 焼 あまい 色 橙色		粘土帯を折り曲げて筒状に作り、上端を斜めに輪切りしている。	
88	馬鞍	縦 8.6 横 8.5 器厚1.4	胎 C 焼 あまい 色 橙色		表面不定方向のハケ整形後端部を横ナデ。下端部に帯の接続痕があり、位置関係から、後輪の右側部であることがわかる。	
89	馬鞍	縦 8.0 横 11.8 器厚1.5	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		板状に作った端部を横ナデ整形し、器面はハケ整形後ナデ。	
90	馬鞍	縦 7.2 横 5.5 器厚1.3	胎 C 焼 あまい 色 橙色		器面はハケ整形後ナデ。端部は横ナデにより面取りをしている。	

3. 2号古墳の調査

No	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
91	馬 たて髪	縦 9.8 横 6.8 器厚2.3	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		筒形に作られた本体の側部に長軸と平行して接合されている。外面ナデ整形。	
92	馬 尻上部	縦 7.8 横 10.3 器厚1.4	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		外面ナデ、内面指ナデ。団子状の鈴を貼付し、低く幅広い粘土帯の貼付により革帯を表わす。	
93	馬 尻部 右側部	縦 14.5 横 24.1 器厚1.3	胎 D 焼 良好 色 赤褐色	10	外面下半縦ハケ 内面横～斜め横指ナデ。幅広く低い粘土帯により革帯を表わし、団子状の粘土塊により鈴を表現する鞍後輪と帯との接続部には鋳を表わした浮文が貼付される。	
94	馬 鈴	縦 4.7 横 4.3	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		中空作りで、横方向に刻みを入れる。外面ナデ整形。	
95	馬 雲珠の半球 部 ?	縦 4.6 横 4.8	胎 C 焼 あまい 色 橙色		中空の作りで、頂部に小突起を貼付する。外面ナデ。	
96	馬 胸の部分鈴	縦 6.8 横 5.6 器厚1.2	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		外面ナデ、内面指ナデ。団子状の鈴を革帯の下端の上に貼付している。	
97	馬 鈴	縦 5.4 横 5.5	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		中空作りと推定され、横方向に刻みを入れる。外面ナデ整形。	
98	馬 鈴	縦 4.1 横 4.4	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		団子状の粘土塊で、外面ナデ整形。	
99	馬 鈴	縦 2.1 横 3.9	胎 B 焼 あまい 色 橙色		中空作りで、刻みを入れて表現している。外面ナデ整形。	
100	馬 胸の帯	縦 7.3 横 7.4 器厚1.6	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		筒形を成す本体に鋸歯文を線刻した粘土帯を横巻きしている。外面ナデ、内面縦指ナデ。	
101	馬 尻後部	縦 11.7 横 15.6 器厚1.8	胎 D 焼 ふつう 色 橙色		下端部は後足との接続部、尻尾下に円形の透孔を穿つ。外面ハケ整形後、部分的に指ナデ。内面指ナデ。	
102	馬 尻後部	縦 13.5 横 14.5 器厚 1.5~2.3	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		尻尾下に円形の透孔を穿つ。尻尾の根元を革帯を模した幅広く低い粘土帯が取り巻いている。外面ハケ整形後ナデ。内面指ナデ。	
103	馬の胴体に 障泥が取り 付く部分	縦 7.3 横 10.3 器厚3.1	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		胴から腹部にかけての本体の側面に障泥の下端を取り付けている。障泥の縁部は隆帯で区画している。外面はナデ整形、内面は指ナデ。	
104	馬 (障泥)	縦 4.5 横 7.4 器厚1.2	胎 焼 良好 色 赤褐色		板状で隅部を隅丸の直角にしている。端部は横ナデにより面取りし、鋳を表わしたと思われる浮文が貼付されている。裏面はやや粗い調整である。	

III 天引口明塚遺跡の調査



第144図 2号古墳器財形埴輪片

器財形埴輪、その他 主なものとしては、太刀・盾・靱があり、家が推定されるものも認められる。

太刀は最低2個体分が認められる。一つは105・109・110で106もこれらに属することが推定される。勾金部分の厚さが1.2cmであり、その長軸に直交して三輪玉が取り付けられている。玉の形状が縦長で銀杏状を呈しており、三つの玉の大きさがほぼ同一である点が特徴である。勾金の先端部(105)は、木の葉状あるいは馬の耳状に尖っている。

もう一個体は107・108である。勾金の厚さが1.9cmと肉厚であり、やはり長軸に直交して三輪玉が取り付けられている。三輪玉は中心のものが大きく、両側にくるものが小粒である点で前述のものとは異なっている。

117・118は盾の本体と翼部の接合部の破片である。111は翼部の側部に沿って線刻により縁取りされたものが推定されるが、確かではない。

114・115・116は靱形埴輪の破片である。114は矢筒の下寄り部分で、側面に翼状の粘土板が接合されている。本体には横巻きに幅6cmの帯が取り巻くが、表面のみであり、裏面には及ばない。表面の中央には、結び紐の一部と思われる線刻が認められる。表面は丁寧にナデ整形されているが、裏面の整形はやや粗雑である。

115も同様に矢筒の下寄りの破片である。表面には

横方向のハケ整形がしっかりと残るのに対し、裏面は粗雑な縦指ナデである。下側に帯が横巻きにされているが、やはり表面のみで、裏面に及ばない。

116も同様の破片である。翼部の下端に沿って線刻が施されており、表裏ともハケ整形されている。

114・116については、実測図で示した上下が逆転し、矢筒部の下にくる基部寄りの破片である可能性も残している。

122は円筒形を呈するが、透孔付近の直径が14cmと小さいことから、円筒埴輪である可能性は少ない。太刀形埴輪の基部が考えられるところである。

121は板状を呈する破片の先端を約90度折り曲げている。その折り曲げた面は、斜めの位置を取ることが推定される。そこで考えられるのは、家形埴輪の切妻部分で、破風の下端寄りの破片の可能性である。

119は具体的な種類を特定できなかったものである。中空で横断面は長円形に近いものである。その下端を見ると、別づくりの本体の頂部に取り付けられていたものであることがわかる。考えられるのは、人物の頭頂部に取り付けられていたものである。管見の限りでは類例を知らないので、断定はできない。

これまで見てきたものの他に、形象埴輪であることを推定させる小破片が数多くあり、それらが多量に及ぶものであったことを窺わせている。

2号古墳出土器財形埴輪観察表

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
105	太刀 勾	縦 9.0 横 4.9 器厚1.4	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		勾金の先端寄りの部分。表裏ともナデ整形。根元を帯状のものが取り巻いていた痕跡。	
106	太刀 把	縦 7.1 横 8.5 器厚8.1	胎 C 焼 ややあまい 色 橙色		筒形を呈する本体に把頭部分を差し込み、その後勾金を取り付けている。	
107	太刀 勾	縦 8.3 横 6.0 器厚2.7	胎 B 焼 あまい 色 橙色		板状を呈し、表面はハケ整形後ナデ。長軸に直交して貼付される三輪玉は両側が中央のものより小さい。	
108	太刀 勾	縦 7.3 横 6.1 器厚2.0	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		勾金の下寄り部分。板状を呈し、ハケ整形後ナデ。本体への接続痕を残す。	

III 天引口明塚遺跡の調査

No.	種類	法量(cm)	胎土・焼成・色調	刷毛目	器形・成形・整形の特徴	備考
109	太 勾 刀 金	縦 6.2 横 6.3 器厚1.2	胎 B 焼 ややあまい 色 橙色		板状を呈し、表裏ともナデ整形。長軸に直交して貼付される三輪玉は、三つの大きさが同じ位の大きさ。	
110	太 勾 刀 金	縦 7.9 横 6.5 器厚1.4	胎 C 焼 ふつう 色 橙色		勾金の上寄り部分。内外ともナデ整形で、長軸と直交する方向に三輪玉を貼付する。	
111	盾	縦 4.5 横 5.5 器厚1.5	胎 C 焼 良好 色 赤褐色		表裏ともハケ整形後、端部ナデ。端部に沿って線刻し間に鋸歯文を施している。	
112	靱 ?	縦 3.2 横 3.0 器厚2.3	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		板状を成し端部を粘土紐の貼付により縁取りする。表面に縦位の線刻があり弓矢の表現と思われる。	
113	盾 ?	縦 4.3 横 3.4 器厚1.5	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		板状で緩やかに内湾する。表裏面ともハケ、端部ナデ。表面の縁部に沿って線刻。	
114	靱	縦 14.0 横 8.5 器厚2.0	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体に板状の側部を縦位に取り付ける。上寄りに粘土帯が横位に取り巻く。表面に刻線を施す。表面縦ハケ、内面指ナデ。	
115	靱	縦 18.7 横 11.0 器厚1.8	胎 D 焼 良好 色		円筒形の本体に板状の側部が取り付く。又下寄りに幅広の粘土帯が取り巻く。表面はハケ整形であり、裏面は縦指ナデ本体での視覚面とならないことがわかる。	
116	靱	縦 10.3 横 7.0 器厚1.6	胎 D 焼 良好 色 鈍い明赤褐色		円筒形の本体に板状の側部が取り付く。側部は表裏面ともハケ整形、表面の縁部に沿って線刻。	
117	盾	縦 10.3 横 4.7 器厚3.2	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体に板状の側部を縦位に接合している。	
118	盾	縦 6.2 横 4.9 器厚1.8	胎 D 焼 良好 色 赤褐色		円筒形の本体に板状の側部を縦位に取り付ける。	
119	不 明	縦 12.2 横 7.1 器厚2.0	胎 C 焼 良好 色 明赤褐色		これより大きい本体の上に取り付く部分と思われる。中空で外面ナデ整形。鳥の頭部、人物の頭の髪の部分等が推測されるが、具体的な表現を欠くため不明。	
120	不 明	縦 6.1 横 3.3 器厚1.5	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		外面ナデ、内面指ナデ。外面に弧状の線刻を何重にも施す。	
121	家	縦 4.3 横 4.5 器厚2.7	胎 B 焼 良好 色 赤褐色		家の屋根の妻側の端部と思われる。内外ともハケ整形後外側へ折り曲げ、ナデ整形を施す。	
122	形象器財?	高 11.0 径 14.7 器厚1.8	胎 B 焼 ふつう 色 橙色		外面縦ハケ、内面縦指ナデ。	形象の基部か？ 外面透孔の上側に ヘラ描き

4. 中近世堅穴状遺構

2号古墳の西側の周堀に重複して堅穴住居跡状の遺構が確認された。

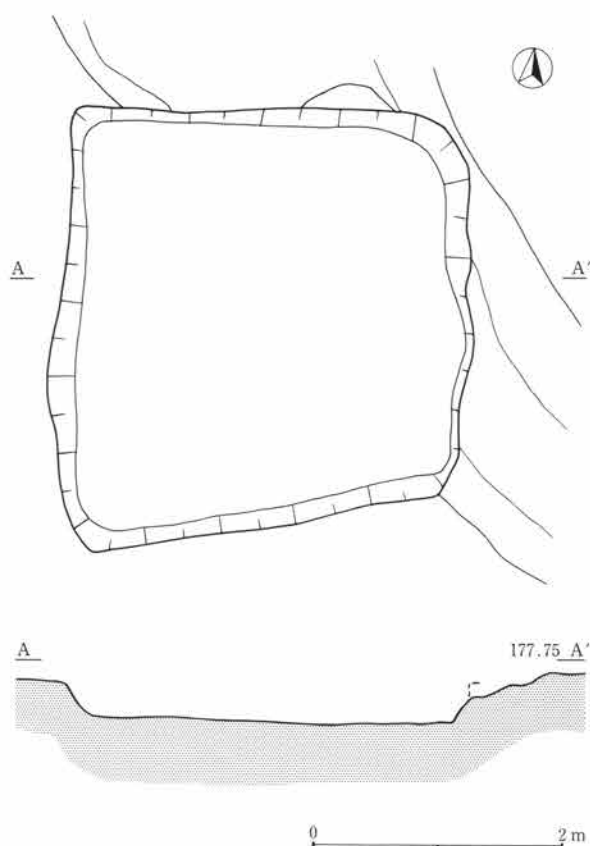
主軸をほぼ南北に取るもので、南北長は東側で3.0m、西側で3.54mで、東西長は3.3mを測る。平面プランはほぼ正方形に近いものであるが、南側辺がくずれている。深さは現状で27cmを測るが、本来はさらに深いものであったと推定される。

形状的には平安以前の堅穴住居跡に近い形態を示しているが、カマド等の施設はまったく認められなかった。

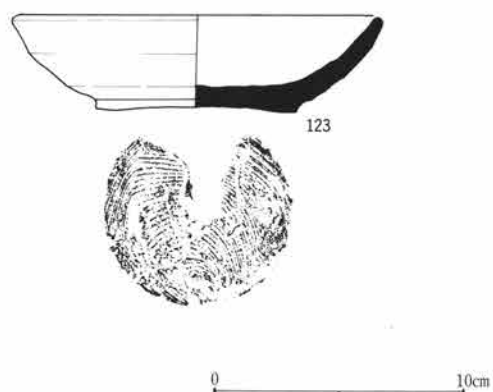
遺構内を埋めていた覆土は、古墳の周堀のそれとほとんど大差のないものであり、またその覆土中から出土している遺物も埴輪片のみであったため、調査中は当然周堀の一部であると考えて掘っていた。ところで、調査途中で方形の区画が明らかになってきたことから、別の遺構であることがわかった。

この遺構に直接伴う遺物は皆無に近かった。そのような中で、底面近くからわずか1点であるが、青磁小破片（担当の不注意により、実物が行方不明である）が出土している。また、146図にかかげた土師質皿は、古墳の周堀内から出土したものであるが、その時期は青磁片と共に中世以降のものと思われる。量的には少ないが、この2点が遺構の年代を示すものと思われる。

遺構の形態的特徴からすると、群馬県地域で中世後半期を中心に認められる「堅穴状遺構」と呼称されているものに、規模・形状ともによく似ている。ただし、この周辺一帯では、中近世に位置づけられるような遺構は、これ以外まったく確認されなかった。



第145図 中近世堅穴状遺構



第146図 2号古墳周堀出土中近世遺物

2号古墳周堀内出土土器観察表

No	器種	出土位置	計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・成形・整形の特徴	備考
123	土師質土器	2号古墳周堀	口径 14.8 高さ 3.8 底径 7.8	胎 結晶片岩少量含み、砂粒混じる 焼 ふつう酸化 焼成 色 鈍い橙色	内外とも横ナデ、底部は糸切り未調整。	

IV 考 察

1. 出土埴輪の特徴と その意義

(1) はじめに

今回の神保下條遺跡の調査に先立って現地を訪れた際、古墳の周囲から比較的まとまった量の埴輪片が採集された。その中には形象埴輪と思われるものもいくつか混じていた。

私は、それ以前から、東国の古墳時代後期の群集墳を構成するような小型古墳における埴輪のあり方に大いに興味を持っており、いくつかの小文の中でもこのことについて言及したことがあった⁽¹⁾。そこでこの主たる論点を述べれば以下のようなものである。

東国、とりわけ上野地域では、5世紀後半の段階に、古墳への埴輪樹立に大きな画期を見い出せる。具体的には、この時期から急激に、しかも広範に成立を見る群集墳中の小型古墳にも埴輪が採用されるようになり、樹立対象古墳が大幅に増加したことである。

この段階と期を一にして埴輪自体の内容にも大きな変化があった。人物・動物（特に馬）埴輪が新たに加わったことである。このことは、埴輪祭祀のあり方にも大きな変化があったことを示すものである。

埴輪樹立古墳の急激な増加は、大量需要に答えられる組織的な生産体制の整備があってはじめて実現されるものである。このことを裏付けるように、この時期になると、窖窯焼成による定型化した埴輪へと一斉に変化していく。

6世紀に入り、横穴式石室を主体部とするようになると、埴輪を樹立する古墳はさらに増加する。この時期に築造された古墳の大半のものが埴輪を有していたと言っても過言ではない。この動きは6世紀後半以降に特に顕著であり、しかも充実した内容を

誇っている点が特徴的である。

6世紀末葉ないし7世紀初頭に築造されたものを最後に、前方後円墳は消滅する。当地域の場合、前方後円墳の消滅と表裏の関係で埴輪も消滅する。直前の異常な充実ぶりからするならば、この消滅が外的な要因にもとづいていることは明らかである。このことに当地域の7世紀の古墳動向を併せて考えると、この過程が大和政権による中央集権的な地域再編成の動きと密接に結びついたものであったことがわかる。地域首長の支配下において独自の地域の展開を遂げていた埴輪祭祀に強い規制が及んだのは、当然の帰結であったわけである。

以上のように、古墳時代後期の当地域の埴輪は、極めて特色あるあり方を示している。この時期の埴輪研究をより深化させることが、上野地域の、ひいては東国の地域性をより具体的に把握していくために極めて有効な道りであることがわかる。

それには、基礎資料となる個々の古墳における埴輪の実態を正確に把握する作業が何をおいてもまず必要になってくる。ここでは、下條1・2号古墳、口明塚2号古墳で行なった調査・整理方法を紹介し、あわせて、その結果得られた出土埴輪の特色と意義について述べてみたい。

(2) 調査・整理の方法

調査 鎭川流域の横穴式石室は、結晶片岩の川原石を駆使して墳丘を構築しているため、その崩壊に伴って、墳頂部、基壇面に樹立されている埴輪列を破壊し、墳丘裾部へと押しやるケースが多い。出土埴輪の多くは原位置を保っていないことから、埴輪の配置形態を直接的に把握することはかなり困難である。墳丘裾部に足の踏み場もないほどに散乱して出土した無数の埴輪片を目の当たりにした時、どう処理するかとまどった。しかし、整理作業の中での接合関係の追及により、墳丘での配置復元が可能であることを確信し、時間がかかりかかるのを覚悟で、

1. 出土埴輪の特徴とその意義

1点1点の位置を記録して取り上げた。

また、わずかではあるが、基部が原位置で出土したものがあつた。その場合、後の接合作業で完形に近く復元できた時、正しく埴輪の樹立の向きを把握できるように、出土方位を記録していった。

一方、調査途上で常に当初の配置形態に見直しをつけることを念頭において、1点1点の埴輪の種類を可能な限り特定していったことが、後の整理作業に多いに役立った。

口明塚2号古墳の場合、下條1・2号古墳より大幅に条件が悪く、墳丘は完全に削平され、周堀の中から無数の小破片が出土した。ここでは、この小破片だけが手掛かりであるから、1点1点の出土位置の記録はなおさら必要であつた。報文中でも述べたように、配置形態をかなり具体的に推測することができたと、またそのことから、完全に消失してしまっていた主体部が横穴式石室であつたことを確実にすることができた。

整理 上野地域の後期古墳では、小型古墳の場合でも樹立される埴輪の総量は夥しい量にのぼる。調査範囲が全体の5分の1ほどに過ぎなかった下條2号古墳でも、少なくとも人物が13ないし14、馬が3、家が2、太刀が5、盾が4、靱が4、軛が4個体存在していたことが確認された。また、これに基壇縁辺部を全周していたと思われる円筒埴輪が加わるとその当初の総量は大変な量であつたことがわかる。

発掘調査によって、当初古墳に樹立されていた総体が得られることなど、遺跡の内容は異なるが、黒井峯遺跡のような特殊事情でも介入しない限り、皆無に近い。かつて私が調査を経験した千葉県佐原市の片野古墳群⁽²⁾の場合、墳丘には一切葺石が施されず、全てローム質の土のみで築成されていたため、極めて遺存状況のよい埴輪列を確認することができたが、それでも盛土の崩落によって欠落している部分が多かつた。

一個体の埴輪は多くの破片に分解している場合が大半であり、欠落している部分も多い。また、わずかな部分しか残っていない場合も多い。これらは、

多種類、大量の埴輪片として混在状態にあるわけであるから、ここから各個体にたどりつくまでには並大抵の時間ではすまないであろうことは十分に予測された。

整理作業はまず、円筒と形象の分類から開始した。その際、円筒の中には形象の基部(人物・太刀・盾・靱・軛)、馬の足が含まれていることを念頭におく必要があつた。破片が比較的大きいものであれば復元径・立ち上がりの角度・凸帯の位置等から両者を事前に区分することは可能であつた。

次に2つに分類したそれぞれについて接合作業を行なつた。極論すれば、調査で得られた埴輪片の全てが相互に接合する可能性を含んでいるのであるから、その全体を広げられるできる限り広いスペースがあるにこしたことはない。幸いにも、2間6間の簡易プレハブが6ヶ月間ほど確保できたので、そこで個体別の分類作業を進めた。

形象埴輪の場合、各種類に特徴的な部位であれば容易に分類することが可能であるが、むしろそのようなものの方が数は少ない。結局、他の具体的な形象埴輪の資料をできるだけ数多く観察する機会をつくる以外に方法はない。このことによってわからなかつた破片について種類を特定できたものも多かつた。そしてあとは、破片の微細な特徴(胎土・色調・厚さ・内外面の調整)から、一点一点根気よく追跡していくしか方法はなかつた。一方、接合関係にある程度まとまりが出てくると、足りない部分が限定されてくるため、それ以前よりは探索が容易になってくる。接合の限界をクリアできた時に、さらにもう一歩進展させられることがわかる。この単調な繰り返しの作業にいかにか時間がかけられるかに、埴輪の種類・数量のより正確な把握はかかっている。

個々の埴輪の構造的特徴を知るためには、内面・断面から得られる情報も大きな比重を占める。そこで、復元途中での内面・断面の実測、写真撮影を必要に応じてその都度行なつた。また、製作工程上でそれぞれを別途につくり、その後合体して一つの個体に仕上げているものが多かつたので、これにつ

IV 考 察

いては合体以前のデータをできる限り実測・写真に記録していった。

埴輪を出土した古墳の中では最も遺存状態のよかった下條2号古墳の場合でも、個々の埴輪について見ると、破片が大幅に足りない場合が多かった。それでも、石膏により欠落部分を補いながら、積極的に復元を行なった。時間を費やして、あえてこのことを行なったことには、大きく二つの理由がある。一つは、種類ごとに複数個体分あるものが多かったため、欠落部分の構造を別個体から推測して補完できたからである。復元作業の工程は、実際の埴輪製作の手法・工程を分析していく上できわめて有効であった。もう一つの理由は、形象埴輪の場合、一般に馴染みの深い遺物であるため、展示等の文化財の啓蒙普及に活用される場合が多い。そのためにも、できる限り復元しておくことが必要と思われたからである。そこで、資料を移動する機会が多いことを念頭において、石膏の内部に銅線、パテ等を使用し、しっかりした補強を行なっておいた。

形象埴輪の資料化に当っては、破片資料の実測をできる限り行なった。種類ごとの細部の特徴を知ることと、種類別の数量を正確に把握するためである。

調査・整理の方法と経過を略述すれば以上のようなことである。おそらく、多くの方々が、「なんだ、当り前のことではないか」と思われたに違いない。しかし、このごくごく当り前の基礎作業が、事前に重要で良好な資料であることが認知されない限り、実際のところ行なわれていない場合が多い。その中には、そのための時間的余裕がないことも現実である。本報告で紹介した古墳は、群集墳中の一小型古墳に過ぎないものであり、整理にとりかかる以前には、ここまで具体的に一古墳の埴輪の全体像がとらえられるとは、小破片の山からは到底予測できなかった。

古墳時代東国の地域性が、後期の埴輪のあり方からアプローチされることも少なくない。しかし、その埴輪体系を支えるはずの、具体的な個々の古墳の実体が果してどこまで積み重ねられているかという、むしろ今後多くの課題を残していると言って

もよいであろう。円筒埴輪についての研究は、各地で形象埴輪に先駆けて、具体的に進められつつあるが、形象埴輪についても同様に及ぼされる必要があるだろう。

次に、埴輪に内包しているいくつかの要素について、下條1・2号古墳、口明塚2号古墳から得られた点を中心にまとめて見よう。

(3) 組 成

埴輪を出土した3古墳は、いずれも群集墳を構成する小型古墳であり、6世紀中葉から後半にかけての接近した時期に築造されたものであるから、ほぼ同じような位置を占めるものであったとしてよいであろう。

3古墳に共通する種類としては、人物男子、人物女子、馬、家、盾、靱があり、下條2号、口明塚2号に共通するものとして太刀があり、靱は下條2号のみであった。

人物は男女それぞれが複数個体あったことは明らかであり、下條2号の13~14個体というのが一つの目安になろう。口明塚2号にはこれに近い数量があったことが推測されるが、下條1号ではこれよりはかなり少なかったものと思われる。遺構の構造から人物・馬形埴輪の設置される場所が1号よりは狭く限定されていることと、大幅に失っているとはいえ実際に確認されている数が少ないことによる。

馬は、下條1号でも2個体、下條2号、口明塚2号で3個体確認できることから、最低でも2個体以上であることが言える。

家形埴輪は下條1・2号とも2個体以上あった可能性がある。それにしても、これを大きく出る数量は考えにくい。

下條2号の器財形埴輪の確認された数量は、太刀5、盾4、靱4、靱4であった。このことから、器財形を構成するものに4種類があり、同程度の比重を占めるものであったことを窺わせる。おそらく、各種類とも同数ずつ（最低でも5個体）つくられたのではなかろうか。残存状況の悪かった口明塚2号でも各種類とも複数個体あったこともこのことを示

1. 出土埴輪の特徴とその意義

していると思われる。

付編の地名表と合せて後述するが、上野地域の後期古墳の場合、器財形のうち太刀・盾・靱の3種類は比較的普遍性を有しているのに対し、鞆・髷は古墳により、また地域による差がありそうである。それゆえ、現状では確認できなかったが、下條1号にも太刀が複数個体伴っていた可能性が強い。

以上のように見てくると、6世紀中葉以降の群集墳を構成するような小型古墳にあっても、これに伴う形象埴輪は、以外に種類が豊富で、しかも各種類とも数量が豊富であったことがわかる。

直径10m前後の下條2号古墳であっても、約40個体ほどの形象埴輪とこれをはるかに上回る数量の円筒・朝顔形埴輪を有していたことが推測される。種類の異なる前方後円墳に備わっていた種類は共通してもっていたことがわかる。当該期の前方後円墳について、正確な種類と数量把握がなされたものを知らないが、新田郡新田町の二ツ山1号古墳の場合、原位置で確認されたものだけでも馬形埴輪12、家形埴輪6個体に及んでいるのであるから、両者の形象埴輪の量的な差は想像をはるかに越えるものであったと言えよう。

(4) 配置形態

埴輪の配置形態に強い関心を示して調査・研究が進められたのは、昭和4年の福島武雄らによる群馬県群馬郡箕郷町の上芝古墳、同じく群馬町八幡塚古墳の調査が本格的なものとしての早い事例⁽³⁾であろう。その後二ツ山1号古墳や千葉県芝山町の姫塚・殿塚古墳の調査を契機にして、いくつかの研究史上に残るものが刻まれたが、本質に迫り、活況を呈するまでには至らなかった。

昭和40年代に入り水野正好が、一連の論稿の中で呈示した分析⁽⁴⁾が、その後の活発な議論が展開される上で大きな刺激となったことはよく知られている。群馬県太田市塚廻り古墳群の調査・研究も、このことについて具体的に検討していく上で果たした役割は大きい。⁽⁵⁾

私もこれらの研究成果を受けて、上野地域の埴輪

の配置形態について、変遷史的に整理したことがある⁽⁶⁾。その中で特に人物・馬形埴輪出現以降の配置形態に顕著な変化の傾向があることを指摘した。今回調査した3古墳の配置形態を考えていく上でも基準になるので、まずその概要を述べることにする。

人物・馬形埴輪出現以降の埴輪の配置形態は大きく3段階（便宜上、1～3期とする）の変化を経ていると考えられる。

1期（5世紀第3四半期～5世紀末葉） 主体部を堅穴式系の埋葬施設としている。前方後円墳では墳丘外に特別の区画を設け、そこに人物・動物埴輪群を集中的に樹立する。個々の埴輪は、特定の場面で役割を演ずるように立体的に配置される。家、器財形埴輪は、従来の伝統を引いて墳頂部に主体部を取り囲むように配置される。帆立貝式古墳の場合、前方部（造り出し部）が人物・動物埴輪の配置のための特別な区画となっている。群集墳を構成するような小型円墳では、埴輪を伴う古墳は多いが、形象埴輪は含まないか、あってもわずかである。現位置で確認されたものは少ないが、白藤古墳群のV-4号古墳（径18mの円墳）では、基壇面をめぐる円筒列中から馬形埴輪が1個体出土している。

2期（6世紀初頭～中葉） 横穴式石室が主体部として採用されるようになる。この時期の前方後円墳で埴輪列が具体的に確認されている例はない。前橋市王山古墳では少なくとも基壇面から人物・動物埴輪は確認されていない。帆立貝式古墳では、1期に引き続いて前方部に人物・動物埴輪を立体的に配置し、墳頂部に家・器財形埴輪を配する。円墳では、基壇面の特定の場所に人物・馬形埴輪を集中的に配置する。その場合、小規模ながら、前代に引き続いて立体的な配置をとっているものと推測される。家・器財形埴輪を墳頂部に配置する点は前と同様である。

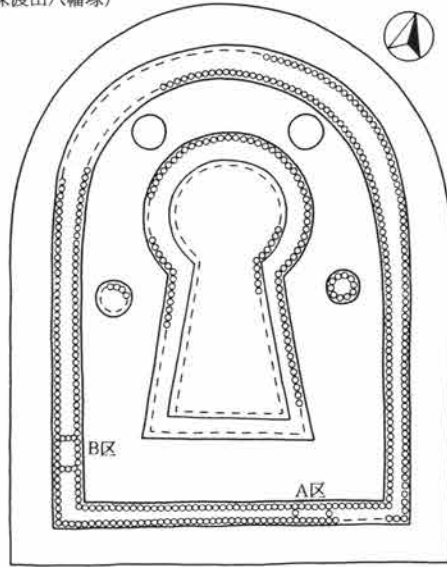
3期（6世紀後半～6世紀末葉ないし7世紀初頭） 前方後円墳では、基壇面の縁辺部に円筒列を配し、その内側に人物・動物埴輪を列状に配置する。高崎市観音山古墳では、石室入口前から左側に向けて人

IV 考 察

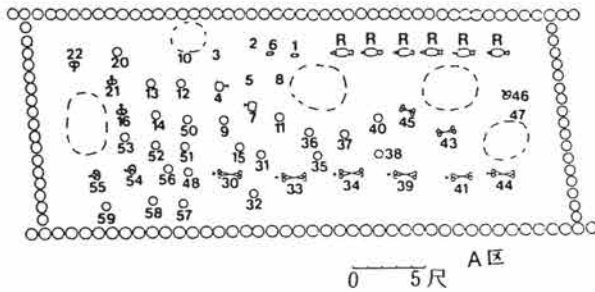
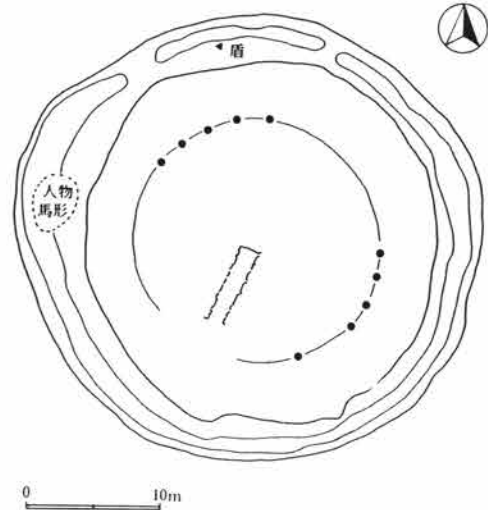
物埴輪が列をなし、馬形埴輪は前方部に配されていた。佐波郡東村雷電神社跡古墳では石室入口前から右に馬形埴輪4個体とそれらに対をなす人物(馬子)4個体が列をなしていた。新田郡新田町二ツ山1号

古墳では、石室入口前から右に馬12個体が列をなし、左側に人物2個体(本来はこれより数が多かったと推測される)が列をなしていた。人物埴輪と馬形埴輪群(馬子を含む)を別々に列状に配していたこと

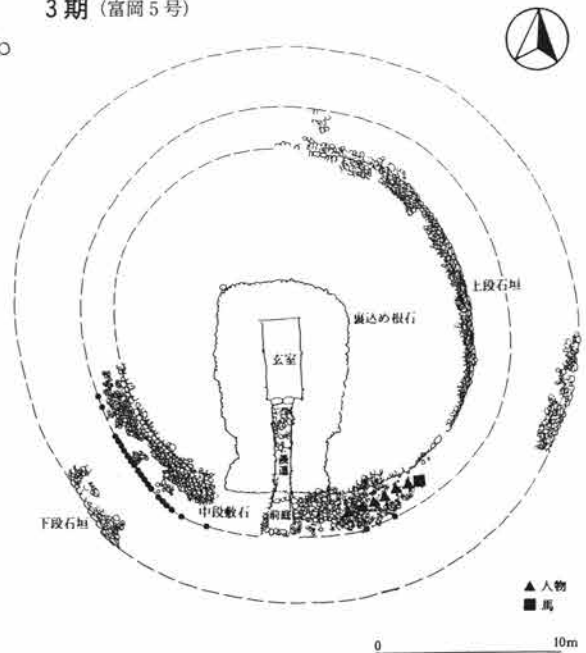
1期 (保渡田八幡塚)



2期 (五目牛4号)



3期 (富岡5号)

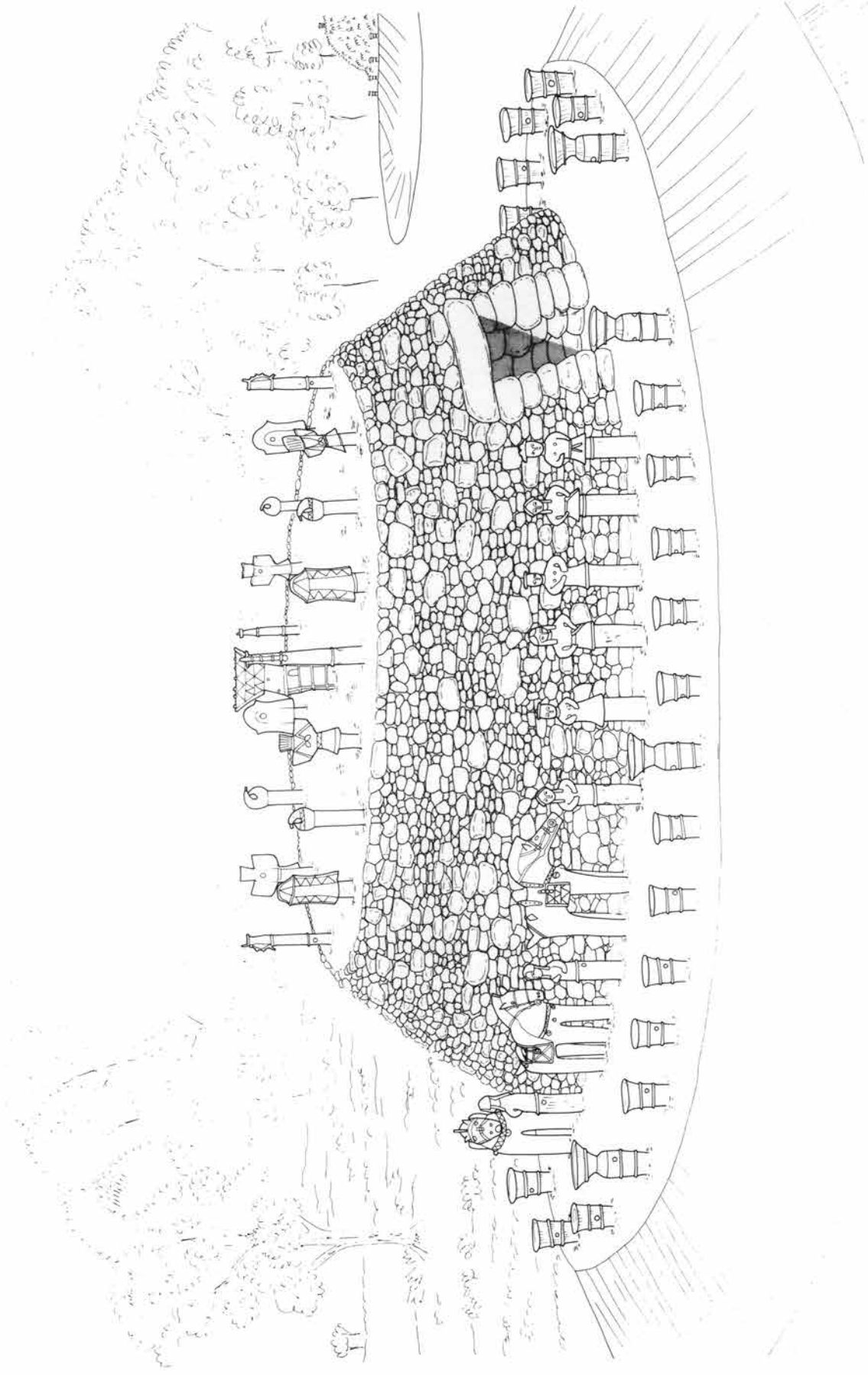


形像埴輪配置図注記

- 1 鶏 2 不明 3 女子(?) 4 椅座の女子(両手で何かを捧げ持つ) 5 男子(椅座か) 6 鶏 7 椅座の男子 8 不明 9 不明 基台部のみ 10 不明 11 不明 基部のみ 12 不明 基台部のみ 13 不明 基台部のみ 14 不明 基台部のみ 15 基台上の壺(しゃく入り) 16 武人立像 17 欠番 19 欠番 20 不明 基台部 21 小鈴付脚結の武人立像 22 武人立像 23 欠番 24 欠番 25 欠番 26 欠番 27 欠番 28 欠番 29 欠番 30 大型飾馬 31 不明 基台部のみ 32 基台部のみ 33 大型飾馬 35 不明 基台部のみ 36 不明 基台部のみ 37 不明 基台部のみ 38 不明 基台部のみ 39 小型野馬 40 不明 基台部のみ 41 小型野馬 42 欠番 43 小型野馬 44 小型野馬 45 小型野馬 46 小鈴付脚結の武人立像 47 小型猪(一面剝離痕有り) 48 短甲着装武人半身像 49 欠番 50 不明 基台部のみ 51 不明 基台部のみ 52 不明 基台部のみ 54 挂甲着装武人立像 55 小鈴付脚結の武人立像 56 短甲着装武人半身像 57 不明 基台部のみ 58 不明 基台部のみ 59 不明 基台部 R 水鳥

第147図 古墳時代後期における埴輪配置

1. 出土埴輪の特徴とその意義



第148図 下條古墳 2号埴輪配置復元図

IV 考 察

と、人物埴輪は石室入口前から左に展開していることがわかる。家・器財形埴輪は、基本的には後円部墳頂に配される。

この時期、帆立貝式古墳はほぼ姿を消す。人物・動物群を列状に配置するため、前方部を必要としなくなったことに起因している。帆立貝式古墳はこの時期大型円墳あるいは小型前方後円墳に変化していったと考えられる。群集墳を構成する小型円墳にも充実した内容の埴輪が樹立される。その配置形態は、前方後円墳のミニ版と言うにふさわしい。基壇縁辺部を円筒列がめぐり、その内側に人物・馬形埴輪を列状に配置する。前方後円墳と異なる点は、石室入口前から、片側に人物列がきて、その後ろに馬が連なる点である。このような小型古墳の場合でも、必ず墳頂部に家・器財形埴輪が配置される。

この3期を最後にして埴輪は完全に消滅する。この時期の埴輪樹立の様相は、盛行のピークを向かえたといっても過言ではない。その消滅が、外的な要因により、規制されたものであったことが、手に取るようにわかる。

下條1・2号古墳、口明塚2号古墳の埴輪配置は、基本的には前述の3期に属するものであることがわかる。と同時に、詳細に比較検討すると、古墳相互の間に微妙な違いがあることがわかる。

下條1号古墳は、基壇縁辺部に沿って円筒列がめぐらされ、その列の一部を人物・馬形埴輪の樹立位置としている。この人物・馬の置かれる部分は、基壇縁辺部であると同時に、その外側を石組で区画した造り出し状施設の空間も兼ねている。この造り出し状の区画外は円筒埴輪のみで、人物・馬形埴輪は認められない。と同時に、この区画内は、人物・馬形埴輪のみで、円筒埴輪は認められない。明らかにこの施設が、人物・馬形埴輪を配置するためにつくられた特別の区画であることがわかる。

このように、1号古墳の埴輪は、特別に区画された空間に人物・動物埴輪が配置されるという意味では、前述の2期の特徴を備えているとすることができよう。一方、石室入口前の向かって左側に人物・

馬形埴輪が列状に展開しているという意味では、3期の特徴を備えていることになる。ただし、典型的な3期の小型円墳が、基壇縁辺部に円筒列を配し、その内側に石室入口前から片側に人物・動物埴輪を列状に配することとはやや異なっている。

下條2号古墳は、3期の典型的な配置形態をとる。人物・馬形埴輪は、基壇面の奥まった葺石に近い部分で、石室入口前から左側に列状に展開する。その構成は人物が先にきて、その後に馬が続く。人物は正面を外側に向けて横一列になり、馬は側面を外側にし、頭を石室入口側に向けて樹立させる。これら人物・馬形列の外側の基壇縁辺部に円筒列が配されている。

2号古墳では、太刀・盾・靱・柄が5個体以上ずつ、同数存在したものと推定される。出土状態から当初は墳頂部に置かれていたことは明らかである。この時期のもので、墳頂部の配置形態を具体的に直接知ることができるものはほとんどない。2号古墳の器財形埴輪の数量から考えると、縁辺部に主体部を取り囲むように環状に配されていたものと思われる。器財形埴輪のうち、盾・靱・柄には明確な表裏の区別があり、裏面が死角になることを想定したつくりになっていることから、表面を墳丘外側に向けて樹立していたものと推定される。その列中に円筒埴輪を含んでいたものかあるいは、別途の列をなしていたものが明らかにし難い。家形埴輪は、墳頂部縁辺に環状をなして配置されたと思われる器財形埴輪とは別に、その中心部に置かれたものと思われる。接合資料が器財形にくらべると広く分布していることと、推定される個体数が1ないし2個体と少ないこと、四方向のいずれからの視角にも耐えられるつくりであることによる。

口明塚2号古墳の場合、不確定な部分が多いが、最低、次のことだけは明らかである。

人物・馬形埴輪が、石室入口前から右側に列状に展開する。その構成は、石室寄りに人物が先にきて、その後に馬が続く。列の展開する方向が左右逆である以外は、下條2号古墳に近いものであったと思わ

1. 出土埴輪の特徴とその意義

れる。一方、家・器財形埴輪は、四散する形で破片が出土していることから、やはり墳頂部に配置されていたものと推測される。

以上の検討から、下條2号古墳、口明塚2号古墳の配置形態は、前の分類の3期に属するものであることがわかる。これに対して、下條1号古墳は、2期から3期への過渡的形態として理解できるものであろう。

人物・動物埴輪列が、下條1・2号では、石室入口前から左へ展開し、口明塚2号では、右に展開しているという差が注意される。上野地域の当該期の円墳で、形象埴輪の出土位置を確認できる事例について、この点から検討してみると以下のようである。

右へ展開しているものとしては、口明塚2号古墳に加えて、富岡5号古墳、高崎市山名原口1号古墳、高崎市蔵王塚古墳、太田市オクマン山古墳等、12例を知り得た。一方、左へ展開しているものとしては、下條1・2号古墳に加えて、高崎市少林山台2号古墳、赤堀町地蔵山13号古墳等、5例を知り得た。分析の対象となり得た古墳の数が少ないので、今後二期すべき点が多いのであるが、少なくとも次のような点は確認できると思われる。円墳の場合、石室入口前から右側へ展開するものが主体をなし、左は少数であることから、前者が基本型としてあった可能性が強い。また、両者が地域に関係なく混在していることから、地域差に起因するものではないと考えられる。ただし、古墳群を単位とした場合はどうかは今後の検討課題である。

前方後円墳の場合は、石室入口前から左へ（くびれ部へ向けて）人物が展開し、これとは別に馬形埴輪が配置されるのが基本型としてあったと推測される。この人物列と馬形列が別の場所に配置される点は、小型円墳の場合でも、まず人物が列の頭にきて、その後に馬（馬子を伴う場合もある）が連なるという区分の中に、底流として通じているものと思われる。

下條1・2号古墳、口明塚2号古墳における家・器財形埴輪の破片資料の出土状態と接合関係の検討

から、これらが墳頂部に配置されていたことを明らかにすることができた。多くの古墳の場合、墳頂部を中心に墳丘の崩壊が進行しているものが大半であるため、家・器財形埴輪が墳頂部に原位置で確認されることは、墳丘裾部に配置される人物・動物埴輪と好対照に、きわめて少ない。いきおい、調査時の出土位置から、これらが人物・動物埴輪とともに基壇面に配置されていたと即断し易い。しかし、そのような報告例でも、基壇面に原位置で家・器財形埴輪が確認されている例をほとんど知らない。厳密に原位置を検討してみると、実際は墳頂部から転落したものが大半ではないかと考えている。⁽⁷⁾

墳丘が大型であるため墳頂部の遺存状況がよい前方後円墳について検討してみると、上野地域の場合必ずといってよいほどに後円部墳頂を中心に発見される。このことは、当地域では、1期から3期まで一貫して認められる基本原則であったと思われる。その当初より、主体部と密接に関係して墳頂部に配置されてきた伝統的（前期から中期）な家・器財形埴輪に別の樹立意図を持って人物・動物（特に馬）埴輪が加わったわけであるから、両者の間に明確な区分が存在するのは当然のことであろう。このことは、当地域が中期段階までに伝統的な埴輪祭祀が広く定着し、その基礎の上に新たな埴輪祭祀を受け入れるというプロセスを経たことの結果と思われる。

(5) 形象埴輪の形態的特徴

人物埴輪の像容表現 調査した3古墳の形象埴輪には、いくつかの共通する形態的特徴が認められた。

人物埴輪は、確認されたものは全て上半身像であり、円筒形の基部の上に造り付けられたものであった。また、1例を除くとすべて上着の裾部を表わす裾広がり形態的表現によりかろうじて衣服を表わすのみで、これ以外細部の表現を一切行っていない簡略なものであった。

男女の違いは、髪形と乳房の有無のみによっており、その他の身体形状は同一であり、顔面への赤色顔料の塗彩形式にも男女差は認められない。同性間

IV 考 察

では、髪形は相互に共通であり、わずかな持物(刀・鎌等)、手の仕草(刀に手をそえる・胸に手を当てる等)によってかろうじて個体差を表わしている。

いずれの人物も、側面・背面からの視覚にも一応耐えられる程度には造られているが、大きな動きはまったくなく、直立不動に近いものであることから、前面が正面に向くことを意識しての製作であったものと思われる。

一方、これらとほぼ同時期の高崎市観音山古墳⁽⁸⁾の人物群は、確認されているものだけでも、上半身像・全身立像・椅座像等があり、人物の種類に応じた像容のパラエティーがあることがわかる。また、衣服・装身具・持ち物・身体の仕草もリアルであり、表現もパラエティーに富んでいることから、個体間の差は極めて明瞭である。

私たちが調査した3古墳と観音山古墳の人物埴輪のこのような相違が、両者の古墳規模の相違(あるいは古墳被葬者の階層差とも言い換えられる)に基づくものであることは、容易に想像できるところである。

太田市のオクマン山古墳は、6世紀後半の築造が推定される径36mの大型円墳である。調査により確認された5個体の人物埴輪の中には、大型の武人・鷹匠埴輪の全身立像が含まれていた。

また、最近調査された富岡市芝宮古墳群の富岡79号古墳は、古墳群の中では最も大きい部類に属する径20mの中規模円墳であり、やはり6世紀後半の築造が推定されている。この古墳からは、多種類・大量の埴輪が出土しており、8個体以上の人物埴輪が確認されている。これらの人物群は、冠をかぶり、履をはいた大型の武人像や力士像の全体立像をはじめとし、椅座像・上半身像等⁽⁹⁾から構成されていた。

このように見えてくると、群集墳中であっても、有力円墳の中には、観音山古墳のような大型前方後円墳の内容に近い人物像を伴うものがあったことがわかる。人物像における像容の相違が介在する境界点の古墳として理解することができよう。

このような差違は、家・器財形埴輪にも当然及ぼ

されていたであろう。

円筒埴輪の規格の差が、樹立される古墳の差に基づくものであることについては、増田逸朗が埼玉古墳群の分析から導き出しているが⁽¹⁰⁾、形象埴輪においても同様に様々な形で差違を認めることができるものと思われる。

今後、小地域を単位として、古墳の規模との相関で検討していくならば、より具体的な階層差に対応させることも期待できる。

製作者へのアプローチ 下條2号古墳の人物埴輪の分析を通じて、画一的で簡略化された表現に特徴を見い出すことができた。このことは、埴輪製作技術が粗雑でぎこちないことを意味してはいなかった。むしろ、手慣れたつくりの中に技術的習熟度の高さを認めることができる。そのことは複雑な馬形埴輪を巧妙にバランスよくつくっていることから十分に窺うことができる。恒常的に数多くの作品を手掛けてきたことの結果と思われる。もちろん、この人たちによって、前方後円墳に樹立される埴輪群も製作されたものと思われる。

下條2号古墳の人物埴輪の製作手法・形態的特徴の比較検討から、大きく2つの群(A、B群)に分類することができた。A群(人物1・5)は、上着の裾の下側に凸帯をめぐらし、凸帯の下端に接して両側に透孔が穿たれている。また、顔のつくりは柔らかく、豊かなもので、全体に極めて丹念な整形を施している。これに対してB群(人物2・3・4)は、上着の裾の下側に凸帯がめぐらず、裾に接して両側に透孔が穿たれている。顔のつくりはややかたく、表面にハケ整形痕を残している。

顔の細部のつくりを比較してみると、各群内部では同一の特徴を示し、両群の間では明確に異なっている。これらのうちの多くの部分は、製作者個人のクセに起因するものであると言えよう。人物埴輪の製作には、少なくとも2人の工人が関わっていたことがわかる。

ところで、このA、B群に関わった2人の製作者は、人物上半身像の製作法に、個人差にとどまらな

1. 出土埴輪の特徴とその意義

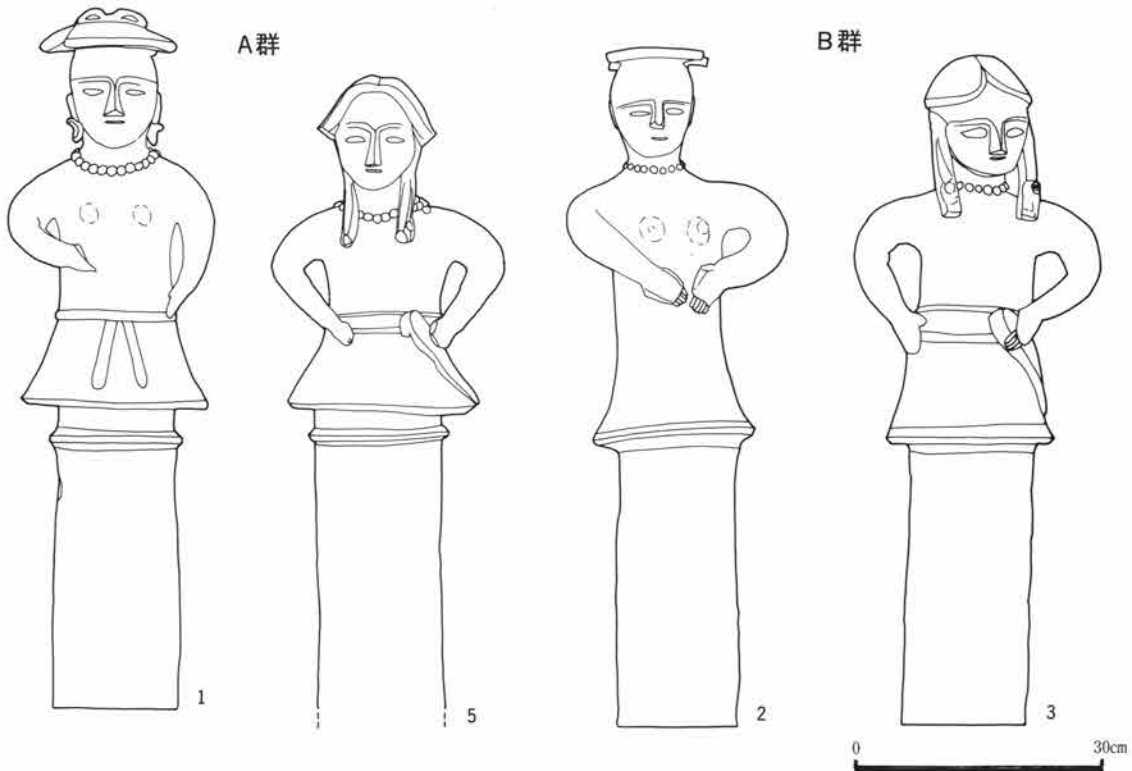
異なる系統の手法を有していたことが、上着の裾と凸帯との関係から言える。両者が古墳に併存するに至ったプロセスとしては、2つのケースが考えられる。一つは、単一の集団で製作が行なわれ、集団内部に同一種の上半身像を別形態につくる2系統が併存した場合である。この場合は、固有の製作手法は集団で共有するのではなく、個人で保有していたことになる。もう一つは、別系統の製作手法を共有している2つの集団で製作されたものが、窯場あるいは古墳に持ち寄られたという想定である。これらのことについては、今後、当時の生産体制がどのようなものであったかを念頭において、他の古墳資料も合わせて厳密に検討していかなければならないであろう。現段階では、球形の頭部の構造、髪の毛の接合等が共通することや吉川和男氏の胎土分析結果をあわせて、前者の可能性が強いのではないかと考えている。

2つの馬形埴輪については、基本的な形態、製作手法は共通にしていながら、製作上の精粗の差が随

所に認められることから、異なる製作者の手になったことが推定される。また、雲珠・杏葉や障泥を異なる形式で表わしており、まったく同じ表現になることを意識的に避けていることが読み取れる。このことは、太刀・盾・鞆・鞆についても明確に読み取ることができた。そのため、種類ごとの個体数を容易に把握することができたわけである。

註

- (1) 右島和夫「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」(『古文化談叢』20集下) 1989
- (2) 尾崎喜左雄ほか「下総片野古墳群」
- (3) 福島武雄ほか「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告」2輯1932
- (4) 清水正好「埴輪芸能論」(『古代の日本』)
- (5) 石塚久則・橋本博文「塚廻り古墳群」群馬県教育委員会1980
- (6) 右島註(1)文献
- (7) 橋本博文は、太田市オクマン山古墳、勢多郡粕川村塚塚古墳を具体例にして、6世紀後半の円墳では、家・器財形埴輪が基壇面にも配置されるようになることを指摘している。このようなあり方が、この時期に当地域で一般的傾向になっていたのかどうかという点と、例として挙げた2古墳における家・器財形埴輪の出土状態の厳密な検討が必要と思われる。橋本博文「配列、組み合わせの変遷」(『古墳時代の研究』9) 1992
- (8) 梅沢重昭「観音山古墳」(『群馬県史』資料編3) 1981
- (9) 出土埴輪の実見に際しては、篠原幹夫氏のお世話になった。
- (10) 増田逸朗「埼玉古墳群と円筒埴輪」(『埴輪の変遷』第6回三県シンポジウム) 1985



第149図 下條2号古墳人物埴輪の製作手法からの分類

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

(1) はじめに

昭和60年に奈良県の橿原考古学研究所で開催された第17回埋蔵文化財研究会「⁽¹⁾ 形象埴輪の出土状況」において、私は、関東地方の埴輪の地域的特色について発表する機会があり、後期段階にきわめて特徴的なあり方を示すことについて述べた。その際、南雲芳昭氏と共同で群馬県の埴輪出土古墳地名表を作成し、136基の古墳を挙げる事ができた。その大半は後期に属するものであった。この地名表を作成した時の方針として、対象を発掘調査を経ており、形象埴輪の出土状況を具体的に把握できるものに限定したため、実際に埴輪を有する古墳の総数よりは大幅に少ないことは明らかであった。それでも、この地名表が掲載された研究会資料集の他県の状況を通覧して見ると、奈良県や大阪府とともに突出した数にのぼっていることがわかる。その場合、奈良県や大阪府のものが前・中期を中心とするのに対し、群馬県のもので圧倒的に後期に集中する点で顕著な地域差を示していた。

その後、「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」(『古文化談叢』21の下)と題する小文を⁽²⁾発表し、上野地域を中心とした東国における埴輪樹立の展開過程を具体的に跡づける作業をおこなった。その際、再度の関係資料の渉猟から、上野地域における後期段階の埴輪樹立古墳は、前述の数を大幅に上回るものであることがわかってきた。その背景には、5世紀後半から6世紀にかけて形成された群集墳中の多くの小型古墳に埴輪が伴うことが要因として考えられる。

近畿地方を中心とした他地域では、6世紀に入ると埴輪を伴う古墳は急速に減少し、しかも前・中期の充実した内容に比べて衰退の一途をたどっていったことが明確に読み取れる。上野地域以外の東国の他地域(特に北武蔵、下野、下総、上総、常陸)

でも、程度の差こそあれ、上野地域と同様の状況を示している。ここに、後期段階における東国の埴輪は、極めて地域色の強い展開を示していったことが理解されたところである。

下條1・2号古墳、口明塚2号古墳は、このような上野地域の地域的特色を備えた後期古墳の典型的なものであった。そこで、これらの古墳における埴輪樹立の意義を正しく理解するため、まず、現時点でできる限り網羅的な埴輪出土古墳地名表を作成することにした。今回の地名表作成では、調査により埴輪出土が確認された古墳はすべて対象とした。また、発掘調査によらなくとも、現地踏査等により埴輪を伴うことが知られているものも含めることとした。

本節では、地名表作成の結果を受けて、まず埴輪樹立古墳の傾向を整理することとする。また、その上で上野地域の埴輪樹立古墳の様相を変遷的に再度概観し、あわせて今後の課題について考えてみたい。

(2) 埴輪出土古墳地名表の作成結果をめぐって

上野地域で埴輪を伴うことが確認できた古墳は、全体で1155基を数える事ができた。そのうち発掘調査により伴うことが確認できた古墳は、497基である。497基という数は、従来の調査古墳すべての中から抽出したものではないので、そこから漏れているものもかなりの数にのぼると思われる。

1155基のうちには、すでに墳丘が消滅してしまっているため現在では実際に確認できないものもあるが、将来的に発掘調査の増加の中で新たに加わるものも多いと思われる。今後埴輪存在の有無を念頭においての踏査が厳密に行なわれるならば、この数はさらに増えるものと思われる。

ところで、調査により埴輪が伴うことが確認された古墳の中には、前橋市の芳賀西部工業団地古墳群⁽³⁾、勢多郡粕川村白藤古墳群⁽⁴⁾に代表されるように、後期前半の低墳丘の小型円墳から構成される初期群集墳で、発掘調査前には古墳群の存在がまったく知られていなかったものがかなりの数にのぼっている。こ

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

の種の古墳群は、今後の発掘調査の進行の中でその事例を大幅に増加させていくものと確信している。このことも、今後新たに加わる可能性のある埴輪出土古墳の中に含めておく必要がある。

確実な根拠を持ち合わせているわけではないが、上野地域の埴輪出土古墳の数は、2000基を優に越えるものと確信している。

次に、地名表をもとに埴輪出土古墳の時期別の数と墳丘形態からの分類を表にまとめてみると以下のようである。

表中、方墳および上円下方墳として挙げられているものは、昭和初期の分布調査⁽⁵⁾の時点での認識であり、埴輪を伴うことについては問題ないが、墳形については再考の余地を残している。恐らく、円墳が、後世の耕作等により改変されたものであろう。

大まかな目安として、前期を4世紀前半ないし中葉から末葉までの段階とし、大型前方後円墳に定型化した盾形周濠が導入される以前とする。中期は、5世紀初頭から5世紀第3四半期までとし、巨大前方後円墳の築造を特徴とし、円筒埴輪の外面調整に2次調整のB種横ハケが主体的に残る。後期前半は5世紀第3四半期ないし第4四半期から末葉にかけてで、横穴式石室出現前の段階とする。低墳丘で竪穴系の小規模な主体部を有する群集墳がさかんに形成される。後期後半は6世紀初頭から6世紀末葉ないし7世紀初頭の時期で、横穴式石室を主体部とす

る古墳が中心で前方後円墳の消滅前の段階である。

分類結果から、いくつかの顕著な傾向を見出すことができる。

まず出土古墳を時期別に見てみると、前・中期では埴輪を伴う古墳は極めてわずかである。その傾向は、前期により著しい。中期になって該当古墳が前代よりも増加するのは、埴輪樹立が定着したことの現れであろう。それでもその数はごくわずかである。古墳築造自体がごく限られた階層の占有物であり、埴輪もそれと表裏一体の関係にあったものと思われる。それゆえ、前・中期とも埴輪を伴うものは、前方後円墳を中心とし、これに中・大型の帆立貝式古墳と円墳のみである。

後期に入ると埴輪を伴う古墳が飛躍的に増加する。その急増した数を支えているのは、主として円墳である。前述したようにこれらは、群集墳を構成する低墳丘の中・小規模古墳であり、発掘調査により偶然発見されたものが大半である。それゆえ、今後、この段階の古墳の数がまだまだ増えていくことを十分想定することができる。この段階に大きな画期点を置くことができるのは言うまでもない。

後期後半になると埴輪を持つ古墳はさらに増える。ここでも圧倒的な割合を占めるのは、群集墳を構成する小型円墳である。墳形不明としているうちの多くも円墳であろうことは想像に難くない。この数も将来的に大きく増える可能性が強い。

後期に特徴的な人物・馬形埴輪を出土することや群集墳中の一角を占めることから、主体部の形式が明らかでないものについては、前・後のいずれに属するか明らかでないが、少なくとも後期のワクに収まることは明らかであるのでこれらを一括した。これを合わせると、後期段階に属するものが930基にのぼり、埴輪樹立古墳全体の約80%に達する。

墳丘周囲から埴輪片が採集されるが、時期を特定できない「不明」としたものの192基のうち、その大半が後期に属することは容易に想像できる。とするならば、実に全体の95%近くが後期

埴輪出土古墳の時代別数と墳丘形態からの分類

時期/墳形	前方後円	帆立貝	円	方	上円下方	不明	計	
前期	4	0	0	0	0	0	4	
中期	11	3	12	1	0	2	29	
後期	前半	10	15	114	2	0	3	144
	後半	91	9	383	1	0	30	514
後期	後期	25	11	197	2	0	37	272
不明	26	0	121	0	1	44	192	
計	167	38	827	6	1	116	1155	

IV 考 察

に属することになる。この割合は今後、その度合を強くすることはあっても、弱まることはないものと確信している。

(3) 小型古墳における埴輪樹立の展開

今回の地名表作成を通して、当地域では予想を大きく上回る数の古墳に埴輪が樹立されたことが明らかになり、また、その大半が古墳時代後期の群集墳を構成する小型古墳であることを具体的に知ることができた。そこで次に、このきわめて地域性の強い埴輪樹立形態が成立した背景を、小型古墳におけるあり方を通じて検討してみたい。

初期群集墳と埴輪 近年の大規模開発の進行の中で、平地部で広範囲に及ぶ発掘調査が輩出するようになった結果、5世紀後半から6世紀初頭にかけての時期に形成される群集墳の事例が増加している。これらを構成する古墳の多くは、低墳丘であり、小規模な竪穴系の埋葬施設を主体部とする中・小型円墳である。そのため、横穴式石室墳のように、発掘調査前にその存在が知られることはほとんどなかったわけである。この種の古墳群は、平野部とこれに面する台地部で広域に確認されており、急激にしかも一斉に展開した点に大きな特徴がある。

いずれの古墳群の場合にも、埴輪を伴っている点もまた大きな特色である。その場合、古墳群を構成するすべての古墳に伴うわけではなく、相対的に墳丘規模の大きいものにのみ伴うという顕著な傾向が認められる。

初期群集墳の成立してくる背景として、この時期に農業生産力が飛躍的に向上した結果、家長層の有力化が急速に進行したため、階層秩序の再編成が迫られたことが挙げられる。群集墳の築造により有力化した家長層を新たな古墳秩序に組み込んでいったのである。一義的には、墳丘規模の相対的な大小によって、そのことを表現していることが、初期群集墳の構造から明確に読み取れる。と同時に、埴輪の有無もまた、古墳のランクづけの重要な要素として位置づけられていたわけである。⁽⁶⁾

勢多郡粕川村の白藤古墳群では、当該期の調査古

墳36基はすべて円墳であり、直径10m前後のもの6基、15m前後のもの18基、20m前後のもの7基、それ以上のもので5基から構成されていた。これらのうち古墳群内で相対的に規模の大きい14基に埴輪が伴っていた。

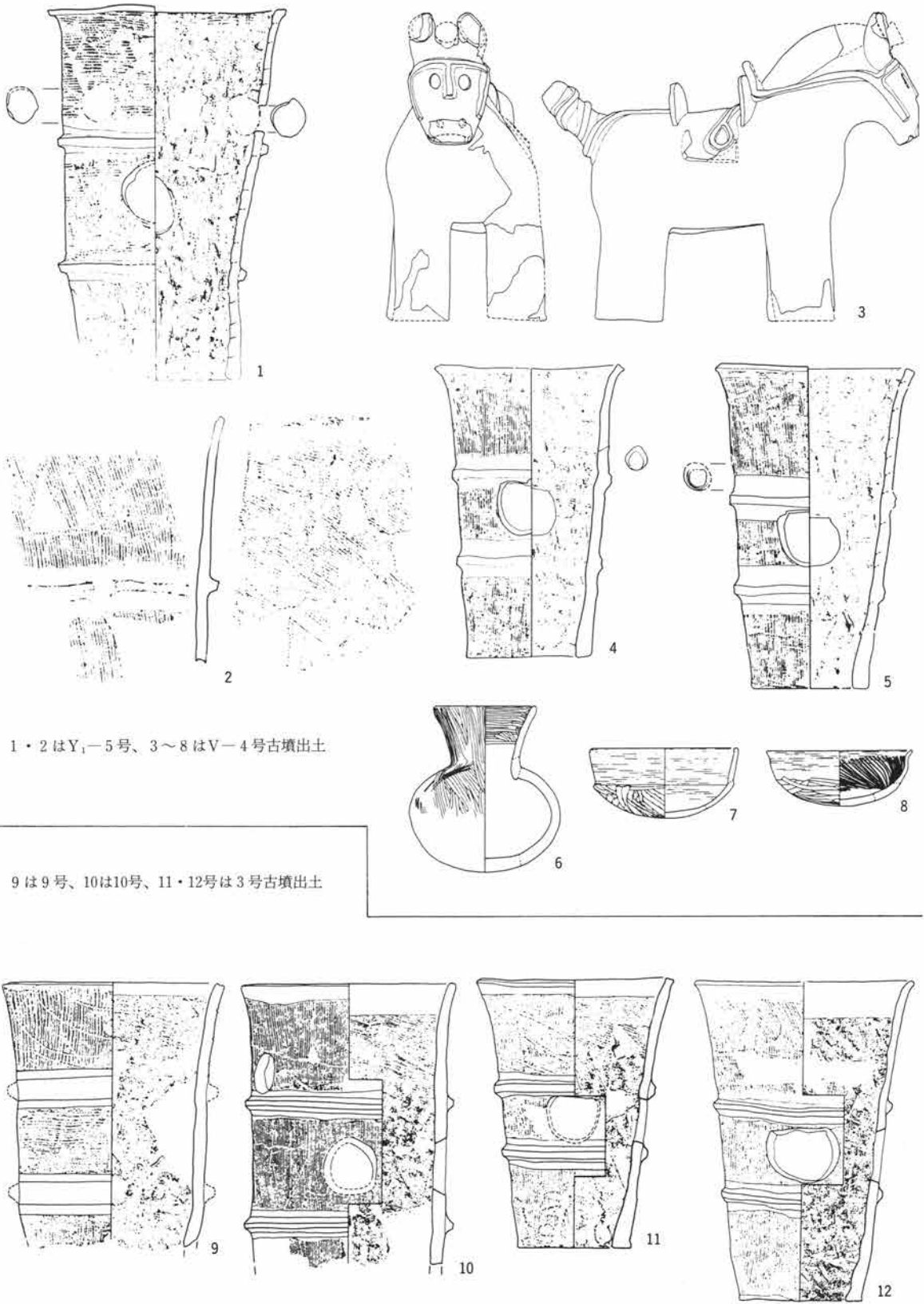
出土した円筒埴輪の様相から見ると、古墳群の形成の初期に位置づけられる4基(Q-1、Y-4、Y-5、Y₁-2号古墳)のものは、外面調整にB種横ハケを残し、その後形成されたことが推定される10基に伴うものは、一次調整の縦ハケのみである。それらのいずれも3段構成であり、第2段に主として半円形の透孔が穿たれる点で共通している。また、両群にまたがって、中段の透孔とは別に第3段に円形の小型透孔が1個穿たれるものが共通して認められる。これらのことは、B種横ハケから縦ハケのみへの変化の過程が連続的でスムーズなものであったことを物語っているものと考えられる。

一方、14基中の6基には人物・馬形埴輪が伴っている。これら6基の円筒埴輪はすべて縦ハケのみであることから、人物・動物埴輪導入時期の定点として把えることが可能である。これらの古墳から出土した土器類を合わせて考えると、その時期は、5世紀第4四半期を中心としていることが推定される。ちなみに、当地域の前方後円墳で人物・動物埴輪を伴う最も早い段階のものとしてされている井出二子山古墳の場合、円筒埴輪は縦ハケのみのものを主体としており、ごく一部客体的にB種横ハケが認められることから、白藤古墳群の様相にほぼ整合してることが理解できる。⁽⁷⁾

佐波郡境町下淵名古墳群では、当該期の調査古墳13基はやはりすべて円墳であり、直径10m前後のもの4基、15ないし20m前後のもの6基、25ないし30m前後のもの2基と37mの最大のもの1基から構成されていた。そして、墳丘規模の相対的に大きいもの6基から埴輪が確認されている。

これらのうちの1基(9号古墳)のみが、円筒埴輪のごく一部に客体的にB種横ハケをのこしている以外は、すべて一次調整の縦ハケのみである。い

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴



1・2はY₁-5号、3~8はV-4号古墳出土

9は9号、10は10号、11・12号は3号古墳出土

第150図 白藤古墳（上段）・下淵名塚古墳群（下段）出土の埴輪
 (1・4・5・9~12はㄨ、2・6~8はㄨ、3はㄨ)

IV 考 察

れの円筒埴輪も3段構成であり、第2段に半円形の透孔を有することを共通にしている。また、10号古墳の円筒埴輪には、第3段に円形の小型透孔が穿たれている点が注意される。

埴輪の様相からすると、古墳群の形成開始の時期が、白藤古墳群に若干後出する5世紀第4四半期にあることが推測される。

また、佐波郡赤堀町の地蔵山古墳群では、当該期⁽⁸⁾の円墳15基のうち、相対的に墳丘規模の大きい6基から埴輪が確認されている。これらのうち1基のみはB種横ハケを伴ない、他は1次調整の縦ハケのみであり、いずれも3段構成である点で共通していた。

以上のように、初期群集墳における埴輪の様相は古墳群を越えて均質な状況を示していることと、古墳群のうちのおよそ1/3ないし1/2の古墳に埴輪が伴っていたことがわかる。5世紀後半における初期群集墳の成立に伴って、埴輪樹立古墳は急激に増加したわけである。このことは、埴輪の大量需要を要請する動きとなって表れたことは当然であろう。その場合、それ以前の埴輪生産体制の延長上で生産がまかないきれたとは到底考えられないところである。量産に答えられる高度に組織化された新たな生産体制の整備が急速に進行したと考えざるを得ないところである。初期群集墳から出土する円筒埴輪が、3段構成・一次調整縦ハケ・半円形透孔へと定型化していく方向性をもち、また人物・動物埴輪の導入過程が類似していることは、新たな共通した生産体制の上にあったことを如実に示していると言えよう。

この時期はまた、生産力の飛躍的な増大を基礎にして、各小地域の地域的統合を遂げた首長層が各地に輩出し、前方後円墳を築造していった段階にあたっている。これらの前方後円墳が井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳に顕著に見られるように、群集墳に樹立された数十倍にもあたる質量ともに充実した埴輪をめぐらしていたわけである。このことが、この時期の埴輪生産体制の革新の直接の契機となったことは言うまでもない。また、これらの首長層の

主導の下に組織化が進んだことも疑う余地のないところである。その組織化の端緒をなしたのは、前述の初期群集墳の様相からも窺われるように、外面調整にB種横ハケを有する段階であった。しかも、これらは、窖窯焼成による製品であったことが、埴輪の検討から導き出される。

ところで、5世紀後半から6世紀初頭ないし前半にかけての時期に形成された初期群集墳を構成する小型古墳で埴輪を有するものを調べてみると、赤城山南麓とこれに面する南側の平野部に位置するものが圧倒的に多いことに気づく。その背景として次のようなことが考えられる。一つには、初期群集墳が上野地域内の他の地域にくらべて数多く形成されたことである。また、芳賀西部団地・白藤・地蔵山・下淵名古墳群に代表されるように、古墳群の規模が大きいものが多く、しかも、埴輪を樹立する古墳の割合が高い点も大きな要因となっている。

これらの事実は、5世紀後半における初期群集墳の成立と表裏一体の関係で、赤城山南麓のいずれかの地に大量需要に応じられる組織的な生産拠点が存在していたことを強く窺わせるものである。

この群集墳の濃密な分布域の中心的な位置に存在している前橋市今井神社古墳は、古墳時代後期の埴輪生産体制の成立の視点からも、今後特に注意していかなければならない古墳の一つであろう。全長71mの比較的大型の前方後円墳で、5世紀第3四半期を中心とした時期の築造が推定されるものである。この古墳から出土する埴輪は、B種横ハケを残しており、須恵質のものが認められる点が注意される。⁽⁹⁾

かつて当古墳について実施された周濠調査の整理・報告書作成が、平成4年4月から予定されており、上述の視点からの分析が期待される。

小型古墳における埴輪樹立の盛行 横穴式石室が導入される以前にあたる後期前半の段階に、上野地域では既に大量需要に対応できる組織的な生産体制が整備されたことが、前項での検討から確認された。その後、6世紀に入ると小型古墳への埴輪樹立はいっそう盛んになっていったことが、二つの側面

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

から知ることができる。一つは、埴輪出土古墳全体のなかで、この時期の小型古墳の数が圧倒的に多いという事実である。このことは、埴輪樹立の対象となる古墳のワクが、以前より拡大したことの結果と思われる。下條1・2号古墳は、直径10mにも満たない墳丘規模であり、多胡古墳群の中では最も規模の小さい部類に属するものである。具体的な数を確定できないが、多胡古墳群を歩いてみると、古墳の周囲に埴輪片の散見する事例は実に多い。

前述した佐波郡赤堀町の地蔵山古墳群では、横穴式石室を主体部とし、6世紀代に属することが推定される11基のうち、実に9基までが埴輪を有していた。

もう一つの側面は、今回の調査古墳の内容からも明らかのように、小型古墳の場合にも一古墳に樹立される埴輪の総量が、以前にも増して質量ともに一段と充実の一途をたどったことである。

6世紀の小型古墳への埴輪樹立の盛行を約束したのは、とりもなおさず前代における整備された埴輪生産体制の基盤であったことは言うまでもない。と同時に、前代にも増して一段と生産体制が拡大強化されていった動きを想定する必要がある。

次項で詳しく触れるが、6世紀後半になると、下條2号古墳に典型的に見られるように、ついには小型古墳にまで、充実した内容の家・器財形埴輪が配置されるに至る。前方後円墳から小型古墳にいたるまで、一貫した地域独特の埴輪体系が成立したことを示すものであろう。

当地域では、従来から藤岡市周辺（藤岡市本郷及び白石）と太田市北西部の丘陵一帯（太田市金井地区）で埴輪窯跡が確認されており、その規模の大きさも踏まえて、両地域が上野地域の埴輪生産を中心的に進めていった地域として理解されてきた。さらに一歩進めて、この両地域で独占的に生産が行われ、上野地域内の各地に広く供給されたとする見解も示されている。⁽¹⁰⁾古墳時代後期後半に活発な生産が行われたことが推定されるこの2つの生産地が、当地域では傑出した規模を誇るものであったことは疑いない

ところである。しかし、次の理由から、これらより小規模ではあっても、両生産地以外に各地で生産が行われていた可能性が強い。一つは、主として6世紀後半以降になると、当地域の埴輪樹立古墳は空前の数に達し、到底これら二つの生産地では需要をまかない切れなかったことが推測される。また、遠隔地へ大型で非常にこわれやすい製品を恒常的に大量輸送することは、非効率的であること極まりないからである。

その意味で、平成2年に実施された富岡市の下高瀬上之原遺跡の調査で発見された6世紀後半の築造⁽¹¹⁾が推定される2基の埴輪窯跡は極めて重要な意義を持つものであった。今後、この種の事例が増加してくるものと推測される。

今後、古墳時代後期の埴輪生産、流通のシステムがどのようなものであったのかを、具体的に検討してゆく必要がある。

(4) 形象埴輪の組成変化について

最近、橋本博文が、全国的な視野から全時期を通して形象埴輪の組成の変化をまとめている。⁽¹²⁾本項では人物・動物埴輪出現以降の後期に限り、また前方後円墳に代表される大型古墳と群集墳との対比をすす中で、上野地域の傾向を少し立ち入って検討してみたい。そこで、便宜的に考察1—(4)での配置形態からの時期区分に従って見て行くことにしたい。

1期（5世紀後半～末葉） この時期の大型古墳で、組成を検討していく上で良好な資料が出ているのは、井出二子山古墳と高崎市若宮八幡北古墳である。

井出二子山古墳（保渡田愛宕塚）古墳では、戦後の後藤守一による墳丘調査により、中堤上の一角に集中して人物・動物埴輪が確認された。また、昭和46年の墳丘調査では、周堀内から蓋形埴輪が出土している。最近、この古墳の北西側の隣接地で大量の埴輪を伴う区画（突出遺構）が発見され、位置・出土埴輪の特徴から古墳との直接的関係が推測されている。そこから出土した形象埴輪は、家1、盾4、人物31（盾持人16を含む）、馬3、犬1、猪1である。⁽¹³⁾

IV 考 察

二子山に時期的に後出する保渡田八幡塚古墳では、中堤上の区画内（A区）から人物33、馬8、水鳥6、鶏2が確認されているが、家・器財については不明である。

若宮八幡北古墳は、全長46mの帆立貝式古墳で、5世紀第4四半期の築造が推定される。出土埴輪については現在整理中のため詳細は後日を期したいが、⁽¹⁴⁾少なくとも、人物、馬、犬、鹿、盾持人、盾、蓋が存在することは明らかである。

この時期の大型古墳が、大量の人物・動物埴輪を持ち、しかも動物の種類がバラエティーに富むものであったことがわかる。また、器財形埴輪の種類としては前期古墳以来の種類である盾・蓋に限定されており、鬘・太刀・靱・柄を伴わない点を注意しておく必要がある。

次に、この時期の群集墳の様相を見てみよう。

私が直接に調査・整理に関係することができた前述の下瀬名古墳群では、埴輪出土古墳6基のうち、形象埴輪を伴うのは2基（4・10号古墳）であった。4号古墳からは馬と器財（種類不明）形埴輪の破片2点であり、10号古墳からは甲冑形埴輪が推定される破片1点と種類不明のもの1点であった。遺存状態が悪かったことを考慮しなければならないが、それでも種類・量ともに貧弱なものであったことが推測される。また円筒埴輪のみで形象埴輪を伴わない古墳が多く存在したことが推定される。形象埴輪が確認できた2基は、古墳群の中では1番目と2番目の墳丘規模であることから、埴輪構成にも墳丘規模との相関での差異が設けられていたものと思われる。白藤古墳群では、埴輪出土古墳14基のうち5基に形象埴輪が伴っていた。形象埴輪の種類は人物と馬のみであり、器財形埴輪はまったく認められていない。人物・馬形埴輪も、1基の古墳について馬が1点、人物が1～2点であり、極めて貧弱な構成であったことが推測される。

現在までのところ、群集墳で充実した内容の形象埴輪を伴ったものはみとめられていない。大型古墳と群集墳の間の差は格段のものであったことがわ

かる。

2期（6世紀初頭～中葉） 器財形埴輪の種類として、鬘・太刀・靱・柄が伴うようになったのはこの時期のことと思われる。

太刀形埴輪の最も古い事例として前橋市王山古墳⁽¹⁵⁾が挙げられる。この古墳は、6世紀初頭の築造が推定される全長75.6mの比較的大型の前方後円墳であり、上野地域では初期に位置づけられる横穴式石室を有している。現在、埴輪を整理中なので、詳細は後日に期したいが、太刀の全高が1.5m以上に達するものと推定される大型品であり、きわめてリアルなつくりである点が特徴である。少なくとも10点以上存在したことが推定される。主体部を取り囲むように後円部墳頂に樹てめぐらされていた可能性が強い。6世紀前半の築造が推定される塚廻り4号古墳の太刀形埴輪も全高130cm以上を測り、リアルなつくりである点で王山古墳例に近いものである。

太刀形埴輪がモデルとしている三輪玉付きの勾金を有する太刀は、5世紀第3四半期の築造が推定される太田市鶴山古墳の副葬品が実物としての当地域の初出例である。⁽¹⁶⁾埴輪としては、井出二子山古墳突出遺構の首長を表したと推定される椅座男子像や天理参考館所蔵の同種の男子像が持っている太刀に認められるが、⁽¹⁷⁾太刀形埴輪として独立したものは存在していない。

靱形埴輪の最も古くさか上るものは、伊勢崎市の恵下古墳から出土している。⁽¹⁸⁾この古墳は戦前の調査であり、内容が不明確な部分も多いが、変形の組合式石棺を主体部とし画文帯神獸鏡、馬具類をはじめとし、豊富な副葬品を有しており、この時期の有力古墳の一つであったことがわかる。出土須恵器の主体をなすのは、陶邑古窯跡群のMT15型式の特徴を有するものであることから、その築造時期を6世紀初頭ないし前半に置くことができる。

鬘・靱形埴輪もこの時期に登場してくる種類であり、この後に一般化する鬘・太刀・盾・靱・柄の器財形埴輪の器制が成立する段階にあたっていたと理解することができる。形象埴輪の組成変化の過程の

2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴

中で画期の一つをなしていることがわかる。

この時期は、首長墓の主体部形式として横穴式石室が新たに採用された段階にあっており、近畿地方から新しい大きな波が押し寄せてきたわけである。埴輪組成の大きな変化も、このことと切り離して考えることはできないであろう。

これを物語るように、1期あるいはそれ以前の段階の大型古墳には必ず伴っていた蓋が、この時期に一部の例外を除いて完全に消滅する。

この時期、蓋は例外的に2例を知ることができるが、基本的には消滅していったとすることができる。

この時期にあっても群集墳を構成する小型古墳への形象埴輪の樹立は、わずかな人物・馬形埴輪を中心とするもので、前述の5種の器財形と家形埴輪は大・中型古墳にほぼ限られていたことが推測される。

3期(6世紀後半～6世紀末葉ないし7世紀初頭)

次表は器財形埴輪の種類別の出土古墳数である。当地域で横穴式石室が採用された6世紀初頭以降、前期以来の伝統的な器財形埴輪の組み合わせである「蓋・盾」から、「髷・太刀・盾・靱・鞆」の組み合わせへの変化を明確に読み取ることができる。と同時にこれらを樹立する古墳の数が圧倒的に増えている点が注目される。その背景には、2期の大型古墳の埴輪構成として新たに確立した器財形の組み合わせが、3期に入り、下條1・2号や口明塚2号古墳に典型的に認められるような小型古墳へも及んでいったためである。それゆえ、この段階の群集墳の埴輪構成が厳密に検討されていったならば、大幅に該当古墳の数を増すことであろう。なお、上記の表の中で、古墳の詳細が不明のため「後期」として挙げた古墳の大半は、「後期後半」に含まれてくるであろう。

器財形埴輪の種類別出土古墳数

	蓋	髷	太刀	盾	靱	鞆	備考
前期	0	0	0	1	0	0	
中期	2	1	0	0	0	0	髷は赤堀茶白山の周辺からの出土(後期の可能性あり)
後期前半	8	0	0	7	1?	0	靱を出土したのは剛志村33号で、後期後半の可能性あり
後期後半	2	20	32	36	52	14	
後期	1	1	8	10	5	2	
計	13	22	40	54	58	16	

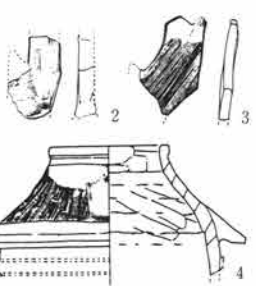
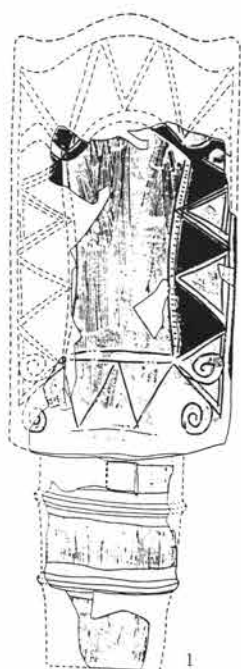
器財形の種類間で数量的に比較してみると、太刀・盾・靱と髷・鞆との間に大きな開きがあることに気づく。埴輪構成が確実に把握されている古墳で比較してみると、太刀・盾・靱の組み合わせを基本型にして、これに髷・鞆が加わるのがパリエーションとしてあったためと思われる。今後、さらに詳細に検討していかなければならないが、少なくとも髷・鞆の有無が時期差・地域差に対応したものでないことだけは明らかである。

註

- (1) 埋蔵文化財研究会「第17回埋蔵文化財研究会資料 形像埴輪の出土状況」1985
- (2) 右島和夫「東国における埴輪樹立古墳の展開とその消滅」(『古文化談叢』21集下)1989
- (3) 飯塚誠氏より教示を受けた。
- (4) 粕川村教育委員会「白倉古墳群」1989
- (5) 『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書5輯1938
- (6) 上野地域の初期群集墳に関しては、右島和夫「群馬」(『古墳時代の研究』11)1990 他でまとめている。
- (7) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「下淵名塚遺跡」1991
- (8) 赤堀村教育委員会「赤堀村地蔵山の古墳1・2」1977・1978
- (9) 黒田晃「円筒埴輪から見た今井神社古墳の築造年代」(『研究紀要』9 群馬県埋蔵文化財調査事業団)1992
- (10) 梅沢重昭「埴輪の発達」(『群馬県史』通史編1)1990
- (11) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報」10 1991
- (12) 橋本博文「配列、組合せの変遷」(『古墳時代の研究』9)1992
- (13) 群馬町教育委員会「保渡VII遺跡」1990
- (14) 高崎市原始古代部会古墳班で整理を進めている。
- (15) 松島栄治・中村富夫・右島和夫「前橋市王山古墳の調査」(『日本考古学協会総会研究発表要旨』)1991
- (16) 右島和夫「鶴山古墳出土遺物の基礎調査V」(『群馬県立歴史博物館調査報告書』6号)1990
- (17) 右島和夫「天理参考館所蔵の男子人物埴輪」(『高崎市史編さんだより』4号)1992
- (18) 梅沢重昭「恵下古墳」(『群馬県史』資料編)1981

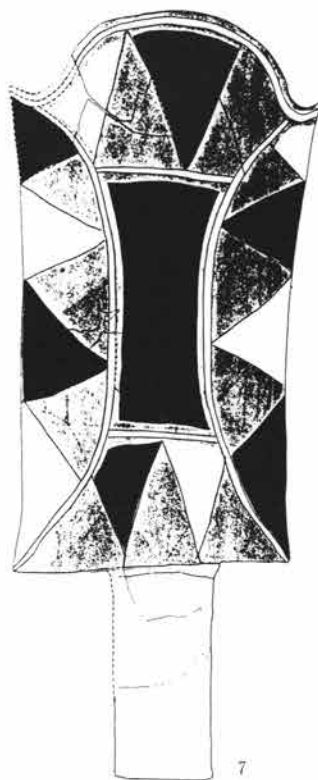
IV 考 察

1期



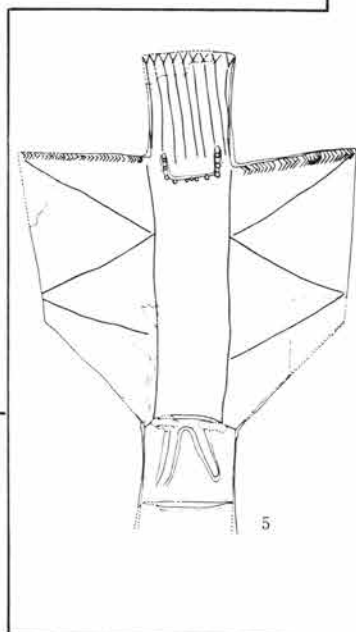
1~4は保渡田VII遺跡

2期

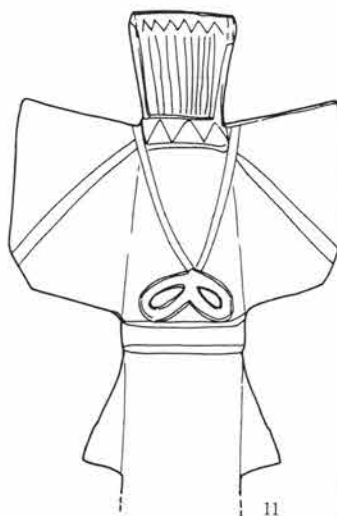
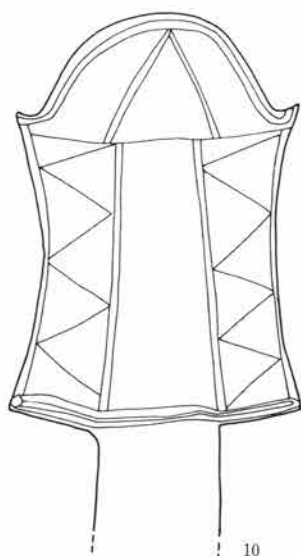


6は恵下古墳
5・7・8は塚廻り古墳群

3期



9~12は下條2号古墳



0 25cm

第151図 古墳時代後期の器財形埴輪

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

右島和夫・南雲芳昭編

例 言

- 本地名表は、1992年12月現在、群馬県内で埴輪出土が確認されている古墳の一覧表である。その内には、発掘調査によるもの、古墳の周辺で埴輪片が採集されるもの、文献等の記載から確認できるもの等を含んでいる。それゆえ、現在は、墳丘を消滅してしまっているものも多い。
- 古墳の配列は、市町村別とし、その区切れとなる部分は、太実線にしてある。
- 古墳名は、上段に通称名あるいは調査時の遺構名を、下段には昭和13年作成の『上毛古墳綜覧』の古墳番号をかかげ、その段階で存在が確認されていなかったものについては、上毛古墳綜覧漏れという意味で「漏」と記しておいた。
- 主体部については、横穴式石室は「横穴式」とし、竪穴式系に属する諸形式については「竪穴式」とした。主体部が不明のもののうち、6世紀初頭以前にさか上ることが明らかなものについては、「竪穴式？」とした。同様に、6世紀初頭以降に位置づけられ、所属する古墳群の主体が横穴式石室であるものについては、「横穴式？」とした。
- 「出土形象埴輪」の項は、各種類ごとに確認されている個体数を示した。また、黒丸がつけてあるのは、個体数は明らかでないが、伴うことは明らかな場合である。「男」、「女」の境界部分に黒丸がついている場合は、性別を確定できないが、人物埴輪が出土していることが明らかな時である。「その他」のところには、左に掲げた種類以外のものが出土している場合に記入した。そこに「不明」とあるのは、形象埴輪であることは明らかであるが、種類を特定できないことを意味する。
- 「時期」は古墳の推定時期で「6後」とあれば6世紀後半を意味している。暦年代での区分ができない場合は、「前・中・後」の区分で示した。そのおよその目安については、考察1(2)に示しておいた。時期決定をするための資料に欠けるもので、主体部は不明であるが、人物・馬形埴輪を有することが明らかな古墳は「後期」とし、横穴式石室を主体とすることが明らかな古墳は、6世紀代という意味で「6」としてある。
- 「備考」では、発掘調査により埴輪が出土しているものについては、調査年を記した。また、関係者の教示により、埴輪の存在が確認できたものについては、「○○○氏教示」とした。なお、当事業団職員の教示により確認できたものも多いが、割愛した。
- 「文献」の項に付されている数字は、一覧表の末尾に付した文献一覧の番号に対応している。

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径:m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	鬚	弁	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他
1	天川二子山 前橋市1号	前橋市文京町 3の26	前方後円 104	横穴式?	●											6後	昭29調査	1
2	不二山 前橋市2号	前橋市文京町 3の2の357	前方後円 50	横穴式	●								●			6末	昭29調査 角閃石安山岩石室	1 2
3	前橋市4号	前橋市高田町																1 3
4	王山 総社町1号	前橋市総社町 100の1	前方後円 76	横穴式			●	●		●				不明	6初	昭47・49調査	4	
5	総社二子山 総社町2号	前橋市総社町 368	前方後円 90	横穴式										不明	6後	昭12・42調査	5	
6	玉河原山 総社町4号	前橋市総社町 119	前方後円 60	横穴式?										不明	後期	消滅	36	
7	遠見山 総社町6号	前橋市総社町 1410	前方後円 66	竪穴系?									●		5後 ～6初	平3・4調査 遠藤和夫氏教示	3	
8	大小路山 総社町7号	前橋市総社町	前方後円?															6
9	大黒塚 荒砥村44号	前橋市下大屋町 555の2	前方後円 30										●		6	鈴鏡、勾玉、提瓶、出土	6	
10	荒砥村45号	前橋市下大屋町 530他	円 99?															7
11	阿久山 荒砥村46号	前橋市下大屋町 530	前方後円 28	横穴式		●								●	6	昭26調査	1	
12	鯉登塚 荒砥村49号	前橋市下大屋町 537	円 18	竪穴式 小石槨									●	●	6前	昭35調査	5	
13	前二子 荒砥村51号	前橋市西大室町	前方後円 92	横穴式									●	●	6初	昭27・32調査	5	
14	後二子 荒砥村55号	前橋市西大室町 2616・2617	前方後円 79	横穴式	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	6後	昭27・32・平3調査 円筒につく 犬・猿	5 8	
15	小二子 荒砥村56号	前橋市西大室町 2142	前方後円 30	横穴式		●								器財	6後	平3調査 後二子に隣接	5 8	
16	荒砥村59号	前橋市西大室町 2216	円															3
17	荒砥村62号	前橋市西大室町 1948他	円 24	横穴式?											6	昭56調査 西大室遺跡群	9	
18	荒砥村64号	前橋市西大室町 1950	円 36	横穴式?											6	昭56調査 西大室遺跡群	9	
19	荒砥村65号	前橋市西大室町 2157	円 7												後期?	加部二生氏教示	3	
20	荒砥村91号	前橋市西大室町 甲354	円 70?															3
21	中二子 荒砥村229号	前橋市東大室町 1501	前方後円	横穴式?											6		10	
22	荒砥村286号	前橋市二ノ宮町 2496他	前方後円 61										●		後期		3	
23	今井神社 荒砥村301号	前橋市今井町 818	前方後円 71	竪穴式											5中 ～後	昭36調査	1 6	
24	今井神社2号 荒砥村312号	前橋市今井町 835	円	横穴式	●			●	●	●	●	●	●	器台形	6末	昭56調査 角閃石安山岩石室	11	
25	今井神社1号 荒砥村316号	前橋市今井町 857	円												後期	昭56調査	11	
26	塔ヶ峯 荒砥村341号	前橋市富田町 809	円 31	横穴式?		1							1	銚1、鳥	6後	昭56調査	3 9	
27	荒砥村342号	前橋市富田町 808の1	円 21												後期	昭56調査	9	
28	荒砥村360号	前橋市泉澤町 甲213	円 20	横穴式									●	鳥	6		3	
29	七ッ石1号 漏	前橋市西大室町 324他	円 12	竪穴式?											5末 ～6初	昭54調査 西大室遺跡群	12	
30	猫見塚	前橋市桂萱	前方後円?													加部二生氏教示		
31	天神1号	前橋市西大室町	円 33	横穴式						●	●	●			6後	平1調査	13	
32	天神5号	前橋市西大室町	円	横穴式										器財・動物 の脚	6	平2調査 西田健彦氏教示		

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	髷	笏	盾	鞆	男	女	馬	その他				
33	天神6号	前橋市西大室町	円	横穴式	●	●		●	●		●	●	●	●		6初	平2調査 西田健彦氏教示	
34	天神13号	前橋市西大室町	円	横穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
35	天神17号	前橋市西大室町	円	横穴式								●	●			6	平2調査 西田健彦氏教示	
36	天神18号	前橋市西大室町	円	横穴式	●											6	平2調査 西田健彦氏教示	
37	天神21号	前橋市西大室町	円	横穴式											不明	6	平2調査 西田健彦氏教示	
38	天神23号	前橋市西大室町	帆立貝	横穴式							●					6	平2調査 西田健彦氏教示	
39	天神27号	前橋市西大室町	円	横穴式?												6	平2調査 西田健彦氏教示	
40	天神30号	前橋市西大室町	円	横穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
41	天神31号	前橋市西大室町	円	横穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
42	天神32号	前橋市西大室町	円	横穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
43	天神36号	前橋市西大室町	円	竖穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
44	天神37号	前橋市西大室町	円	横穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
45	天神38号	前橋市西大室町	円?	横穴式												6	平2調査 西田健彦氏教示	
46	天神39号	前橋市西大室町	円	横穴式	●					●						6	平2調査 西田健彦氏教示	
47	中島2号	前橋市西大室町	円 14	竖穴式												6前	昭63調査 折原洋一氏教示	
48	中島3号	前橋市西大室町	円 24	竖穴式?								●	●	2		6前	昭63調査 折原洋一氏教示	
49	中島4号	前橋市西大室町	円 10	竖穴式												6前	昭63調査 折原洋一氏教示	
50	水口山3号	前橋市西大室町	帆立貝 28	横穴式?												6	昭63調査 折原洋一氏教示	
51	水口山11号	前橋市西大室町	円? 30	横穴式	●	●				●	●					6	昭63調査 折原洋一氏教示	
52	大稲荷山2号	前橋市泉沢町	帆立貝		?		●	?	2					?	不明	6	昭63調査 折原洋一氏教示	
53	新山3号	前橋市西大室町	円	竖穴式												5後	昭61調査 折原洋一氏教示	
54	伊勢山4号	前橋市西大室町	円													後期	昭63調査 折原洋一氏教示	
55	地田栗3号	前橋市西大室町	円													後期	平1調査 折原洋一氏教示	
56	阿久山8号	前橋市西大室町	円													後期	平1調査 折原洋一氏教示	
57	阿久山9号	前橋市西大室町	円										●			後期	平1調査 折原洋一氏教示	
58	阿久山13号	前橋市西大室町	円									●				後期	平1調査 折原洋一氏教示	
59	舞台西1号	前橋市西大室町	円													後期	埴輪箱のみ平1調査 折原洋一氏教示	
60	舞台西3号	前橋市西大室町	円													後期	埴輪箱のみ平1調査 折原洋一氏教示	
61	伊勢山 荒砥村122号	前橋市西大室町 603の2	前方後円 67	横穴式								●		器財		6後	昭63の調査では埴輪なし	14 167
62	内堀M-1号 荒砥村57号	前橋市西大室町 2269他	帆立貝 35	横穴式	3	4	4	5	5	2	4	1	2	盾持ち2 鏃1		6後	昭62調査	15
63	内堀M-2号 漏	前橋市西大室町														6中 ~後	昭62調査	15
64	内堀M-4号 漏	前橋市西大室町					●	●	●	●						6中 ~後	昭62調査	16

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	髷	笄	盾	靴	柄	男	女	馬				その他
65	上縄引4号 漏	前橋市西大室町 2212他	円 19													後期	昭55調査 西大室遺跡群	17
66	上縄引8号 漏	前橋市西大室町 2212他	円													後期	昭55調査 西大室遺跡群	17
67	東原1号 漏	前橋市富田町	円 22	竪穴式 小石椁	●								●		不明	5後 ～6初	昭54調査 富田遺跡群	12
68	東原2号 漏	前橋市富田町	円 11	竪穴式 小石椁									●		不明	5後 ～6初	昭54調査 富田遺跡群	12
69	東原4号 漏	前橋市富田町	円 17	竪穴式？											不明	6前	昭54調査 富田遺跡群	12
70	東原5号 漏	前橋市富田町	円 28	竪穴式？												5後	昭54調査 富田遺跡群	12
71	東原6号 漏	前橋市富田町	円 26	竪穴式？												5後	昭54調査 富田遺跡群	12
72	東原7号 漏	前橋市富田町	円 21	竪穴式？									●	●	不明	5後	昭54調査 富田遺跡群	12
73	東原10号	前橋市富田町	円 22													後期	昭56調査	9
74	東原11号 漏	前橋市富田町	円 11	竪穴式 小石椁	●								●			5末	昭56調査	9
75	木瀬村2号	前橋市東上野 甲76	円 18										●			後期		3
76	木瀬村8号	前橋市小島田町 512	円 21													後期？	加部二生氏教示	
77	木瀬村10号	前橋市箕井町 44の1他	前方後円 21以上	横穴式									●	●		6後	角閃石安山岩石室	1 3
78	正円寺 桂萱村66号	前橋市堀之下町 380・381の1	前方後円 70	横穴式												6初	昭32調査	1 5
79	檜峰 桂萱村29号	前橋市上泉町 2224	円 18	横穴式												6後	昭26調査	1
80	上両家二子山 上陽村1号	前橋市西善町木之 宮169の1他	前方後円 79	横穴式？												6後		1
81	ボンゼン塚 上陽村3号	前橋市広瀬町 2の24	円 25													後期？	昭42調査	7 18
82	阿弥陀山 上陽村6号	前橋市山王町 527	円													後期？		3
83	山王二子山 上陽村14号	前橋市山王町 1913の3	前方後円 52	横穴式	●			●	●	●	●	●	●	●		6後	昭56調査 出土遺物東博蔵	19
84	山王大塚 上陽村15号	前橋市山王町 3の24	円 44	横穴式												6後	昭29調査 角閃石安山岩石室	1
85	亀塚山 上陽村20号	前橋市山王町 1の28の3	前方後円 50														昭42調査	7 18
86	広瀬24号 上陽村24号	前橋市山王町 1の29	円 25	横穴式									●			6前	昭42調査	7 18
87	東善大塚 上陽村32号	前橋市東善町 103、104	前方後円 35															3
88	上陽村33号	前橋市東善町94	円 29															3
89	オブ塚 芳賀村48号	前橋市勝沢町 420	前方後円 47	横穴式									2	●		6	昭26調査	7 26
90	丑子塚 南橋村6号	前橋市上細井町 375	前方後円 45	横穴式												6	伝金環、刀剣出土	2 3
91	南橋村7号	前橋市上細井町 乙379	円 20													後期？		3
92	南橋村8号	前橋市上細井町 401の1	円 15	横穴式												6		3
93	南橋村12号	前橋市東丑子町 401の2	円 20													後期？		3
94	南橋村13号	前橋市東丑子町 399	円 15													後期？		3
95	狐塚 南橋村14号	前橋市上細井町 1110	円 20	横穴式												6後	角閃石安山岩石室	2 3
96	上細井稻荷山 南橋村15号	前橋市東丑子町 1146の1	円 25	竪穴式？												中期	石製模造品東博蔵	3

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬘	笏	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他	
97	観音山 南橋村24号	前橋市田口町 309の2	円 15	横穴式											●		6		3
98	南橋村27号	前橋市田口町 甲の949													●		後期		3
99	南橋村30号	前橋市田口町 1109																	3
100	芳賀西部M-1	前橋市鳥取町	方 15×13	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
101	芳賀西部M-3	前橋市鳥取町	円 11	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
102	芳賀西部M-4	前橋市鳥取町	円 17	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
103	芳賀西部M-5	前橋市鳥取町	円	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
104	芳賀西部M-6	前橋市鳥取町	円 13	礎床												猪・鹿	5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
105	芳賀西部M-7	前橋市鳥取町	円 15	竪穴式													5末 ～6初	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
106	芳賀西部M-8	前橋市鳥取町	円 11	礎床													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
107	芳賀西部M-9	前橋市鳥取町	円 10	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
108	芳賀西部M-10	前橋市鳥取町	円 14	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
109	芳賀西部M-11	前橋市鳥取町	円 7	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
110	芳賀西部M-12	前橋市鳥取町	円 12	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
111	芳賀西部M-13	前橋市鳥取町	円 11	礎床?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
112	芳賀西部M-14	前橋市鳥取町	円 14	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
113	芳賀西部M-15	前橋市鳥取町	円 16	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
114	芳賀西部M-16	前橋市鳥取町	円 15	竪穴式													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
115	芳賀西部M-17	前橋市鳥取町	円 13	竪穴式?												形象埴輪基 台	5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
116	芳賀西部M-18	前橋市鳥取町	円 13	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
117	芳賀西部M-19	前橋市鳥取町	円 13	竪穴式?													後期	昭47～49調査 芳賀西部団地遺跡群	20
118	芳賀西部M-20	前橋市鳥取町	円 9	竪穴式													後期	昭47～49調査 芳賀西部団地遺跡群	20
119	芳賀西部M-21	前橋市鳥取町	円 11	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
120	芳賀西部M-22	前橋市鳥取町	円 14	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
121	芳賀西部M-23	前橋市鳥取町	円 12	竪穴式?											●		5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
122	芳賀西部M-24	前橋市鳥取町	円 8	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
123	芳賀西部M-25	前橋市鳥取町	円 8	竪穴式?													5後?	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
124	芳賀西部M-26	前橋市鳥取町	円 16	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
125	芳賀西部M-27	前橋市鳥取町	円 16	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
126	芳賀西部M-28	前橋市鳥取町	円? 10	竪穴式?														昭47～49調査 芳賀西部団地遺跡群	20
127	芳賀西部M-29	前橋市鳥取町	円 16	竪穴式?													5後	昭47～49調査、FA層 下芳賀西部団地遺跡群	20
128	金五塚南 漏	前橋市鳥取町 220の1	円															加部二生氏教示	

IV 考 察

№	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	鬘	苧	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他
129	前原漏	前橋市鳥取町185~225		横穴式?												6		7
130	諏訪山清里村1号	前橋市青梨子町680	円	横穴式												6		2 3
131	清里村3号	前橋市池端町157の1	円 30															2 3
132	八千塚清里村5号	前橋市青梨子町202の1・2	円															3
133	清里村11号	前橋市清野町甲769の1	円	横穴式												6		1
134	清里長久保7号 駒寄村21号	前橋市池端町644他	円 12	横穴式	●											6後	昭55調査 清里長久保遺跡	21
135	清里長久保2号 駒寄村24号	前橋市池端町595	円 14	横穴式	● ?											6後	昭55調査 清里長久保遺跡	21
136	清里長久保8号漏	前橋市池端町	円 25	横穴式												6後	昭55調査 清里長久保遺跡	21
137	芳賀12号	前橋市五代町163	円 18														加部二生氏教示	3
138	船戸塚芳賀13号	前橋市五代町4の1	円 20	横穴式												6	加部二生氏教示	3
139	芳賀蛇塚漏	前橋市後原295	円									●					加部二生氏教示	
140	社口塚北漏	前橋市五代町752の2	円														加部二生氏教示	
141	荒口大道漏	前橋市荒口町大道	円?	横穴式												6後	昭26・27調査	22
142	舞台1号	前橋市荒子町	帆立貝 40	竪穴式?	●	●		●			●			鷓		5後	平2調査	23
143	舞台2号	前橋市荒子町	円														平2調査	23
144	鶴巻塚 上川淵村44号	前橋市朝倉町1413	前方後円 77													中期		3
145	上川淵村18号	前橋市朝倉町1632	前方後円 51														加部二生氏教示	3
146	小旦那 上川淵村27号	前橋市朝倉町3丁目	円 9	横穴式	●			●	●					牙		6前	昭26調査	1
147	上川淵村28号	前橋市朝倉町1716	円 4														加部二生氏教示	3
148	上川淵村29号	前橋市朝倉町1689	円 18														加部二生氏教示	3
149	長山 上川淵村36号	前橋市朝倉町3の47	前方後円	横穴式	●			●	●					牙		6後	角閃石安山岩石室	1 3
150	上川淵村54号	前橋市朝倉町1398	前方後円 53														加部二生氏教示	3
151	箕井八日市	前橋市小島田町	円 15	竪穴式?												5後	平3調査 FA層下	35
152	熊野神社 下川淵村3号	前橋市公田町545	前方後円	横穴式								●				6		
153	大胡町5号	勢多郡大胡町茂木	円 14	竪穴式 石槨												5後	昭32調査 茂木古墳群	5
154	大胡町6号	勢多郡大胡町茂木	円 18	竪穴式 石槨												5後	昭33調査 茂木古墳群	5
155	大胡町11号	勢多郡大胡町茂木442	前方後円 41									●				後期		3
156	粕川村22号	勢多郡粕川村月田164の1	円	横穴式?								●				6	月田古墳群	3
157	粕川村23号	勢多郡粕川村月田167	円	横穴式												6後	小島純一氏教示 月田古墳群	3
158	粕川村29号	勢多郡粕川村月田171	円 18	横穴式												6後	小島純一氏教示 月田古墳群	3
159	粕川村33号	勢多郡粕川村月田184	円	横穴式?												6?	月田古墳群	3
160	月田薬師塚 粕川村35号	勢多郡粕川村月田188	円 8	横穴式												7	昭26調査 月田古墳群	24
161	壇塚 粕川村36号	勢多郡粕川村月田207	円 25	横穴式	3		4	3	3		●		1	牙		6中	昭25調査 月田古墳群	25 26

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No.	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
162	鏡手塚 粕川村44号	勢多郡粕川村 月田甲213	円 28	横穴式			●						●	●		6中	昭23調査 月田古墳群	2
163	西塚 粕川村45号	勢多郡粕川村 月田259	円													後期	昭23調査 月田古墳群	
164	丸塚 粕川村46号	勢多郡粕川村 月田258	円	横穴式											不明	6	昭25調査 月田古墳群	27
165	地藏塚 粕川村48号	勢多郡粕川村 月田1919	前方後円 13?	横穴式?									●			6?	月田古墳群	3
166	二子塚 粕川村49号	勢多郡粕川村 月田1918の1	帆立貝 40	横穴式											不明	6	月田古墳群	3
167	三ヶ尻 漏	勢多郡粕川村 深津1110の2					●										深津地区遺跡群 昭61調査	28
168	西原F-1号 漏	勢多郡粕川村 深津	帆立貝 30	横穴式				●	1	2 以上	1 以上		●			6中 ～後	昭59調査 西原古墳群	29
169	三騎堂1号	勢多郡粕川村 深津743他	円 23	藤塚												5末	昭61調査	30
170	三騎堂3号	勢多郡粕川村 深津743他	円 20														昭61調査	30
171	三騎堂4号	勢多郡粕川村 深津743他	円 20	藤塚												5後	昭61調査	30
172	近戸2号	勢多郡粕川村 深津1503の2他	円 25											●			昭61調査	30
173	近戸3号	勢多郡粕川村	円 39	竪穴式												5後	昭61調査	30
174	近戸4号	勢多郡粕川村											●	●			昭61調査	30
175	白藤A-1 漏	勢多郡粕川村膳	円 14	土壇									●			6前	昭56～63調査 白藤古墳群	31
176	白藤D-3 漏	勢多郡粕川村膳	円 23	竪穴式 小石塚										1		5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
177	白藤F-1 漏	勢多郡粕川村膳	円 18	竪穴式 小石塚												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
178	白藤F-2 漏	勢多郡粕川村膳	円 22	竪穴系?									●	1		5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
179	白藤F-3 漏	勢多郡粕川村膳	円 14	竪穴系?					1							5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
180	白藤P-1 漏	勢多郡粕川村膳	円 22	竪穴系?												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
181	白藤P-6 漏	勢多郡粕川村膳	円 22	竪穴系?					1					1		5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
182	白藤Q-1 漏	勢多郡粕川村膳	円 24	土壇												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
183	白藤V-2 漏	勢多郡粕川村膳	円 19	土壇												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
184	白藤V-4 漏	勢多郡粕川村膳	円 21	竪穴系?										2		5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
185	白藤Y ₁ -2 漏	勢多郡粕川村膳	円 17	竪穴系?												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
186	白藤Y ₁ -5 漏	勢多郡粕川村膳	円 18	竪穴系?												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
187	白藤Y-4 漏	勢多郡粕川村膳	円 18	竪穴系?												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
188	白藤Y-5 漏	勢多郡粕川村膳	円 20	竪穴系?												5後	昭56～63調査 白藤古墳群	31
189	天神山 新里村1号	勢多郡新里村 小林70	円 24	横穴式	●								●	●		6後	昭33調査	32
190	向赤坂2号 新里村15号	勢多郡新里村 武井52の2	円 15															33
191	向赤坂1号 新里村16号	勢多郡新里村 武井52の1他	円 20															33
192	武井9号 新里村17号	勢多郡新里村 武井53	円 14															33
193	野3号 新里村18号	勢多郡新里村 野294																33

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
194	観音塚 新里村20号	勢多郡新里村 武井98	円 30															33
195	小林15号 新里村22号	勢多郡新里村 野甲147の1	円 30															33
196	小林5号 新里村25号	勢多郡新里村 小林627	円 16															33
197	小林6号 新里村26号	勢多郡新里村 小林627	円 22															33
198	小林7号 新里村27号	勢多郡新里村 小林627	円 28															33
199	不二塚 新里村37号	勢多郡新里村 山上114・115	円 30															33
200	鶴ヶ谷2号 新里村49号	勢多郡新里村 鶴ヶ谷250																33
201	広間地西1号 漏	勢多郡新里村 新川	円	竪穴式?									●			5後	平3調査 加部二生氏教示	
202	広間地西2号 漏	勢多郡新里村 新川	円	竪穴式?												5後	平3調査 加部二生氏教示	
203	広間地西3号 漏	勢多郡新里村 新川	円	竪穴式?												5後	平3調査 加部二生氏教示	
204	広間地西9号 漏	勢多郡新里村 新川	円	竪穴式?												5後	平3調査 加部二生氏教示	
205	広間地西埴輪棺 漏	勢多郡新里村 新川	円														平3調査 加部二生氏教示	
206	森山 富士見村6号	勢多郡富士見村 横室道上125の2	円 8															7
207	鎌塚 富士見村15号	勢多郡富士見村 原之郷2355	円 9	横穴式?												6C	伝金環、玉類出土	3 7
208	九十九山 富士見村16号	勢多郡富士見村 原之郷	前方後円 60	横穴式									● 不明		6前 ~中	昭26調査		34
209	富士見村40号	勢多郡富士見村 時沢2555	円 8															34
210	甲子塚 敷島村2号	勢多郡赤城村 津久田	前方後円 45	横穴式												6	前方後円の可能性少ない	3
211	横野村19号	勢多郡赤城村 宮田424	円	横穴式														3
212	権現塚 横野村24号	勢多郡赤城村 宮田1249	円 14															3
213	稲荷塚 横野村31号	勢多郡赤城村 樽507	円 15	横穴式														3
214	横野村32号	勢多郡赤城村 樽503	円 7															3
215	頼政神社 漏	高崎市宮元町	円	横穴式												6	昭49調査	93
216	天神塚 高崎市22号	高崎市乗附町 1298	円 21										●			後期		3
217	高崎市122号	高崎市乗附町 2206の1	円	横穴式												6		3
218	御部入10号 漏	高崎市乗附町	円 11	横穴式												6後	昭43調査 御部入古墳群	5
219	御部入11号 漏	高崎市乗附町	円 12	横穴式												6後	昭43調査 御部入古墳群	5
220	御部入13号 漏	高崎市乗附町	円?	横穴式?												6	昭43調査 御部入古墳群	5
221	御部入14号 漏	高崎市乗附町	円 10	横穴式												6後	昭43調査 御部入古墳群	5
222	御部入18号 漏	高崎市乗附町	円 14	横穴式												6前	昭43調査 御部入古墳群	5
223	稲荷山 漏	高崎市石原町	円	横穴式			●	●			●	●				6末	昭55調査	37
224	三島塚 高崎市178号	高崎市石原町 3194・3195	円 27	竪穴系												5後		
225	坊主山 漏	高崎市石原町 3199	方? 26	横穴式?	●								1	●		6?	報文では方墳としているが前方後円墳の可能性あり	

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No.	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	甕	方	盾	靴	柄	男	女	馬				その他	
226	神明塚 高崎市220号	高崎市並榎町 364	前方後円 16	横穴式													6		3
227	五霊神社 高崎市223号	高崎市貝沢町 332	前方後円 108	横穴式													6後		
228	聖天山 高崎市227号	高崎市貝沢町 1418	円 23																
229	柳町 漏	高崎市貝沢町																昭60調査	
230	稻荷山 佐野村3号	高崎市佐野窪9	円	横穴式?								●					6	下佐野古墳群	3
231	御堂塚 佐野村10号	高崎市上佐野町 477	前方後円 65	横穴式													6		
232	漆山 佐野村27号	高崎山下佐野町 863・864	前方後円 67	横穴式								●	●				6後	下佐野古墳群	3
233	下佐野2号 佐野村40号	高崎山下佐野町	円 17	横穴式					●			●	●				6後	昭34調査 下佐野古墳群	38
234	下佐野4号 佐野村43号	高崎山下佐野町 1045	円	横穴式													6後	昭34調査 下佐野古墳群	38
235	佐野村49号	高崎山下佐野町 1230の1	円	横穴式?									●				6	下佐野古墳群	3
236	蔵王塚 佐野村65号	高崎山下佐野町 832	円 56	横穴式					●			●	●	鶏か水鳥			6末~ 7初	昭32調査 下佐野古墳群	39
237	越後塚 佐野村74号	高崎市中居町 624	前方後円																
238	浅間山 倉賀野町1号	高崎市倉賀野町 197他	前方後円 172	竪穴系										器財			5前	倉賀野古墳群	5
239	大鶴巻 倉賀野町2号	高崎市倉賀野町 660他	前方後円 123	竪穴系										器財			5前	倉賀野古墳群	5
240	小鶴巻 倉賀野町3号	高崎市倉賀野町 678・686	前方後円 87	船形石棺													5後	倉賀野古墳群	5
241	庚申塚 倉賀野町35号	高崎市倉賀野町 1929	円 45																
242	小手塚山 倉賀野町37号	高崎市倉賀野町 1934	円	横穴式?								●					6		3
243	長賀寺山 倉賀野町38号	高崎市倉賀野町 1947他	円 35	横穴式?													6		2
244	倉賀野町58号	高崎市倉賀野町 乙3・181	円	横穴式?									●				6	大道南古墳群	3
245	倉賀野町105号	高崎市倉賀野町 3333・3334	前方後円 48	横穴式?													6	大道南古墳群	3
246	倉賀野町125号	高崎市倉賀野町 3308	円 27	横穴式?													6	大道南古墳群	
247	土手二子 倉賀野町130号	高崎市倉賀野町 3285	前方後円														後期	大道南古墳群	3
248	倉賀野町190号	高崎市倉賀野町 甲3595・乙3595	円 25	横穴式?													6		3
249	倉賀野町196号	高崎市倉賀野町 甲3623	円 18	横穴式?													6		3
250	大応寺石梯 漏	高崎市倉賀野町																昭49調査	
251	乙大応寺1号 漏	高崎市倉賀野町	前方後円 24.5以上	横穴式?								●					6	平2調査	40
252	桃山 漏	高崎市岩鼻町字 延養寺	円 40														後期		2
253	上滝B号 漏	高崎市台新田町 字綿貫台	円 20														後期		2
254	首切山(稲荷塚) 岩鼻村7号	高崎市台新田町 842	円 34	横穴式													6後		41
255	不動山 岩鼻村15号	高崎市綿貫町 1272の1他	前方後円 90	舟形石棺	●									不明			5中 ~後	昭38・39・40調査	5
256	観音山 岩鼻村22号	高崎市綿貫町 1572	前方後円 97	横穴式	2		1				11	7	2	鶏1			6後	昭42・43調査	5 42
257	漏	高崎市綿貫町 (旧火薬製造所内)		横穴式?		●	●	●	●		2	1	2	槍			6後	出土遺物東博蔵	43

IV 考 察

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	髷	方	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
258	普賢寺裏漏	高崎市綿貫町	前方後円 75	竪穴式？													中期？		
259	飯玉山 岩鼻村25号	高崎市栗崎町 609	前方後円 27																
260	浅間山 京ヶ島村2号	高崎市元島名町 262の甲・262の乙	円 30	横穴式													6		3
261	天神山 京ヶ島村3号	高崎市矢島町 406	円 40	横穴式													6		3
262	稲荷山 京ヶ島村7号	高崎市元島名町 1347	円 12	横穴式？													6		3
263	元島名将軍塚	高崎市元島名町	前方後円 91～96												古式土師土 器群・鶏	前期	昭55調査		
264	砂内3号 漏	高崎市矢中町															5末～ 6初	昭60調査	
265	漏	高崎市宿大類町 字南大類	円 20														後期？		2
266	万相寺1号 漏	高崎市宿大類町													●				
267	諏訪山 大類村13号	高崎市柴崎町 1137	円 30	横穴式？													6	馬具、大刀出土	41
268	浅間山 大類村17号	高崎市柴崎町 586	円 30	横穴式													6	副葬品(鏡、玉類、大刀)	41
269	イナリ塚 漏	高崎市柴崎町 560	円 15														後期？		2
270	滝川村2号	高崎市下滝町26	前方後円 47	横穴式											不明		6前	昭41調査	5
271	天神山 滝川村4号	高崎市下齊田町 80	円 30	横穴式？													6	耳環・直刀出土	2
272	漏	高崎市下齊田町	円														後期	6基の円墳群でいずれも埴輪散布	2
273	下滝1号 漏	高崎市下滝町	前方後円 40	横穴式													後期？		2
274	鈴ノ宮4号 漏	高崎市矢島町	円	竪穴系													5後	昭52調査	44
275	鈴ノ宮6号 漏	高崎市矢島町	円	竪穴系													5後	昭52調査	44
276	浜尻天王山 中川村1号	高崎市浜尻町 962	前方後円 58	横穴式													6後	昭30調査	45
277	真福寺 漏	高崎市浜尻町	前方後円																
278	漏	高崎市井野町 1233	円 15														後期？		41
279	漏	高崎市井野町 891															後期？		41
280	ボンボン塚 漏	高崎市小八木町 293	円														後期？		41
281	三本山 漏	高崎市小八木町 320	円 25	横穴式													6	昭27調査	45
282	オトウカ山 漏	高崎市小八木町	円 45																41
283	漏	高崎市大八木町 937・944	前方後円															円墳？基の可能性あり	41
284	漏	高崎市大八木町 944	円 20	横穴式													6		41
285	漏	高崎市大八木町 943	円 15	横穴式？													6？		41
286	妙義山 六郷村2号	高崎市筑縄町 332	円 34	横穴式？													6		3
287	小星山 六郷村4号	高崎市筑縄町64	円 24	横穴式											● ●	不明	6後	前方後円とされていたが、昭58年の調査で円墳と判明	46
288	六郷村6号	高崎市下小島町1 の1	前方後円																
289	虚空蔵山 六郷村20号	高崎市上並榎町 676	円 11													鶏1			41

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬘	鬘	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
290	稻荷山 六郷村23号	高崎市上並榎町 186・187	前方後円 122	舟形石棺													5後	消滅、石棺は天竜護国 寺蔵	47
291	姫塚 長野村1号	高崎市浜川町甲 783他		横穴式													6		3
292	道場遺跡1号 漏	高崎市浜川町	帆立貝 16	竪穴式 小石椁													5後	昭62調査 FA層下	47
293	道場遺跡2号 漏	高崎市浜川町	円 18	竪穴系?													5後	昭62調査、帆立貝式の 可能性ある	47
294	豊岡村7号	高崎市上豊岡町 925	円 27	横穴式								●	●				6		3
295	豊岡村31号	高崎市中豊岡町 525																	
296	二子塚 碓氷八幡村1号	高崎市八幡町 796	前方後円 60	横穴式													6後?	観音塚の南東に近接	48
297	平塚 碓氷八幡村6号	高崎市八幡町 1031	前方後円 105	舟形石棺													5後	昭32調査 桂甲小札、石棺2基	5
298	観音塚 碓氷八幡村7号	高崎市八幡町 1031他	前方後円 105	横穴式											不明		6末～ 7初		5 49
299	若田大塚 碓氷八幡村9号	高崎市八幡町 422の1他	円 30	横穴式													6前	昭45・46調査	5
300	長瀬西 碓氷八幡村24号	高崎市剣崎町 1366・1367	円 25	竪穴式石 室													5前	三角板革綴短甲	5
301	剣崎天神山 碓氷八幡村27号	高崎市剣崎町甲 927	円 30	竪穴系?													5前～ 中		50
302	少林山台2号	高崎市鼻高町	円 18	横穴式	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	不明・槍	6	平1・2調査 少林山台古墳群	
303	少林山台3号	高崎市鼻高町	円 20	竪穴式													5中	平1・2調査 少林山台古墳群	
304	少林山台4号	高崎市鼻高町	円 18	横穴式	● ?										●	不明	6	平1・2調査 少林山台古墳群	
305	少林山台5号	高崎市鼻高町	円 11	横穴式	●										●	不明	6	平1・2調査 少林山台古墳群	
306	少林山台6号	高崎市鼻高町	円 13	横穴式													6	平1・2調査 少林山台古墳群	
307	少林山台7号	高崎市鼻高町	円 20	横穴式		●	●	●								不明	6	平1・2調査 少林山台古墳群	
308	少林山台8号	高崎市鼻高町	円 14	横穴式?													6	平1・2調査 少林山台古墳群	
309	少林山台9号	高崎市鼻高町	円 16	横穴式	●											不明	6	平1・2調査 少林山台古墳群	
310	少林山台11号	高崎市鼻高町	円 24	横穴式													6	平1・2調査 少林山台古墳群	
311	少林山台12号	高崎市鼻高町	円 20	横穴式	●										●	不明	6	平1・2調査 少林山台古墳群	
312	少林山台14号	高崎市鼻高町	円 14	横穴式													6	平1・2調査 少林山台古墳群	
313	少林山台17号	高崎市鼻高町	円 20	横穴式		●									●		6	平1・2調査 少林山台古墳群	
314	少林山台19号	高崎市鼻高町	円 16	横穴式?	●										●	不明	6		
315	少林山台21号	高崎市鼻高町	円(造出し 付) 25	竪穴式													5後	横ハケ有、TK 208須恵 器出土	
316	下郷14号 滝川村8号	高崎市八幡原町 60	前方後円 80～90	竪穴系?													4末	昭52調査	51
317	若宮A号 漏	高崎市八幡原町 2028・2029	円 16	横穴式													6後	昭41調査	5
318	若宮1号 漏	高崎市八幡原町	円													不明		昭49調査	
319	若宮2号 漏	高崎市八幡原町	円															昭49調査	
320	若宮4号 漏	高崎市八幡原町	円									●	●					昭49調査	
321	若宮6号 漏	高崎市八幡原町	円												●			昭49調査	

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	翳	弁	盾	鞆	鞆	男	女	馬				そ の 他	
322	若宮 8 号 漏	高崎市八幡原町	円										●	●			昭49調査		
323	若宮 9 号 漏	高崎市八幡原町	円										●	●			昭49調査		
324	若宮10号 漏	高崎市八幡原町	円														昭49調査		
325	若宮11号 漏	高崎市八幡原町	円														昭49調査		
326	若宮12号 漏	高崎市八幡原町	円														昭49調査		
327	若宮八幡北 漏	高崎市八幡原町 2137	帆立貝 46	舟形石棺	●		●					●	●	●	鹿・犬・盾持 人	5後	昭49調査	5 52	
328	若宮2133号 漏	高崎市八幡原町 2132・2133	円 15														後期		41
329	漏	高崎市八幡原町 2019	円 10														後期		41
330	鈴塚 漏	高崎市八幡原町 2029	円 10	横穴式													6後	昭28調査	53
331	稲荷山 漏	高崎市八幡原町 1403	円 30														後期		41
332	漏	高崎市八幡原町 400	円 20														後期?		2
333	伊勢山 多野八幡村47号	高崎市山名町 775	前方後円 45	横穴式													6後	山名古墳群	
334	土合 1 号 多野八幡村69号	高崎市山名町 30の2	円 10	横穴式							2						6後	昭39調査	54
335	土合 2 号 多野八幡村70号	高崎市山名町 4	円 4	横穴式 石室	●						4	●	3				6後	昭39・平1調査 田村孝氏教示	54
336	上石堂 多野八幡村74号	高崎市根小屋町 2329	円 12	横穴式														昭39調査	55
337	山名原口 1 号 漏	高崎市山名町	円 23	横穴式?			●					●	●	●	盾持人	6後	平成元調査 神戸聖吾氏教示		
338	貝沢神社	高崎市	前方後円				●												
339	長山 佐野村24号	高崎市下佐野町		横穴式?													6		
340	八幡15号	高崎市八幡町	前方後円	横穴式													6	昭62調査	
341	下滝中道	高崎市	円													不明			
342	慈眼寺 A 号	高崎市	円																
343	新福寺裏	高崎市	円																
344	山名伏見稲荷	高崎市	円																
345	豊岡台 漏	高崎市	円																
346	しどめ塚 久留馬村14号	群馬郡榛名町 本郷977	円 20	横穴式													6末～ 7初	昭36調査	5
347	稲荷塚 久留馬村18号	群馬郡榛名町 本郷2429	帆立貝 35	横穴式								●					6前	昭45・46調査 本郷の場古墳群	56
348	上芝 箕郷町 4 号	群馬郡箕郷町 上芝1093	帆立貝 18								5	1	2	不明				昭 4 調査	57 58
349	箕郷町 5 号	群馬郡箕郷町 西明屋 4		横穴式?							2	1	1				6	出土遺物東博蔵	3
350	漏	群馬郡箕郷町 八幡宮前										3	●					出土遺物東博蔵	
351	長者久保	群馬郡箕郷町 金敷平																	
352	漏	群馬郡箕郷町 善地132																	
353	車持塚 車郷村39号	群馬郡箕郷町 善地161	円 9	横穴式													6		3
354	車郷村53号	群馬郡箕郷町 和田山	円 18	横穴式?													6	和田山古墳群	3
355	車郷村64号	群馬郡箕郷町 和田山144	円 6	横穴式?													6	和田山古墳群	3
356	車郷村65	群馬郡箕郷町 和田山141	円 15	横穴式?													6	和田山古墳群	3

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径：m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬚	分	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
357	車郷村66号	群馬郡箕郷町 和田山145	円 6	横穴式?													6	和田山古墳群	3
358	車郷村73号	群馬郡箕郷町 和田山451		横穴式?													6	和田山古墳群	3
359	車郷村77号	群馬郡箕郷町 和田山451		横穴式?													6	和田山古墳群	3
360	車郷村78号	群馬郡箕郷町 和田山451		横穴式?													6		3
361	車郷村84号	群馬郡箕郷町 和田山451		横穴式?						●							6		3
362	車郷村86号	群馬郡箕郷町 和田山442		横穴式?													6		3
363	車郷村94号	群馬郡箕郷町 和田山430		横穴式?													6		3
364	車郷村110号	群馬郡箕郷町 和田山229の2		横穴式?													6		3
365	上郊村19号	群馬郡箕郷町 生原1513	円 9														後期?		3
366	上郊村24号	群馬郡箕郷町 生原564	円 6														後期?		3
367	金古内林1号 金古町1号	群馬郡群馬町金古 2407の1	円 9		●												6後	昭48調査 橋向古墳群	5
368	入道山 金古町5号	群馬郡群馬町金古 2439	前方後円 27	横穴式													6		59
369	愛宕山 金古町9号	群馬郡群馬町金古 2052他	円 18	横穴式													6後		59
370	金古内林2号 漏	群馬郡群馬町金古 2407の1	円 14	横穴式									不明				6後	昭48調査	5
371	如来 漏	群馬郡群馬町金古																	
372	寺屋敷 漏	群馬郡群馬町足門																	
373	鶴巻・東原蓋 漏	群馬郡群馬町足門																	
374	葉師塚 上郊村1号	群馬郡群馬町保 渡田1873	前方後円	舟形石棺	●								●				5末	昭63調査	60
375	八幡塚 上郊村2号	群馬郡群馬町保 渡田1956・1957	前方後円 102	舟形石棺							10	2	9	器台にのる 壺・不明			5	昭4・55調査	61
376	井出二子山 上郊村5号	群馬郡群馬町井 出1403の1	前方後円 108	舟形石棺	●						●	●	●	猪			5後	昭5・46調査 昭59調査	62 63
377	井出二子山 (突出遺構)	群馬郡群馬町井 出			1	3		4			28	3	4	壺2・犬4・ 猪1			5後	昭63調査	60
378	おおづか山 上郊村9号	群馬郡群馬町中 里378・379	円 23	横穴式													6後		2
379	棟高北寝窪 漏	群馬郡群馬町棟 高961の1～3																	
380	梶ヶ岡村8号	群馬郡群馬町中 泉813・乙816	前方後円? 60	横穴式													6		3
381	大崎1号 漏	渋川市大崎1497	円	竪穴系													6初	FA層下	64
382	大崎3号 漏	渋川市大崎1497	前方後円?	竪穴系													5末～ 6初	昭56調査 FA層下	64
383	漏	渋川市大崎																	
384	東町 漏	渋川市東町2001の 4	方 5.2以上	竪穴式 小石櫛													5末～ 6初	昭40調査	5
385	坂下町 漏	渋川市坂下町									●						後期		64
386	行幸田山2号 漏	渋川市行幸田	円 26	竪穴系?													後期 初		65
387	行幸田山3号 漏	渋川市行幸田	円 28	竪穴系?													後期 初		65
388	伊勢森 漏	渋川市行幸田	円?	竪穴系?													5後	FA層下	64

IV 考 察

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
389	空沢2号 漏	渋川市行幸田	円	竪穴系?													5後	FA層下 空沢古墳群	
390	空沢3号 漏	渋川市行幸田	円	竪穴系?													5末～ 6初	FA層下 空沢古墳群	
391	空沢4号 漏	渋川市行幸田	円	竪穴系?													5後	FA層下 空沢古墳群	
392	空沢6号 漏	渋川市行幸田	円	横穴式											不明		6後	空沢古墳群	
393	空沢7号 漏	渋川市行幸田	円	竪穴系?													5後	FA層下 空沢古墳群	
394	空沢10号 漏	渋川市行幸田	円	横穴式													6後	空沢古墳群	
395	空沢11号 漏	渋川市行幸田	円	横穴式													6後	空沢古墳群	
396	空沢12号 漏	渋川市行幸田	円	竪穴系?									●				5後	FA層下 空沢古墳群	
397	空沢21号 漏	渋川市行幸田	円	竪穴系?													5後	FA層下 空沢古墳群	
398	漏	渋川市金井1529																	
399	金島村6号	渋川市金井1574の 1、2、5																	3
400	前原 漏	渋川市金井		竪穴系?													5末～ 6初	昭56調査 FA層下	65
401	漏	渋川市石原951																	
402	石原東 漏	渋川市石原	円	竪穴系													後期	FA層下	65
403	駒寄村2号	北群馬郡吉岡町 大久保1768	円										●				6		3
404	駒寄村10号	北群馬郡吉岡町 大久保1362～4	前方後円										●				後期		3
405	駒寄村21号	北群馬郡吉岡町 大久保644																【総覧】には前方後円 とある	3
406	長久保14号 漏	北群馬郡榛東村 新井	円	横穴式		●	●										6後	昭51～53調査 長久保古墳群	66
407	長久保36号 漏	北群馬郡榛東村 新井	前方後円	横穴式?													6	長久保古墳群	66
408	長久保37号 漏	北群馬郡榛東村 新井	円	横穴式?													6	長久保古墳群	66
409	稻荷山 桃井村3号	北群馬郡榛東村 新井2681	前方後円																3
410	桃井村15号	北群馬郡榛東村 新井2370	円														後期		
411	高塚 桃井村54号	北群馬郡榛東村 新井2974	前方後円	横穴式	●		●	●	●	●	1	1	●	弓・埴をの せた器台			6中	昭34・35調査	5 67
412	相馬村3号	北群馬郡榛東村 廣馬場918	円																
413	白郷井村1号	北群馬郡子持村 上白井2684の1	3																
414	白郷井村2号	北群馬郡子持村 上白井2662		横穴式															
415	伊熊 白郷井村3号	北群馬郡子持村 上白井2657	円	横穴式													6前	昭29調査	5 67
416	白郷井村4号	北群馬郡子持村 上白井2642	2	横穴式													6		3
417	白郷井村6号	北群馬郡子持村 上白井2727	円	横穴式													6		3
418	白郷井村7号	北群馬郡子持村 上白井2756	円	横穴式?													6		3
419	有瀬1号 漏	北群馬郡子持村 上白井2757	円	横穴式	●										不明		6前	昭31調査	5 67
420	デン塚 漏	北群馬郡子持村 北牧																	

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No.	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	髻	笏	盾	鞆	網	男	女	馬				その他	
421	諏訪神社 藤岡町3号	藤岡市藤岡甲 495	前方後円 57	横穴式													6後		68
422	藤岡町8号	藤岡市小林563	円 15	横穴式 石室?													6	小林古墳群	3
423	漏	藤岡市小林10の1	円	横穴式?													6後	小林古墳群	41
424	漏	藤岡市小林乙の2	円?	横穴式?													6後	小林古墳群	41
425	漏	藤岡市小林38	円?	横穴式?													6後	小林古墳群	41
426	漏	藤岡市小林乙101	円?	横穴式?													6後	小林古墳群	41
427	藤岡町36号	藤岡市小林3187	円 72	横穴式?													6後	小林古墳群	41
428	堀ノ内 CK-1号 藤岡町52号	藤岡市小林147の 4	円 19								●	●					6中	昭53~55調査 堀ノ内遺跡群	69
429	堀ノ内 BK-1号 藤岡町53号	藤岡市小林81	円 21	横穴式													6後	昭53~55調査 堀ノ内遺跡群	69
430	藤岡町67号	藤岡市小林甲49 乙49	円 25	横穴式?													6後	小林古墳群	41
431	小林A号 藤岡町78号	藤岡市小林乙4	円 16	横穴式			●				●	●		不明			6後	昭29調査 小林古墳群	70
432	堀ノ内 FK-1号 漏	藤岡市小林249	帆立貝 31								●	●		不明			6	昭53~55調査 堀ノ内遺跡群	69
433	堀ノ内 FK-2号 漏	藤岡市小林240	帆立貝 39								●		1				昭53~55調査 堀ノ内遺跡群	69	
434	堀ノ内 FK-4号 漏	藤岡市小林249	円 11.8	横穴式?													6	昭53~55調査 堀ノ内遺跡群	69
435	堀ノ内 FK-7号 漏	藤岡市小林235	円 24	横穴式?													6	昭53~55調査 堀ノ内遺跡群	69
436	七興山 美土里村1号	藤岡市上落合 831他	前方後円 145	竪穴式?	●		●				●			鷹飼の鷹			5末	平元調査 白石古墳群	5 71
437	美土里村3号	藤岡市上落合 848の3	円 30																3
438	美土里村16号	藤岡市上落合 889	前方後円 62	横穴式 石室													6		3
439	伊勢塚 美土里村56号	藤岡市上落合 320	円 33	横穴式													6末	昭63調査	72
440	美土里村66号	藤岡市本動堂 551の1	円 25	横穴式?													6		41
441	美土里村79号	藤岡市篠塚71	円																3
442	美土里村81号	藤岡市中大塚 1203	円 33	横穴式?													6		41
443	堂山 美九里村38号	藤岡市本郷甲 1302	前方後円 73	横穴式?													6	出土遺物東博蔵	3
444	神田A号 美九里村147号	藤岡市神田1239	円 11	横穴式													6	昭27調査	3
445	美九里村160号	藤岡市神田1274	円 14	横穴式?													6		3
446	美九里村186号	藤岡市神田1332	円	横穴式?								●					6		3
447	美九里西小 不明	藤岡市神田	円	横穴式													6	昭31調査	
448	美九里中学校内 漏	藤岡市神田	円	横穴式?							●			鷹飼の鷹			6		
449	高峯古墳 漏	藤岡市神田	円 14	横穴式			●				●						6後	昭46調査	68
450	神田・三本木3号 漏	藤岡市神田		横穴式?								●					6後		
451	三本木A号 美九里村40号	藤岡市三本木 769の1	円 11	横穴式								2 以上		不明			6後	昭29調査	73
452	三本木B号 漏	藤岡市三本木 767の5		横穴式													6後	昭29調査	74

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	軛	男	女	馬				そ の 他	
453	平井村143号	藤岡市東平井936	円 21	横穴式 石室？													6	東平井古墳群	3
454	平井村147号	藤岡市東平井 1653	円 18	横穴式 石室？													6	東平井古墳群	3
455	平井村170号	藤岡市東平井 1644	円 18	横穴式 石室？														東平井古墳群	3
456	平井村176号	藤岡市東平井乙 1654	円 21	横穴式 石室？														東平井古墳群	
457	平井村185号	藤岡市東平井 1666	円 24	横穴式？									●				6	東平井古墳群	3
458	平井村194号	藤岡市東平井 1666	円 18	横穴式？													6	東平井古墳群	3
459	平井村200号	藤岡市東平井 1664	円 26	横穴式？													6	東平井古墳群	3
460	平井村251号	藤岡市東平井 1562	円 18	横穴式？													6	東平井古墳群	3
461	平井村288号	藤岡市東平井 1533	円 30	横穴式？													6	東平井古墳群	3
462	平井村409号	藤岡市鮎川179	前方後円 27	横穴式？													6	東平井古墳群	3
463	天王塚 平井村440号	藤岡市白石1948	円 30	横穴式？													6	白石古墳群	3
464	掘越塚 平井村465号	藤岡市白石1948	円 30	横穴式		●								不明			6後	白石古墳群	75
465	江原塚 平井村472号	藤岡市白石甲 1915	円 20	横穴式	●							●	●				6	昭57調査	68
466	萩原塚 平井村473号	藤岡市白石1922	前方後円 42	横穴式	1	●	●	2	1								6後	白石古墳群	
467	二子山 平井村478号	藤岡市白石1870	前方後円 67	横穴式 石室					2	2							6後	白石古墳群 出土遺物東博蔵	76
468	平井村480号	藤岡市白石1926	円 21	横穴式 石室？		●	●	●	1	1							6後	白石古墳群 出土遺物東博蔵	43
469	平井村485号	藤岡市白石1930	円 17	横穴式？								●					6		68
470	鍋塚 平井村536号	藤岡市白石1486	円 30	横穴式 石室？													6	白石古墳群	3
471	平井村539号	藤岡市白石1527	円 36	横穴式？													6	白石古墳群	3
472	稲荷山 平井村576号	藤岡市白石甲 1374	前方後円 152	磯櫛	8									鶏・短甲1			5前 ～中	昭8調査 白石古墳群	76 168
473	十二天塚 平井村577号	藤岡市白石1346	方 89														5前 ～中	昭63調査 白石古墳群	
474	皇子塚 平井村580号	藤岡市三ツ木 247	円 29	横穴式		●	2 以上	●	●	●	15 以上	2 以上					6後	昭63調査、白石古墳群 環頭大刀出土	77
475	平井地区1号 平井村590号	藤岡市白石245	円 30	横穴式	●	●	●	●									6後	平3調査、白石古墳群 環頭大刀等出土	
476	平井村637号	藤岡市白石2041	円 3	横穴式？													6	白石古墳群	3
477	戸塚神社 神流村1号	藤岡市上戸塚 363	前方後円 53	横穴式										不明			6後		68
478	神流村74号	藤岡市下栗須86	円 32																3
479	白山 小野村2号	藤岡市上栗須乙 181の2	円 23		●												5中		78
480	上栗須寺前6号 漏	藤岡市上栗須	円 7											1			6	昭63調査	79
481	日野村25号	藤岡市下日野甲 69																	3
482	でいてんばく 日野村46号	藤岡市金井679	円 21																3
483	吉井町3号	多野郡吉井町吉 井607	円 13	横穴式													6		3
484	稲荷塚 吉井町4号	多野郡吉井町吉 井旧川内608	円 22	横穴式							●	●					6後	昭18調査	80

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No.	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	鬘	笏	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
485	吉井町5号	多野郡吉井町吉井588	円 10													後期		3
486	吉井町6号	多野郡吉井町吉井807	円 16													後期		3
487	吉井町10号	多野郡吉井町下長根498の1	円 8															
488	吉井町14号	多野郡吉井町長根765	円 8	横穴式?												6	安坪古墳群	
489	吉井町20号	多野郡吉井町長根750	円 8	横穴式?												6	安坪古墳群	
490	吉井町23号	多野郡吉井町長根751	円 13	横穴式?												6	安坪古墳群	
491	吉井町27号	多野郡吉井町長根741	円 10	横穴式?												6	安坪古墳群	
492	吉井町36号	多野郡吉井町長根757	円 11	横穴式?												6	安坪古墳群	
493	吉井町37号	多野郡吉井町長根770	円 10	横穴式?												6	安坪古墳群	
494	吉井町38号	多野郡吉井町長根770	円 9	横穴式?												6	安坪古墳群	
495	吉井町40号	多野郡吉井町長根771	円 10	横穴式?												6	安坪古墳群	
496	吉井町42号	多野郡吉井町長根771	円 11	横穴式?												6	安坪古墳群	
497	吉井町43号	多野郡吉井町長根乙774	円 13	横穴式												6	安坪古墳群	
498	吉井町52号	多野郡吉井町長根乙881	円 16	横穴式												6	安坪古墳群	
499	吉井町53号	多野郡吉井町長根1079の1	円 18															
500	吉井町55号	多野郡吉井町片山820	円 27														片山古墳群	
501	漏	多野郡吉井町片山895の1	円 15														片山古墳群	3
502	吉井町60号	多野郡吉井町小棚183	円 5													後期	岩崎古墳群	3
503	吉井町64号	多野郡吉井町小棚甲552	円 18													後期	岩崎古墳群	3
504	吉井町105号	多野郡吉井町池760	円 12	横穴式?												6	塚原古墳群	3
505	吉井町117号	多野郡吉井町池669の1	円 11	横穴式?												6	塚原古墳群	3
506	吉井町121号	多野郡吉井町池664	円 11	横穴式												6	塚原古墳群	3
507	塚原蛇塚 吉井町131号	多野郡吉井町池544	円 20	横穴式 石室	●		●	●	●	●	●					6後	昭61調査	81
508	二子塚 吉井町152号	多野郡吉井町池694	前方後円 36	横穴式?	●		●									6後		82
509	多胡村12号	多野郡吉井町神保1202	円 7	横穴式?								●				後期		3
510	多胡1号 多胡村56号	多野郡吉井町多胡71	円 13	横穴式												6後	昭36調査	83
511	多胡村87号	多野郡吉井町神保138の2	前方後円 25	横穴式?												後期	神保古墳群	3
512	多胡村89号	多野郡吉井町神保138の1	円 19	横穴式?												後期	神保古墳群	3
513	御伊勢山 入野村4号	多野郡吉井町馬庭293の1		横穴式								●				6後	昭27調査	84
514	河端山 入野村9号	多野郡吉井町岩井784														後期		3
515	首塚 入野村27号	多野郡吉井町小串167		横穴式												6		3
516	上の山 入野村43号	多野郡吉井町石神189														後期?		3

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献
					家	蓋	鬘	笄	盾	鞆	鞆	男	女	馬			
517	下條1号 漏	多野郡吉井町神保		横穴式	●					●	1	1	2		6中 ～後	平2調査 本報告書	
518	下條2号 漏	多野郡吉井町神保	円 7	横穴式	1			5	4	4	4	3 以上	3 以上	3	6後	平2調査 本報告書	
519	鬼石町1号	多野郡鬼石町鬼石603の1	円 13														3
520	御三社 富岡町2号	富岡市七日市1414	前方後円 不明	横穴式										● 不明	6前 ～中	昭29調査 七日市古墳群	85
521	富岡5号 富岡町5号	富岡市七日市1064	円 29	横穴式				2 以上	2 以上	2 以上	3	3	2 以上		6中	昭43・44調査 七日市古墳群	86
522	富岡町76号	富岡市芝宮甲505	円 14	横穴式	2 以上			1 3 以上	4 以上		●	●	●	不明	6後	平2調査 芝宮古墳群	87
523	富岡町79号	富岡市芝宮乙502	円 20	横穴式	3	2	3	5	1	3		5 以上	3 以上	帽子2	6後	平2調査 芝宮古墳群	87
524	旅寝塚 一ノ宮町1号	富岡市一ノ宮245	前方後円 70?	横穴式											6後		88
525	稻荷森 一ノ宮町2号	富岡市一ノ宮232															
526	堂山稻荷 一ノ宮町3号	富岡市一ノ宮甲115	前方後円 45	横穴式?				●				●			6中		88
527	一ノ宮町7号	富岡市田島389の2	円 5	横穴式?											6	刀出土	3
528	不動塚 一ノ宮町18号	富岡市宇田129	円 15														88
529	山根遺跡 漏	富岡市宇田													5後	遺跡内で採集	88
530	泉福寺山 吉田村1号	富岡市南蛇井294	円 29	横穴式											6	南蛇井古墳群	3
531	吉田村2号	富岡市南蛇井401の1	円 22	横穴式			1								6末～ 7初	昭55調査 南蛇井古墳群	88
532	吉田村5号	富岡市南蛇井709の1	円	横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
533	吉田村6号	富岡市南蛇井688	円 3	横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
534	吉田村11号	富岡市南蛇井675の1・783の3	円	横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
535	吉田村12号	富岡市南蛇井675の1	円	横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
536	吉田村18号	富岡市南蛇井652	円	横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
537	吉田村27号	富岡市南蛇井309		横穴式											6	南蛇井古墳群	3
538	吉田村29号	富岡市南蛇井358・359		横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
539	吉田村37号	富岡市南蛇井乙209	円	横穴式?											6?	南蛇井古墳群	3
540	尾神 吉田村41号	富岡市南蛇井乙1089		横穴式											6	南蛇井古墳群	3 89
541	漏	富岡市南蛇井723															
542	漏	富岡市南蛇井720															
543	漏	富岡市小林42															
544	吉田村47号	富岡市上小林39	上円下方														
545	天皇塚 高瀬村1号	富岡市高瀬3870	円 15														3
546	桐瀬1号 漏	富岡市高瀬	円 20	横穴式				●	●		●				6後	昭45・46調査 桐瀬古墳群	88
547	桐瀬3号 漏	富岡市高瀬	円 11	横穴式							●	●			6後	昭45・46調査	88

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬘	方	盾	軛	軛	男	女	馬				その他	
548	桐淵8号 漏	富岡市高瀬	円	横穴式				●	1						1		6後	昭45・46調査 桐淵古墳群桂甲小札出土	88
549	桐淵11号 漏	富岡市高瀬	円 20	横穴式						●	●				4		6前	昭45・46調査 桐淵古墳群	88
550	上之原4号 漏	富岡市下高瀬	円 12	竖穴系													5後～ 6初	平1調査 後期初群集墳	79
551	上之原7号 漏	富岡市下高瀬	円 6	竖穴系													5後～ 6初	平1調査 後期初群集墳	79
552	額部村2号	富岡市南後箇甲 105	円 19																3
553	上田篠1号 漏	富岡市田篠	円 14	横穴式											●		6後	上田篠古墳群	91
554	福島町27号	富岡市田篠115の 2	円 20													不明	後期		
555	福島町31号	富岡市田篠217	円 20														後期		
556	黒岩村7号	富岡市上黒岩 1462の2	円 5														後期		3
557	金比羅 小幡町6号	甘楽郡甘楽町善 慶寺334	円? 15	横穴式													6後	善慶寺古墳群	3
558	小幡町8号	甘楽郡甘楽町善 慶寺980	円																
559	笹森稻荷 福島町1号	甘楽郡甘楽町福 島1350他	前方後円 100	横穴式													6末		
560	大山鬼塚 福島町6号	甘楽郡甘楽町小 川744	円 22	舟形石棺													5末		5
561	稻荷社 福島町53号	甘楽郡甘楽町福 島287													●				
562	漏	甘楽郡甘楽町福 島	円	舟形石棺													5末		
563	天引口明塚1号 漏	甘楽郡甘楽町天 引	円	横穴式													6後	平2調査 本報告書	
564	天引口明塚2号 漏	甘楽郡甘楽町天 引	円 15	横穴式				●	●	●		●	●	●			6後	平2調査 本報告書	
565	天引狐崎遺跡 漏	甘楽郡甘楽町天 引	円	横穴式	●			●	●					●	●		6後	平2調査	
566	安中町4号	安中市安中2607 の1		横穴式											●		6		91
567	愛宕神社 安中町5号	安中市安中																	91
568	原市町1号	安中市郷原1349	円 40	横穴式													6		
569	原市町4号	安中市郷原1347 の1	円 12	横穴式												不明	6末～ 7初	昭45調査 郷原古墳群	5
570	築瀬二子塚 原市町13号	安中市築瀬763他	前方後円 78	横穴式	●										●	不明	6初	昭32調査	5
571	岩野谷村4号	安中市岩井775	円 21	横穴式?													6		3
572	野殿天王塚 岩野谷村56号	安中市野殿569	円 21	横穴式					●	●					●	不明	6末～ 7初	昭38調査	5 92
573	岩野谷村57号	安中市岩井524	円 18																93
574	後閑村3号	安中市下後閑 219	円 20	横穴式											●		6前	平3調査	
575	長谷津向山	安中市	前方後円														5後		
576	天皇塚 九十九村1号	碓氷郡松井田町 小日向1188	円 12	横穴式											●		6後	神戶聖吾氏教示	3
577	九十九村6号	碓氷郡松井田町 小日向2077の1	円 5														後期		3
578	中之条町25号	吾妻郡中之条町 中之条362	円														後期?		61
579	原町9号	吾妻郡吾妻町原 町369	円 18														後期?		3

IV 考 察

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	髷	笏	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その 他
580	原町12号	吾妻郡吾妻町原町460	円 5													後期?		3
581	原町13号	吾妻郡吾妻町原町460	円													後期?		3
582	原町30号	吾妻郡吾妻町川戸1462	円 11													後期?	下郷古墳群	3
583	原町66号	吾妻郡吾妻町川戸263														後期	下郷古墳群	3
584	正兵衛塚 原町70号	吾妻郡吾妻町川戸167の乙	円 27													後期?	下郷古墳群	3 76
585	岩島村 4号	吾妻郡吾妻町矢倉1001の1	円	横穴式												6		3 94
586	岩島村12号	吾妻郡吾妻町三島	方? 2													6		3 94
587	岩島村14号	吾妻郡吾妻町三島116の1	円 7													後期	四戸古墳群	3
588	四戸 1号 岩島村19号	吾妻郡吾妻町三島77	円 10	横穴式												6前	昭39調査 四戸古墳群	5 94
589	四戸 4号 漏	吾妻郡吾妻町三島85	円 8	横穴式												6前	昭42調査 四戸古墳群	5 94
590	十五塚 岩島村25号	吾妻郡吾妻町三島141	円 8	横穴式?												6	四戸古墳群	3 94
591	岩島村34号	吾妻郡吾妻町三島384	円 4	横穴式												6		3 94
592	岩島村42号	吾妻郡吾妻町生原620	円	横穴式												6		3 94
593	京塚 薄根村 3号	沼田市井土上208	円 27													後期		95
594	漏	沼田市尾形原615	円													後期		95
595	十日塚 糸之瀬村 4号	利根郡昭和村糸井	円 15													後期		3
596	鏡石 漏	利根郡昭和村川額296	円 7	竪穴式 石室	1											6前	昭49調査 初期横穴式の可能性有	96
597		利根郡昭和村森下																
598		利根郡昭和村川額																
599	久呂保村 3号	利根郡昭和村森下84の1	円 5														森下松木古墳群	
600	久呂保村 5号	利根郡昭和村森下61・76	円 9														森下松木古墳群	
601	久呂保村11号	利根郡昭和村森下30他	円														森下松木古墳群	
602	久呂保村14号	利根郡昭和村森下116	円 5														森下松木古墳群	
603	狐塚 古馬牧村46号	利根郡月夜野町師1595	円 16													後期		3
604	丸山塚 古馬牧村58号	利根郡月夜野町師1480	円 26													後期		3
605	三峰神社裏遺跡 1号	利根郡月夜野町	円 10	横穴式	1											6前	昭57調査	97
606	前原 川場村43号	利根郡川場村生品1274		横穴式												後期	総覧には前方後円とあるが可能性弱い	3
607	狐塚 川場村45号	利根郡川場村生品1272	円 11													後期		3
608	赤石山 伊勢崎町 1号	伊勢崎市西町606	円 25															3
609	稲荷山 伊勢崎町 6号	伊勢崎市華蔵寺町41	円 35	横穴式												6		7
610	恵下 殖蓮村10号	伊勢崎市上植木本町2622	円 27	変形竪穴式石室						1						5末 ~6初	出土遺物東博蔵	5
611	恵下 2号	伊勢崎市上植木本町	円 21	竪穴式?												後期	昭53調査	98

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬚	笏	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
612	丸塚山 殖蓮村17号	伊勢崎市三和町 2447	帆立貝 81	竪穴式 小石椁													5後	昭30調査	5
613	高山1号 漏	伊勢崎市三和町 2508の2	円 20	横穴式							1						6前	昭53調査	99
614	高山2号 漏	伊勢崎市三和町 2507の1	円 22	横穴式								●		不明			6末	昭53調査	99
615	高山3号 漏	伊勢崎市三和町 2508の2	円 15														6末	昭53調査	99
616	殖蓮村71号	伊勢崎市本関町 1298の1	前方後円 40	横穴式										不明			6後	昭41調査	5
617	殖蓮村158号	伊勢崎市八寸甲 2331の1	円 27									●					後期		3
618	権現山1号 漏	伊勢崎市豊城町 1988の2	円 8	横穴式													6後	昭44調査	5
619	権現山2号 漏	伊勢崎市豊城町 1988の2	円	横穴式													6前	昭44調査	5
620	権現山3号 漏	伊勢崎市豊城町 1988の2	円 8	横穴式													6後	昭44調査	5
621	権現山4号 漏	伊勢崎市豊城町	円 20	横穴式										不明			6後	昭44調査	5
622	荷鞍山 殖蓮村187号	伊勢崎市豊城町 2122の1		横穴式?								●					6中		100
623	殖蓮村205号	伊勢崎市豊城町		横穴式?							3						6	出土遺物東博蔵	3 43
624	横塚所在 漏	伊勢崎市豊城町 2068		横穴式?	●						4	2	●	槍			6	出土遺物東博蔵	43
625	殖蓮村208号	伊勢崎市八寸 2351	円 11				1	3	2				●				後期		3
626	殖蓮村216号	伊勢崎市八寸 2348	円 36									●	●				後期		3
627	殖蓮村245~253・ 255号	伊勢崎市豊城町 1983の3										●							43
628	殖蓮村258号	伊勢崎市八寸 乙1957	円 15									●					後期		3
629	上諏訪 殖蓮村293号	伊勢崎市上諏訪町 20	円 20	横穴式							1	2	1				6後	昭41調査	5
630	殖蓮村294号	伊勢崎市八寸 1038の13	円 21									●					後期		3
631	蛇塚 殖蓮村299号	伊勢崎市日乃出町 甲377	前方後円 55	横穴式	●	●	●	●			3		4				6後	昭38調査	5
632	殖蓮村335号	伊勢崎市豊城町 1989の3	円 9	横穴式?							3						6	出土遺物東博蔵	43
633	飯福神社 茂呂村1号	伊勢崎市茂呂町 甲3412	円 50										2				後期		7 100
634	茂呂村3号	伊勢崎市茂呂町 333の2	円 20														後期?		3
635	清音2号 茂呂村5号	伊勢崎市茂呂町 1の341	円 40	横穴式													6末 ~7初	昭37調査 角閃石安山岩石室	5
636	清音1号 茂呂村8号	伊勢崎市茂呂町 1の376	円 24	横穴式													6末 ~7初	昭37調査 角閃石安山岩石室	5
637	茂呂村9号	伊勢崎市茂呂町 391・393	円 30	横穴式?							2	1					6	出土遺物東博蔵	43 100
638	茂呂村16号	伊勢崎市茂呂町 甲1992	円														後期?		3
639	茂呂村42号	伊勢崎市茂呂町 826・827	円 40									●					後期		3
640	羽黒1号	伊勢崎市茂呂町 2529他	円 20	横穴式									1				6末	昭44調査 角閃石安山岩石室	5
641	羽黒2号	伊勢崎市茂呂町 2690の2	円? 20?	横穴式													6前	昭44調査	5
642	竹葉師 宮郷村2号	伊勢崎市稲荷町 1340	円 20	横穴式													6後	昭44調査	101
643	杉葉師 宮郷村3号	伊勢崎市稲荷町 1256	円	横穴式													6後	昭44調査	101

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	靴	男	女	馬				その他	
644	宮郷村4号	伊勢崎市稲荷町1092	円	横穴式													6後	昭44調査	101
645	宮郷村8号	伊勢崎市稲荷町1369	円	横穴式 (胴張り)													6後	昭44調査	101
646	宮郷村14号	伊勢崎市宮郷町東上ノ宮1200	円														後期?		7
647	漏	伊勢崎市大道西2142他																大道西古墳群	7
648	漏	伊勢崎市東上之宮町1196他															後期?	2基の円墳が隣接する	7
649	富士塚漏	伊勢崎市西上之宮町1500	円 10	横穴式?													6後?	昭44調査	101
650	台所山漏	伊勢崎市江志波町1の4119の3		竪穴式 小石椁													5後	昭46調査	100
651	間の山	伊勢崎市波志江町4125	円	舟形石椁													5後		43
652	漏	伊勢崎市波志江町1丁目																間の山古墳群	7
653		伊勢崎市波志江町1丁目															後期	三郷村36号~42号 台所古墳群	7
654	蟹沼東A号 三郷村25号	伊勢崎市波志江町3758	円 38												不明形象		6	昭55調査 蟹沼東古墳群	102
655	蟹沼東3号 三郷村2号	伊勢崎市波志江町4048	円 13														6	昭52調査 蟹沼東古墳群	103
656	蟹沼東4号 三郷村3号	伊勢崎市波志江町4048	円 24	横穴式													6	昭52調査 蟹沼東古墳群	103
657	蟹沼東12号 三郷村13号	伊勢崎市波志江町3801	円 30												不明形象		6	昭53調査 蟹沼東古墳群	102
658	蟹沼東15号 三郷村8号	伊勢崎市波志江町3869	円 27	横穴式											不明形象		6後	昭53調査 蟹沼東古墳群	102
659	蟹沼東17号 三郷村15号	伊勢崎市波志江町3832	円 12	横穴式													6後	昭53調査 蟹沼東古墳群	103
660	蟹沼東27号 三郷村24号	伊勢崎市波志江町3765	円 12	横穴式													6後	昭54調査 蟹沼東古墳群	103
661	蟹沼東30号 三郷村23号	伊勢崎市波志江町3771	円 12	横穴式													6後	昭55調査 蟹沼東古墳群	104
662	蟹沼東31号 三郷村22号	伊勢崎市波志江町3808	円 21	横穴式													6後	昭55調査 蟹沼東古墳群	104
663	今宮4号 漏	伊勢崎市波志江町26	帆立貝				1								1	帽子形1	後期	石塚久則氏・飯田陽一氏教示	
664	蟹沼東48号 漏	伊勢崎市波志江町	円	横穴式													6後	昭55調査 蟹沼東古墳群	104
665	宮貝戸2号 漏	伊勢崎市															後期	昭54調査	103
666	宮貝戸4号 漏	伊勢崎市		横穴式													6	昭54調査	103
667	波志江権現山 三郷村67号	伊勢崎市波志江町2338他	円												不明			加部二生氏教示	
668	中道下2号	伊勢崎市波志江町	円				●								●			加部二生氏教示	
669	御富士山4号	伊勢崎市安堀町		横穴式													6末~ 7初	昭44調査 角閃石安山岩石室	5
670	安堀 三郷村91号	伊勢崎市安堀町1079	前方後円 80	横穴式													6後	昭32調査 角閃石安山岩石室	14
671	御富士山 三郷村100号	伊勢崎市安堀町799他	前方後円 125	長持形石椁													5中	昭38・63調査	105
672	赤堀村7号	佐波郡赤堀町五目牛706	円 18	横穴式													6		3
673	赤堀村8号	佐波郡赤堀町五目牛710	円 21	竪穴式											1		6初		
674	赤堀村9号	佐波郡赤堀町五目牛717	円 36																3
675	蕨手塚 赤堀村11号	佐波郡赤堀町五目牛713	円 37	竪穴他													5中	昭27調査	3

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径：m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
676	五目牛二子山 赤堀村14号	佐波郡赤堀町 五目牛649	前方後円	横穴式													6後		
677	赤堀村15号	佐波郡赤堀町 五目牛669	円																3
678	赤堀村16号	佐波郡赤堀町 五目牛678	円	竖穴式 石槨													6前		106
679	赤堀村22号	佐波郡赤堀町 五目牛679の1	円	横穴式									●				6前		106
680	赤堀村23号	佐波郡赤堀町 五目牛682の1	円	横穴式													6		3
681	達磨山 赤堀村26号	佐波郡赤堀町 五目牛624	円	粘土槨 他													5中	昭26調査	5
682	赤堀村28号	佐波郡赤堀町 五目牛417の3	円																7
683	赤堀村31号	佐波郡赤堀町 五目牛439の2	円																7
684	352号(諏訪山) 赤堀村34号	佐波郡赤堀町 五目牛312の2	円	横穴式													6		3
685	洞山 赤堀村53号	佐波郡赤堀町 五目牛82	前方後円	横穴式			●				●	●					6前	昭25調査	5
686	赤堀村54号	佐波郡赤堀町 五目牛113	円																3
687	五目牛3号	佐波郡赤堀町 五目牛682の2	円	竖穴式 石槨	●											●	6前	昭52調査 地藏山古墳群	106
688	五目牛4号	佐波郡赤堀町 五目牛705	円	横穴式	●				2		2	●					6後	昭52調査 地藏山古墳群	106
689	五目牛6号	佐波郡赤堀町 五目牛684	円	竖穴式 石槨									●				6前	昭52調査 地藏山古墳群	106
690	五目牛8号	佐波郡赤堀町 五目牛688の1	円		●						2	●	●				6前	昭52調査 地藏山古墳群	106
691	五目牛9号	佐波郡赤堀町 五目牛	円		●												後期	昭52調査 地藏山古墳群	106
692	五目牛11号	佐波郡赤堀町 五目牛686	帆立貝	竖穴式 石槨							2 以上	●	●				6前	昭52調査 地藏山古墳群	108
693	五目牛13号	佐波郡赤堀町 五目牛680の3	円	横穴式							3	2	2				6後	昭52調査 地藏山古墳群	108
694	五目牛18号	佐波郡赤堀町 五目牛680の4	円	竖穴式 石槨													5後	昭52調査 地藏山古墳群	108
695	五目牛20号	佐波郡赤堀町 五目牛680の1	円	横穴式			●						●				6前	昭52調査 地藏山古墳群	108
696	五目牛21号	佐波郡赤堀町 五目牛681	円	竖穴式 石槨													6前	昭52調査 地藏山古墳群	108
697	五目牛22号	佐波郡赤堀町 五目牛627	円	横穴式					●		2		1				6後	昭52調査 地藏山古墳群	108
698	五目牛28号	佐波郡赤堀町 五目牛680の5	円	横穴式													6後	昭52調査 地藏山古墳群	108
699	五目牛29号	佐波郡赤堀町 八幡	円									3	1		不明		6後		
700	五目牛清水田1号 漏	佐波郡赤堀町 五目牛	前方後円	横穴式?	●		●	●	●		●	●					6中	昭60調査	
701	351号 漏	佐波郡赤堀町 五目牛315の2・3	円	横穴式									●				6前 ～中	昭59調査	
702	353号 漏	佐波郡赤堀町 五目牛312の3	円?	不明													6	昭59調査	
703	漏	佐波郡赤堀町 五目牛291の2			●												6後 ～末	平2調査	109
704	洞山西北 漏	佐波郡赤堀町 五目牛	円	横穴式													6前	昭26調査	110
705	赤堀村58号	佐波郡赤堀町 下触207の2	帆立貝										●	●			6後 ～7初	平1調査 下触片田古墳群	111
706	赤堀村59号	佐波郡赤堀町 下触192	前方後円		●	●		●			●	●	●				6後 ～末	平1調査 下触片田古墳群	111
707	赤堀村60号	佐波郡赤堀町 下触189	円	横穴式?													6		3

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
708	赤堀村67号	佐波郡赤堀町 下触189	円									●	●				3		
709	赤堀村68号	佐波郡赤堀町 下触189	円														3		
710	赤堀村76号	佐波郡赤堀町 下触164	円 23														3		
711	赤堀町96号	佐波郡赤堀町 下触39	円									●	●				3		
712	赤堀村105号	佐波郡赤堀町 下触55	円 18	横穴式?	●							5	2	●		6	出土遺物東博蔵	43	
713	赤堀村107号	佐波郡赤堀町 下触56	円 32	横穴式?								5	3	2		6	出土遺物東博蔵	43	
714	石山南 赤堀村120号	佐波郡赤堀町 下触46	円 16	横穴式								●	1	3		6後	昭27調査	112	
715	赤堀村135号	佐波郡赤堀町 下触711の1	円															3	
716	愛宕山 赤堀村166号	佐波郡赤堀町 下触124	円 25															3	
717	下触牛伏7号	佐波郡赤堀町 下触238	円 15	横穴式											不明	6後	昭57調査	113	
718	南原C号 赤堀村156号	佐波郡赤堀町 今井109															昭25調査		
719	赤堀茶白山 赤堀村260号	佐波郡赤堀町 今井995	帆立貝 45	木炭椰	8	3	●								鶏1	5中	昭4調査	115	
720	毒島 赤堀村261号	佐波郡赤堀町 今井815他																3	
721	多田山 赤堀村314号	佐波郡赤堀町 今井543の1	円	横穴式?	1										1	1	後期	松村一昭氏教示	
722	赤堀村325号	佐波郡赤堀町 今井	円 18		●	●	●	●	●	●								5	
723	日向2号 赤堀村326号	佐波郡赤堀町 今井568の1・2	円 25									1		1			昭38調査	5	
724	轟山A号	佐波郡赤堀町 今井	前方後円 29	横穴式												6前 ~中	昭29調査	114	
725	北原3号	佐波郡赤堀町 今井1184の5	円 16													6前	平3調査	116	
726	赤堀村284号	佐波郡赤堀町磯 419の9	円 13	竪穴式 石椰	●											6中	昭51調査 峯岸山古墳群	117	
727	赤堀村285号	佐波郡赤堀町磯 419	前方後円 24						●	●	●					6初	昭50調査 峯岸山古墳群	117	
728	赤堀村286号	佐波郡赤堀町磯 419の7	円 20	竪穴式	●									●		6前	昭50調査 峯岸山古墳群	117	
729	赤堀村288号	佐波郡赤堀町磯 419の4・5	帆立貝 28	横穴式	●			●	●	●	●					6後	昭50調査 峯岸山古墳群	117	
730	鎮守様後 赤堀村298号	佐波郡赤堀町 磯405	前方後円 35	横穴式										●	鳥	6		36 43	
731	赤堀村299号	佐波郡赤堀町磯 411	円 19														5後	昭50調査 峯岸山古墳群	117
732	峯岸山4号	佐波郡赤堀町磯 421の2・423	円 13	横穴式										●	●		昭50調査 峯岸山古墳群	117	
733	峯岸山7号	佐波郡赤堀町磯 423	円 15														昭50調査 峯岸山古墳群	117	
734	峯岸山8号 瀧	佐波郡赤堀町磯 423	円 9	横穴式												6後	昭50調査 峯岸山古墳群	117	
735	峯岸山9号	佐波郡赤堀町磯 430の5	円 19	石椰								●	●				昭50調査 峯岸山古墳群	117	
736	愛宕様 赤堀村272号	佐波郡赤堀町 西野728の3	帆立貝 28		●												昭49調査	118	
737	大塚 赤堀村273号	佐波郡赤堀町 西野388の31	円 19	竪穴式												5末	昭49調査	118	
738	赤堀村275号	佐波郡赤堀町 西野8	円 27	横穴式?	●							●	●			6	昭51調査 峯岸山古墳群	107	
739	赤堀村276号	佐波郡赤堀町 西野8	帆立貝 22	横穴式					●	2						6前	昭51調査 峯岸山古墳群	107	

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	鬘	笏	盾	鞆	男	女	馬	その他				
740	赤堀村277号	佐波郡赤堀町 西野	円	横穴式												6前		
741	赤堀村283号	佐波郡赤堀町 西野	円 22	横穴式												6末～ 7初	昭51調査 峯岸山古墳群	107
742	神社丘1号	佐波郡赤堀町 西野732	円 19	横穴式			●	●								6	昭49調査	118
743	神社丘3号	佐波郡赤堀町 西野338の24	円 14	横穴式										不明		6	昭49調査	118
744	赤堀村27号 漏	佐波郡赤堀町	円	横穴式												6	昭29調査	
745	峯岸山17号	佐波郡赤堀町 西野	円 22	横穴式												6前		
746	下木戸遺跡	佐波郡赤堀町 西野388の1他															西野神社古墳群	7
747	八幡林29号	佐波郡赤堀町 八幡876	円 17	横穴式								1	1			6中		119
748	八幡林30号	佐波郡赤堀町 八幡876	円 20	横穴式							●	●				6末～ 7初		119
749	東村3号	佐波郡東村 東小保方1209	円 20	横穴式									●			6		36 43
750	東村4号	佐波郡東村 東小保方1212他	円 30															3
751	雷電神社跡 東村7号	佐波郡東村小保方	前方後円 50	横穴式	●						4	4				6後	昭43調査	5 120
752	鶴巻 東村8号	佐波郡東村小保方 3757	円 34	横穴式							●	●	不明			6末	昭43調査 角閃石安山岩石室	120
753	東村9号	佐波郡東村 東小保方3814	円 25	横穴式												6		3
754	東村15号	佐波郡東村 東小保方3809	円 20															3
755	東村16号	佐波郡東村 東小保方3870	円 30															3
756	東村18号	佐波郡東村 東小保方3876	円 24	横穴式?							●					後期		3
757	東村20号	佐波郡東村 東小保方3935	円 30	横穴式								●				6		3
758	御嶽山 東村21号	佐波郡東村 東小保方3798の1	円 30															3
759	下谷A号 東村22号	佐波郡東村小保方 3899	前方後円 51	横穴式							●	●				6後	昭29調査	121
760	東村26号	佐波郡東村 東小保方3903	円 24															3
761	下谷B号 東村38号	佐波郡東村小保方 3909	円 15	横穴式												7	昭29調査	122
762	武士1号 剛志村79号	佐波郡境町 下武士1020	帆立貝 28	横穴式?							●		不明			6後	昭55調査	123
763	武士7号 剛志村10号	佐波郡境町 下武士853の1	円 18	横穴式?												6後	昭55調査	123
764	武士8号 剛志村6号	佐波郡境町 下武士853の1	円 24	横穴式?												6後	昭56調査	124
765	武士9号 剛志村13号	佐波郡境町 下武士853の1	円 17	横穴式?												6後	昭56調査	124
766	武士10号 剛志村8号	佐波郡境町 下武士853の1	円 21	横穴式?												6後	昭56調査	124
767	剛志村3号	佐波郡境町 下武士863	円 25													後期		3
768	剛志村44号	佐波郡境町 下武士1917	円	横穴式?	1	1	1	3	2	●	2	矛				6	出土遺物東博蔵	43
769	剛志村46号	佐波郡境町 下武士192	円 58	横穴式												6		3
770	剛志村67号	佐波郡境町 下武士827の1	前方後円 45															7
771	三社 剛志村69号	佐波郡境町 下武士1027他	前方後円 54															7

IV 考 察

№	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	髷	笄	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他	
772	天王塚 剛志村76号	佐波郡境町 下武士1005	円 27	横穴式													6		3
773	剛志村24号	佐波郡境町 上武士843の1	円 36														後期?		3
774	剛志村25号	佐波郡境町 上武士839	円	横穴式?										●			6?		3
775	剛志村26号	佐波郡境町 上武士847	円 36	横穴式?								●					6?		3
776	天神山 剛志村30号	佐波郡境町 上武士882	前方後円 127	横穴式	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	犬・猪	6後	出土遺物東博蔵	6 43
777	剛志村33号	佐波郡境町 上武士936の1	円 24	礫塚	●			●		●		●					6後～ 7初	昭41調査	125
778	剛志村36号	佐波郡境町 上武士927の1	円 25	横穴式					●					●			6末?	昭41調査	125
779	剛志村42号	佐波郡境町 上武士920の2	円									●							3
780	剛志村50号	佐波郡境町 上武士1039	前方後円 25																7
781	御岳山 剛志村53号	佐波郡境町 上武士1037・1038	前方後円 45																3
782	剛志村59号	佐波郡境町 上武士1017	円																3
783	剛志村79号	佐波郡境町 上武士840	帆立貝 28									●					後期		123
784	剛志村88号	佐波郡境町 保泉1199の2	円 73																3
785	漏	佐波郡境町 上武士945・946																	7
786	下淵名1号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 15?	竪穴式?													5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
787	下淵名2号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 18	竪穴式?													5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
788	下淵名3号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 22	竪穴式?													5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
789	下淵名4号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 24	竪穴式?													5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
790	下淵名6号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 22	竪穴式?													5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
791	下淵名9号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 22	竪穴式?													5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
792	下淵名10号 漏	佐波郡境町 下淵名	円 37	竪穴式?											胃		5後	昭53調査 下淵名塚越遺跡群	127
793	采女村2号	佐波郡境町伊興 久3225の1他	円																3
794	采女村6号	佐波郡境町下淵 名2872他	円 29																3
795	比丘尼塚 采女村7号	佐波郡境町上淵 名383															後期?		3
796	小双児 采女村10号	佐波郡境町上淵 名974・975	前方後円 55	横穴式													6		3
797	双児山 采女村11号	佐波郡境町上淵 名957の1他	前方後円 90	横穴式							●				器財		6後		5
798	淵名1号 采女村20号	佐波郡境町上淵名 990	円 15	横穴式							●						6後	昭23調査 上淵名二子山西古墳群 1号	128
799	上淵名 采女村30号	佐波郡境町上淵名 915・916	前方後円 64														6	昭29調査	129
800	淵名2号	佐波郡境町			●						●						6	昭23調査 上淵名二子山西古墳群 2号	128
801	淵名4号 采女村41号	佐波郡境町上淵名 951	円 16	横穴式				●		●								昭23調査 上淵名二子山西古墳群 4号	128
802	吉田K-2号 漏	佐波郡境町上淵名 935の2	円	横穴式	●			●	●	●	●	●	●	●	不明		6末	昭59調査	130

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径：m	主体部	出土形象埴輪											時期	備考	文献	
					家	蓋	鬚	盾	鞆	鞆	男	女	馬	その他					
803	三筆1号 漏	佐波郡境町上淵名 1588・1589	円 19	竪穴式 石椁	●												6初	昭63調査	131
804	采女村50号	佐波郡境町下淵 名2229	円 35														後期?		3
805	采女村51号	佐波郡境町下淵 名2226	円 40														後期?		3
806	采女村53号	佐波郡境町下淵 名2831の1	円 18														後期?		3
807	漏	佐波郡境町東新 井65他															後期?		7
808	玉村町13号	佐波郡玉村町 角淵2738	円 20	竪穴式 小石椁											不明	5後	昭41調査 玉村古墳群	5	
809	玉村町14号	佐波郡玉村町 角淵2760	円 12	横穴式												6後	昭42調査 玉村古墳群	5	
810	玉村町15号	佐波郡玉村町 角淵2762	円 21	横穴式												6後	昭41調査 玉村古墳群	5	
811	玉村町20号	佐波郡玉村町 角淵2201	円 18													後期?		3	
812	玉村町37号 漏	佐波郡玉村町 角淵2795	円	横穴式												6後	昭41調査 玉村古墳群	5	
813	城遺跡2号 漏	佐波郡玉村町 八幡原1807	円	横穴式?										不明	6	昭62調査	132		
814	下郷S248 漏	佐波郡玉村町 八幡原	円											不明				51	
815	下郷5号 漏	佐波郡玉村町 八幡原	前方後円? 40													6	昭52調査	51	
816	萩塚 漏	佐波郡玉村町 後箇21	円 28	横穴式												6末	昭41調査 芝根古墳群	5	
817	浄土山 芝根村1号	佐波郡玉村町 下茂木383	前方後円 54	横穴式												4後 6後	昭42調査・芝根古墳群 前期墳丘再利用	5	
818	梨ノ木山 芝根村3号	佐波郡玉村町 下茂木360	円 44	竪穴式 石椁										不明	5中	昭41・42・44調査 芝根古墳群	5		
819	稲荷山 芝根村7号	佐波郡玉村町 川井629他	前方後円 43	横穴式	●							●				6後	昭43調査・芝根古墳群 前期古墳再利用	5	
820	小泉大塚越 芝根村8号	佐波郡玉村町 小泉134	前方後円 45	横穴式									●	●	盾持人 器財	6後	平1調査		
821	芝根14号 漏	佐波郡玉村町 川井9282	円 22	横穴式												6後	昭43調査 芝根古墳群	5	
822	芝根15号 漏	佐波郡玉村町 川井	円 10	横穴式 石室										不明	6後	昭44調査 芝根古墳群	5		
823	芝根17号 漏	佐波郡玉村町 川井860	円 14	横穴式												6後	昭44調査 芝根古墳群	5	
824	芝根18号 漏	佐波郡玉村町 川井594	円 10	横穴式										不明	6後	昭44調査 芝根古墳群	5		
825	上陽村35号	佐波郡玉村町 樋越1337の1	円 35	横穴式												6		3	
826	上陽村36号	佐波郡玉村町 樋越1355	円													後期?		3	
827	上陽村37号	佐波郡玉村町 樋越355の3	円													後期?		3	
828	上陽村40号	佐波郡玉村町 上樋越487	円	横穴式									●			6		3	
829	太田町1号	太田市太田1319	前方後円 40										●					3	
830	神明(浜町) 太田町3号	太田市太田1222	前方後円 47										●			6後 ~7初		3 133	
831	稲荷山 太田町9号	太田市西本町 12の1	円 23										●	●				3	
832	太田町11号	太田市太田1738	円 79															3	
833	武友田及土師 漏	太田市太田1746 他																武友田古墳群	
834	亀山 非川村69号	太田市太田 2265の2	円 12													5後	亀山古墳群	5	

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献		
					家	蓋	髷	鬘	盾	靴	鞆	男	女	馬				その他	
835	龜山京塚 菲川村71号	太田市太田 2265の丙	円 27	横穴式													6 前	龜山古墳群	5 134
836	菲川村72号	太田市太田 2265の2	円 18	横穴式													6	龜山古墳群	3
837	菲川村85号	太田市太田 1839の1	円 9																3
838	菲川村86号	太田市東長岡 2289	円 11																134
839	菲川村88号	太田市太田 2314の27	円 20	横穴式							●								134
840	焼山 菲川村104号	太田市東長岡 1312	前方後円 48	横穴式													6		5 134
841	焼山北	太田市東長岡	円	竪穴式													後期	昭39調査	5 135
842	菲川村128号	太田市台之郷 1079	円								●						後期		3
843	稲荷山 菲川村151号	太田市上小林 106	円 60	竪穴式？													5		2
844	矢場川村26号	太田市矢場新宿 959	円																3
845	寺ヶ入馬塚	太田市東金井	円 15	横穴式							●	●	不明				6 末	昭34調査 寺ヶ入古墳群	2 5
846	矢場川村39号	太田市矢場新宿 乙1121他	前方後円 70	横穴式													6 後？		136
847	矢場川村41号	太田市矢場新宿 甲1160	前方後円 61	横穴式													6 後？		136
848	矢場川村60号	太田市矢場・本 矢場2659他	前方後円																3
849	大日山 休泊村1号	太田市下小林 710他	円 36	竪穴式？													後期		5
850	休泊村9号	太田市茂木 825の3	円								●	●					後期		3
851	塚廻1号 漏	太田市龍舞	帆立貝 26	竪穴式			3	2		4	2	2					6 前	昭52調査	137
852	塚廻2号 漏	太田市龍舞	帆立貝 24	竪穴式				1						不明			6 前	昭52調査	137
853	塚廻3号 漏	太田市龍舞	帆立貝 24	竪穴式			4	3		5	5						6 前	昭52調査	137
854	塚廻4号 漏	太田市龍舞	帆立貝 23	竪穴式	1		5	3		10	4	2					6 前	昭52調査	137
855	塚廻5号	太田市龍舞 2676他	円？														6	昭52調査	137
856	塚廻6号	太田市龍舞 3013他	円？ 19														6	昭52調査	137
857	塚廻7号	太田市龍舞 3022	円？ 17														6	昭52調査	137
858	沢野村2号	太田市富沢410	円 15	横穴式							●						6		3
859	鐘馗塚 沢野村45号	太田市牛沢24	円 30	粘土槨													5 前		136
860	朝子塚 沢野村46号	太田市牛沢46	前方後円 123	竪穴式？	●			●						壺形1			4 末	昭31・51調査	5
861	沢野村47号	太田市高林751	帆立貝 59														後期		136
862	高林諏訪山 沢野村54号	太田市高林695・ 696	帆立貝 72	組合式箱 形石棺													6 前 ～中	鶴巻古墳群	136 138
863	沢野村63号	太田市高林686	円 40	礫槨													5 末	昭51調査	138 169
864	高林寺北 沢野村68号	太田市高林541	円 27															加部二生氏教示	
865	中原 沢野村72号	太田市高林625	帆立貝 56	礫槨													5 後	昭25調査	5 139
866	沢野村74号	太田市高林621	帆立貝 74	竪穴式？													後期		138

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	鬚	笏	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
867	沢野村77号	太田市高林601	帆立貝 46	竪穴式?												5末~ 6初	昭47調査	5
868	沢野村79号	太田市高林540	円 22														加部二生氏教示	
869	愛宕山 沢野村89号	太田市高林774	帆立貝									●				後期		2
870	地藏堂 沢野村90号	太田市高林774	円 22														加部二生氏教示	
871	沢野村94号	太田市高林468	円 35	横穴式												6末 ~7初		136
872	不動1号 沢野村96号	太田市高林466	円 15														加部二生氏教示	
873	沢野村100号	太田市高林943	円 22														加部二生氏教示	
874	御嶽山 沢野村103号	太田市高林1680	前方後円	横穴式				●			●					6後 ~7初		136
875	沢野村107号	太田市古戸145	円 20															3
876	沢野村117号	太田市細谷 1491の1	円 17															3
877	米沢二ツ山 沢野村120号	太田市米沢444の 1	前方後円 74		●									鶏2・不明		5後	昭46調査	140
878	東毛養護学校内 漏	太田市高林	円? 10?		●							●	●			6前		141
879	東毛養護学校裏 漏	太田市高林	円?									●				後期		
880	小谷場1号 漏	太田市午沢																142
881	富沢14号	太田市富沢	円 21															143
882	九合村13号	太田市飯田283	前方後円 73															3
883	稲荷塚 九合村19号	太田市新井177	前方後円 50?					●			●			不明				144
884	新井八幡神社 九合村21号	太田市新井750	円 23					●			●			不明		昭48調査		144
885	九合村47号	太田市西矢島82 83	前方後円 50															3
886	割地山 九合村51号	太田市東矢島 605の4他	前方後円 110	横穴式	●											6後		3 136
887	道風山 九合村52号	太田市東矢島 甲659の1	円		●													151
888	九合村53号	太田市東矢島 660の5	円 34															3
889	九合村57号	太田市東矢島 497・498	前方後円 95	横穴式?												6?		3 136
890	九合村59号	太田市東矢島 545	円 30	横穴式												6		3
891	八幡山 九合村62号	太田市内ヶ島 895の1	円 18														内ヶ島古墳群	3
892	九合村66号	太田市内ヶ島 816の2	円 30														内ヶ島古墳群	3
893	女体山 九合村68号	太田市内ヶ島 1387他	帆立貝 96	竪穴系?												5中		5
894	天神山 九合村69号	太田市内ヶ島 1575他	前方後円 208	長持形 石棺										器財・水鳥		5中	昭46・54・57・平2調査	5 171
895	天神山A陪塚 漏	太田市内ヶ島 1597	35		●									不明		5中	平2調査	145
896	目塚1号 漏	太田市内ヶ島	円(帆立貝?) 21											鶏		5中		
897	オクマン山 宝泉村1号	太田市脇屋539	円 36	横穴式	1	●	●	●		5				鶏1		6後 ~7初	昭25・45・48調査	5 170
898	宝泉村3号	太田市脇屋247	円 29												2	後期		

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	髷	笏	盾	鞆	靴	男	女	馬				その他
899	茶臼山 宝泉村 5 号	太田市別所599・ 600	前方後円 163	竪穴系？												5 前	昭37調査	2 126
900	宝泉村 8 号	太田市由良1765	円 25									●	●			後期		3
901	四ツ塚	太田市由良1902										3	2	1	鳥	後期	出土遺物東博蔵	43
902	宝泉村23号	太田市藤阿久 905・907	円 27	横穴式								●	●			6		3
903	宝泉村28号	太田市藤阿久 622	円 20															3
904	宝泉村58号	太田市下田島 1248の2	円 21									●						3
905	宝泉村59号	太田市下田島 1248の2	円 21									●						3
906	漏	太田市下田島 1243の1他																
907	西田島 1 号	太田市下田島 1243の1他	円 16									●		不明		6	昭63調査	146
908	西田島 2 号	太田市下田島 1243の1他	円 26		●		●					●		不明		6	昭63調査	146
909	庚申塚 毛里田村 2 号	太田市吉沢132	前方後円 50	石棺												5 ?		147
910	反丸 1 号 漏	太田市吉沢	円 30	横穴式												6	昭58調査	148
911	反丸 2 号 漏	太田市吉沢	円	横穴式												6	昭58調査	148
912	小丸山 毛里田村 6 号	太田市矢田堀 甲411の1他	円		●													3
913	赤城塚 毛里田村 7 号	太田市東今泉 691	円															3
914	辨天塚 毛里田村16号	太田市矢田堀 甲112	円 8									●	●			後期		3
915	稲荷山 毛里田村19号	太田市市場488の 1	円 32	横穴式？								●				6 前 ～中		5
916	諏訪 毛里田村20号	太田市市場739の 2	円 21															3
917	塚田 毛里田村 9 号	太田市東今泉 798		石棺？														3
918	八幡山 毛里田村12号	太田市東今泉 2179の2	前方後円 33	横穴式												6		3
919	八幡山 鳥之郷村 1 号	太田市大島1129	前方後円 84	竪穴式？										壺		4 末	昭34調査	5
920	亀山 鳥之郷村 2 号	太田市鳥山1509	前方後円 63	竪穴式？												5 末	昭46調査	5
921	赤城 鳥之郷村 4 号	太田市鶴生田 747	前方後円 30	横穴式												6		3
922	稲荷林 鳥之郷村 5 号	太田市鶴生田 1046	円 12	横穴式？												6 ?		3
923	鳥之郷村 6 号	太田市鶴生田 乙の1043	円 14	横穴式？												6 ?		3
924	鳥之郷村 7 号	太田市鶴生田 1041	円 11	横穴式？												6 ?		3
925	鳥之郷村 8 号	太田市鶴生田 乙1051	円 16	横穴式										鶏		6	出土遺物東博蔵	3 43
926	鳥之郷村10号	太田市鶴生田 1024	円	横穴式？												6 ?		3
927	観音堂 鳥之郷村14号	太田市新野 937の1	円？	横穴式？												6 ?		3
928	鳥之郷村17号	太田市大島1519	円	横穴式？												6 ?		3
929	鳥之郷村21号	太田市大島 丙1042	円													後期？		3
930	鳥之郷村22号	太田市大島1025	円													後期？		3

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No.	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	鬚	笏	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
931	鳥之郷村23号	太田市大島乙1029	円													後期?		3
932	漏	太田市大島636										●				後期	出土遺物東博蔵	43
933	鳥之郷村34号	太田市鶴生田22の1	円													後期?		3
934	大光寺鳥之郷村36号	太田市鳥山2026	円 7													後期?		3
935	鳥之郷村43号	太田市長手289	円 9													後期?		3
936	鳥之郷村51号	太田市長手1939	円 27													後期?		3
937	鳥崇神社鳥之郷村66号	太田市鳥山835他	前方後円 70	竪穴式?								●				5末?	昭48調査	5
938	強戸村2号	太田市西長岡1695	円 30	横穴式												6	西長岡東山古墳群	3
939	強戸村7号	太田市西長岡1674	円 25	横穴式?									●			6?	西長岡東山古墳群	3
940	強戸村10号	太田市西長岡1674	円 15	横穴式?												6?	西長岡東山古墳群	3
941	強戸村11号	太田市西長岡1637	円 15	横穴式?												6?		3
942	強戸村14号	太田市西長岡824	円 13	横穴式?												6?		3
943	強戸村15号	太田市西長岡1367	円 20	横穴式?												6?	西長岡天神山古墳群	3
944	強戸村16号	太田市西長岡1367	円 40	横穴式?												6?	西長岡天神山古墳群	3
945	西長岡長塚強戸村33号	太田市西長岡383の1・383の2	前方後円 70															3 136
946	強戸村35号	太田市西長岡224・225	円 10	横穴式?												6?		3
947	強戸村38号	太田市西長岡206	円 40	横穴式?												6?		3
948	強戸村39号	太田市西長岡195	円 20	横穴式?												6?		3
949	強戸村40号	太田市西長岡196	円 20	横穴式?												6?		3
950	強戸村42号	太田市西長岡434	円 15	横穴式												6		3
951	西長岡東山3号	太田市西長岡	前方後円 30以上	横穴式	●	●	●	●	●				器台にのる壺	6後	昭63調査	143		
952	西長岡東山2号	太田市西長岡	円 9	横穴式	●		●	●	●	●				6後	平1調査	143		
953	西長岡東山13号	太田市西長岡	円 22											後期	平1調査	143		
954	西長岡東山15号	太田市西長岡	円 15											後期	平1調査	143		
955	狐塚強戸村46号	太田市菅塩1271	円 30	横穴式										6	菅塩西山古墳群	3		
956	天神塚強戸村47号	太田市菅塩1271	円 20	横穴式										6	菅塩西山古墳群	3		
957	次郎塚強戸村50号	太田市菅塩1316	円 30	横穴式?										6?	菅塩祝入古墳群	3		
958	太郎塚強戸村51号	太田市菅塩1340	円 25	横穴式?										6?	菅塩祝入古墳群	3		
959	強戸村55号	太田市菅塩1251	円 20	横穴式?										6?		3		
960	狐塚強戸村56号	太田市菅塩1352	円 30	横穴式?										6?		3		
961	強戸村58号	太田市菅塩1274の1	円	横穴式?										6?		3		
962	強戸村59号	太田市北金井1035	円 20	横穴式?										6?		3		

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径:m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	鬘	笄	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
963	強戸村60号	太田市北金井1036	円 30	横穴式?												6?		3
964	強戸村61号	太田市北金井1036	円 20	横穴式?												6?		3
965	強戸村62号	太田市北金井1036	円 20	横穴式?												6?		3
966	強戸村63号	太田市北金井1041	円 12	横穴式?												6?		3
967	強戸村66号	太田市北金井1044	円 20	横穴式?												6?		3
968	強戸村67号	太田市北金井1054	円 20	横穴式?												6?		3
969	強戸村68号	太田市北金井1054	円 15	横穴式?												6?		3
970	強戸村74号	太田市北金井527	円 12	横穴式?												6?		3
971	強戸村76号	太田市北金井517の2	円 15	横穴式												6		3
972	強戸村79号	太田市北金井988	円 20	横穴式?												6?		3
973	強戸村85号	太田市北金井988	円 25	横穴式?												6?		3
974	強戸村86号	太田市北金井871	円 9	横穴式?												6?		3
975	強戸村87号	太田市北金井288の1	前方後円 120	横穴式?												6?	大鷲向山古墳群 前方後円可能性少	3
976	強戸村88号	太田市北金井288の1	円 15	横穴式												6	大鷲向山古墳群	3
977	強戸村91号	太田市北金井317	円 12	横穴式?												6?	大鷲大平古墳群	3
978	強戸村96号	太田市北金井甲318	円 15	横穴式?												6?	大鷲大平古墳群	3
979	強戸村97号	太田市北金井甲318	円 20	横穴式?												6?	大鷲大平古墳群	3
980	強戸村98号	太田市北金井甲318	円 20	横穴式?												6?	大鷲大平古墳群	3
981	強戸村101号	太田市北金井乙320	円 15	横穴式												6	大鷲大平古墳群	3
982	強戸村102号	太田市北金井乙320	円 7	横穴式?												6?	大鷲大平古墳群	3
983	強戸村103号	太田市北金井乙320	円 9	横穴式												6	大鷲大平古墳群	3
984	強戸村105号	太田市北金井321	円 6	横穴式?												6?	大鷲梅穴古墳群	3
985	強戸村106号	太田市北金井321	円 9	横穴式?												6?	大鷲梅穴古墳群	3
996	強戸村108号	太田市北金井322	円 9	横穴式?												6?	大鷲梅穴古墳群	3
987	強戸村110号	太田市北金井乙323	円 7	横穴式												6	大鷲梅穴古墳群	3
988	御守山 強戸村112号	太田市北金井甲324	円	横穴式												6	昭26調査 大鷲梅穴古墳群	14
989	強戸村117号	太田市北金井乙323	円 15	横穴式?												6?	大鷲梅穴古墳群	3
990	強戸村118号	太田市北金井乙323	円 20	横穴式?												6?		3
991	強戸村119号	太田市北金井乙324	円 20	横穴式?												6?		3
992	強戸村121号	太田市北金井328	円 20	横穴式												6		3
993	強戸村123号	太田市北金井329	円 12	横穴式?												6?		3
994	強戸村124号	太田市北金井136	円 15	横穴式?												6?		3

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径：m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献		
					家	蓋	鬚	袴	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他	
995	強戸村125号	太田市北金井 甲106	円 5	横穴式?													6?		3
996		太田市北金井 408										1	1		盾持人1	6	出土遺物東博蔵	43	
997	強戸村126号	太田上強戸 1711	円 20													後期?		3	
998	強戸村127号	太田上強戸 2032	円 20													後期?		3	
999	強戸村128号	太田上強戸 2024の2	円 20													5後		3 136	
1000	強戸村129号	太田上強戸 2044	円 10													後期?		3	
1001	八幡塚 強戸村130号	太田上強戸 2048	円 30													5後	上強戸古墳群	3 136	
1002	強戸村131号	太田上強戸 2055	円 15										●			後期	上強戸古墳群	3	
1003	強戸村134号	太田上強戸 2089	円 34													後期?	上強戸古墳群	3	
1004	ケラ塚 強戸村137号	太田上強戸 944の43	円 20	横穴式												6		3	
1005	諏訪塚 強戸村144号	太田成塚996	円													後期?		3	
1006	強戸村145号	太田成塚797	円													後期?		3	
1007	稲荷神社 強戸村146号	太田成塚792	前方後円					●				●		●		6後	昭59調査 成塚古墳群	149	
1008	強戸村147号	太田成塚118	円													後期?		3	
1009	強戸村148号	太田成塚772	円 30													後期?	成塚古墳群	3	
1010	強戸村149号	太田成塚790	円 20													後期?	成塚古墳群	3	
1011	強戸村151号	太田成塚754	円 15													後期?		3	
1012	強戸村152号	太田成塚806の 1	円 20													後期?		3	
1013	強戸村153号	太田成塚806の 2	円 20													後期?		3	
1014	強戸村154号	太田成塚807の 1	円 20													後期?		3	
1015	強戸村155号	太田成塚811	円 20													後期?		3	
1016	強戸村156号	太田成塚836	円 20													後期?		3	
1017	粟平塚 強戸村157号	太田成塚821他	円 35	横穴式											不明	6後	昭25・41調査	5	
1018	成塚B号 強戸村158号	太田成塚847	円 15	横穴式												6後	昭25調査	3 110	
1019	強戸村159号	太田成塚847	円 25													後期		3	
1120	強戸村160号	太田成塚 乙843他	円 20													後期		3	
1021	成塚A号 強戸村161号	太田成塚966	円 20	横穴式												6後	昭25調査	3	
1022	強戸村162号	太田成塚971	円 20													後期		3	
1023	強戸村166号	太田成塚973	円 30													後期?		3	
1024	強戸村169号	太田成塚983	円 15													後期?		3	
1025	強戸村171号	太田成塚715	円 15													後期?		3	
1026	強戸村173号	太田成塚336	円 15													後期?		3	

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	鬘	弁	盾	鞆	柄	男	女	馬				その他
1027	強戸村174号	太田市成塚308	円 6													後期?		3
1028	強戸村176号	太田市成塚310	円 10													後期?		3
1029	強戸村177号	太田市成塚317	円 10													後期?		3
1030	強戸村178号	太田市成塚310	円 10													後期?		3
1031	強戸村179号	太田市成塚317	円 10													後期?		3
1032	強戸村180号	太田市成塚318	円 52													後期?		3
1033	強戸村181号	太田市成塚940	円 10													後期?		3
1034	強戸村182号	太田市成塚931	円													後期?		3
1035	強戸村183号	太田市成塚917	円 10													後期?		3
1036	強戸村184号	太田市西長岡74	前方後円?													後期?		3
1037	成塚石橋1号 漏	太田市成塚 1001の1他	帆立貝 18				●			●	●	1			後期	昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1038	成塚石橋2号 漏	太田市成塚 1001の1他	円 10				●			●		2				昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1039	成塚石橋3号 漏	太田市成塚 1001の1他	円 8		●		●									昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1040	成塚石橋4号 漏	太田市成塚 1001の1他	円 13						●	●	●	●				昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1041	成塚石橋5号 漏	太田市成塚 1001の1他	円 13								●	●				昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1042	成塚石橋6号 漏	太田市成塚 1001の1他	円 16				●									昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1043	成塚石橋7号 漏	太田市成塚 1001の1他								●	●					昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1044	成塚石橋8号	太田市成塚 1001の1他	方 8													昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1045	成塚石橋9号 漏	太田市成塚 1001の1他	円 12													昭62～平2調査 成塚石橋遺跡	150	
1046	クツツ畑(毛里田 36号)	太田市只上371	円										鳥					147
1047	木崎町1号	新田郡新田町 中江田470他													6後			3 152
1048	ニッ山 木崎町4号	新田郡新田町 中江田592													6			3 152
1049	ニッ塚 木崎町5号	新田郡新田町 下江田449・甲500	前方後円 50	横穴式			●								6後	出土遺物東博蔵		43 152
1050	宮田稲荷 木崎町6号	新田郡新田町 赤堀379の1他													5後?			3 152
1051	神明塚 木崎町7号	新田郡新田町 木崎323の1他	円															152
1052	施塚八幡 生品村6号	新田郡新田町 市野井2239	前方後円? 91							●					6			152
1053	綿打村1号	新田郡新田町 大根乙1000	円 9															3
1054	綿打村9号	新田郡新田町 上田中710	円 30															3
1055	兜塚 綿打村11号	新田郡新田町 上田中702	円 20												6末 ～7初	昭58調査		152 153
1056	兵庫塚 綿打村15号	新田郡新田町 上田中23・24	前方後円 30	横穴式			●								6末			153
1057	綿打村16号	新田郡新田町 上田中193	円 26	横穴式?											6末			152
1058	八幡様 綿打村27号	新田郡新田町 中江田490他	円 9	横穴式											6			152

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径：m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献
					家	蓋	鬘	笏	盾	鞆	男	女	馬	その他			
1059	ドン山 漏	新田郡新田町 上江田916他													6		152
1060	吉祥院跡 漏	新田郡新田町 上江田473他													6		152
1061	龍得寺南所在 漏	新田郡新田町 上江田															152
1062	石塚 漏	新田郡新田町 赤堀	円 15												5後		152
1063	漏	新田郡新田町 赤堀													6		152
1064	百庚申 漏	新田郡新田町 中江田225													6		152
1065	森下 漏	新田郡新田町 中江田279													6		152
1066	森下南所在 漏	新田郡新田町 中江田													6		152
1067	金山 漏	新田郡新田町 村田506													6		152
1068	四軒北 漏	新田郡新田町 村田1579他	前方後円												7初		152
1069	江田館跡北西 漏	新田郡新田町 中江田													6		152
1070	ニッ山1号 生品村1号	新田郡新田町 天良	前方後円 74	横穴式	6 以上		1	2	1			12	鳥2・槍1 帽子	6末～ 7初			152 154
1071	ニッ山2号	新田郡新田町 天良	前方後円 60	横穴式	●						●	●		6末	昭58調査		152 154
1072	上野井1号	新田郡新田町	円													平3調査 小宮恒久氏教示	
1073	上野井2号	新田郡新田町	円													平3調査 小宮恒久氏教示	
1074	尾島町1号	新田郡尾島町 亀岡24・19	前方後円?														3
1075	尾島町2号?	新田郡尾島町 亀岡29の1										2	1	後期	出土遺物東博蔵		43
1076	世良田村1号	新田郡尾島町 出塚562	円 9														3
1077	世良田村2号	新田郡尾島町 出塚563の1	円 9														3
1078	世良田村3号	新田郡尾島町 出塚565の2	円 9														3
1079	世良田村5号	新田郡尾島町 出塚547の1他	円 9														3
1080	世良田村6号	新田郡尾島町 出塚550の1	円 9														3
1081	世良田村7号	新田郡尾島町 出塚558	円 9											後期?			3 43
1082	世良田村8号	新田郡尾島町 出塚558	円 9											後期?			3
1083	世良田村9号	新田郡尾島町 出塚558	円 9	横穴式						1				6	出土遺物東博蔵		3 43
1084	世良田村10号	新田郡尾島町 世良田2046の1	円 9								●			後期			3
1085	世良田村11号	新田郡尾島町 世良田2046の2	円 5								●			後期			3
1086	世良田村15号	新田郡尾島町 世良田2042の1	円 9											後期?			3
1087	下ノ諏訪 世良田村27号	新田郡尾島町 世良田2188の2	円 18	横穴式										6			3
1088	二子塚 世良田村28号	新田郡尾島町 世良田2238他	前方後円 60	横穴式										6			3
1089	鼠塚 世良田村31号	新田郡尾島町 世良田2460	前方後円 9	横穴式							●			6			3
1090	世良田村36号	新田郡尾島町 世良田2837	前方後円 73	横穴式					●				壺	6			3

IV 考 察

No.	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献	
					家	蓋	髷	笄	盾	鞆	鞆	男	女	馬				その他
1091	世良田村37号	新田郡尾島町 世良田2874他	前方後円 91	横穴式	●							●				6		3
1092	世良田村43号	新田郡尾島町 小角田213	円 9									●				後期		3
1093	世良田村44号	新田郡尾島町 小角田213	円 2									●				後期		3
1094	車塚 世良田村45号	新田郡尾島町 小角田231	円 24	横穴式												6		3
1095	藪塚本町1号	新田郡藪塚本町 藪塚3873の1	前方後円 97	横穴式												6		3
1096	西山 藪塚本町66号	新田郡藪塚本町 藪塚3519	前方後円 34	横穴式												6後	昭24調査	2
1097	藪塚本町69号	新田郡藪塚本町 藪塚3519	円 11	横穴式												6		3
1098	藪塚本町75号	新田郡藪塚本町 藪塚3285	円 22													後期?		3
1099	街道橋 藪塚本町83号	新田郡藪塚本町 藪塚2815	円 14	横穴式												6後	昭26調査	3
1100	藪塚本町89号	新田郡藪塚本町 藪塚2666	円 13													後期?		3
1101	藪塚本町101号	新田郡藪塚本町 藪塚2486	円 24													後期?		3
1102	若水塚 漏	新田郡藪塚本町 藪塚										●						43
1103	長生寺開山塚A号 笠懸村9号	新田郡笠懸町 西鹿田845	円 18	横穴式												6後		2 155
1104	和田2号 漏	新田郡笠懸町 西鹿田	円 9													6後	昭54調査	156
1105	天神山1号 漏	新田郡笠懸町 西鹿田133の5	円 10	竪穴式												6前	昭52調査	157
1106	天神山3号 漏	新田郡笠懸町 西鹿田	円 14	竪穴式												6前	昭52調査	157
1107	富士山 相生村1号	桐生市相生町 2の274の1	前方後円 37	横穴式				1	2			●	●			6後	出土遺物東博蔵	43
1108	稲荷塚 漏	桐生市新宿通 3丁目	円 13	横穴式												6		158
1109	無名塚 漏	桐生市新宿通 3丁目	円 13	横穴式												6		158
1110	塚越 漏	桐生市広沢町 3丁目	円	横穴式	●											6		158
1111	国土	山田郡大間々町 桐原	横穴式					2								6		2
1112	多々良村30号	館林市高根町 1221	円 55															3
1113	愛宕山 多々良村37号	館林市日向町 262	円 45	横穴式												6		3
1114	多々良村42号	館林市日向町 767の2	円 23															3
1115	多々良村43号	館林市日向町 830の1	円 13															3
1116	天神二子 多々良村4号	館林市高根108	前方後円 58									●		不明		後期	昭37・46調査	5
1117	淵ノ上	館林市羽附96他	円 30											不明		後期 ?	昭63調査	159
1118	高根1号	館林市高根町 130-3他	円 20													後期 ?	平2調査	160
1119	古海亀の子山 大川村1号	邑楽郡大泉町古海 977-1	前方後円	竪穴系												5後 ~6前		161
1120	諏訪山 大川村2号	邑楽郡大泉町 仙石2214の1他	円 33												形象			161
1121	大川村9号	邑楽郡大泉町 仙石1830他	円 21									●		器財		後期		3
1122	大川村10号	邑楽郡大泉町 仙石1824他	円 35									●		器財		後期		3

付編 群馬県埴輪出土古墳地名表

No	古墳名	所在地	墳形 全長・径:m	主体部	出土形象埴輪										時期	備考	文献	
					家	蓋	鬮	奇	盾	鞆	男	女	馬	その他				
1123	大川村11号	邑楽郡大泉町 仙石1842他	円 21															3
1124	大川村12号	邑楽郡大泉町 道祖1849	円								●		器財	後期			161	
1125	大川村21号	邑楽郡大泉町 植松甲317	円 29	横穴式							●			後期			161	
1126	古海原前1号 大川村28号	邑楽郡大泉町 古海323の1	帆立貝 30	礫									不明	5末	昭59調査		151	
1127	古海原前2号 漏	邑楽郡大泉町 古海													昭59調査		151	
1128	古海天神山 漏	邑楽郡大泉町 古海662の1他	帆立貝 44	竪穴式?							●			6前 ~中			161	
1129	高德寺東 漏	邑楽郡大泉町 古海501	帆立貝 40	竪穴式?							●	●	●	5後			161	
1130	下小泉ニッ山 小泉町4・5号	邑楽郡大泉町 下小泉1298の1他	前方後円								●	●		後期			161	
1131	古水亀の子山 漏	邑楽郡大泉町 古水114	円 20	竪穴式							●						161	
1132	漏	邑楽郡大泉町古 水	円														161	
1133	漏	邑楽郡大泉町古 水															161	
1134	漏	邑楽郡大泉町 古海339-4	円														161	
1135	漏	邑楽郡大泉町 古海	円														161	
1136	漏	邑楽郡大泉町 古海番場	円														161	
1137	漏	邑楽郡大泉町 仙石	円								●		器財	後期			161	
1138	高島村9号	邑楽郡邑楽町 石打乙の1056	円 73?														3	
1139	高島村17号	邑楽郡邑楽町 石打1053の2	前方後円 18														3	
1140	中野村2号	邑楽郡邑楽町 中野1380	円 18														3	
1141	中野村3号	邑楽郡邑楽町 中野1389乙	円 27														3	
1142	中野村24号	邑楽郡邑楽町 中野3884の1	円 29														3	
1143	中野村27号	邑楽郡邑楽町 中野3881の1	円 35														3	
1144	中野村33号	邑楽郡邑楽町 中野3890の1	円 25														3	
1145	松本23号 中野村10号	邑楽郡邑楽町 中野1310	円 12											6後	平1調査		162	
1146	堂山 永楽村1号	邑楽郡千代田町 赤岩甲1037	前方後円 75	横穴式										6末			163	
1147	八幡山 永楽村2号	邑楽郡千代田町 新福寺甲320	前方後円 約50								●	●		6後			3 163	
1148	永楽村3号	邑楽郡千代田町 新福寺344	円 29														7 163	
1149	永楽村5号	邑楽郡千代田町 新福寺254	円 18														7 163	
1150	永楽村6号	邑楽郡千代田町 福島634他	前方後円 60														163	
1151	観音山 漏	邑楽郡千代田町 新福寺213	前方後円 横穴式								1	1	鳥	6後	出土遺物東博蔵		43	
1152	松之木 漏	邑楽郡板倉町 板倉1222・1223	円								●			後期			164	
1153	舟山 伊奈良2号	邑楽郡板倉町 岩田2631の2他	前方後円 62	横穴式										6後	平1調査		164	
1154	道明山 伊奈良3号	邑楽郡板倉町 岩田1540の1他	前方後円 40														165	

IV 考 察

No	古 墳 名	所 在 地	墳 形 全長・径：m	主体部	出 土 形 象 埴 輪										時期	備 考	文献
					家	蓋	鬘	奇	盾	鞆	軛	男	女	馬			
1155	千江田稲荷塚 千江田村2号	邑楽郡明和村 斗合田718														昭29調査	160

参考文献

- (1) 前橋市史編さん委員会『前橋市史』第1巻 1971
- (2) 群馬県教育委員会『群馬県の遺跡』1963
- (3) 群馬県「上毛古墳総覧」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 1938
- (4) 松島栄治・中村富夫・右島和夫「群馬県前橋市王山古墳の調査」『第57回日本考古学協会総会研究発表要旨』 1991
- (5) 『群馬県史』資料編3 1981
- (6) 三県シンポジウム『埴輪の変遷』 1985
- (7) 群馬県教育委員会『群馬遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』 1971
- (8) 前橋市教育委員会『後二子古墳・小二子古墳』 1992
- (9) 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群』 1982
- (10) 群馬県『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 1929
- (11) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井神社古墳群 他』 1986
- (12) 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』 1980
- (13) 群馬県教育委員会『下滝・天神』 1990
- (14) 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』吉川弘文館 1966
- (15) 前橋市教育委員会『内堀遺跡群Ⅱ』 1989
- (16) 前橋市教育委員会『内堀遺跡群Ⅰ』 1988
- (17) 前橋市教育委員会『西大室遺跡群Ⅱ』 1981
- (18) 前橋市教育委員会『広瀬団地古墳群発掘調査報告書』前橋市文化財調査報告第1集 1970
- (19) 前橋市教育委員会『金冠塚（山王二子山）古墳調査概報』 1982
- (20) 前橋市教育委員会『芳賀西部団地遺跡群』 1991
- (21) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『清里・長久保遺跡』 1986
- (22) 尾崎喜左雄「群馬県勢多郡大道古墳」『日本考古学年報』5 日本考古学協会 1957
- (23) 群馬県教育委員会『舞台・西大室丸山』 1991
- (24) 尾崎喜左雄「月田葉師塚古墳」『すざく会誌』3巻 6号 すざく会 1958
- (25) 尾崎喜左雄「群馬県粕川村壇塚古墳調査報告」『研究紀要』人文科学編 第1巻 群馬大学 1950
- (26) 勢多郡誌編さん委員会『勢多郡誌』 1958
- (27) 粕川村誌編さん委員会『粕川村誌』 1972
- (28) 粕川村教育委員会『深津地区遺跡群』 1985
- (29) 粕川村教育委員会『西原古墳群』 1985
- (30) 粕川村教育委員会『深津地区遺跡群』 1986
- (31) 粕川村教育委員会『白藤古墳群』 1989
- (32) 新里村誌編さん委員会『新里村誌』 1974
- (33) 新里村教育委員会『新里村の遺跡』 1984
- (34) 富士見村誌編さん委員会『富士見村誌』 1954
- (35) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報』10 1991
- (36) 本村豪章「古墳時代の基礎研究稿—資料篇（Ⅱ）—」『東京国立博物館紀要』 26号 1990
- (37) 高崎市教育委員会『石原稲荷山古墳』 1981
- (38) 日本考古学協会『日本考古学年報』12 1964
- (39) 日本考古学協会『日本考古学年報』10 1962
- (40) 高崎市教育委員会『市内遺跡調査展パンフレット』 1990
- (41) 群馬県教育委員会『群馬県遺跡台帳Ⅱ（西毛編）』 1974
- (42) 群馬県教育委員会『史跡観音山古墳』 1982
- (43) 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ） 1983
- (44) 高崎市教育委員会『鈴ノ宮遺跡調査報告書』 1978
- (45) 中川村誌編さん委員会『中川村誌』 1957
- (46) 高崎市教育委員会『筑縄遺跡』 1985
- (47) 高崎市教育委員会『道場遺跡群』 1989
- (48) 金子智一・桜井 衛・山田寧和「高崎市周辺の埴輪」『埴輪の変遷』 三県シンポジウム 1985
- (49) 群馬県教育委員会『観音塚古墳』 1963
- (50) 外山和夫「石製模造品類を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐる」『考古学雑誌』62-2 1976
- (51) 群馬県教育委員会『下郷』 1980
- (52) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『八幡原A・B・上滝・元島名』 1981
- (53) 尾崎喜左雄「鈴塚古墳発掘調査報告」群馬大学尾崎研究室 1956
- (54) 日本考古学協会『日本考古学年報』17 1969
- (55) 群馬大学尾崎研究室『昭和39・40年度における発掘調査』 1969

- (56) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「本郷的場古墳群」1990
- (57) 福島武雄「上芝古墳址」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 1932
- (58) 稲村 繁「群馬県における馬形埴輪の変遷」『MUSEAM』425号 1986
- (59) 金古町誌刊行会『金古町誌』1963
- (60) 群馬町教育委員会「保渡田VII遺跡」1990
- (61) 福島武雄、他「八幡塚古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯 1932
- (62) 後藤守一「上野国愛宕塚」『考古学雑誌』39-1 1953
- (63) 群馬町教育委員会「二子山古墳」1985
- (64) 大塚昌彦「渋川市域における埴輪」『埴輪の変遷』三県シンポジウム 1985
- (65) 群馬県企業局・渋川市教育委員会「行幸田山遺跡」1987
- (66) 榛東村誌編さん室「榛東村誌」1988
- (67) 北群馬・渋川の歴史編さん委員会「北群馬・渋川の歴史」1971
- (68) 志村 哲「藤岡台地における埴輪の様相」『埴輪の変遷』三県シンポジウム 1985
- (69) 藤岡市教育委員会「堀ノ内遺跡群」1982
- (70) 尾崎喜左雄「群馬県藤岡市小林A号墳」『日本考古学年報』7 1958
- (71) 藤岡市教育委員会「七興山古墳」1990
- (72) 藤岡市教育委員会「十二天塚古墳・伊勢塚古墳報告」1988
- (73) 尾崎喜左雄「群馬県藤岡市三本木A号墳」『日本考古学年報』7 1958
- (74) 尾崎喜左雄「群馬県藤岡市三本木B号墳」『日本考古学年報』7 1958
- (75) 藤岡市教育委員会「詳細遺跡分布調査(3)」1984
- (76) 後藤守一「白石稲荷山古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第三輯 1936
- (77) 藤岡市教育委員会「皇子塚古墳」1989
- (78) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「上栗須・下大塚・中大塚遺跡」1989
- (79) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報」8 1989
- (80) 吉井町誌編さん委員会「吉井町誌」1974
- (81) 吉井教育委員会「蛇塚古墳」1987
- (82) 萩原 進「吉井町稲荷塚古墳発掘調査報告書」1948
- (83) 尾崎喜左雄「群馬県多野郡多胡古墳群」『日本考古学年報』14 1961
- (84) 尾崎喜左雄「群馬県多野郡馬庭御伊勢山古墳」『日本考古学年報』5 1957
- (85) 尾崎喜左雄「群馬県富岡市御三社古墳」『日本考古学年報』7 1958
- (86) 群馬県立博物館「富岡5号古墳」1972
- (87) 富岡市教育委員会「芝宮古墳群」1992
- (88) 『富岡市史』原始・古代資料編 1987
- (89) 右島和夫・津金沢吉茂 他「牛伏砂岩使用古墳の研究(2)」『研究紀要』8 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (90) 富岡市教育委員会「上田篠古墳群・原田篠遺跡」1984
- (91) 安中市誌編さん委員会「安中市誌」1964
- (92) 石川正之助「野殿天王塚石室の平面構成について」『共愛学園論集』1号 1967
- (93) 高崎市教育委員会「山名原口II遺跡」1991
- (94) 岩島村誌編さん委員会「岩島村誌」1971
- (95) 沼田市教育委員会「沼田市の文化財」1989
- (96) 群馬県教育委員会「鏡石古墳」1974
- (97) 月夜野教育委員会「三峰神社裏遺跡」1986
- (98) 伊勢崎市教育委員会「恵下遺跡」1979
- (99) 伊勢崎市教育委員会「高山遺跡・天ヶ堤遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡」1978
- (100) 『伊勢崎市史』通史編1 1987
- (101) 伊勢崎市教育委員会「伊勢崎市稲荷町の古墳」1972
- (102) 伊勢崎市教育委員会「蟹沼東古墳群」1981.10
- (103) 伊勢崎市教育委員会「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」1978
- (104) 伊勢崎市教育委員会「蟹沼東古墳群」1981.3
- (105) 伊勢崎市教育委員会「お富士山古墳」1990
- (106) 赤堀村教育委員会「赤堀村地藏山の古墳」1 1978
- (107) 赤堀村教育委員会「赤堀村峰岸山の古墳」2 1976
- (108) 赤堀村教育委員会「赤堀村地藏山の古墳」2 1979
- (109) 赤堀町教育委員会「五日牛地区町106号線拡張工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」1990
- (110) 尾崎喜左雄「横穴式古墳袖無型石室の研究」『研究紀要』人文科学編 第3巻 群馬大学 1953
- (111) 赤堀町教育委員会「下触片田古墳群発掘調査概報」1990
- (112) 尾崎喜左雄「群馬県佐波郡石山南古墳」『日本考古学年報』5 日本考古学協会 1963
- (113) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「下触牛伏遺跡」1986
- (114) 尾崎喜左雄「群馬県佐波郡轟山A号古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
- (115) 帝室博物館「上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳」1933
- (116) 赤堀村教育委員会「今井北原古墳及び住居跡発掘調査概報」1981
- (117) 赤堀村教育委員会「赤堀村峰岸山の古墳」1976

IV 考 察

- (118) 赤堀村教育委員会『西野諏訪神社丘古墳群発掘調査概報』1975
 (119) 赤堀村教育委員会『八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報』1982
 (120) 松村一昭『佐波郡東村の古墳』佐波郡東村誌編さん委員会 1969
 (121) 尾崎喜左雄「群馬県佐波郡下谷A号古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
 (122) 尾崎喜左雄「群馬県佐波郡下谷B号古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
 (123) 境町教育委員会「武士遺跡」1981
 (124) 境町教育委員会「武士遺跡」1982
 (125) 境町教育委員会「境町上武士の古墳」1968
 (126) 尾崎喜左雄「群馬県新田郡別所茶白山古墳」『日本考古学年報』15 1967
 (127) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下淵名塚遺跡』1991
 (128) 永峯光一・亀井正道・塚越甲子郎・金子量重「群馬県佐波郡采女村上淵名二子山西古墳群発掘報告」『上代文化』第18輯 1949
 (129) 尾崎喜左雄「群馬県佐波郡上淵名古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
 (130) 境町教育委員会『笠遺跡・吉田遺跡』1985
 (131) 境町教育委員会『三筆古墳群』1988
 (132) 玉村町教育委員会『城遺跡』1989
 (133) 太田市教育委員会『市内遺跡III』1987
 (134) 『焼山遺跡総合調査報告』はにわの会 1968
 (135) 群馬県立歴史博物館『群馬のはにわ』1979
 (136) 橋本博文「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第26巻 2号 1979
 (137) 群馬県教育委員会『塚廻り古墳群』1980
 (138) 太田教育委員会『沢野村63号古墳発掘調査概報』1977
 (139) 齋藤 忠「群馬県太田市高林古墳群」『日本考古学年報』3 日本考古学協会 1928
 (140) 群馬県教育委員会『米沢二ツ山古墳』1971
 (141) 南雲芳昭「東毛養護学校所蔵の馬形埴輪について」『紀要』9 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
 (142) 尾崎喜左雄『古墳のはなし』学生社 1973
 (143) 太田市教育委員会『埋蔵文化財発掘調査年報』
 (144) 太田市教育委員会『新井八幡神社古墳発掘調査報告書』1974
 (145) 太田市教育委員会『天神山古墳外堀・A陪塚』1990
 (146) 群馬県教育委員会『西田島II遺跡』1989
 (147) 山田郡教育委員会『山田郡誌』1939
 (148) 群馬県教育委員会『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報(吉祥寺遺跡・流作場遺跡・反丸遺跡)』1984
 (149) 太田市教育委員会『市内遺跡II』1985
 (150) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『成塚石橋遺跡II』1991
 (151) 大泉町教育委員会『古海原前古墳群発掘調査概報』1986
 (152) 新田町誌編さん委員会『新田町誌』第2巻資料編(上) 1987
 (153) 新田町教育委員会『中江田遺跡』1985
 (154) 「群馬県新田郡二ツ山古墳」『日本考古学年報』1 1948
 (155) 藪塚本町誌編さん委員会『藪塚本町誌』上巻 1991
 (156) 笠懸村教育委員会『和田遺跡』1981
 (157) 笠懸村教育委員会『笠懸村天神山古墳群発掘調査報告』1978
 (158) 桐生市史編さん委員会『桐生市史』上巻 1958
 (159) 館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』1989
 (160) 館林市教育委員会『館林市内遺跡発掘調査報告書』1991
 (161) 大泉町誌編さん委員会『大泉町誌』下巻 歴史編 1983
 (162) 邑楽町教育委員会『松本23号古墳発掘調査報告書』1989
 (163) 千代田村誌編さん委員会『千代田村誌』1975
 (164) 板倉町教育委員会『船山古墳』1990
 (165) 板倉町誌編さん委員会『板倉町史』通史 上 1985
 (166) 尾崎喜左雄「群馬県邑楽郡稻荷塚古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
 (167) 群馬県教育委員会『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』1989
 (168) 藤岡市教育委員会『白石稻荷山範圍確認調査』
 (169) 太田市教育委員会『沢野村63号古墳』1977
 (170) 太田市教育委員会『オクマン山古墳報告書』1969
 (171) 群馬県教育委員会『史跡天神山古墳外堀部発掘調査報告書』1970

付 載 科 学 分 析

1. 多胡古墳群出土の 人歯について

群馬県立大間々高校 宮崎重雄

I はじめに

群馬県吉井町にある6、7世紀に築造された多胡古墳群中の1号墳、3号墳から出土した人の歯を調査する機会を得たので、その結果をここに報告する。

本報告は次ぎのような調査基準を用いてまとめたものである。

- 1) 計測器具は、1/20mmのノギスを使用し、計測基準は藤田¹⁾に従った。
- 2) 歯に関する学術用語は、藤田²⁾に従った。
- 3) 年齢推定は主に Schour & Massler³⁾の歯の成長時期を参考にした。
- 4) 注の番号は引用文献を表し、本文、表とも共通して引用した。

II 本 文

1. 3号墳出土の人歯

石室内床面から歯種鑑定可能な歯・45本と数10片の歯片が出土した。

これらの歯は、歯種推定可能な歯を最も多く含む下顎大白歯の咬耗度・サイズ・色調などによる分類から、少なくとも6個体に由来していることが推測される。

ここでは、この歯種推定がすべて正しいと仮定して、記述をすすめる。

①第1個体

青年期後半～壮年期前半。歯の計測値を Matsu-mura⁴⁾の古墳時代人のそれに照らすと、女性である可能性を示唆している。

第1個体に属するとされる歯は、次の5本の下顎の臼歯で、それぞれ次のような特徴がある。

a) 右下顎第三大白歯 (No52)：歯冠部のみが残存す

る。5咬頭を有する未咬耗の歯である。裂溝型は+である。

b) 右下顎第二大臼歯 (No53)：歯根の分岐部より根尖側を欠く。咬頭数は4+で、各咬頭にごくわずかの咬耗がある。裂溝型は+である。

c) 右下顎第一大臼歯 (No54)：歯冠部のみが残存する。咬頭数は4で、各咬頭にマルチンの咬耗度の1の咬耗があり、その程度は右下顎第二大臼歯より強い。裂溝型はYである。

d) 左下顎第二大臼歯 (No16)：近心側の1/3を欠く歯冠部が残存したものである。咬耗度、咬頭数、裂溝型とも右とほぼ同じである。

e) 左下顎第三大白歯 (No15)：歯根の分岐部より根尖側を欠く。咬耗度、咬頭数、裂溝型とも右とほぼ同じである。

②第2個体

青年期後半～壮年期前半であるが、第1個体・第2個体よりわずかに年長である。歯の計測値を Matsu-mura⁴⁾の古墳時代人のそれに照らすと、男性である可能性を示唆している。

a) 左下顎第一大臼歯 (No40)：近心側の1/3を欠く歯冠部が残存したものである。咬頭数は5で、各咬頭に咬耗があるが、象牙質の露出はない。裂溝型はYである。

b) 左下顎第二大臼歯 (No?)：歯冠部のみが残存する。咬頭数は4+で、遠心頬側咬頭・遠心辺縁隆線にマルチンの咬耗度の1の咬耗がある。裂溝型はXである。

c) 左下顎第三大白歯 (No1)：歯冠部のみが残存する。咬頭数は5で、各咬頭にごくわずかの咬耗がある。裂溝型は+である。

③第3個体

青年期後半～壮年期前半。性別不明。

a) 右下顎第三大白歯 (No2)：咬頭数は4+で、咬耗はまったく見られない。頬面小窩があり、裂溝型はYである。

3号墳個別・下顎大白歯計測値

個体番号	資料番号	推定歯種	歯冠長(高)	同近遠心径	同頬舌径	厚幅指数	マルチン咬耗度	裂溝型	咬頭数
1	52	右下顎第三大白歯	6.5+	10.7	9.2	116.3	0	+	5
	53	右下顎第二大白歯	5.5+	10.0	9.3	107.5	1	+	4+
	54	右下顎第一大白歯	6.1+	11.4	11.0	103.6	1	Y	4
	16	左下顎第二大白歯	6.1+	9.1+	9.2		1	+	4+
	15	左下顎第三大白歯	6.7+	11.0	9.6	114.6	0	+	5
2	40	左下顎第一大白歯	5.9+	12.4+	11.6+		1	Y	5
	?	左下顎第二大白歯	6.3+	12.0	10.9	110.1	1	X	4+
	1	左下顎第三大白歯	5.2+	11.6	10.3	112.6	1	Y	5
3	2	右下顎第三大白歯	6.6+	10.9	10.5	103.8	0	Y	4+
	55	右下顎第二大白歯	7.3+	11.0	11.0	100.0	1	+	4+
4	50	左下顎第一大白歯	6.8+	11.8+	10.5		0	+	6
	49	左下顎第二大白歯	7.0+	11.6	10.1	114.9	0		?
5	4	右下顎第二大白歯	5.5+	9.65	8.8	109.7	0	X	4
	3	左下顎第三大白歯	4.9+	9.9	10.0+		0	Y	4

(単位: mm)

その他の3号墳人歯(計測値)

資料番号	推定歯種	歯冠長(高)	同近遠心径	同頬舌径	厚幅指数	マルチン咬耗度	咬頭数
4	右上顎第二大白歯	6.5+	10.0	11.3		1	3+
1	左上顎第二大白歯	5.0+	9.1	11.5		0	3+
10	左上顎第二大白歯	5.6+	10.5	12.0		1	4
2	左上顎第一大白歯	5.0+	10.5	11.3+		1	4
8	上顎第一大白歯						
22	下顎? 大白歯					0	
47	下顎? 大白歯					0?	
21	大白歯					0?	
35	大白歯					0	
12	大白歯						
25	第一大白歯					2-3	
29	大白歯					2-3	
39	大白歯					2-3	
48	大白歯					2-3	
3	左上顎第一小白歯	8.7	7.8	9.7		1	
24	右下顎第二小白歯	8.0	7.3	8.3		0	
6	右下顎第二小白歯	6.9	7.3+	7.6		0	
33	右下顎第一小白歯	6.2	6.9	7.3		0	
24	左下顎第二小白歯	6.0+	7.5	8.4		0	
5	上顎小白歯						
11	下顎小白歯					0?	
34	下顎小白歯?					0?	
23	下顎小白歯						
20	小白歯						
42	左下顎犬歯	10.0+	7.0	6.7+		0	
0	犬歯					0	
7	右上顎中切歯	10.6+	8.3			0?	
9	左上顎切歯						
19	上顎切歯		8.8+				
43	右下顎中切歯	9.5	5.4	6.1+		0	
44	左? 下顎側? 切歯	7.3+	6.0			0	

1. 多胡古墳群出土の人歯について

古墳時代人歯・計測値*

	西 日 本		東 日 本	
	男 性	女 性	男 性	女 性
下顎第一大臼歯	11.91	11.43	11.67	11.20
下顎第二大臼歯	11.39	11.03	11.21	10.71

※：Matsumura (1990) *を一部引用

(単位：mm)

b) 右下顎第二大臼歯 (No.55)：歯冠部のみが残存する。咬頭数は4+である。近心頬側咬頭・遠心頬側咬頭にごくわずかの咬耗がある。裂溝型は+である。

④第4個体

思春期～青年期前半。歯の計測値を Matsumura⁴ の古墳時代人のそれに照らすと、男性である可能性を示唆している。

a) 左下顎第一大臼歯 (No.50)：近心部分を欠く歯冠部のみが残存する。咬耗はまったく見られない。裂溝型は+である。

b) 左下顎第二大臼歯 (No.49)：近心舌側咬頭の一部と遠心舌側咬頭のを欠く歯冠部の残ったものである。咬頭数は欠損のため不明であるが、おそらく4であろう。咬耗はまったく見られない。

⑤第5個体

青年期後半。歯の計測値を Matsumura⁴ の古墳時代人のそれに照らすと、女性である可能性を示唆している。

a) 右下顎第二大臼歯 (No.4)：歯冠部のみが残存したものである。咬頭数は4で、咬耗はまったくない。裂溝型はXである。

b) 左下顎第三大臼歯 (No.3)：歯冠部のみが残存したものである。咬頭数は4で、咬耗はまったくない。裂溝型はYである。

⑥第6個体

壮年期後半～熟年期。

a) 大臼歯4本 (No.25, No.29, No.39, No.48)：いずれも歯冠部のみが残存したもので、咬耗が著しくマルチンの咬耗度の2～3度まで進み、詳細な歯種推定は困難である。したがって、これら4本の歯が同一個体に属するか否かは明らかでないが、ここでは一応

1個体として扱った。

⑦帰属不明の主な歯

a) 右上顎第二大臼歯 (No.4)：歯冠部のみが残存したものである。咬頭数は3+で、近心舌側咬頭と遠心頬側咬頭にわずかの咬耗がある。上條⁵のIII型に分類され、遠心舌側咬頭が小咬頭化している。近心舌側三角隆線と遠心頬側三角隆線は斜走隆線状を呈している。

b) 左上顎第一大臼歯 (No.2)：頬側縁、近心縁を欠く歯冠部の残存したものである。咬頭数は4で、各咬頭にわずかの咬耗がある。痕跡的なカラベリ―結節および遠心側に辺縁結節が存在する。近心舌側三角隆線と遠心頬側三角隆線は斜走隆線をなしている。

c) 左上顎第一大臼歯 (No.10)：遠心縁を欠く歯冠部の残存したものである。咬頭数は4で、近心舌側咬頭と遠心頬側咬頭にわずかの咬耗がある。上條⁵のI型に分類される。

d) 左上顎第二大臼歯 (No.1)：歯冠部のみが残存したものである。咬頭数は3+で、咬耗はない。上條⁵のIII型に分類され、遠心舌側咬頭が隆線化している。

e) 右下顎第二小臼歯 (No.6)：歯冠部のみが残存したもので、咬耗はない。

f) 右下顎第二小臼歯 (No.24)：歯冠部のみが残存したもので、咬耗はない。

g) 右下顎第一小臼歯 (No.24)：歯冠部のみが残存したもので、咬耗はなく、近心副隆線がわずかに発達している。

h) 右下顎第一小臼歯 (No.33)：歯冠部のみが残存したもので、咬耗はない。

i) 右下顎中切歯 (No.43)：歯冠部のみが残存したも

ので、咬耗はない。

j) 左下顎犬歯 (No.42) : 歯冠部のみが残存したもので、咬耗はない。

k) 左上顎第一小臼歯 (No.3) : 歯冠部のみが残存したもので、咬耗度はマルチンの1度である。頰側三角隆線の両側に弱い副隆線を見る。近心辺縁溝があり、この溝が近心面に及んでいる。遠心側にも弱い辺縁溝がある。痕跡的に介在結節が存在するが、上條⁵によれば、介在結節の出現率は少ない。

1) 上顎小臼歯 (No.5) : 歯冠部の破片である。咬耗度はマルチンの1度である。

2. 1号墳の人骨・歯

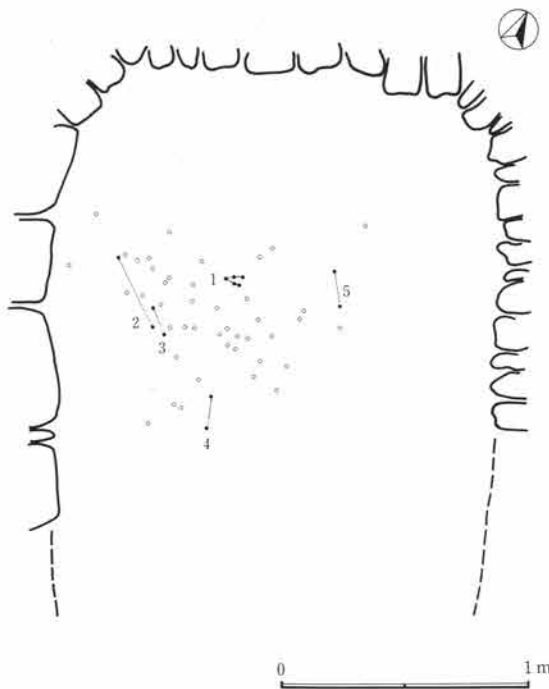
1号墳の石室壁体中から鉄鏃や鉄製耳鈴輪とともに人骨片が出土した(本書の36頁参照)。骨片は頭蓋骨の錐体部1片と四肢骨(脛骨?)片であり、四肢骨表面には人骨に特有な骨軸方向に平行な細かい条線が観察される。

また床面の土をふるい分けによって、一片の歯冠

部の破片と数片の肢骨小片が得られた。歯の咬耗度はマルチンの2~3度まで達している。

引用文献

1. 藤田恒太郎 (1949). 「歯の計測基準について」『人類学雑誌』 61.27-32.
2. 桐野忠太 (1976). 『歯の解剖学』東京.
3. Schour. I. & Massler. M.(1944). Development of the human dentition. 2nd edition. American dental association. Chicago.
4. Matsumura. Y.(1990). Geographical variation of dental characteristic in the Japanese of the protohistoric Kofun period. Journal of the anthropological society of Nippon. Vol. 98. No4.439-450.
5. 上條雅彦 (1962). 「日本人永久歯の解剖学」.



3号古墳人歯の接合状態図

2. 埴輪の鉱物学的研究

群馬大学教育学部 吉川 和 男

1. はじめに

かつて遺跡出土土器について鉱物学的研究を行い、その結果の一部を報告した(吉川、1987)。ここでは、土器を人工的に作られた岩石とみなし、その特徴を鉱物学的に記述することを試みた。

偏光顕微鏡、X線回折法を用いて、土器構成物の種類、特徴、量比および構成物相互の空間的關係(組織)などを調べることで、原土の特徴付けおよび土器製作法や原土の産地などの推定に有力な情報を提供することが期待される。このような観点から、過去においても土器を偏光顕微鏡で観察したり、X線回折法による検討が試みられてきた。この他にもさまざまな理化学的方法が土器研究に取り入れられてきているが、上記目的のためには、偏光顕微鏡およびX線回折法が比較的簡便であり、かつ、最も基礎的な情報を提供するものとする。

今回、従来の土器以外に、遺跡出土の埴輪片を調べる機会を与えられた。それらの外観の観察、偏光顕微鏡観察、およびX線回折法による検討を行っているが、それらの研究結果の概要を報告する。

II. 研究試料

本研究で用いた試料は、多野郡吉井町神保下條遺跡より出土の埴輪片4片である。出土地点等を次表に記す。

研究試料の出土地点

試料	出土地点	時代・時期	備 考
A-1	2号古墳南西側	古墳時代後期	人物A群 上着裾
A-2	〃	〃	人物A群 基部上端
B-1	〃	〃	人物B群 首つけ根
B-2	〃	〃	人物B群 頭頂部

III. 研究方法および結果

埴輪片A-1、A-2、B-1、B-2を肉眼および実体顕微鏡によって概観したところ、A-1とA-2、B-1とB-2はそれぞれ外観の色のわずかな相違以外は類似している。そこで、人物A群の埴輪片A-1と人物B群の埴輪片B-2について、肉眼および実体顕微鏡による外観の観察、薄片の偏光顕微鏡観察、および粉末X線回折法による検討を試みた。

(1) 試料の外観的特徴

埴輪片A-1とB-2を実体顕微鏡で観察した。両者には埴輪片の色に相違がみられるが、構成物の種類は同じである。

両埴輪片とも表面には細長い細孔が多数認められる。この細孔は埴輪片の断面でよりはっきりみられる。両埴輪片とも細孔はほぼ外形に平行に配列している。埴輪片中の細長い構成物の長軸も外形にほぼ平行配列しているようにみえるが、そうでないものもある。

埴輪片は肉眼または実体顕微鏡で識別できる大きさの構成物とそれらの間を埋める極細粒の物質とからなる。構成物の大きさは最大径約3mm以下である。比較的大きな構成物はほとんどが岩石片で、いずれも丸味を帯びている。まれに、径2mm程度の石英(高温型石英の仮像をなす)がみられる。この他に、長径3mm以下の赤褐色、褐色、黒褐色などの円形から楕円形をなす構成物が全体に散在し、ひとつの特徴をなしている。この部分は一般に土状できわめて軟らかい。以下に主な構成物の特徴を記す。

岩石片 岩石片には白色、乳白色、暗灰色、および灰緑色を呈するものがあり、また、緻密なものやや粗粒な結晶からなるものがある。これらの多くは変成岩(片岩)と思われるが、白色緻密な岩石片はチャートもしくは、石英脈などの破碎円磨されたものかもしれない。

鉱物片 岩石片に比べ、鉱物片は全般に細粒である。鉱物片として存在する鉱物は、石英、長石、角閃石、輝石、不透明鉱物および緑レン石用鉱物である。石英は径2mm以下で、無色透明、劈開はなく、多く

は高温型石英の仮像もしくはその破砕片である。

長石は約0.5mm以下で、無色透明または多少白濁しているものもみられ、完全な劈開が認められる。

角閃石は長径1mm以下の黒緑色長柱状結晶で劈開がよく発達している。

輝石も長径1mm以下で黄褐色から淡黄褐色柱状結晶で、劈開は一般にそれほどはっきりしない。

不透明鉱物は約0.5mm以下で、黒色粒状である。

緑レン石様鉱物は約0.5mm以下で、淡灰緑色を呈する粒状鉱物(多くは破砕片)である。

(2) 偏光顕微鏡による観察

埴輪片A-1およびB-2の一部を切断し、断面部の薄片を作成した。薄片中に、埴輪の外形にほぼ平行する細孔の存在をみることができる(第1図)。両試料とも、比較的大きな岩石片および鉱物片とそれらの周囲を埋めている微細な基質とからなっている。以下に各部の特徴を記す。

基質部 全体として淡黄褐色から黄褐色を呈し、鉱物の微細な破砕片やガラス様物質(ほとんどが生物起源の珪酸質のものであろう)とそれらの間を埋めるさらに微細な葉片状物質からなる。

岩石片 大きさは3mm以下で、砂あるいは細礫として存在し、いずれも円磨されている。全般的に変成岩に由来する岩石片が多く、他にチャート様岩石片および火山岩片が少量みられる。また、赤褐色から暗褐色の円～亜円砂礫が散在している。

(i) 変成岩片：円形～楕円形の片岩片である。細かな砂礫のため、個々の岩石片における鉱物構成はさまざまであるが、主要な構成鉱物は、石英、斜長石、雲母、緑レン石および角閃石(おそらく陽起石)であり、他に微細な黒色不透明鉱物も時にみられる。白雲母のみの砂礫もまれにみられ、このようなものは部分的に淡黄褐色に着色されている。また、角閃石のみからなる岩石片もあり、個々の角閃石の結晶はその周辺部から褐色に着色されはじめている(第4図)。変成岩起源の砂礫を第2図、第3図および第4図に示す。

(ii) チャート様岩石片：円～亜円砂礫で、極微細

(数 μm 以下)な他形の石英の集合体よりなり、部分的に数十 μm の比較的粗粒な石英が脈状に入っている。この石英は一般に波動消光する。本岩石片は変成岩中などに貫入した石英脈の破砕円磨されたものかもしれない。第5図に本岩石片の一例を示す。

(ii) 火山岩石片：円～亜円砂礫で、一般に変質が甚だしく、時に短冊状自形の斜長石のみられるものもある。この場合、斜長石の大きさを異にする岩石片がみられることから、あるいは何種類かの火山岩片が混在しているのかもしれない。この種の岩石片はそれ自体細粒であり、主に火山岩の石基の部分を示すものと考えられる。第4図に本岩石片の一例がみられる。B-1中にはこの他に、ガラス質で内部に斜長石および輝石の長柱状結晶を有し、気泡を含む岩石片が1個みられた(第6図)。大きさ約0.3mmで角張っており、火山起源のものと考えられる。

(iii) 赤褐色～暗褐色砂礫：円～亜円砂礫で薄片全体に散在している。長径数mm以下である。内部に径0.1mm以下の鉱物片を含むことが多い。この鉱物としては斜方輝石(自形ないしその破砕片)、雲母様鉱物、長石様鉱物であり、他に岩石片のようなものもみられる。これらは一般に微細で、また、赤褐色に着色されているため、鉱物種の判定は困難なものが多い。この赤褐色砂礫の中には、変成岩起源の砂礫が赤褐色に変質したと考えられるものがあり、また、磁石に対し弱い反応を示すものもある。本岩石片の一例を第7図に示す。

鉱物片 単独の鉱物片として存在するものを、量比の順に記すと、石英、斜長石、角閃石、斜方輝石、緑レン石およびアルカリ長石となる。これらのうち、石英と斜長石が非常に多く、角閃石と斜方輝石がほぼ等量あり、アルカリ長石は極めてまれにみられる。以下に各鉱物の特徴を記す。

(i) 石英：無色透明、低屈折率、低干渉色の鉱物で、包有物の有無により2つのタイプに分類できる。

- a. 包有物をほとんど含まないもの…高温型石英の形態を一部にとどめる破砕片が多く、おそらく火山灰起源であろう。このタイプのものには、

時に、その内部に微細(数 μm)な六角形のネガティブクリスタル(negative crystals)を有するものがある。

b. 包有物を多く含むもの…包有物として雲母および緑レン石がみられる。このタイプの石英は一般に波動消光し、また、鉱物片は丸みを帯びていて、円磨されたことを示している。おそらく変成岩起源のものであろう。

(c) 斜長石：無色透明、低屈折率、低干渉色で1~2方向の劈開がみられるものが多い。一般に0.4mm以下で、塵状の細かい汚れを含むものもある。石英同様、包有物によって2つのタイプに分類できる。

a. 包有物をほとんど含まないもの…角~亜角状の破砕片がほとんどである。一般に双晶や累帯構造がみられる。時に、その内部にネガティブクリスタルがみられることがある(第8図)。このタイプのものは火山岩(火山灰?)起源であろう。

b. 包有物を多く含むもの…包有物は雲母および緑レン石である。このタイプの斜長石は鉱物片全体が丸みをおび、円磨されたことを示している。変成岩起源のものであろう。

(d) アルカリ長石：無色透明、低屈折率、低干渉色で、離溶ラメラがみられ、パーサイトである。結晶内には部分的に塵状の物質がみられる。鉱物片は破砕片であり、丸みを帯びている。

(e) 角閃石：灰緑色~緑褐色の顕著な多色性を示す。一般に1~2方向の完全な劈開を示すが、微細結晶片では劈開の認められないものもある。長柱状の自形結晶ないしその破砕片として存在し、0.15mm以下のものが多い。高屈折率、高干渉色で斜消光し、双晶をなすものもある。

(f) 斜方輝石：淡黄緑色で弱い多色性を示す。高屈折率、低干渉色で直消光し、一般に1~2方向の劈開がみられる。長柱状自形結晶およびその破砕片として存在し、1.0 \times 0.3mm以下である。

(g) 緑レン石(?)：淡黄緑色から淡黄褐色の弱い多色性を示す。高屈折率、高干渉色で斜消光し、

二軸性(おそらく負号)結晶である。時に1方向に弱い劈開がみられることがある。X線回折法で緑レン石と同定された。しかし、中には多色性が認められず、2方向に弱い劈開らしきものが見られる小片(0.07mm以下)もあり、これも緑レン石なのか、あるいは普通輝石であるのか、判定のつかないものもあった。

(h) 不透明鉱物：四角形、長方形、不定形を示す不透明鉱物が薄片全体に見られる。0.2mm以下のものが多く、量的には多くない。

(i) ガラス様物質：無色透明できわめて屈折率が低く、光学的等方体もしくはそれに近い性質を示す物質が薄片全体にわたってかなり多くみられる。大きさは普通最大でも0.1mm(100 μm)程度で、多くは20~40 μm である。形態は種々あり、円形~楕円形、方形、不定形などがみられる。周縁部はなめらかなものもあるが、多くはギザギザしており、中央部に円形の空孔をもつものが多い。バブルウォール型の火山ガラスとは明らかに異なるものも多く、生物起源の珪酸体の可能性も考えられる。第9図に一例を示す。

(3) X線回折法による検討

顕微鏡で観察できない微細な構成物を同定し、かつ埴輪片の平均的鉱物構成を調べるために、粉末X線回折法による検討を行った。

X線用試料には薄片作成時の二次切断による切断粉末を用いた。この二次切断時の粉末を利用することで貴重な試料の有効活用ができ、さらにまた、これによって、顕微鏡観察部周辺の鉱物構成が明らかにでき、顕微鏡とX線の両方法によるそれぞれの情報を対応させることが可能となる。

X線回折実験はディフラクトメータ(リガク社製、RAD-2VC)を使用し、モノクロメータにて単色化されたCuK α 線を用いた。粉末試料は浅型のガラス試料板に埋め込んで測定に供された。ただし、試料が微量の時は石英無反射試料板を用いた。スリット系は1 $^{\circ}$ DS-0.15RS-1 $^{\circ}$ SS、スキヤニングスピードは2 $^{\circ}$ (2 θ /min)、サンプリング間隔は0.02 $^{\circ}$ (2 θ)である。

回折線の測定範囲は $2\theta=1.5^{\circ}\sim 70^{\circ}$ である。

埴輪片A-1、A-2、B-1、B-2の4試料の粉末X線回折パターンを第10図に示す。これより、主要な構成鉱物の種類はどれもほぼ同じであることがわかる。これらの主要構成鉱物は、石英、斜長石、クリストバル石(?)、角閃石、白雲母、赤鉄鉱(?)である。斜方輝石の主要回折線は他の鉱物のそれらと重複するものが多く、このパターンだけからではその存在の確認はむずかしい。なお、 $d=4.5\text{\AA}$ ($2\theta=19.6^{\circ}$)周辺に、上記鉱物のいずれとも対応しない回折線がみられる。现阶段ではこの回折線の特定はできていない。

第11図にはB-2より分離した白雲母を含む変成岩片の粉末X線回折パターンを示した。これより、この変成岩片の主要構成鉱物は石英、長石、白雲母である。

第12図にはB-2より分離した変成岩起源と予想される赤褐色球状砂礫の粉末X線回折パターンを示した。これより、この試料は角閃石(おそらく陽起石)、石英、長石を主とし、他に磁鉄鉱および赤鉄鉱を含むと考えられる。

第13図にはA-1およびB-2の一部を粗砕し、200メッシュの篩でふるい分けた細粒部のX線回折パターンを示す。これを第10図中の同一埴輪片(A-1およびB-2)のパターンと比較すると、両者とも構成物の種類は同じである。しかし、鉱物間の相対的な強度比をみると、200メッシュ以下の試料の方が相対的にクリストバル石(?)の回折線($2\theta=21.9^{\circ}$)の強度が強くなっている。

IV. 考 察

(1) 人物A群および人物B群の埴輪の構成物の特徴

今回提出された埴輪片A-1、A-2、B-1、B-2の4試料について、外観の観察、偏光顕微鏡観察、粉末X線回折法による検討を行った。A-1とA-2、B-1とB-2はそれぞれ外観の特徴が似ているため、A-1とB-2の2試料を中心に観察および実験を行った。

埴輪片A-1とB-2の主要構成物の種類や量比は、今回の研究範囲内では、両者とも基本的には同じである。また、A-1とB-2それぞれに色むらがみられるが、色むらと主要構成物の特徴との間にも、今回、特に有意な相違は見いだせなかった。ただ、これらの試料中に特徴的に含まれる赤褐色～暗褐色球状物質の色に多少の相違がみられ、表面が赤褐色を呈する部分のものはより赤色が濃く、逆に、表面が灰褐色の部分のものは赤色を呈さずに褐色になる傾向がみられる。

今回研究に用いた埴輪片A-1とB-2に共通してみられる特徴は、変成岩起源の岩片がきわめて多く含まれていて、逆に、それ以外の岩石片、特に、火成岩起源の岩石片が少ない点にある。しかも、その変成岩片の多くは石英—長石—白雲母—緑閃石を主体とした片岩と考えられ、この点は本埴輪の原土の産地の特定のための有力な情報となるであろう。

また、偏光顕微鏡観察によれば、本研究試料中に、高温型石英の形態を示す石英、双晶や累帯構造の顕著な斜長石、普通角閃石および斜方輝石がみられ、これらはいずれも自形結晶ないしその破砕片として存在し、しかも全体的にかなり角張った破面を有している。これより、これらの鉱物は火山灰起源であることも考えられる。しかし、他方では、火山灰中によくみられる火山ガラスや軽石質岩石片の存在がこれまでのところほとんど確認できていない。この点も一つの特徴といえるであろう。

さらに、本埴輪片中の石英や長石には、起源の異なる二つのタイプがあり、それらが混在していることも大きな特徴である。

(2) 埴輪片中のクリストバル石について

クリストバル石の判定 埴輪片A-1、A-2、B-1、B-2の4試料すべてから、粉末X線回折法によってクリストバル石の回折線と思われるピーク($d=4.05\text{\AA}$ 、 $2\theta=21.9^{\circ}$)がみられた(第10図)。クリストバル石による回折線はこの他にも存在するはずであるが、それらは一般に強度がきわめて弱く、このため多くの場合、クリストバル石の同定は最強線である

$d = 4.05 \text{ \AA}$ のピークの存否で行われる。しかし、このすぐ低角度側には斜長石の回折線が現れる。従って、斜長石を多量に含み、クリストバル石を少量しか含まない試料では、クリストバル石の存在の確認はきわめてむずかしい。今回の研究では、試料中の斜長石の回折線はそれほど強くなく、むしろ $d = 4.05 \text{ \AA}$ の回折線がかなり強く、かつ、その低角度側に斜長石によると思われる回折線が確認されている。また、この付近に回折線を生ずるような鉱物の存在が顕微鏡観察で確認されていない。これらのことから第10図中の $d = 4.05 \text{ \AA}$ の回折線をクリストバル石によるものと判断した。

クリストバル石の存在状態と焼成温度について一般に、土器中のクリストバル石やムライトの存在は、土器の高温焼成を意味すると考えられている。これは、それらの鉱物が一般に高温下でのみ形成されることによる。

しかし、土器中のそれらの鉱物の存在が、即、高温焼成を意味するわけではない。それらの鉱物が、原土中には存在せず、焼成の結果、新たに形成されたことが確認される必要がある。もっとも、ムライトは天然環境下ではきわめて稀産の鉱物であり、この点を考慮すれば、土器中のムライトの存在はそのまま高温焼成と対応させて考えることも可能かもしれない。しかし、クリストバル石はかなり広い産出が知られている鉱物であり、原土中にも存在しうる可能性をもつ鉱物である。従って、土器中にクリストバル石の存在が確認されたときは、それが焼成の産物であるか否かの検討が必要となり、このために土器中のクリストバル石の存在状態の解明が重要な意味をもつことになる。

今回研究の埴輪片中には、クリストバル石を含む岩石片は見い出されていない。また、B-2の試料の一部から分離された200メッシュ以下の細粒部のX線回折パターン中にもスリストバル石の回折線がみられる(第13図)。しかも、石英や長石の回折線の強度をもとに考えると、むしろ200メッシュ以下の細粒部に多く含まれていると考えられる。偏光顕微鏡観

察によれば、薄片中に20~40 μm 以下のガラス用物質が散在している。もし、これが生物起源の珪酸体であるとする、この物質が、焼成の結果、クリストバル石に変化した可能性もある。それらの物質は微細なため、これまでのところ、それらの物質のみを分離して取り出すことには成功していない。今後の検討課題である。

V. おわりに

神保下條遺跡より出土の埴輪は、考古学的には、人物A群および人物B群の2つに区分される。しかし、本報告でみられるように、今回研究の埴輪片はその構成物の特徴からみるといずれも同じ原土を用いたか、あるいはきわめて類似した原土を用いて製作されたものと考えられる。

今回の研究結果は、研究に供された試料が埴輪全体の極く一部であり、しかも、それより岩石薄片を1~2枚作成して行った結果であり、これだけで個々の埴輪の特徴を論ずるには無理があるかもしれない。一個体の埴輪全体を研究対象とすることが望ましいが、一方では、最少量の試料で必要な情報を獲得することも要求される。そこで、少なくともまず最初に、構成物の均一性に重点をおいて各埴輪全体の外観的特徴を観察し、その後、薄片作成やX線回折実験用などの試料の取り出し部分を定めることが必要であろう。

また、今回の埴輪片は、埴輪全体の一部であることに加え、A-1、A-2、B-1、B-2がすべて埴輪の異なる部分でもある。一個の埴輪の製作がすべて同一原土でなされるならば、どの部分を研究試料としても問題ないが、もし、一個の埴輪内で原土を使い分けていたとすると、研究結果の解釈にはその点の考慮も必要となる。

本研究では、主に実体顕微鏡、偏光顕微鏡、粉末X線回折法を用いて、埴輪片の特徴付けを試みた。本報告にみられるように、それぞれの方法がそれぞれに特徴をもっていることがわかる。

偏光顕微鏡による研究は観察粒子の大きさが0.01mm程度以上であれば可能であり、量の多少は問題で

はない。また、顕微鏡による研究では、構成物間の空間的關係(組織や構造)を直接目で確認できることも大きな利点である。

他方、X線回折法による研究では、試料が超顕微鏡的な微細結晶でも研究できるが、ある程度以上の量を必要とする(試料の量は目的・測定方法によるが、ディフラクトメータを使用する場合、通常数mg以上を必要とする)。また、結晶性を示さない物質についての情報も一般には得にくい。

このように、上記両方法で得られる情報には質的相違があるため、鉱物学の分野では一般に両方法が併用される。埴輪や土器も人工的に作られた岩石とみなせば、これらの研究にも上記両研究方法の併用が必須であろう。

しかし、X線回折法は今日では比較的容易に利用しうようになったとはいえ、装置の設置・維持・管理や複数鉱物の混在する試料の測定結果の解析などを考えると、日常的な利用はかなり制限されることになるであろう。これに対し、偏光顕微鏡による研究は、極微細な基質部の研究は大きく制約されるが、比較的粗粒な構成物については、時に、X線回折法による情報以上のものを提供してくれる。例えば、今回の研究試料において、X線回折法でも石英の存在は確認できるが、その石英が起源的にみて2種類に区分できることなどの情報はとうてい得られない。しかるに、この種の情報は土器の原土を考えていく上できわめて重要なものである。また、偏光顕微鏡によれば、焼成とうによる鉱物のわずかな変化(例えば色の変化など)も観察できることもある。研究経費の面からみても、X線回折法と比べれば、はるかに安価であろう。従って、埴輪や土器の研究において、まず偏光顕微鏡による観察を行い、それをもとに、必要に応じて、X線回折法をはじめ他の種々な研究方法を取り入れていけば、それらによる

測定結果の解釈もしやすく、またそれらのより有効な活用が可能となるであろう。

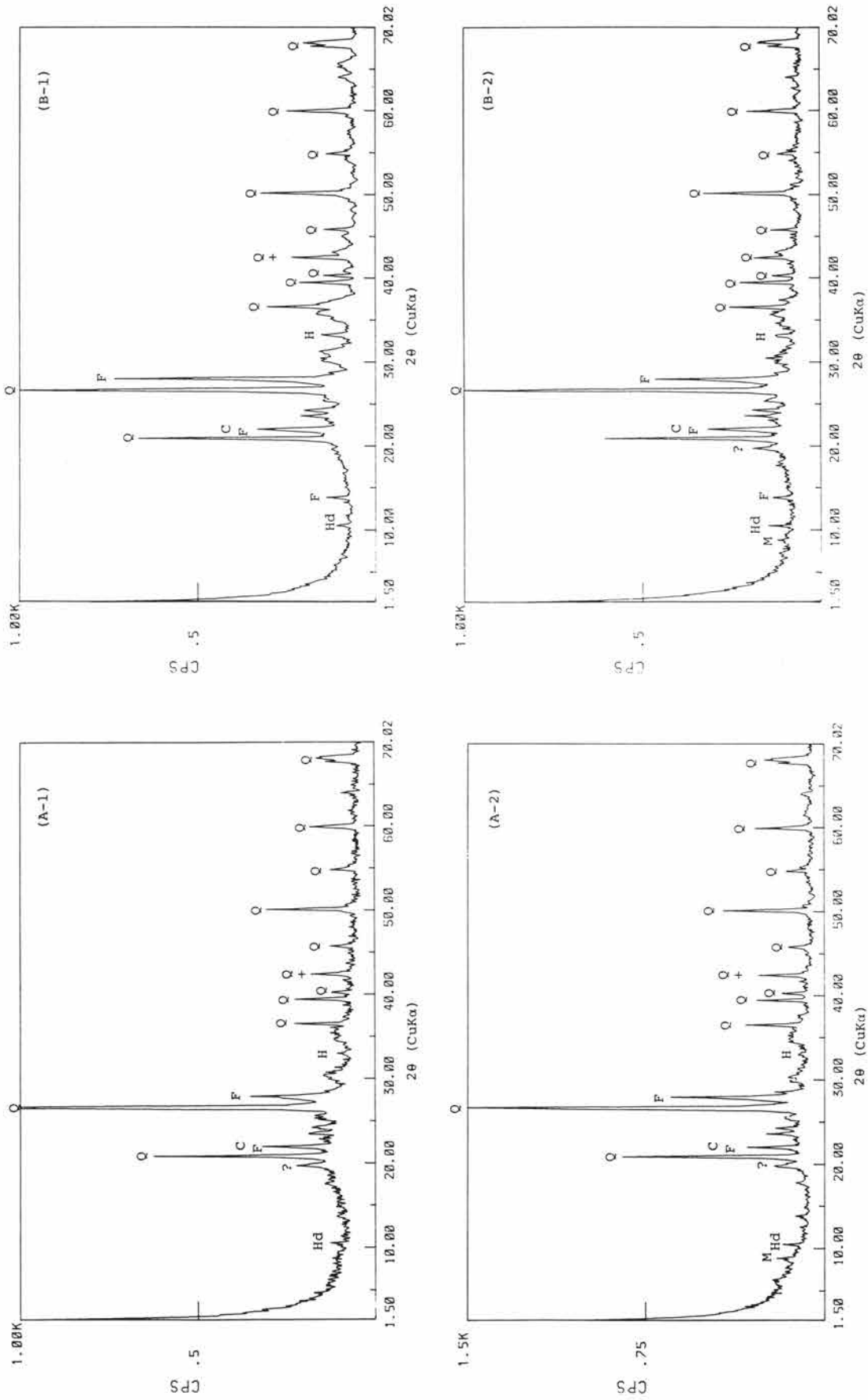
いずれにしても、色々な問題はあがあるが、今回の研究結果でわかるように、1枚の顕微鏡用薄片と薄片作成時に生じる微量粉末試料だけからでも、多くの情報が得られ、その構成物からみた埴輪の特徴付けが可能である。今後、この種の研究結果が数多く積み重なっていくことで、考古学へのさらに大きな貢献も期待できるのではないだろうか。

最後に、埴輪という貴重な考古学試料を今回の研究に提供して下さった右島和夫氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)および、考古学的な情報の提供等、研究全般にわたり、研究の便をはかっていただいた飯島義雄氏(群馬県埋蔵文化財調査事業団)に感謝致します。

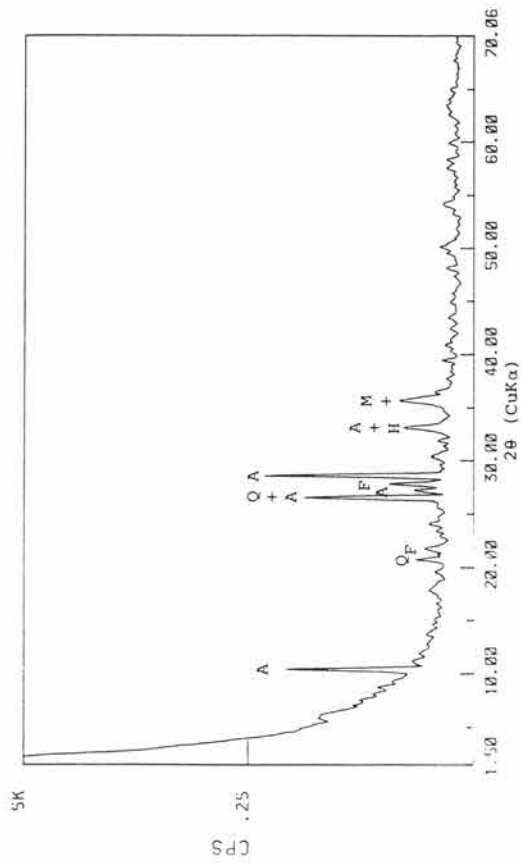
なお、本報告中では関連研究論文の引用は省略してあります。今回の研究をすすめるにあたり、主に下記文献を参考に致しました。

引用文献

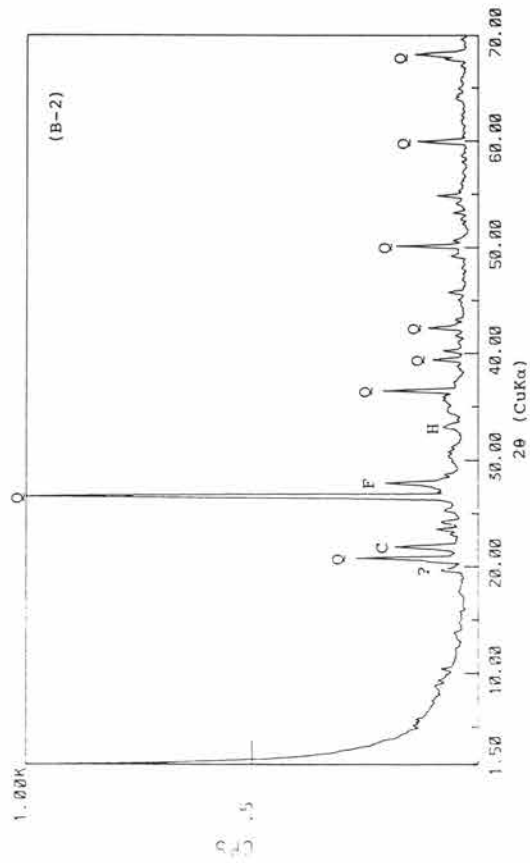
- 矢野哲也・大場孝信(1984)「岩石学的方法による土器の分類と製作地推定の試み」『北方文化研究』16 125-163
上條朝宏(1983)「胎土分析Ⅰ」『縄文文化の研究』5 雄山閣 47-67
大沢真澄・二宮修治(1983)「胎土の組成と焼成温度」『縄文文化の研究』5 雄山閣 20-46
清水芳裕(1973)「縄文時代の集団領域について—土器の顕微鏡観察から—」『考古学研究』19-4 90-102
清水芳裕(1982)「縄文土器の自然科学的研究」『縄文土器大成』1 講談社 152-158
清水芳裕(1983)「胎土分析Ⅱ」『縄文文化の研究』5 雄山閣 68-86
WILDING, L.P., SMECK, N.E. and DRESS, L.R. (1977) Silica in soils: Quartz, Cristobalite, Tridymite, and Opal. In: ed.
DIXON, J.B. and WEED, S.B., Minerals in Soil Environments, Soil Sci. Soc. America, 471-552.
吉川和男(1987)「出土土器の鉱物学的研究」『行幸山田遺跡本文編Ⅱ 浜川市教育委員会・群馬県企業局・日本道路公団 544-559



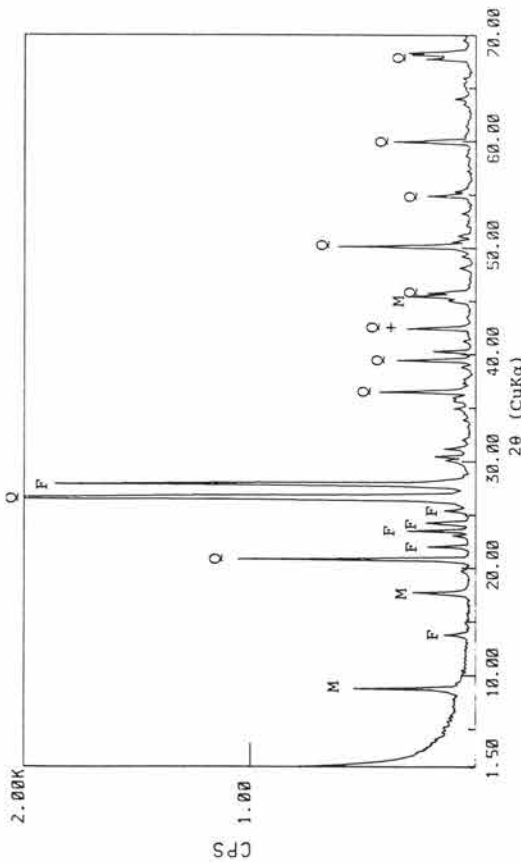
第10図 埴輪片 (A-1, A-2, B-1, B-2) の粉末X線回折パターン
 Q:石英 C:方解石 H:角閃石 F:斜長石 Hd:斜長石 M:白雲母 H:赤鉄鉱(?)



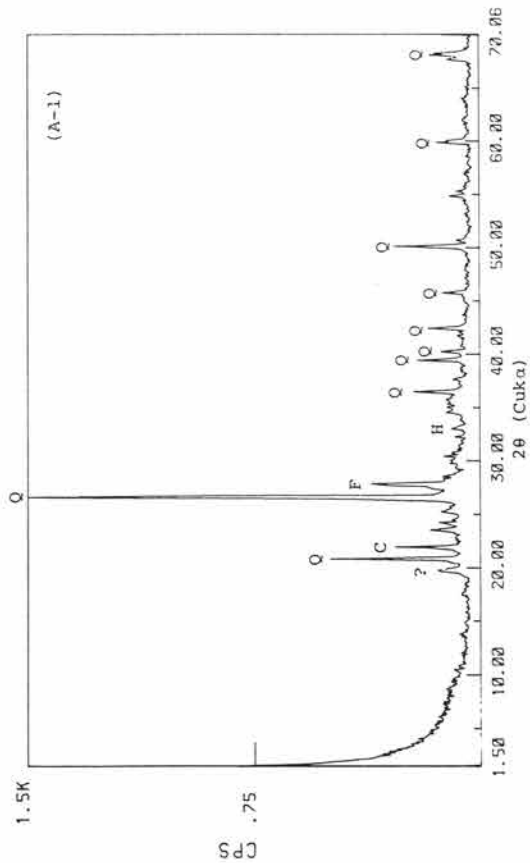
第12図 堆輪片 (B-2) 中の赤褐色球状砂礫の粉末X線回折パターン
A: 角閃石 Q: 石英 F: 斜長石 H: 赤鉄鉱(?) M: 磁鉄鉱



第13図 堆輪中の細粒部 (<#200) の粉末X線回折パターン 左: A-1 右: B-2
Q: 石英 C: クリスタバル石 F: 斜長石



第11図 堆輪片 (B-2) 中の変成岩片の粉末X線回折パターン
M: 白雲母 Q: 石英 F: 斜長石



第13図 堆輪中の細粒部 (<#200) の粉末X線回折パターン 左: A-1 右: B-2
Q: 石英 C: クリスタバル石 F: 斜長石

3. 分析結果について

(1) 下條1・3号古墳出土人歯骨の分析結果について

宮崎重雄氏の分析により、3号古墳の石室には、最低6人が埋葬されていたことが推定された。その構成は、25±3才の女性、27±3才の男性、25±3才の性別不明、12±2才の男性、18±2才の女性、30才以上の性別不明の6人である。

ところで、これら6個体の歯について、出土位置との相関を表したのが宮崎氏の報文の末尾に掲載したものである。各個体ごとにまとまりを持った位置関係を示していることがわかる。その場合、最終埋葬終了後に攪乱等による移動があまりなかったことを前提とするならば、遺骸は石室主軸方向に沿って、頭を奥壁側にして安置され、追葬された遺骸もこれに並行して安置されたことが推測されてくる。さらに想像をたくましくするならば、奥壁に向かって最も左側に位置する第2個体は、27才±3才の男性であり、最初に葬られた人物（家長）である可能性が考えられ、これに隣合う25±3才の第3個体（性別不明）その妻である可能性が考えられないであろうか。

次に、1号古墳の壁体中から出土した骨は、頭蓋骨の錘体部の破片と四肢骨片であり、明らかに人骨であることがわかった。報文中でも述べたように、その出土状態から、これらが鉄製品とともに壁体中に一次的に置かれたと考えざるをえないのであり、その意味するところについて、今後に残された検討課題は大きいと言えよう。

(2) 下條2号古墳出土埴輪の胎土分析結果について

当事業団の飯島義雄・岩崎泰一・桜井美枝・井上昌美らは、昨年度以来、土器の胎土分析法について共同で研究を進めてきていた。そこでは、群馬大学教育学部助教授の吉川和男氏がかって渋川市の行幸田山遺跡の調査資料について行った分析方法が従来

の一般的分析方法を一步進めた視点を有していることに注目した。そこで、この研究会に指導的立場から吉川氏に加わっていただき、討論を重ねてきた。このことを飯島から聞いた右島は、下條2号古墳の埴輪についても分析を及ぼし、今後の埴輪研究に問題提起をする絶好の機会と考えて、吉川氏に分析を依頼した。

分析がどのような理科学的観点から、どのような方法でなされたかについては、吉川氏の研究に十分尽くされているので、これによられたい。

ここでは、分析資料選定の経緯について簡単に触れておきたい。今回分析の対象とした資料は、下條2号古墳から出土した埴輪4点である。時間的な事情が許せば、点数を多くしたかったことは言うまでもないところである。4点は、報文中でも述べた、明らかに製作者が異なり、さらにその保持している製作手法に差が認められた人物A群と人物B群の破片2点ずつである。分析前の段階に、色調の違いと混入物（吉川氏が赤褐色砂礫と称している）の違いから、使用している土が異なるのではないかと推測したからである。

分析結果からも明らかのように、4点は全く同一の土を使用していることが確認され、肉眼観察の限界を強く示唆する結果となった。吉川氏の研究からも明らかのように、肉眼観察・顕微鏡観察・X線回折等から得られる情報に対しては、様々な解釈の選択肢があることが指摘されており、考古学的な期待から離れた謙虚な科学的姿勢が強く望まれることが明らかになったと言えよう。

考古学的見地からの準備が不十分なままに、分析を依頼したために、下條2号古墳の埴輪理解に十分生かせなかったきらいはある。しかし、従来の分析方法を再検討する役割は果たしたものと思われる。

(右島)

ま と め

最後に、今回調査した神保下條遺跡・天引口明塚の調査により明らかになった点を整理し、あわせて今後の検討課題を挙げてまとめとしたい。

下條1・2号古墳、口明塚2号古墳の調査では、上野地域の古墳時代後期に顕著な、小型古墳における埴輪樹立の様相を具体的に把握することができた。同種の既調査古墳出土の埴輪を再検討することや、今後に予想される同種の古墳での詳細な調査・整理により、地域の全体像がより厚みを持って具体化されるであろう。

一方、埴輪出土古墳地名表の作成により明らかになった莫大な数の古墳の埴輪を、どのような生産体制が支えていたのかを具体的に追及していくことも重要な課題であろう。

下條1号古墳については、古墳の構築過程を理解するための基礎データが多く集積された。その場合、かつて富岡市の田篠上平遺跡の調査で解明された7世紀中葉ないし後半の古墳の構築過程とは大きく異なるものであった。両者の比較検討により、石室構造の変化の過程の背景を明らかにすることが可能になったが、時間と紙数の制約から今回は果せなかった。近い将来に期したい。

下條1号古墳の壁体中から出土した人骨と鉄製品も大きな問題を提起している。石室内にあったものの一部が何らかの作用により壁石内にもぐり込んだとの想定も可能性の一つとしては考えられる。しかし、出土位置、出土状態からは、むしろ、古墳構築過程の途中で意図的に置いたと考えるほうが理にかなっている。その当否はともかくとして、少なくとも今後は、調査後に消滅することが明らかな古墳については、墳丘・石室を構築過程の小単位ごとに除去していくという調査項目が、必要であることは言えよう。また、出土の意義については、人類学・民族学的な視点からのアプローチも要求されよう。

次に、古墳時代前期後葉の神保下條遺跡1号住居跡から出土した鏡・玉類・鉄製品について触れてお

きたい。これらの遺物は、いずれも床面直上からの出土であり、住居に直接伴うものであったことは明らかである。ただし、一ヶ所からまとめて出土したわけではないから、当時一括品としての位置を占めていたものではなかったものと推定される。遺構の遺存状態が悪いため、不明確な部分も多いが、床面の一部に灰のひろがり認められることから、消失住居の可能性も考えられる。

蛇紋岩製の管玉は、この地の南方の山地を形成している秩父古成層に石材が求められる可能性が極めて強いので、入手先も近在に求めることができよう。高崎市下佐野遺跡では、同じ古墳時代前期の比較的規模の大きい玉造り工房址が確認されており、本住居跡出土のものと同じ石材で同一形態の管玉の製造が行なわれていたことが推測される。(女屋和志雄「群馬県における古墳時代の玉作」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)

住居跡からの小型仿製鏡の出土例は、本遺跡の調査終了の直後に、西方の甘楽郡甘楽町天引向原遺跡の同期の住居跡からも確認されており興味深い。

1号住居跡の他に、2軒の同時期のものが隣接して確認されているが、相互の間を特別に区分するような施設はいっさい確認されていない。ただし、他の2軒に較べて住居規模が大型である点は注意されてよい事実であろう。このことは天引向原遺跡例についても同様である。

規模の大小はあるとはいえ、この時期の一般的住居から比較的大型の古墳の副葬品としてもおかしくないような遺物が出土したことは、この時期におけるこの種の遺物の保有形態が具体的にどのようなものであったのかを考えていく上で、基礎的資料の一つになるであろう。

最後に調査に参加された作業員の方々と整理作業を辛抱強く進めてくれた整理補助員の方々の強力なチームワークがあってこの報告書が完成したことを記しておわりとしたい。

写 真 図 版

神保下條遺跡



神保下條遺跡上空より（上が東）

PL 2 遺跡遠景



1 遺跡遠景（西から）



2 遺跡遠景（北から）

1 1号・2号古墳
(調査前、南西から)



2 1号古墳 (調査前、南西から)



3 1号・2号古墳 (南西から)



PL 4 1号古墳



1 墳丘全景 (南から)



2 同上 (西から)



1 墳丘西側埋没状態及び葺石（北から）



2 墳丘北側葺石（北から）



3 墳丘南西側造り出し部（南西から）



4 埴輪列検出作業



5 埴輪列出土状態（北から）



1 墳丘北側埴輪列（北から）



2 列石の外側に立てられた円筒埴輪



3 円筒埴輪出土状態（安定のため礫を入れる）



4 同 左



5 人物埴輪（75）出土状態



6 馬形埴輪脚（85）出土状態



1 石室全景及び閉塞状態（南から）



2 閉塞除去後の石室（南から）



1 羨道から玄室を望む（南から）



2 玄室床面（北から）



3 羨道左壁（東から）



4 玄室左壁（東から）



1 葺石断ち割り状態（墳丘北西側、西から）



2 同丘（墳丘西側、北西から）



3 同上（墳丘北西側、北西から）



4 断ち割りをさらに進めた状態（封土全体が礫であることがわかる）



5 壁石材の背後まで墳丘を除去した断面状態（南から）



6 同左（奥壁寄り、北から）



7 石室の裏込めは頭大の礫と砂礫による



8 同左（砂礫の状態）



1 封土・裏込め除去後（南から）



2 同左（西から）



3 同上（北から）



4 右壁と掘り方（南から）



5 奥壁と掘り方（西から）



6 壁石の解体調査



7 礎地形及び壁基底石（南から）



8 同左（北から）



1 地形の礫と石室床石除去後（南から）



2 壁基底石の設置状況（北東から）



3 堀石の設置状況（西から）



4 壁石除去後（南から）



5 使用石材全容（手前が裏込め・地形礫、奥が壁石）



1 壁体中からの遺物確認状況（北東から）



2 同左（北から）



3 同上近影（鉄鍬が見える）



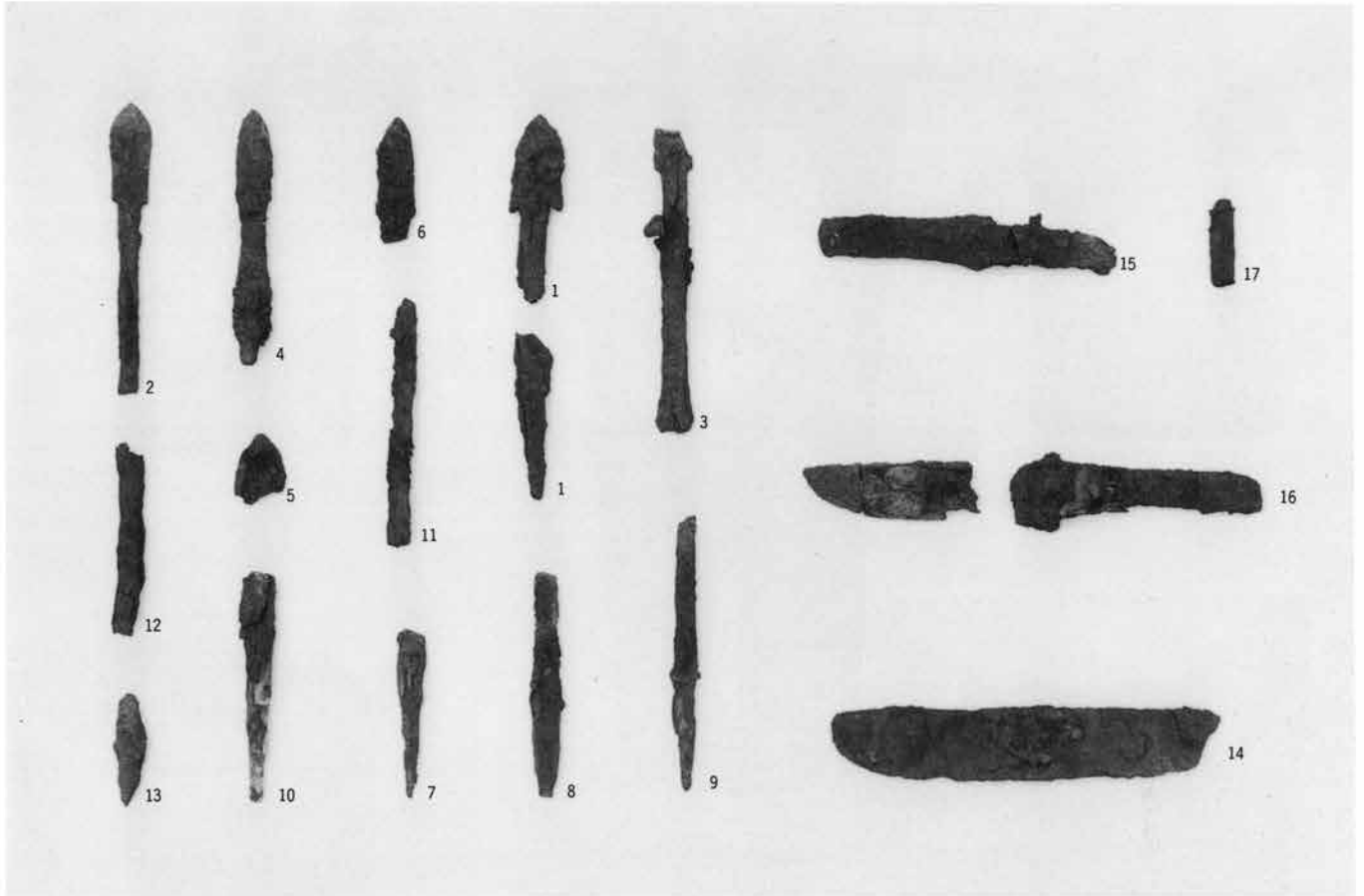
4 人骨出土状態



5 鉄製耳環出土状態



6 右側壁石背後からの鉄鍬の出土



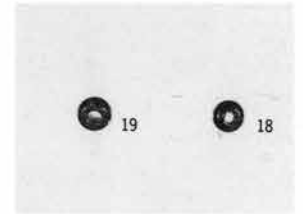
1 1号古墳石室内出土鉄製品



2 1号古墳石室壁体中出土鉄鏃



3 同左耳環

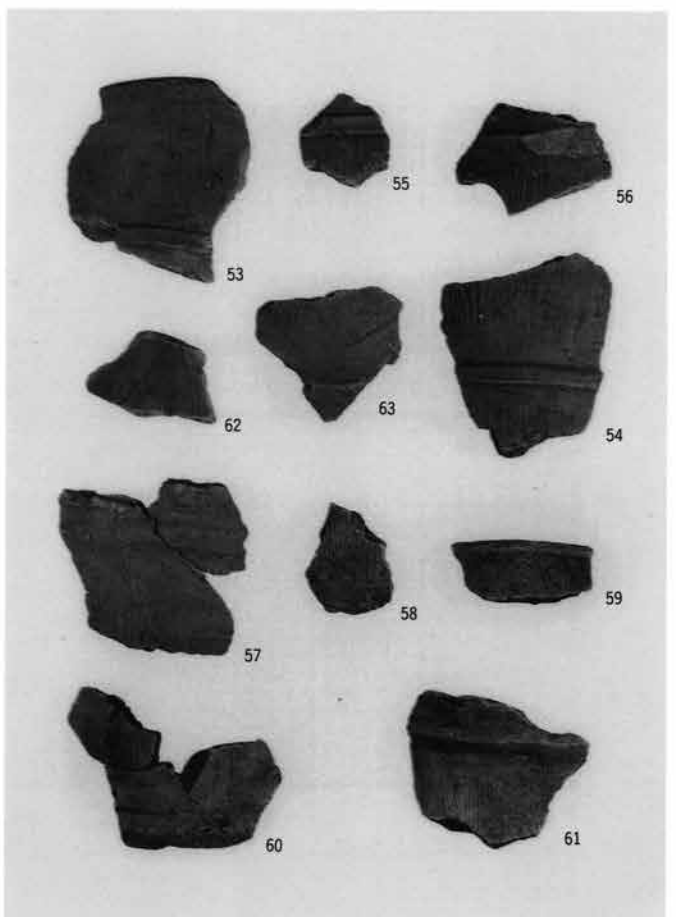
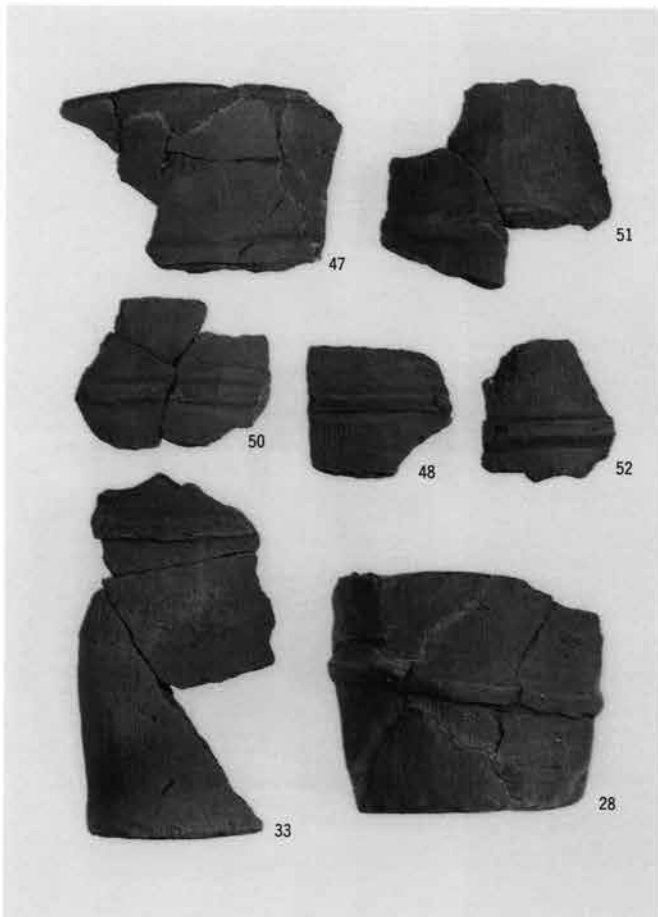
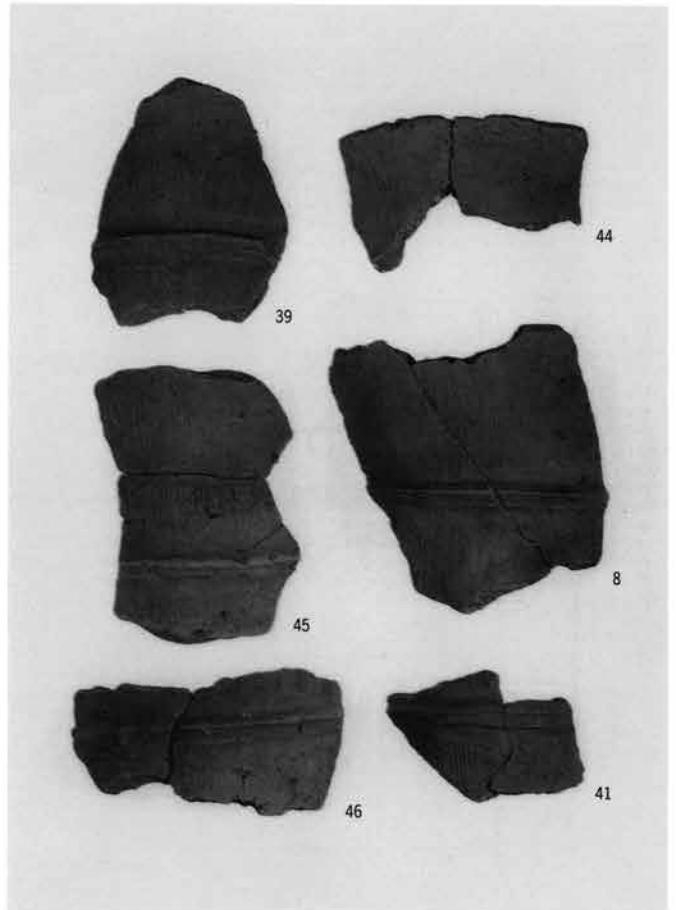
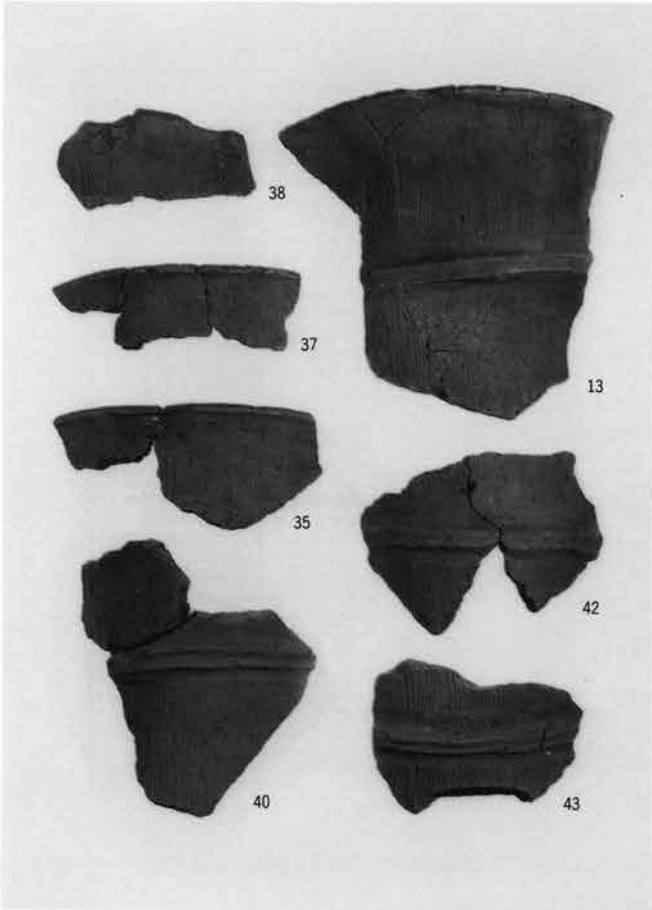


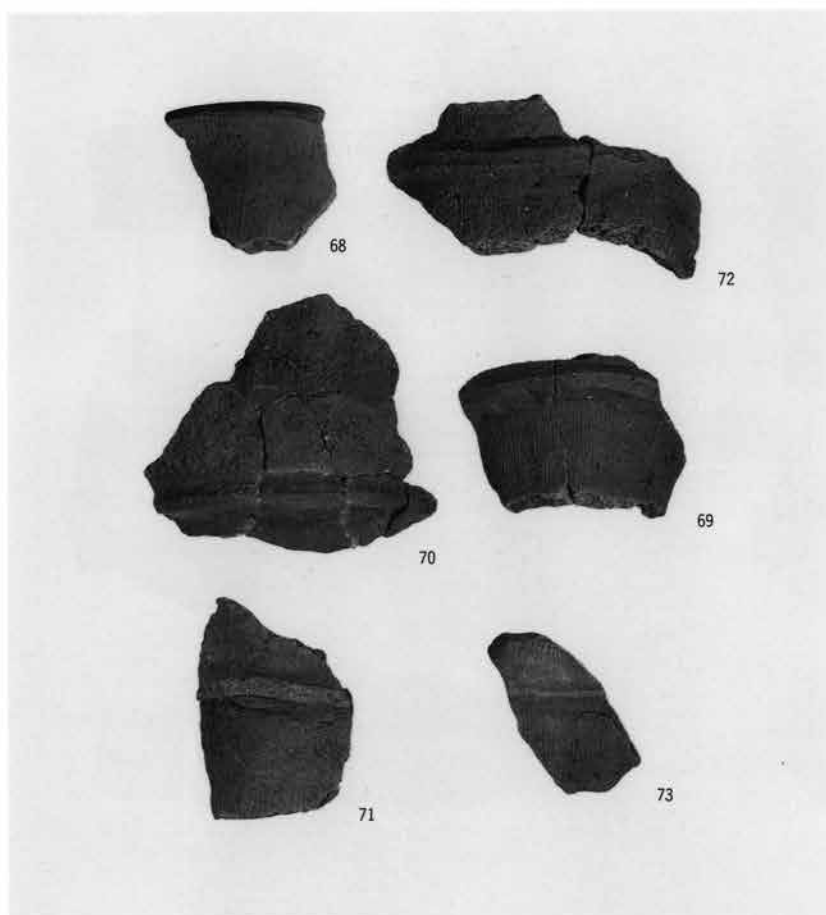
4 同上ガラス小玉







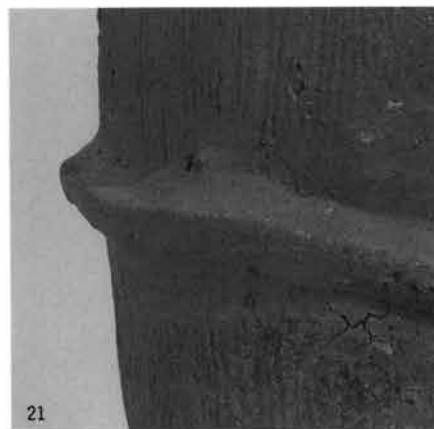




M₁ 凸帯



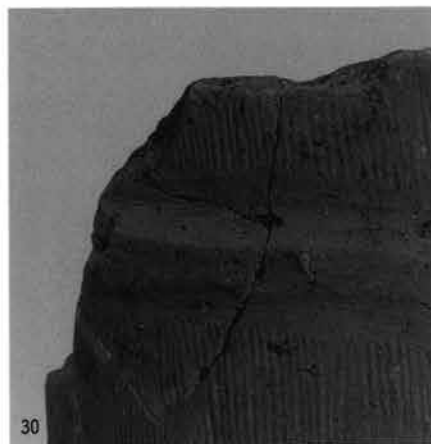
M₂ 凸帯



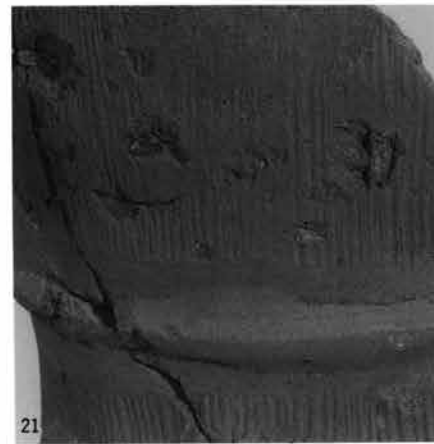
三角 凸帯



台₁ 凸帯



台₂ 凸帯



胎土



透孔

2



透孔

21



基部成形

7



底部

11



底部内面

12



内面

21



内面

3



背面



右側面



正面



顎から首飾り



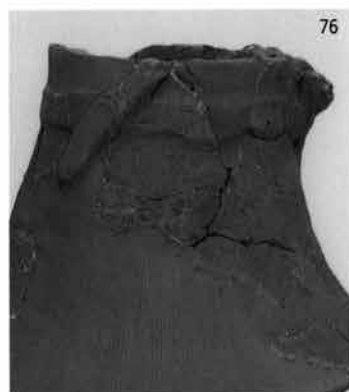
76



腰にあてる手



手の表現



背面の鎌



前足

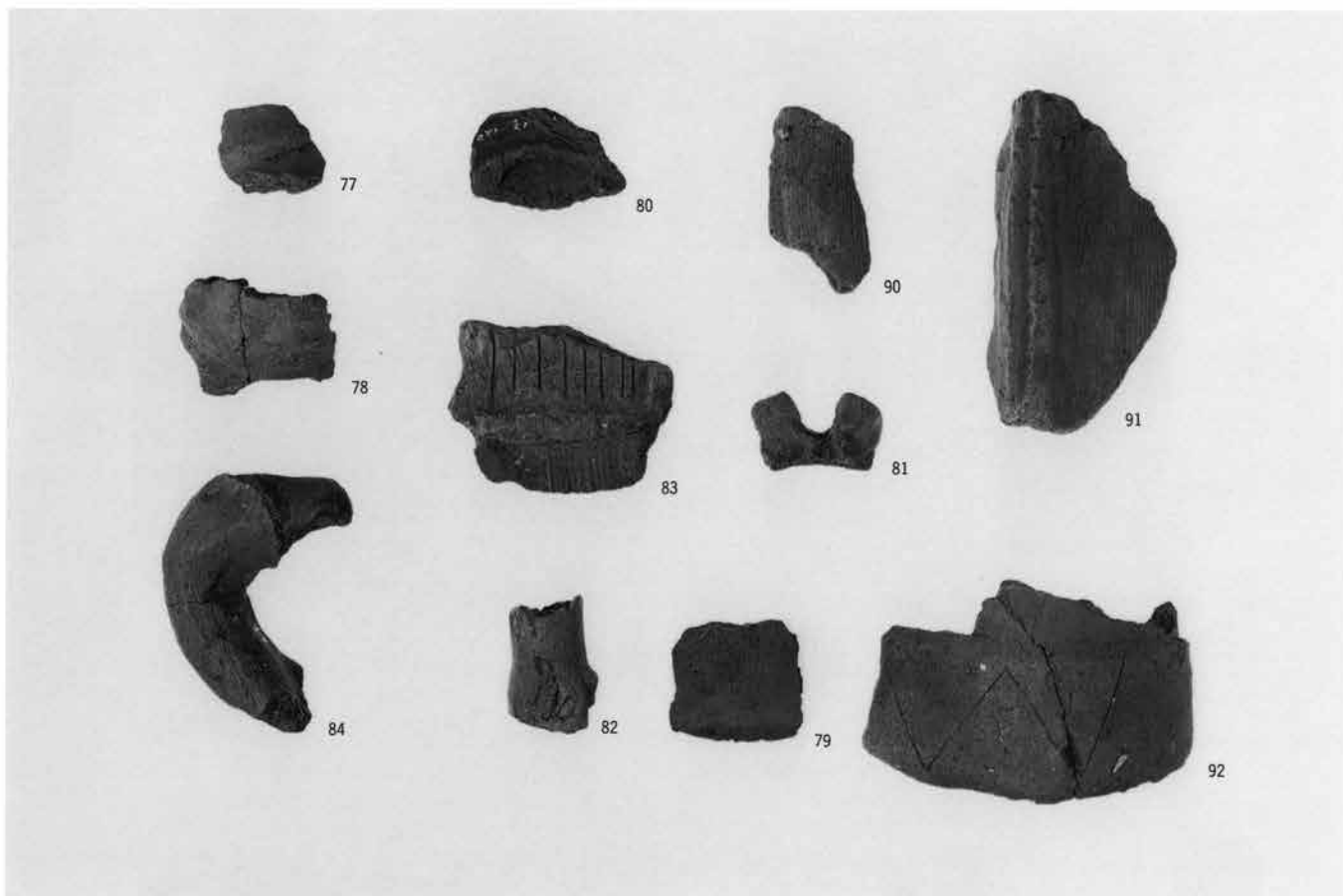
後足



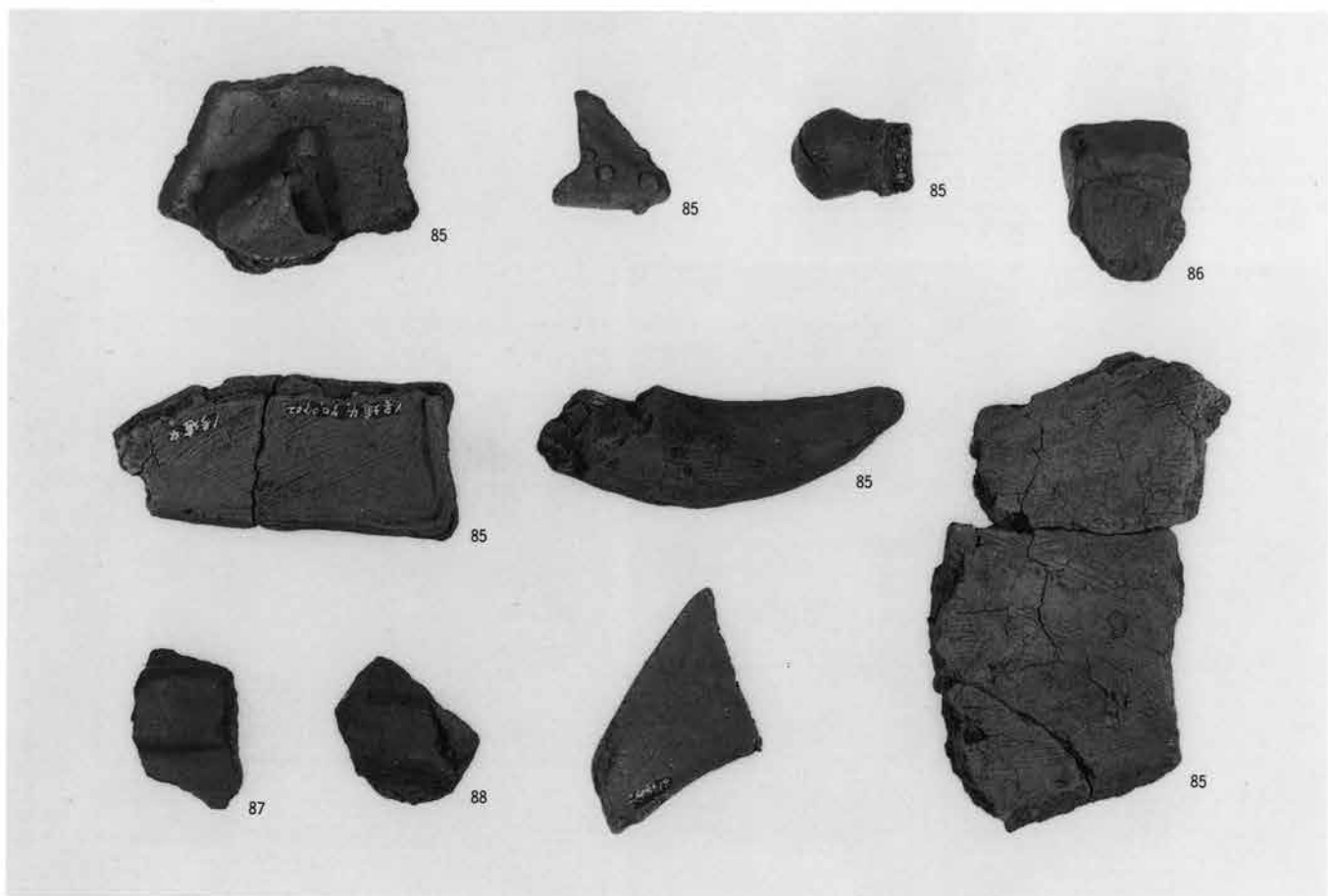
面繫・鏡板・引手



たて髪から前輪にかけて



1 人物・器財



2 馬



89

正面



89

側面



89

屋根の豎魚木



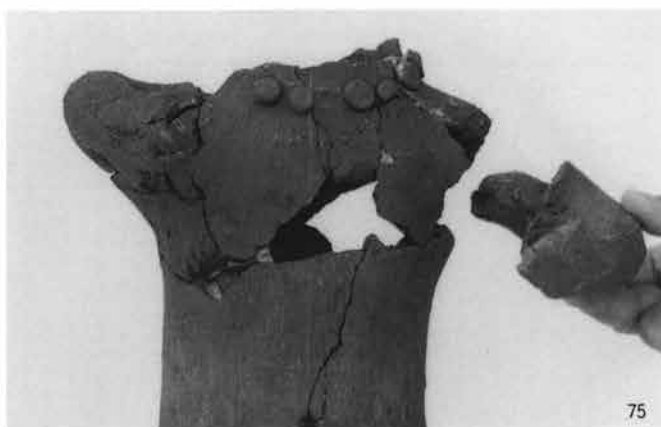
89

壁面の窓



89

上屋根と下屋根のジョイント部分



1 人物1 腕装着状態

75



2 同左 左腕

75



3 同上

75



4 同上 右腕

75



5 同上 内面

75

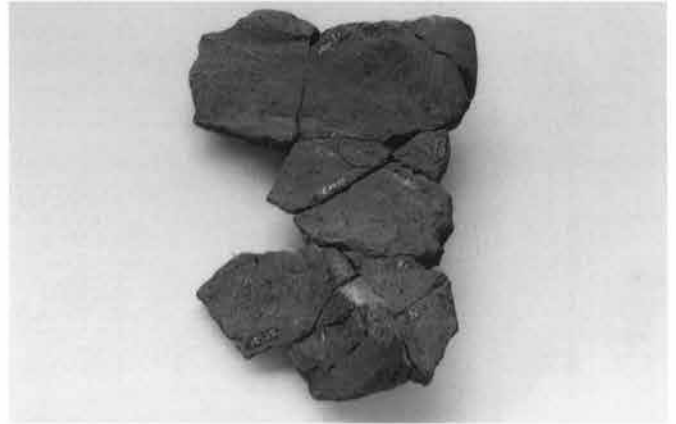


6 人物2 内面

76



1 屋根頂部内面



2 上屋根流れ部内面



3 上屋根と下屋根の接合部（下から）



4 上屋根内面



5 軒から下屋根の復元



6 上屋根の接合作業



7 復元作業終了



1 全景及び埴輪出土状態（南西から）



2 同上（南東から）



1 調査開始直後（南西から）



2 埴輪崩落状態検出作業（南から）



3 埴輪列と葺石（東から）



1 人物埴輪 (58) 出土状態



2 人物埴輪 (58) 設置状態



3 馬形埴輪 (121) 出土状態



4 同左



5 馬形埴輪 (163) 出土状態



6 家 (130) 及び盾形埴輪 (151) 出土状態



1 掘り上がり全景（南西から）



2 葺石及びテラス面（南東から）



3 墳丘南側周堀状部分（西から）



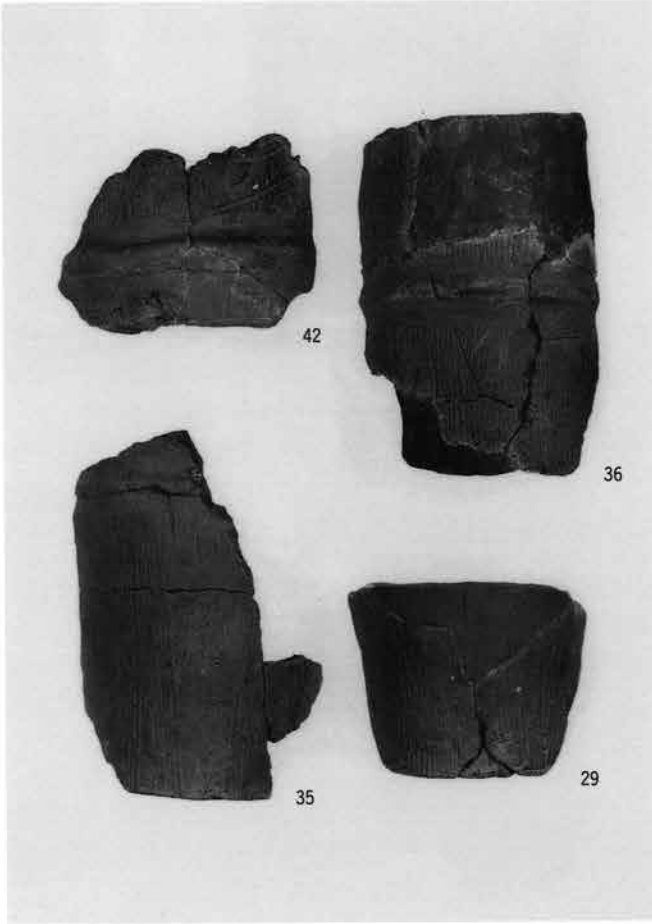
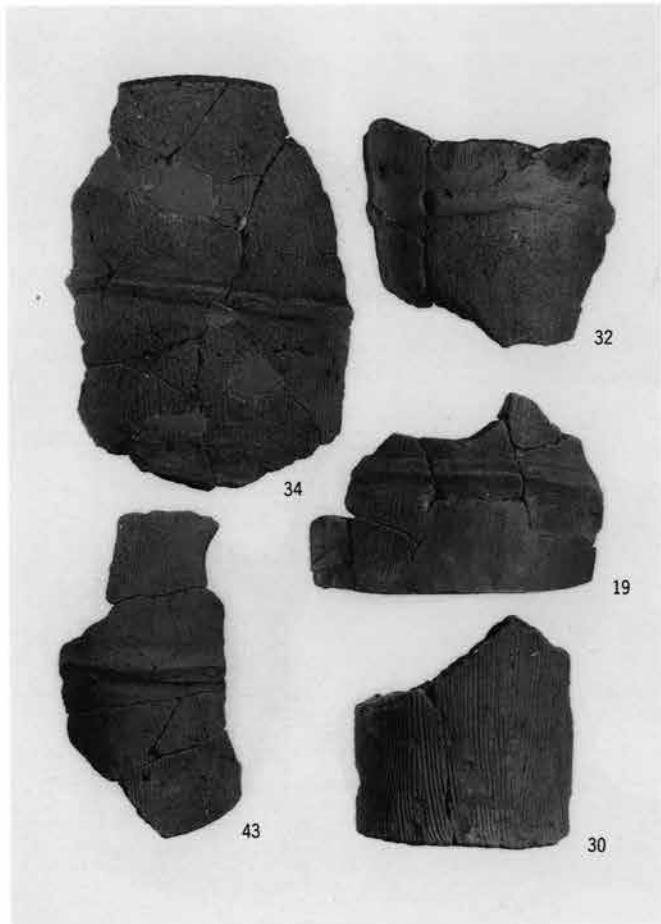
4 墳丘が礫のみからなる状態（南西から）



5 墳丘南側葺石及びテラス面断ち割り状態（西から）









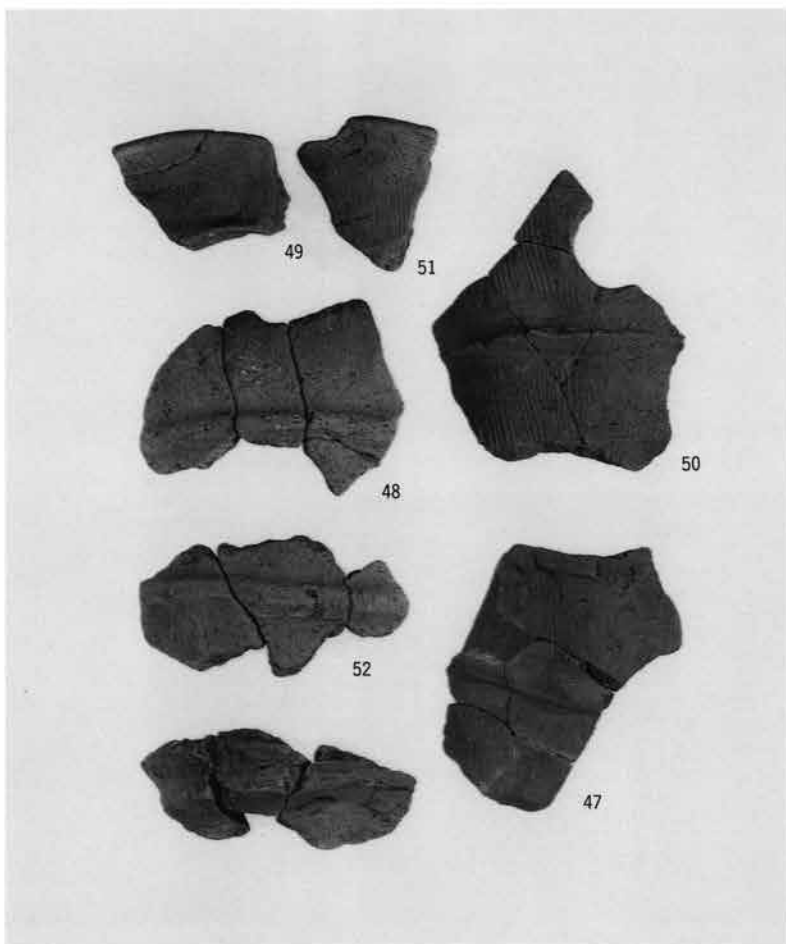
45



44



46



49

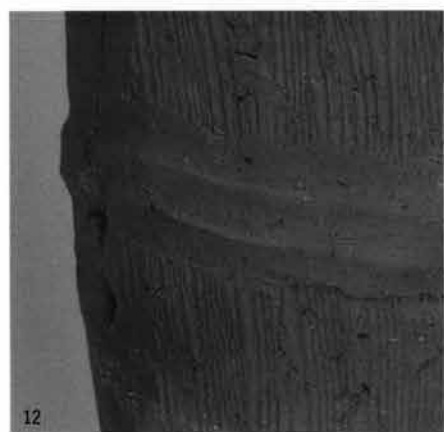
51

50

48

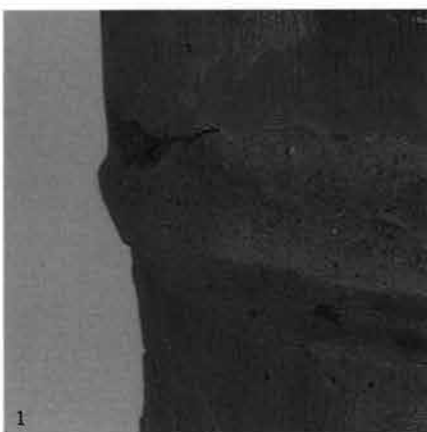
52

47



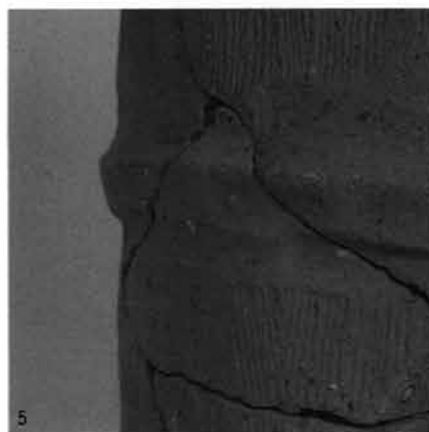
12

M_① 凸帯



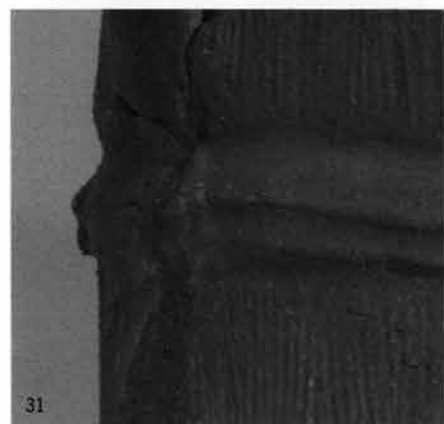
1

M_② 凸帯



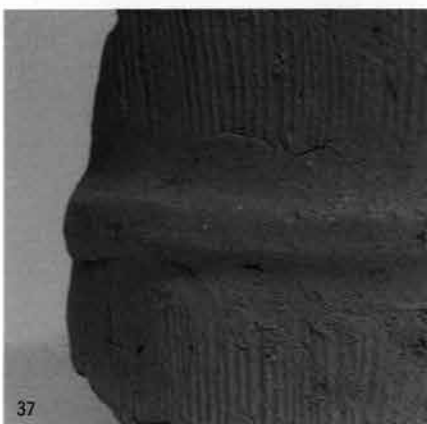
5

M_② 凸帯



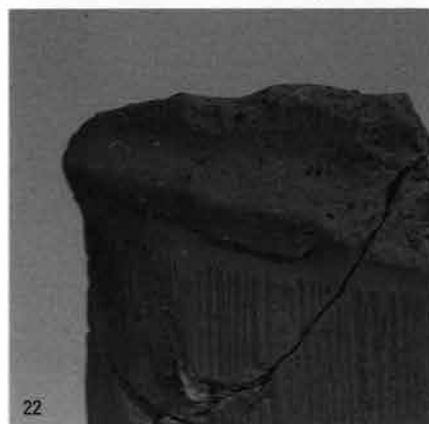
31

M_③ 凸帯



37

台形 凸帯



22

三角 凸帯



透孔



透孔



ヘラ描き



ヘラ描き



ヘラ描き



ヘラ描き



内面



内面



底



底



底



砂礫混入する胎土



人物1 背面



右側面



正面



顔正面



右側面



上から



人物2 正面



左側面



背面



顔正面



左側面



首飾りの表現



胸の表現



61

背面



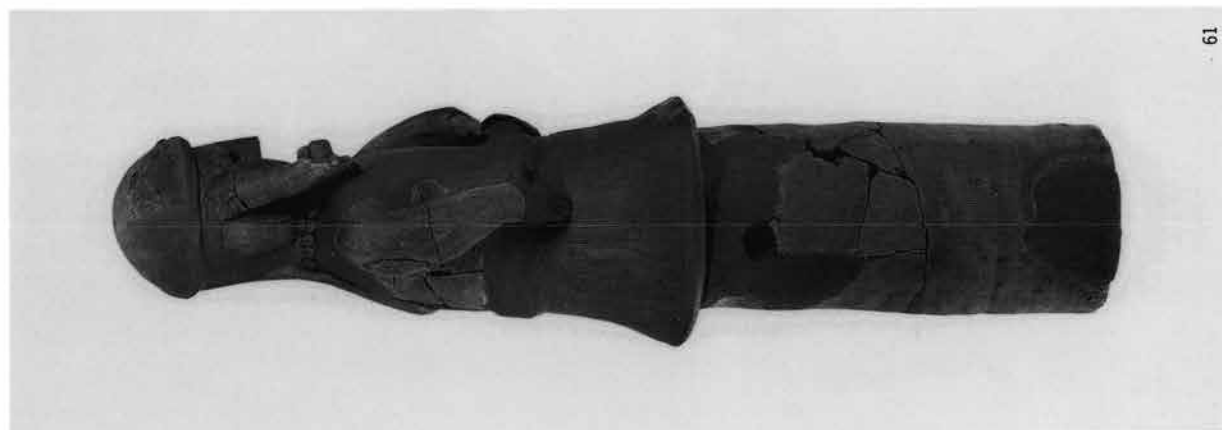
61

左側面



61

正面



61

人物3 右側面



顔正面



腕から刀にかけての表現



美豆良



後髪



裾



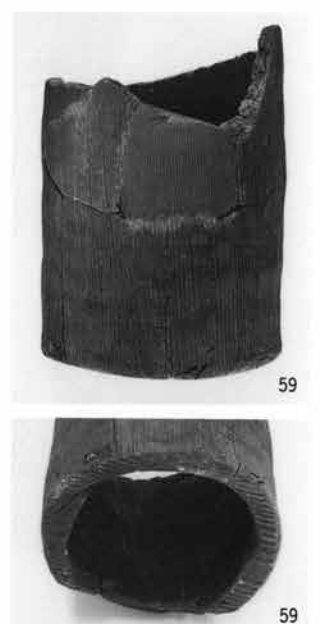
人物4 背面



右側面



正面



基部



62



62



62

人物5 正面

左側面

背面



62

顔正面



62

刀



62

後髪



63

人物6 正面



63

右側面



63

背面



63

胸の下に当てる手



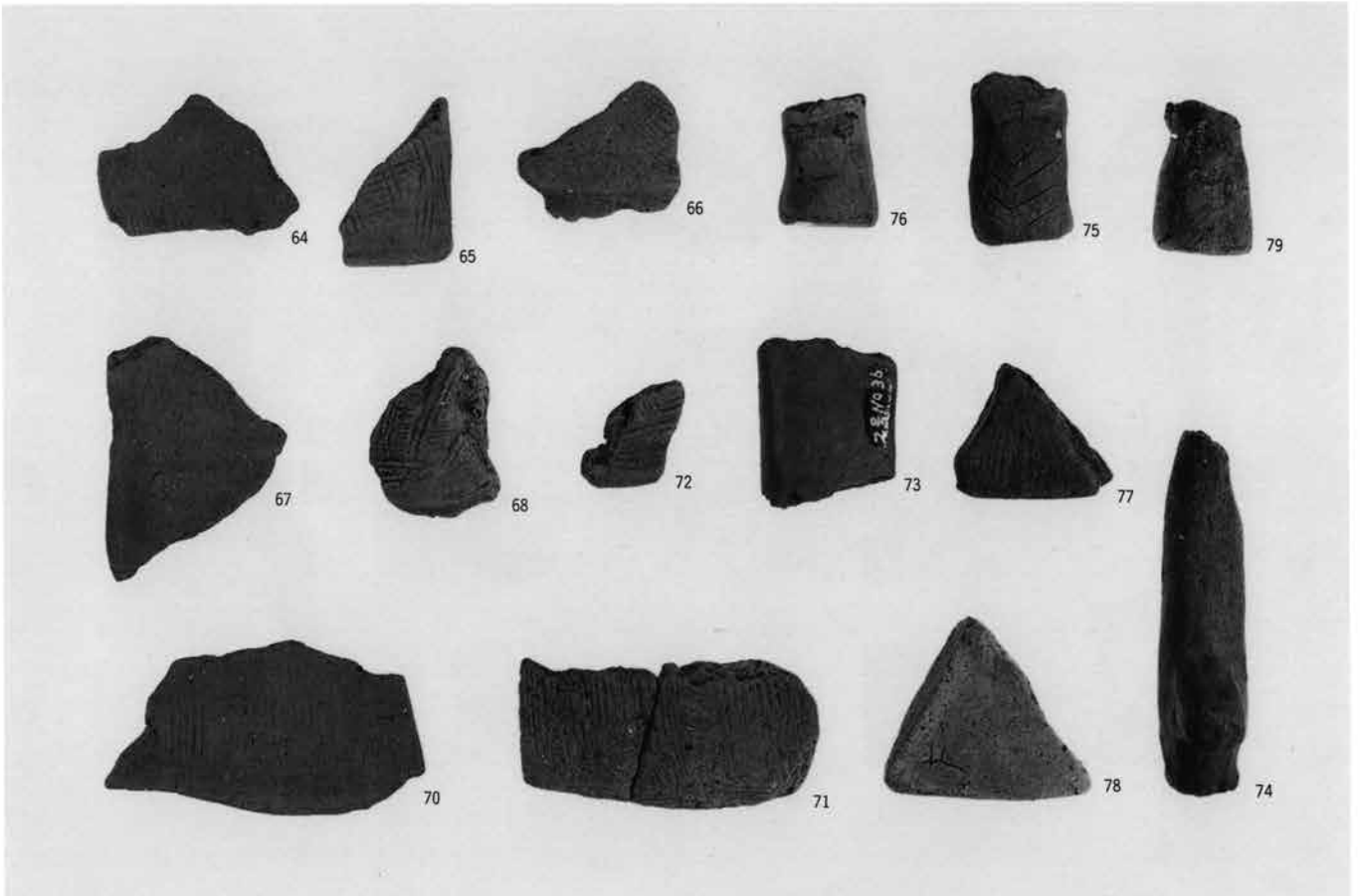
63

腰に付いた鎌

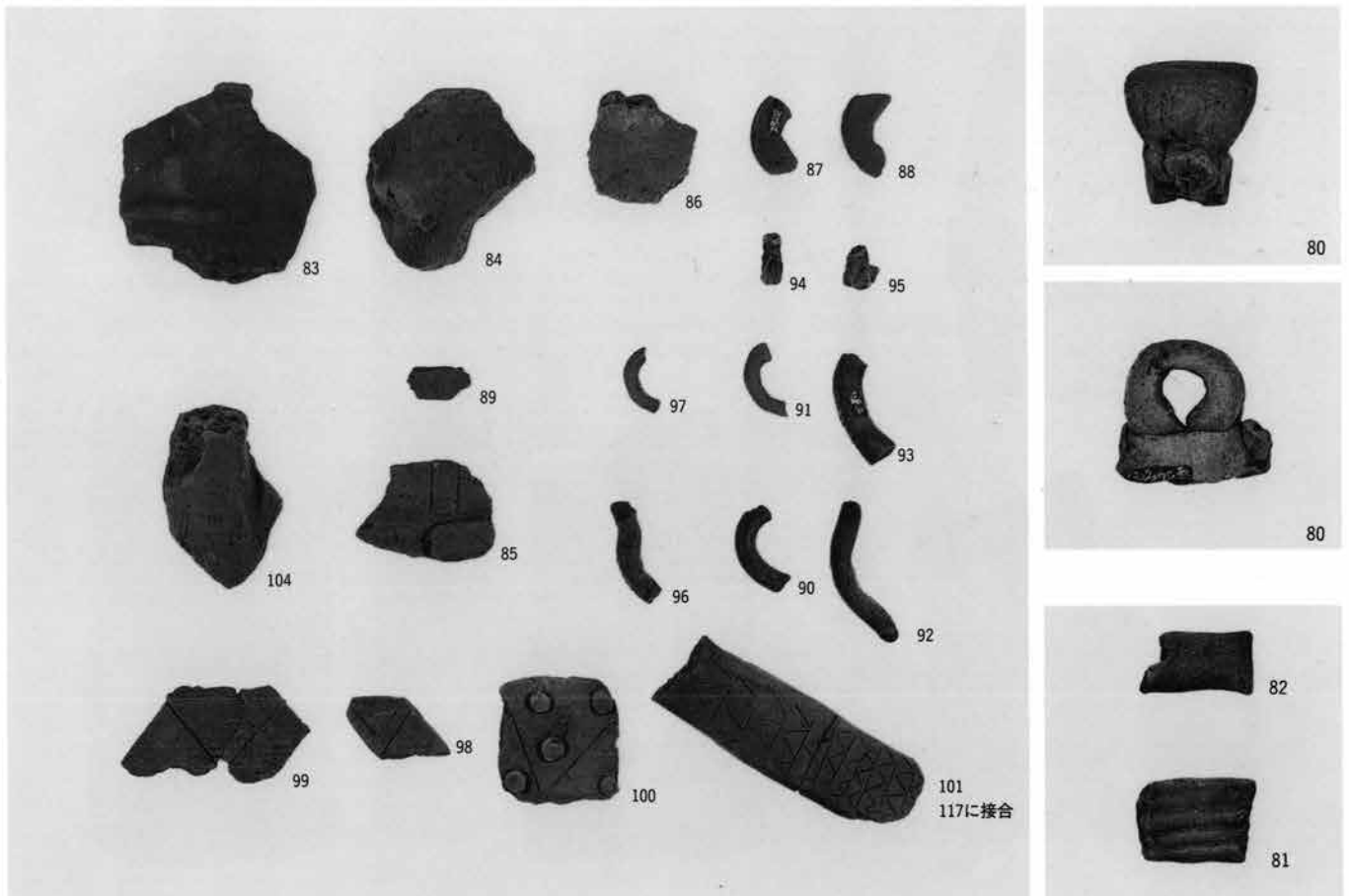


63

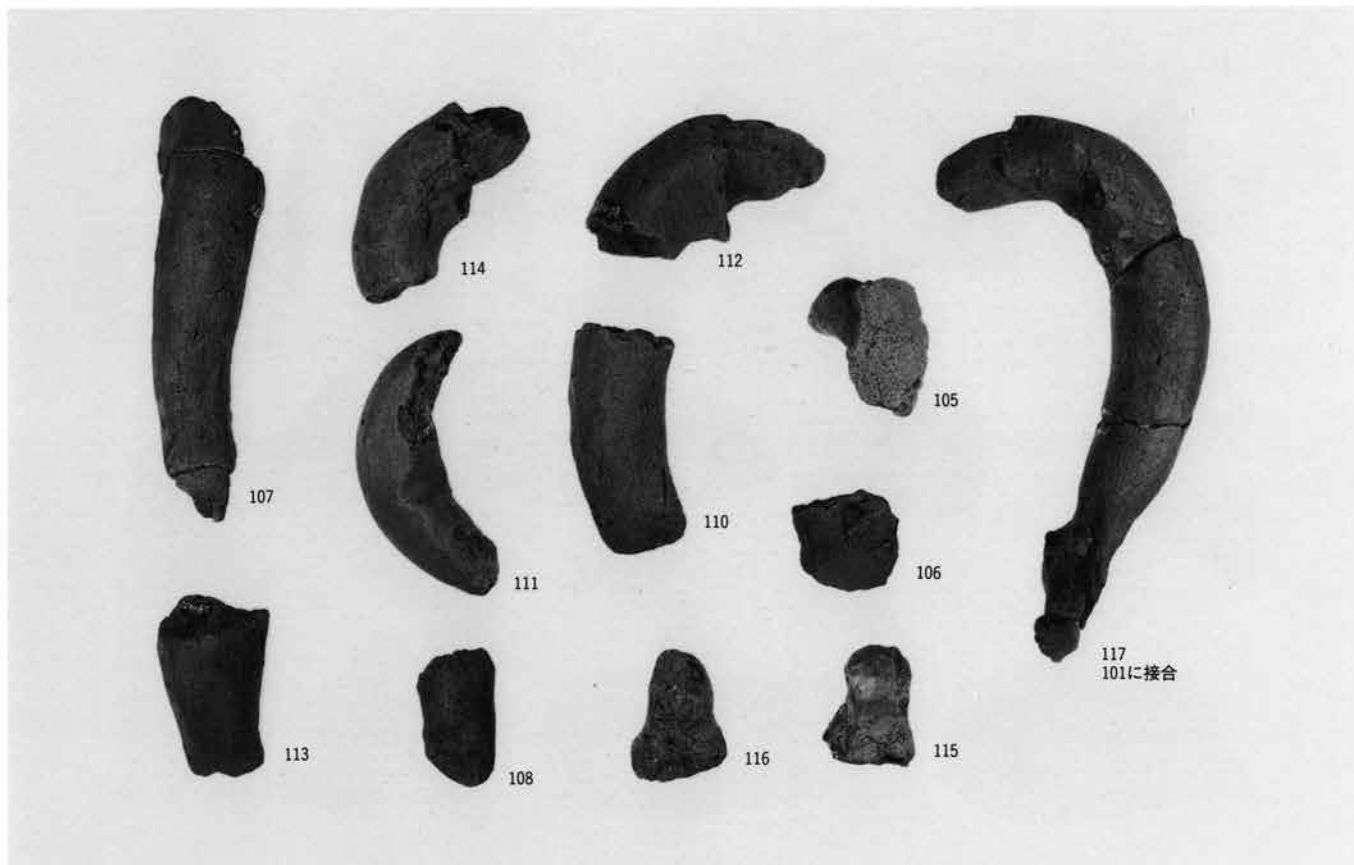
後髪



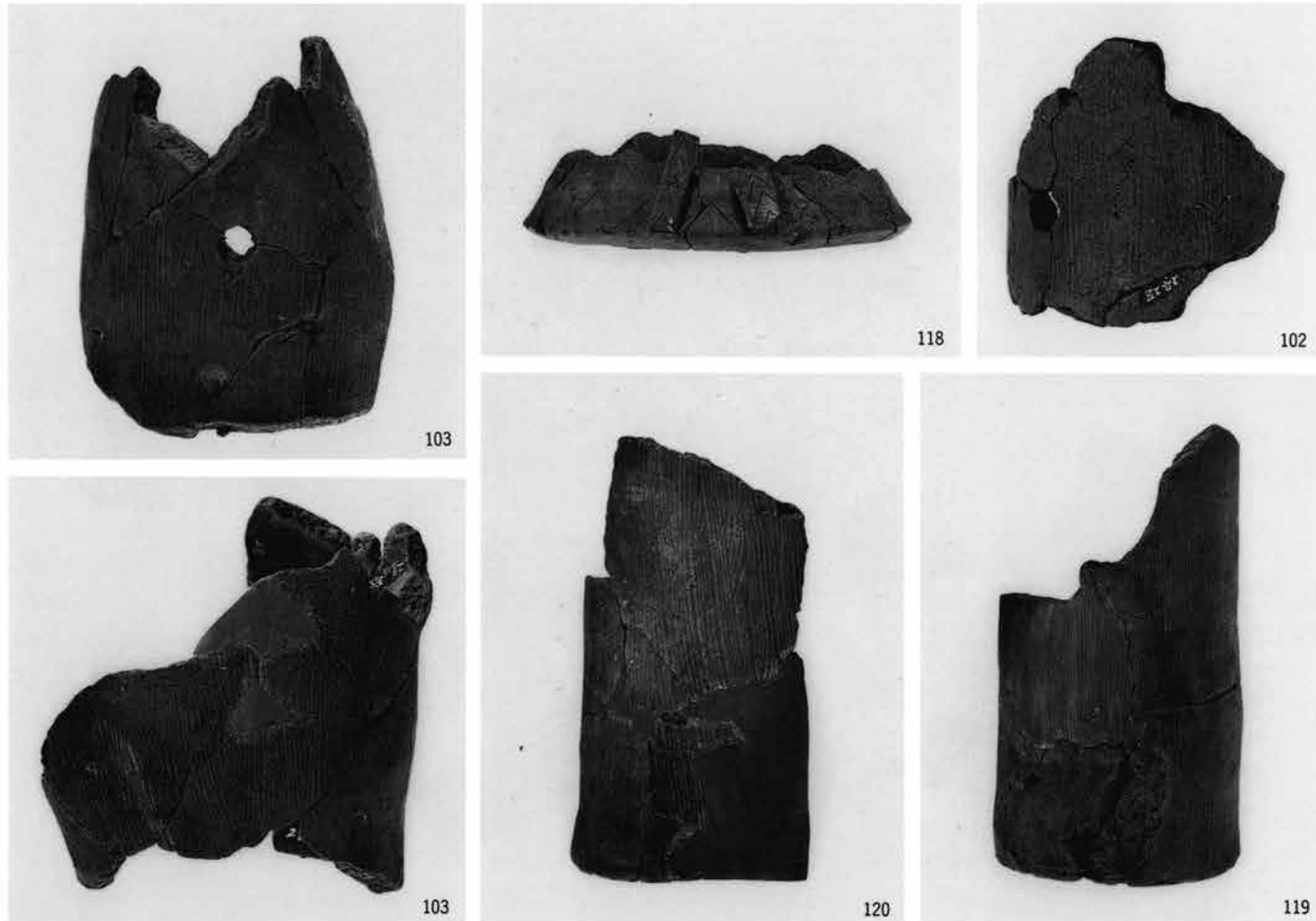
1 髪毛



2 顔・帯・刀・その他



1 腕



2 胸部・上着裾・基部



馬1 左側面

121



右側面

121



121

上から



121

正面



121

後面



121

鞍



121

手網



121

障泥



121

面繫・鏡板・引手



121

耳



122

馬2 左側面



122

右側面



122

上から



122

正面



122

後面



122

障泥



122

杏葉



122

たて髪



122

尻繫



122

胸繫と鈴



130

正面



130

側面



130

上から



130

破風・棟木



130

正面



130

側面

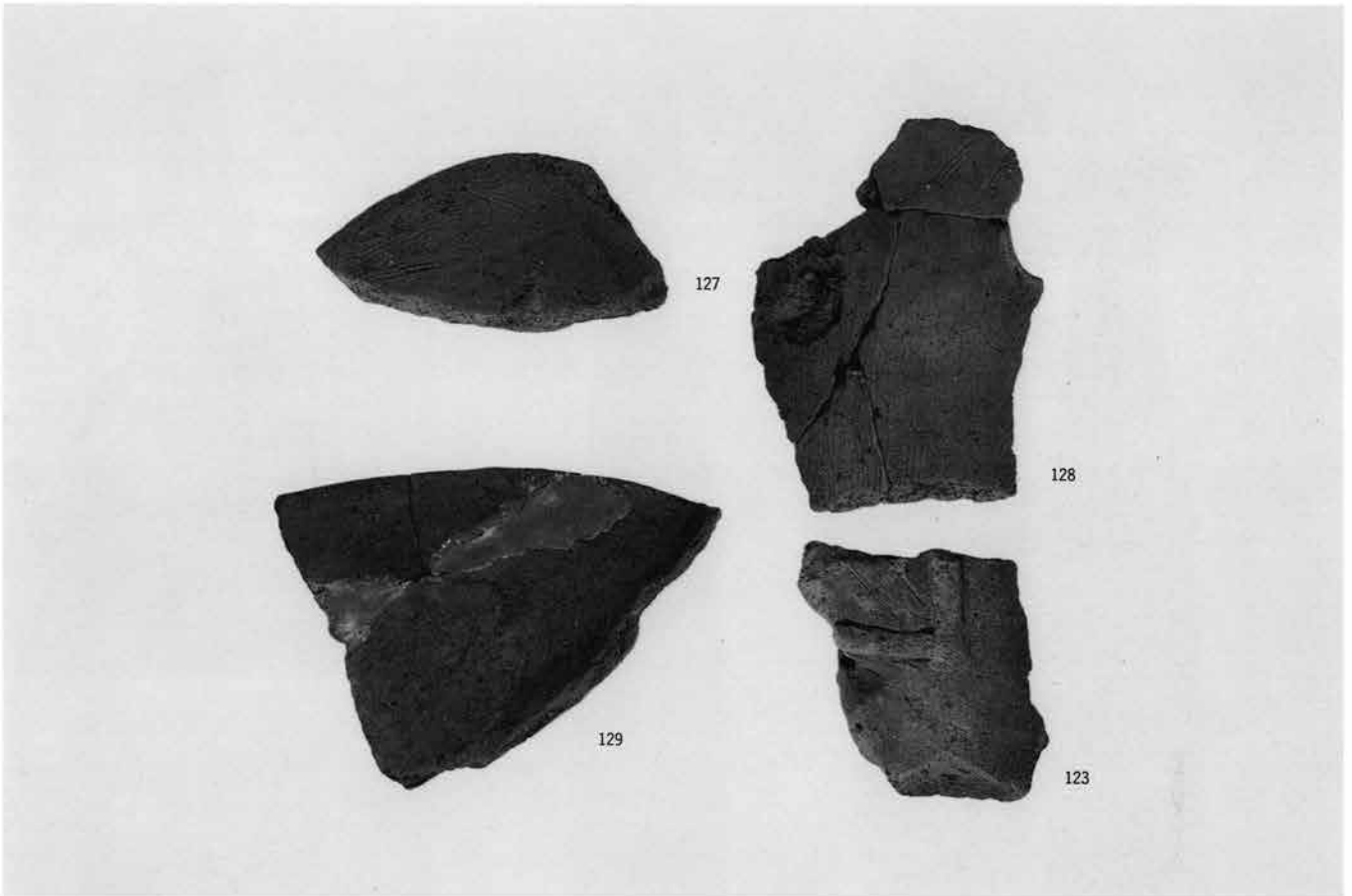


130

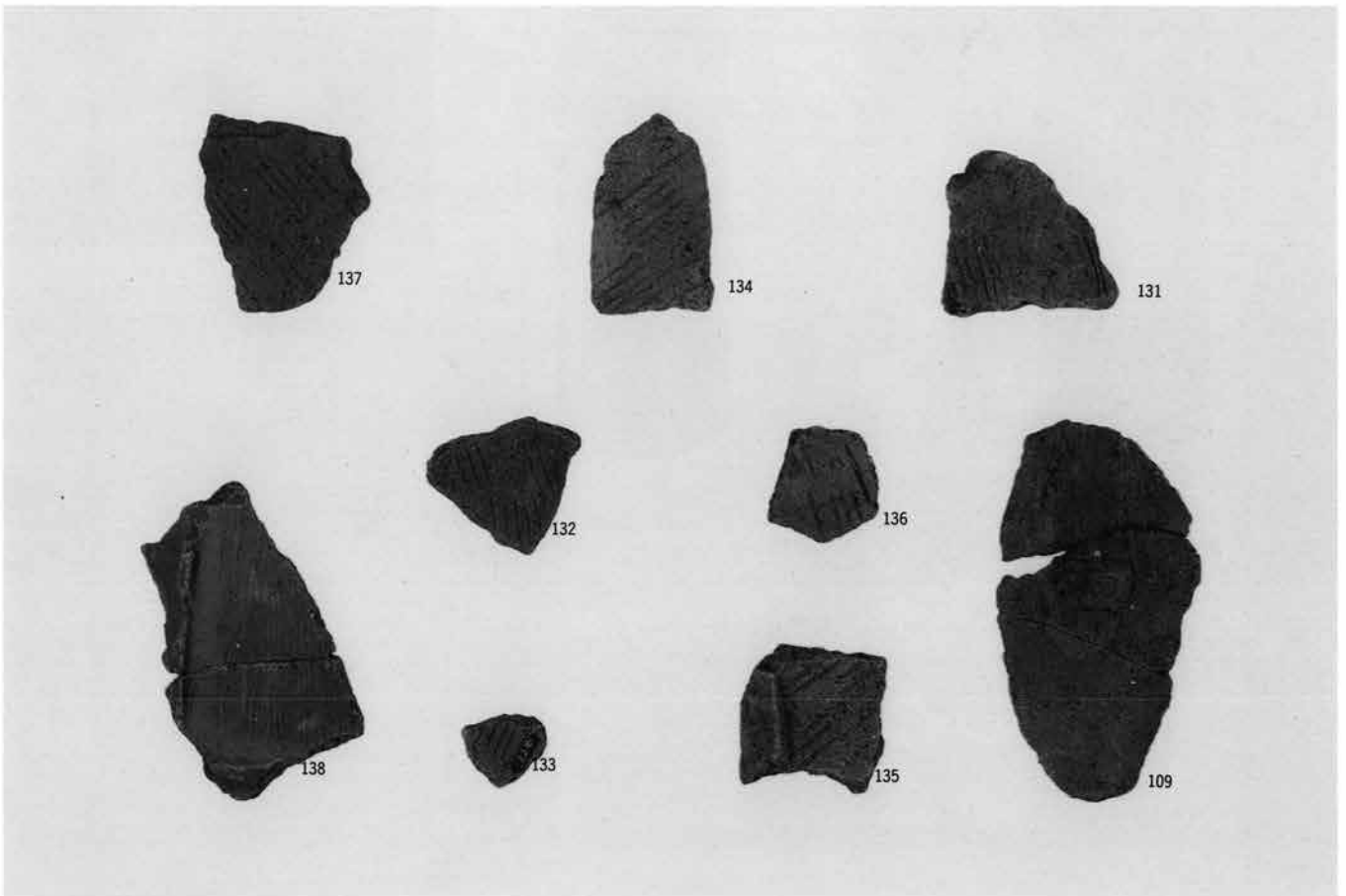
堅魚木



入口・軒



1 馬形埴輪



2 家・及び人物埴輪



太刀1 側面



正面



勾金



把頭



太刀2 正面

140



側面

140



勾金

140



把頭

140



把頭

140



勾金下端

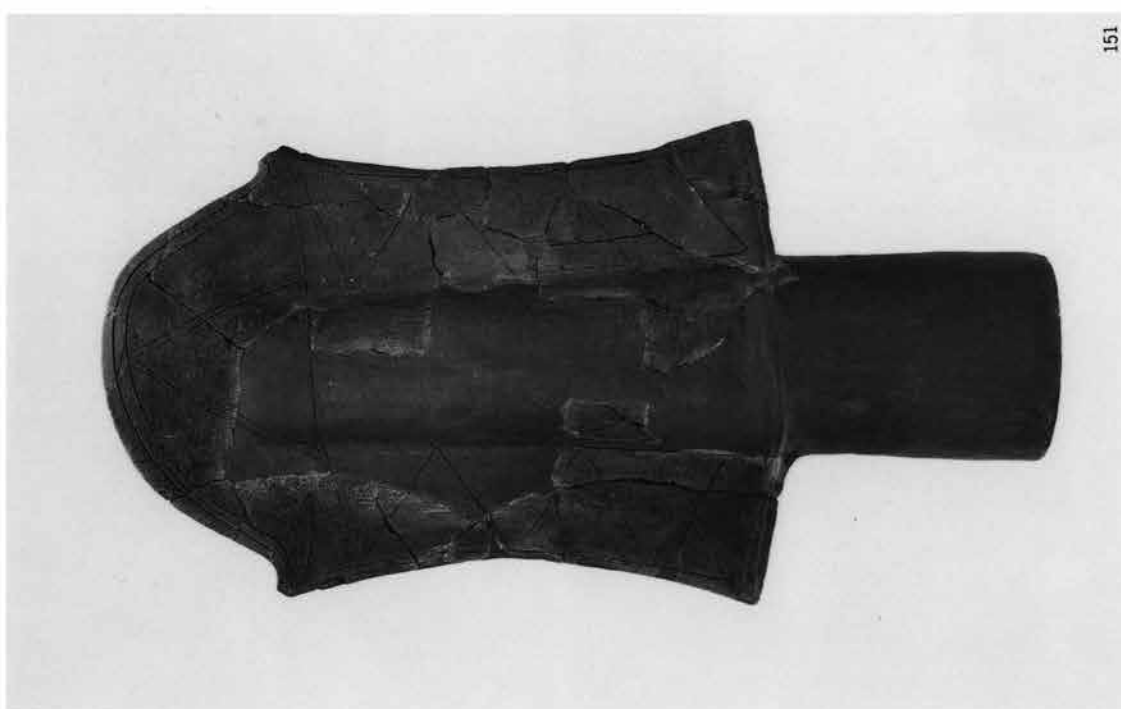
140



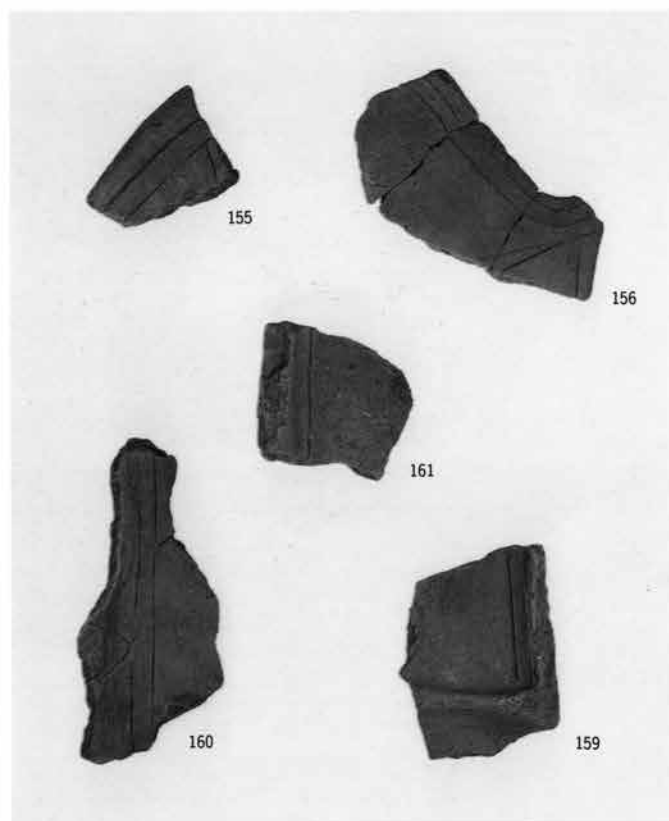
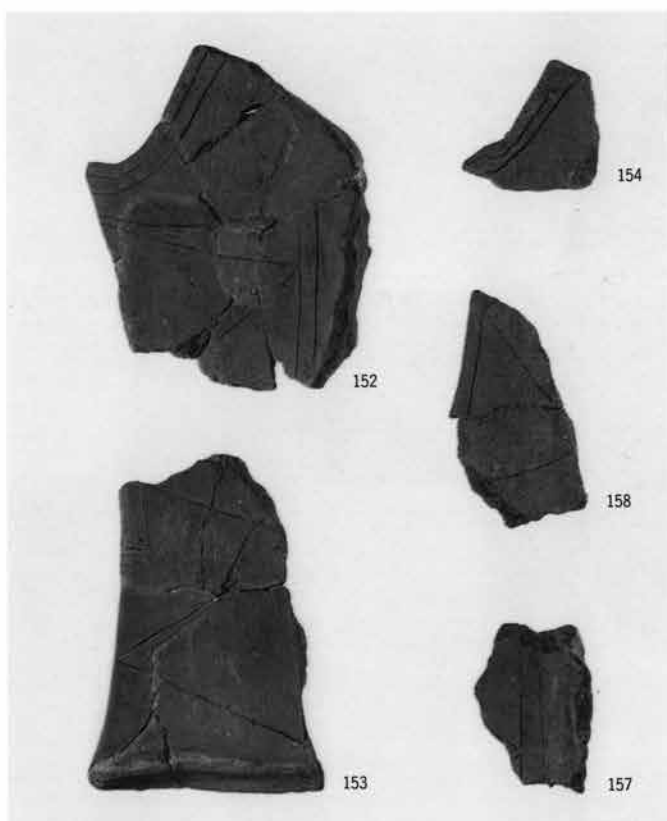
裏面



左側面



正面



1 盾形埴輪



2 鞞1 正面



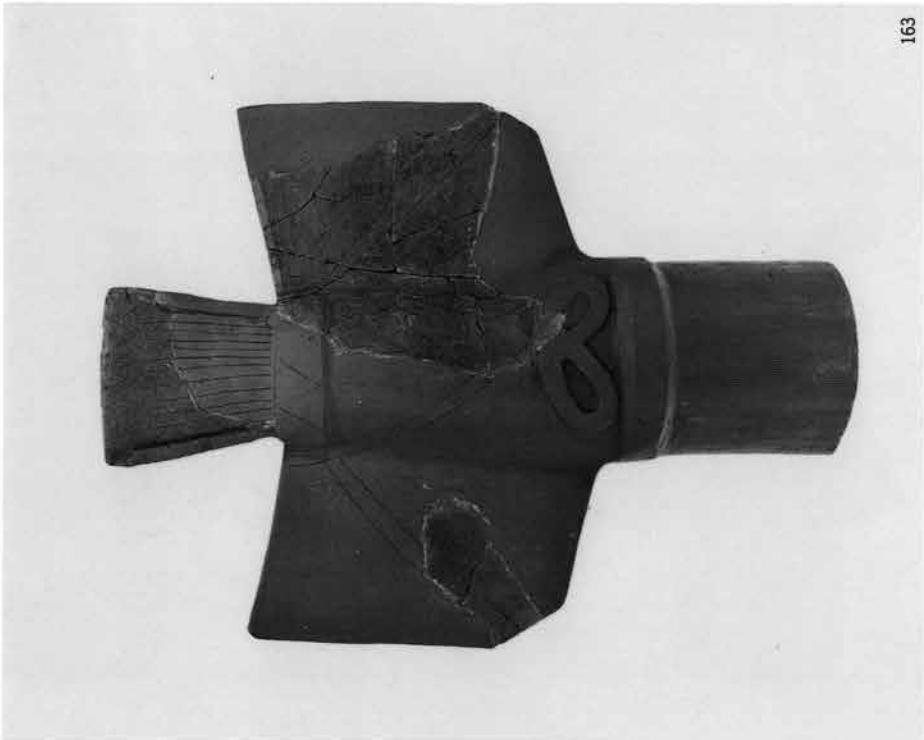
左側面



裏面



左側面



靱2 正面



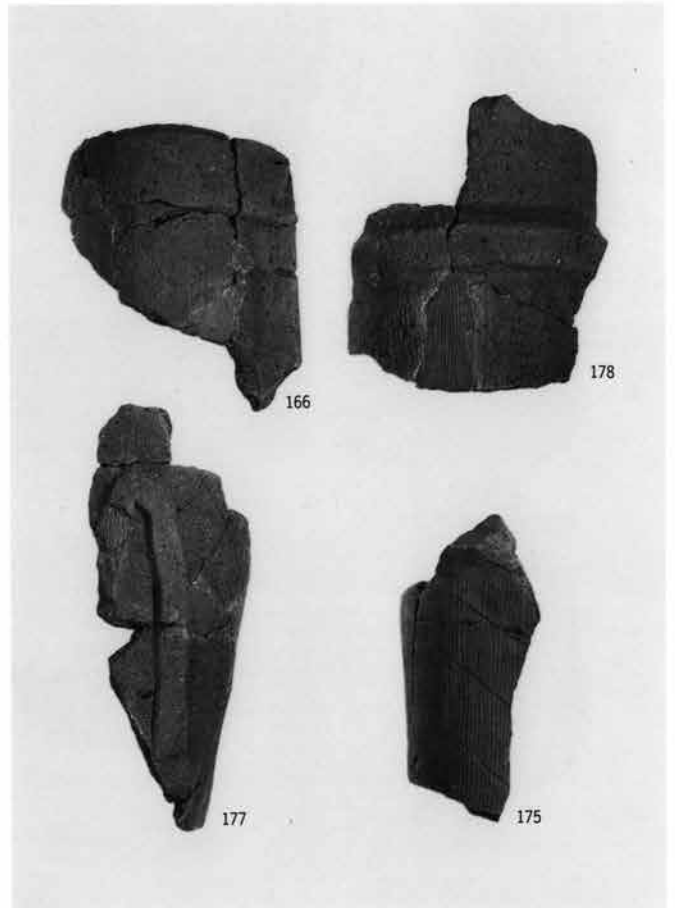
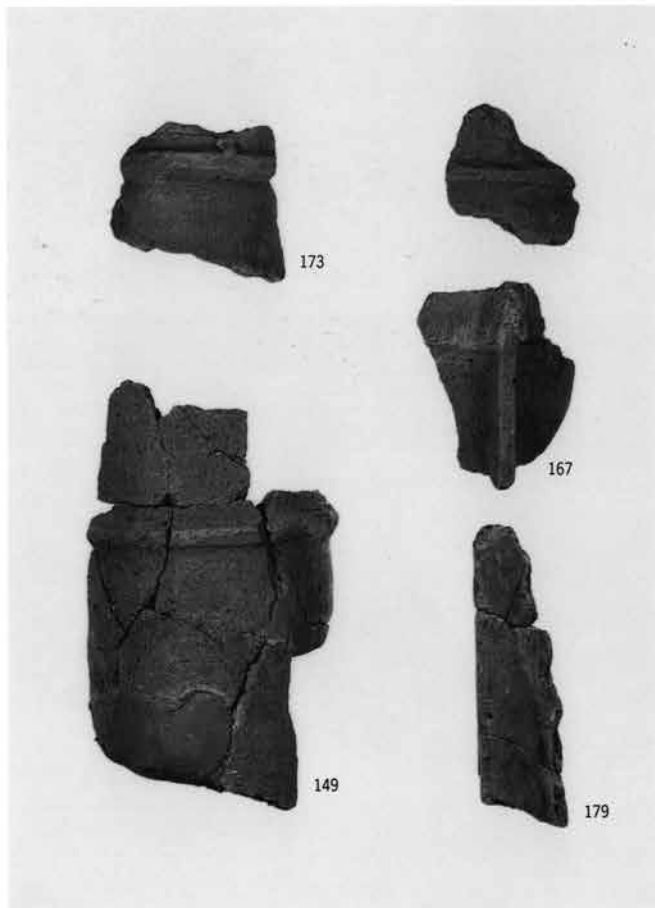
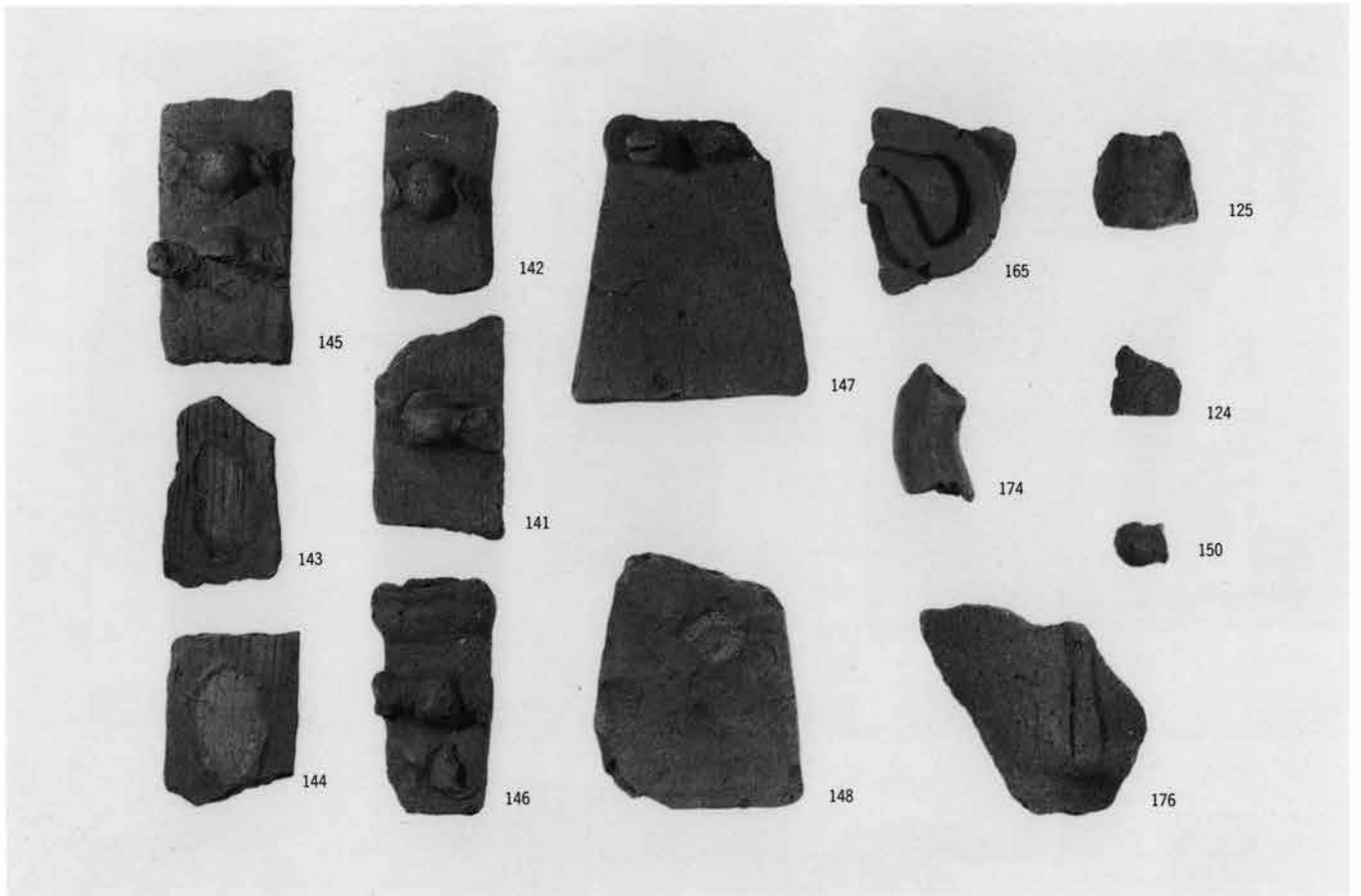
線刻による弓矢の表現



鞆 2

鞆 1







1 人物1 髪内面

58



2 同左 顔内面

58



3 人物2 頭部内面

60



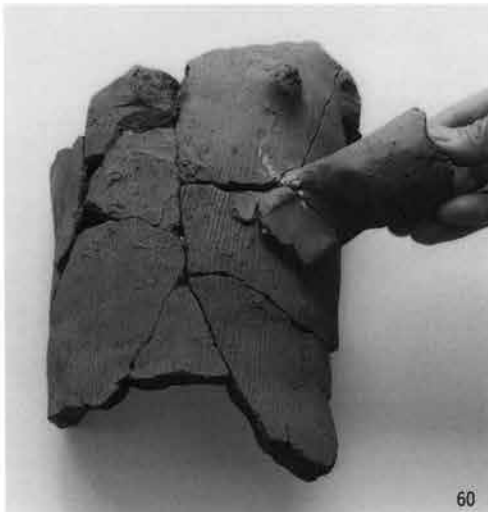
4 同左 左手内面

60



5 同左 右手内面

60



6 同上 胸の下に当てる手とその剝落痕

60



7 同左 胸部内面

60



8 同左 裾部内面

60



1 人物3 美豆良剝落痕



2 同左 接続状態



3 同左 胸部内面



4 馬2 雲珠剝落痕



5 同左 腰から尻部内面



6 同上 腹部内面



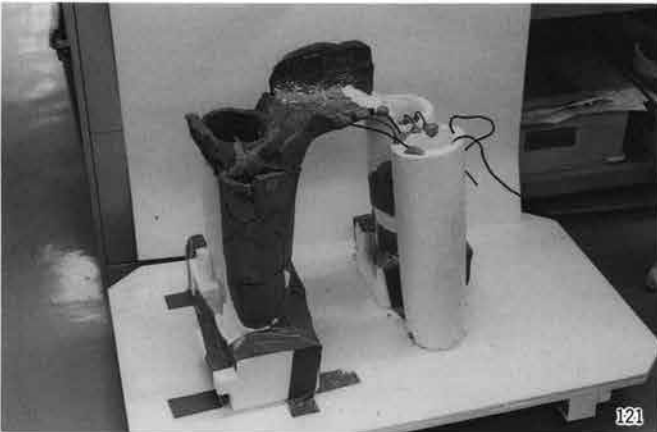
7 同左 障泥接続状態



1 石膏による足の製作



2 後足の接合



3 4本足を接合し、基礎を作る



4 鞍橋の接続痕



5 たて髪・鞍橋の剝落痕



6 背から腰部内面



7 背から腰を上のにせる



8 頭部の復元作業



1 家 上屋根内面

130



2 同左 上屋根の接合

130



3 太刀 把頭

139



4 太刀鞘部内面

139



5 盾上半部内面

151



6 盾側部との接合

151



7 鞘上部断面

163

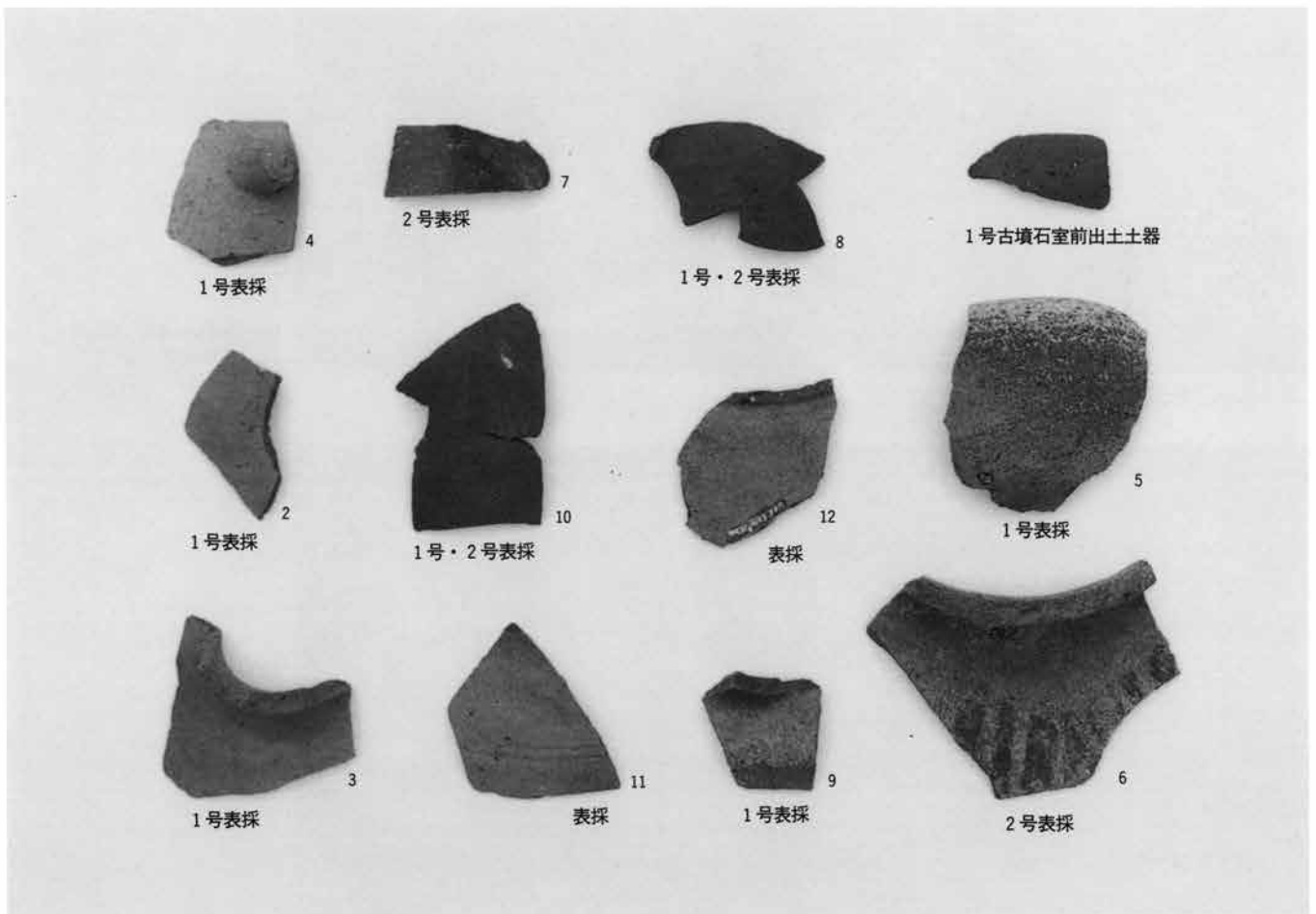


8 鞘内面

168



1 2号古墳出土須恵器提瓶



2 1号・2号古墳出土土器



1 遺跡地遠景（西から）
（集落跡の調査）



2 第3次調査全景
（遺跡地近景）



1 遠景 (左が4号、右が5号、南から)



2 4号古墳全景 (左側は館跡、南から)



1 4号古墳全景（東から）



2 同左 周堀土層断面



3 5号古墳東寄り周堀（南から）



4 同左 周堀土層断面（南から）



5 同上 全景（南から）



1 全景（南から）



2 調査前遠景（東から）



3 全景（西から）



4 墳丘北側の周堀内への礫埋没状態（東から）



5 同左 平安期土器出土状態



1 鉄刀出土状態



2 人骨及び歯の出土状態



3 石室全景（南から）



4 石室掘り方全景（東から）



5 石室全景（東から）



1 1号～3号住居跡空中写真



2 1号～3号住居跡全景（手前が1号住居跡、東から）



1 1号住居跡全景（南から）



2 同上 甕出土状態



3 同左 貯藏穴内土器



4 同上 鏡出土状態



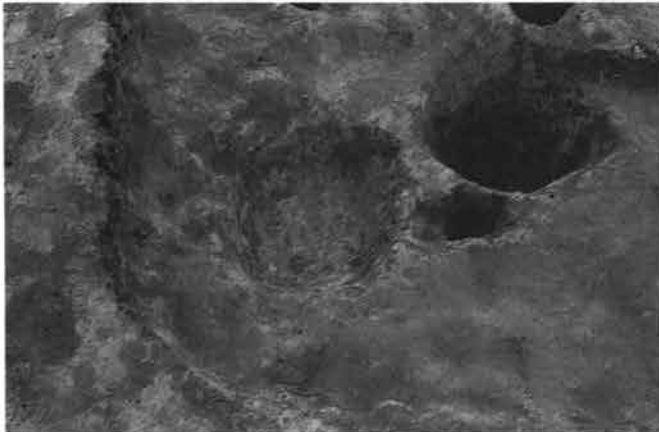
5 同上 鉄斧・鎌出土状態



1 1号住居跡管玉出土状態



2 同左 棒状礫出土状態



3 同上 貯蔵穴



4 同左 掘り方全景 (南から)



5 2号住居跡全景 (南から)



1 2号住居跡全景（北から）



2 同左 貯蔵穴（西から）



3 3号住居跡全景（南から）



4 同左 掘り方土層断面（東から）



5 同上 掘り方全景（南から）



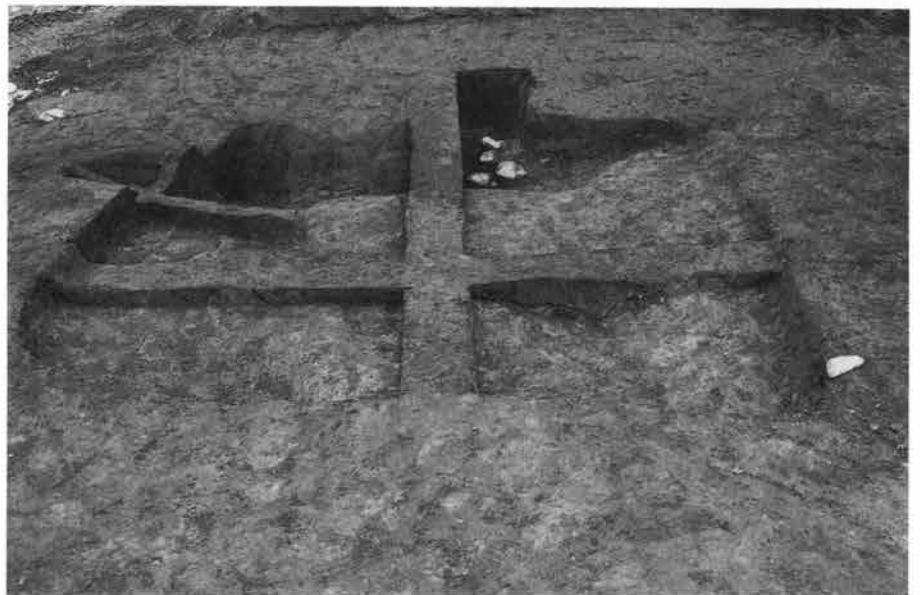
1 4号住居跡全景（南から）



2 同左 カマド状遺構（南から）



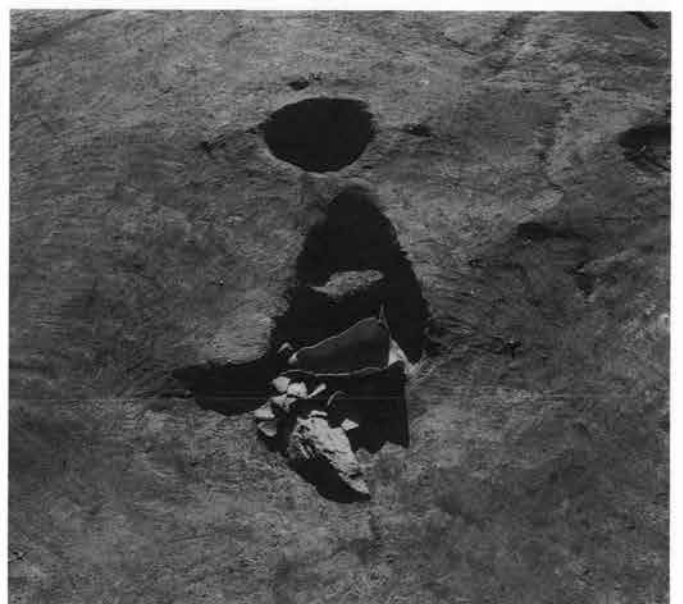
3 同上 遺物出土状態



4 同左 掘り方（西から）



5 5号住居跡全景（南から）



6 6号住居跡カマド（東から）



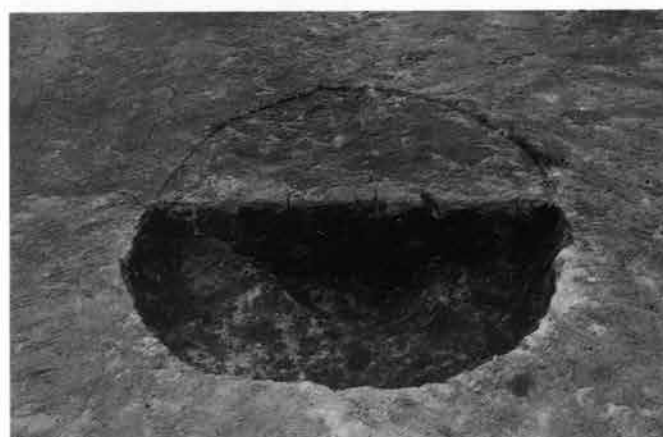
1 1号土壙 (西から)



2 3号土壙土層断面 (南から)



3 6号土壙 (北から)



4 8号土壙土層断面 (南から)



5 7号土壙土層断面 (南から)



6 同左 遺物出土状態



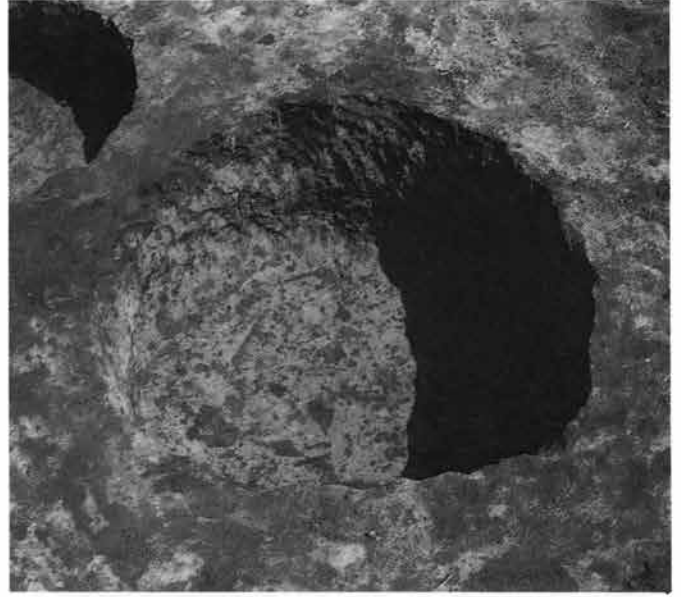
7 同上 (南から)



8 9号土壙 (西から)



1 10号土 壤 (南から)



2 11号土 壤 (南から)



3 12号土 壤土層断面 (南から)



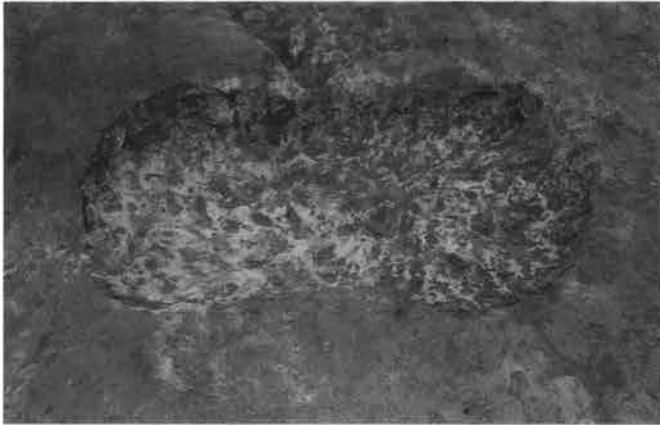
4 同左 (南から)



5 13号土 壤 (南から)



6 14号土 壤土層断面 (南から)



1 2号土壇 (西から)



2 4号土壇 (西から)



3 5号土壇 (南から)



4 15号土壇 (南から)



5 16号土壇 (南から)



6 2号 (左)・3号溝全景 (南から)



7 2号溝土層断面 (南から)



8 同左 溝内の礫敷状況



1 遠景（右側は4号古墳、南から）



2 全景（西から）



1 全景 (西から)



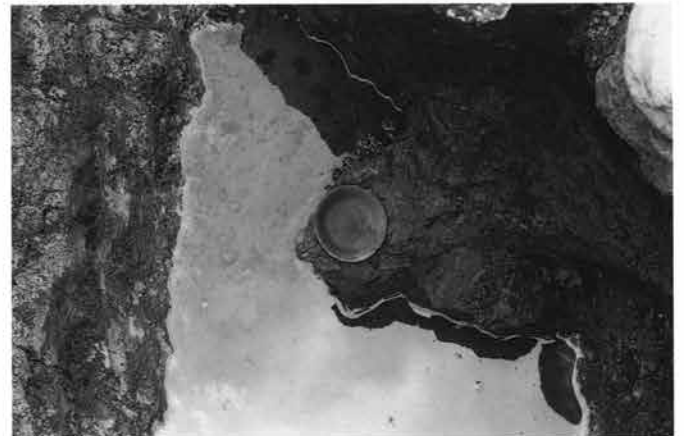
2 同上 (東から)



3 堀土層断面



4 堀からの礫出土状態



5 堀からの土師質小皿出土状態



1 調査地遠景 (西から)



2 空中写真



1 調査地全景（北から）



2 バルーン使用による空中撮影



3 浅間山軽石層の除去作業



4 浅間山軽石層堆積状態



5 水田跡調査風景



6 水田跡調査風景



7 同左



1 水田跡全景 (北から)



2 同上 (南から)



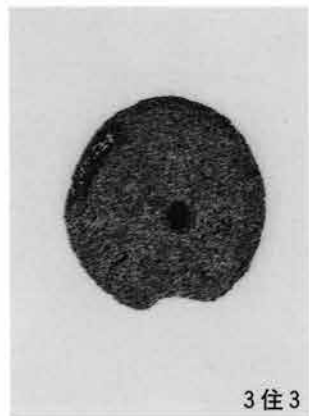
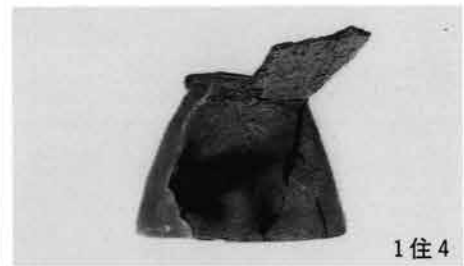
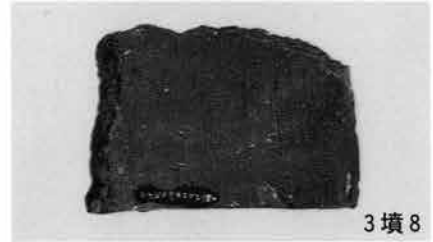
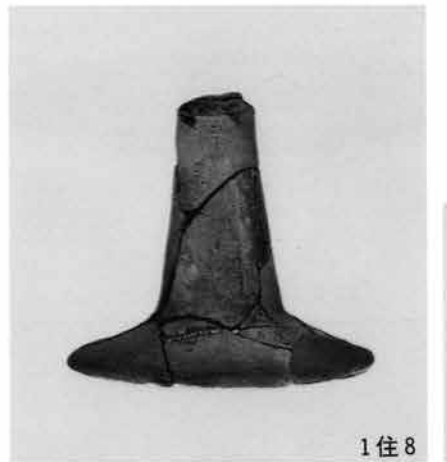
3 水路跡 (南から)

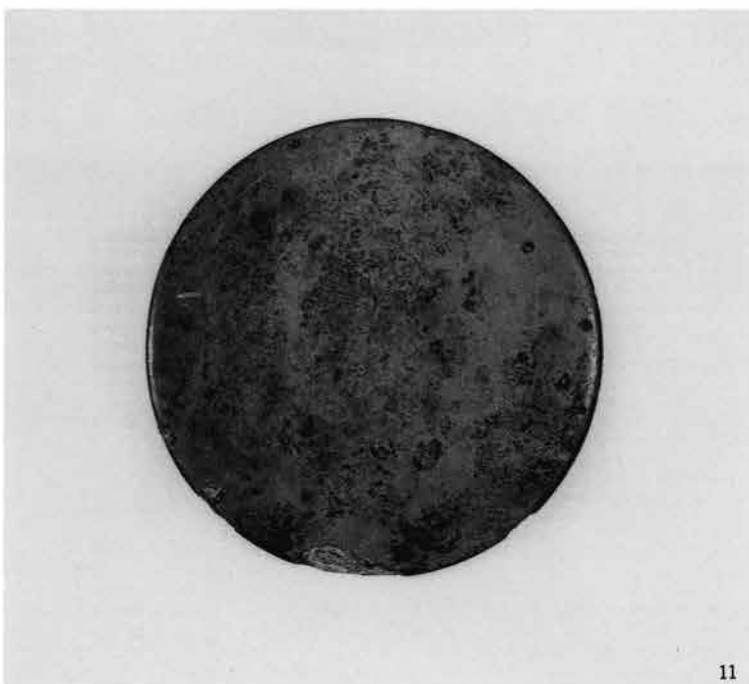


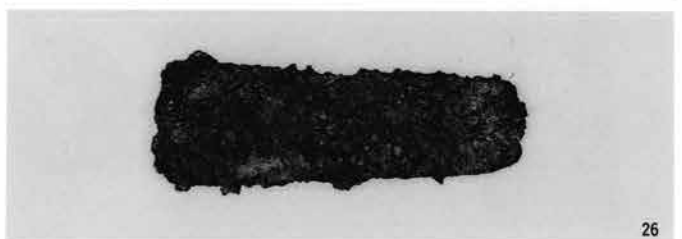
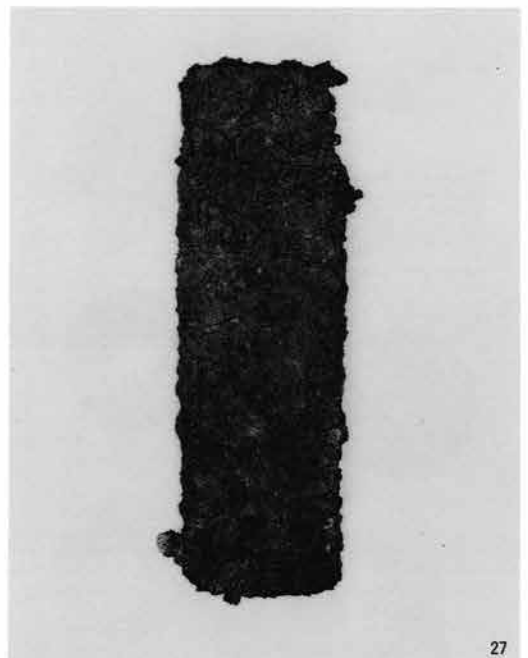
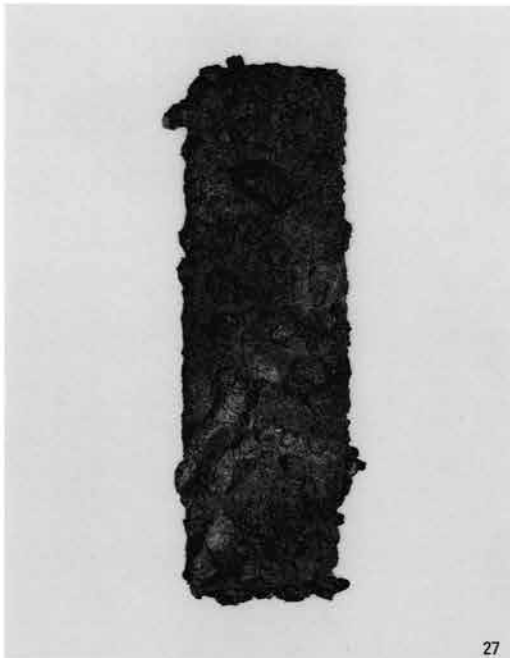
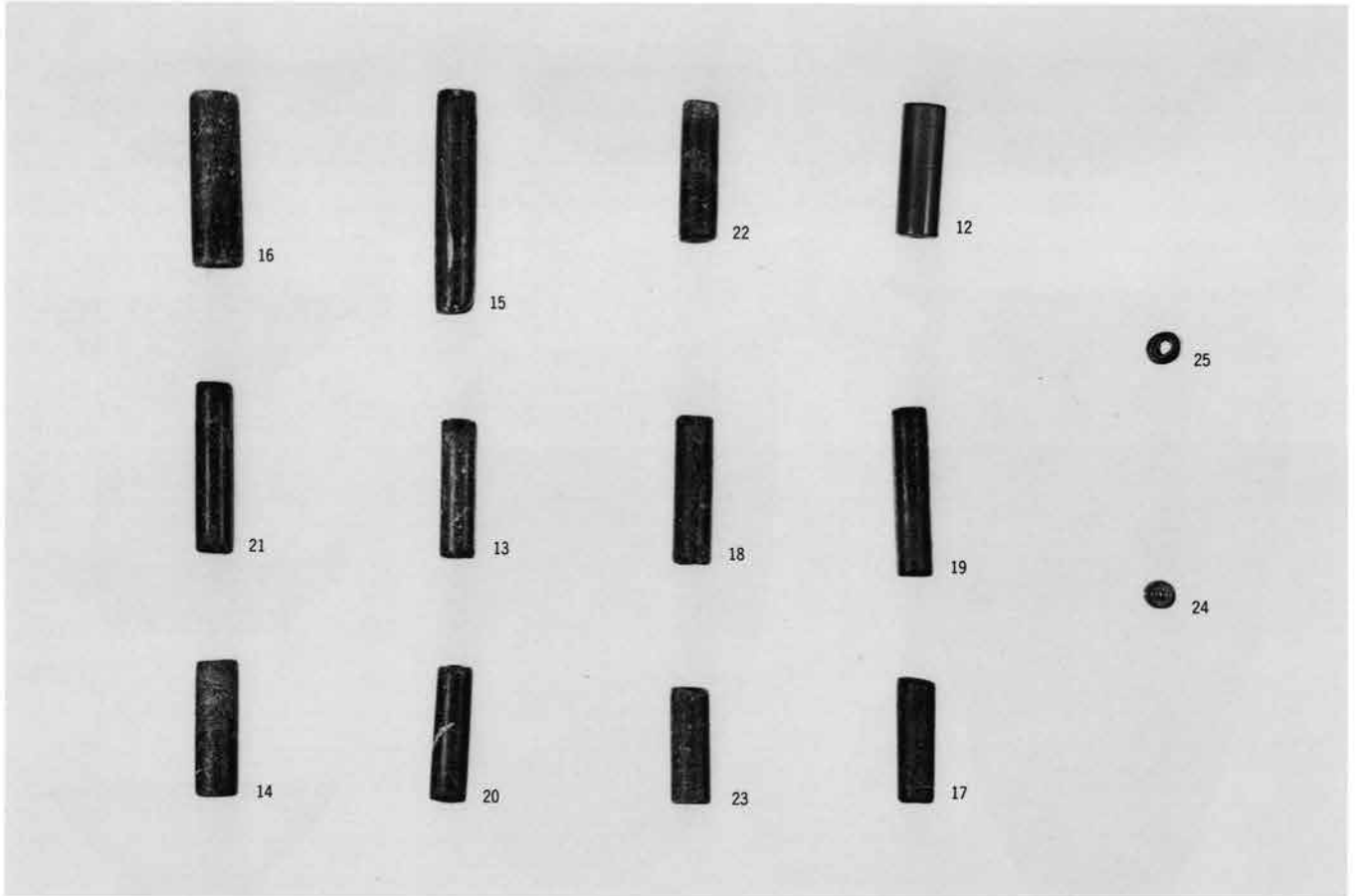
1 畠跡 (南から)



2 同上 (右側は水路及び水田跡 北から)









3住1



4住1



中近世墓6



6住2



6住3



中近世墓7



中近世墓8



遺構外22



中近世1



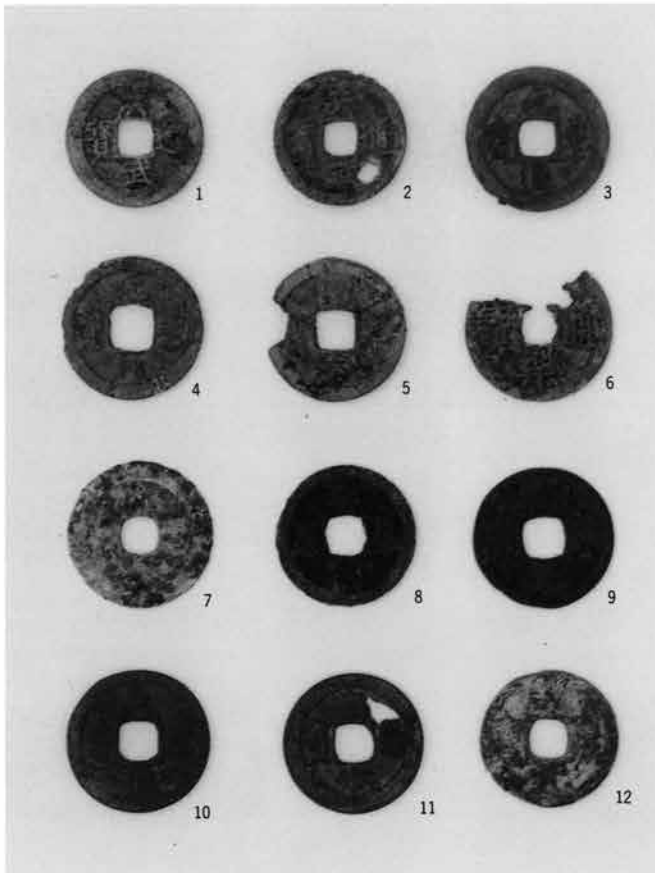
青磁



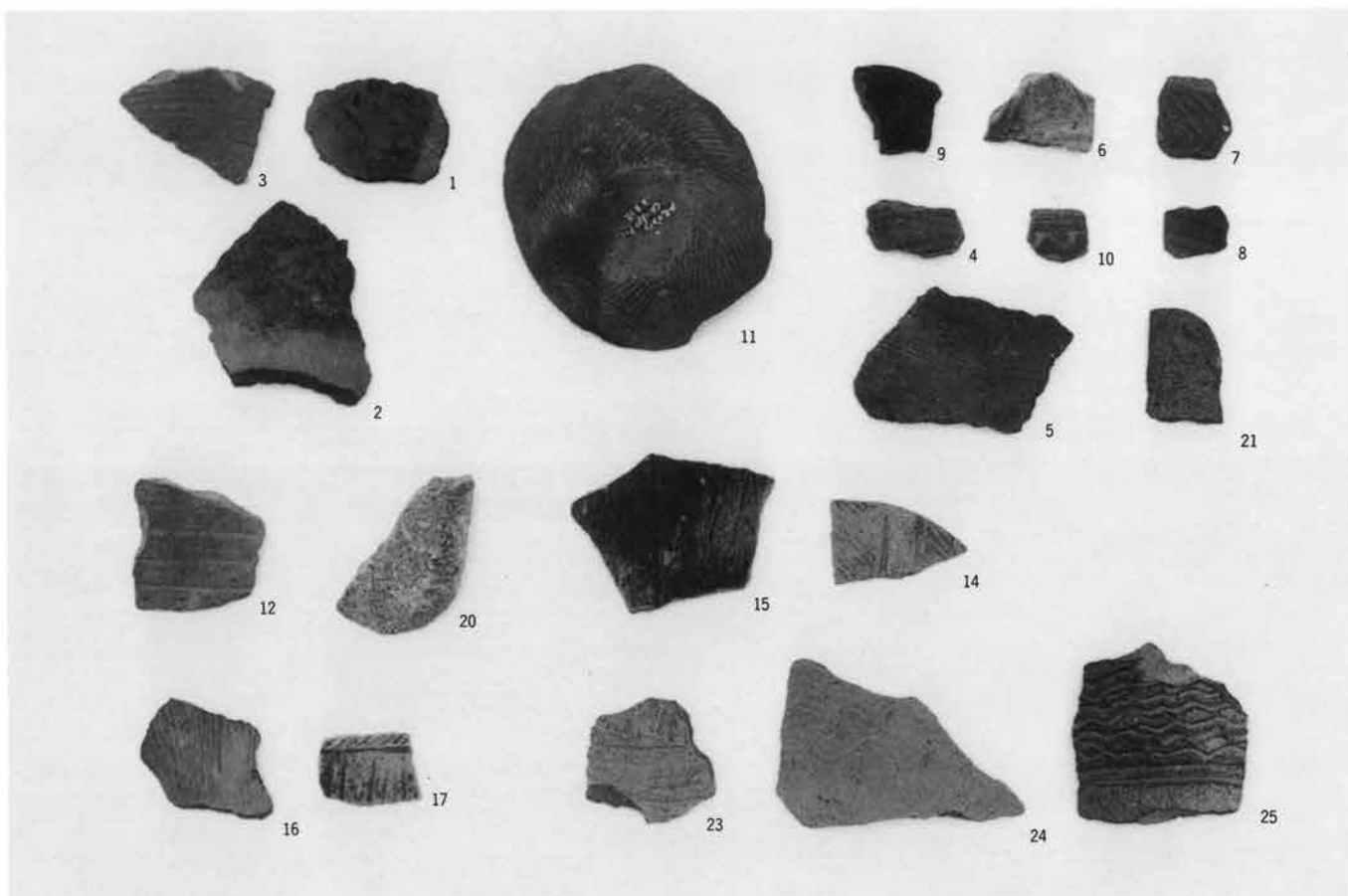
遺構外23



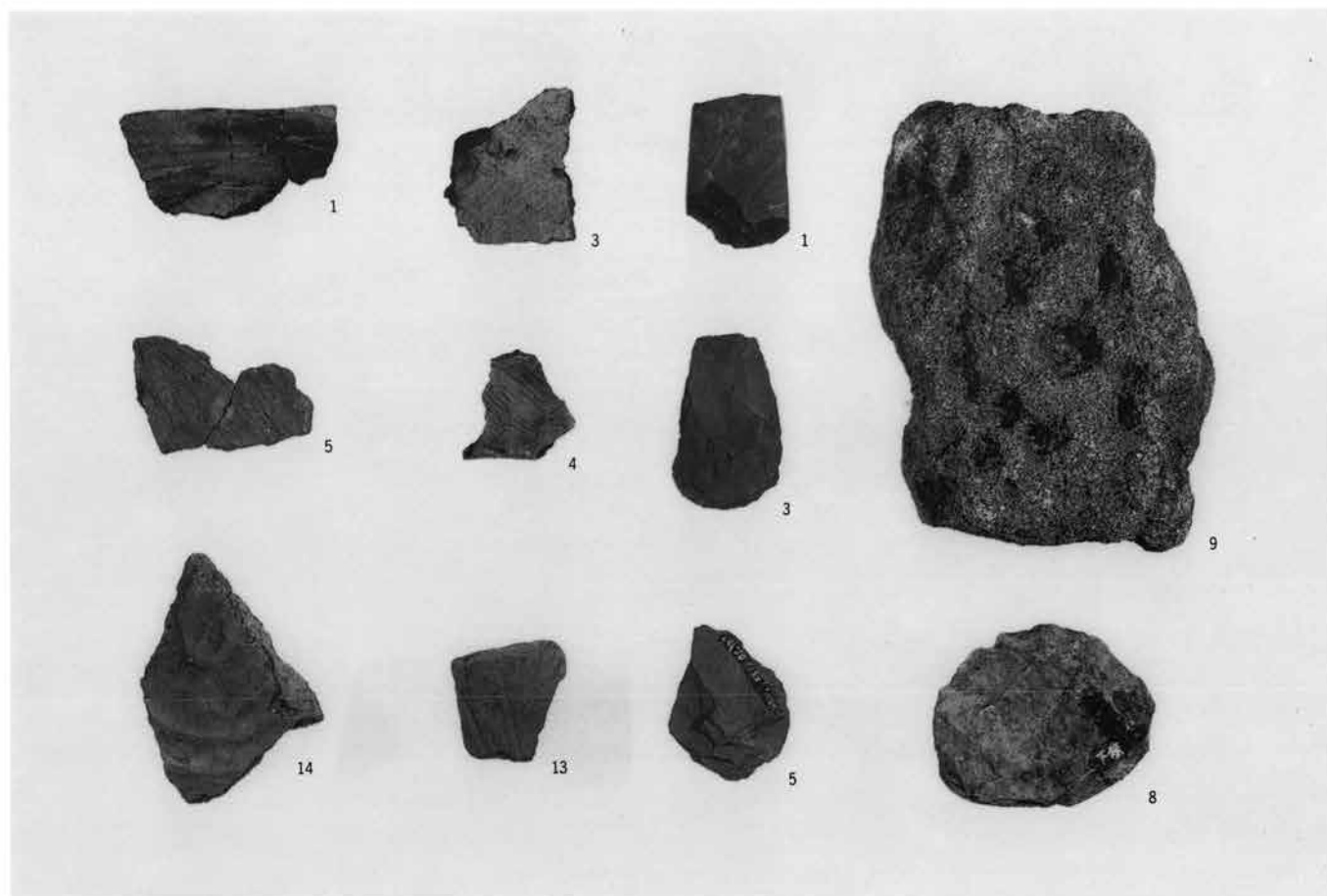
中近世5



遺構外21



1 弥生土壙出土遺物



2 遺構外縄文土器・石器



1 矢田遺跡集落調査風景



2 多胡蛇黒遺跡集落調査風景

写 真 图 版

天引口明塚遺跡



口明塚遺跡上空より（上寄りに安坪古墳群と調査中の安坪遺跡が見える。下寄りの舌状台地は天引狐崎遺跡）



1 調査地遠景（東から）



2 同上（西から）



1 全景（上から）



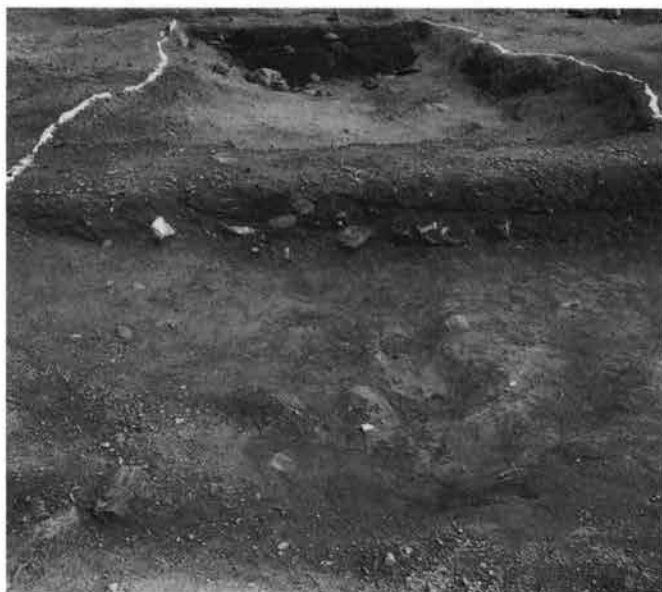
2 同上（東から）



1 全景 (南から)



2 調査風景



1 墳丘東側周堀 (南から)



2 墳丘南西側周堀 (南東から)



3 埴輪出土状態 (墳丘東側周堀)



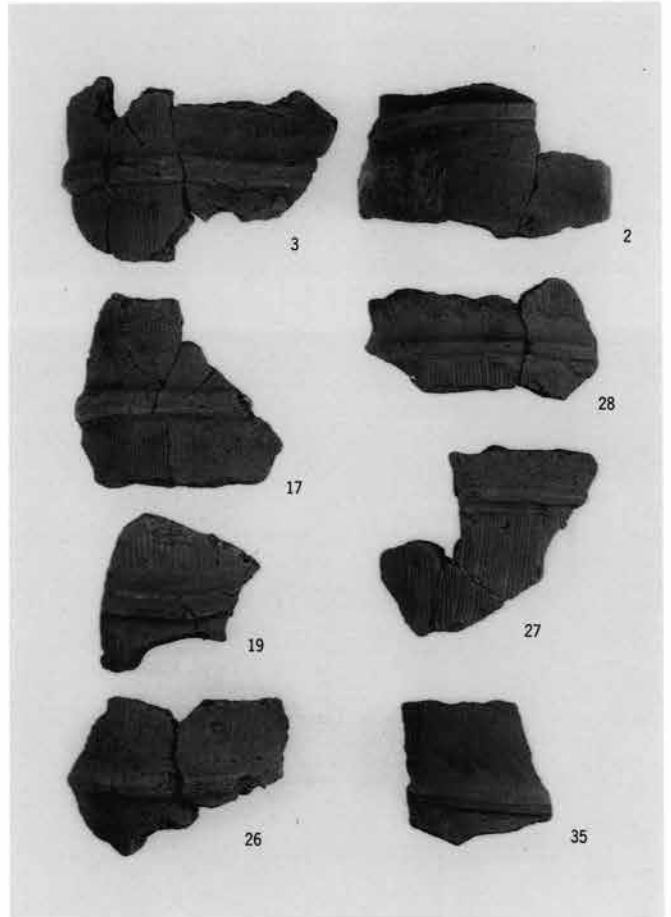
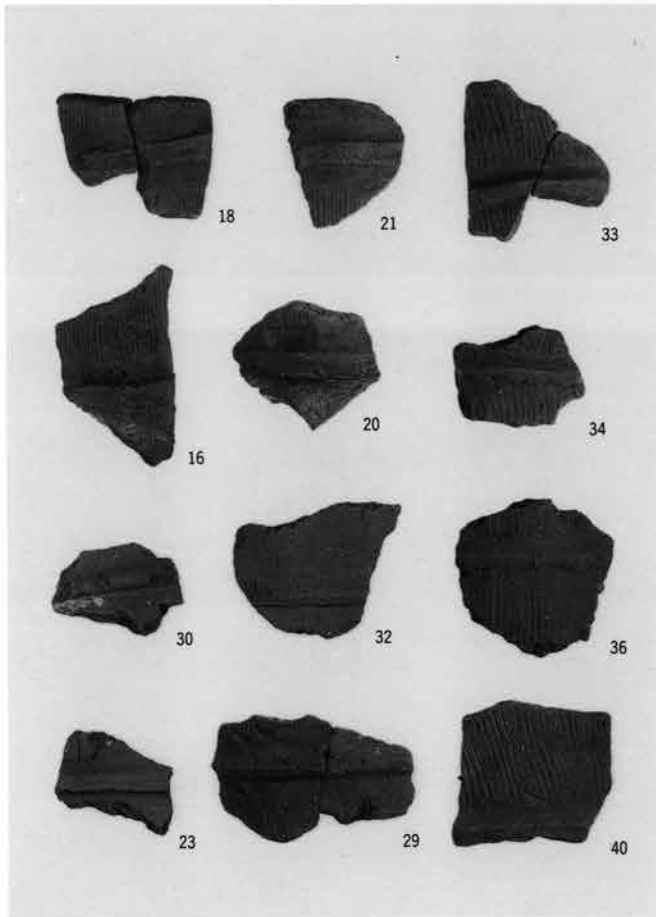
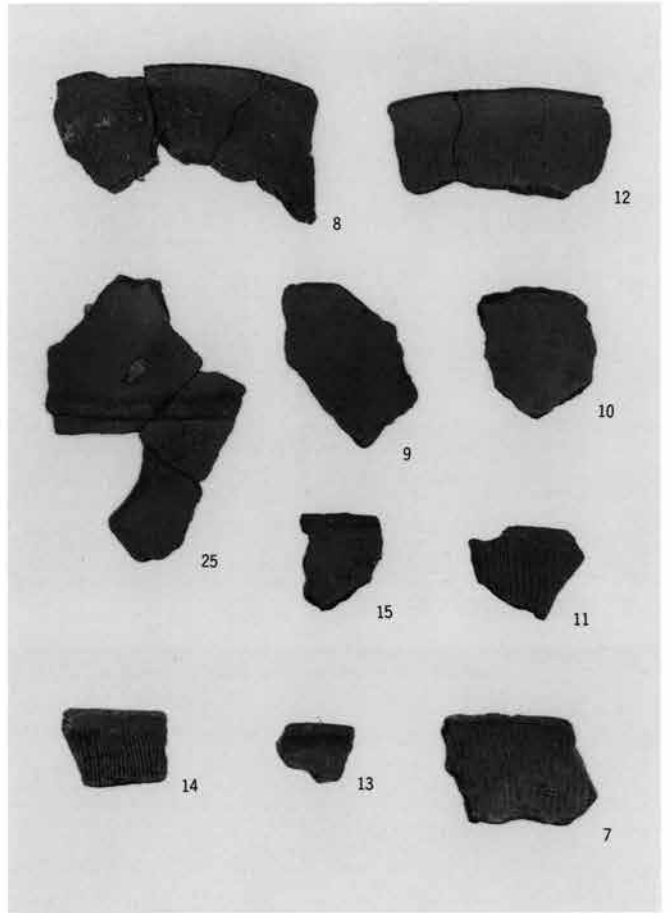
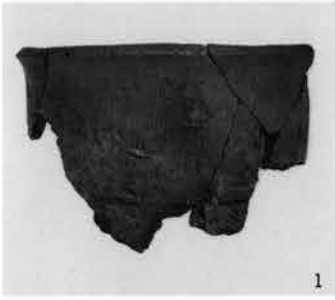
4 同左 人物腕 (77)

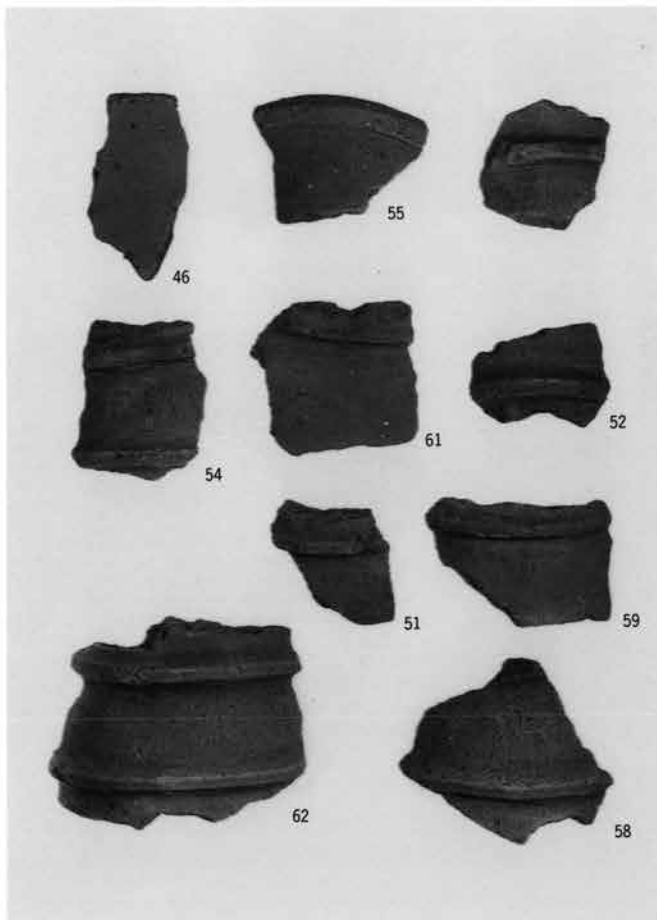
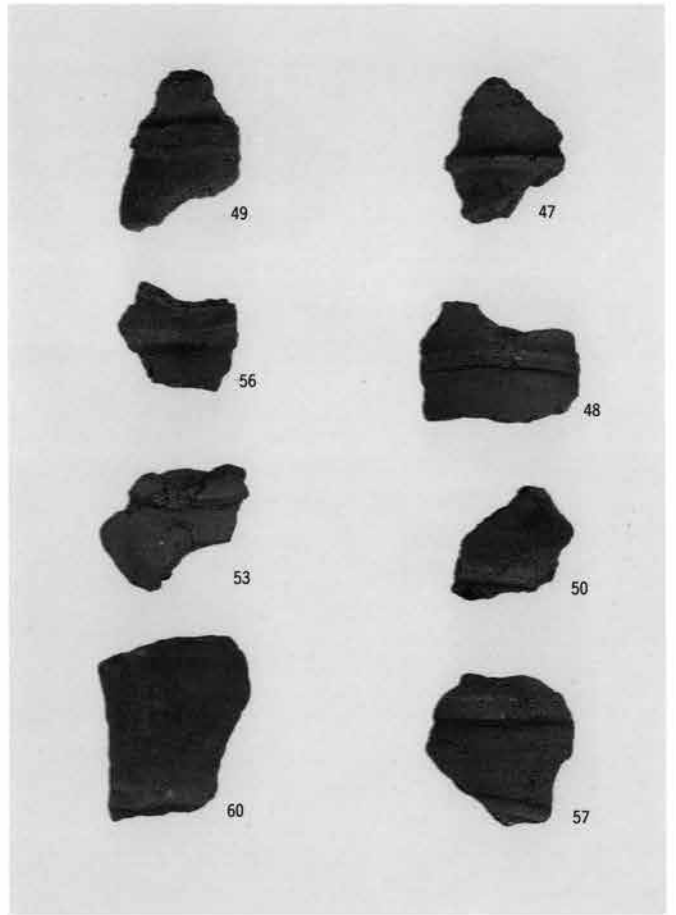
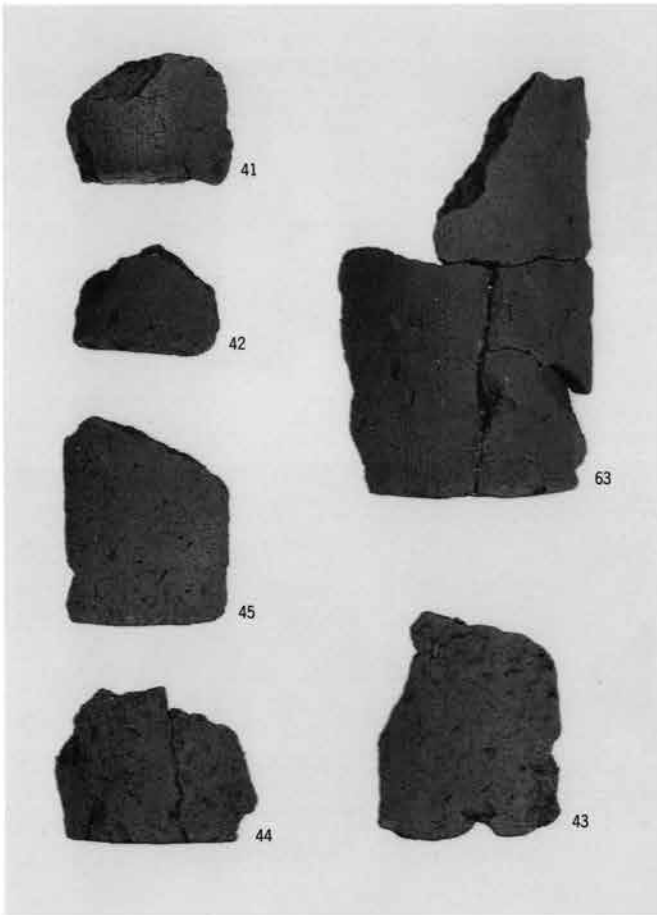


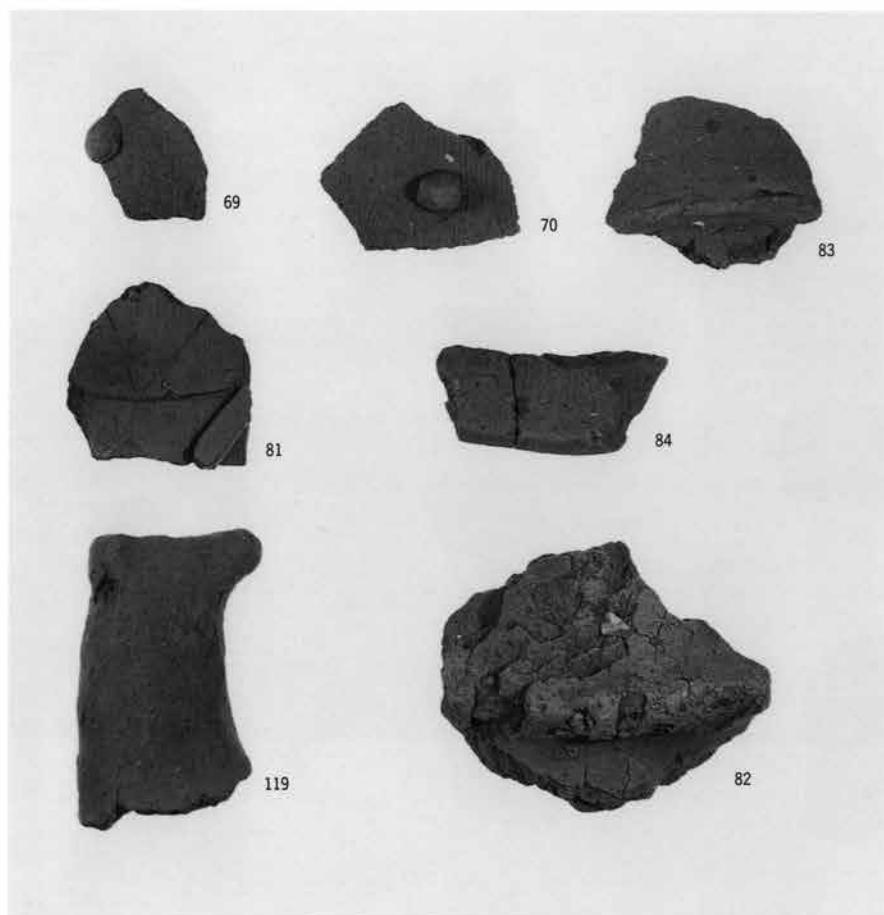
5 同上 人物 (71)



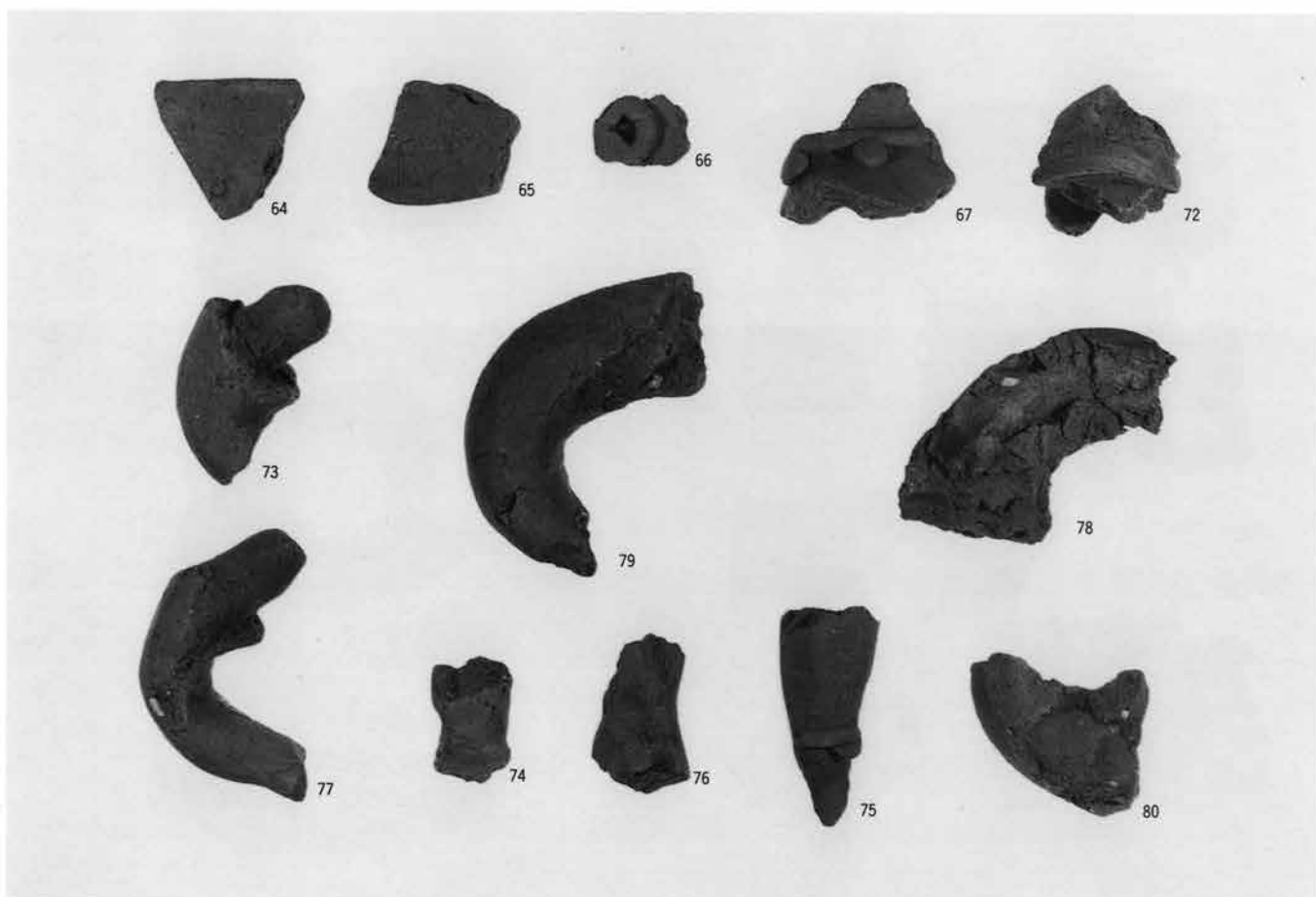
6 中近世竪穴状遺構







1 人物埴輪



2 人物埴輪



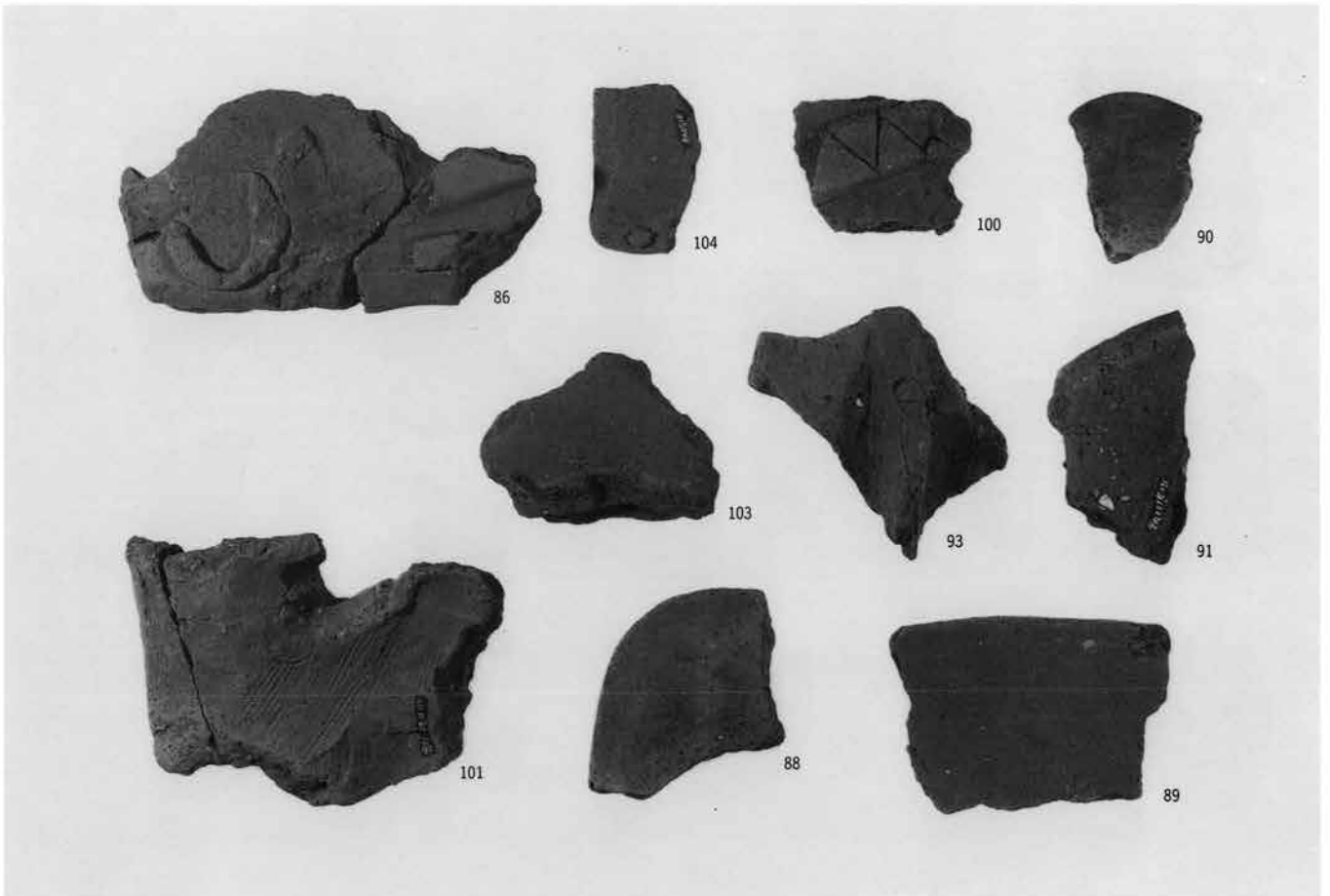
85

1 鞍側面

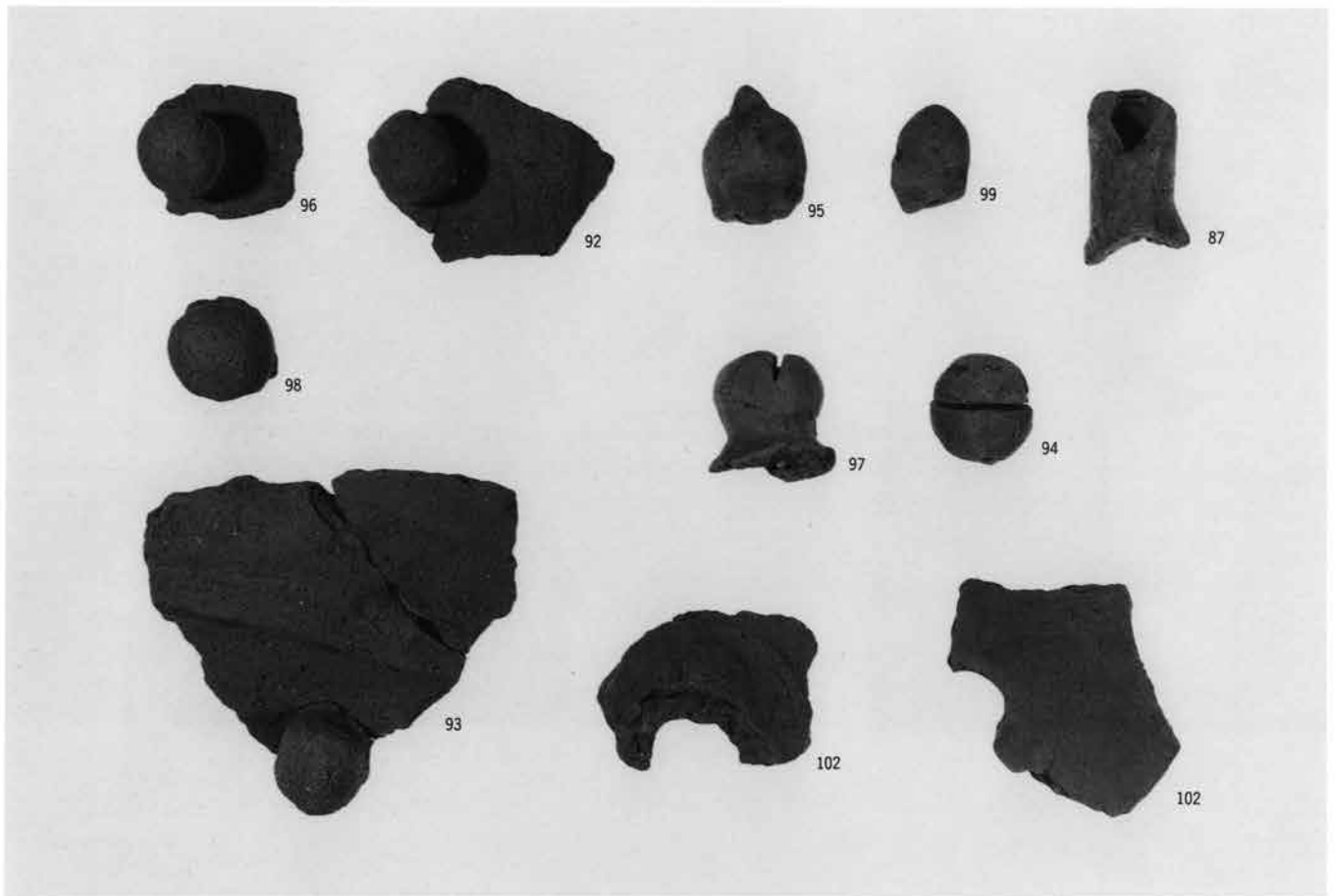


85

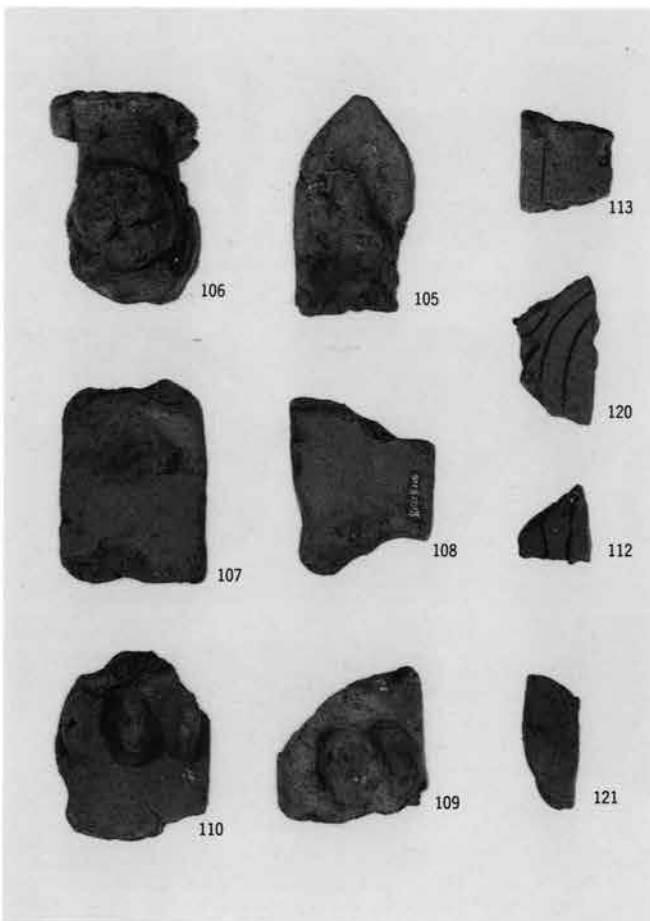
上から



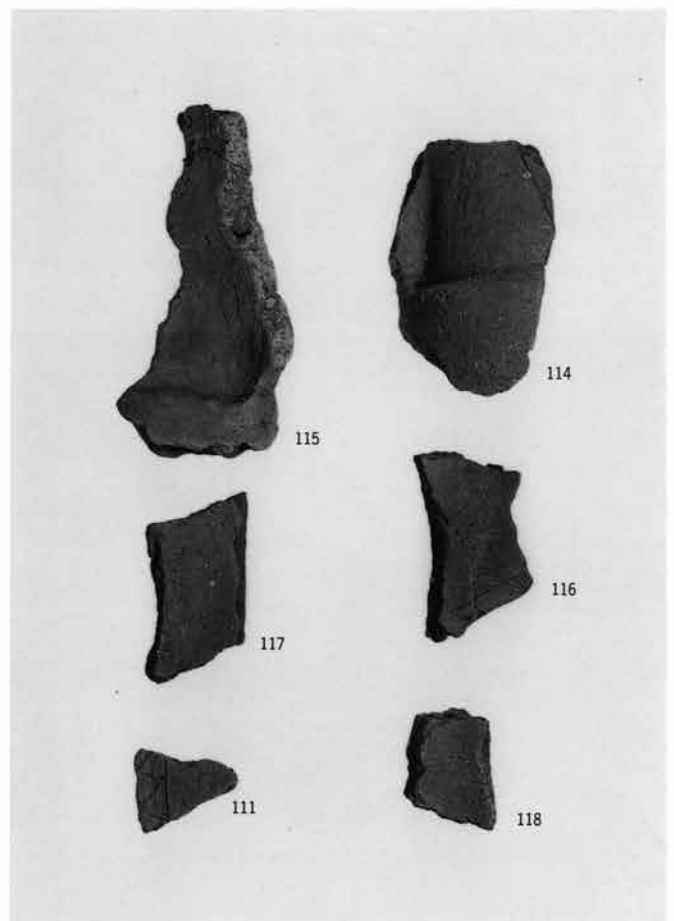
2 馬形埴輪



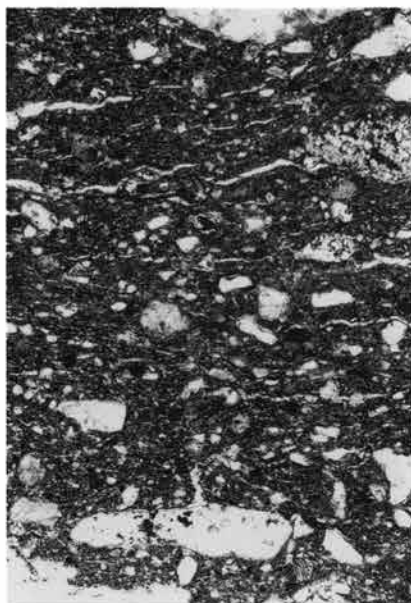
1 馬形埴輪



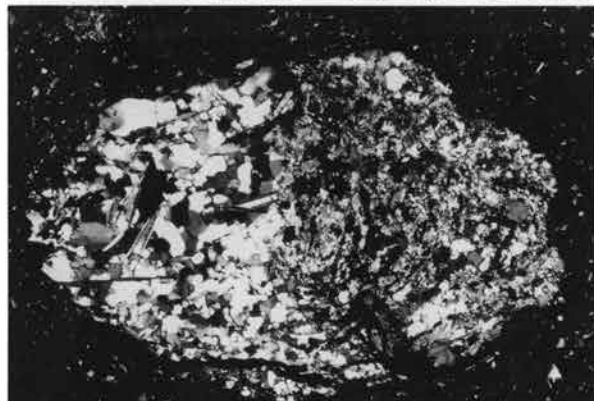
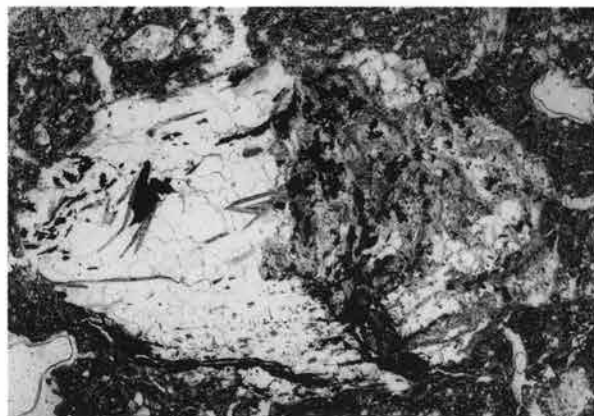
2 太刀形埴輪



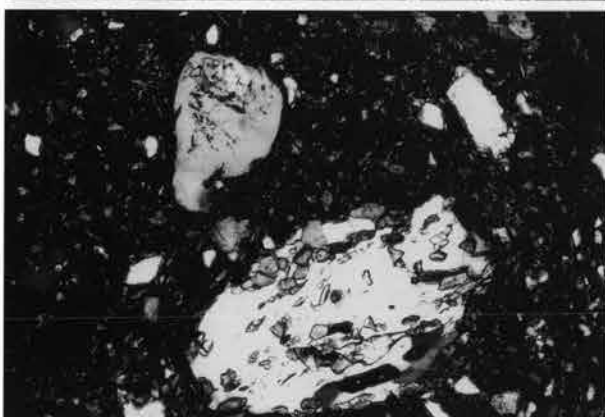
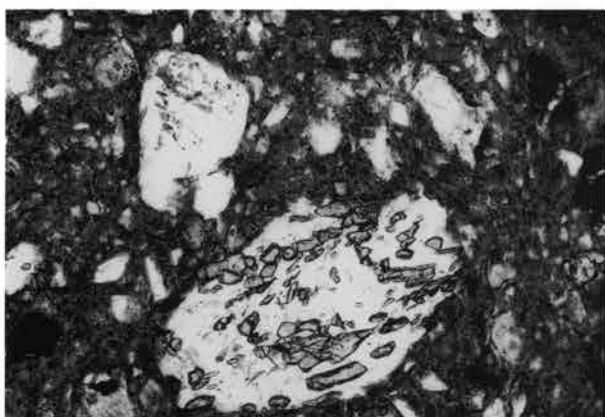
3 器財形埴輪



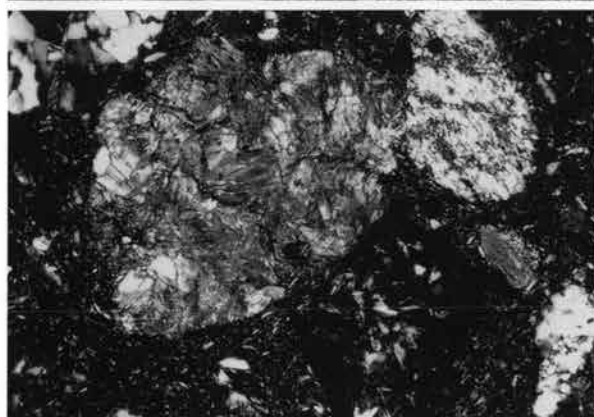
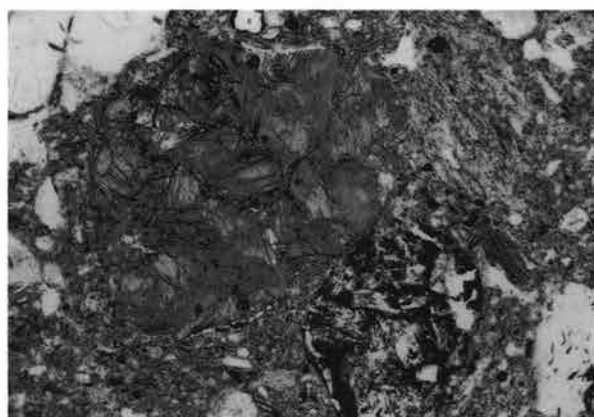
第1図
埴輪片 (A-1) の偏光顕微鏡写真 (単ニコル)
細孔の平行配列がみられる。



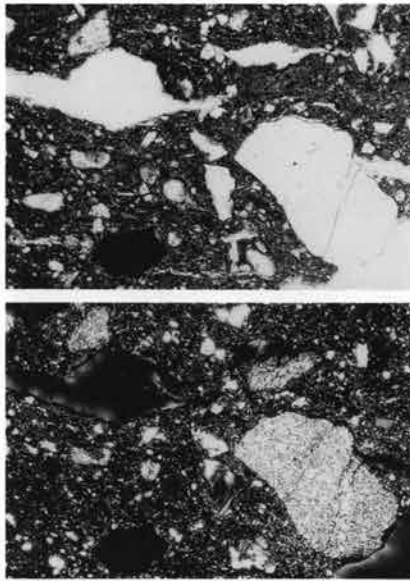
第2図
埴輪片 (A-1) 中の変成岩片の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル, 下: 直交ニコル)。変成岩片はよく円磨されている。



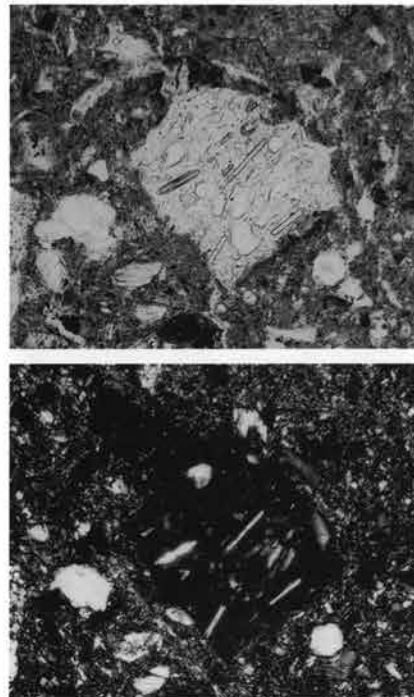
第3図
埴輪片 (B-2) 中の変成岩片の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル, 下: 直交ニコル)。この変成岩片は主に石英と緑レン石からなる。



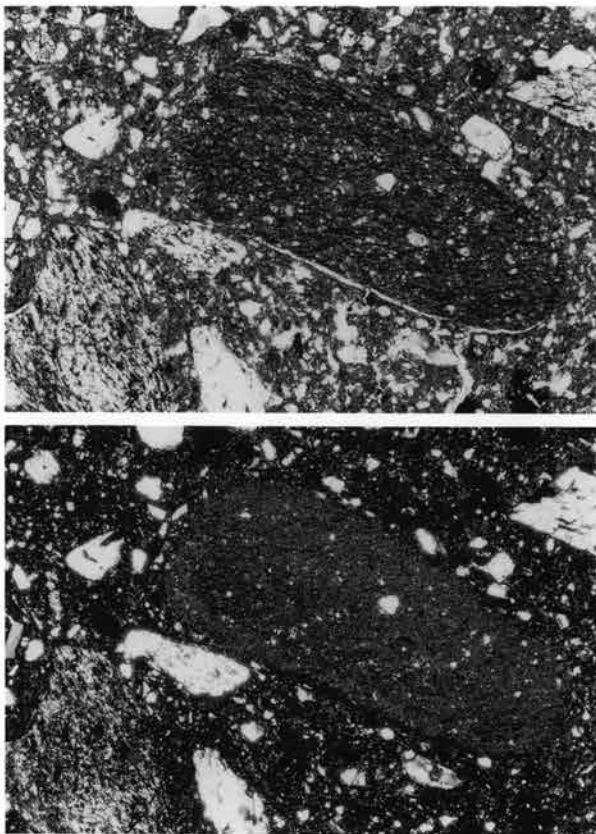
第4図
埴輪片 (A-1) 中の
変成岩片と火成岩片 (中央右下) の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル, 下: 直交ニコル)。中央の大きな変成岩片は主に角閃石のみからなる。



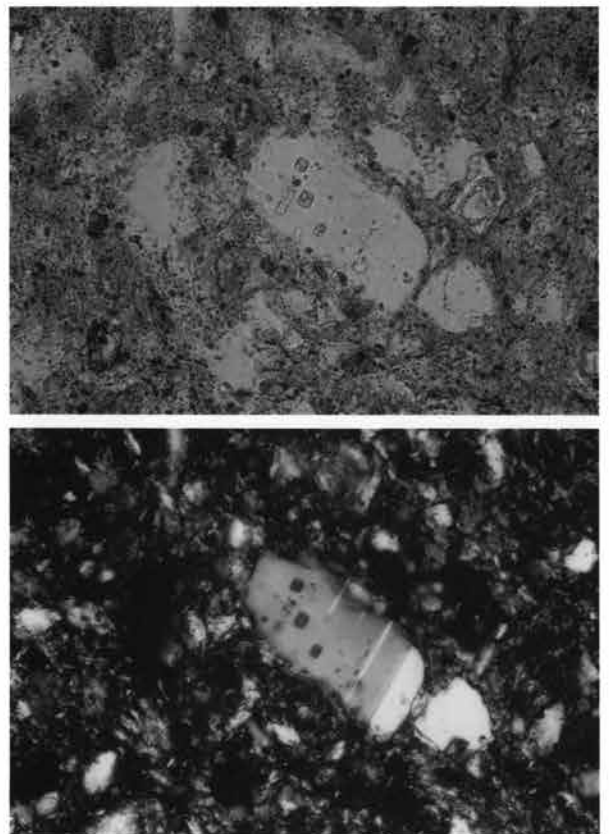
第5図
埴輪片 (A-1) の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル、下: 直交ニコル)。右中央部の大きな岩石片は微細な石英よりなる。



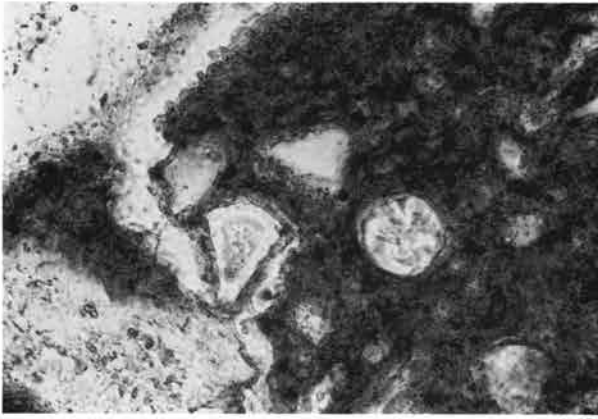
第6図
埴輪片 (A-1) の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル、下: 直交ニコル)。中央の岩石片は気泡をもつガラス中に自形の斜長石と輝石を含んでいる。



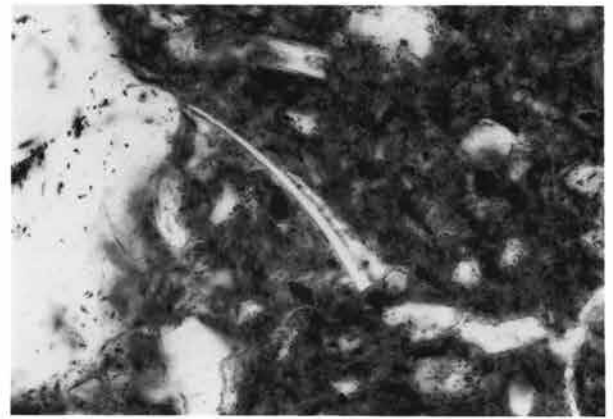
第7図
埴輪片 (B-2) 中の赤褐色岩石片の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル、下: 直交ニコル)。



第8図
埴輪片 (A-1) の偏光顕微鏡写真 (上: 単ニコル、下: 直交ニコル)。中央の斜長石の破碎結晶中にネガティブクリスタルがみられる。



第9図a
埴輪片（A-1）の偏光顕微鏡写真。中央部に円形および扇形のガラス様物質がみられる。



第9図b
埴輪片（A-1）の偏光顕微鏡写真。中央に針状のガラス様物質がみられる。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第137集

神保下條遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第11集

平成4年3月21日 印刷

平成4年3月27日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社